

鳥取県立中央病院の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県鳥取市江津

AKI SATO
秋里遺跡(松下地区)

2018

鳥取県病院局
鳥取県埋蔵文化財センター

鳥取県立中央病院の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県鳥取市江津

AKI SATO
秋里遺跡（松下地区）

2018

鳥取県病院局
鳥取県埋蔵文化財センター



1 SE 1 出土木製井戸枠



1 SE 1 配石(北西から)



2 SE 1 掘方土層断面(北西から)



1 SI 1 検出状況(上が北)



2 SI 1 南辺炭化材検出状況
(拡大、南から)



3 SI 1 - P 1 内土器出土状況
(西から)



1 スタンプ文のある弥生土器



2 手捏土器とミニチュア土器



3 管玉



4 破鏡





1 SK137ウマ出土状況(北東から)



2 SK137土層断面(南西から)



3 SK137イヌ出土状況(西から)



1 陶磁器



2 緑釉陶器



3 SK148漆器出土状況(南東から)

序

鳥取県立中央病院は、昭和50年の移転新築以来、鳥取県東部保健医療圏の中核として地域医療を担っています。この間、建設当時は想定もできなかった医療技術の高度な進歩と医療サービスの多角化によって、施設の狭隘化が問題になりました。また、高齢社会の進展に伴ってがん患者等が増加し、疾病構造の変化に十分に対応することが難しくなりました。そこで、新しい医療に対応できる体制を整備し、高度医療を担う病院に生まれ変わるために、建て替えられることになりました。

鳥取県病院局では鳥取県教育委員会に委託して、建て替え予定地に所在する秋里遺跡の発掘調査を平成27年9月から28年7月まで実施しました。秋里遺跡は鳥取県東部を代表する弥生時代から中世までの集落遺跡で、これまでに二十数回の発掘調査が行われています。今回の発掘調査では、県内最古となる弥生時代後期の木製井戸枠をもつ井戸跡や、同時期の平地建物とみられる焼失住居、平安時代中期の土坑に埋められたウマの骨など、重要な発見が相次ぎました。

本書をまとめるにあたり、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成30年10月

鳥取県病院局

鳥取県営病院事業管理者 中林宏敬

例　言

- 1 本報告書は、鳥取県埋蔵文化財センターが、鳥取県立中央病院の建て替えに伴う埋蔵文化財発掘調査事業として、平成27年度と28年度に行った秋里遺跡(松下地区)の発掘調査報告書である。
 - 2 本報告書に収載した遺跡の所在地及び調査面積は以下のとおりである。

鳥取市秋里字松下651-1 ほか及び鳥取市江津字高矢倉730ほか　　調査面積：8.178m²
 - 3 本報告書の執筆は、高橋章司、小口英一郎、浅井達也、桥家農、吉野進一(以下、「調査担当職員」)が分担して行い、編集は桥家が行った。執筆者名は目次に記した。
 - 4 発掘調査は、国際文化財株式会社・サンイン技術コンサルタント株式会社共同企業体の支援を受け実施した。掘削作業や記録作業、測量作業は埋蔵文化財センターの指示のもと、同企業体が行った。
 - 5 本報告書に掲載した遺物の実測・淨書は埋蔵文化財センターが行った。
 - 6 本報告書で使用した遺物写真は調査担当職員が撮影した。
 - 7 発掘調査において作成した図面・写真などの記録類、出土遺物は鳥取県埋蔵文化財センターで保管している。
 - 8 本報告書で示す標高は、東京湾平均海面(T.P.)を基準としている。本文中ではT.P.は省略している。方位は公共座標北を示し、磁北は座標北に対し7°30' 西偏する。なお、X:、Y:の数値は世界測地系に準拠した公共座標第V系の座標値である。
 - 9 本報告書に掲載した地形図には、下記の地図を使用した。

「鳥取市都市計画図」鳥取市作成、「1/25,000地形図『鳥取』」国土地理院発行
 - 10 出土したウマの骨については、鳥取大学農学部共同獣医学科　保坂善真教授に共同研究をお願いし、玉稿を賜った。焼失住居SI 1については、公立鳥取環境大学環境学部浅川滋男教授に現地指導をいただいた。
 - 11 本報告にあたり、自然科学分析のうち、放射性炭素年代測定と樹種同定を株式会社　加速器分析研究所に、土壤成分分析と環境変化分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
 - 12 現地調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々に御助言や御支援、御協力をいただいた。記して深謝いたします(五十音順)。
- 秋里・江津土地改良区、鳥取県土整備局鳥取事務所、鳥取市教育委員会

凡 例

- 1 遺物の注記における遺跡名は「アキサト」の略語を用い、併せて「遺構名、遺物番号、日付」を記入した。
- 2 本書における実測図の縮尺については、特殊なものを除き基本的に以下の縮尺としている。
遺構図 建物跡：1/80、土坑：1/40・1/80、土器集中：1/20
遺物実測図 土器：1/4、石器・石製品：3/4・1/2、木製品1/2・1/4・1/8
- 3 本書における土層名称は、『新版 標準土色帖』による。
- 4 本書における遺物番号は算用数字を種別毎に付している。ただし、土器以外の遺物には数字の先頭に以下のアルファベットを付している。
石器：S、木製品：W、鉄製品：F、銅製品：M、骨・貝製品：B
- 5 遺物実測図の断面は須恵器を黒塗りとし、それ以外のものは白抜きで示している。また、遺構図や遺物実測図におけるトーン及び記号は、基本的に各図に凡例を示す。ただし、説明がない場合は以下のとおりである。
遺構図 : 地山
遺物実測図 : 赤色顔料付着範囲 → : ケズリの方向(砂粒の動き)
- 6 遺物観察表の法量記載における、※は推定復元値、△は残存値を示す。

目 次

卷頭図版

序

例言

凡例

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯	(高橋) 1
第2節 発掘調査の方法と経過	(高橋) 1
第3節 調査体制	4

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	(吉野) 6
第2節 歴史的環境	(吉野) 6

第3章 発掘調査の成果

第1節 遺跡の立地と基本層序	(高橋) 10
第2節 第1遺構面	(高橋・淺井) 16
1 概要	16
2 畑	16
3 畑外の遺構	55
4 第1包含層およびその上層出土遺物	65
第3節 第2遺構面	(高橋) 70
1 概要	70
2 溝	70
3 土坑およびピット	74
4 第2包含層出土遺物	74
第4節 第3遺構面	(高橋・小口・耕家) 77
1 概要	77
2 平地建物跡	77
3 布掘建物跡	99
4 井戸跡	103
5 土器集中	110
6 溝	146
7 土坑	148
8 ピット	160
9 炉	162
10 第3包含層出土遺物	162
第5節 第4遺構面	(高橋・耕家) 179
1 概要	179

2 溝	180
3 土坑	184
4 ピット	185
5 炉	185
6 第4包含層出土遺物	192
第6節 その他出土遺物	(高橋)201
遺物観察表	202

第4章 自然科学分析

第1節 土坑SK137から出土したウマの骨について	(保坂善真)237
1 概要	237
2 出土の状況および出土した動物骨の状況	237
3 ウマの体高	237
4 ウマの性別および年齢	237
5 ミトコンドリアDNA解析による本ウマの起源の推定	238
6 まとめ	238
第2節 放射性炭素年代測定	(加速器分析研究所)242
1 測定対象試料	242
2 測定の意義	243
3 年代測定試料の化学処理工程	243
4 年代測定試料の測定方法	245
5 炭素・窒素含有量測定試料の化学処理工程と測定方法	245
6 算出方法	245
7 測定結果	246
第3節 樹種同定	(加速器分析研究所)255
1 試料	255
2 分析方法	255
3 結果	255
4 考察	256
第4節 土壌分析	(パリノ・サーヴェイ株式会社)261
1 調査区の層序概要	261
2 弥生時代後期の井戸SE1の水質に関する検討	262
3 弥生時代後期の遺構SI4の性格に関する検討	263
4 SB1建物の柱穴内埋納土器の性格に関する検討	265
5 調査区の環境変遷	266
第5章 総括	273
第1節 秋里遺跡SE1についての検討	(小口)273
第2節 調査のまとめ	(高橋)291
写真図版	
報告書抄	

挿図目次

第1図	調査区位置図および既往の調査範囲	2	第56図	畠外遺構(5)	67
第2図	調査区グリッド図	3	第57図	畠外遺構(6)	68
第3図	遺跡位置図	6	第58図	第1包含層およびⅡ層・Ⅲ層出土遺物	69
第4図	周辺遺跡分布図	7	第59図	第1包含層出土遺物	69
第5図	調査区内の微地形と堆積および土層概念図	11	第60図	第2遺構面遺構配置図	71
第6図	調査区北壁土層断面図	12	第61図	第2遺構面溝	72
第7図	調査区西壁～中央ベルト土層断面図	13	第62図	第2遺構面土坑およびピット	73
第8図	調査区東壁土層断面図	14	第63図	第2遺構面遺構出土遺物	74
第9図	第1遺構面遺構配置図	17	第64図	第2包含層出土遺物(1)	75
第10図	畠1(1)	20	第65図	第2包含層出土遺物(2)	76
第11図	畠1(2)	21	第66図	第2包含層出土遺物(3)	76
第12図	畠2(1)	22	第67図	第3遺構面遺構配置図	78
第13図	畠2(2)	23	第68図	SI1(1)	80
第14図	畠2出土遺物	24	第69図	SI1(2)	81
第15図	畠3	25	第70図	SI1(3)	82
第16図	畠4(1)	26	第71図	SI1(4)	83
第17図	畠4(2)	27	第72図	SI1(5)	84
第18図	畠4(3)	28	第73図	SI1出土遺物(1)	85
第19図	畠4(4)	29	第74図	SK198	86
第20図	畠4(5)	30	第75図	SI1復元図	86
第21図	畠4(6)	31	第76図	SI1出土遺物(2)	87
第22図	畠4(7)	32	第77図	SI1周辺遺構出土遺物	88
第23図	畠4(8)	33	第78図	SI2	90
第24図	畠4(9)	34	第79図	SI2出土遺物	91
第25図	畠4(10)	35	第80図	SI3(1)	91
第26図	畠4(11)	36	第81図	SI3遺物出土状況	92
第27図	畠4(12)	37	第82図	SI3出土遺物(1)	93
第28図	畠4(13)	38	第83図	SI3出土遺物(2)	94
第29図	畠4出土遺物(1)	39	第84図	SI3出土遺物(3)	95
第30図	畠4出土遺物(2)	40	第85図	SI4(1)	96
第31図	畠4出土遺物(3)	41	第86図	SI4(2)	97
第32図	畠4出土遺物(4)	42	第87図	SI4復元図	98
第33図	畠5(1)	44	第88図	SI4出土遺物	98
第34図	畠5(2)	45	第89図	SB1	100
第35図	畠5(3)	46	第90図	SB1出土遺物(1)	102
第36図	畠5(4)SK137獣骨出土状況(1/10)	47	第91図	SB1出土遺物(2)	102
第37図	畠5(5)	48	第92図	SE1(1)	104
第38図	畠5(6)	49	第93図	SE1(2)	106
第39図	畠5出土遺物(1)	50	第94図	SE1井戸枠	107
第40図	畠5出土遺物(2)	51	第95図	SE1出土遺物	109
第41図	畠6(1)	53	第96図	土器集中1・2	111
第42図	畠6(2)	54	第97図	土器集中1・2出土遺物	112
第43図	畠6(3)	55	第98図	土器集中3～6	113
第44図	畠6(4)	56	第99図	土器集中3・4出土遺物	114
第45図	畠7(1)	57	第100図	土器集中5・6出土遺物	115
第46図	畠7(2)	58	第101図	土器集中7・8	117
第47図	畠8	59	第102図	土器集中7出土遺物	118
第48図	畠6出土遺物	60	第103図	土器集中8出土遺物	119
第49図	畠6～畠8出土遺物	60	第104図	土器集中9	120
第50図	畠外遺構出土遺物(1)	61	第105図	土器集中9・10出土遺物	121
第51図	畠外遺構出土遺物(2)	62	第106図	土器集中10～12	122
第52図	畠外遺構(1)	63	第107図	土器集中11・12出土遺物	123
第53図	畠外遺構(2)	64	第108図	土器集中13・14	124
第54図	畠外遺構(3)	65	第109図	土器集中13出土遺物	125
第55図	畠外遺構(4)	66	第110図	土器集中14出土遺物	126
			第111図	土器集中15	127

第112図	土器集中15出土土物(1)	128
第113図	土器集中15出土遺物(2)	129
第114図	土器集中15-1	130
第115図	土器集中15-1出土遺物(1)	131
第116図	土器集中15-1・15-2出土遺物	132
第117図	土器集中15-2・15-4・15-7	133
第118図	土器集中15-3・15-4出土遺物	134
第119図	土器集中15-7出土遺物	135
第120図	土器集中15-5	136
第121図	土器集中15-5出土遺物	137
第122図	土器集中15-5・15-6出土遺物	138
第123図	土器集中15-6	139
第124図	土器集中15-8～15-11	140
第125図	土器集中15-8出土遺物	141
第126図	土器集中15-9～15-11出土遺物	142
第127図	土器集中16	143
第128図	土器集中16出土遺物	143
第129図	K 5区遺物出土状況	144
第130図	K 5区出土遺物	145
第131図	第3遺構面 溝	146
第132図	第3遺構面 溝およびピット出土遺物	147
第133図	第3遺構面 土坑(1)	149
第134図	第3遺構面 土坑(2)	150
第135図	第3遺構面 土坑(3)	150
第136図	第3遺構面 土坑(4)	151
第137図	第3遺構面 土坑(5)	152
第138図	第3遺構面 土坑(6)	153
第139図	第3遺構面 土坑(7)	154
第140図	第3遺構面 土坑出土遺物(1)	155
第141図	第3遺構面 土坑出土遺物(2)	156
第142図	第3遺構面 土坑出土遺物(3)	157
第143図	第3遺構面 土坑出土遺物(4)	158
第144図	第3遺構面 土坑出土遺物(5)	159
第145図	第3遺構面 土坑出土遺物(6)	160
第146図	第3遺構面 土坑出土遺物(7)	161
第147図	第3遺構面 ピット(1)	163
第148図	第3遺構面 ピット(2)	164
第149図	第3遺構面 炉	165
第150図	第3包含層出土遺物(1)	166
第151図	第3包含層出土遺物(2)	167
第152図	第3包含層出土遺物(3)	168
第153図	第3包含層出土遺物(4)	169
第154図	第3包含層出土遺物(5)	170
第155図	第3包含層出土遺物(6)	171
第156図	第3包含層出土遺物(7)	172
第157図	第3包含層出土遺物(8)	173
第158図	第3包含層出土遺物(9)	174
第159図	第3包含層出土遺物(10)	175
第160図	第3包含層出土遺物(11)	176
第161図	第3包含層出土遺物(12)	177
第162図	第3包含層出土遺物(13)	178
第163図	第4遺構面 遺構配置図	179
第164図	第4遺構面 溝(1)	181
第165図	第4遺構面 溝(2)	182
第166図	第4遺構面 溝出土遺物(1)	183
第167図	第4遺構面 溝出土遺物(2)	184
第168図	第4遺構面 土坑(1)	184
第169図	第4遺構面 土坑(2)	185
第170図	第4遺構面 土坑(3)	186
第171図	第4遺構面 土坑(4)	187
第172図	第4遺構面 土坑出土遺物(1)	188
第173図	第4遺構面 土坑出土遺物(2)	189
第174図	第4遺構面 土坑出土遺物(3)	190
第175図	第4遺構面 ピットおよび炉	191
第176図	第4包含層出土遺物(1)	193
第177図	第4包含層出土遺物(2)	194
第178図	第4包含層出土遺物(3)	195
第179図	第4包含層出土遺物(4)	196
第180図	第4包含層出土遺物(5)	197
第181図	第4包含層出土遺物(6)	198
第182図	第4包含層出土遺物(7)	199
第183図	その他出土遺物(1)	200
第184図	その他出土遺物(2)	201
第185図	出土骨の全身骨格との比較図	240
第186図	暦年較正結果(1)	248
第187図	暦年較正結果(2)	250
第188図	暦年較正結果(3)	251
第189図	調査地点の層序模式柱状図	266
第190図	植物珪酸体群集の層位分布	270
第191図	秋里遺跡SE 1ライフサイクル模式図	274
第192図	山陰地方における井戸の分布(弥生時代中期～古墳時代前期)	276
第193図	鳥取県における井戸(1)	282
第194図	鳥取県における井戸(2)	283
第195図	鳥取県における井戸(3)	284
第196図	鳥取県における井戸(4)	285
第197図	鳥取県における井戸(5)	286
第198図	島根県における井戸(1)	286
第199図	島根県における井戸(2)	287

挿表目次

表1	畠1 遺構一覧	18	表51	木製品観察表	234
表2	畠2 遺構一覧	18	表52	鉄器・鉄製品観察表	235
表3	畠3 遺構一覧	18	表53	金属製品観察表	236
表4	畠4 遺構一覧	19	表54	動物遺体観察表	236
表5	SA 1 遺構一覧	43	表55	出土した骨の特徴	242
表6	畠5 遺構一覧	43	表56	最大骨長より推測される体高	242
表7	畠6 遺構一覧	52	表57	試料の状態	244
表8	畠7 遺構一覧	58	表58	放射性炭素年代測定結果1 (δ 13C補正値)	248
表9	畠8 遺構一覧	58	表59	放射性炭素年代測定結果2 (δ 13C未補正 値、曆年較正用14C年代、較正年代)	249
表10	畠外遺構一覧	58	表60	炭素・窒素含有量	249
表11	第2 遺構面遺構一覧	70	表61	樹種同定結果	256
表12	SI 1 遺構一覧	79	表62	井戸SE 1 の土壤理化学分析結果	263
表13	SI 1 樹種同定・ 放射性炭素年代測定結果一覧	79	表63	SI 4 の土壤化学分析結果	265
表14	SI 2 遺構一覧	89	表64	埋納土器堆積物の土壤理化学分析結果	265
表15	SI 4 遺構一覧	89	表65	珪藻分析結果	267
表16	SB 1 遺構一覧	99	表66	花粉分析結果	268
表17	第3 遺構面 溝・土坑・ピット一覧	147	表67	植物珪酸体分析結果	268
表18	第4 遺構面 溝・土坑・ピット一覧	180	表68	山陰地方における弥生時代中期から 古墳時代前期の井戸	277
表19～表49	土器・土製品観察表(1)～(31)	202			
表50	石器・石製品観察表	233			

文中写真目次

写真1	SK102出土須恵器坏 刻書	24	写真7	測定対象試料(3)	254
写真2	ウマの骨の出土状況	240	写真8	木材および炭化材(1)	257
写真3	出土骨の解剖学的特徴	241	写真9	炭化材(2)	258
写真4	歯の表面の電子顕微鏡画像	241	写真10	炭化材(3)	259
写真5	測定対象試料(1)	252	写真11	炭化材(4)	260
写真6	測定対象試料(2)	253	写真12	珪藻化石	272

図版目次

卷頭図版目次					
1	SE 1 出土木製井戸桿	PL. 5	畠4(1)		
2	1 SE 1 配石(北西から)	PL. 6	畠4(2)		
2	SE 1 挖方土層断面(北西から)	PL. 7	畠5		
3	1 SE 1 検出状況(上が北)	PL. 8	SK137(畠5)		
2	SI 1 南辺炭化材検出状況(南から)	PL. 9	畠6～畠8		
3	SI 1 - P 1 内土器出土状況(西から)	PL. 10	畠外遺構		
4	1 スタンプ文のある弥生土器	PL. 11	1 1区第2遺構面完掘状況(南から) 2 2区第2遺構面完掘状況(東から)		
2	手捏土器とミニチュア土器	PL. 12	SD27		
3	管玉	PL. 13	第2遺構面遺構		
4	破鏡	PL. 14	1 1区第3遺構面完掘状況(北から) 2 2区第3遺構面完掘状況(東から)		
5	1 SK137ウマ出土状況(北東から)	PL. 15	SI 1(1)		
2	SK137土層断面(南西から)	PL. 16	SI 1(2)炭化材検出状況		
3	SK137イヌ出土状況(西から)	PL. 17	SI 1(3)中央ピット・焼土・溝		
6	1 陶磁器	PL. 18	SI 1(4)主柱穴		
2	緑釉陶器	PL. 19	SK198		
3	SK148漆器出土状況(南東から)	PL. 20	1 SI 2・4・SB 1 完掘状況(東から) 2 SI 2・4・SB 1 完掘状況(南から)		
図版目次		PL. 21	SI 2		
PL. 1	1 1区全景(南から)	PL. 22	SI 4(1)		
2	2区全景(西から)	PL. 23	SI 4(2)		
3	基本層序(1区北壁、南から)	PL. 24	SB 1(1)		
PL. 2	1 1区調査前状況(南から)	PL. 25	SB 1(2)		
2	1区第1遺構面完掘状況(南から)	PL. 26	SB 1(3)		
3	2区第1遺構面完掘状況(東から)	PL. 27	SI 3		
PL. 3	畠1	PL. 28	SE 1(1)配石		
PL. 4	畠2・畠3				

PL. 29	SE 1 (2) 挖方	PL. 57	土器集中15-3・15-4 出土遺物
PL. 30	SE 1 (3)	PL. 58	土器集中15-5 出土遺物
PL. 31	SE 1 (4) 井戸枠内遺物出土状況	PL. 59	土器集中15-6・15-7 出土遺物
PL. 32	土器集中1~3	PL. 60	土器集中15-8・15-9 出土遺物
PL. 33	土器集中4~6	PL. 61	土器集中15-10・15-11 出土遺物
PL. 34	土器集中7~9	PL. 62	土器集中15-16 出土遺物
PL. 35	土器集中10~12	PL. 63	K 5 区出土遺物
PL. 36	土器集中13・14・16	PL. 64	第3 遺構面遺構出土遺物(1)
PL. 37	土器集中15	PL. 65	第3 遺構面遺構出土遺物(2)
PL. 38	K 5 区遺物出土状況	PL. 66	第3 包含層出土遺物(1)
PL. 39	第3 遺構面遺構(1)	PL. 67	第3 包含層出土遺物(2)
PL. 40	第3 遺構面遺構(2)	PL. 68	第3 包含層出土遺物(3)
PL. 41	1 1区第4 遺構面完掘状況(南東から) 2 2区東半第4 遺構面完掘状況(南から)	PL. 69	第3 包含層出土遺物(4)
PL. 42	第4 遺構面遺構(1)	PL. 70	1 第3 遺構面遺構出土遺物(3) 2 第3 包含層出土遺物(5) 3 第3 包含層出土遺物(6) 4 第3 包含層・遺構出土砥石
PL. 43	第4 遺構面遺構(2)	PL. 71	第4 遺構面遺構出土遺物(1)
PL. 44	烟出土遺物(1)	PL. 72	第4 遺構面遺構出土遺物(2)
PL. 45	烟出土遺物(2)	PL. 73	第4 包含層出土遺物(1)
PL. 46	第1 遺構面遺構・第1 包含層出土遺物	PL. 74	第4 包含層出土遺物(2)
PL. 47	SI 1・SK198出土遺物	PL. 75	第4 包含層出土遺物(3)
PL. 48	SI 3出土遺物(1)	PL. 76	1 第4 包含層・遺構出土遺物(1) 2 第4 包含層・遺構出土遺物(2) 3 土玉 4 石器
PL. 49	SI 3出土遺物(2)	PL. 77	鉄製品
PL. 50	SB 1・SI 2・SI 4・SE 1 出土遺物	PL. 78	鉄製品 X線写真
PL. 51	SE 1 出土井戸枠		
PL. 52	土器集中1~4 出土遺物		
PL. 53	土器集中5~7 出土遺物		
PL. 54	土器集中8・9 出土遺物		
PL. 55	土器集中10~14 出土遺物		
PL. 56	土器集中15-1 出土遺物		

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

鳥取県立中央病院は、昭和50年に移転新築された病院で、鳥取県東部保健医療圏の中核として長きにわたり地域医療を担ってきた。近年、医療技術は高度に進歩し、医療サービスにも多角化が求められるようになったため、施設の狹隘化が大きな問題となった。そこで、平成30年度までに既存の施設を取り壊して南側隣接地に11階建ての病院を新たに建設する計画が、平成26年6月に決定された。

新病院の建設予定地は、鳥取県東部を代表する弥生時代から中世の集落遺跡である秋里遺跡の西端にあたったため、建設工事に先立って鳥取県と鳥取市が協議し、計画地内に所在する埋蔵文化財の状況を把握する必要性を確認した。そこで、平成27年2月に鳥取市教育委員会が試掘調査を予定地内の2箇所で実施したところ、弥生時代から中世までの遺構や遺物が確認された。このため、まず堆積状況を把握して遺跡の範囲を絞り込むボーリング調査を実施した上で、鳥取市教育委員会が追加の試掘調査を行った。その結果、予定地のうち、8,178m²を対象として記録保存のための発掘調査が行われることとなった。文化財保護法第94条による手続きを経た後、平成27年度および28年度に鳥取県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。

発掘調査にあたっては、発掘作業や調査記録作業等について、国際文化財株式会社・山陰技術コンサルタント株式会社共同企業体の支援を受けた。

第2節 発掘調査の方法と経過

1 調査区の名称と調査方法

今回の調査地は、広大な秋里遺跡の西端にあたり、字名を取って秋里遺跡(松下地区)と呼称する。調査前の状況は病院駐車場および荒蕪地であった。駐車場は厚さ2m以上の盛土の上に設けられていて、原地形は窺うことができなかったことから調査前の地形測量は実施しなかった。

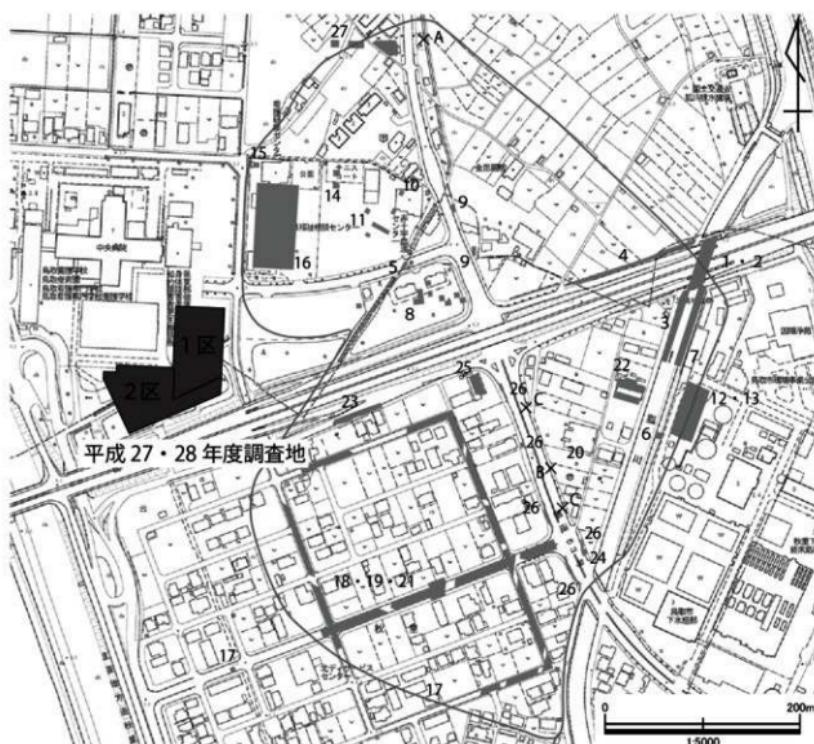
表土剥ぎ終了後に、世界測地系国土座標第V系に載るように調査区内に10m方眼の基準杭を設定してグリッドを設けた。グリッド名はX=-52990m・Y=-10880mの交点を起点とし、南北方向にアルファベット、東西方向に算用数字を用い、各交点の北東杭名を例えばB 3というように採った。

検出した遺構や遺物の記録は、トータルステーションによる電子測量を現地で行い、CADを使用し図面作成を行った。必要に応じて写真測量を併用した。また、焼失住居SI 1に関しては3次元レーザー測量を実施した。現地での写真撮影は35mm判、プロニー(6×7)判カメラ、4×5判カメラを用い、地上または写真用足場と、高所作業車上から行った。いずれも白黒ネガフィルム並びにカラーポジフィルムを使用し、デジタル一眼レフカメラも併用した。遺物写真撮影についてはデジタル一眼レフカメラで行った。

2 発掘調査の経過

発掘調査は冬季の休工を挟んで、調査区を2区に分けて実施した。

1区の調査は、平成27年9月1日に重機による表土掘削から開始した。南側を走る国道9号の崩落を防ぐため調査区南辺には鋼矢板を打設する必要があり、その工期の関係で、まず北半4,500m²を調査することとなった。9月14日からは機械掘削と並行して発掘作業員による人力掘削に着手した。10



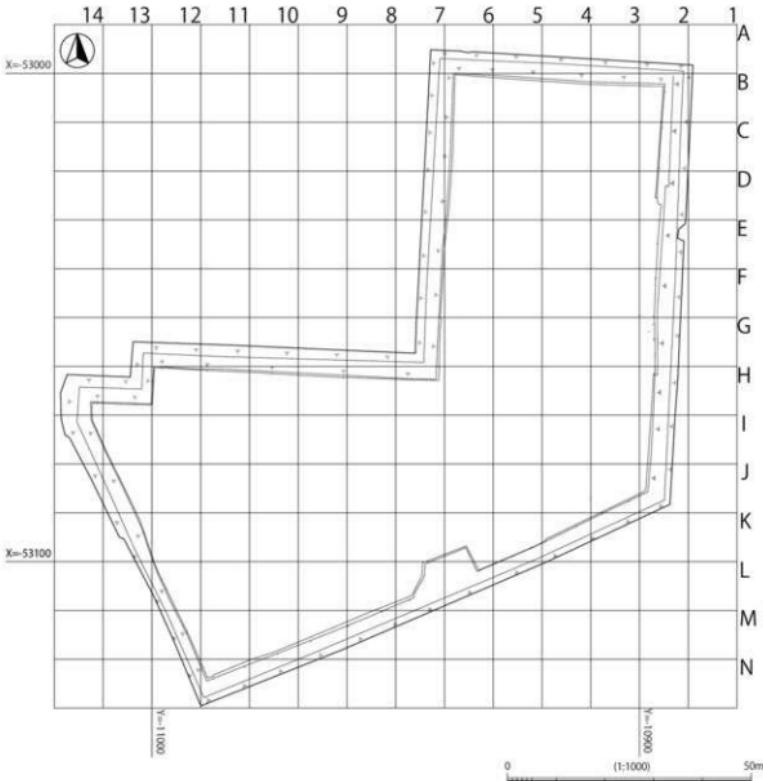
第1図 調査区位置図および既往の調査範囲

1. 鳥取市教育委員会(昭和49年12月～50年3月)
2. 鳥取市教育委員会(昭和50年7月～51年3月)
3. 鳥取市教育委員会(昭和51年7月～52年3月)
4. 鳥取市教育委員会(昭和51年8月)
5. 鳥取県教育委員会(昭和51年12月)
6. 鳥取市教育委員会(昭和52年3月)
7. 鳥取市教育委員会(昭和52年4月～53年3月)
8. 鳥取市教育委員会(昭和54年2月～3月)
9. 鳥取市教育委員会(昭和54年12月)
10. 鳥取市教育委員会(昭和55年8月)
11. 鳥取県教育委員会(昭和56年)
12. 鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査班(昭和57年8月～昭和58年3月)
13. 鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査班(昭和58年5月～昭和59年3月)
14. 鳥取県埋蔵文化財センター(昭和61年)
15. 鳥取県埋蔵文化財センター(昭和62年)
16. (財)鳥取県教育文化財団(平成元年6月～12月)
17. 鳥取市教育委員会(平成元年12月～平成2年2月)
18. (財)鳥取市教育福祉振興会(平成4年4月～5年3月)
19. (財)鳥取市教育福祉振興会(平成5年4月～平成6年1月)
20. 鳥取市教育委員会(平成5年10月)
21. (財)鳥取市教育福祉振興会(平成6年4月～平成7年3月)
22. (財)鳥取市教育福祉振興会(平成7年4月～5月)
23. (財)鳥取市教育福祉振興会(平成9年6月～7月)
24. (財)鳥取市教育福祉振興会(平成9年8月)
25. 鳥取市文化財団(平成18年～平成19年)
26. 鳥取市文化財団(平成22年6月～平成23年7月)
27. 鳥取市文化財団(平成22年6月～平成23年7月)

月14日に第1遭構面(中世)、10月29日に第2遭構面(古代)、11月27日には第3遭構面(弥生後期)の調査を完了した。この間11月13日には県内最古となる弥生時代後期の木製井戸枠を伴う井戸跡を確認したため、12月17日に記者公開を行った後、12月19日に現地説明会を実施し109名の参加者があった。

1区の調査は12月19日に第4遭構面の写真撮影を、12月25日に井戸枠の取上げを行って終了した。

2区の調査は、当初の予定を早めて平成28年2月22日に残っていた表土を重機によって掘削することから開始した。3月1日から発掘作業員による人力掘削を始め、4月6日に第1遭構面の調査を終



第2図 調査区グリッド図

えた。4月15日には平地建物とみられる焼失住居が出土し始め、4月20日には土坑から平安中期のウマの骨が1頭分出土した。前者については公立鳥取環境大学環境学部の浅川滋男教授に、後者については鳥取大学農学部の保坂善真教授に調査指導をいただいた上で、5月12日に記者公開、5月14日に現地説明会を行った。記者公開中に方格規矩鏡の破鏡が出土したこともある、現地説明会には164名の参加をいただいた。天候に恵まれたこともあり、6月11日に第3遺構面、7月13日に第4遺構面の調査を完了し、予定期より約半月早くすべての調査を終えた。

なお、2区中央部のI 5グリッドからL 7グリッドにかけてはかつて湿地があった部分で、表土剥ぎ中に大量の産業廃棄物が埋められていることが判明した。自動車や灯油タンクなど廃油を含む廃棄物が存在し周辺環境への悪影響が懸念されたため、最終遺構面以下の標高0mよりも深いことが確認された4箇所、計約160mについては、調査範囲から除外してステージ状に掘り残した。

1区と2区あわせて、弥生時代後期の遺構としては平地建物跡4棟（うち2棟焼失住居）、布掘建物跡1棟、井戸跡1基、土器集中16箇所など、中世の遺構としては畑跡8面（溝150条、土坑74基、ピット108基などを含む）などを調査した。

第3節 調査体制

下記の体制で発掘調査、報告書作成を行った。

平成27年度

鳥取県埋蔵文化財センター

所長 中原 齊

次長 近藤 健(兼総務係長)

総務係

係長 白岩 準市

主事 岡 梢、水本 裕子

事務職員 坂本真奈美、高橋 優、植木 朋子

発掘事業室

室長 山根 雅美(兼調整係長)

調整担当

文化財主事 岩垣 命

発掘調査員 平井 克知

事務職員 坪内 恵子

調査担当(秋里分室)

係長 小口 英一郎

文化財主事兼係長 高橋 章司

文化財主事 桥家 豊、吉野 進一

事務職員 竹内 友枝、橋本 千誉

支援業者

国際文化財株式会社・山陰技術コンサルタント株式会社共同企業体

現場代理人：仁田 刚(8月まで)、星野 賢一(9月から)、副現場代理人：前田 賢二、支援調査員：安村 健、青嶋 邦夫、松本 晃、丹治 康明(10月まで)、関 美男(10月から)・久富 正登(10月から)、調査補助員：関 美男(10月まで)、近藤 人資・西岡 賢人・山本 雅徳・島島 威信(10月～2月)・大塚 一彦(11月まで)、土橋 尚起(11月から)・大橋 忠昭(3月から)

平成28年度

鳥取県埋蔵文化財センター

所長 中原 齊

次長 近藤 健(兼総務係長)

総務係

係長 港 浩二

主事 水本 裕子

事務職員 坂本真奈美、中森 貴子、西澤 直子

発掘事業室

室長 松井 潔(兼調整係長)

調整担当

文化財主事 岩垣 命

発掘調査員 平井 克知

調査担当(秋里分室)

文化財主事兼係長 高橋 章司

文化財主事 浅井 達也、枡家 豊

事務職員 竹内 友枝、橋本 千誉

支援業者

国際文化財株式会社・山陰技術コンサルタント株式会社共同企業体

現場代理人：星野 賢一、副現場代理人：前田 賢二、支援調査員：安村 健・青嶋 邦夫・
松本 晃・久富 正登・閑 美男、調査補助員：近藤 人資・西岡 賢人・山本 雅徳・土橋
尚起・大橋 忠昭

平成29年度

鳥取県埋蔵文化財センター

所長 中原 齊

次長 近藤 健(兼総務係長)

総務係

係長 港 浩二

主事 松浦 広美

事務職員 高橋 優、原田 康孝

発掘事業室

室長 松井 潔

調整担当

文化財主事兼係長 小山 浩和

発掘調査員 平井 克知

調査担当(秋里分室)

文化財主事兼係長 高橋 章司

文化財主事 枝家 豊

事務職員 竹内 友枝、橋本 千誉(5月まで)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

秋里遺跡は鳥取市の北部、市街地から北へ約3kmの鳥取市秋里と江津地内に所在する。遺跡の中心部は一級河川千代川の旧流路の自然堤防上、標高3~4mに位置する。日本海は、北方に鳥取砂丘を隔てて約2kmの距離にある。

現在秋里遺跡の西方を流れる千代川は、鳥取平野の形成に深く関わっている。この川は約200万年前から中国山地を削って谷地形を形成しつつ、削り出した土砂を下流域へ運搬してきた。その結果、横枕丘陵や津ノ井粘土層面などの中・高位台地と、鳥取平野や鳥取砂丘などの低位面からなる沖積平野とが形成された。現在の直線的な千代川の河道は、大正15年(1926)から始まる昭和初年の改修によるものである。改修前の旧河道は、秋里遺跡の南約1kmの西品治集落北側付近で東に大きく曲がり、浜坂集落の南方を迂回して賀露付近で日本海へと繋がっていた。秋里遺跡は、本来は千代川が大きく湾曲した部分の左岸にあったことになる。

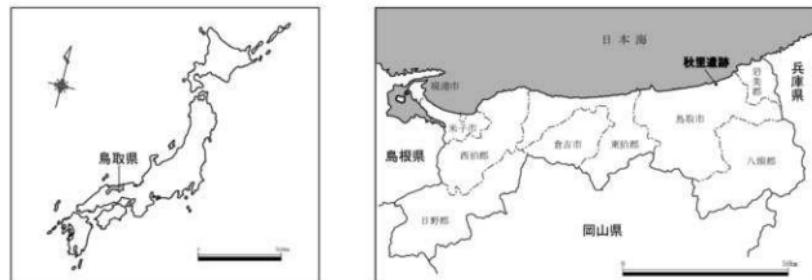
鳥取平野の原型が出来たのは縄文前期の海進の後である。千代川の中流域には袋川上流の国分寺扇状地や、八頭川との合流地点に近い円通寺扇状地などの堆積地形がこの頃以降形成された。一方、千代川の氾濫によって、左岸には秋里・古海・味野の、右岸には田島・品治・立川の自然堤防が発達する。さらに河口付近では、運ばれた土砂が潮流によって海岸に押し戻され、日本海から吹き付ける偏西風によって飛散、堆積して砂丘ができた。現在の鳥取砂丘はいわゆる新砂丘にあたり、縄文後期後半に海岸線が退いた頃に形成された。この時期に、砂丘の内側に痕跡湖として残った場所が湖山池で、その他の場所では、砂丘より内側には主に後背湿地が古墳時代頃まで広がっていたと考えられる。

第2節 歴史的環境

旧石器・縄文時代

秋里遺跡が所在する鳥取平野周辺では、浜坂の砂丘地から採集された黒曜石製の尖頭器を旧石器時代のものとする意見があるものの、今までのところ確実な旧石器時代の遺跡は見つかっていない。

縄文時代になると多くの遺跡が知られるようになる。近年の鳥取西道路の建設に伴う発掘調査で、



第3図 遺跡位置図



1. 秋里遺跡 2. 大鶴遺跡 3. 桂見遺跡 4. 東桂見遺跡 5. 布勢第1遺跡 6. 山ヶ鼻遺跡 7. 古海遺跡
 8. 本高弓ノ木遺跡 9. 岩吉遺跡 10. 帆城遺跡 11. 天神山遺跡 12. 服部遺跡 13. 湖山第2遺跡 14.
 布勢第2遺跡 15. 西桂見遺跡 16. 西桂見墳丘墓 17. 里仁1号墳 18. 本高14号墳 19. 梅間1号墳 20.
 里仁29号墳 21. 山ヶ鼻古墳 22. 浜坂横穴墓 23. 菖蒲庵寺 24. 布勢天神山城跡 25. 鳥取城跡

第4図 周辺遺跡分布図

湖山池南岸の大柄遺跡(第4図2)から出土した有茎尖頭器(草創期)や高住宮ノ谷遺跡の押型文土器(早期)が、この地域での人間の活動の古い例である。前期末になると、桂見遺跡(第4図3)をはじめ湖山池南岸に集落が設けられるようになり、中期に入ると東桂見遺跡(第4図4)や布勢第1遺跡(第4図5)などの集落が湖山池周辺の低地に広がっていく。桂見遺跡では大量の土器と木製品のほか丸木舟が出土しており、湖山池や日本海を舞台とした生活の一端を物語る。後期から晩期になると、集落が自然堤防上に移動する傾向が見られ、代表的な遺跡として山ヶ鼻遺跡(第4図6)、古海遺跡(第4図7)がある。湖山池南岸にも継続して集落が営まれていて、高住井手添遺跡からは多くの編物かごが、本高弓ノ木遺跡(第4図8)では貯木場として使われた可能性がある流路が出土している。一方、鳥取砂丘の後背地でも、栗谷遺跡などの集落が営まれている。

弥生時代

弥生時代前期に鳥取平野で稲作を始めた遺跡の一つとしては、自然堤防上の拠点的集落である岩吉遺跡(第4図9)が挙げられる。中期になると、微高地上に帆城遺跡(第4図10)、天神山遺跡(第4図11)、大柄遺跡、古海遺跡、服部遺跡(第4図12)などの集落が展開し始める。湖山池南岸の高住寺宇宮ノ谷では、扁平紐式の流水文銅鐸が出土している。後期に入ると遺跡の数が増加し、西桂見遺跡(第4図15)、桂見遺跡、湖山第2遺跡(第4図13)、布勢第2遺跡(第4図14)などの大規模な集落遺跡が現れる。秋里遺跡が最盛期を迎えるのもこの頃である。後期前葉以降、湖山池に臨む丘陵上には四隅突出型の西桂見墳丘墓(第4図16)に代表される墳丘墓群が造られる。松原1号墳丘墓からはガラス勾玉を含む大量の玉類が、里仁1号墓(第4図17)からは北近畿系の土器が出土し、他地域との交流を物語る。

古墳時代

古墳時代の集落には西桂見遺跡や布勢第2遺跡のように前期で廃絶している集落が見られ、この時期に海面が上昇したことと関連するようである。その中で、松原田中遺跡では、前期の地中梁をもつ布掘建物群や後期の大壁建物と考えられる建物跡など特徴的な遺構が見つかっている。

千代川左岸には多くの古墳が分布する。早くも前期中葉には山陰地方最古の前方後円墳である本高14号墳(第4図18)（全長64m）が造られ、中期になると野坂川流域に大型の前方後円墳が造営されるようになる。鳥取平野最大の楕円1号墳(第4図19)（全長92m）や里仁29号墳(第4図20)（全長81m）が代表である。この地域では横穴式石室は数少ないが、終末期の石棺式石室をもつ山ヶ鼻古墳(第4図21)が特筆される。

秋里遺跡の周辺には開地谷古墳群や雁金山古墳群、浜坂横穴墓(第4図22)などが分布する。中でも浜坂横穴墓では6世紀後半から8世紀の20基の横穴墓が確認されており、鉄鎌、玉類、金銅製鏡、耳環などのほか銀象嵌の鉄刀が出土している。

古代

秋里遺跡がある千代川左岸下流域は、律令期には因幡国高草郡に属した。岩吉遺跡では9世紀から10世紀までの斎串、人形、馬形などの祭祀遺物のほか「草田」と記す多數の墨書き土器が出土していて、承和19年(842)の『東大寺東南院文書』中の「草尾田」との関連が指摘されている。菖蒲庵寺跡(第4図

23)や古代山陰道の付近通過の推定等と併せて、この付近が律令期には重要な地域であったと考えられている。湖山池南岸では、飛鳥時代から平安時代の木簡や墨書き土器が多く出土した良田平田遺跡が官衙関連施設として注目される。

秋里地区にはかつて「三嶋の藪」と呼ばれる場所があり、祠が存在していた。因幡国司平時範の日記である『時範記』には、時範が承徳3年(1099)の初任の際に宇部宮から袋川を下って、三嶋社と賀露社を参拝したことが記載されており、三嶋社が特別な性格をもっていたことがわかる。

中・近世

15世紀には因幡守護山名氏が布勢天神山城(第4図24)を築城して守護所を布勢に置き、天正元年(1573)に鳥取城(第4図25)に移されるまで湖山池東岸がこの地域の中心となった。付近では、布勢鶴指奥墳墓群や桂見墳墓群などの中世墓群が見つかっている。

元禄元年(1688)に著された『因幡民談記』は「因幡国郡里記」を載せる。鎌倉時代の記録を転載したものとされ、その中に秋里保、江津保、三嶋社の名が見られる。三嶋社を抱える秋里遺跡は一般の集落ではなく、同社に付属する集落もしくは莊園であった可能性が高い。しかし羽柴秀吉が天正9年(1581)に鳥取城を包廃した際の記録では、浅野長政および船手奉行吉川平助の陣地を「三嶋社」ではなく「ミシマノヤブ」付近に設けたとするので、遅くとも16世紀には三嶋社は機能を失っていたと考えられる。一方、三嶋社の付近まで軍船が進入できたという事実は、同社と賀露神社との深い関係や航海の神でもある宗像三女神を祭神とすることを考えると、外港である賀露に対し秋里遺跡(三嶋社集落)が内港として機能し、鳥取平野の玄関口の役割を果たした可能性を物語る。

中世後期には秋里遺跡付近に大星の橋と呼ばれる橋が架けられていて、但馬方面から千代川を渡ることができる要衝の地であった。これに関連するものか、秋里集落内には秋里玄蕃なる人物の居城があったと伝わる。

寛政7年(1795)に記された『因幡志』によれば、秋里村は戸数97の農村であった。天保14年(1841)の『秋里村田畠地続全図』では、現在秋里遺跡として知られる場所は、「三嶋の藪」を除いてほぼ全域が田または畠となっていて往時の三嶋社集落の面影はない。

【おもな参考文献】

- 『鳥取県史』鳥取県 1962年
- 『鳥取・秋里遺跡I』鳥取市教育委員会 1976年
- 『千代川史』建設省中国地方建設局鳥取工事事務所 1978年
- 『秋里遺跡(西皆竹)』財團法人鳥取県教育文化財団 1990年
- 『新修鳥取市史第一巻(古代・中世編)』鳥取市 1983年

第3章 発掘調査の成果

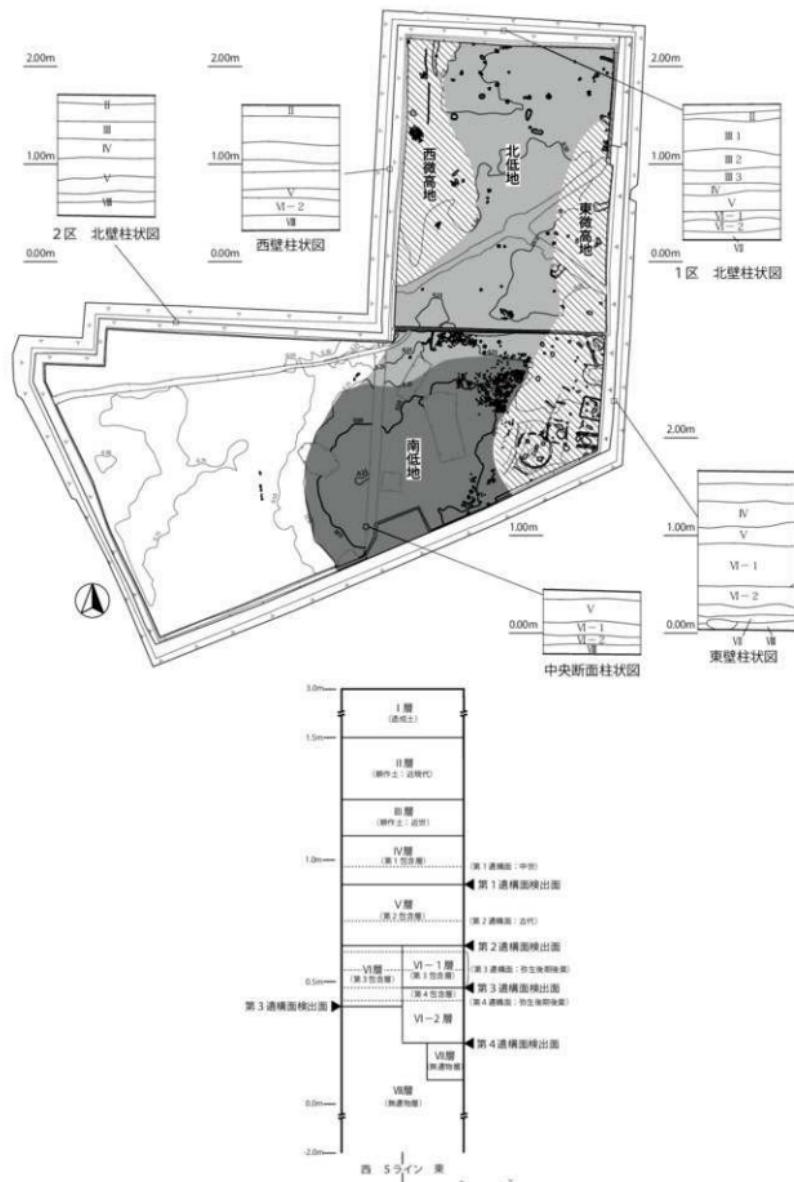
第1節 遺跡の立地と基本層序

秋里遺跡は、昭和初期に付け替えられる前の千代川旧流路が、北方向から東方向に大きく湾曲する部分の左岸自然堤防上に立地する。遺跡は南北750m、東西550m以上の広範囲におよび、大部分は標高2~3mの微高地上にある。千代川の旧河口にあたる賀露港までの距離は、旧流路をたどれば約3.5kmである。千代川左岸下流域には多くの集落遺跡が連なって分布しているが、秋里遺跡からは、最も近い岩吉遺跡でも約1.5kmの距離がある。いわば、鳥取平野の先端に孤立して営まれた大集落である。

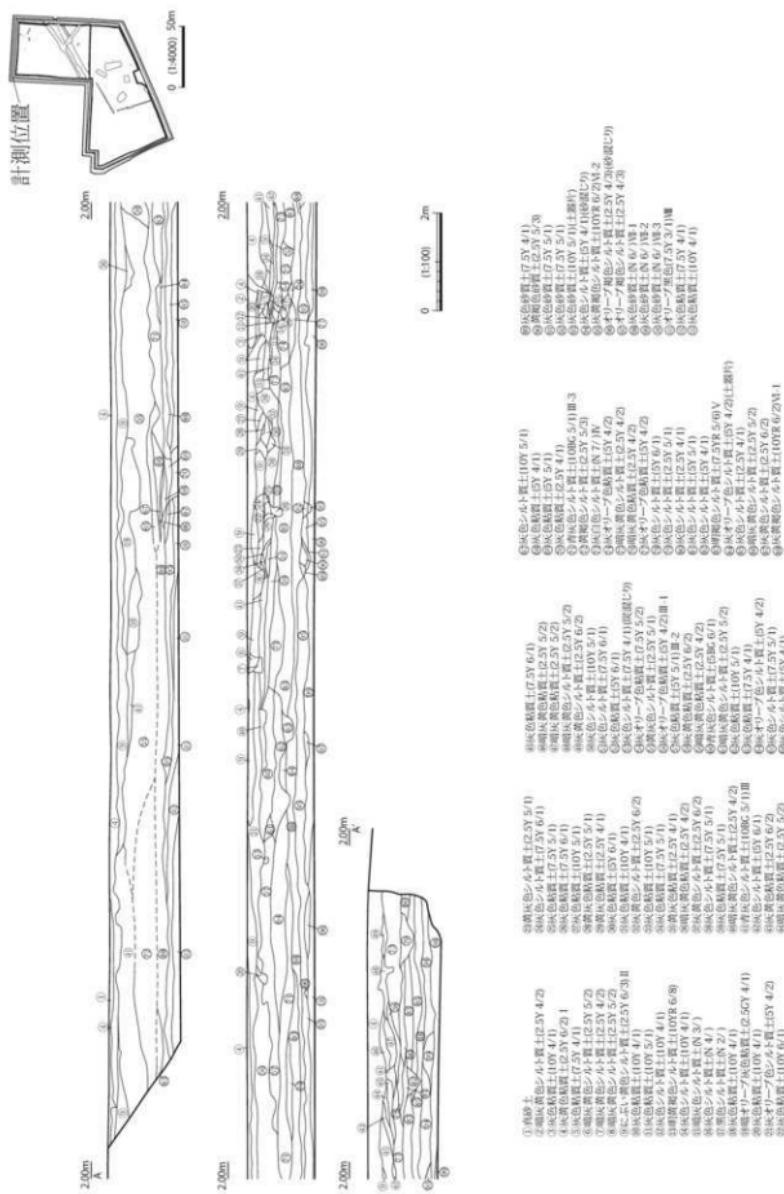
秋里遺跡では、現在までに鳥取市教育委員会や鳥取県教育文化財団などによって29次の発掘調査が実施されている。その多くは道路や下水道の工事に伴う比較的小面積のものであるが、ほぼ遺跡全体に及んでおり、遺跡の構造と変遷をある程度理解できる。秋里遺跡が発見される契機となった昭和49年(1974)の調査地は、現在の国道9号線下で、遺跡の東端にあたる。そこが三嶋社があったといわれる「三嶋の藪」で、古墳時代初頭の土師器や祭祀遺物が大量に出土したことから、古墳時代から古代の集落の中心であるとみられる。遺跡の東部から南部にかけての調査では、古代から中世の遺構と遺物が多く出土しているので、三嶋社に付属する集落は遺跡の南半にあると考えられる。一方、北西部の西皆竹地区では、鳥取県教育文化財団の調査で弥生時代後期の遺構と遺物が多数検出されている。秋里遺跡はよく知られた「三嶋の藪」周辺ではなく、微高地西北のこの部分に起源をもつ可能性がある。

今回調査した松下地区は、西皆竹地区的南西隣接地である。調査区東辺でわずかに微高地にかかるものの、大部分は集落本体から外れた低地にあたり、最終遺構面での標高は0.3m前後と低い。調査区内の微地形はやや複雑である(第5図)。第3遺構面(弥生時代後期後葉)を例に挙げれば、北西部のB5・B6グリッドからF6グリッドにかけて標高0.5mの舌状の微高地が存在する。井戸SE1が設けられたのはこの上で、以下では西微高地と呼ぶ。一方、調査区北東のD2グリッドから南東角のJ3・J4グリッドにも微高地があり、焼失住居SI1をはじめ4棟の建物跡が検出されている。これを東微高地と名付ける。東西2つの微高地と、その間の南北60m、東西20~30mの浅い低地(北低地と呼称)が遺構と遺物が密に分布する範囲である。この低地は、H4~H8グリッドの南半あたりから調査区南辺中央のK5~L7グリッドに向かって海拔以下に深く沈み込む。この部分を南低地と呼称する。元々は、遺跡が形成されるよりも前に存在した、千代川旧流路による三日月湖の痕跡であると考えられる(註1)。弥生時代後期に存在したこれらの南北の低地は、その後の度重なるシルトの堆積で埋まって、最新の遺構面である第1遺構面(平安中期~鎌倉時代)の時期には概ね平坦になっているが、J6~L6グリッドでは、南低地だけは微地形として残っている。

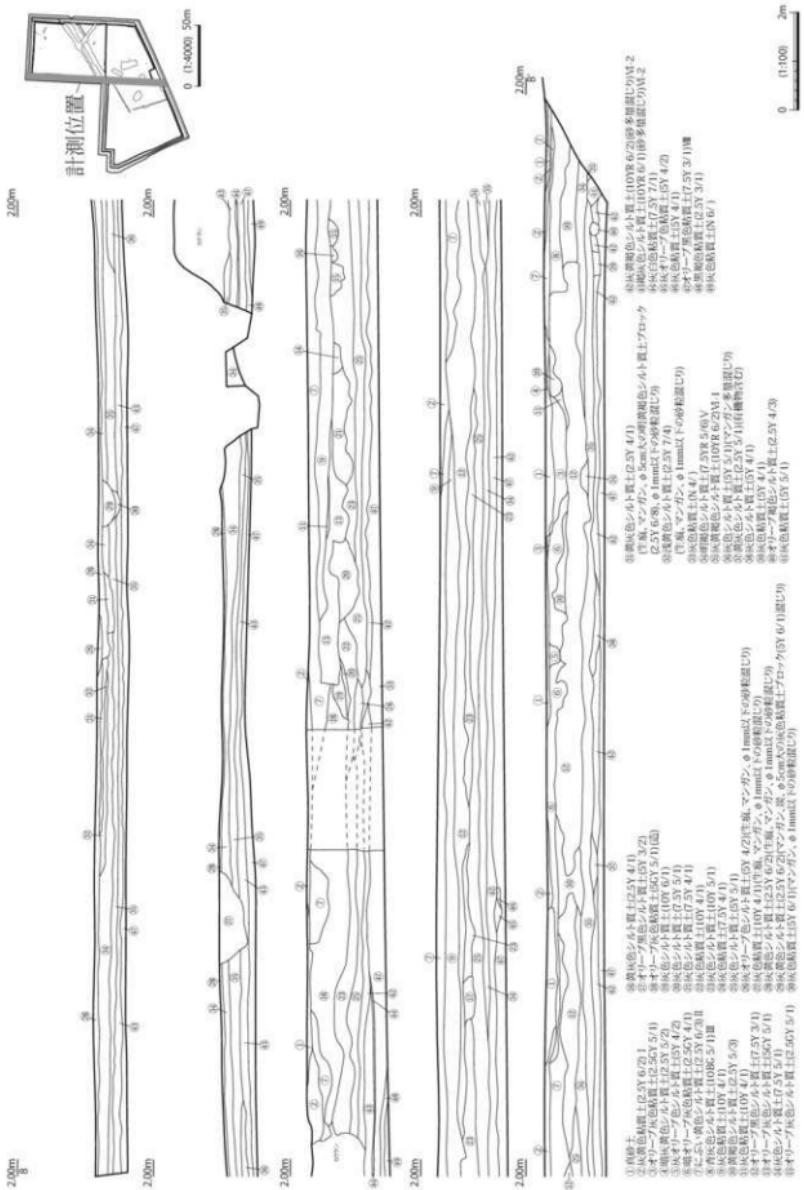
調査区内の土層堆積は、青灰色を基調とする分厚い粘土層の累重を基盤層とする。平安時代中期の土坑SK137周辺で実施した深掘りで、標高-2.0m以下にもこの粘土層群が及んでいることが判明した。粘土層の堆積はいずれも水平で微地形に調和しない。貝殻などの動物遺体も有機物も内眼では全く確認できず、砂層を介在させることもない。かなり古い時代、おそらく縄文海進期かそれ以前の、海成か湖成の粘土層と考えられる。発掘調査においてはこの粘土層群をⅢ層と名付けた。



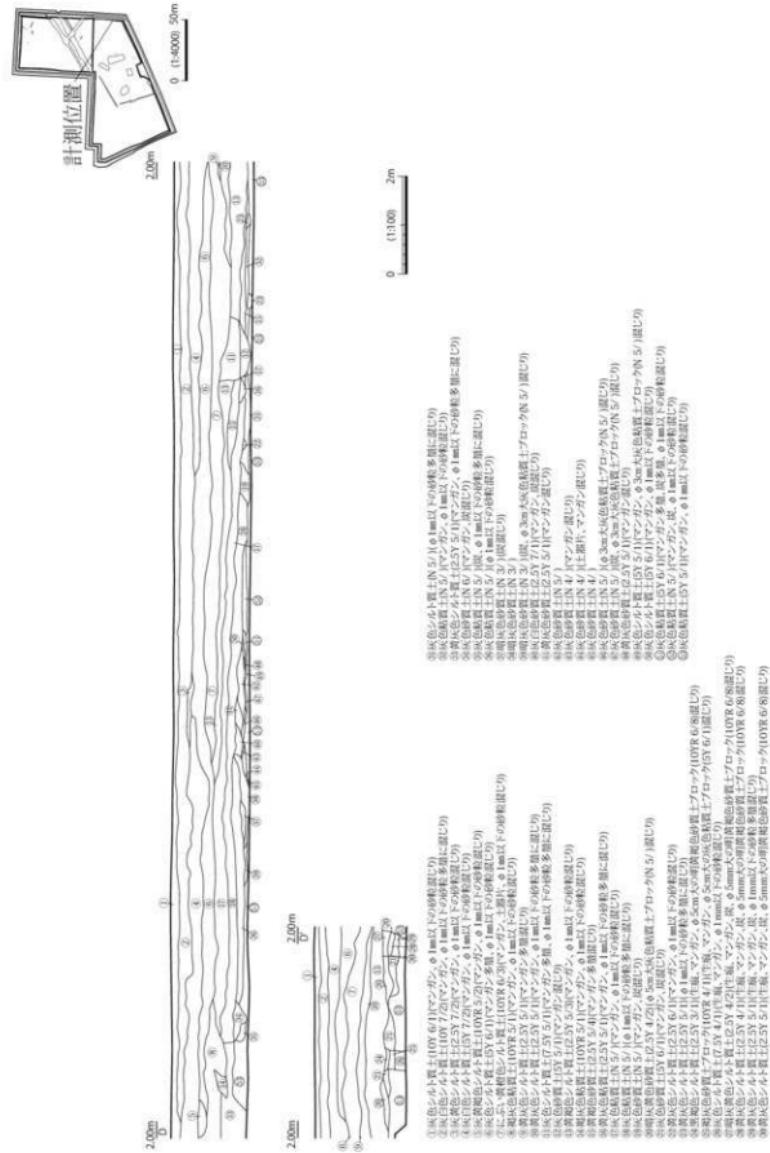
第5図 調査区内の微地形と堆積および土層概念図



第6図 調査区北壁土層断面図



第7図 調査区西壁～中央ベルト土層断面図



第8図 調査区東壁土層断面図

基本層序は次のとおりである。

- I層：表土、耕作土、造成土。標高1.5m以上。標高約3mまで盛土されている。
- II層：にぶい黄色シルト質土(25Y 6 / 3)。層厚約20cm。近代の水田の床土。
- III層：青灰色シルト質土(10BG 5 / 1)。層厚15cm。近世の水田耕作土。直下に床土とみられる灰黄色系の粘質土を伴う箇所があり、合わせて層厚30cmまでで、下面の標高は1.1m前後。
- IV層：灰白色シルト質土(N 7 /)。層厚は最大で30cm。下面の標高は0.90m前後。中世の土器と陶磁器片を少量含む。中世の耕作土。第1遺構面の遺構埋土はこの土を主体とするので、本来はこの層中に構築面があるはずであるが、検出は困難であった。第1包含層。
- V層：明褐色シルト質土(75YR 5 / 6)。上面は固く締りマンガンの沈着と生痕が著しい。最も厚いところで35cmを測る。下面での標高は0.65m前後。わずかに古墳時代後期から奈良時代の土器を含むが、無遺物に近い。古墳時代前期から始まるとしてある海面の上昇に関連して形成された層と推定され、この層が形成される期間には調査地内はほぼ放棄されていたと考えられる。第2包含層。第1遺構面(中世)はこの上面で検出した。
- VI層(VI - 1層)：灰黄褐色シルト質土(10YR 6 / 2)。1mm以下の砂粒が多量に混じる。第2遺構面の遺構はこの面上で検出したが、その埋土はV層と同じ土を主体とするので、本来はV層中から掘り込まれているはずである。一方、VI層上面付近では、VI層を削るとすぐに多量の弥生土器が現れ、その中には原位置を保った状態のものも多い。これを第3遺構面とした。したがって、第2遺構面の遺構と第3遺構面の遺構の中には、ほとんど同じ層準で検出し埋土の特徴によって分類したものがあるが、実際には第2遺構面に所属する遺構は非常に少ないため、混乱は生じていない。層厚は厚いところで30cmを測り、下面の標高は0.20~0.50m前後である。
上面付近から出土する土器も下面付近のものも、ほとんどが弥生時代後期後葉に属し、明確な時期差は認められない。地上に置かれた土器や平地建物の焼失住居を乱さずにパックしたこのシルトは、碟や粒径の大きな砂を全く含んでいないことから、洪水層の末端が静かに堆積したものと推定される。そのような堆積が比較的短期間に繰り返されることで、VI層が形成されたのであろう。VI層の下面から上面付近までの間には何枚かの生活面が存在する可能性が高いが、識別できなかっただため、VI層(正確には次に述べるVI - 2層を除く)全体を第3包含層、VI層中で検出できた遺構を第3遺構面所属遺構として扱う。
- VI層は主に調査区の東半に分布する。西側高地ではごく薄く、本来第3遺構面に属する遺構でも、SE1のようにV層を除去した段階でVII層上面で確認したものがある。
- VI - 2層：灰黄褐色シルト質土(10YR 6 / 2)。1mm以下の砂粒が混じり、やや締まる。調査区北東のB2~B4グリッドからD3・D4グリッドまでと、H3・H4グリッドからJ4・J5グリッドにかけての部分では、締りと砂粒の量に基づいてVI層を2層に分けることが可能で、上層をVI - 1層、下層をVI - 2層と名付けた。層厚は最大で25cm、下面での標高は0.30m前後。この範囲では第3遺構面は主にVI - 2層の上面で検出した。一方、VI - 2層の下面是遺構検出が容易なVII層もしくはVIII層のため、そこを第4遺構面として遺構検出を行った。VI - 1層中で検出から漏れた遺構を確認するためのダメ押しの意味合いが強い。これに合わせてVI - 2層を第4包含層としたが、出土したのはほとんどが弥生時代後期後葉の土器で、VI - 1層と時期差はない。
- VII層：灰色砂質土(N 6 /)。層厚20cm以上。調査区東半の5ライン以東に局的に分布する砂層。無

遺物のためこの範囲ではⅦ層ではなくこの層を基盤層として扱った。

Ⅷ層：灰色砂質土（N 6 /）。層厚20cm以上。調査区東半の5ライン以東に局部的に分布する砂層。

無遺物のためこの範囲ではⅦ層ではなくこの層を基盤層として扱った。

第2節 第1遺構面

1 概要

第1遺構面は調査区のほぼ全面に広がる。調査区東半の8ライン以東では古墳時代後期から律令期の包含層であるV層上面で、8ライン以西ではV層の残りが悪いためVI層またはVII層上面で遺構群を検出した。遺構上層の埋土はIV層と同様の褐色シルト質土であり、本来はIV層中から掘り込まれたものである。溝計164条、土坑96基、ピット118基が主な遺構で、他に柵列1条を検出している。

溝は主に耕作溝と考えられ、幅0.5m、溝間1.1m、検出面からの深さ0.11mが平均値である。規模の大きさに反して切り合いが少ないとから、穀物や野菜よりは樹木の栽培に関係する可能性が高いと思われる。畠幅や耕作深度等からはクワの栽培に様態が近いようであるが、この地域でのクワ栽培の規模や歴史についてはよくわからない。なお、花粉分析と植物珪酸体分析の結果（第4章第4節参照）、IV層からはイネ科植物の珪酸体が一定量検出されるものの、花粉も珪酸体も分解し易い土壤のため、栽培されていた作物種を推定できるデータは全く得られなかった。2基の土坑からはウリ科の種子が、15基からは桃核が出土しているが、調査区内で栽培されたものであるかはわからない。

土坑は円形で深いものが中心で、木製の蓋や曲物枠、柄杓を出土することから、畑作に用いる野井戸が主体であるとみられる。土器、木器、漆器、動物遺体など多様な遺物を出土したものがあり、その年代から、平安時代中期から鎌倉時代にかけての遺構群である。

以下では、耕作溝の方向が一致する範囲または区画溝や柵列で開まれる範囲を1枚の畑と捉えて、畑1～畑8とする。この範囲から外れる遺構は最後に取り上げる。

2 畑

畑1（第10・11図、表1、PL3）

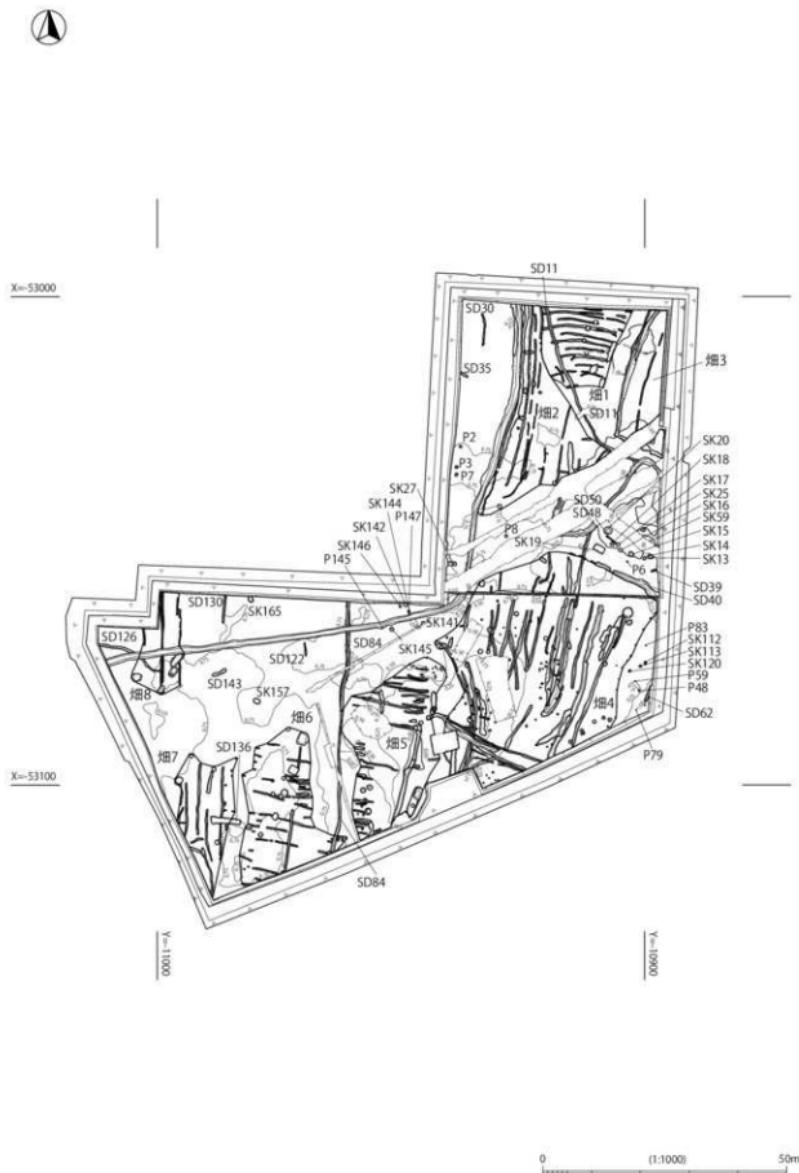
調査区北端のB3～B5グリッドからC3・C4グリッドにかけて検出した、溝14条、土坑5基、ピット1基からなる畑跡で、東西方向の耕作溝を扇形に配列する。北側は調査区外にのびる。区画溝の可能性があるSD10を除けば、溝幅0.34m、検出面からの深さ0.09m、隣の溝との中央部での間隔0.90mが平均値である。途切れている箇所を復元すると、長さは8m～17m程度になる。土坑には、径1m、深さ1m前後で円形を呈するもの（SK1～3）と、浅く不定形なもの（SK4・5）があり、前者は野井戸と推定される。SK3からは大量のシジミの貝殻が出土している。

畑2との切り合い関係から、作られた時期は先行するが同時に機能したであろう。

出土遺物は少なく、図示できるものはない。

畑2（第12～14図、表2、PL4）

調査区北西の、B5グリッドからE3・E4およびF5・F6グリッドにかけてのびる三角形の畑跡で、15条の溝と7基の土坑、2基のピットで構成される。南北方向に走るSD12～15の4条が主な耕作溝で、途切れながら長さ40mを超えて調査区外に続いている。溝幅0.50m、深さ0.33m、間隔0.80mが平均で、律令期に掘られたと推定される区画溝SD27に沿っている。土層断面の観察によると、SD27は畑2が作られた時にはまだ上半分が溝として機能していたことが分かる。東側にある溝SD11



第9図 第1遺構面遺構配置図

表1 畑1遺構一覧

								※復元値 △現存値					
遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	間隔(m)	遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	間隔(m)	遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)
SD1	※10.0	0.25	0.04	0.4	SD8	8.0	0.24	0.15	1.1	SK1	0.96	0.84	0.82
SD2	※17.1	0.40	0.08	0.5	SD9	9.6	0.60	0.20	1.4	SK2	1.00	1.04	1.20
SD3	※9.7	0.29	0.08	0.8	SD10	4.3	0.94	0.04		SK3	0.82	0.80	0.96
SD4	※14.7	0.35	0.06	0.8	SD21	3.5±1.0	0.30	0.04	1.1	SK4	2.10	1.01	0.08
SD5	15.1	0.54	0.15	1.2	SD22	4.6	0.30			SK5	2.36	1.48	0.16
SD6	10.9	0.28	0.04	0.8	SD24	5.3±1.4	0.19	0.03		P1	0.44	0.42	0.16
SD7	12.3	0.37	0.10	0.9	SD25	2.3	0.30	0.06					

表2 畑2遺構一覧

								※復元値 △現存値					
遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	間隔(m)	遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	間隔(m)	遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)
SD11	△33.3	0.64	0.32		SD34	7.8	0.21	0.15	2.7	SK7	0.82	0.62	0.12
SD12	△41.0	0.40	0.22	1.0	SD36	0.8	0.20	0.22		SK9	1.06	0.88	0.03
SD13	※34.5	0.30	0.24	0.6	SD37	1.2	0.20	0.21		SK10	1.19	0.82	0.45
SD14	△35.4	0.50	0.52	0.7	SD38	4.3	0.40	0.20		SK11	1.40	0.88	0.51
SD15	△44.3	0.80	0.32		SD50	△6.7	1.30	0.32		SK39	0.80	0.76	0.36
SD23	3.7	0.28	0.08		SD53	1.9	0.16	0.11		SK40	0.86	0.82	0.46
SD31	15.8	0.34	0.12	1.4	SD54	2.1	0.40	0.10		P4	0.66	0.60	0.16
SD33	△2.5	0.41	0.10	1.1	SK6	2.20	0.61	0.13		P5	0.54	0.50	0.34

表3 畑3遺構一覧

								※復元値 △現存値					
遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	間隔(m)	遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	間隔(m)				
SD16	※37.9	1.30	0.38		SD32	△21.0	0.30	0.21					
SD18	△4.7	0.35	0.07		SK12	△1.44	△0.89	0.12					

は、土層断面では畠1に属するすべての耕作溝を切っていることから、畠2の区画溝である。SD23・31・33・34・50も南北方向の耕作溝で、SD36～38・54はこれらに直交する短い溝。畠1と同様に、土坑には深さ10cm程度の浅いものと、径1m、深さ40cm前後の深いものがある。野井戸と考えられる後者が畠1よりも半分程度の深さなのは、畠2は西微高地に近く基盤粘土層(Ⅶ層)が浅い位置にあることと関係しよう。出土遺物から13世紀頃の畠跡と考えられる。

出土遺物は少ない(第14図)。2は底部糸切りの土師器で、3は弥生土器の大型の脚台部。いずれも区画溝SD11から出土した。SD31からは2個体分の瓦質鍋(4・5)が、SK39からは東播系の須恵器捏鉢(7)と瓦質捏鉢(8)が共伴し、瓦質鍋の破片(9・10)も出土している。

畠3(第15図、表3、PL4)

調査区北東隅のB2グリッドからE2・E3グリッドにかけて検出した。3条の溝と1基の土坑を調査したが、調査区内に一部がかかるだけなので、全形は不明である。区画溝SD16で方形に区画した中を、耕作溝SD32が南北方向に走る。図示できるような遺物は出土していない。

畠4(第16～32図、表4、PL5～8)

調査区南東のG4～G6グリッドからJ3～J6およびK4～K6グリッドにかけて広がる大きな畠跡で、32条の溝と31基の土坑、72基のピットの他に1条の柵列が含まれる。

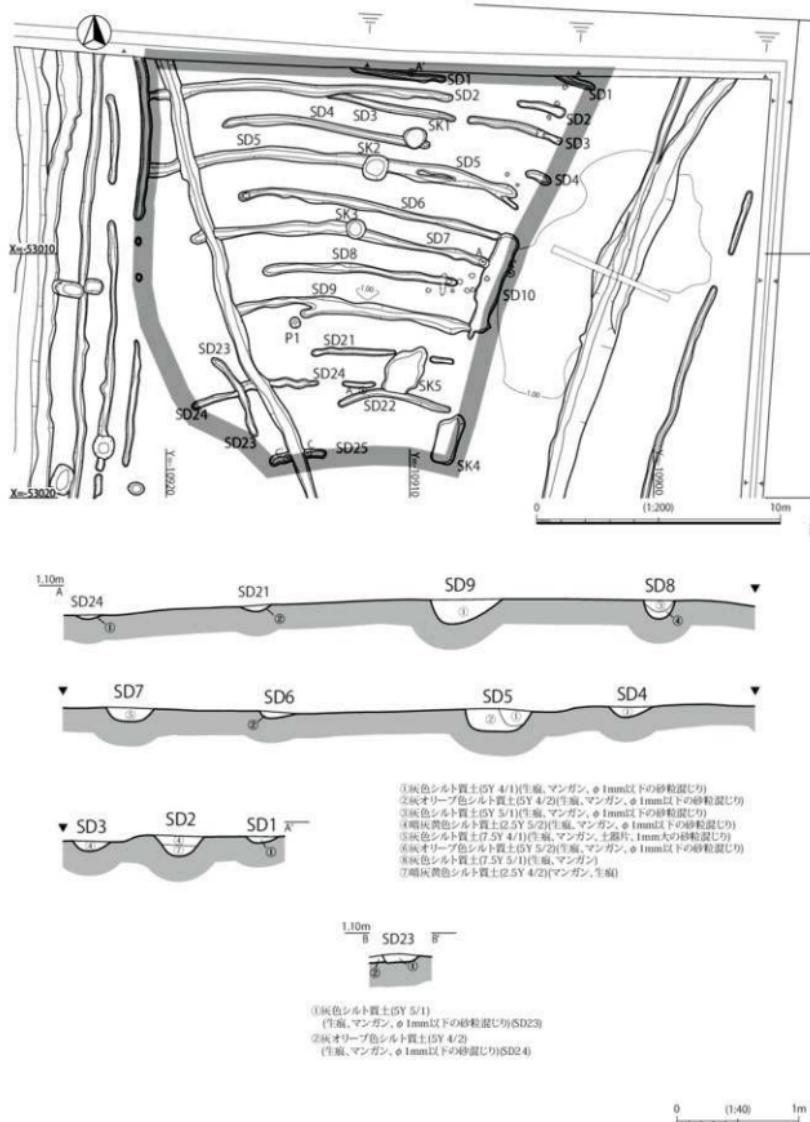
溝は大きく3群に分けられる。南北方向にまっすぐのびる1群(SD42～71)と東西方向の1群(SD73～77)、南北方向に弧状に走る1群(SD80～82・158～160・173)で、弧状のものは深い位置から検出されていて、一部が東西方向のものに切られている。当初南低地の東側を縁取るように作られていた畠を、盛土して方形に作り替えたものと考えられる。作り替えの時期は、SD73出土の青磁碗(第29図26)およびSD76出土の土師皿(30)から13～14世紀頃と考えられる。全体の形がよくわかる南北方向の

表4 番4遺構一覧

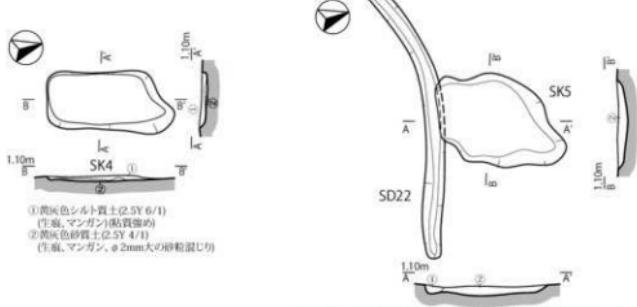
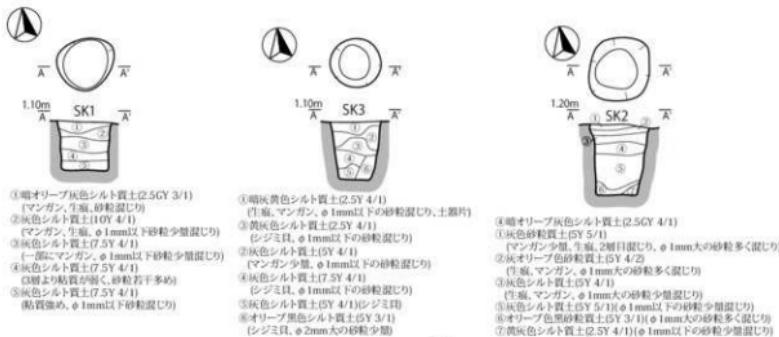
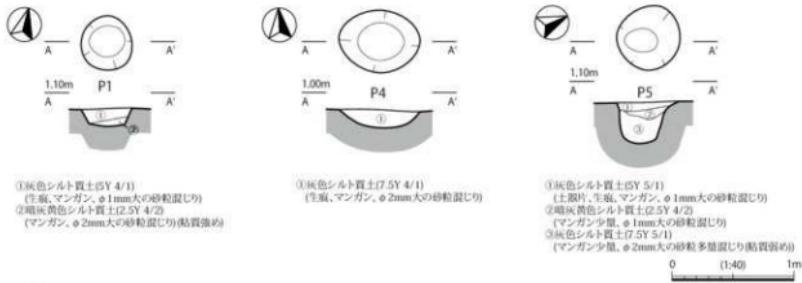
遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	間隔(m)	遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	※復元値	△現存値
SD42	△40.5	1.05	0.30	0.8	SK114	0.90	0.90	0.80	P75	0.27	0.22	0.17		
SD43	30.8	1.10	0.20	0.8	SK115	0.77	0.77	0.79	P76	0.26	0.26	0.17		
SD44	7.1	0.42	0.19	0.7	SK116	0.61	0.31	0.45	P77	0.25	0.25	0.18		
SD45	21.2	0.46	0.25	1.5	SK117	0.45	0.45	0.06	P78	0.25	0.25	0.11		
SD46	△22.3	0.38	0.10	2.2	SK118	1.03	0.93	1.06	P80	0.25	0.20	0.13		
SD47	△17.2	0.50	0.23	2.0	SK119	0.80	0.80	0.85	P81	0.20	0.20	0.15		
SD49	△1.6	0.34	0.04		SK121	0.58	0.38	0.61	P82	0.20	0.20	0.06		
SD51	※13.2	0.40	0.14	0.5	SK122	0.64	0.41	0.70	P84	0.20	0.20	0.39		
SD63	△12.0	0.50	0.28	2.0	SK123	0.63	0.50	0.38	P85	0.31	0.25	0.20		
SD64	11.7	0.45	0.25	2.1	SK124	0.47	0.33	0.16	P86	0.30	0.25	0.27		
SD65	5.6	0.35	0.18	0.9	SK125	0.86	0.48	0.10	P87	0.42	0.32	0.19		
SD66	12.3	0.65	0.22	2.9	SK126	0.70	0.70	0.11	P88	0.36	0.36	0.16		
SD67	18.5	0.62	0.18	1.0	SK127	0.88	0.77	0.06	P89	0.28	0.23	0.12		
SD68	△33.8	1.47	0.21	0.8	SK128	0.52	0.37	0.69	P90	0.21	0.21	0.33		
SD69	7.7	0.95	0.12	1.5	SK129	0.90	0.44	0.56	P91	0.36	0.23	0.27		
SD70	△29.3	0.68	0.19	0.7	SK130	0.54	0.40	0.27	P92	0.45	0.35	0.65		
SD71	6.9	0.60	0.04		SK131	1.22	0.98	0.16	P93	0.43	0.33	0.63		
SD72	10.4	1.08	0.21		SK133	1.06	0.85	0.21	P94	0.43	0.36	0.71		
SD73	△21.4	0.55	0.16	1.7	P46	0.45	0.40	0.14	P95	0.35	0.17	0.57		
SD74	△11.7	0.60	0.07		P47	0.33	0.33	0.18	P96	0.43	0.43	0.64		
SD75	2.8	0.50	0.20		P49	0.49	0.32	0.67	P97	0.46	0.38	0.27		
SD76	16.1	0.72	0.12		P50	0.33	0.28	0.20	P98	0.21	0.21	0.19		
SD77	△11.6	0.56	0.11	1.9	P51	0.33	0.33	0.51	P99	0.25	0.25	0.49		
SD78	5.5	0.60	0.05		P52	0.42	0.42	0.55	P100	0.17	0.17	0.21		
SD79	10.6	0.58	0.07		P53	0.22	0.22	0.63	P101	0.46	0.38	0.42		
SD80	△6.0	1.29	0.16		P54	0.28	0.20	0.64	P102	0.31	0.31	0.33		
SD81	0.27	0.05			P55	0.35	0.30	0.58	P103	0.36	0.36	0.19		
SD82	△34.7	0.65	0.18	0.6	P56	0.44	0.34	0.46	P104	0.29	0.22	0.46		
SD158	9.8	1.35	0.08	0.7	P57	0.35	0.35	0.47	P105	0.49	0.36	0.10		
SD159	△21.3	0.46	0.05	0.5	P58	0.45	0.33	0.48	P106	0.30	0.30	0.09		
SD160	※11.5	0.50	0.05	0.5	P60	0.43	0.34	0.30	P107	0.30	0.30	0.07		
SD173	1.6	0.43	0.17		P61	0.50	0.42	0.16	P108	0.32	0.32	0.46		
SK23	1.50	0.73	0.16		P62	0.35	0.35	0.18	P109	0.24	0.24	0.41		
SK26	1.32	1.05	0.42		P63	0.23	0.23	0.11	P110	0.35	0.30	0.64		
SK101	0.85	0.83	1.44		P64	0.25	0.25	0.15	P111	0.29	0.25	0.20		
SK102	2.15	2.15	0.86		P65	0.54	0.45	0.11	P112	0.25	0.25	0.04		
SK103	0.92	0.85	0.87		P66	0.22	0.22	0.17	P113	0.31	0.25	0.05		
SK104	0.70	0.70	0.71		P67	0.48	0.36	0.40	P114	0.25	0.25	0.06		
SK105	0.76	0.76	0.52		P68	0.30	0.25	0.40	P115	0.20	0.20	0.31		
SK106	0.98	0.98	0.99		P69	0.48	0.38	0.31	P118	0.25	0.25	0.20		
SK107	0.75	0.75	1.04		P70	0.25	0.25	0.16	P119	0.26	0.26	0.30		
SK108	0.76	0.68	1.06		P71	0.34	0.34	0.30	P123	0.40	0.35	0.19		
SK109	1.21	1.09	1.07		P72	0.45	0.31	0.31	P136	0.33	0.25	0.15		
SK110	2.22	0.73	0.14		P73	0.45	0.40	0.48	P137	0.31	0.31	0.09		
SK111	0.68	0.68	0.08		P74	0.36	0.36	0.20	P153	0.40	0.40	0.52		

1群のうち11条の溝について平均値をみると、幅0.64m、深さ0.18m、間隔1.40mとなる。

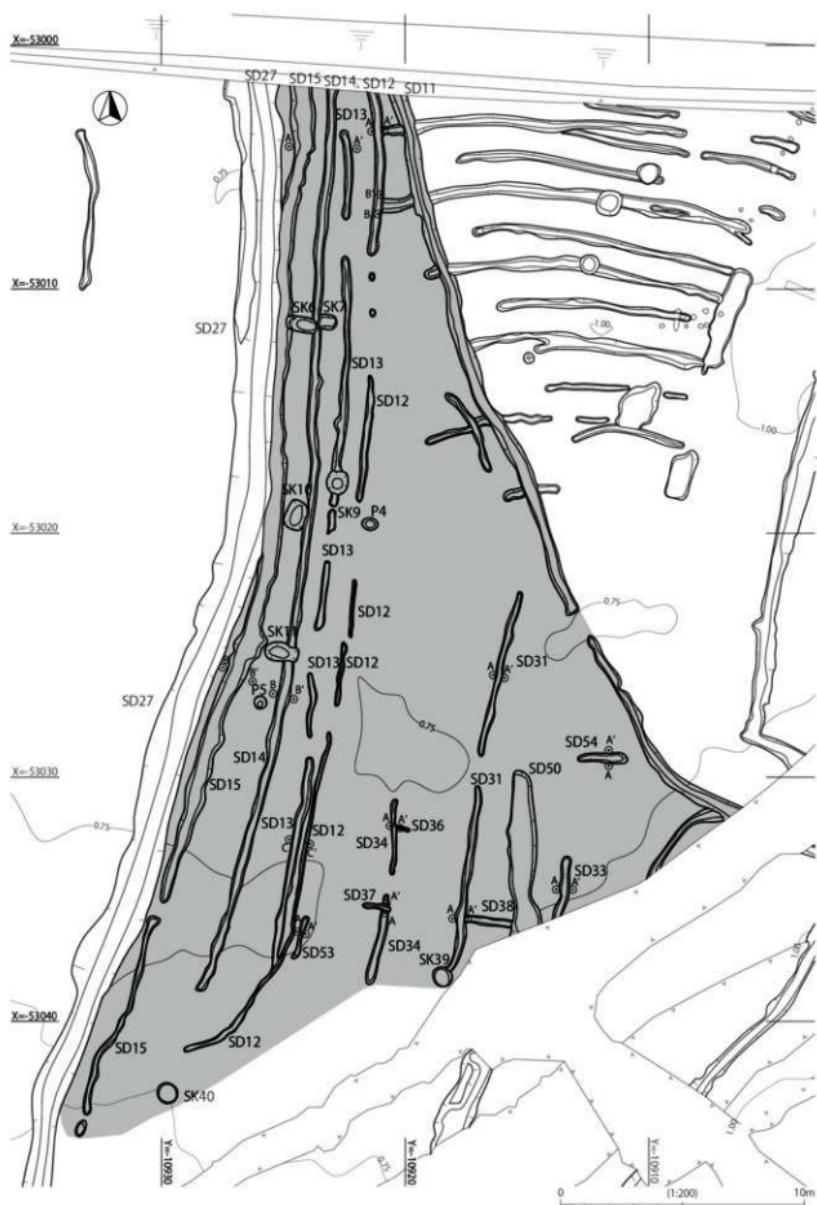
溝からの出土遺物を第29図に示す。番4は弥生時代後期の遺構が密集する部分に作られているため、そこから掘り返された弥生土器が多く出土した(11・13・21・24・28)。11は精製の弥生土器で、高台をもち砲弾形を呈する。内面はよく磨き込まれて薄い。外面には数条の凹線で区画した文様帶を貝殻腹縁文と同心円スタンプ文で交互に充填し、口縁部のみ爪形文を施す。底部は番4のSD42から出土したが、同一器片が第4遺構面に所属するSK207から出土している。S 1は凝灰岩製の紡錘車の破片。



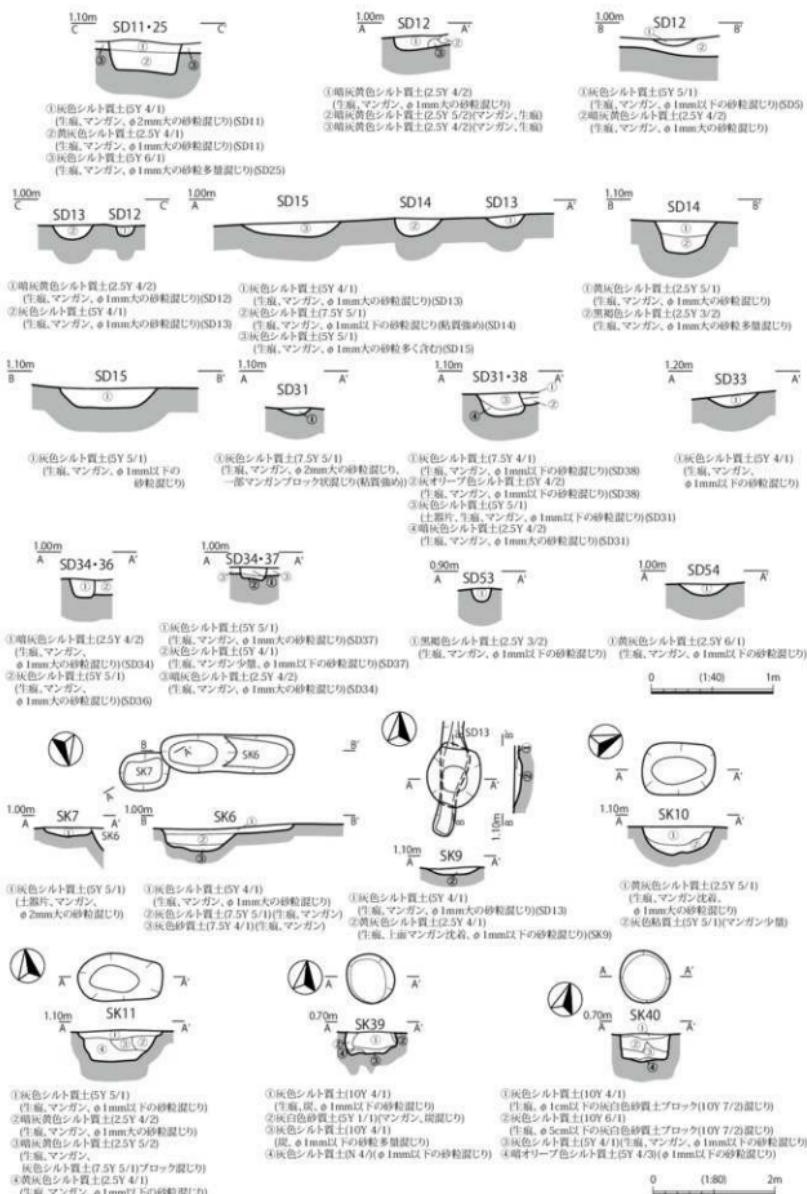
第10図 畑1(1)



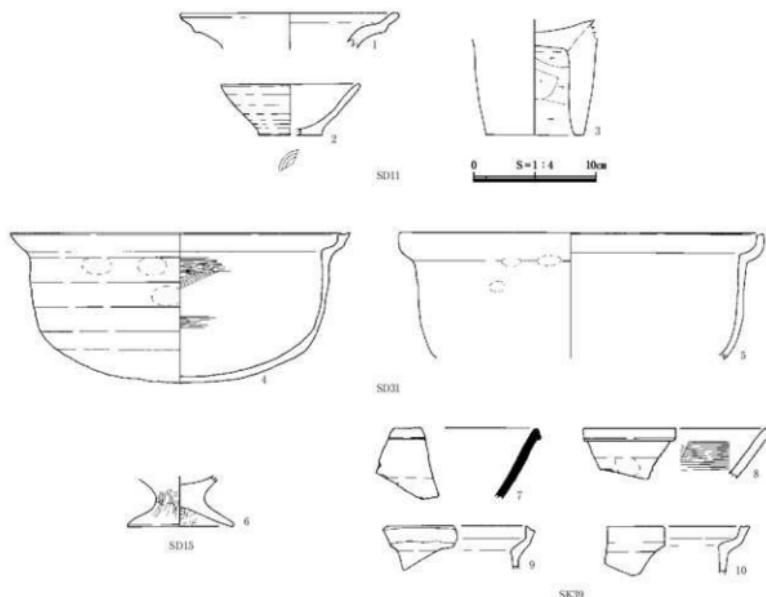
第11図 煙1(2)



第12図 番2(1)



第13図 畑2(2)



第14図 畑2出土遺物

22はSD68から出土した古墳時代後期の須恵器壺。この時期の遺物は非常に少なく、調査区内はほぼ無人化していたと思われる。

31基の土坑のうち、深さ0.5m以上の比較的深いものは17基を数え、畑の縁部に偏って配置されている。特記すべきものと出土遺物を以下に挙げる。

SK101(第20・30図、PL 6)は径0.85mの円形の土坑で深さ1.44mを測る。埋土から多くの被熱燐に混じって瓦質鍋(第30図 31・32)、瓦質羽釜(33)、瓦質擂鉢(34)などが出土した。

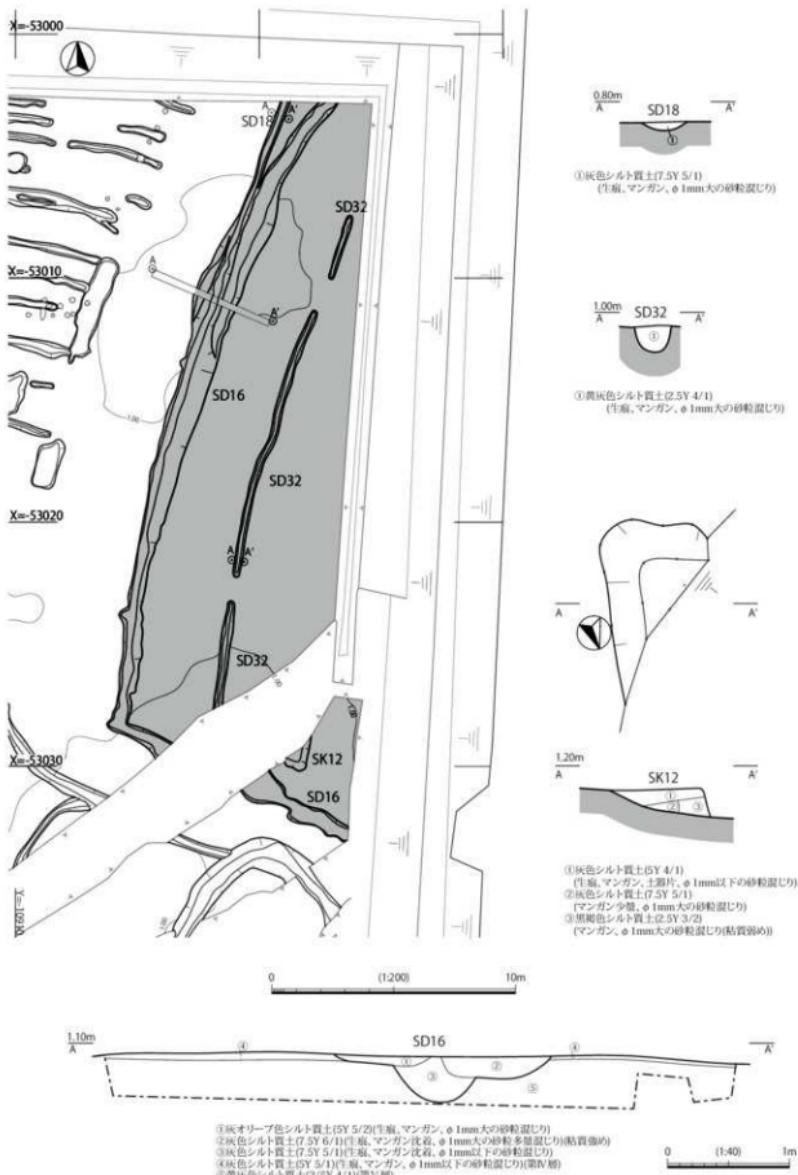
SK102(第21・30図)は径2.15m、深さ0.86mの大きな土坑である。第30図38は下層出土の9世紀頃の須恵器壺で、内面に焼成前に小さく薬状のもので刻書が施される(写真1)。「有」または「為」と読めそうだがはっきりしない(註2)。39は須恵器の壺、40は褐釉陶器の胴部片。最上層からは瓦質羽釜(41)も出土しているが、他の土坑に比較して古い遺物が目立つ。

SK103・114・118(第20・30・31図、PL 6)からは、板状の木片が多く出土した。井戸にかぶせた簡易な蓋の可能性がある。このうちSK114からは瓦質鍋(第31図 48~51・56)と瓦質羽釜(52~55)の破片がまとめて出土したほか、漆器皿(W 2)や箸(W 3~W 6)も出土した。畑4が13~14世紀頃に耕作されたことを示す。

このほかに、複数の土坑から土錘(第30図35・36・



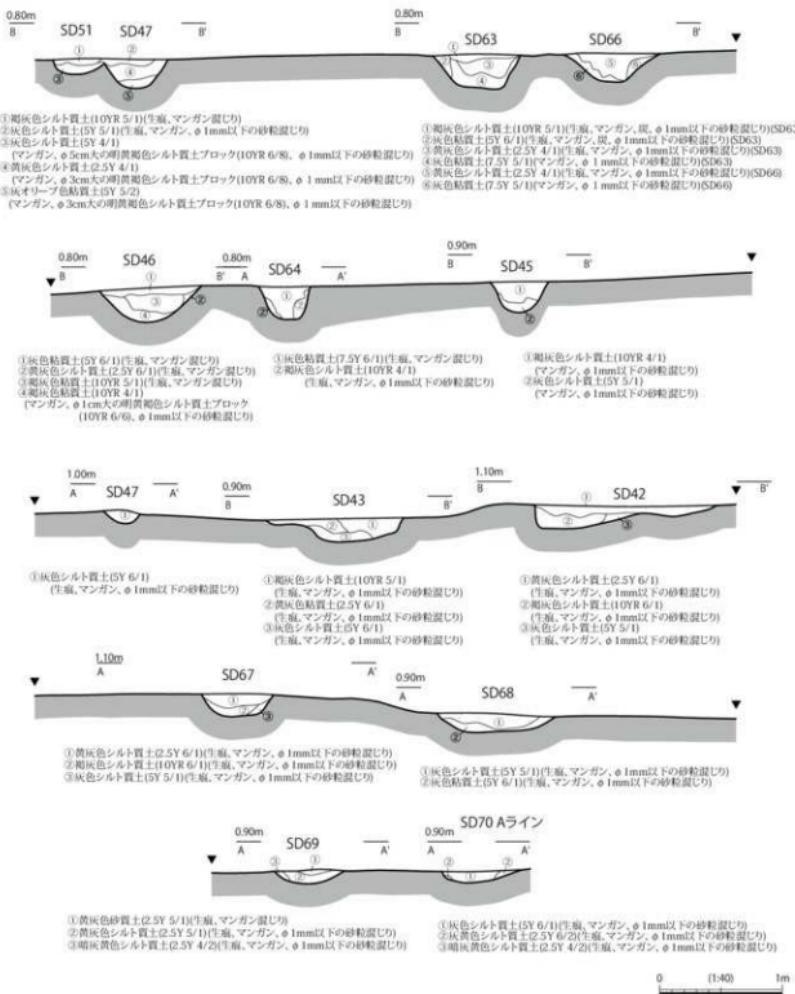
写真1 SK102出土須恵器壺 刻書



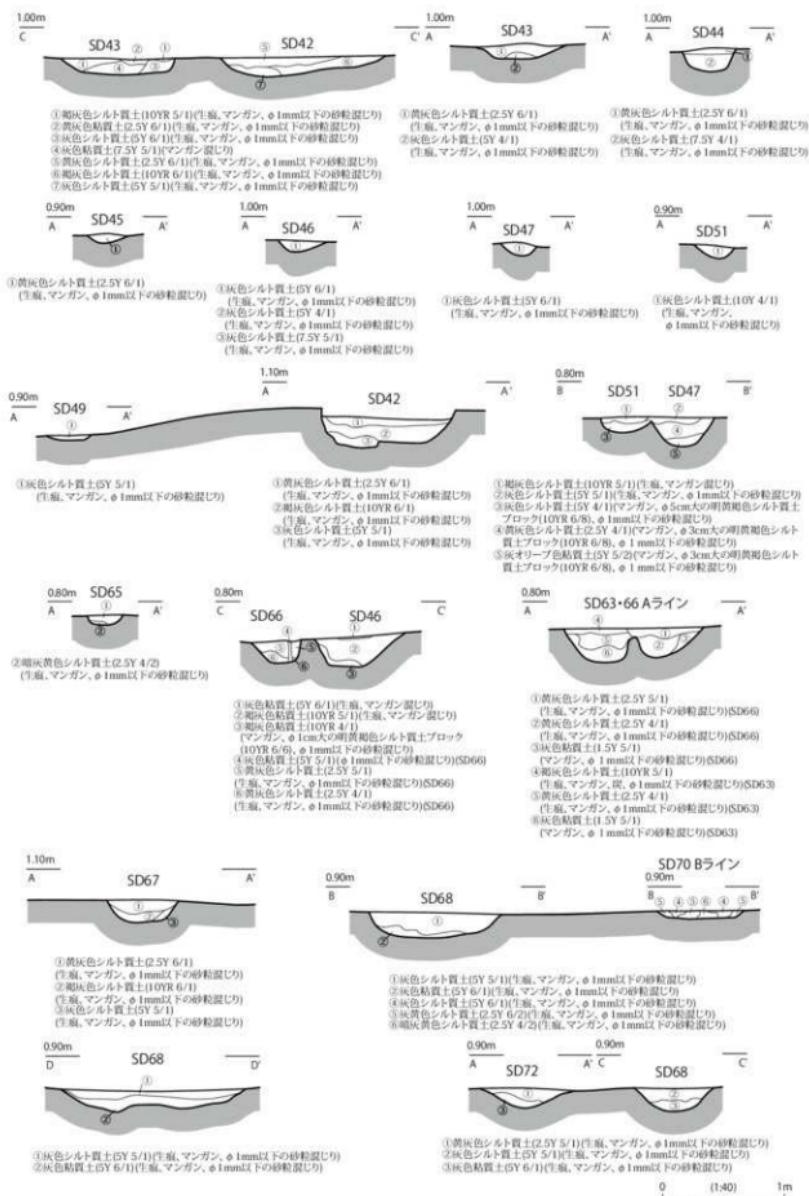
第15図 煙3



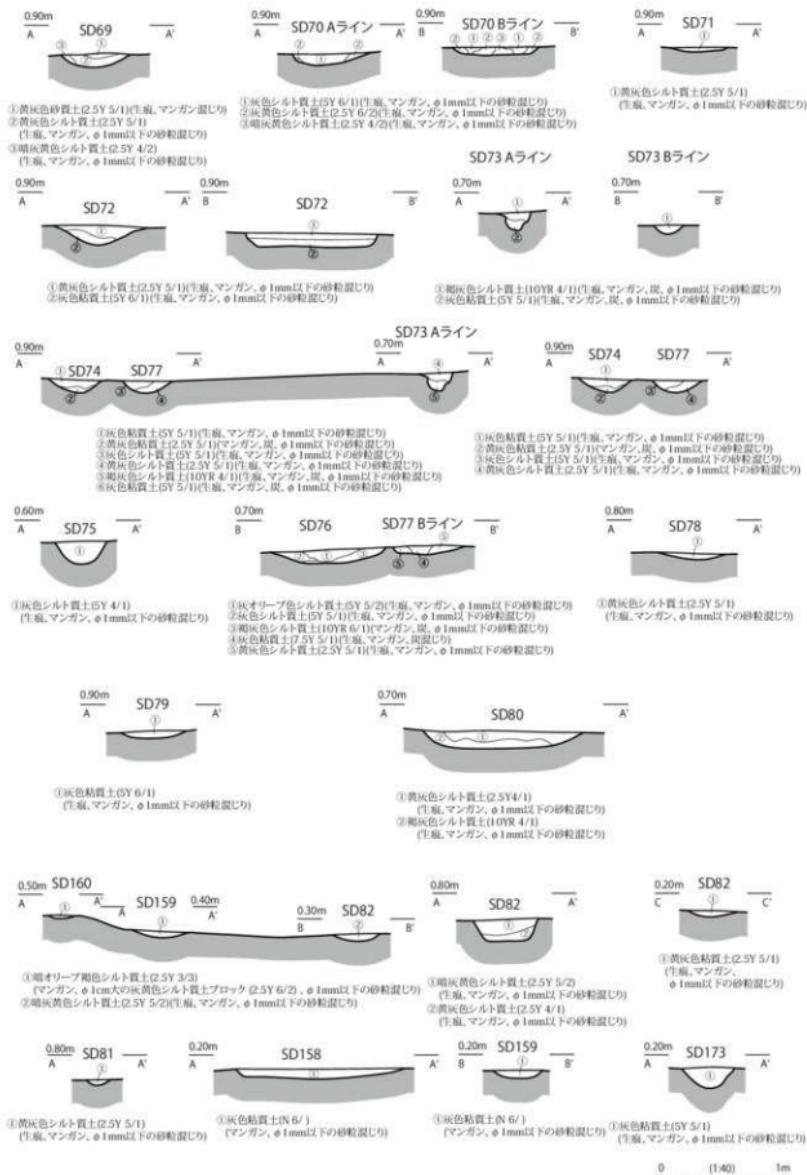
第16図 煙4(1)



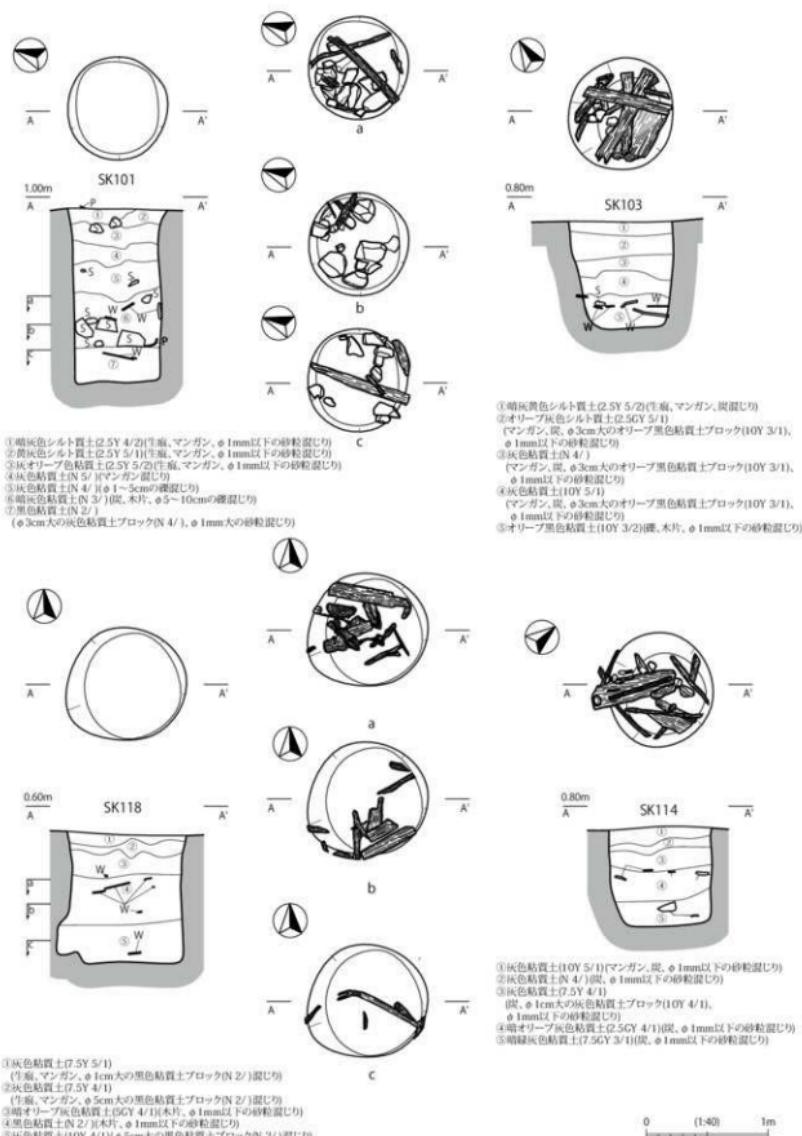
第17図 畑4(2)



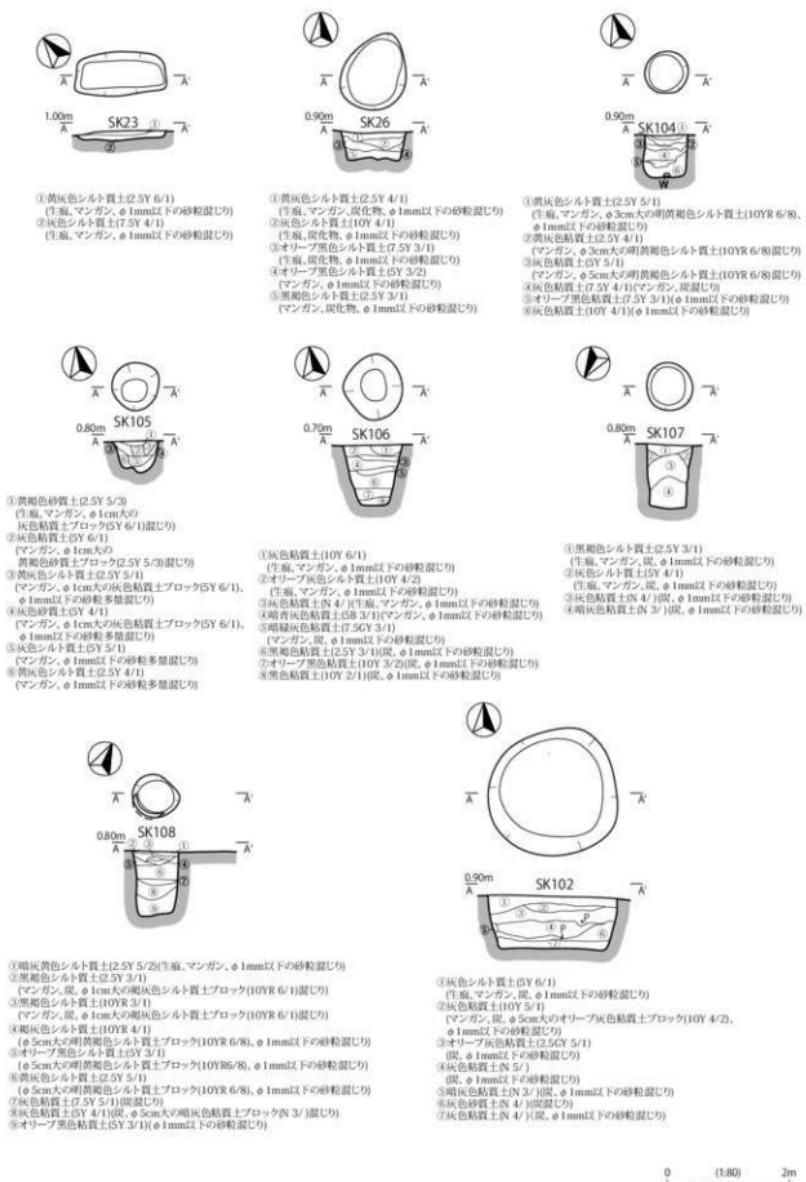
第18回 番4(3)



第19図 煙4(4)



第20図 番4(5)



第21図 番4 (6)



第22図 畑4(7)



第23図 畑4(8)

46・47)が出土していることは、千代川や日本海に近いこの地域での生業の一端を窺わせる。第30図M 1はSK115から出土した北宋銭で天聖元宝。磨滅が進んでいて縁が破損したために捨てられたものであろう。自然遺物としては、SK104からはウリの種が、SK114からはカラスガイの貝殻が、SK115と118からは桃核がまとまって出土した。食物の残滓であろう。

畑4では72基のピットが検出された(第24~27図)。径は0.3~0.4mのものが多く、深さは0.1m前後から0.6m程度までばらつきがある。分布は畑中央部のSD42・43の近くと、畑西縁のSD82・160の近くに集中する。これらには根痕の可能性があり、樹木が栽培されたことを物語るかもしれない。

畑4の東辺では、耕作溝から3.5m離れた位置で南北方向の柵列SA 1を検出した(第28図、表5)。8基のピットが15.8mにわたって並ぶもので、集落側にのみ柵を設けていたことになる。

畑4からは4点の鉄製品が出土している(第32図)。F 1・F 2は板状または棒状の鉄片である。F 3は多量の炭化物と赤色の鉱物が付着した不明品である。磁石に引き寄せられるものの鉄製品ではない可能性がある。F 4は断面が長方形を呈する穿孔具と考えられる。いずれも帰属する時期は不明であるが、F 3以外については、類似する鉄片や穿孔具が下層からも出土しており、弥生時代の遺物である可能性がある。

畑5(第33~40図、表6、PL 7・8)

調査区南部中央のI 7・I 8グリッドからL 7・L 8グリッドを中心広がり、溝38条、土坑12基、ピット23基で構成される。畑は南低地の北側と西側に設けられる。次に述べる畑6と耕作溝の方向が一致していることから、本来は一連の畑であったかもしれない。耕作溝は主に東西方向で、北側のものは長いが西側は短い。後者は傾斜地にかかるため失われた部分が大きいのであろう。このうち東西



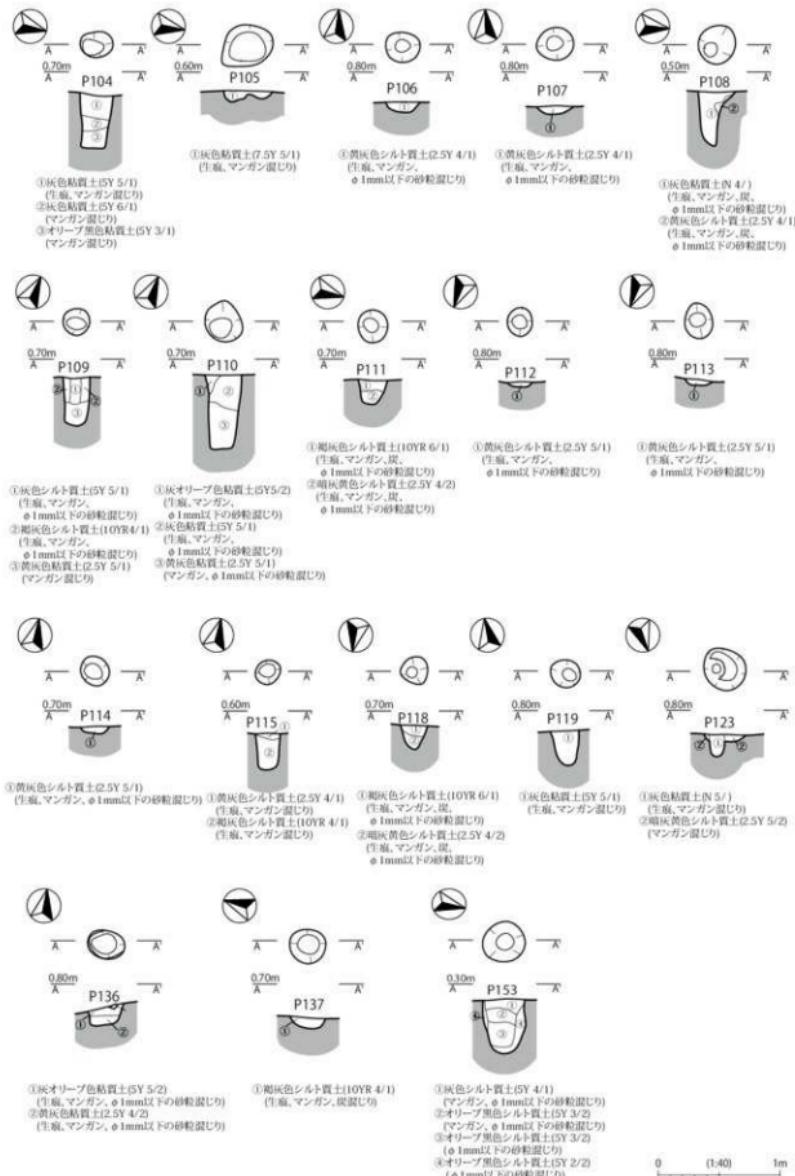
第24図 畑4(9)



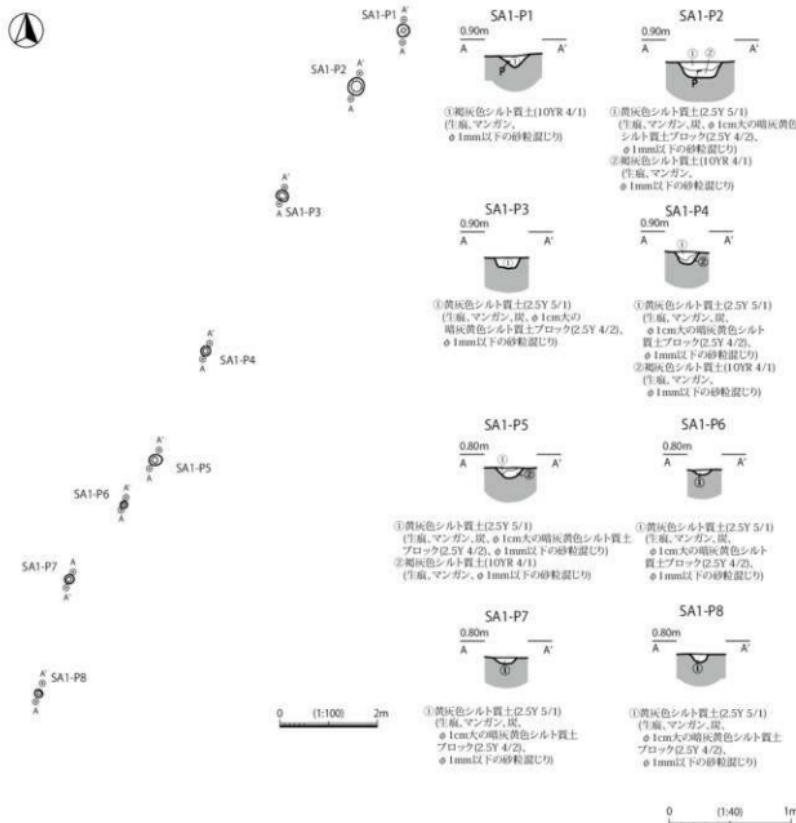
第25図 畑4 (10)



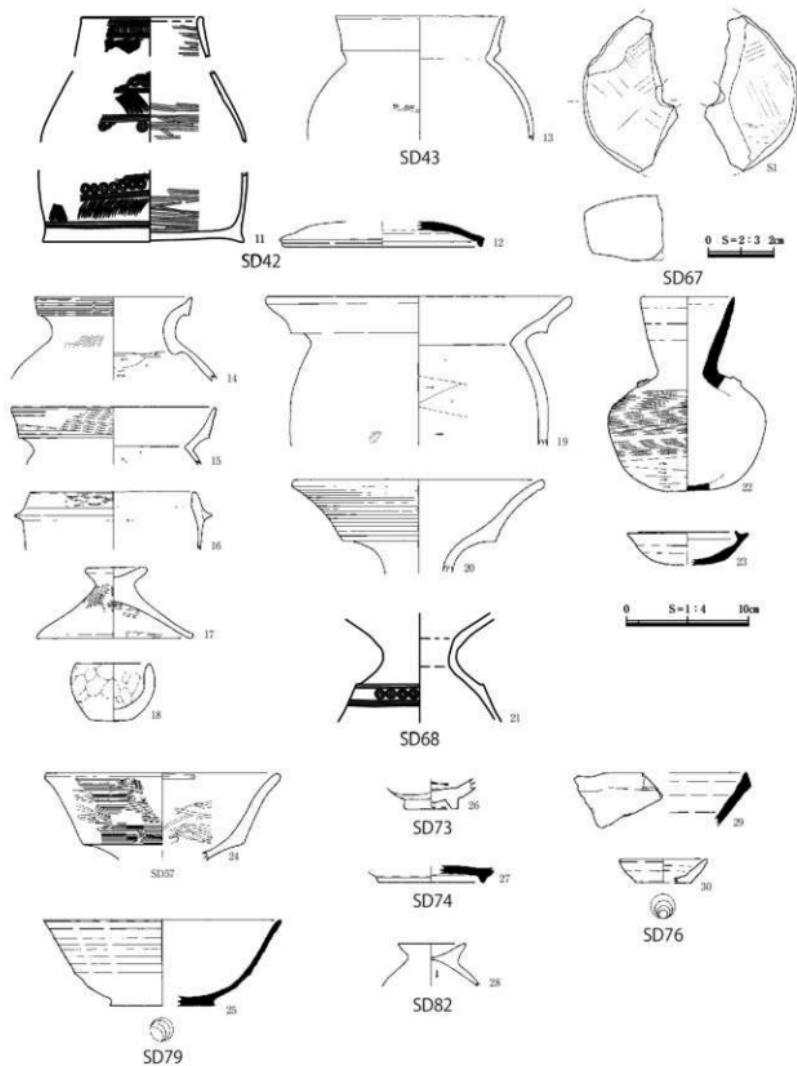
第26図 畑4 (11)



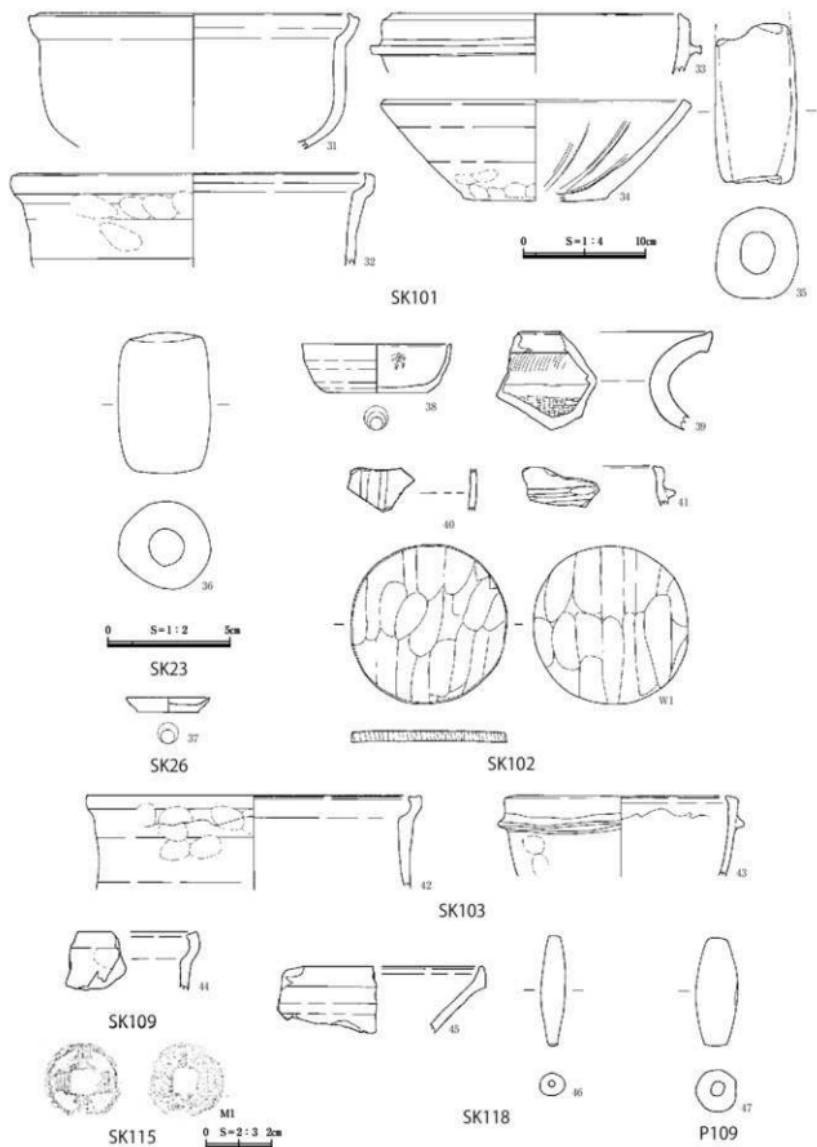
第27図 煙4 (12)



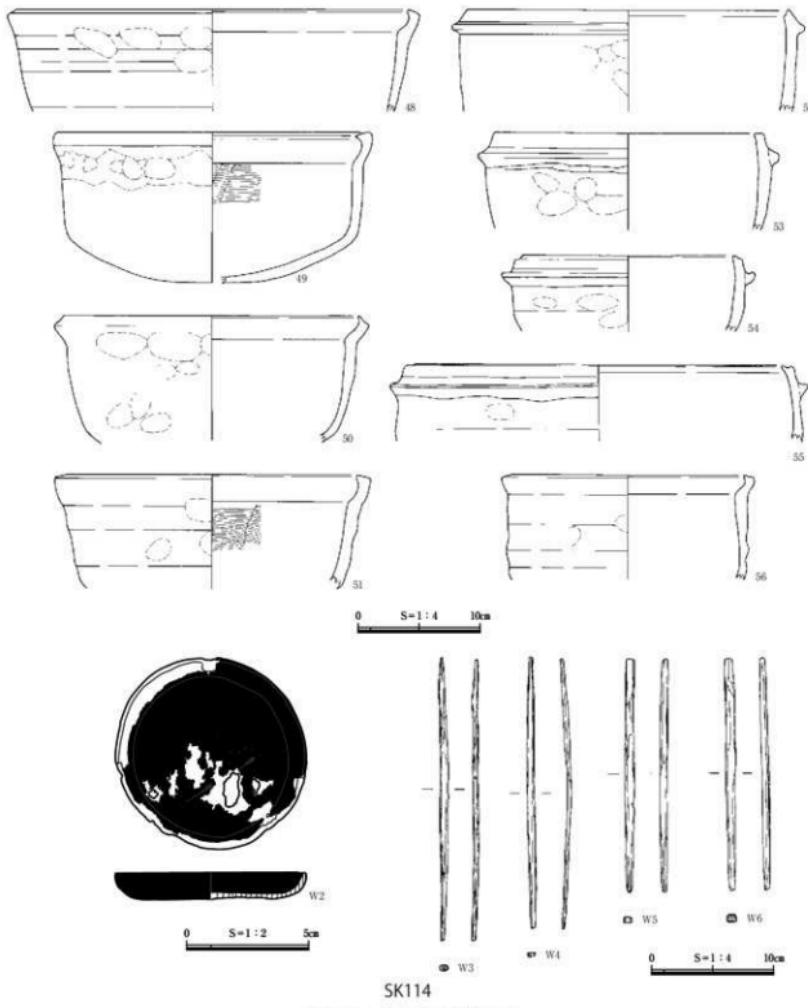
第28図 番4(13)



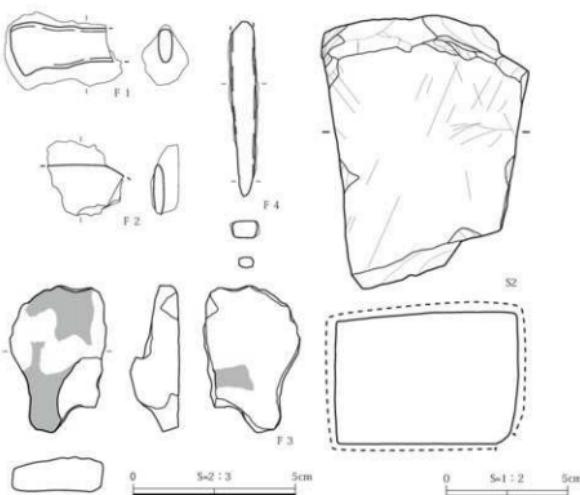
第29図 畑4出土遺物(1)



第30図 畑4出土遺物(2)



第31図 畑4出土遺物(3)



第32図 畑4出土遺物(4)

方向の33本についてみると、幅0.46m、深さ0.07m、間隔0.70mが平均である。

一方、南低地の底には比較的幅広の溝SD90・161・172が南北方向に掘られている。いずれも土坑を伴うことから集水溝の機能をもっていたものと思われる。

土坑は深さ0.7m以上の深いものばかりで、耕作溝群に混じって掘られるもの(SK134～138)の他に、溝の中に掘られるもの(SK147・148・173・174など)がある。前者からは10～11世紀の遺物が出土する。今回の調査で検出した畑の溝や土坑のうち、この時期の遺物のみを出土したのはこれらだけなので、畑の開墾は水を得やすい南低地周辺から開始されたと考えることも、当初畑ではなく井戸だけが設けられていたと考えることもできる。一方、後者からは13～14世紀の遺物が出土する。海平面の低下に関するものか、地下水位が低下して井戸だけでは栽培に必要な水を貯えずに集水溝が掘られた可能性がある。重要なものを以下に記す。

SK135(第37・39図)は1.22×1.12mの梢円形で、深さ1.03mを測り、埋土上層から内面黒色土器の壺(58)と皿(59)が出土したことから11世紀頃のものである。

SK137(第35・36・39図、巻頭図版4、PL8)は直径1.26mの円形を呈し、検出面からの深さ2.30mを測る。耕作溝近くに掘られた井戸と推定される。特筆すべきは出土遺物と堆積状況である。

まず、埋土上層の検出面から0.54mと0.60mの深さで2枚の薄い綿状の炭化物が土坑の全面に蓋をするような状態で検出された(PL8-1)。茎や種子などの明らかに植物由来のものは確認できない。

次いで、埋土中層の深さ1.0mの位置からは解体された1頭分のウマの骨と1本のイヌ科動物の足先が検出された。鳥取大学農学部獣医学科 保坂善真教授の分析によれば、ウマは3歳半前後のオスで、ミトコンドリアDNAの配列がモンゴル馬・雲馬(中国)・対州馬(対馬)と一致する(第4章1節参照)。顕著な解体痕こそ無いものの食用として解体されたものと考えられる。また、頭蓋部を欠失するのは、皮なめしに使用するために脳漿を取り出したためであろう(註3)。このウマの歯1点と上下

表5 SA1遺構一覧

遺構名	径(m)	深(m)	間隔(m)	遺構名	径(m)	深(m)	間隔(m)
SA1-P1	0.25	0.10		SA1-P5	0.22	0.09	2.2
SA1-P2	0.35	0.14	1.2	SA1-P6	0.14	0.05	0.9
SA1-P3	0.20	0.10	2.4	SA1-P7	0.18	0.05	1.6
SA1-P4	0.19	0.10	3.2	SA1-P8	0.14	0.07	2.2

表6 番5遺構一覧

※復元値 △現存値													
遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	間隔(m)	遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	間隔(m)	遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)
SD83	1.5	0.33	0.11		SD166	9.4	0.36	0.07		P116	0.20	0.20	0.22
SD85	1.6	0.40	0.08	0.5	SD167	6.1	0.38	0.04	0.5	P117	0.32	0.32	0.41
SD86	2.1	0.58	0.08	0.6	SD168	※11.7	0.64	0.10		P120	0.22	0.22	0.18
SD87	1.9	0.60	0.07	0.6	SD169	5.3	0.44	0.05	0.2	P121	0.19	0.19	0.25
SD88	7.6	0.35	0.06	0.5	SD170	2.3	0.41	0.07		P122	0.35	0.30	0.07
SD89	2.6	0.34	0.05	1.4	SD171	4.0	0.44	0.07	0.2	P124	0.20	0.20	0.19
SD90	4.8	1.12	0.19		SD172	△6.2	1.60	0.50		P125	0.20	0.20	0.06
SD91	0.7	0.31	0.04		SD174	3.5	0.36	0.03	0.4	P126	0.17	0.17	0.09
SD92	14.8	0.71	0.06	1.1	SD175	△4.6	0.75	0.05		P127	0.15	0.15	0.09
SD93	△1.6	0.31	0.07	1.3	SD176	1.8	0.42	0.05	0.2	P128	0.19	0.19	0.06
SD94	2.0	0.57	0.04		SD177	2.2	0.47	0.09	0.4	P129	0.21	0.21	0.06
SD95	3.2	0.50	0.04		SD178	1.5	0.57	0.07	1.1	P130	0.35	0.35	0.59
SD96	4.2	0.53	0.06	0.3	SD179	△5.0	0.54	0.08	0.9	P131	0.20	0.20	0.06
SD97	2.4	0.34	0.07	1.1	SK134	0.86	0.86	0.92		P132	0.20	0.20	0.22
SD98	2.4	0.38	0.10	1.1	SK135	1.22	1.12	1.03		P133	0.28	0.28	0.28
SD99	△3.6	0.53	0.06	0.3	SK136	1.05	1.05	0.95		P134	0.22	0.22	0.13
SD100	△2.7	0.52	0.10	0.4	SK137	1.26	1.26	2.30		P135	0.17	0.17	0.10
SD101	△1.7	0.38	0.08	0.8	SK147	1.08	0.96	1.30		P138	0.47	0.47	0.15
SD102	△1.8	0.35	0.04		SK148	2.64	1.85	1.36		P139	0.50	0.50	0.10
SD117	△2.8	1.45	0.06		SK170	0.87	0.87	0.55		P140	0.41	0.41	0.10
SD161	△19.7	0.86	0.22		SK171	1.70	1.04	0.40		P141	0.35	0.30	0.13
SD162	1.2	0.63	0.20		SK172	△1.02	0.86	0.38		P142	0.21	0.21	0.07
SD163	2.6	0.28	0.08	1.6	SK173	2.02	0.76	0.12		P143	0.30	0.30	0.12
SD164	4.3	0.41	0.05		SK174	0.70	0.70	0.61					
SD165	6.9	0.32	0.04	0.8	SK211	0.90	0.90	0.40					

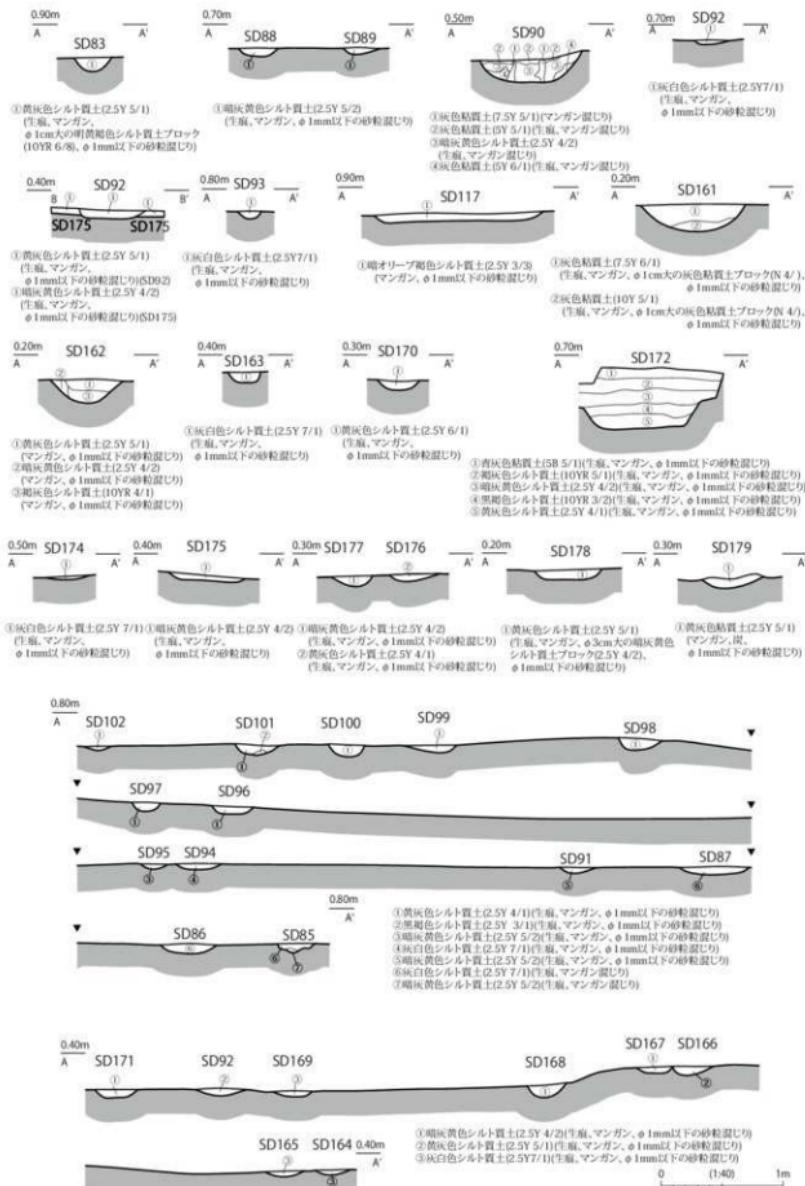
の層から出土したウリ科植物の種子2点を放射性炭素年代測定した(第4章第2節参照)。結果はウマの歯が944calAD-1020calAD、種子が890calAD-989calADと892calAD-995calADで(いずれも 2σ 暦年較正年代)、10世紀後半のものと考えてよさそうである。

さらに、埋土下層の深さ1.55m~1.86mにかけてと、最下層の2.05m付近からは、棒状の木片が多数出土した。井戸として用いられた際の蓋や枠と考えられる。この間の深さ2.0mの位置では上層と同様の薄い綿状の炭化物層が土坑内を覆っていた。上の木片の直上層からは、イスノキ製の櫛(第39図W7)と樹皮素材(W8)が出土した。樹皮素材W8は幅9.5cmの樹皮を巻物状に巻いたもの。この他にSK137からは、10~11世紀頃の須恵器(61)、土師器(62)、黒色土器(63)の小片などが出土している。

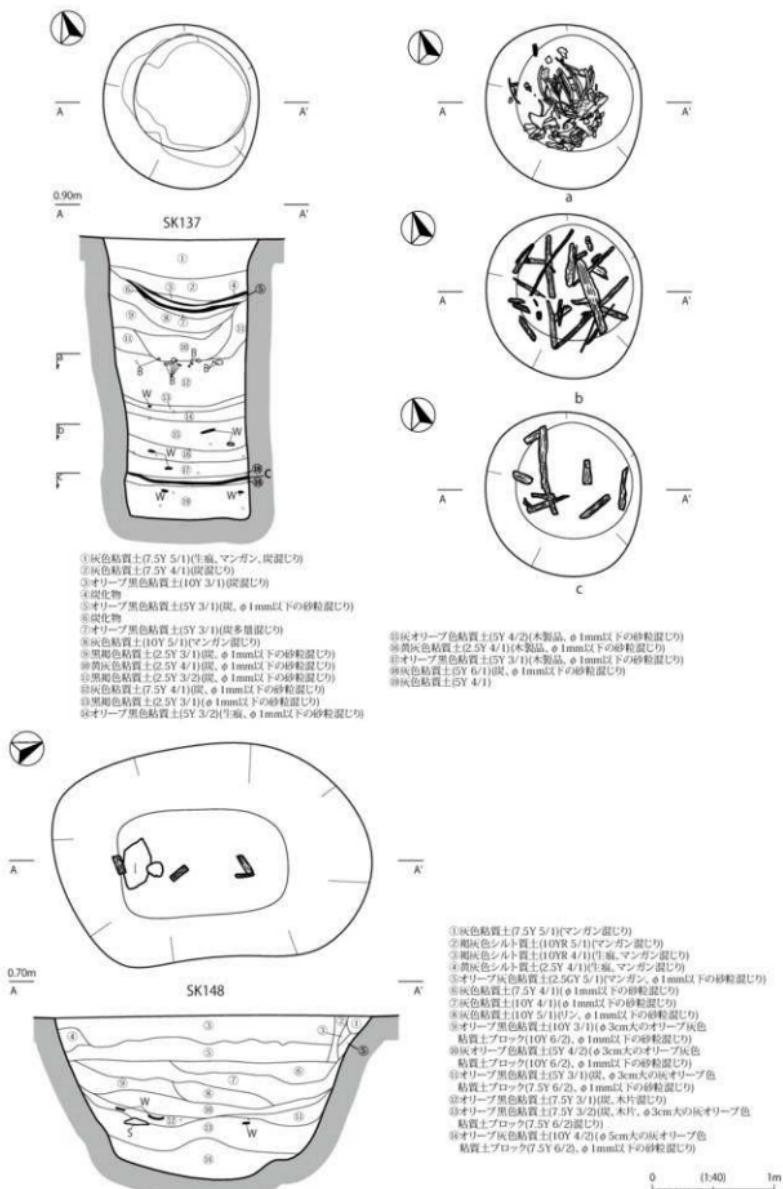
SK147(第37・39図、PL7)は1.08×0.96mの楕円形を呈し深さは1.50m、SD90の底面に掘られた土坑である。埋土上層の深さ0.5mからは、SK137と同様の綿状炭化物が検出された。さらに埋土最下層からはウマの歯が1本出土しており、SK137との類似性を窺わせる。しかし、埋土最下層から出土したのは13~14世紀頃の瓦質土器の鍋(第39図65)と土錐(66)で、年代的には大きな開きがある。もし、SK137で行われたような解体したウマの埋納に祭祀的な側面を想定できるならば、かつてウマ1頭を必要とした祭祀が、300年後にはウマの歯1本で済むように変化したと考えることも可能かもしれない。SK147最下層からは3点の蝶とともに2枚の板が出土している(W9)。この2枚には対応する位置に穴が開けられているので、紐で縫じて井戸の底板か蓋に用いられたものであろう。



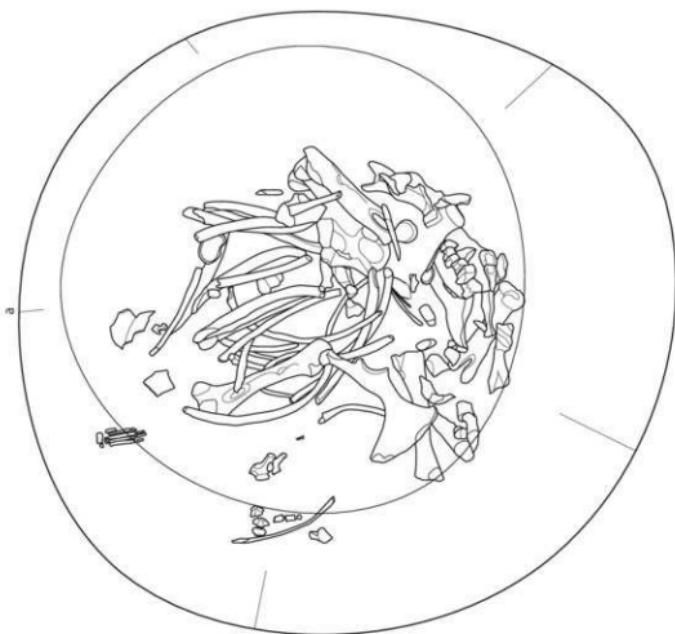
第33図 番5(1)



第34図 煙5(2)



第35図 番5(3)

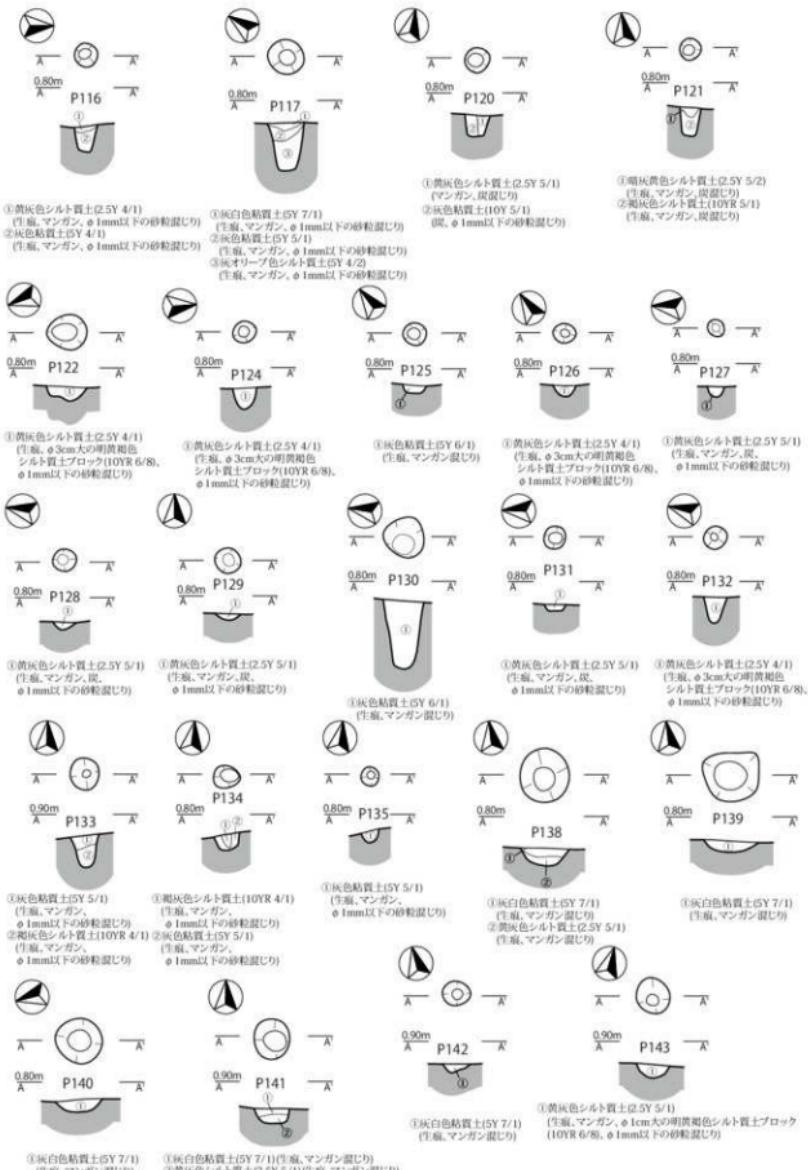


第36図 番5(4) SK137歎骨出土状況(1/10)

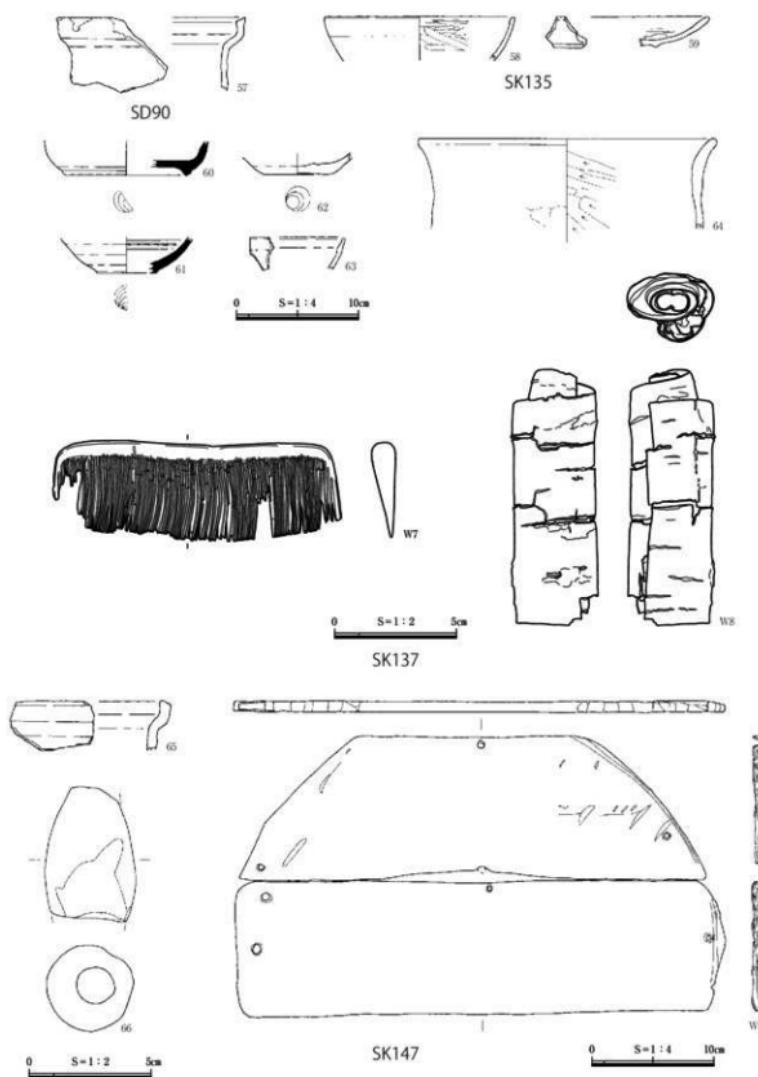




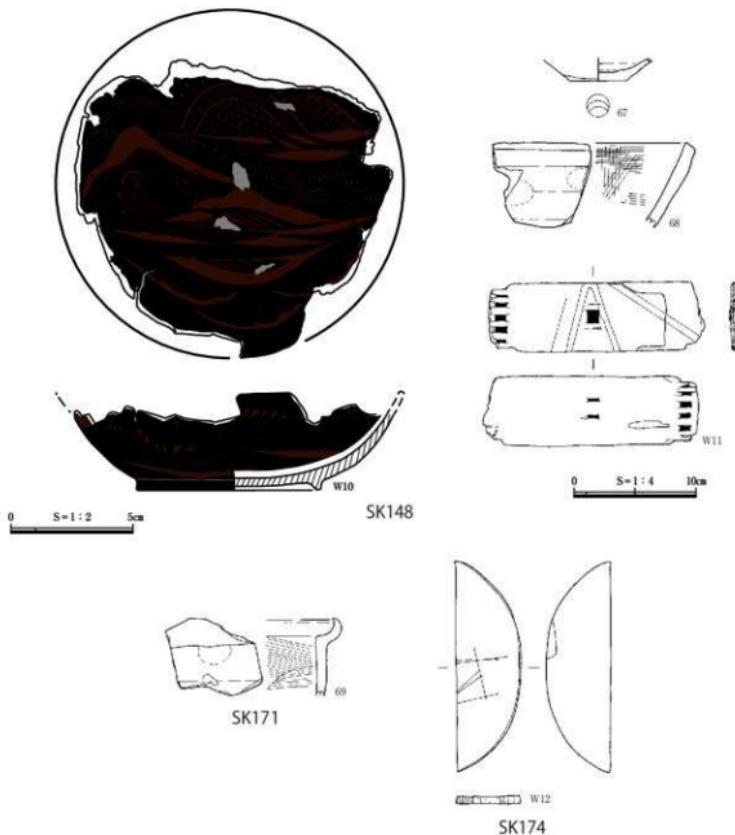
第37図 畑5(5)



第38図 煙5(6)



第39図 畑5出土遺物(1)



第40図 煙5出土遺物(2)

SK148（第35・40図、巻頭図版5、PL 7）は、 $2.64 \times 1.85\text{m}$ の梢円形を呈する大型の土坑で、深さは 1.36m を測る。SD172の底面から掘られている。埋土下層からは漆器皿（第40図W10）が出土した。径 14.3cm 、厚さ 4mm の精巧なもので、内外面に黒漆を塗った上に、外面には朱漆で菊花を、内面には朱漆と紫色の漆で水鳥、菊花、籠など秋の水辺の風景を流麗な筆致で描く。13世紀頃の高級品であろう。この他に、土師皿(67)、瓦質土器擂鉢(68)、鎧で平らに展ばされた曲物側板の破片(W11)が出土している。また、調査区内で最多となる33個の桃核が出土した。

烟6（第41～44・49図、表7、PL 9）

調査区南西のK10からM10グリッドを中心とする烟跡。先述のように本来烟5と同一の烟であった可能性がある。溝33条、土坑10基、ピット4基からなる。溝は南北に走るSD121と129以外は東西方向で、区画溝や排水溝とみられるものはない。検出面での標高 0.75m と比較的高い位置にあるため、

後世の削平等によって溝の残りは良くなく、平均値は、幅0.34m、深さ0.07m、間隔1.20mである。密集するSD105～111の間隔は平均0.50mしかない。

土坑は他の畠に比べて大型のものが目立ち、特にSK139は265×223m、深さ1.00mと大きい。底面には30cm大の蝶が3個並べられており、貯蔵穴であろうか。

SK152は径0.95mの円形で深さ1.08mを測る。埋土からは大型の曲物の側板片(第49図W13・14)のほか、樹皮素材(W15)が出土した。1cm幅にカットした巻物状の樹皮を引き出しながら使用している途中のもので、曲物の綴じに用いたものであろう。先述のSK137出土の樹皮素材(第39図W8)は、このようにカットして使うための母材と考えられる。

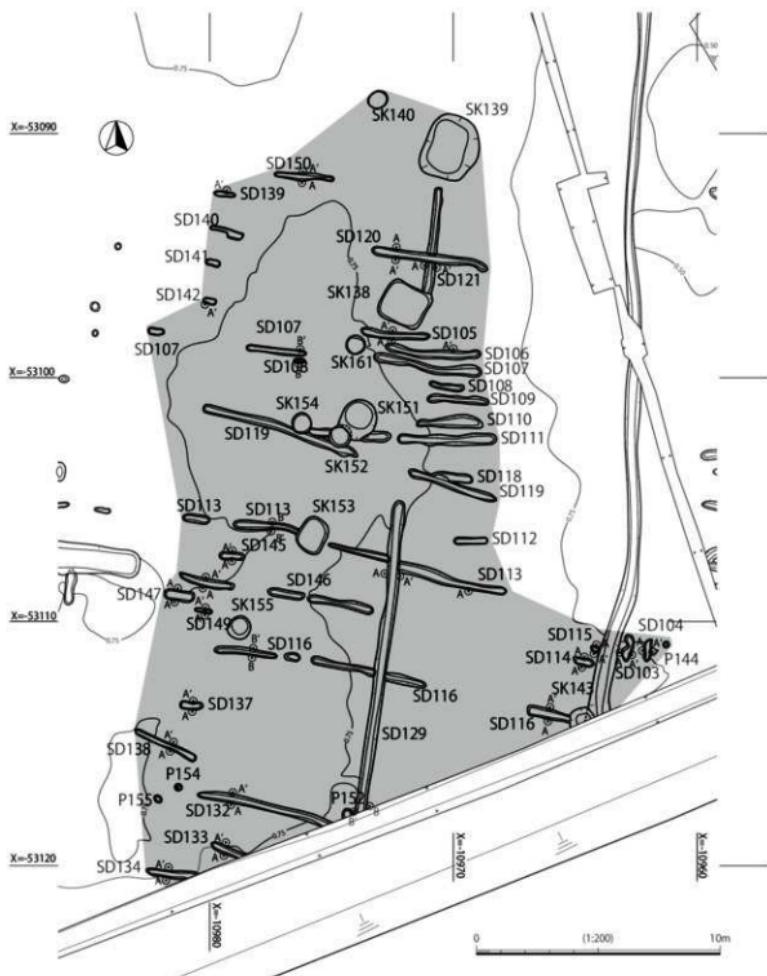
SK155からは柄杓(W16)が出土している。径17cmの特大の柄杓で、柄を差し込む穴が対向する2箇所に開けられている。柄から外れて落ちたものと考えられ、土坑が井戸として用いられたことを示している。

SK151から出土した青磁碗破片(72)の年代から13～14世紀の畠跡である。

SK116からは鉄鎌が出土している(F5)。径約1mmの孔を2カ所所有する無茎式の鉄鎌である。形状から弥生時代に帰属する可能性が高いと考えられる。

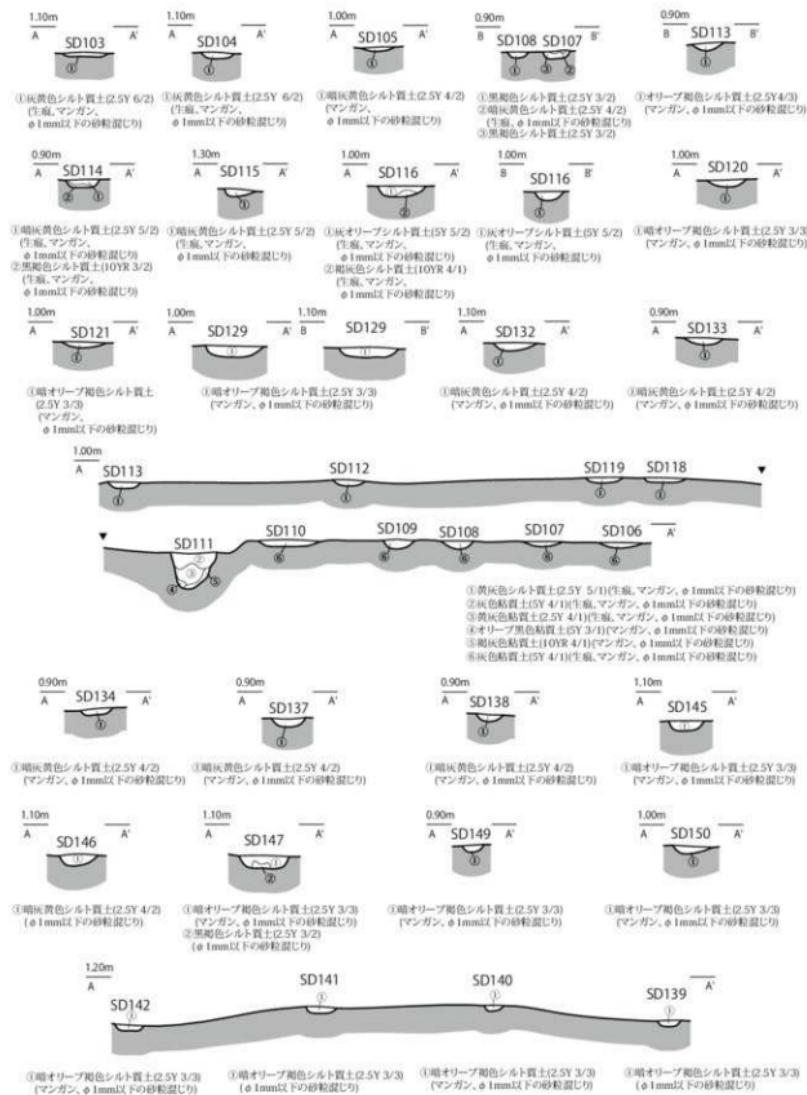
表7 畠6遺構一覧

遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	間隔(m)	遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	間隔(m)	遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	※復元値	△現存値
SD103	1.2	0.40	0.04	0.4	SD121	4.4	0.42	0.05		SK139	2.65	2.23	1.00		
SD104	0.9	0.31	0.05		SD129	△13.0	0.50	0.10		SK140	0.83	0.73	0.72		
SD105	2.9	0.35	0.04	0.4	SD132	△5.7	0.38	0.06	1.9	SK143	1.08	0.60	0.24		
SD106	4.0	0.38	0.04	0.4	SD133	△1.5	0.33	0.06	1.0	SK151	1.70	1.42	1.27		
SD107	※13.8	0.24	0.05	0.4	SD134	△2.1	0.33	0.05		SK152	0.95	0.95	1.08		
SD108	※7.2	0.28	0.06	0.3	SD137	0.9	0.30	0.06	1.5	SK153	1.57	1.16	0.25		
SD109	2.6	0.33	0.07	0.5	SD138	2.8	0.31	0.06		SK154	0.87	0.87	1.22		
SD110	2.7	0.53	0.06	0.4	SD139	0.9	0.23	0.05	1.2	SK155	0.96	0.96	1.16		
SD111	※7.8	0.30	0.29	1.1	SD140	1.4	0.34	0.05	1.0	SK161	0.78	0.78	0.66		
SD112	1.4	0.30	0.06	2.2	SD141	0.6	0.28	0.06	1.3	P144	0.25	0.25	0.07		
SD113	※13.7	0.50	0.05	1.8	SD142	0.5	0.25	0.04		P152	0.42	0.35	0.08		
SD114	0.9	0.34	0.07	0.4	SD145	1.1	0.32	0.09	0.9	P154	0.40	0.40	0.09		
SD115	0.4	0.27	0.07		SD146	※8.1	0.36	0.09	2.2	P155	0.36	0.29	0.06		
SD116	※14.9	0.42	0.10	2.1	SD147	1.2	0.44	0.11	0.4						
SD118	1.6	0.38	0.04	2.2	SD149	0.7	0.18	0.06	0.8						
SD119	※12.6	0.32	0.06	3.4	SD150	2.5	0.32	0.06							
SD120	4.8	0.40	0.06	3.0	SK138	1.90	1.66	0.45							



第41図 煙6(1)

第3章 発掘調査の成果



第42図 畑6(2)



第43図 煙6(3)

畑7(第45・46・49図、表8、PL9)

調査区南西隅のK11・12グリッドからM11・12グリッドを中心とする煙跡で、12条の溝と5基の土坑、4基のピットで構成される。溝は主に南北方向で、主な7条の平均値は、幅0.46m、深さ0.11m、間隔1.30mとなる。土坑は3基が深く、SK163からは瓦質の擂鉢片(第49図74)や編みカゴの破片が出土している。

畑8(第47・49図、表9、PL9)

調査区北西隅のH12・13グリッドとI12・13グリッドで検出した畑で、北側調査区外に主要部分があるとみられる。調査区内には6条の溝と4基の土坑が含まれる。少し距離があるため除外したが、SD130と143(第53図)もこの畑に含まれる可能性がある。溝は主に南北方向で、幅0.31m、深さ0.04mと小規模だが間隔は2.30mと広い。SD124・126・128の3条は、律令期頃に掘られ一部が中世前期まで存続したSD27の埋没後に設けられている。土坑はいずれも大きくて不整形で、耕作溝を切るものがあるので、畑の廃絶後に掘られた土取穴かもしれない。SK158から出土した瓦質羽釜(第49図75)が耕作溝からの混入でなければ、これらの土坑と畑との間には大きな時期の隔たりはないことになる。

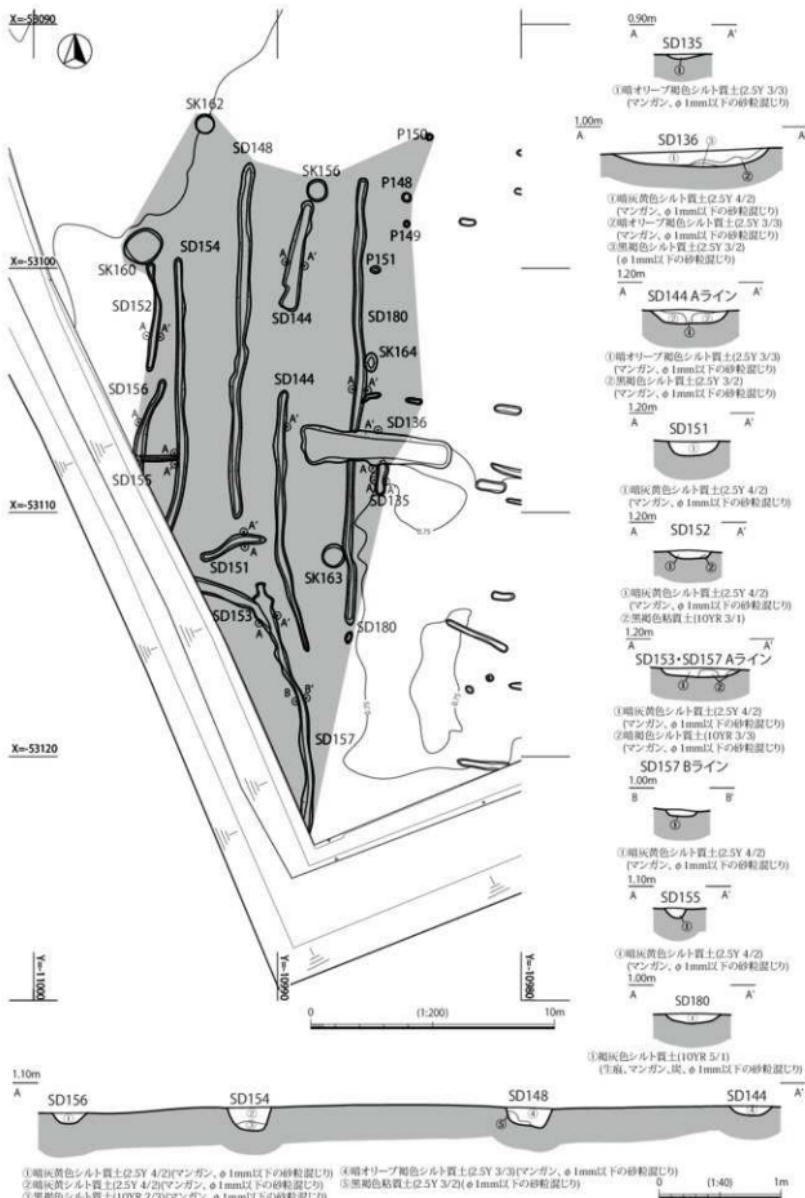
3 畑外の遺構(第50～57図、表10、PL10)

畑1～8の範囲から外れる場所からも若干の遺構が検出されている。

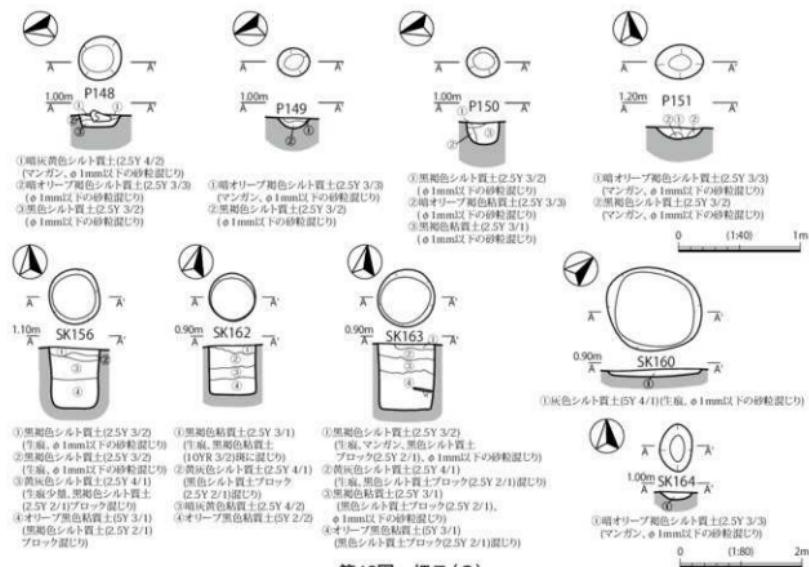
11条の溝のうち8条は耕作溝と同類の幅が狭く浅いものである。残る3条のうち、SD40(第52図)は畑4の北を東西に走るもので、北側には後述する土坑群があるので、それと畑4との区画溝として機能した可能性がある。埋土から瀬戸焼の天目碗片(第50図77)が出土している。SD50(第52図)はE2グリッドからF4グリッドまでS字状に蛇行する特異な形状の溝。畑2のSD11や畑4のSD42の終点になっていることから、2つの畑の境界として掘られたものだろうか。SD84(第54図)はほぼ9ラインに沿って調査区を縦断する長い溝で、SD27の埋没後に掘られ、畑6よりは新しい。中世後期以



第44図 畑6(4)



第45図 煙7(1)



第46図 畑7(2)

表8 畑7遺構一覧

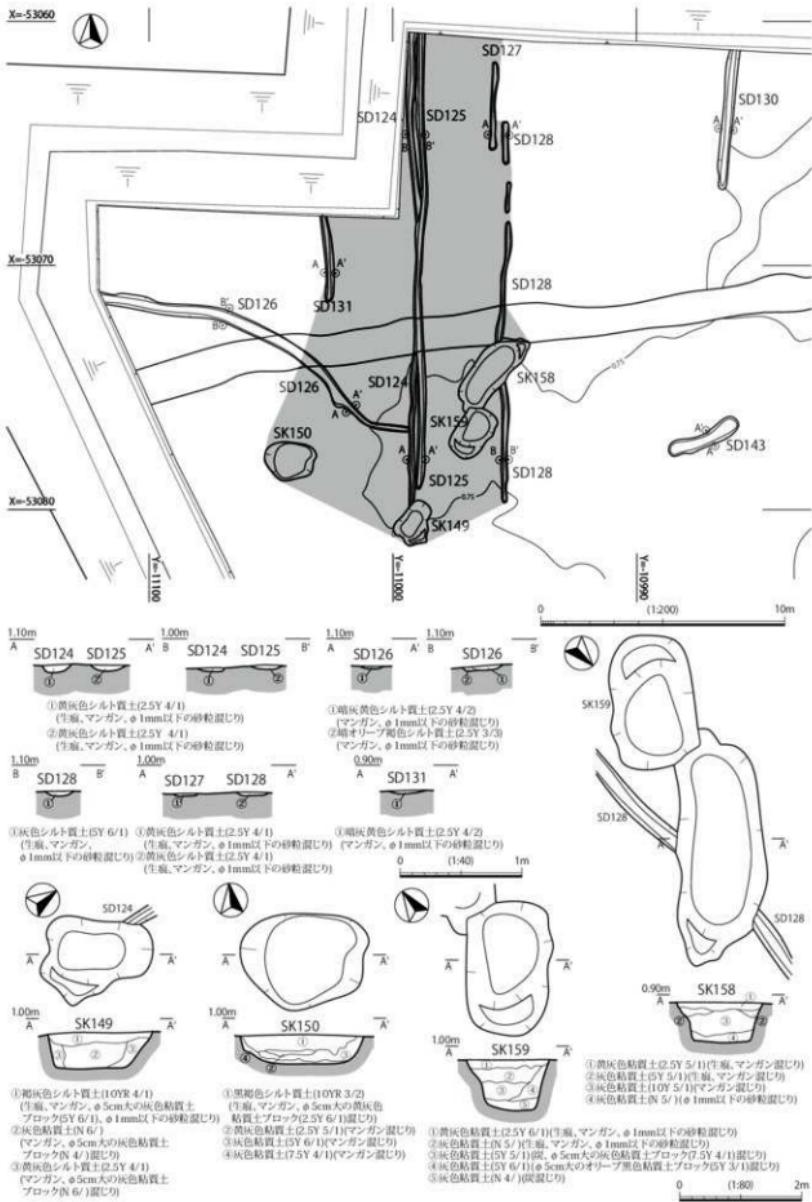
遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	間隔(m)	遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	間隔(m)	遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)
SD135	1.2	0.43	0.04	0.8	SD154	△11.3	0.42	0.19		SK162	0.76	0.76	0.80
SD136	6.2	1.38	0.14		SD155	△1.8	0.23	0.10		SK163	0.94	0.94	1.08
SD144	※18.5	0.74	0.11	1.5	SD156	△3.9	0.48	0.10	0.7	SK164	0.78	0.54	0.13
SD148	14.6	0.42	0.16	1.8	SD157	△10.5	0.36	0.06	0.7	P148	0.38	0.38	0.11
SD151	2.7	0.45	0.11		SD180	18.4	0.46	0.09	2.6	P149	0.28	0.28	0.09
SD152	4.4	0.36	0.07	0.6	SK156	0.90	0.90	0.98		P150	0.28	0.28	0.19
SD153	△3.9	0.60	0.06		SK160	1.62	1.36	0.12		P151	0.41	0.30	0.10

表9 畑8遺構一覧

遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	間隔(m)	遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	間隔(m)	遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)
SD124	△19.4	0.28	0.06		SD127	3.6	0.29	0.02	0.3	SK149	1.92	0.94	0.60
SD125	△18.8	0.33	0.05	3.2	SD128	※15.6	0.28	0.04		SK150	2.07	1.41	0.48
SD126	△14.3	0.57	0.02		SD131	△3.5	0.35	0.03	3.3	SK158	3.90	1.47	0.65
										SK159	2.21	1.34	0.73

表10 畑外遺構一覧

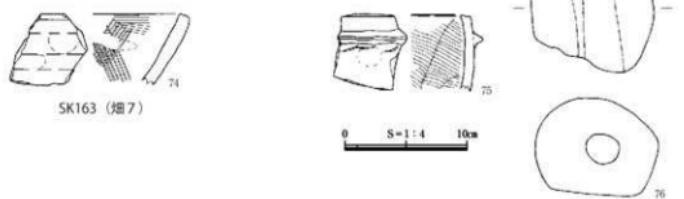
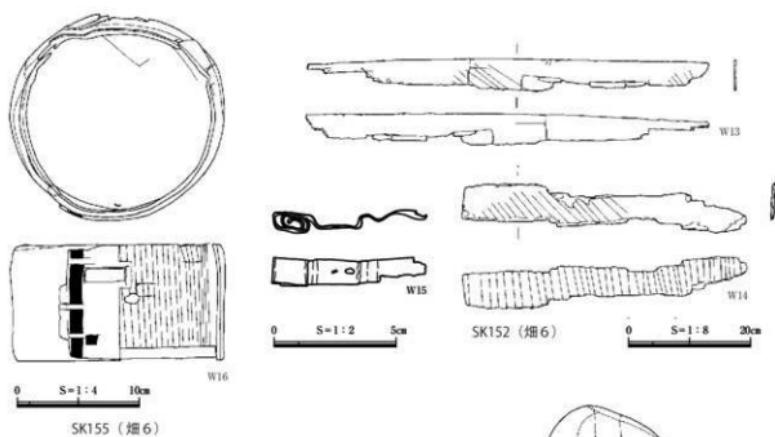
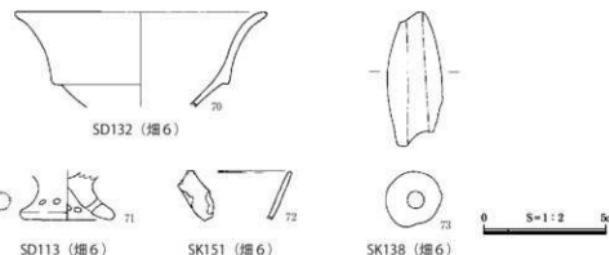
遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	※復元値	△現存値
SD30	3.3	0.44	0.04	SK17	0.80	0.76	0.84	SK157	1.50	1.08	0.16		
SD35	△0.9	0.50	0.02	SK18	0.85	0.82	1.20	SK165	△1.20	1.10	0.15		
SD39	△0.6	0.38	0.05	SK19	2.29	1.36	0.40	P2	0.62	0.56	0.32		
SD40	△21.0	1.50	0.25	SK20	1.67	1.51	0.96	P3	0.68	0.60	0.30		
SD48	△1.4	0.26	0.02	SK25	0.83	0.78	0.07	P6	0.34	0.32	0.09		
SD50	△44.2	1.24	0.35	SK27	△1.75	0.80	0.12	P7	0.72	0.56	0.32		
SD62	2.6	0.63	0.07	SK59	△3.65	0.84	1.15	P8	0.60	0.58	0.74		
SD84	△51.6	0.54	0.30	SK112	0.73	0.43	0.35	P48	0.47	0.40	0.11		
SD122	※1.3	0.40	0.03	SK113	0.56	0.56	0.06	P59	0.21	0.21	0.08		
SD130	△1.8	0.49	0.03	SK120	0.65	0.42	0.18	P79	0.21	0.21	0.07		
SD143	1.6	0.72	0.06	SK141	0.72	△0.40	0.94	P83	0.20	0.20	0.06		
SK13	1.16	0.85	0.17	SK142	0.82	0.75	0.90	P145	0.43	0.35	0.21		
SK14	0.76	0.70	0.32	SK144	0.50	0.50	0.14	P146	0.43	0.38	0.15		
SK15	1.09	0.91	1.00	SK145	0.80	0.80	0.93	P147	0.25	0.25	0.10		
SK16	0.69	0.66	0.45	SK146	0.48	0.48	0.15						



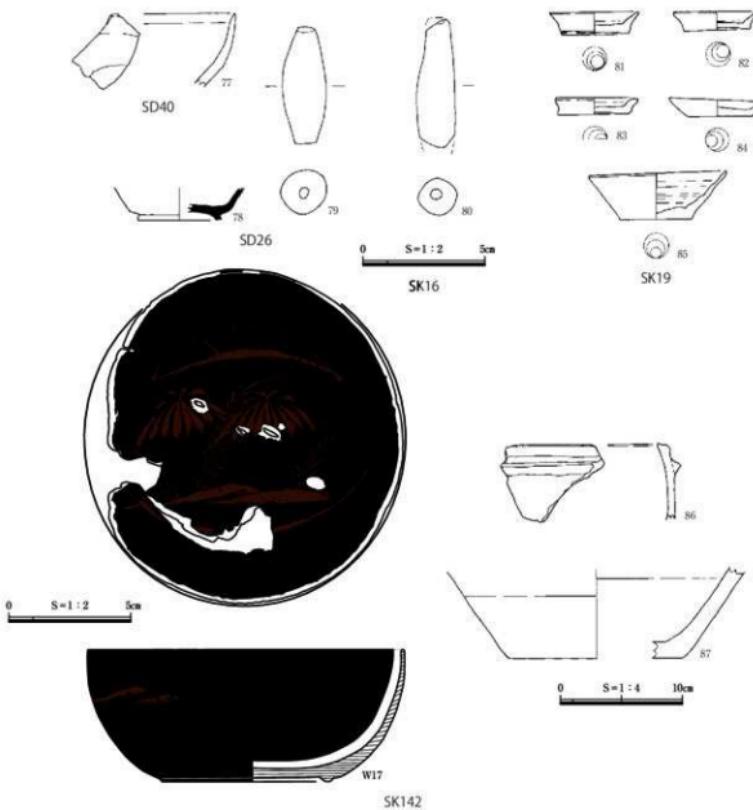
第47図 煙8



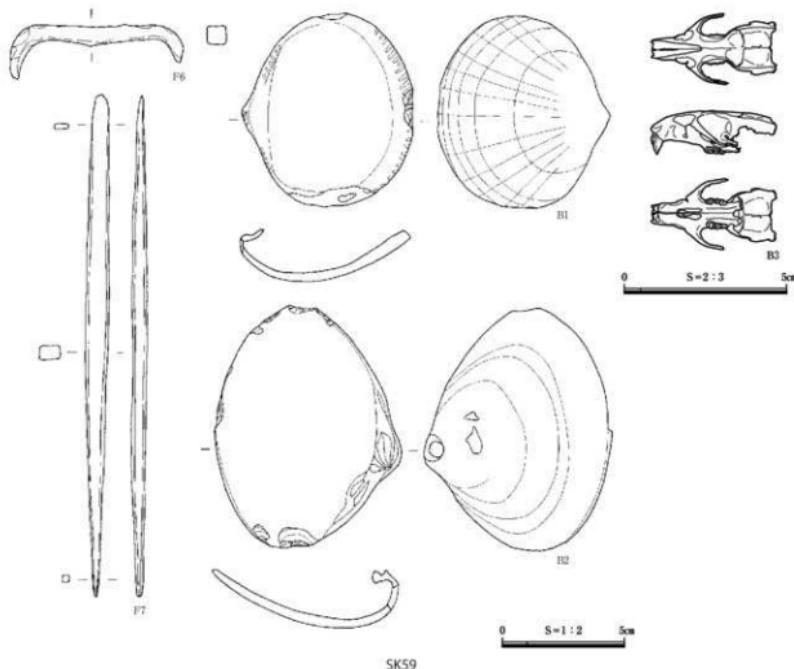
第48図 煙6出土遺物



第49図 煙6～煙8出土遺物



第50図 煙外遺構出土遺物(1)

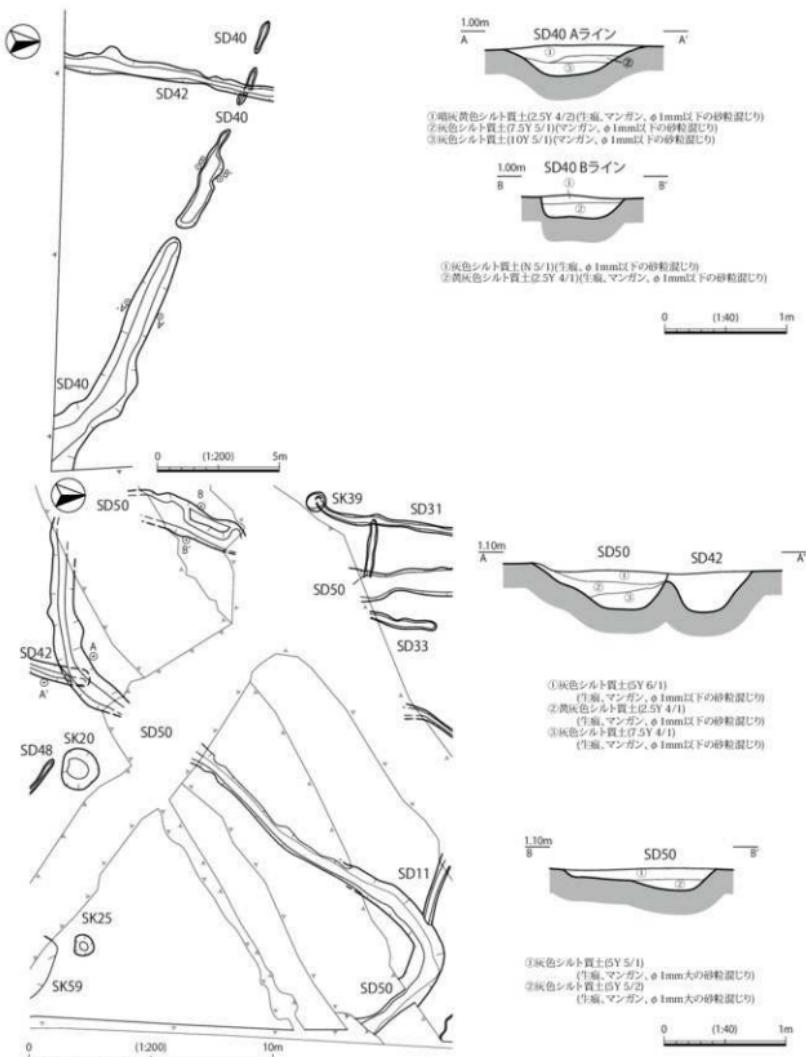


第51図 畑外造構出土遺物(2)

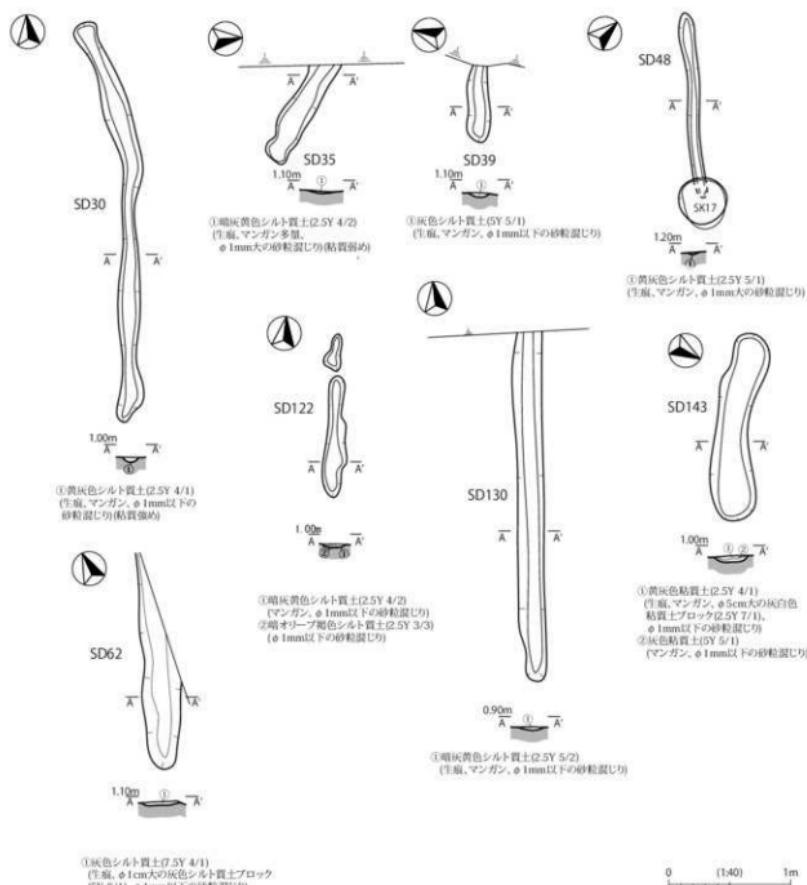
降の道路側溝の可能性がある。

畠外の土坑21基のうち、10基(SK13~20・25・59)はSD40とSD50の間にまとまり、深さ1m前後の深いものが5基、浅いものが5基ある。SK19(第50・59図、PL10)は後者に属し、 $2.29 \times 1.36\text{m}$ の長方形を呈し深さ0.30mを測る。底面近くから多量の木片と炭化物に混じって13世紀頃の5枚の土師皿(81~85)が出土した。廃棄土坑と考えられる。一方、SK59(第51・55図、PL10)は前者の例で、現代の攪乱によって半分を失っているが径3.65m以上、深さ1.15mの大型の廃棄土坑で、埋土からは大量的シジミや木片とともに、鉄製品や動物遺体が出土した(第51図)。F6は鉄製の鎌である。F7は一見笄にも見えるが、断面四辺形で一端を針状にもう一端を刃状に形成することから鉄製工具で、けがき針のようなものであろう。B1とB2は二枚貝で蝶番部にツメガイが開けた穴があることから食用として搬入されたものではない。どちらも長軸上の両端と短軸上の一端に剥離や磨滅がある。貝杓子の部品と考えたい。B3はクマネズミの頭骨(註4)。残りが良く攪乱からの混入の可能性も否定できないが、念のため図示する。このように明らかな廃棄土坑がまとまっている場所は畠1~8の内部にはないことから、土地利用に一定の約束事があったことが窺える。

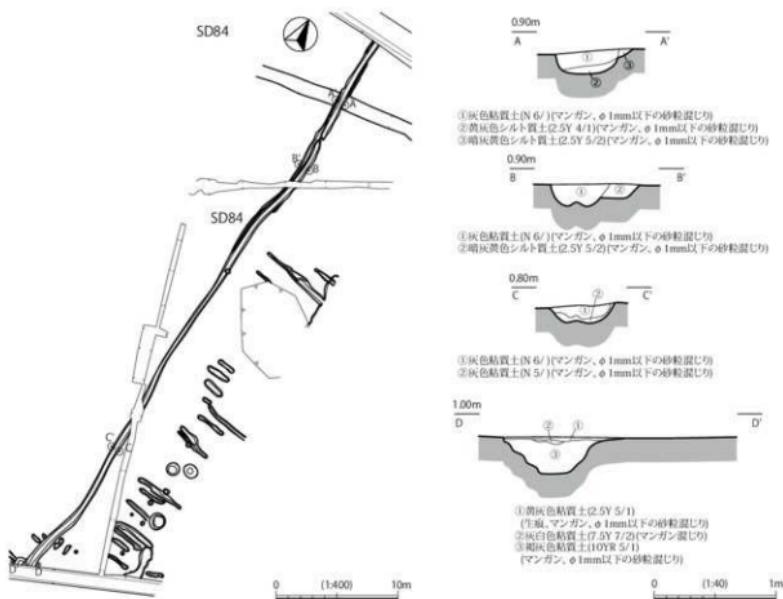
他方H7・H8グリッドには3基の井戸跡がまとまる(第55・56図)。このうちSK142からは瓦質羽釜(第50図86)や越前焼の捏鉢(87)とともに内面に菊花を描く漆器碗(W17)が出土している。



第52図 煙外遺構(1)



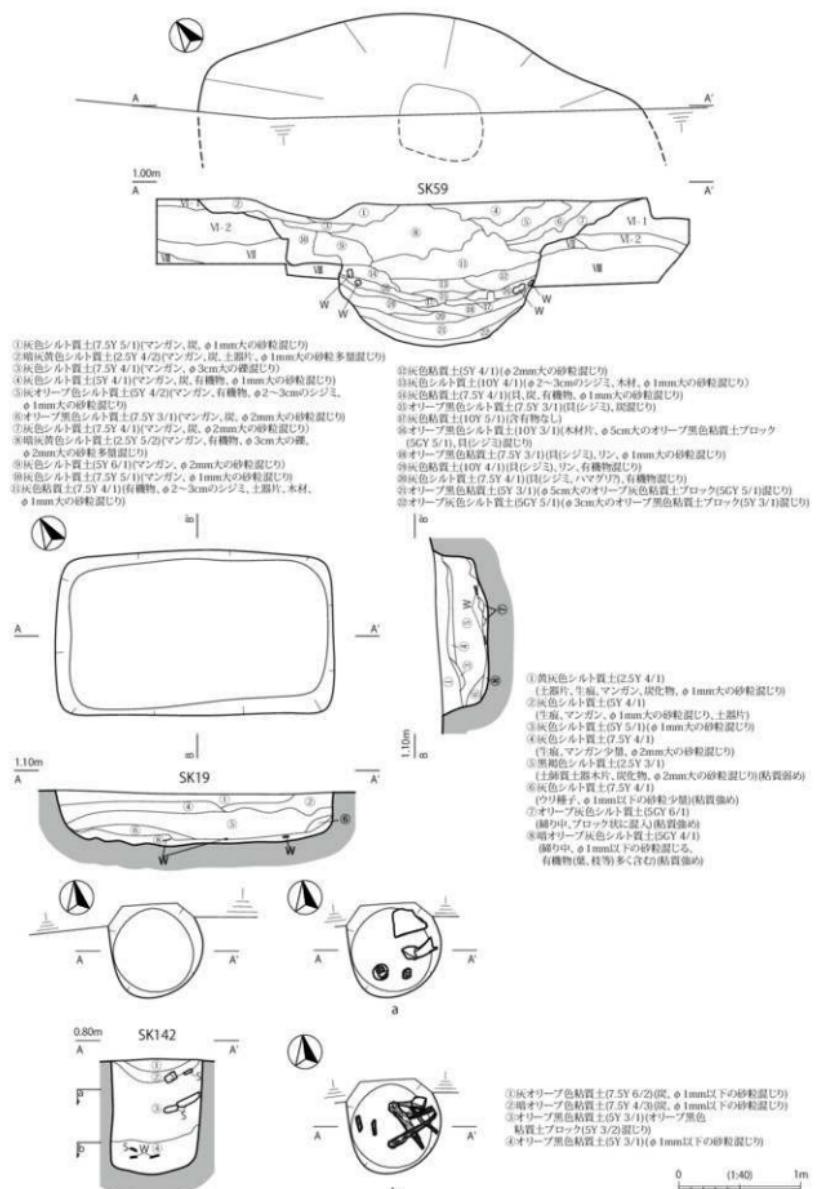
第53図 番外遺構(2)



第54図 畑外遺構(3)

4 第1包含層およびその上層出土遺物(第58図・第59図)

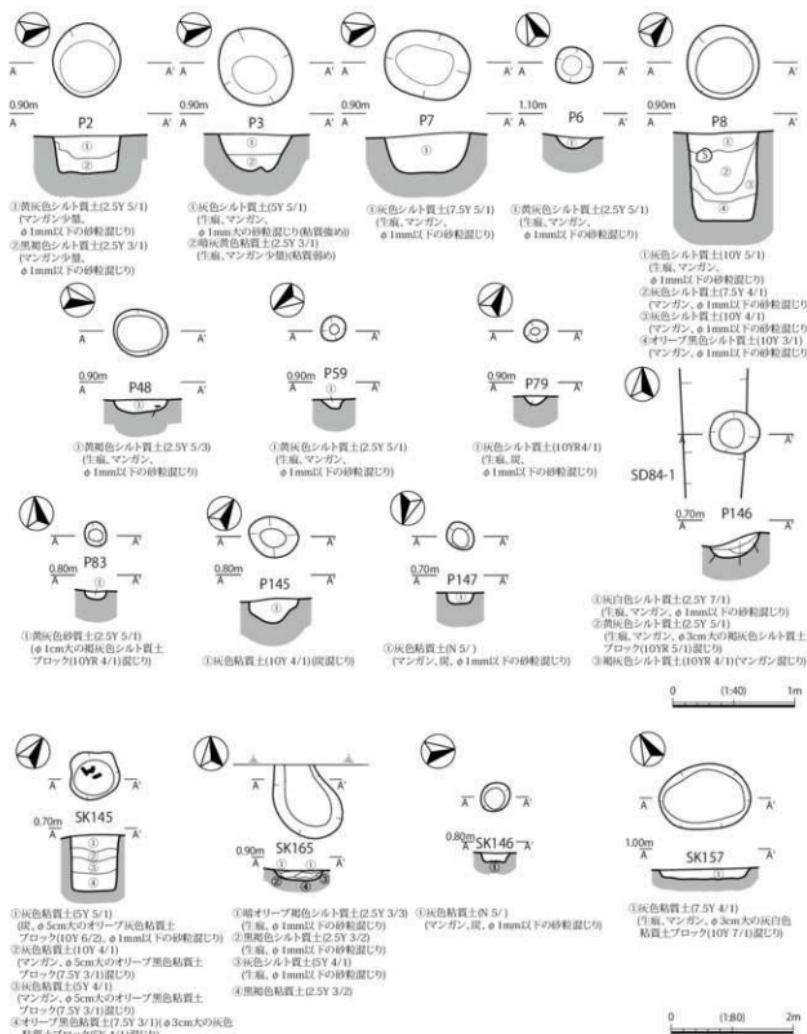
第1包含層(IV層)とその上層からの出土遺物は、畑という性格上多くはない。II層からIII層にかけてでは、少量の古墳時代後期から律令期の須恵器と土師器(88~91)が出土しているが、IV層から中世の遺物が出土することを考えると耕作等によって巻き上げられたものである。IV層からは輸入陶磁器(94~99)や土錘(101~103)が出土した。この中には青磁壺(94)や青磁大皿(95)のように高級品と考えられるものが含まれる。特殊なものとしては、褐釉陶器の耳部(98)がある。SK102出土の体部片(第30図40)と同一器片であろう。97は白磁の菊皿。99は朝鮮陶器で鶴首壺の肩部破片。鼠色の胎土に彫刻を施し白泥を化粧掛けして象嵌とする。いずれも小片ではあるが、畑の中からでさえこのように多様な輸入陶磁器が出土することは、中世の三嶋社集落の繁栄と、鳥取平野の玄関口としての財物の集散地という特殊な性格を表すものと評価できよう(註5)。鉄製品(第59図)は7点が出土しており、刀子(F8)や鉄鎌(F10)のはか板状・塊状・棒状の鉄材(F9・F10・F12)がある。F13・F14については大きさ、形状から鉄斧の可能性がある。それぞれの時期については判然としないが、土器と同様に古墳時代から律令期の遺物が含まれていると考えられる。



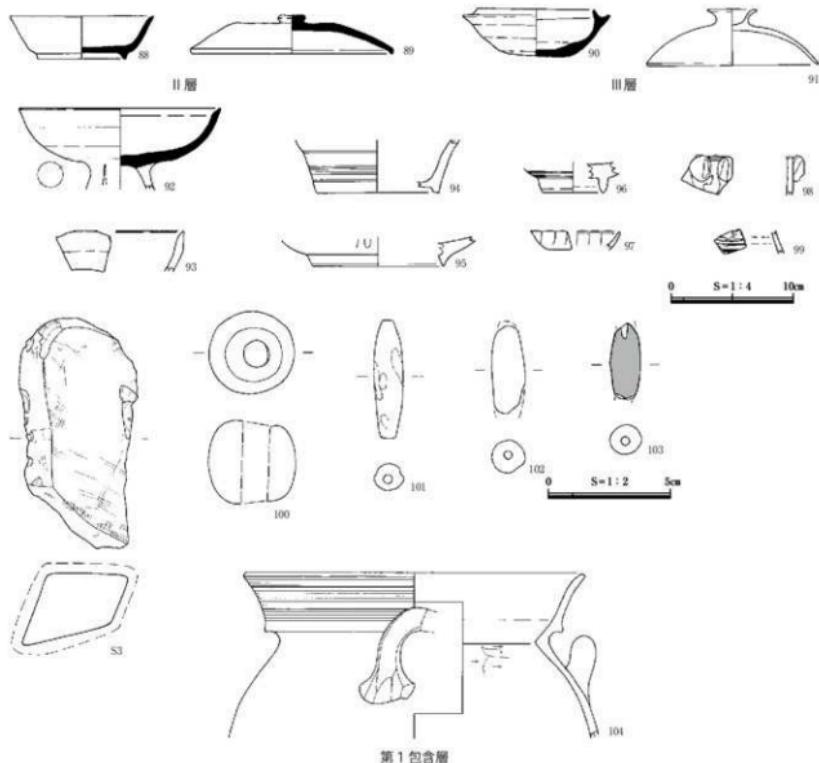
第55図 番外遺構(4)



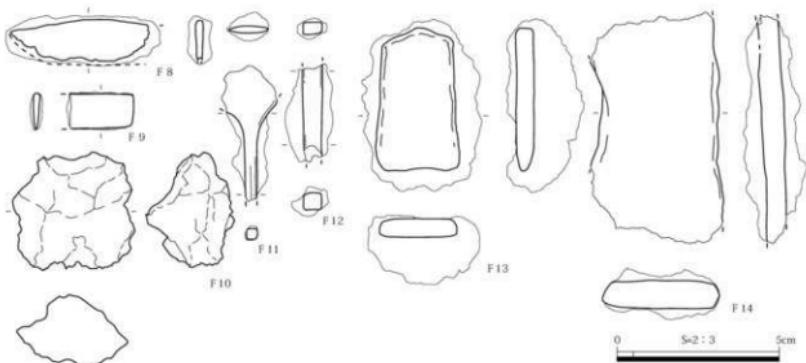
第56図 番外遺構(5)



第57図 番外遺構(6)



第58図 第1包含層およびII・III層出土遺物



第59図 第1包含層出土遺物

第3節 第2遺構面

1 概要(第60図)

第2遺構面は古墳時代後期から律令期の包含層であるV層を除去した面で検出した。調査区東部の5ライン以東では概ねVI層上面が対応し、VI層以上の堆積が薄いか確認できない5ライン以西では基盤粘土層であるVII層上面が対応する。検出面は調査区内の微地形によってまちまちということになるが、遺構埋土上層に、V層相当のマンガンを多量に含む明褐色シルト質土が含まれることから、識別は容易である。従って本来はV層中に遺構の掘り込み面が存在するはずである。

この面に属する遺構は非常に少なく、溝2条、土坑14基、ピット8基に過ぎない。分布も東と西の微高地に偏っている。長大な区画溝SD27を除いては特徴的なものもない。V層が形成された時期は海水面の上昇した時期に当たり、調査区内はほぼ無人の状態であったことが関係するであろう。

2 溝

SD27 (第61図、PL12)

調査区北西のF5グリッドからI13グリッドまで伸びる総延長136mの長い溝で、両端は調査区外に続いている。H5グリッドにおいて111°の角度で曲がり、B5グリッドからH5グリッドまでは南北方向(N-9°-E)、H5グリッドからI13グリッドまでは東西方向(W-8°-S)に走る。幅1.15~1.53m、深さ0.52~0.75mを測る。底面の標高は概ね北が高く南と西が低い。西微高地を縁取るように設けられていることから、何らかの区画溝であると考えられる。南北方向部分のA・B断面では底面付近で砂がラミナ状に堆積して水流があったことを窺わせる。一方、中層では炭化物ばかりになるので一度水流が途絶え、砂粒を多く含むようになる上層で再び水が流れたようである。東西方向部分(C~F断面)では上層での水流の復活はなかったとみられるので、南北部分のみが溝として機能した時期があり、畠2との関係から中世前期のことと推定される。畠2とはほぼ同時期に属する畠8の耕作溝がSD27東西部の埋没後に掘られていることもこの推定を補強する。

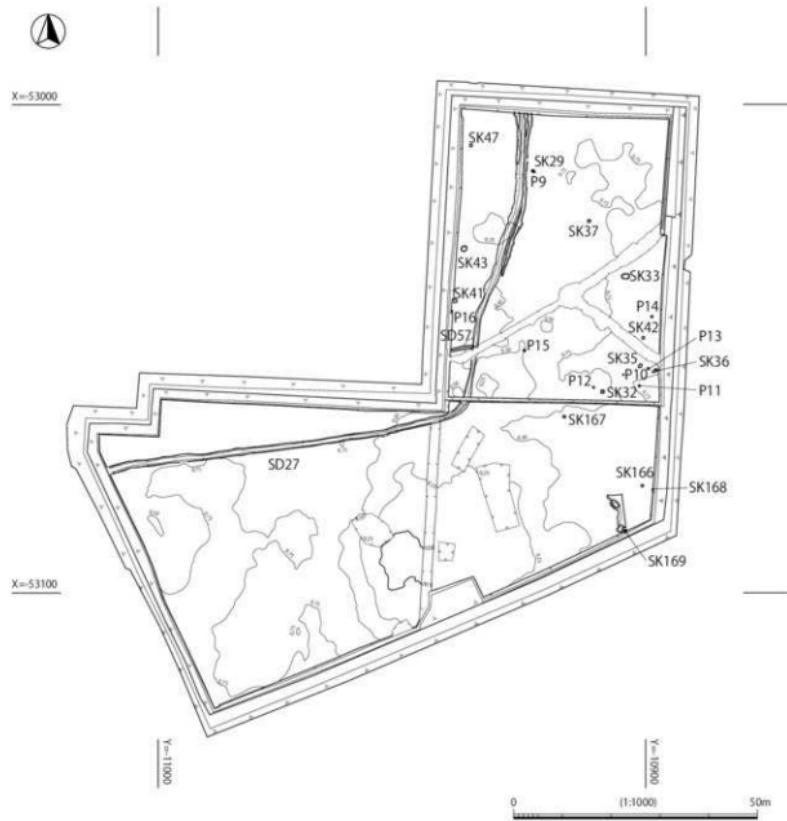
出土遺物は少なく、本来下層に属していたものが中心である(第63図)。その中で、他にはほとんど出土していない5世紀頃の土師器の甕105はSD27が掘られた時期を示す可能性があるが、第2包含層から主に出土する遺物の時期を参照して、現時点では律令期の遺構と捉えておきたい。

SD57 (第61図、PL13)

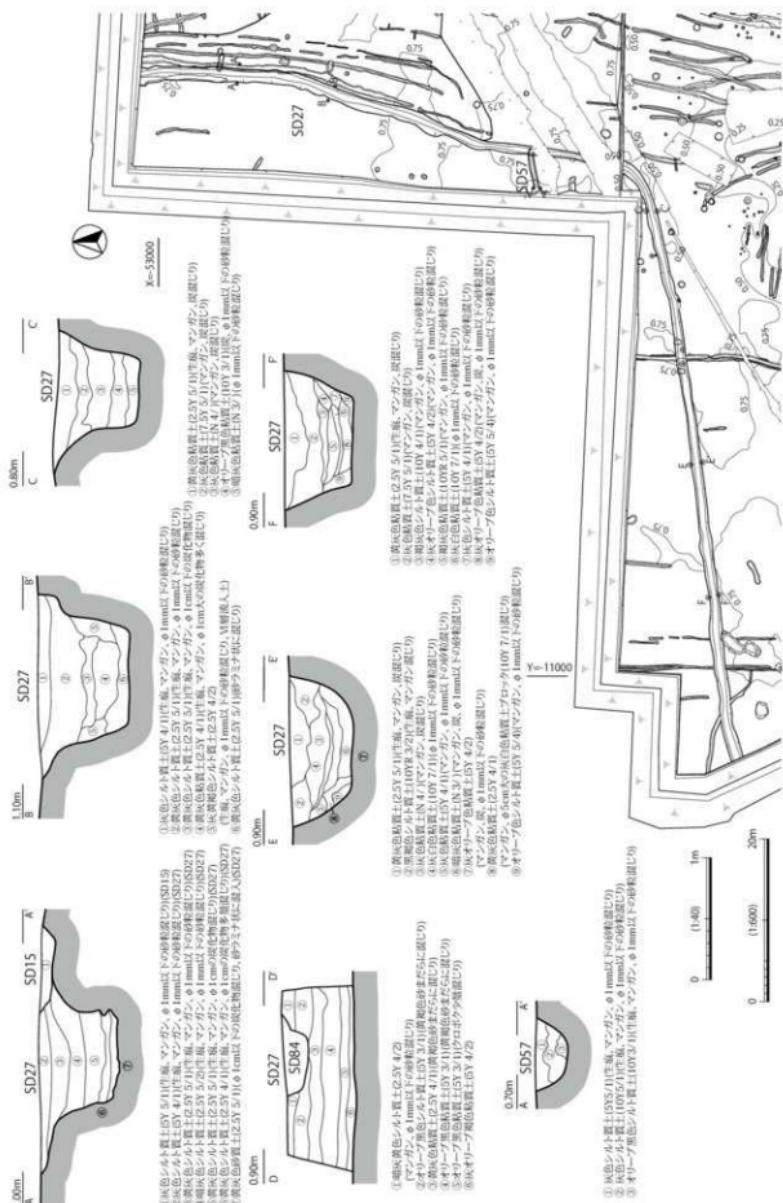
SD27に接続する幅0.58m、深さ0.31mの溝。調査区西側に続いており、この部分にSD27が区画した主体があったことを示すものかもしれない。

表11 第2遺構面遺構一覧

遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	※復元値	△現存値
SK29	0.64	0.56	0.04	SK43	1.30	1.10	0.12	P11	0.50	0.39	0.06		
SK32	0.78	0.76	0.32	SK47	0.60	0.58	0.06	P12	0.46	0.38	0.16		
SK33	1.70	1.10	0.16	SK166	0.55	0.55	0.10	P13	0.48	0.46	0.28		
SK35	0.90	0.66	0.46	SK167	0.65	0.55	0.29	P14	0.48	0.46	0.12		
SK36	1.10	0.50	0.28	SK168	0.50	0.28	0.15	P15	0.52	0.46	0.22		
SK37	0.66	0.52	0.11	SK169	0.68	0.64	0.45	P16	0.50	0.44	0.22		
SK41	0.78	0.74	0.40	P9	0.32	0.24	0.04						
SK42	0.62	0.52	0.26	P10	0.32	0.28	0.07						



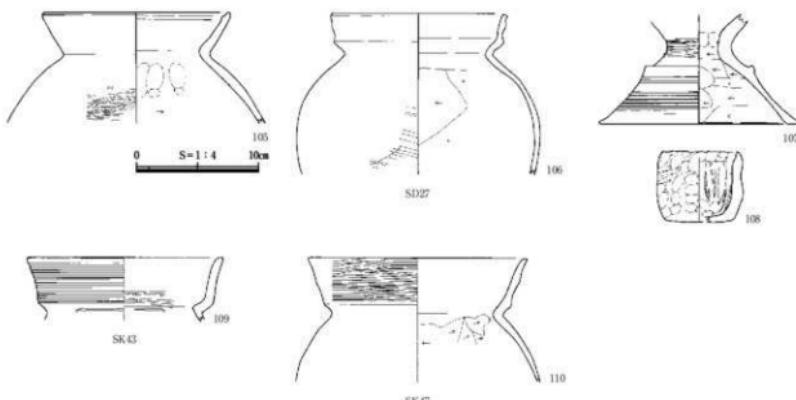
第60図 第2遺構面遺構配置図



第61図 第2遺構面溝



第62図 第2遺構面 土坑およびピット



第63図 第2遺構面遺構出土遺物

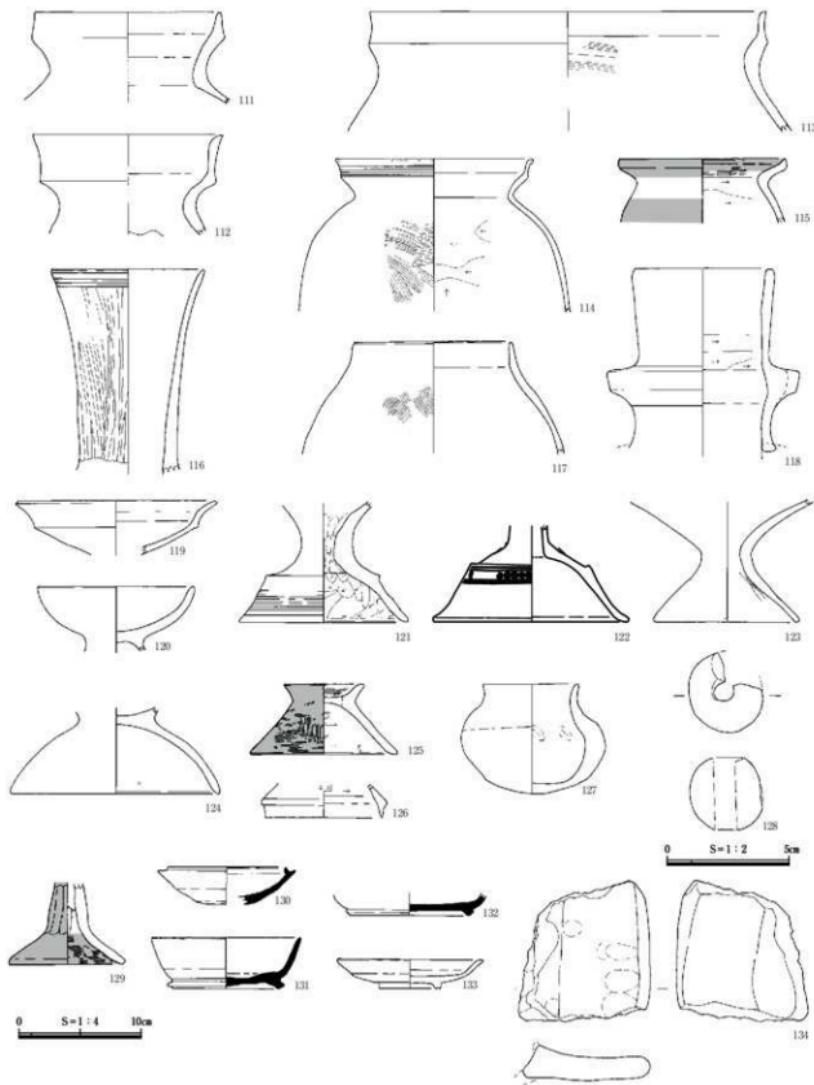
3 土坑およびピット(第62図、表11、PL13)

第2遺構面に所属する土坑14基とピット8基の一覧を第11表に掲げる。ほとんどが径1mに満たず、深さ0.3m以下の浅いものが多い。分布は微高地に偏るが、整った配列を認めることはできず、性格は不明である。

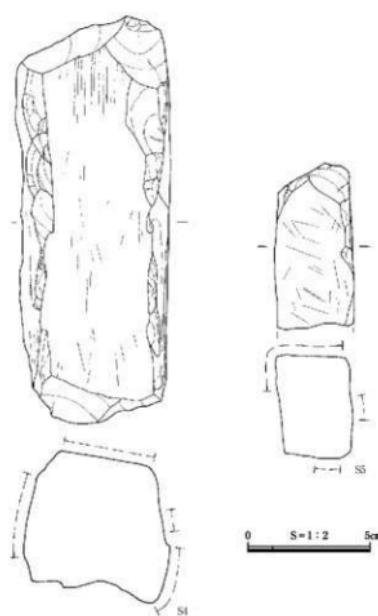
4 第2包含層出土遺物(第64~66図)

第2包含層(V層)から出土した遺物は非常に少なく、多くが本来下層に所属していた弥生土器である(111~128)。注目されるのは口縁部116で、後述するSI 1から出土した装飾壺139と同一か兄弟の個体である。もし同一器片なら一回り口径が小さいことから注口土器か多口壺になるかもしれない。赤彩を施す高環脚部129や須恵器环身131・132は第2遺構面の年代が律令期であることを示す。133は削り出し輪高台をもち高台内に施釉しない緑釉陶器の皿で、10世紀前半から中頃の京都産(註6)。この時期の調査区周辺に官衙または寺院のような公的な施設が存在した可能性を示唆する。

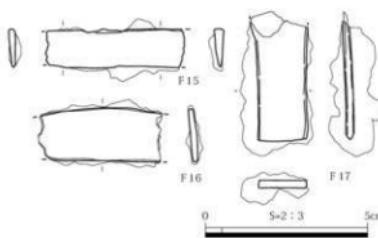
鉄製品としては、板状の鉄片(F15・16)や鉄斧の可能性がある製品(F17)が出土している。板状の鉄片については下層でも同様のものが出土しているため弥生時代に帰属するものとみられる。



第64図 第2包含層出土遺物(1)



第65図 第2包含層出土遺物(2)



第66図 第2包含層出土遺物(3)

第4節 第3遺構面

1 概要(第67図)

第3遺構面は、VI層上部を中心に検出した弥生時代後期後葉の遺構面である。5ライン以東では、砂粒が比較的少ないVI-1層と多いVI-2層に分層できたため、VI-1層上面からVI-2層上面までの間で検出した遺構をこの面所属と捉えた。5ライン以西では分層困難だったため、VI層中またはVII層上面で検出した遺構をこの面の遺構とした。VI層内では出土した土器にはほとんど時期差がないことから、実際には比較的早い堆積作用の合間に形成された複数の生活面が存在していると考えられる。しかし、入り組んだ微地形と、ほとんどラミナを形成しない洪水末端のシルトという堆積物の性質のために、発掘現場では本来の生活面を揃えて検出することはできなかった。

遺構の分布は調査区東半の7ライン以東に偏っている。調査区東南角の、集落本体から下る東側高地上には4棟の建物跡がまとまっている。うち1棟(SI1)は平地建物の焼失住居である。残る3棟は、同時存在したとみなされる平地建物2棟(SI2・4)と布掘建物1棟(SB1)で構成される。平地建物跡はもう1棟あり(SI3)、南低地の北端に位置している。他方、西側高地上には、木製井戸枠と配石をもつ井戸SE1や3基の土器集中などが存在する。2つの微高地の間の北低地には、土器集中や土坑が多く分布していて、祭祀の空間であった可能性が高い。

これに対して、調査区西半ではわずかに土器集中13が存在するのみで包含層からも遺物はほとんど出土しないので、集落外とみてよい。

2 平地建物跡

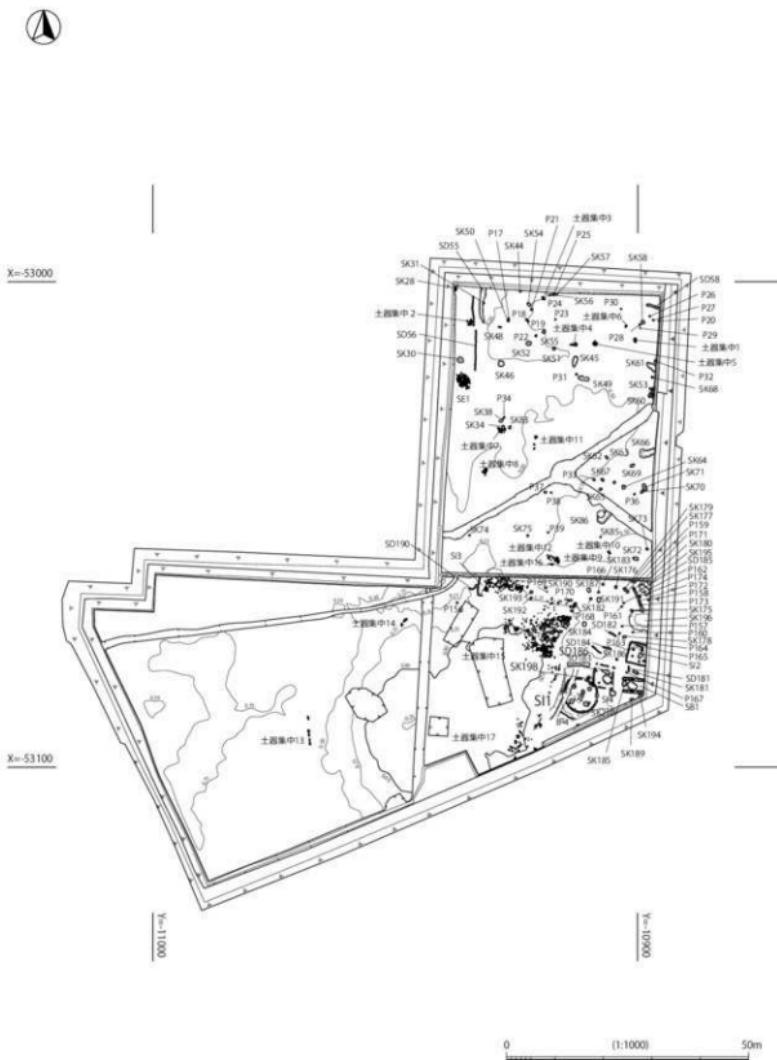
SI1(第68~77図、表12、巻頭図版3、PL15~19)

調査区南東のJ4グリッドに位置する平地建物跡。検出面での標高は0.65mを測る。VI層上面を割り込む作業中に並んだ板状の炭化材が見つかり、付近を精査したところ焼土粒が面的に広がることが確認されたため、これを頼りに床面を検出した遺構である。

遺構は中世の耕作溝によって西辺を失っている。その西側で検出した西辺の一部らしき溝(第68図破線部分)は全体の平面形に対して歪であることから、誤認と考える。その部分を除いた規模は、南北7.1m 東西6.2m以上で、平面形は円形に近い隅丸方形を呈する。

遺構の周縁を、幅0.21~0.33m、検出面からの深さ0.10~0.24mの溝SI1-SD1が囲む。この溝は北辺と東辺の中央でそれぞれ0.48mと0.30mずつ途切れている。土層観察用の畦を残して溝の外側に竪穴の立ち上りが存在しないか入念に検討を行ったが確認できなかった。溝の上は、遺構内外から連続してVI-1層相当のシルト質土で約5cmの厚さで覆われた状態であった。その上は古墳時代後期以降に形成されたほぼ無遺物のV層が約20cm堆積する。つまり竪穴を掘り込むだけの堆積が弥生時代後期には存在しなかったことになる。これらのことから、SI1は竪穴建物ではなく平地建物であるという結論に至った。平成28年5月10日には、公立鳥取環境大学環境学部の浅川滋男教授に現地指導を受け、平地建物か、平地に周堤を盛って竪穴建物同様の上屋を設ける登呂式平地建物と考えてよいとの見解をいただいた。

SI1-SD1の土層断面を観察すると、多くの場所で中央に5~10cm幅の縦方向の埋土が確認される。これは壁板を立てた痕跡と考えられる。また、溝内や溝を挟む内外からは計14基の小ピットが検出されている。壁を補強する小柱のためのものであろう。SI1-SD1の南東側では、1.5m離れた位置で



第67図 第3遺構面遺構配置図

SI 1 - SD 2 を検出した。幅0.12m、深さ0.05mの小さな溝で埋土に炭化物を多く含んでいることから、標高が高く始点となる東半は、軒先からの雨落ちで形成された可能性がある。

主柱穴は4基を確認した(第70図)。うち1基(SI 1 - P34)は中世の土坑SK104によって半分程度を失う。SI 1 - P3 に関しては柱材が炭化して立っていたが、残る2基は床面の検出時には柱痕周辺を辛うじて確認できたのみで、当初は小規模な主柱穴であると判断していた。しかし、SI 1 の調査が終了して床面を削り込んだ段階で径0.8m前後の掘方が現れ、実際には床面から0.6~0.7m掘り込んだもので、長さ50cm前後の板材を、あるものは並列あるものは井桁に組んで礎板とし、不同沈下を防いだ入念なものであることが判明した。なお、こうした調査経緯のため、断面図では床面付近の主柱穴上部と主柱穴下部との間には空白部分がある。柱材か柱痕が残る3基について、芯芯間の距離を計測すると東西南北とも3.3mで、南北軸はN=5°Eと北北東にわずかに振れる。

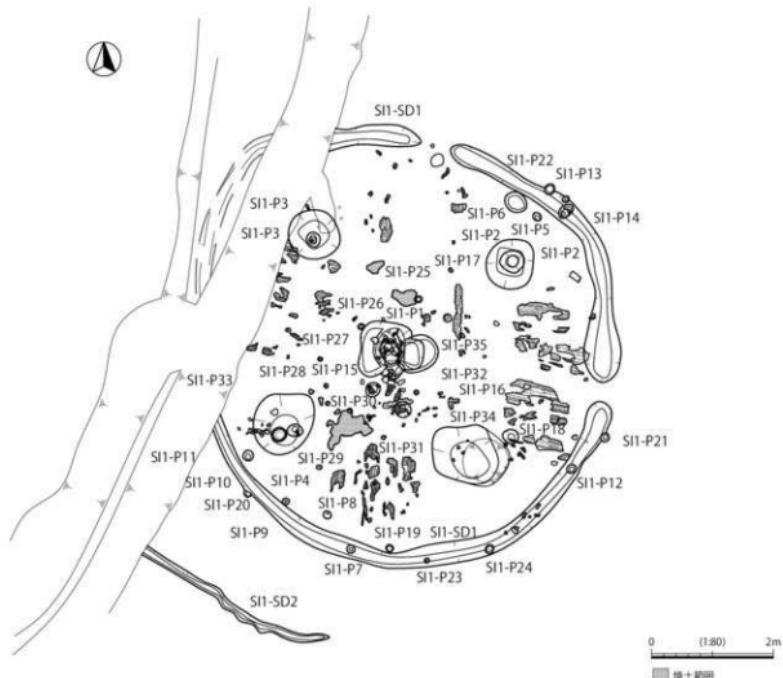
床面の中央やや南寄りには中央ピットSI 1 - P1が設けられる。南北1.04m、東西0.92mの正方形を呈し、深さ0.40mを測る。床面から0.20mの深さからは0.43×0.30mの楕円形の2段掘りとなり、底部には0.15mの厚さで粒径2mm前後の石英主体の粗砂を詰め込んでいる。粗砂と埋土には炭化物が多く含まれるので、この中央ピットの機能は開炉裏であろう。一部が中央ピット内に倒れ込む形で、下から順に、山陰型楕円形土器を輪切りにした広口側(第73図136)、大型の甕(135)、高坏环部(137)、器台(138)の4個体が重ねられた状態で出土した(PL17)。中央ピットの北縁に積み重ねて置いてあった

表12 S I 1 遺構一覧

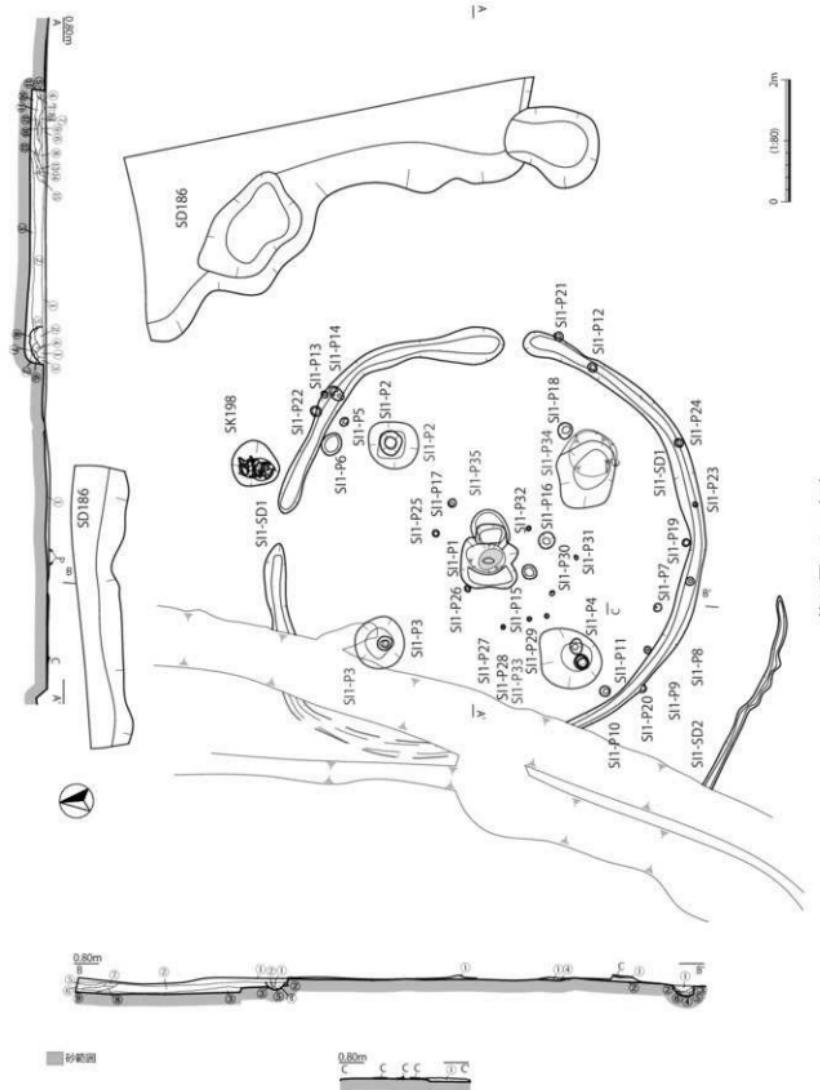
	長(m)	幅(m)	深(m)	備考		長(m)	幅(m)	深(m)	備考		長(m)	幅(m)	深(m)	備考
SD1	-	0.33	0.24	壁溝	P12	0.18	0.13	0.07	壁溝内	P25	0.10	0.10	0.05	
SD2	△3.36	0.12	0.05	雨落溝?	P13	0.14	0.10	0.07	壁溝縁	P26	0.08	0.08	0.06	
P1	1.04	0.92	0.40	中央ピット	P14	0.32	0.19	0.16	壁溝内	P27	0.10	0.09	0.04	
P2	0.82	0.76	0.70	主柱穴	P15	0.28	0.24	0.07		P28	0.10	0.10	0.03	
P3	0.84	0.81	0.65	主柱穴	P16	0.28	0.25	0.10		P29	0.09	0.08	0.04	
P4	0.28	0.20	0.23		P17	0.12	0.12	0.05		P30	0.09	0.09	0.04	
P5	0.14	0.12	0.08	壁溝縁	P18	0.26	0.23	0.08		P31	0.10	0.08	0.04	
P6	0.38	0.32	0.06	壁溝縁	P19	0.13	0.12	0.05	壁溝縁	P32	0.09	0.09	0.05	
P7	0.14	0.14	0.11	壁溝内	P20	0.12	0.10	0.03	壁溝縁	P33	1.14	0.94	0.78	主柱穴
P8	0.16	0.12	0.07	壁溝縁	P21	0.12	0.12	0.06	壁溝縁	P34	1.17	1.02	0.44	主柱穴
P9	0.11	0.11	0.06	壁溝縁	P22	0.19	0.17	0.08	壁溝縁	P35	0.72	0.59	0.05	
P10	0.19	0.19	0.04	壁溝縁	P23	0.08	0.08	0.03	壁溝内	SD186	-	2.20	0.28	外周溝
P11	0.21	0.19	-	主柱底	P24	0.14	0.14	0.10	壁溝内	SK198	0.80	0.76	△0.4	土器埋納

表13 S I 1 樹種同定・放射性炭素年代測定結果一覧

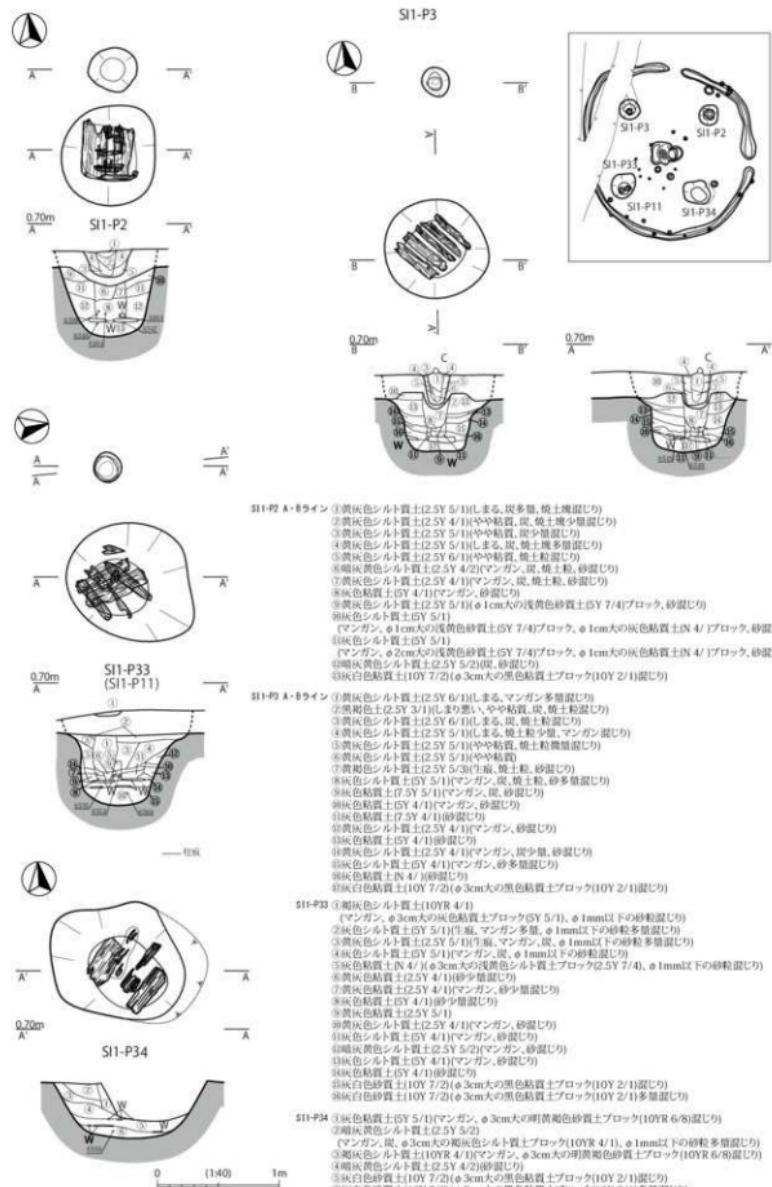
番号	取上番号	状態	部材種類(推定)	樹種同定結果	2σ 年代範囲
1	4901	炭化材	垂木	スギ	44calBC~59calAD(95.4%)
2	4902	炭化材	垂木	ヒノキ科	
3	4903	炭化材	垂木	スギ	
4	4899	炭化材	朽	ヒノキ	172calBC~42calBC(95.4%)
5	4891	炭化材	壁板	スギ	157calBC~137calBC(3.9%) 114calBC~19calAD(91.5%)
6	4892	炭化材	壁板	スギ	
7	4896	炭化材	壁板	スギまたはヒノキ科	
8	4888	炭化材	主柱	ヒノキ科	342calBC~328calBC(2.3%) 205calBC~87calBC(87.9%) 79calBC~56calBC(5.2%)
9	6547	生木	礎板	スギ	182calBC~49calBC(95.4%)
10	6550	生木	礎板	スギ	198calBC~55calBC(95.4%)



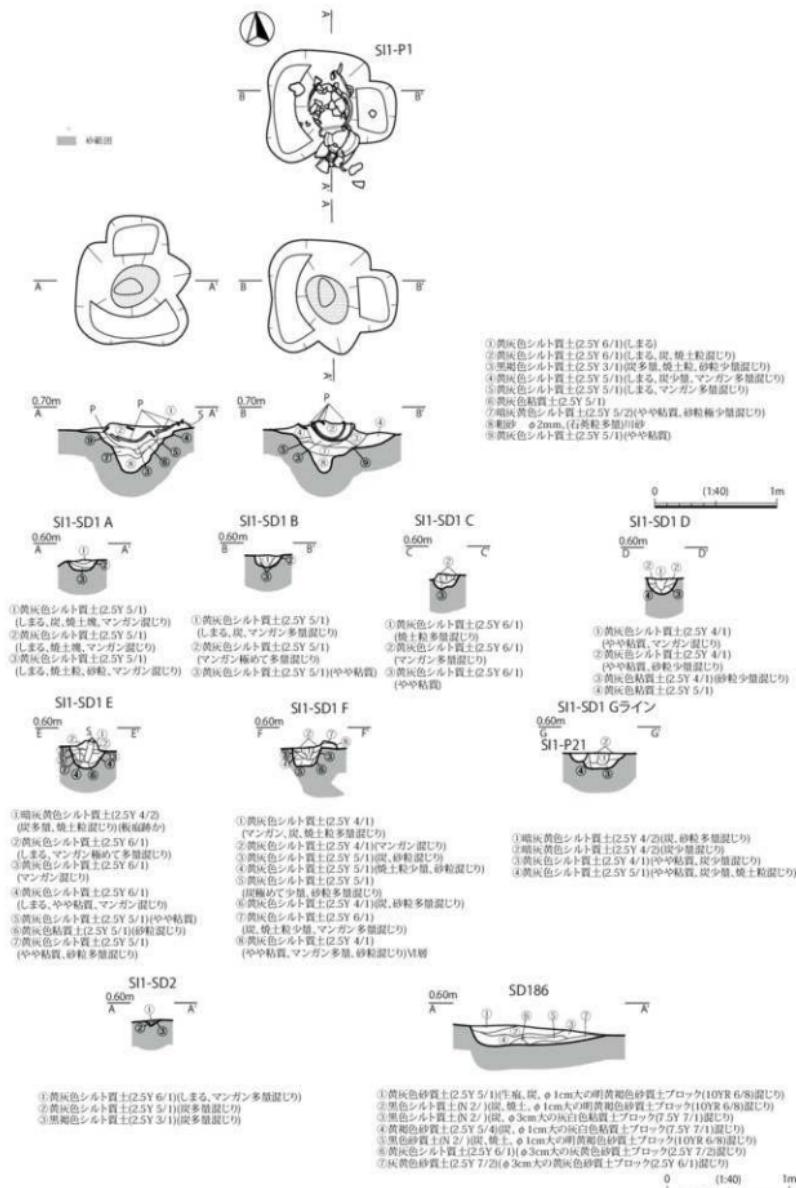
第68回 SI 1 (1)



第69図 SI 1 (2)



第70回 SI 1 (3)



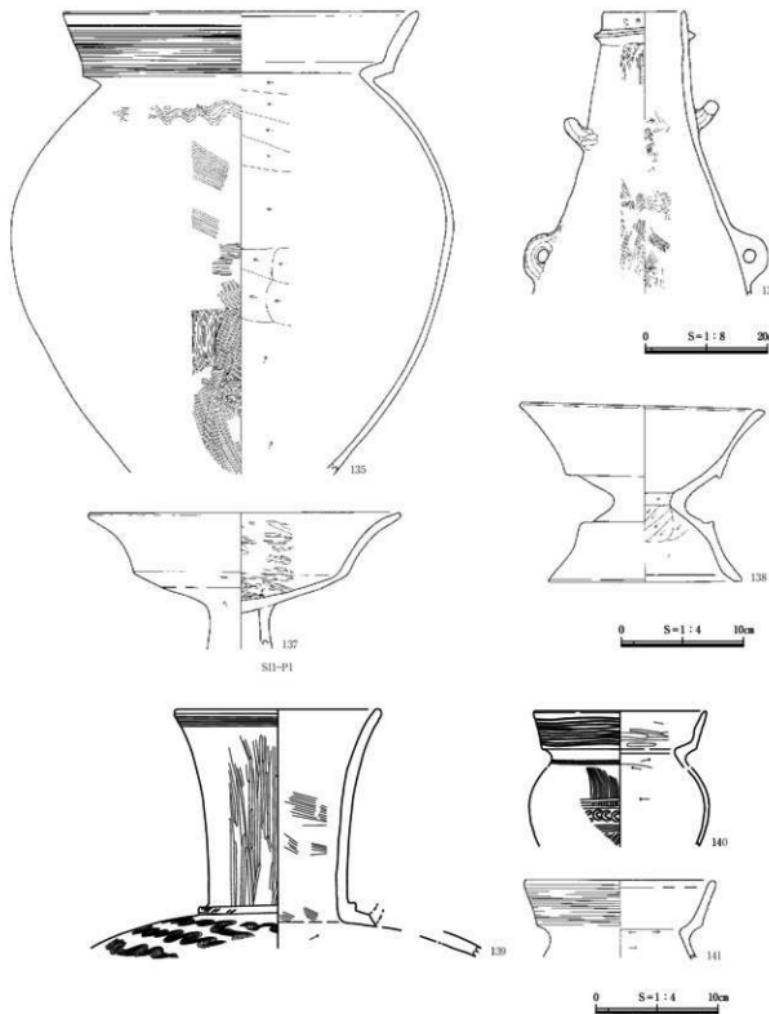
第71図 SI 1 (4)



第72図 SI 1 (5)

ものであろう。瓶形土器については、周辺の包含層から上半部分が出土してはいるが、輪切りにして器台として再利用していた可能性が高く、本来の使用法ではないと思われる。土器の年代から建物の時期は弥生時代後期葉で、その出土状況から不慮の火災と判断される。

中央ピットの縁から南西に約0.6m離れた位置では、0.8×0.6mの顯著な焼土面が検出された。地床炉として用いられたもので、この建物の主な火處である。中央ピットの周辺では、この炉との間を中心にして2基のピットと9基の杭痕とみられる小ピットが検出されている。棚か開いのような構造物が設置されていたようである。



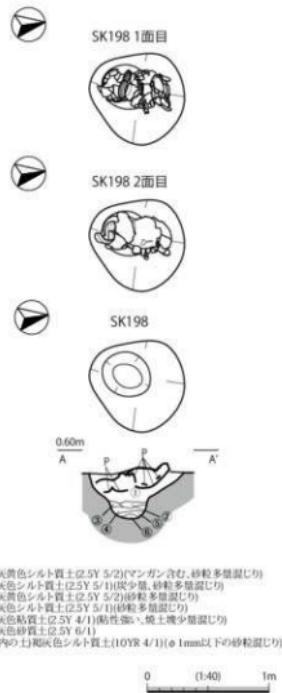
第73図 SI 1 出土遺物(1)

炭化材は東辺と南辺のものが残りがよい。いずれも幅0.2~0.3m、長さ1.3m以上の板材をほぼ隙間なく縦に並べたもので、東辺では幅25m分、南辺では幅15m分が残っている。同様の炭化材の破片は西辺でも幅1.9m分確認できる。いずれも各辺中央の直線に近い部分に当たり、辺と直交する方向で検出された。間隔が密であること、コーナー部分には見られないこと、構築面が残っているにもかかわらず遺構の範囲の外側には広がらないことなどから、垂木ではなく縦板壁と考える。南東のコ

ナーパートには細かな枝状の材がわずかに存在するので、コーナーには板材ではなく、曲面を描きやすい材が用いられたのであろう。なお、北辺については他の3辺のような並んだ板材ではなく、溝の途切れた部分を挟んで2枚の板材の断片が確認できたのみである。この位置に入口があったことを示すものかもしれない。その他の構造材については、中央ピットの東で南北方向の桁とみられる丸太材が、南で放射状に組まれた垂木の断片らしき材が残るのみである。炭化材のうち8点と礎板のうち2点について樹種同定を行ったところ(表13、第4章第3節参照)、壁材や礎板などの板材についてはスギが、主柱と桁についてはヒノキが用いられていることが分かった。

遺構内からは直径20~25cmの被熱した円環が2個と、多数の被熱剥片が見つかっている。環のうち1個は北辺の溝の途切れた付近で、もう1個と被熱剥片は3箇所の角付近に分布する。遺構の範囲の外では見つかっていないことから、建物内の各角に置かれたものが、火災によってはじけ飛んだと考えられる。コーナー部分の構造に関するものだろうか。

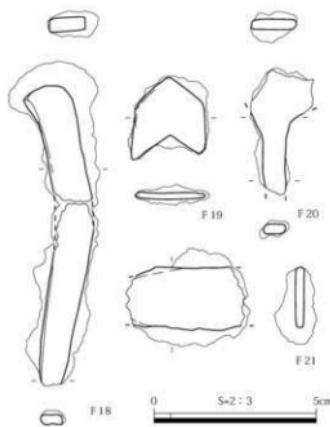
中央ピットSI 1-P1以外からの出土遺物(第73図)としては、壺139が注目される。赤褐色の胎土をもち、頭部に刻目突帯、肩部に3列以上の横描波状文を施す。肩部の接合痕から見て注口土器または多口壺で、外来の土



第74図 SK198



第75図 SI 1 復元図



第76図 SI 1 出土遺物(2)

器と考えられる。SI 1 床面からは口縁部のみが出土したため本来この遺構に所属するものかは不明である。鉄製品としては鑿(F18)が出土している。建物内から出土している鉄鎌(F19・F20)などの加工に使用したものである可能性がある。

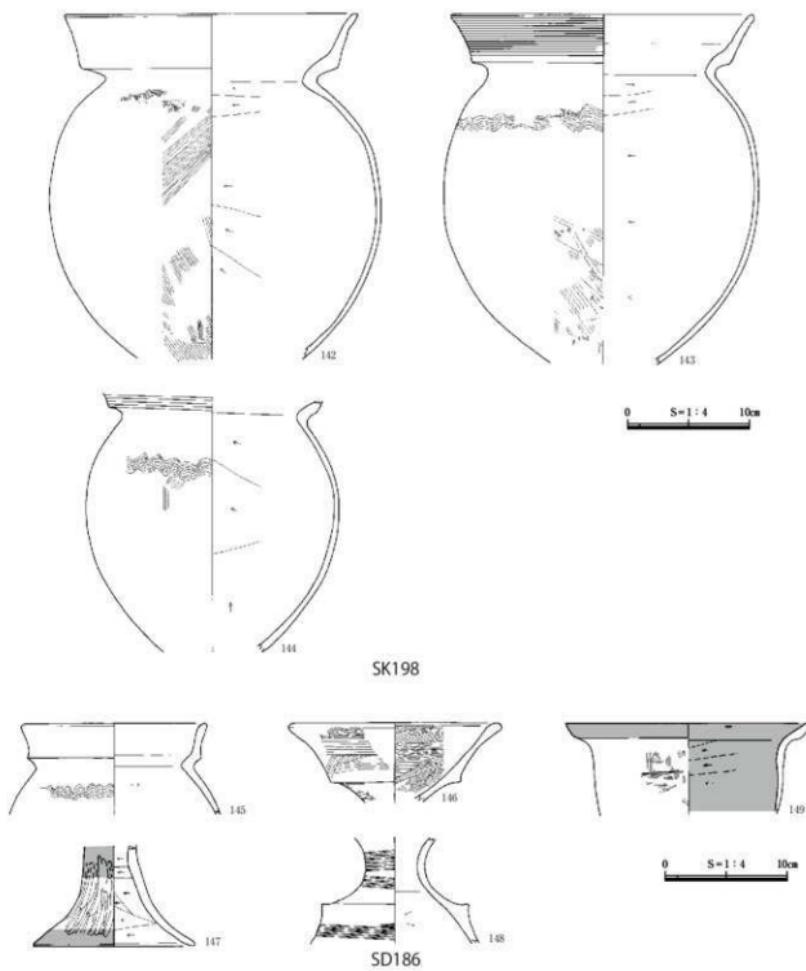
構造材のうち4点と礎板材のうち2点について放射性炭素年代測定を実施した(第4章第2節参照)。結果は4点が 2σ 暦年較正年代で紀元前1世紀前後を示した。出土した土器の年代より200年近く古い値で、放射性炭素年代測定を実施した第3遺構面に所属する他の遺構(SI 3、SB 1、SE 1、SK 60)より格段に古い。この時期に関する較正曲線の問題とするのが現時点では妥当であろうが、板として製材された部位の関係か、あるいは古材を用いた建物であった可能性もある。

第75図にSI 1 の復元案を提示する。円形に近い縦板壁の平地建物はこれまでの研究ではあまり想定されてこなかったが、低地の弥生集落で、4本柱で円形に近い古典的な平面デザインを採用した場合にはあり得るものではなかろうか。

SI 1 周辺遺構

SD186(第69図)はSI 1 の外周に掘られた溝で、幅2.2m以上、深さ0.28mを測り、SI 1 とは2.4mの間隔がある。SI 1 の北辺と北東辺でSI 1 側のラインを確認できたもので、溝というよりは段と捉えるほうがよいかもしれない。集落本体側微高地からの下がり水の流入を防いだものであろうか。

SK198(第74図、PL19)はSI 1 - SD 1 北辺の切れ目近く、0.15m外側に掘られた土坑。0.80×0.76mの歪な円形を呈し、検出面からの深さは0.4mを測るが土器の検出高がさらに0.1m高いので、本来はもう少し深く、標高0.59mより上に構築面があるはずである。底面は0.41×0.36m、深さ0.18mの2段掘りになっていて、それを塞ぐ形で、底を抜いた3個の甕(第77図142~144)を連結して埋納する。SI 1 の入口と推定される箇所に近いことから、胎衣や乳幼児の遺体などを埋納したもののが可能性がある。



第77図 SI 1周辺遺構出土遺物

SI2(第78図、表14、PL21)

調査区南東のI 2・I 3グリッドに位置する遺構で、東辺は排水溝にかかったため確認できなかつた。検出面での標高は0.25mで、ほぼ同じ標高の2.8m南側には布垣建物SB 1が並んでいる。平面形は南北4.5m、東西4.2m以上の方形で、南北軸はN-12°-Eと北北東に振れる。遺構検出において竪穴ではなく壁溝の存在を認識したもので、床面は検出できなかつた。壁溝SI2-SD 1は幅0.15~0.24m、深さ0.06~0.24mを測る。SI 1とは異なり、溝内や付近にピットは確認できなかつた。遺構内には6基のピットと1基の土坑がある。そのうち比較的深く中軸付近に位置するSI2-P 5・P 6が主柱穴と考えられ、2本柱の可能性が高い。堆積と検出時の状況から、壁立の平地建物と考えられる。弥生時代後期後葉の土器の細片(第79図150~155)と土玉(156)がピットおよび溝から出土している。

SI3(第80・81図、PL27)

調査区中央のH 5・H 6グリッドを中心と所在する遺構で、1区と2区にまたがる。1区を調査した時点では遺構とは認識できず、2区の調査で焼けた床面や炭化材の集中などから建物跡と判断した。

南北3.7m×東西3.3mの範囲で、厚さ0.5mmのごく薄い炭層に覆われた厚さ1mmの焼土面を確認し、その南側と西側に1.5m離れた場所で、幅0.28m、深さ0.05mの壁溝の一部SI3-SD 1を検出した。この2つを合わせると、遺構の規模は南北6.0m以上、東西5.1m以上、南北軸はN-6°-Eとなる。床面の高さは標高0.15m前後を測る。ごく浅いピットを2基検出したが、柱穴と呼べるものではなく、建物の構造は不明である。土層観察用の畦を残しながら調査を行ったところ、床面は基盤粘土層のⅦ層上にあり、その上をVI層とV層がそれぞれ約15cmの厚さで水平に覆っていることから、平地建物と捉えてよいだろう。

焼土面の分布範囲を中心に大量の土器と炭化材が出土した。土器の中には焼土面の直上から出土するもの(第82図)と、5~15cmほど上のVI層上面付近から出土するもの(第83図)とがある。炭化材はほとんどが後者に伴うため、本来この遺構で用いられたものかは疑わしい。ただ、付近に他に焼失住居に相当する遺構が存在しない点を重視してこの遺構のものと捉えるならば、火災に遭った後しばらく炭化材が立っていたか、炭化材が一時水面に浮上するような埋没過程を想定することになる。南低地の北縁という立地を考慮すると、後者のような状況もあり得なくはない。炭化材は多くが板材で、2点を樹種同定したところスギであった。

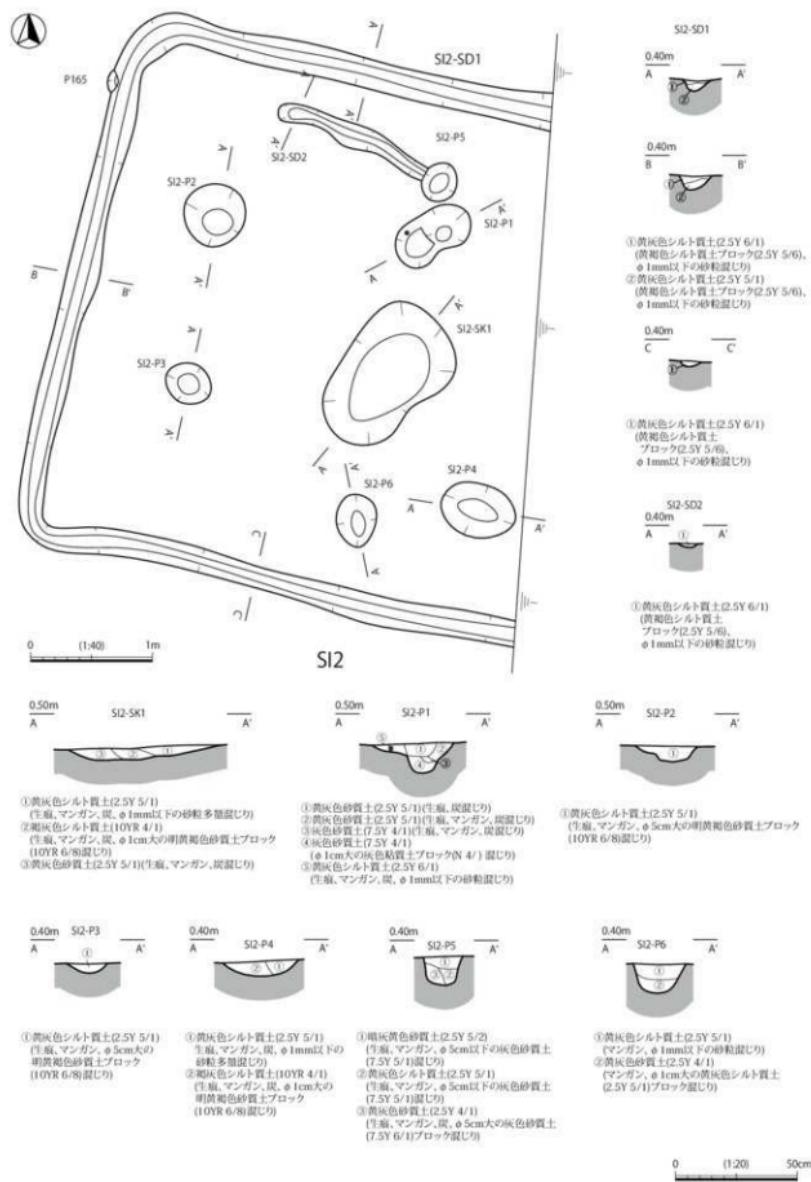
床面出土の遺物には、単純口縁の壺(157)や擬凹線文をもつ甕(158・159)のほか、プランデーグラス形の高杯(160)、凝灰岩製の砥石(S 6)がある。覆土からの出土遺物には特殊な土器が含まれている。

表14 SI2遺構一覧

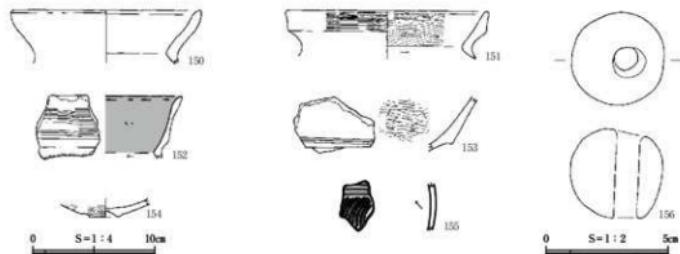
	長(m)	幅(m)	深(m)	備考	長(m)	幅(m)	深(m)	備考	長(m)	幅(m)	深(m)	備考	※復元値	△現存値
SD1	-	0.24	0.24	壁溝	P1	0.67	0.38	0.24	P4	0.10	0.10	0.12		
SD2	1.33	0.20	0.03		P2	0.51	0.51	0.12	P5	0.34	0.29	0.24	主柱穴	
SK1	1.24	0.80	0.09		P3	0.40	0.34	0.07	P6	0.44	0.34	0.23	主柱穴	

表15 SI4遺構一覧

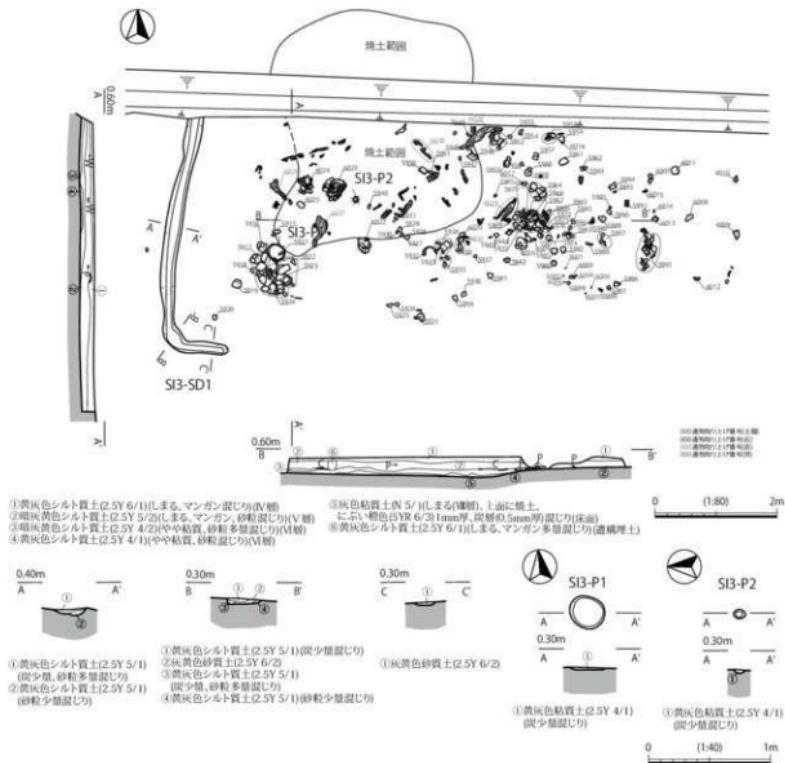
	長(m)	幅(m)	深(m)	備考	長(m)	幅(m)	深(m)	備考	長(m)	幅(m)	深(m)	備考	※復元値	△現存値	
SD1	※1.83	0.15	0.05	壁溝	P1	0.67	0.56	0.24	主柱穴	P8	0.13	0.10	0.07	壁溝内	
SD2	2.60	0.34	0.20	壁溝	P2	0.50	0.35	0.16	主柱穴	P9	0.14	0.12	0.05	補修?	
SD3	1.59	0.15	0.05	壁溝	P3	0.32	0.36	0.19	主柱穴	P10	0.14	0.12	0.06	補修?	
SD4	3.50	0.34	0.30	壁溝	P4	0.35	0.27	0.09	主柱穴	P11	0.13	0.09	0.09	補修?	
SK1	△1.88	1.02	0.11		P5	0.35	0.30	0.09	間仕切	P12	0.10	0.10	0.05	壁溝内	
SK2	1.90	1.61	0.11		P6	△0.15	△0.08	0.04	間仕切	P13	0.09	0.08	0.06	壁溝内	
					P7	0.10	0.10	0.06	壁溝内	P14	0.15	0.09	0.04	壁溝内	



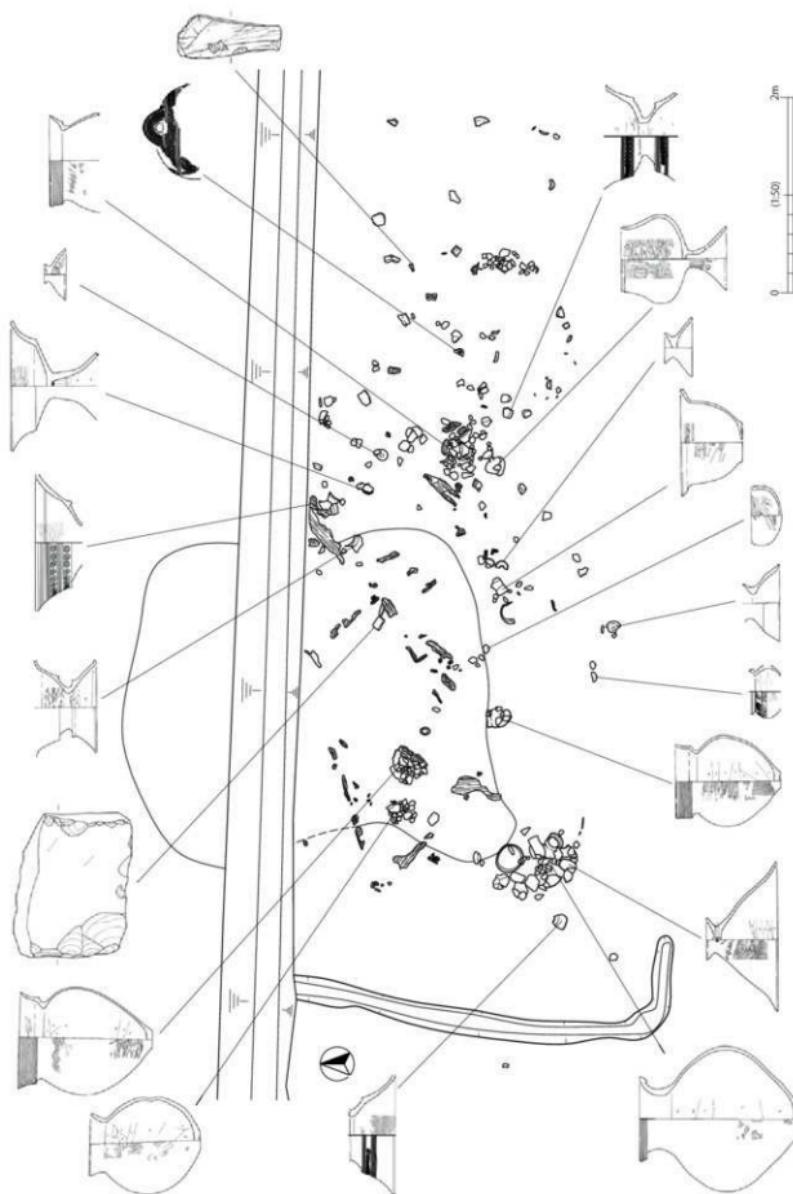
第78回 SI2



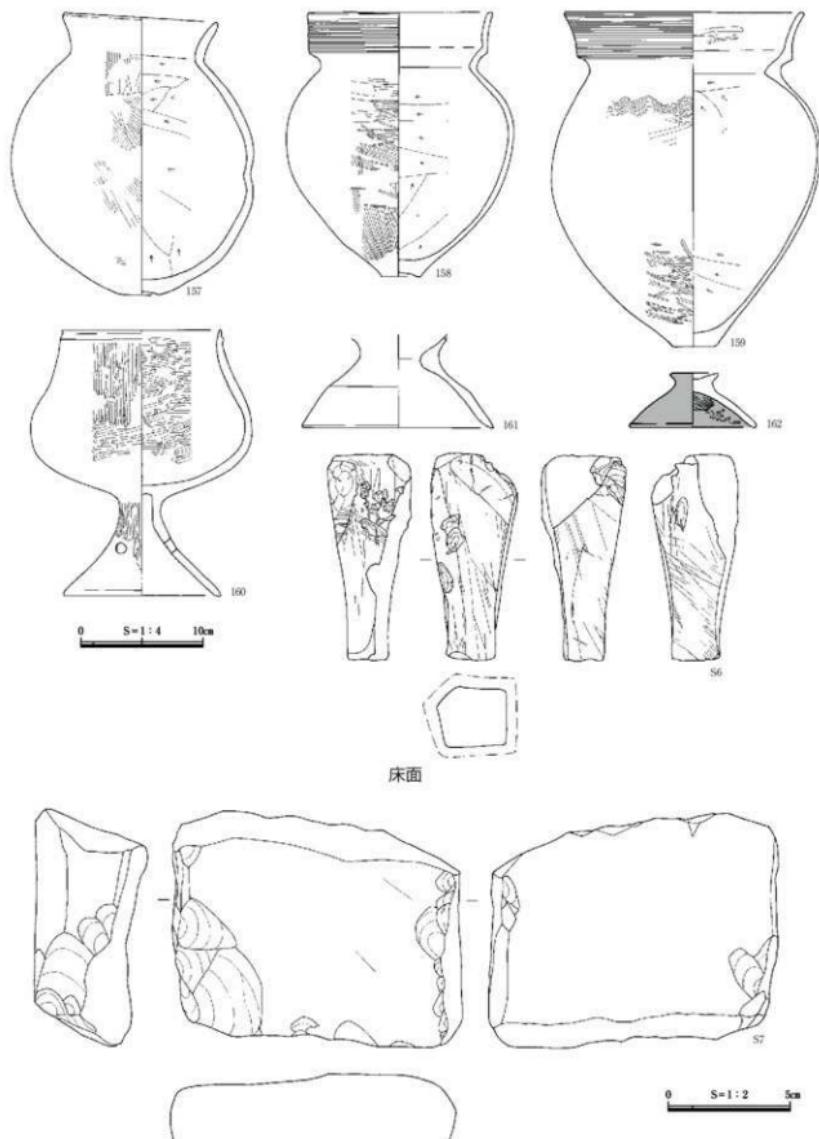
第79図 SI2 出土遺物



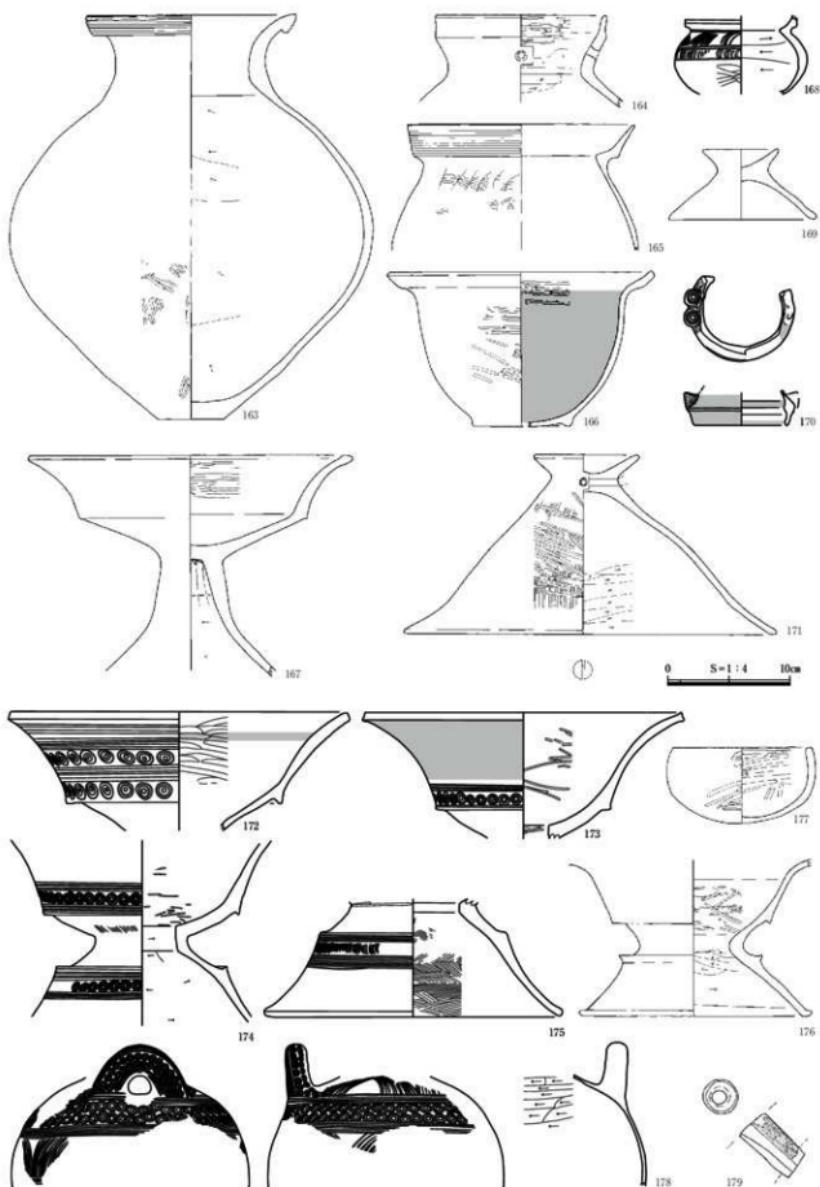
第80図 SI3 (1)



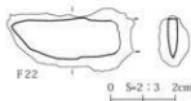
第81図 SI3遺物出土状況



第82図 SI3出土遺物(1)



第83図 S13出土遺物(2)



第84図 SI 3出土遺物(3)

第83図166は鉢状の口縁と高台をもつ鉢で内面を赤彩する。170は同心円浮文の装飾をもつ赤彩の蓋で、2個一対の穿孔があることから装飾壺のものであろう。SI 1からも同一個体とみられる破片が出土している。171は特大の蓋でつまみの直下に貫通する1孔をもつ。178は精製の注口土器で、ごく薄く、大小のスタンプ文と貝殻腹縁文で丁寧に全面を覆う。秋里遺跡のスタンプ文土器の極致といってよい出来栄えである。鉄製品は刀子(F22)が1点出土している。

床面出土の丸太材1点と、覆土出土の板材2点について放射性炭素年代測定を行ったところ(第4章第2節参照)、いずれも 2σ 暦年較正年代で1世紀中頃を中心とする結果となった。SI 1の測定値よりは100年程度新しいものの、土器から推定される年代よりは100年ほど古いことになる。

SI 4(第85・86図、表15、PL22・23)

調査区東南のI 3・J 3グリッドに位置し、検出面での標高は最も残りのよい西辺で0.34mを測る。東隣にある布掘建物SB 1とは1.7mの距離があり、南辺が揃うので同時存在した可能性が高い。一方、VI-1層の堆積中に、SI 1が北東部をSI 4の南西角に重ねて築かれることから、SI 4は明らかにSI 1に先行する。

四隅に主柱穴をもち、その間に壁を立てた特異な平地建物と考えられる。主柱穴にはいずれも柱痕が確認できる。芯芯間で南北4.6m、東西3.6mを測る長方形の建物で、軸はN-9°-Eと北北東に振れる。長辺の溝SI 4-SD 2は長さ2.6m、幅0.30~0.34m、深さ0.2m、SI 4-SD 4は長さ3.5m、幅0.28~0.34m、深さ0.3mで、南西隅を除いて主柱穴とは0.6~0.7mの間隔を置く。いずれの溝も埋土の中央で幅10cm前後の縱方向の土層を確認した。壁を立てた痕跡と考えられる。さらに、溝埋土内で径7~10cm、深さ6cm前後的小ピットを、SI 4-SD 2で5基、SD 4で3基検出した。壁を補強する小柱のものであろう。SD 2南半の3基については、溝の中軸から離れて土坑SI 4-SK 2と接する箇所に設けられていることから、建物内部からの補修によるものと推定される。またSI 4-SD 4には北端近くに0.35m長の張り出しがあり、間仕切りか控えを立てていた可能性がある。東西辺とは対照的に、北辺と南辺には幅0.15m、深さ0.05mの細くて浅い溝しかなく、溝内に小柱を立てた痕跡もない。主柱との間に0.5m~0.8mの間隔があることは東西辺と似ている。遺構内では西溝から0.8m離れた位置で2基のピットを、それらと東溝との間で2基の不整形な土坑を検出した。前者は間仕切りか柵のためのもので、後者は機能部に関連すると考える。

以上に基づく復元案を第87図に示す。いわば車庫のような構造の、隙間の多い簡易な壁立の平地建物で、内部構造と合わせて畜小屋を連想させる。SI 2・SI 4・SB 1の3棟からなる建物群の中で、集落外方向の南低地側に1棟だけ置かれることもそれを強める。そこで、土坑SK 1およびSK 2の埋土にリン酸などの動物由来成分が含まれるか土壤化学分析を実施したが(第4章第4節)、動物が存在したことを積極的に支持できる結果ではなかった。

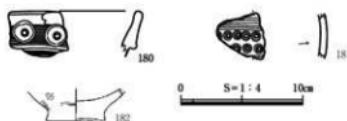
出土遺物としては弥生時代後期後半の土器の小片が出土したのみである(第88図)。



第86図 SI 4(2)



第87図 SI 4 復元図



第88図 SI 4 出土遺物

3 布掘建物跡

SB 1(第89図、表16、PL24~26)

調査区東南角のJ 3 グリッドに位置し、東端は調査区外にかかる。検出面での標高は0.24mを測るが、調査区東壁の土層断面(第8図)から本来の構築面は標高0.30mあたりであることが分かる。北隣には2.8m隔てて平地建物SI 2が西辺をほぼ揃えて、西隣の1.7m先には平地建物SI 4が南辺を揃えてそれぞれ並ぶ。逆L字状に配置されたこの3棟は同時存在した1世帯の単位と考えられ、それぞれ異なる構造の建物で構成されることは興味深い。

SB 1は主に東西方向の2本の溝で構成される。北側のSB 1 - SD 1は、長さ4.6m以上、中央部での幅0.64m、検出面から溝底面までの深さ0.42mを、南側のSB 1 - SD 2は、長さ4.3m以上、中央部での幅0.60m、検出面から溝底面までの深さ0.32mをそれぞれ測る。中央部での両者の間隔は1.9mで、主軸はE - 1° - Sとほぼ東西を向く。溝の間やや西寄りには22×18×0.1mの、不整形な浅い土坑SB 1 - SK 1がある。

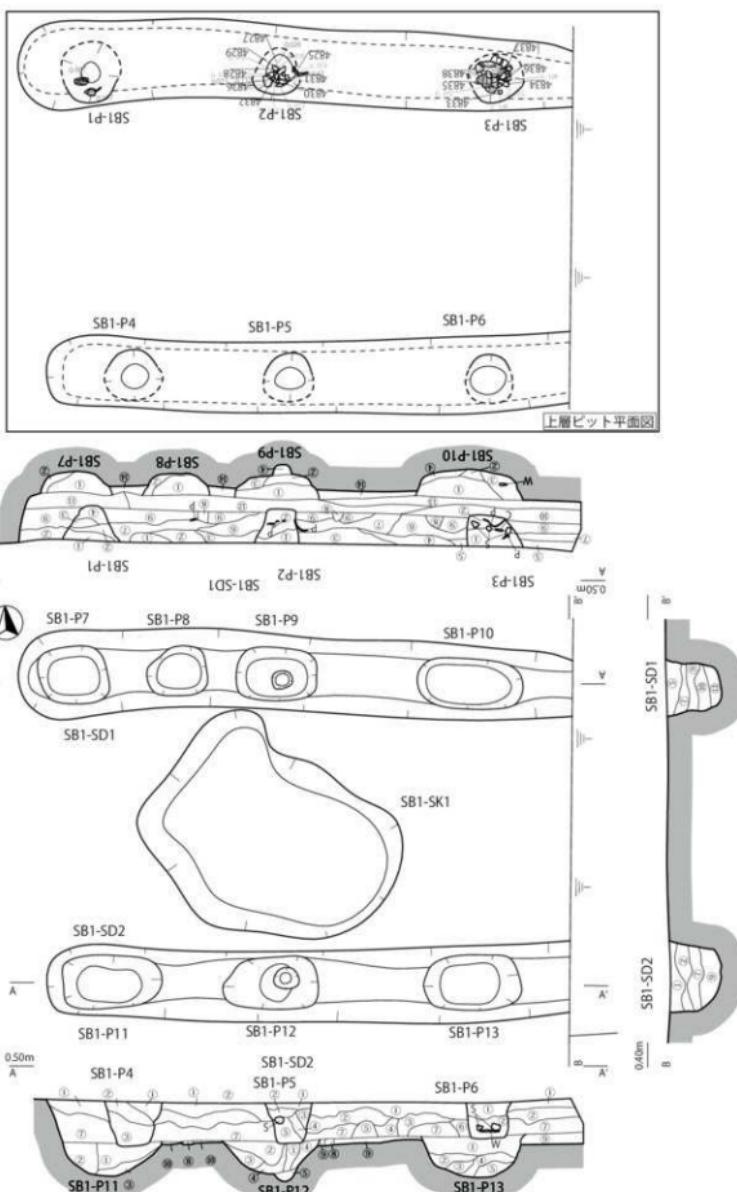
柱穴と埋土を検討すると、建物が1度建て替えられていることが分かる。当初の建物に関わる柱穴はSB 1 - P 7 ~ P 13で、溝底面を0.2m程度掘り窪めて柱が設置されている。P 9とP 12の底面には径15cm程の柱の当たる跡が残っている。SD 2の底面で枕木の痕跡を確認していることから、地中梁が存在し、柱の下部付近を地中梁によって連結する構造だったと推定される。調査区外にある主柱穴は1基ずつとみられ、東西3間×南北1間の掘立柱建物で、南北は芯芯間で2.45m、東西の柱間はそれぞれ1.5m程度だったであろう。

2回目の建物は、布掘部分を埋め立てた上で、前の建物とほぼ同じ位置に主柱穴を6基掘っている(SB 1 - P 1 ~ P 6)。径0.4~0.5m、深さ0.25~0.35mと浅く、建て替え前の建物が0.6mほどの深さに柱を据えていたことと比較して、さらに、埋土から判断して新しい建物には地中梁は無いので、明らかに華奢になっている。最終的には柱は抜き取られて建物の廃絶に関わる祭祀が行われたものか、北側の柱穴列には土器が入れられている。第90図183はP 2から、184はP 2とP 3から出土した弥生時代後期後半の小型の甕。ともにスタンプ文と貝殻腹縁文で飾り、スヌが付着している。

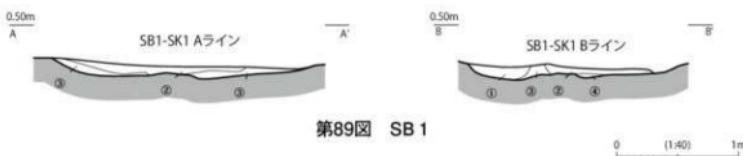
184の内容物を知るために、内部の土について炭素・リン・カルシウムの富化状態について分析を行ったが、動物遺体などを示す結果は得られなかった(第4章第4節)。191は器台でP 1とSD 1から出土した破片が接合しているため、祭祀というよりは建て替え時の混入と考える方がよいだろう。

表16 SB 1遺構一覧

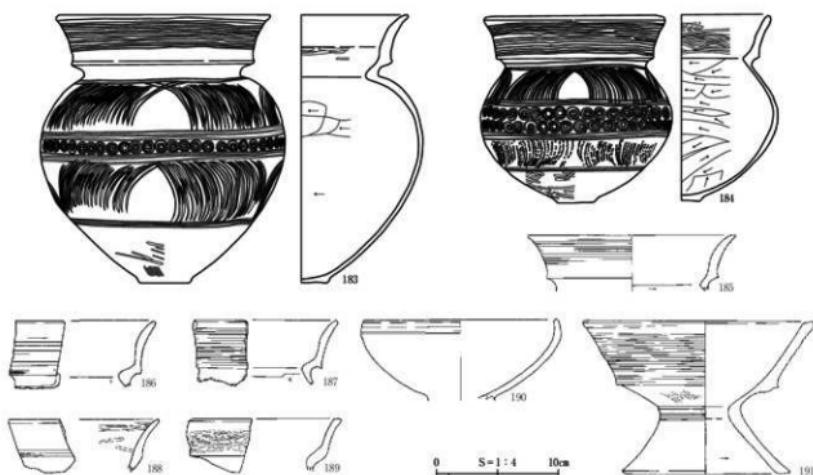
	長(m)	幅(m)	深(m)	備考		長(m)	幅(m)	深(m)	備考		長(m)	幅(m)	深(m)	備考	※復元値	△現存値
SD1	△4.60	0.64	0.42	布掘	P4	0.50	0.41	0.36	再建	P10	0.87	0.40	0.24			
SD2	△4.30	0.60	0.32	布掘	P5	0.41	0.40	0.31	再建	P11	0.80	0.43	0.28			
SK1	2.20	1.80	0.10		P6	0.40	0.39	0.29	再建	P12	0.79	0.44	0.31	あたり有		
P1	0.50	0.50	0.29	再建	P7	0.56	0.48	0.17		P13	0.80	0.39	0.33			
P2	0.40	0.39	0.28	再建	P8	0.49	0.40	0.17								
P3	0.46	0.40	0.26	再建	P9	0.66	0.42	0.29	あたり有							



第89図 SB 1



第89回 SB 1



第90図 SB 1出土遺物(1)



第91図 SB 1出土遺物(2)

4 井戸跡

SE 1 (第92~94図、PL28~31)

調査区北西のC 6・D 6 グリッドにおいて、V層を検出面として井戸地表面の配石を確認した。また、井戸の掘方は配石除去後の壘層上面で検出している。配石および掘方の遺存状況は良好である。

調査は当初、礫の配置などから墓を想定して進めていった。配石内の掘り込みの有無を確認しながら掘り下げたが、明瞭なプランは確認されなかった。礫の除去後、VII層上面に南北2.20m×東西2.25mの円形のプランを確認した。この円形プランのはば中心には南北65cm×東西57cmの精円形プランが認められ、内部に径30cmの大型礫が検出された。この遺構が井戸跡と判明したのは、精円形プランを検出面から40cmほど掘り下げたところで木製井戸枠が確認されてからである。井戸内部の掘り下げを行うと同時に、掘方を半裁し調査を進めていった。

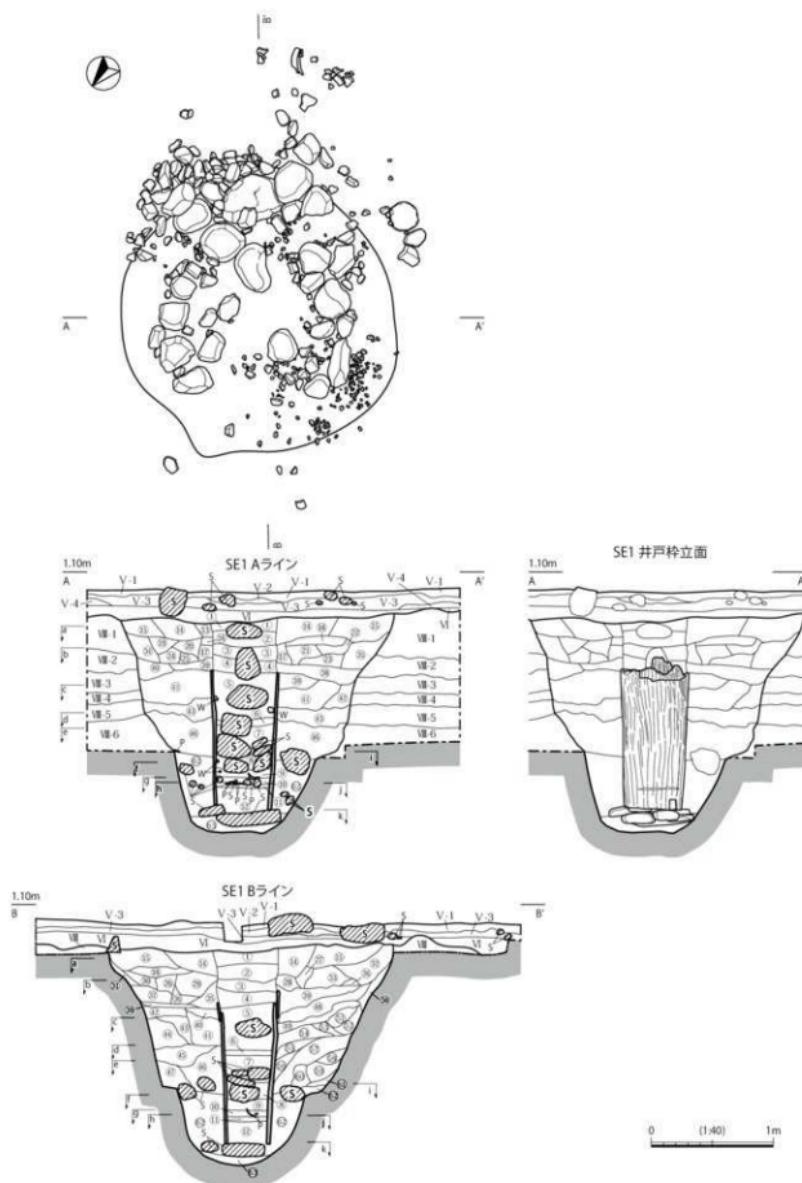
井戸の上部構造である配石は、径30~50cmの大型礫を北西方向に「コ」字状に開口するように配される。規模は、1.90m×1.65m、開口部幅0.75mを測る。開口部の両側辺はやや膨らみをもち、原則1列に大型礫を並べる。隙間に中型礫を埋ませているものも認められる。一方、開口部の対辺には複数列の大型礫を配し、中央には長さ50cmほどの最大級の扁平礫を置く。その外側には15~20cm大の中型礫が敷かれる。開口部の外側には、径5~10cmの大いな小礫が広がっている。石材は安山岩や花崗岩で、大型のものは円礫、中型のものは亜角礫が多い。調査区内の基本層序に礫は全く含まれないので、これら大量の礫は遺跡外から運び込まれたものである。井戸本体は配石区画内のやや北寄りに位置する。

掘方は、断面描録形を呈し、底面より60cm上方で幅15~20cm程のテラスを設けて上段と下段に分かれる。掘方上段は南北2.2m×東西2.25m、掘方下段は南北1.04m×東西1.09m、底面は南北0.44m×東西0.46mを測る。検出面から底面までの深さは1.77m。

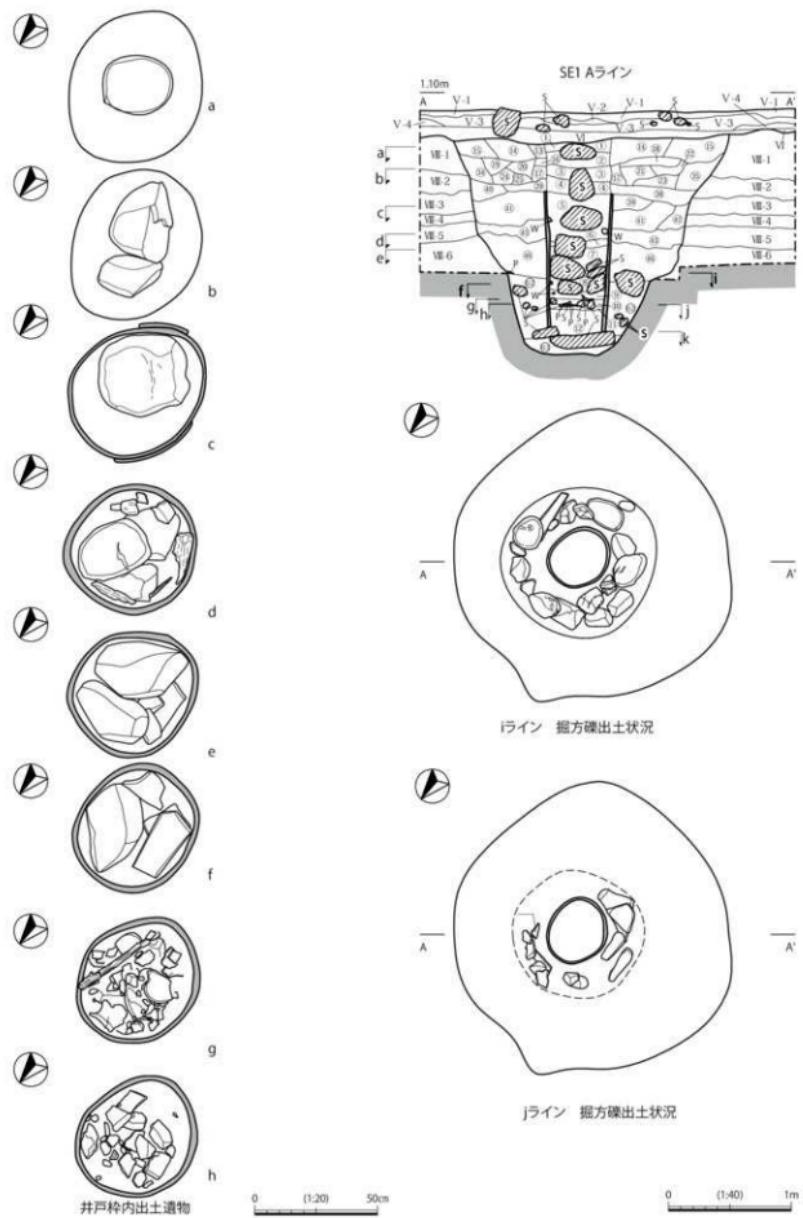
掘方下段は、さらに井戸枠底面を境に、下部と上部に分かれる。下段下部は、掘方底面から5cm上方に盤状礫8枚を据え、井戸枠設置面としている。検出面から設置面までは1.6mである。掘方底面と盤状礫の隙間に粘質土の第63層を充填しているが、これは井戸枠沈下防止のためであろう。下段上部は井戸枠設置後、砂および礫からなる第62層を充填する。礫は径20~50cmほどの安山岩や凝灰岩の円礫や角礫を多用し、井戸枠外側に沿うように上下2段にわたって配置されている。井戸枠固定のためと考えられる。砂は井戸枠最下層の第12層と近似し、調査区内の堆積ではみられない川砂を、他所から持ち込んで充填したものである。その目的は水の遮過であろう。

掘方上段の堆積土は、白色・黄色ブロックを含んだ不規則な堆積状況であったが、総じて第38~61層の黒褐色粘質土をベースとした下層群と、第14~37層の黄灰色シルトをベースとした上層群に分かれる。井戸周辺の基本土層であるVII-3~6層(黒褐色粘土)が前者に、VII-1・2層(黄灰色シルト)が後者にはほぼ対応する。掘方の埋め戻しに際して掘削土の特性を把握し、水の浸透や浄化など井戸の機能を意識したものと想定される。掘方埋土は井戸枠に隙間なく密着していた。

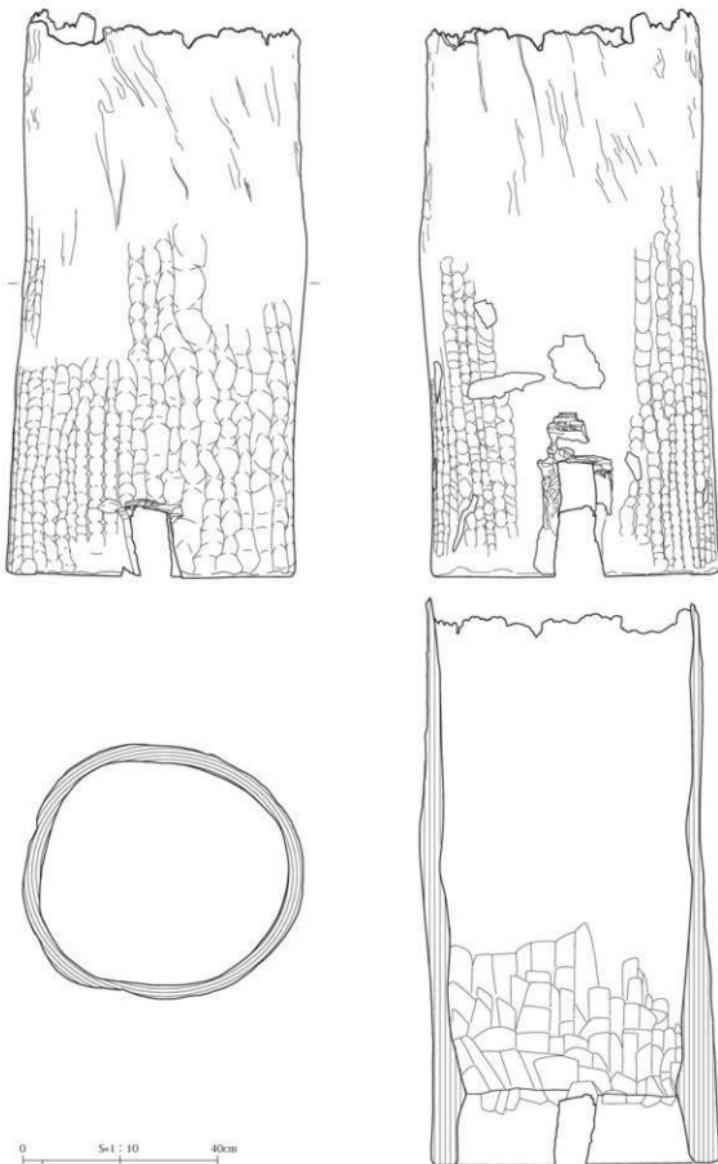
井戸枠は、掘方中央に垂直に上下2段が据えられ、上段井戸枠内に下段井戸枠を5~10cm程度嵌めこんだ状態で出土した。上段井戸枠は断片的にしか残っていないが、外径56cm、内径53cmに復元される。残存高はわずか23cmだが、土層の堆積状態から復元すると推定高は約57cmとなる。下段井戸枠は高さ1.15m、外径60cm、内径55cmを測り、平面形は精円形を呈する(第94図)。上部で2~3cm、下部で5~8cmほどの厚みがあり、下部ほど厚みが増す。底部の短軸上に2箇所、高さ16~23cm、幅10~15cmの長方形の割り込みが施されている。これは、井戸枠外の砂層(第62層)を透過した水の取入口と



第92図 SE 1 (1)



第93図 SE 1 (2)



第94図 SE 1 井戸枠

考えられる。内面は、底面から14cm上の割り込みの上端あたりで稜線を描いて6cm程すばまる。腐食が進行していない下半部では、内外面とも鉄製工具による加工痕がよく残っている。専用の井戸枠として製作されたものと考えられる。樹種同定の結果、井戸枠の樹種は上・下段ともタブノキであった。

井戸枠の内部には、細砂をベースに小礫が混じる第12層が厚さ20cmほど堆積していた。この細砂層の上面には、拳大の礫と意図的に破碎した土器小片からなる第11層が認められた。いずれも井戸構築段階で形成されたもので、水の浄化と砂の吹き上げを防ぐ機能を有していたものと考えられる。第9・10層が使用時あるいは直後に形成された土層と考えられ、土器片、木片や有機物が多く含まれている。土壤の水洗選別により、桃の核やクルミなどの種子も確認された。第1～8層は、井戸の廃絶時に意図的に埋め戻された土層である。土層と交互に、径30～50cmの大形礫を6段にわたって並列もしくは単体で詰め込んでいる状況が確認された(第93図)。廃絶に際して井戸が入念に封じられたことが分かる。第2～3層中には、土器片、緑色凝灰岩素材、木片などが多く含まれていた。

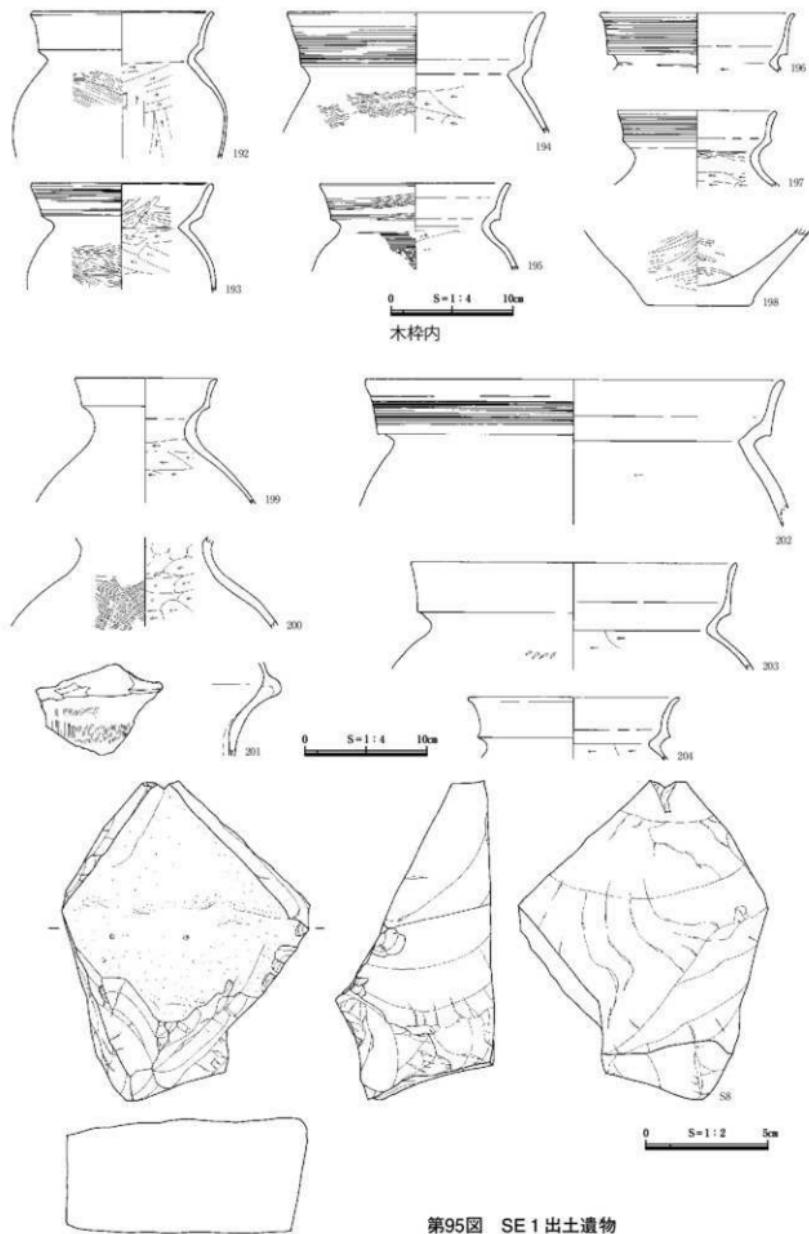
出土した遺物は土器類や玉素材と、種子や昆虫などの自然遺物である(第95図)。

土器が出土した土層は、大きく4群に分かれる。①群：第2～3層で、埋め戻し段階の廃棄もしくは混入土器(200～202)、②群：第9～10層で、井戸の使用段階における混入土器(193・196・198)、③群：第11層で、井戸構築段階の敷設土器(192・195)、④群：第14～62層の掘方埋土の混入土器である。このうち、④群は微量であり、③群も小片が多くすべて掲載できていない。いずれも弥生時代後期後葉を中心に終末期までの甕と壺であり、井戸が機能した時期が分かる。S 6は井戸枠内2層出土の在地産とみられる緑色凝灰岩剥片。厚手で、主潤離面と側面がわずかに磨滅するので、玉素材として持ち運ばれたものであろう。

井戸枠内10層から出土した桃核1点と、上・下段井戸枠の破片について放射性炭素年代測定を実施した(第4章第2節)。 2σ 暦年較正年代で、桃核が80calAD～221calAD、上段片が43calBC～57calAD、下段片が44calBC～57calADという測定結果であった。

井戸SE 1の性格を明らかにする上で、海成粘土層と考えられる層中に設置されたこの井戸の水質が飲用に適していたかが問題となった。そこで、機能時の堆積物である井戸枠内10層の土壤について、珪藻と電気伝導度の分析を実施した(第4章第4節)。その結果、不思議なことに珪藻化石は全く検出されなかった。これについては、井戸枠内は光合成ができるような環境だったか、堆積後に分解消失したと考えられる。電気伝導度については汽水成堆積物を示す値となった。機能時の水質は塩分を含んでいた可能性があり、そうであれば、日常的な飲料水のための井戸とは考えにくくなる。

神木として扱われることも多いタブノキを用いた専用の井戸枠をもち、地上部に大規模な配石を有し、廃絶に際して入念な井戸封じが行われ、付近に祭祀の痕跡とみられる土器集中が多く分布することなどを考え合わせると、祭祀を目的に設けられた井戸としてよいであろう。木製井戸枠をもつ井戸としては県内最古のものであり、全国的にも有数の規模のものであることから、弥生時代後期における秋里遺跡の先進性を端的に物語る遺構であると評価される。



第95図 SE 1 出土遺物

5 土器集中

秋里遺跡でこれまでに実施された発掘調査においては、大量の土器が、土坑や溝などの掘り込みを伴わずにまとまって出土することが知られてきた。各調査者によって「土器溜まり」「土器群」等と呼ばれてきたこの種の遺構は、今回の調査区でも見つかっている。特に今回は、平地建物の焼失住居がそのままパックされるような良好な堆積環境に助けられて、地表面に置かれたままの状態で検出できたものも多かったため、「土器集中」と呼ぶことにした。判断基準は、2個以上の土器が含まれること、掘り込みを伴わないこと、分布が散漫でないこと、周間に空白地帯があることである。実際には、意図的に地面に土器を置いたと考えられるもの(土器集中1・9など)ばかりでなく、住居等の遺構に関係した可能性があるもの(土器集中16など)や、主に廃棄によって形成された可能性があるもの(土器集中15など)が含まれている。

土器集中1(第96・97図、PL32)

調査区北部のC3グリッドに位置し、VI-1層上面で検出したもの。土器接地面の標高は0.81mを測る。南北に並べた2つの土師器の壺が、東に口縁部を向けて横倒しになった状態で見つかった。第97図205は中型の壺で元は完形で置かれていたと考えられる。丸底で薄く、肩部に櫛描沈線を施す。これに対し206は上半部のみが見つかった大型の壺で、肩部に2列の櫛描沈線を入れる他に、口縁部から頸部までを半截竹管を組み合わせたS字文と、逆C字文で飾る。いずれも古墳時代初頭のものだが、今回の調査区ではこの時期の遺物はほとんど出土していない。調査区内では、土器集中による祭祀が古墳時代初頭までわずかに残ったことを物語っていよう。

土器集中2(第96・97図、PL32)

調査区北西のB6グリッドの微高地に位置し、VII層上面で検出した。土器接地面の標高は0.66m前後である。南北1.4m×東西1.6mの範囲に、壺1個と甕5個の6個体の弥生土器が環状に分布する。壺(第96図207)は口縁部に擬凹線をもち、腹部を外面からの打撃で穿孔している。穿孔の付近のみ帶状に赤彩する。甕(208~211)は、装飾がなく小型のものが目立つ。壺を中心とした祭祀の場面が想定される。

土器集中3(第98・99図、PL32)

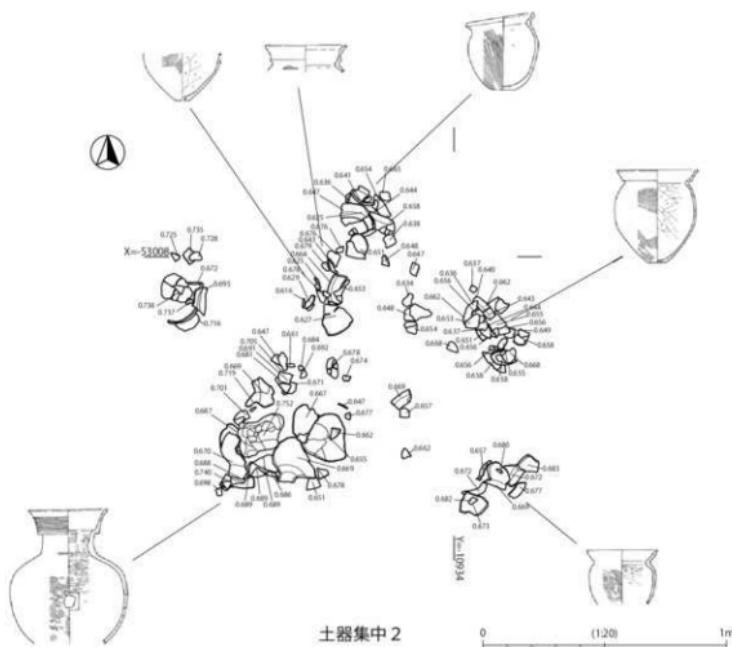
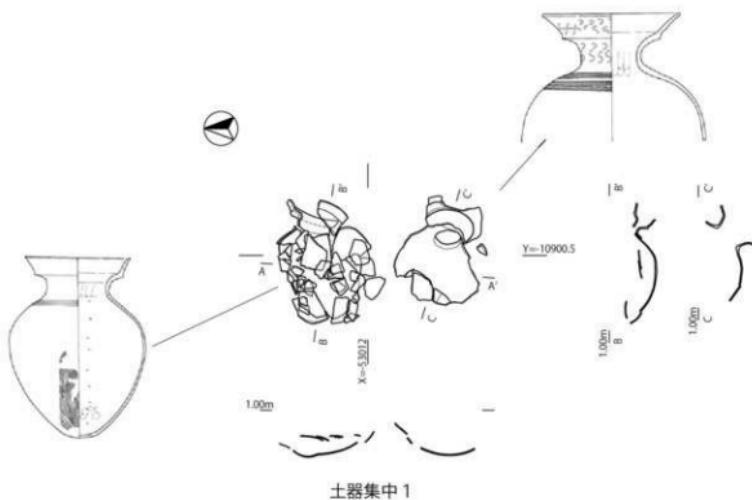
調査区北端のB4グリッドで検出したもので、土器接地面の標高は0.52m前後。0.7×0.5mの範囲に2個体分の甕の破片が分布している。破片はばらばらの状態のため、土器集中とするには弱いかもしれない。甕は中型(213)と小型(214)があり、肩部には波状文と刺突文を施す。

土器集中4(第98・99図、PL33)

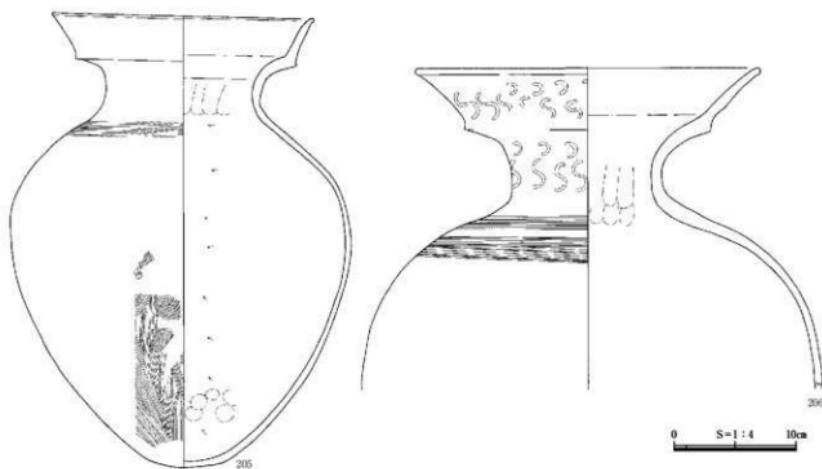
調査区北部C4グリッドのVI-1層中で検出した。3m東方には土器集中5がある。土器接地面の標高は0.60m前後を測る。破片となった特大の甕(第99図215)の中程に小型の甕(216)の破片が位置する。後者は前者の中に入れられていたかもしれない。

土器集中5(第98・100図、PL33)

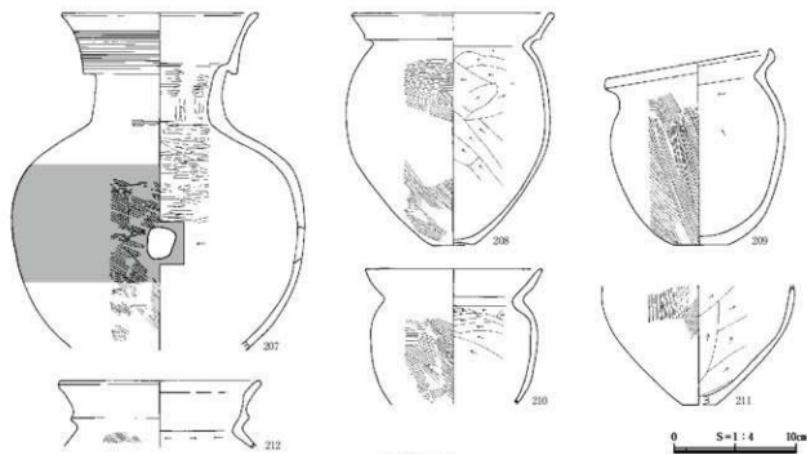
調査区北部のC3グリッドに位置する。VI-1層中の検出で、土器接地面の標高は0.61~0.64mが中心。径0.9mの範囲に、甕ばかり10個体が環状に分布する。中型が5個、小型が2個、小型球胴が2個、口縁部のみが1個で、弥生時代後期後葉のものと、丸底(221・223)や擬凹線を持たない(217・225)終末期のものが混在する。概して装飾性に乏しく、赤彩も施されない。



第96図 土器集中 1・2

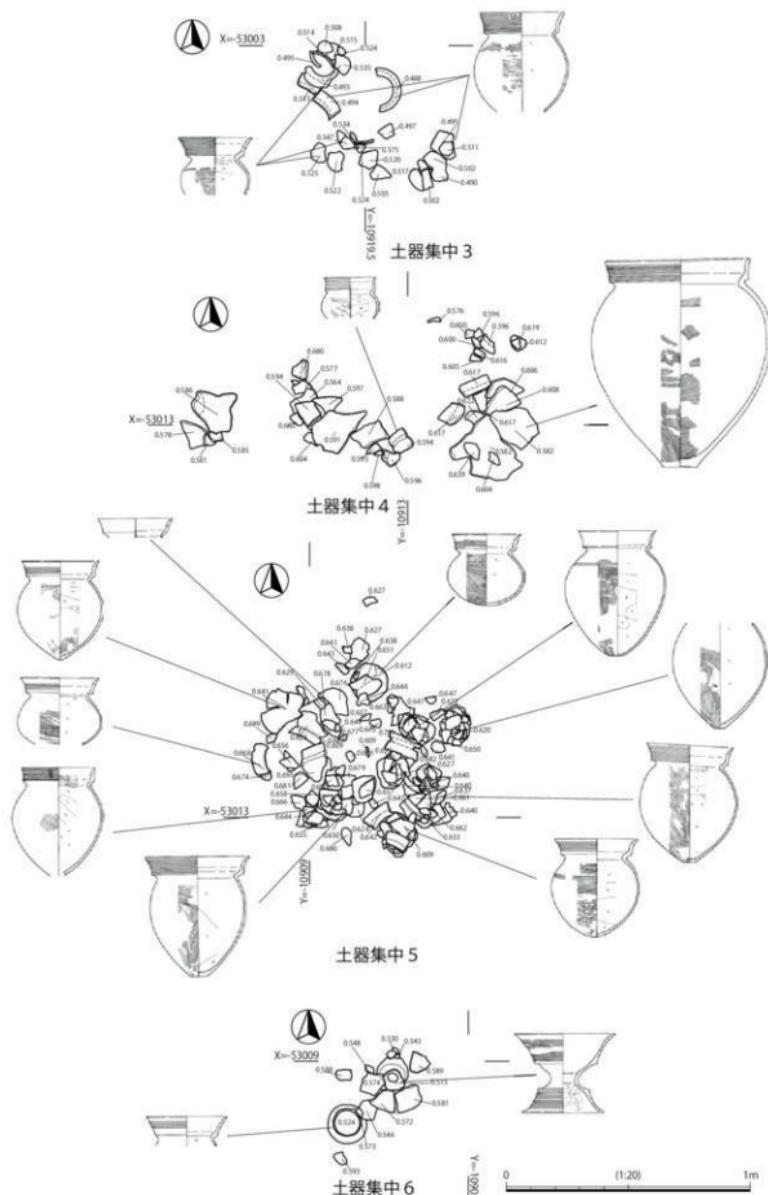


土器集中 1

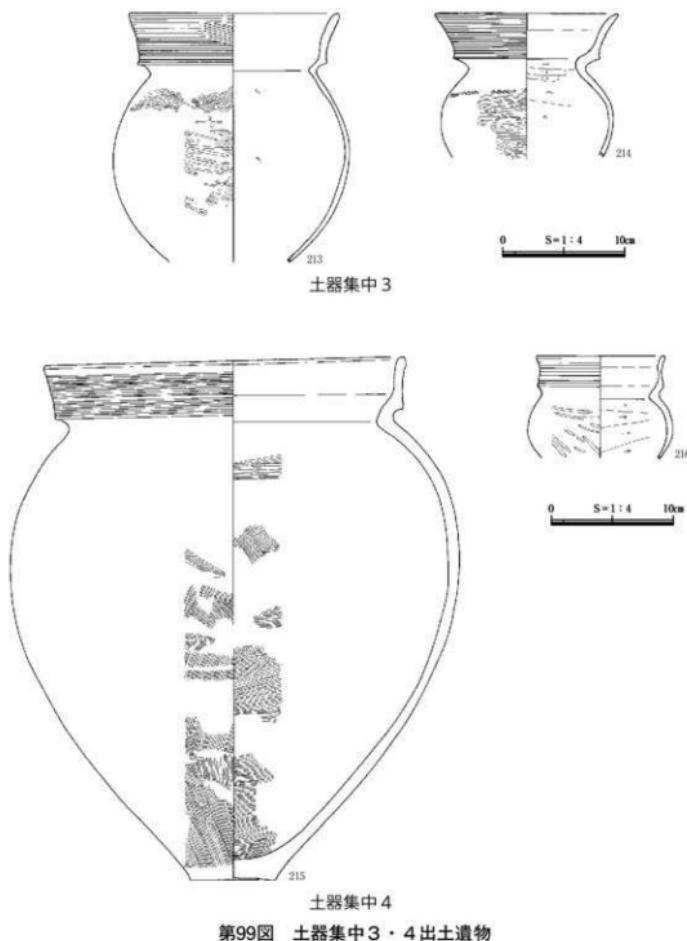


土器集中 2

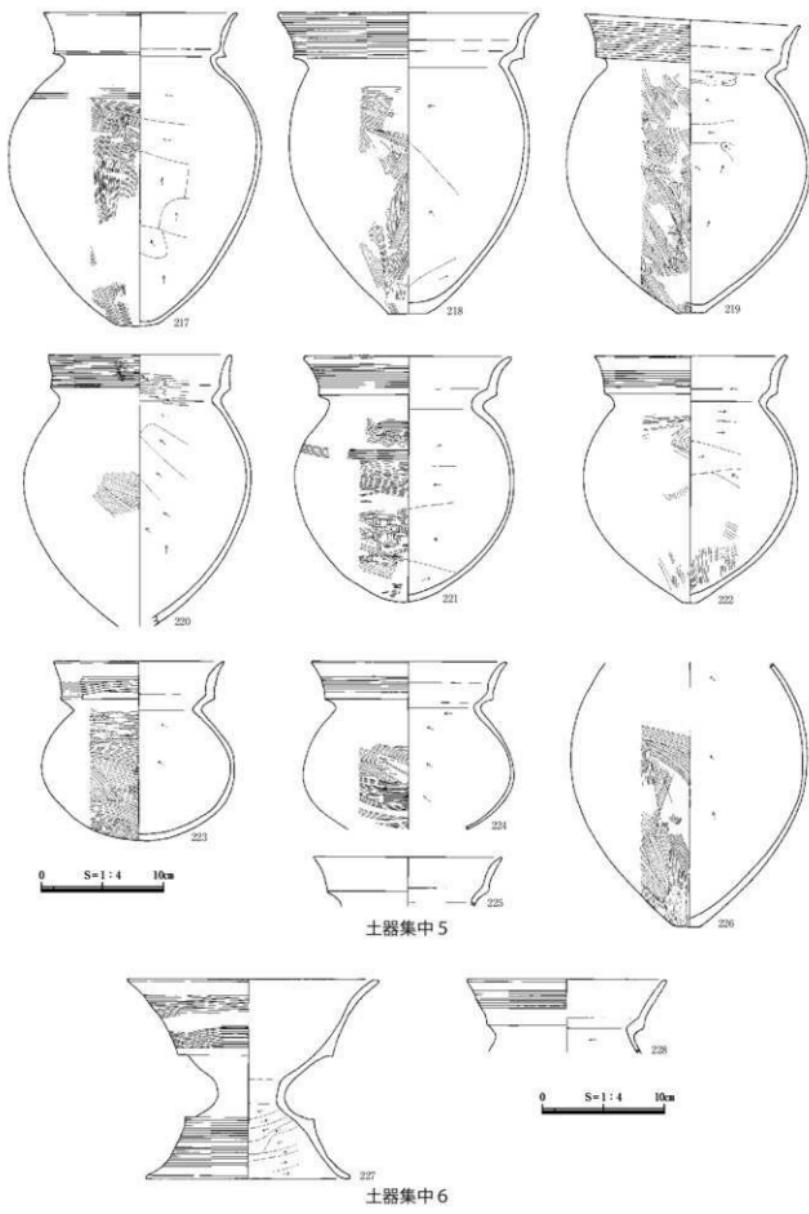
第97図 土器集中 1・2 出土遺物



第98図 土器集中3~6



第99図 土器集中3・4出土遺物



第100図 土器集中5・6出土遺物

土器集中6(第98・100図、PL33)

調査区北東角のB3グリッドで、VI-1層中から検出した。土器接地面の標高は0.52m。1個体分の器台(第100図227)と壺の口縁部(228)で構成される。壺は器台に乗せられていたとするのが常識的だろうが、環状になった口縁部片のみを器台として利用したとみられる例が土器集中15-5にあり、口縁を下にして並んでいることからすると、この例も器台として使われた可能性がある。

土器集中7(第101・102図、PL34)

E5グリッドのVI-2層上面で検出したもので、土器接地面の標高は0.50~0.58mと少し幅があるが、これは西側高地の肩部に位置するため。南北1.2m×東西1.7mの範囲に、9個体以上の土器がやランダムに分布する。構成は壺5(229~233)、高壺2(234・235)、器台1(236)、蓋1(237)である。

単純口縁で円盤状の底部をもつ壺(230)と赤褐色の胎土で3列2段の円形透かしを有する器台(236)は外来の土器の可能性があり、特に後者は、出土状況から在地のスタンプ文土器をもつ小型壺(232)とセットで用いられていたらしいことが注目される。

土器集中8(第101・103図、PL34)

E6グリッドのVI-2層上面で検出した。土器接地面の標高は0.29~0.37m前後で、土器集中7からは7.6m程距離がある。南北1.1m×東西1.1mの範囲に完形の土器と破片が密集する。主に、2点の大型の壺(238・239)、スタンプ文の小型壺(240)と器台(243)、注口土器(244)で構成される。小型壺は3重同心円文のスタンプを4段に押す。注口土器は外面を丁寧に磨くシンプルなもので、スヌが付着することから火にかけて使われたことが明らかである。

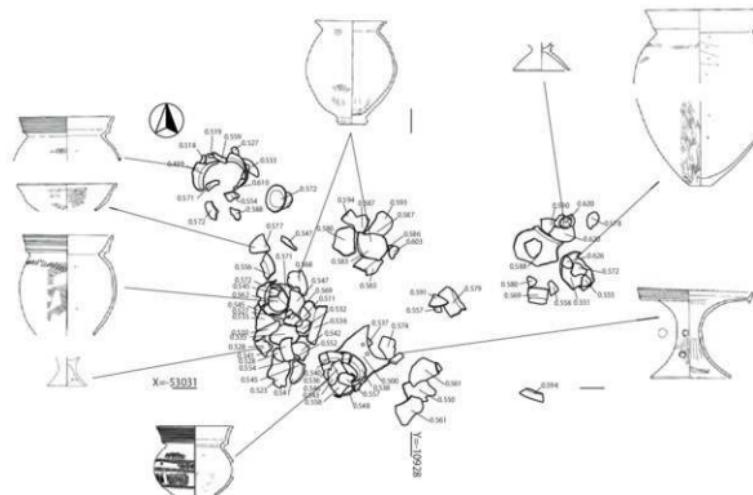
土器集中9(第104・105図、PL34)

G4グリッドのVI-2層上面で検出した。土器接地面の標高は0.52~0.54mを測り、西側に土器集中12がほぼ隣接する。分布範囲は南北1.2m×東西0.9mで、ほぼ平らな地表面に、高壺だけを壺部と脚部に分解して並べる。壺部(第105図245~255)は9個体で、西から南北方向に2・3・1箇所ずつまとめられている。壺部が大きく破損せずに分解できた4個体については、西列の2個は内面を上に向かって、中列と東列の各1個は外面を上に向かって置かれる。分解時に壊れた壺部については、個体ごとに破片を重ねて配列されている。脚部(256~258)は3個体分しかなく、東列の壺部の北側にまとめられている。不思議なことにいずれも壺部とは接合しない。本来の脚部は転がっていったのだろうか。何らかの意図に基づいた行為の痕跡をよく遺しているものの、その意図を理解することは困難である。ただ、祭祀に用いられた壺や壺が穿孔によって機能を絶たれている例を参照すれば、高壺を最も特徴づける部分である脚部を取り外されている本例は、まさに祭祀行為の痕跡であると言ってよい。

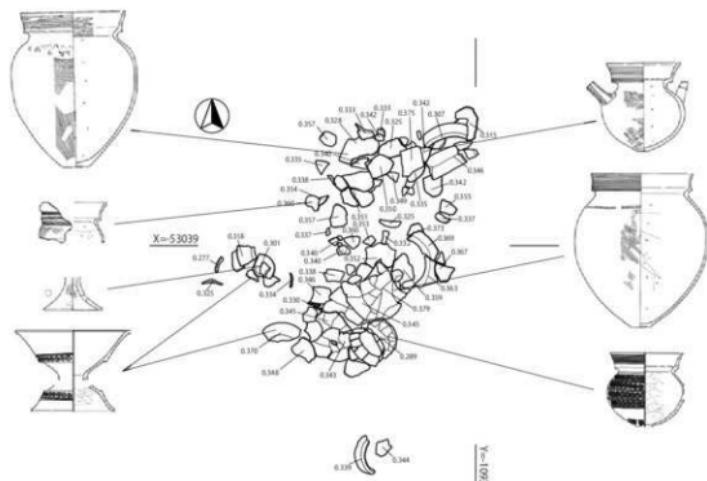
出土した高壺はいずれも黒灰色を呈し、壺部の中程がわずかに屈曲するよく似た形態のもの。特別に用意されたいわば兄弟の土器である。

土器集中10(第105・106図、PL35)

G3グリッドのVI-2層上面付近で検出し、土器接地面の標高は0.55m前後を測る。土坑の掘方は検出できなかったが、底部を抜いた3個体の中型の壺が連結されたような状態で出土したことから、本来はSK198のような埋壺であった可能性がある。壺(第105図259~261)は口径18cm前後のよく似た規格のもので、肩部に波状文か刺突文が施されている。

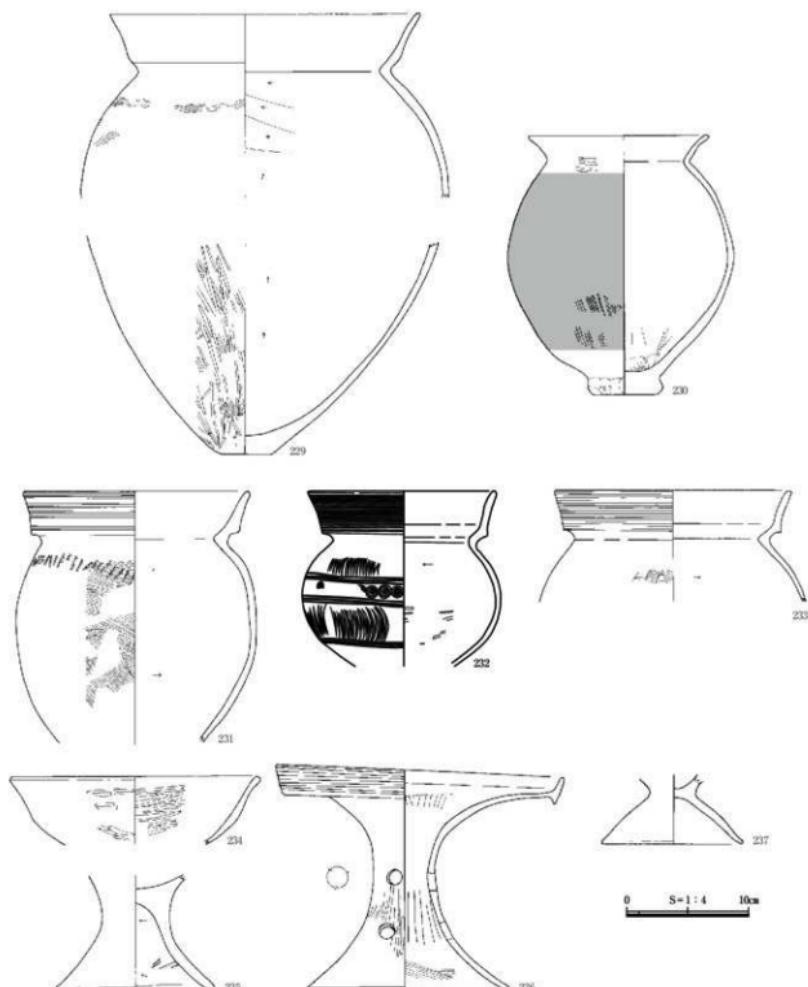


土器集中7

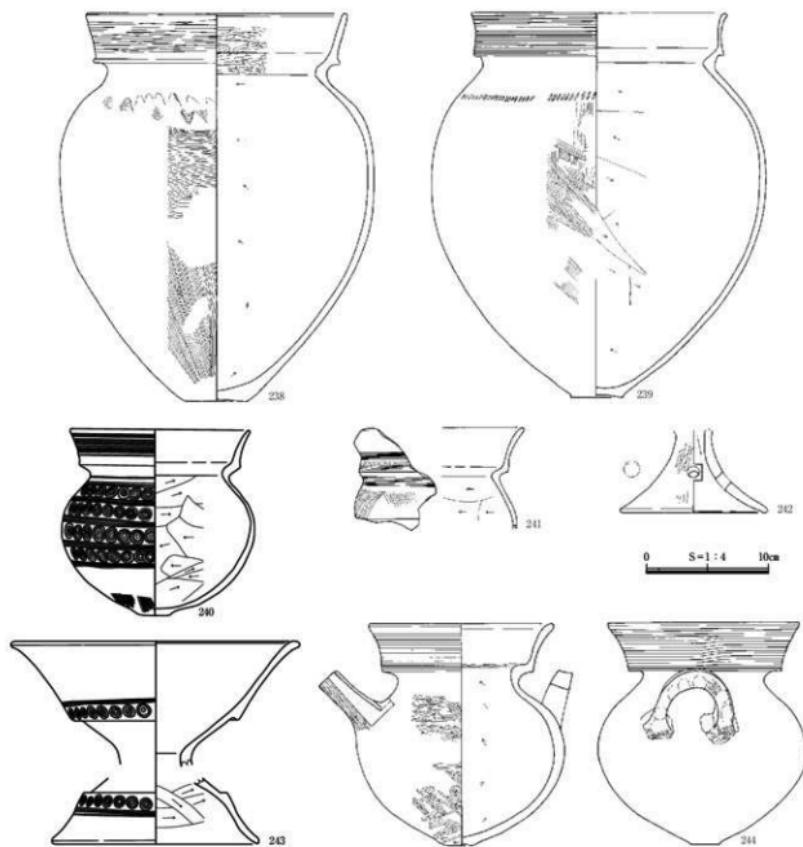


土器集中8

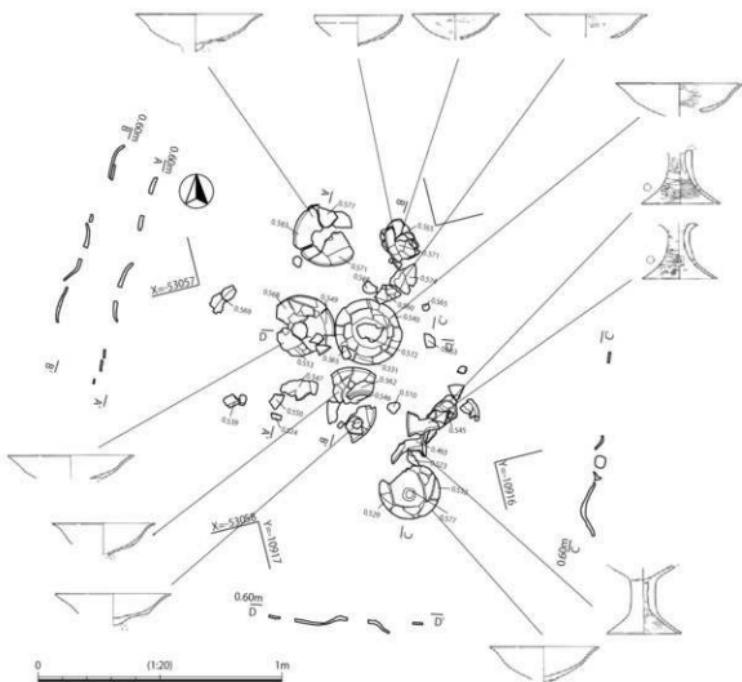
第101図 土器集中7・8



第102図 土器集中7出土遺物



第103図 土器集中8出土遺物



第104図 土器集中9

土器集中11(第106・107図、PL35)

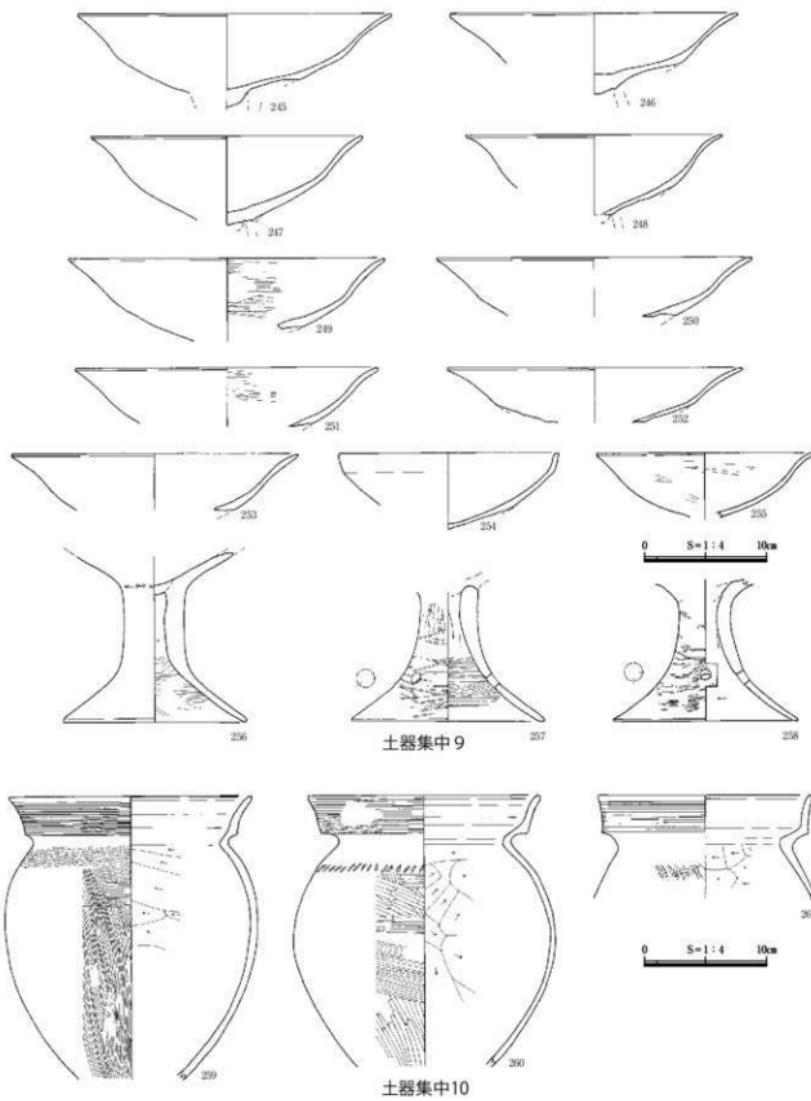
調査区中程の北寄りE 5 グリッドに位置し、VI - 2層上面付近で検出した。ほぼ南北方向、2.9mの一直線上に3個体の土器が北から1.1mと0.5mの間隔を置いて並べられている。西微高地帯の起伏がある位置にあるため、土器接地面の標高は0.38~0.50mとやや高低差がある。出土した土器は北から、単純口縁の壺(262)、口縁部が短く内外面ハケメ調整の中型の壺(263)、蓋または椀(264)。赤褐色で特異な形状の後2者は、外来の土器であろう。南北一列に土器を並べる点では後述する土器集中13に似ており、結界的な意味合いをもつ可能性がある。この土器集中11の場合は、井戸などがある西微高地と低地の境界を意味するものであろうか。

土器集中12(第106・107図、PL35)

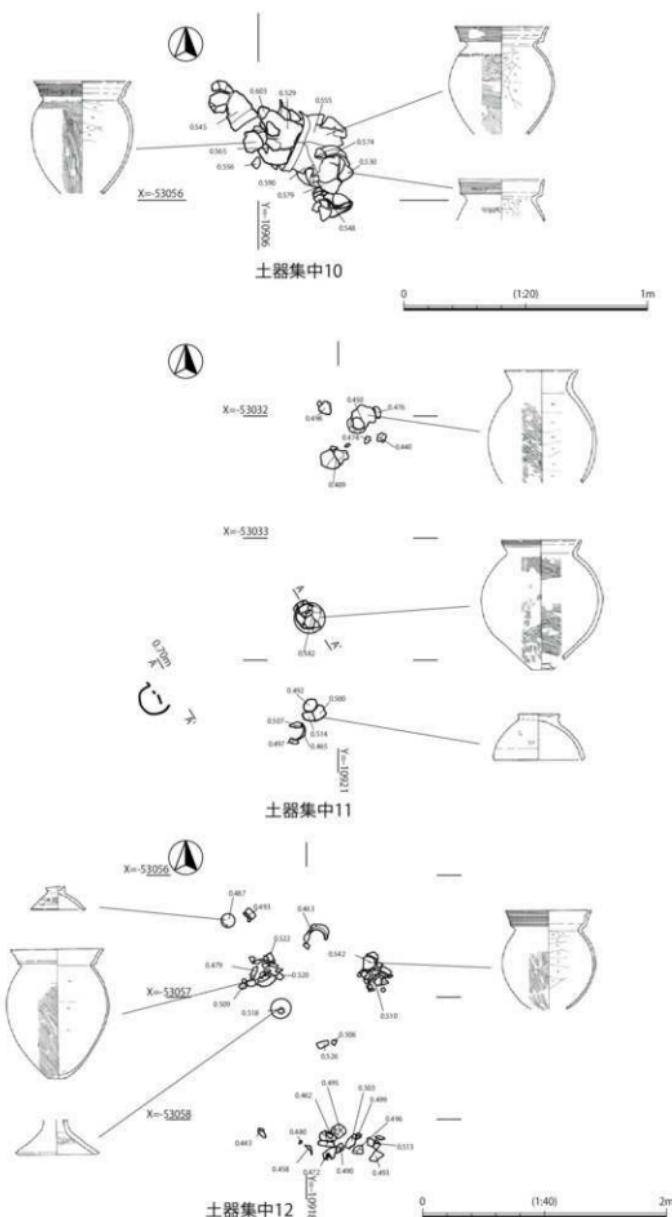
G 4 グリッドで土器集中9の西隣のVI - 2層上面付近から検出した。土器接地面の標高は0.47~0.52m前後と土器集中9よりも少々低い。南北2.1m×東西1.4mの範囲に南北に分かれて土器が分布し、南部は破片を中心である。壺2(第107図265・266)、高壺2(267・268)、蓋2(269・270)が含まれる。他の土器集中と比較して、分布にも内容にもまとまりが乏しいため、意図的なものではないかもしれない。

土器集中13(第108・109図、PL36)

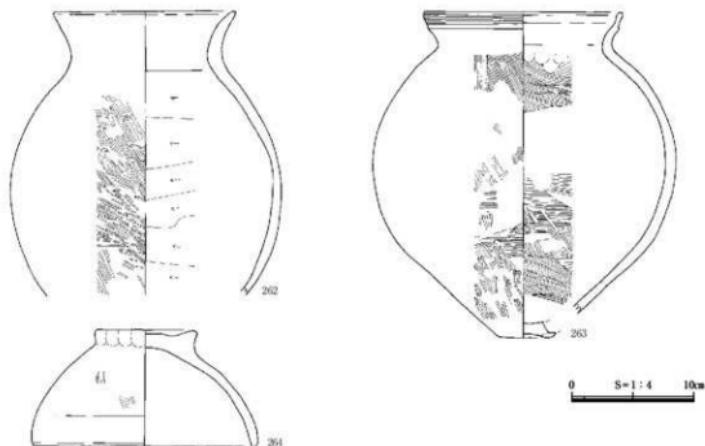
調査区西部J 9・K 9 グリッドのVI層中で検出した。南北5.9mの一直線上に、最大2.1mの間隔を取



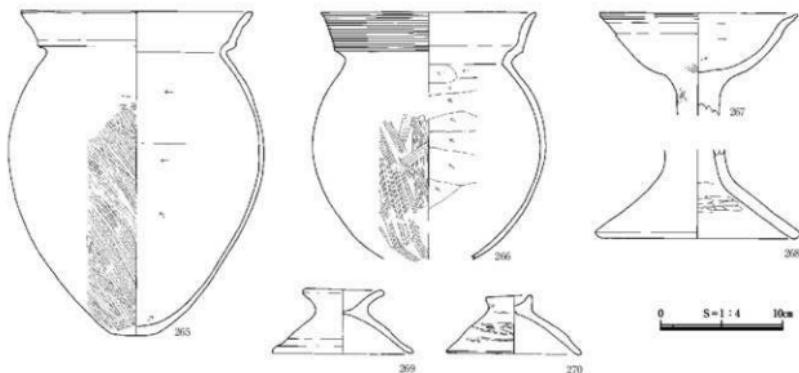
第105図 土器集中9・10出土遺物



第106図 土器集中10~12

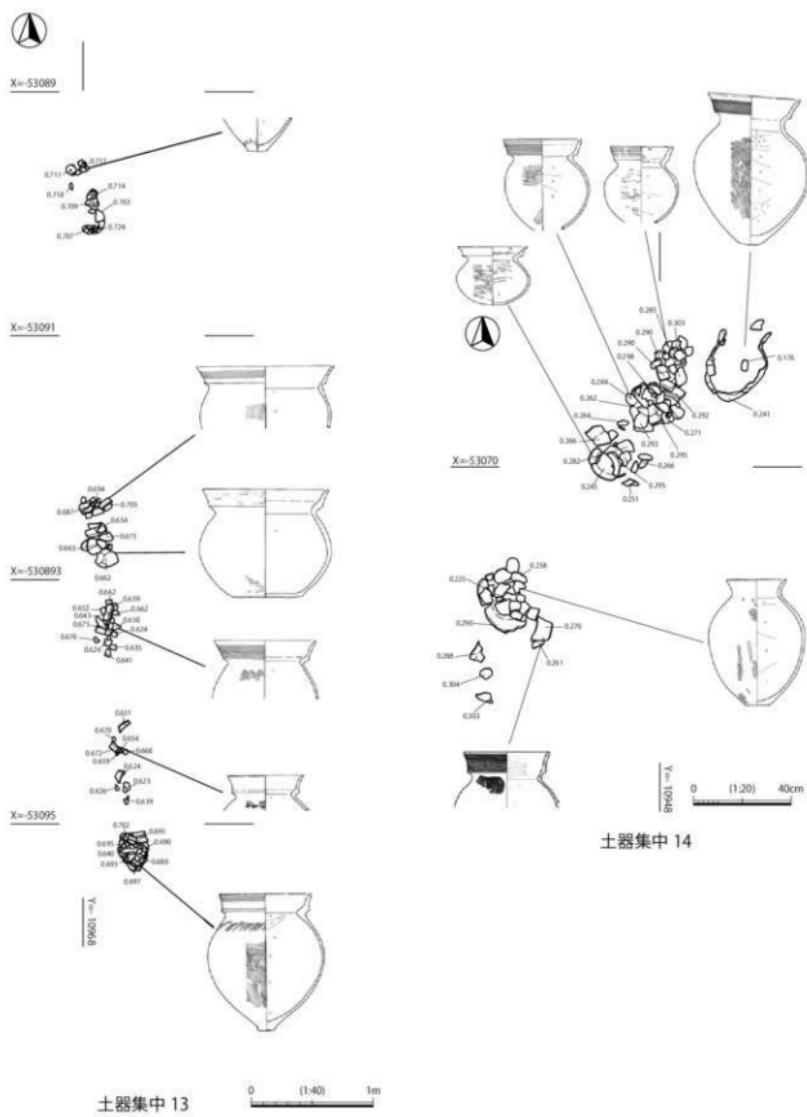


土器集中11

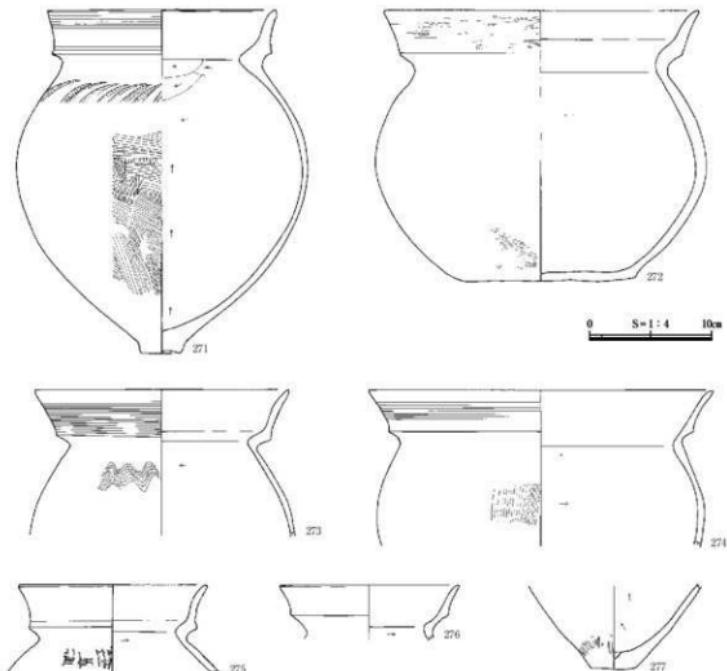


土器集中12

第107図 土器集中11・12出土遺物



第108図 土器集中13・14



第109図 土器集中13出土遺物

りながら6個体以上の壺が並べられている。土器接地面の標高は0.62m~0.72mを測る。南低地の西岸に孤立して設けられたもので、周間に弥生時代の遺構はなく遺物もほとんど出土しない。集落の西の境界上で行われた祭祀の跡と推定される。寸胴で底が平らな形態のもの(第109図272)を含め、さまざまな壺が並べられていることは、この結界の祭祀が1回で行われたものでないことを表すのだろうか。

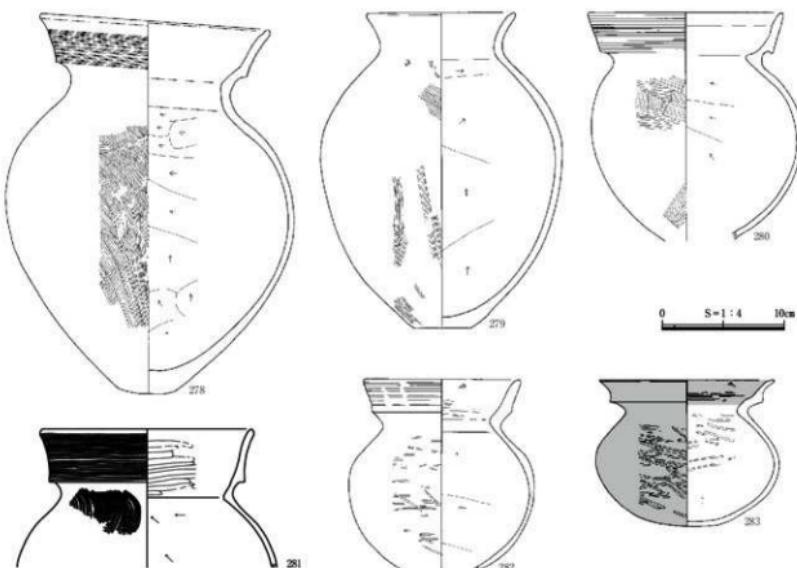
土器集中14(第108・110図、PL36)

H7・I7グリッドに位置し、VI層中で検出した土器集中。分布は2箇所に分かれ、北部には壺1(278)と小型壺3(280・282・283)が密集し、0.5m南西に壺1(279)と壺口縁部片(281)が位置する。土器接地面の標高は0.24~0.29m前後を測る。南低地の北端に位置し、付近には弥生時代の遺構がないことから、土器集中13と同様の性格をもつ可能性がある。

土器集中15(第111~126図、PL37)

調査区東南の、H4・H5グリッドからJ4グリッドにまたがる大きな土器集中。検出したのは主にVI~2層相当の土層で、第4遺構面所属遺構として扱うべきものであるが、南低地内に位置し微高地上の遺構よりも相対的に低い層準にあることや、第3遺構の遺構(SI3など)や第3包含層との間に多くの接合関係が認められることなどから、第3遺構面の所属とする。

南北17m東西13mの主要部分の中には分布密度の差があり、遺物が周辺に比べて密集する範囲を、



第110図 土器集中14出土遺物

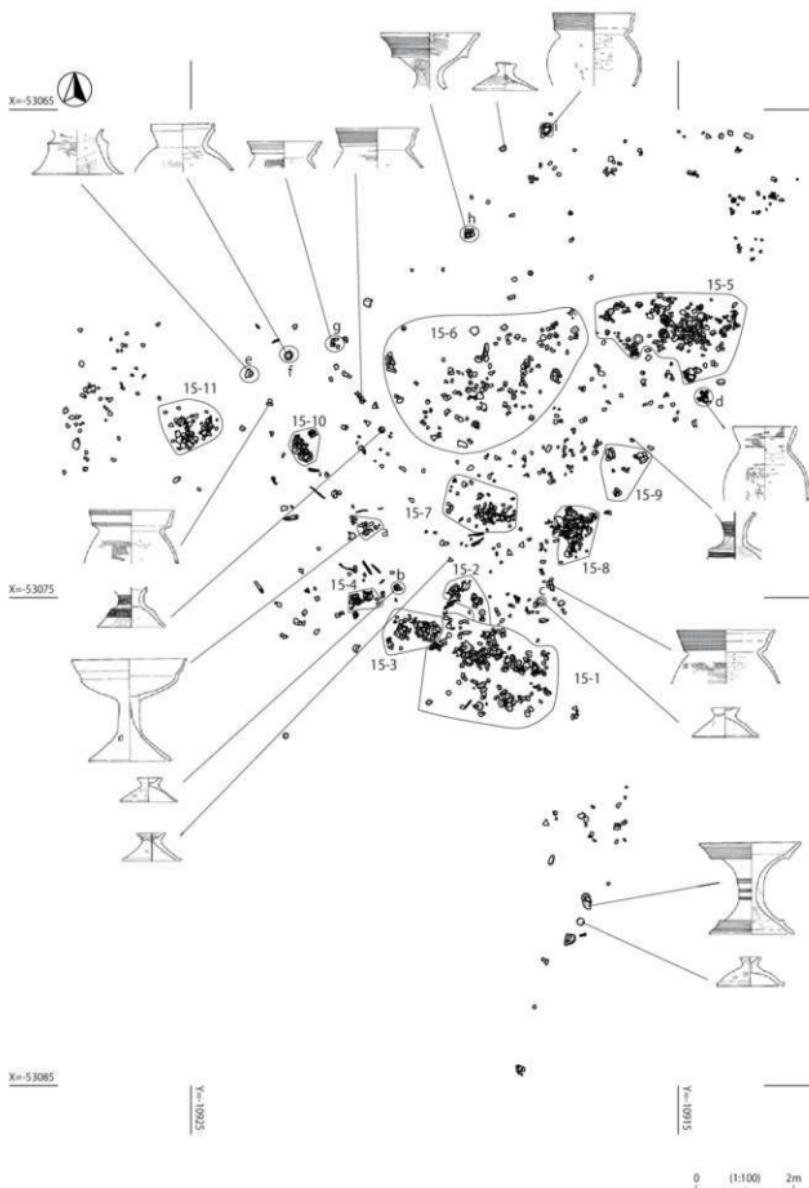
土器集中15-1～15-11として区分した。それ以外の部分は土器集中15として扱う。土器に混じって、SI 1 や SI 3 の焼失住居に由来するとみられる多くの炭化材が出土していることは、他の土器集中と大きく異なる。したがって、何らかの意図をもって配置された遺物以外にも、廃棄されたものや漂着したもののがかなりの割合で含まれているはずである。その一方、土器集中15-8のように明らかに意図的な組み合わせを見出せるものも存在する。

土器集中15として扱った遺物を第112図に示す。脚柱部に凹線やスタンプ文を施す器台(293・296・297)があることと、蓋(298～302)の出土量が多いことが目につく。特に蓋298は蒸気抜きの孔をもつもので、多数の蓋が出土した今回の調査でも珍しい。壺(284～286)は単純口縁かつまみ上げるだけのシンプルなもの。赤褐色の高坏(292)は在地の土器ではないだろう。

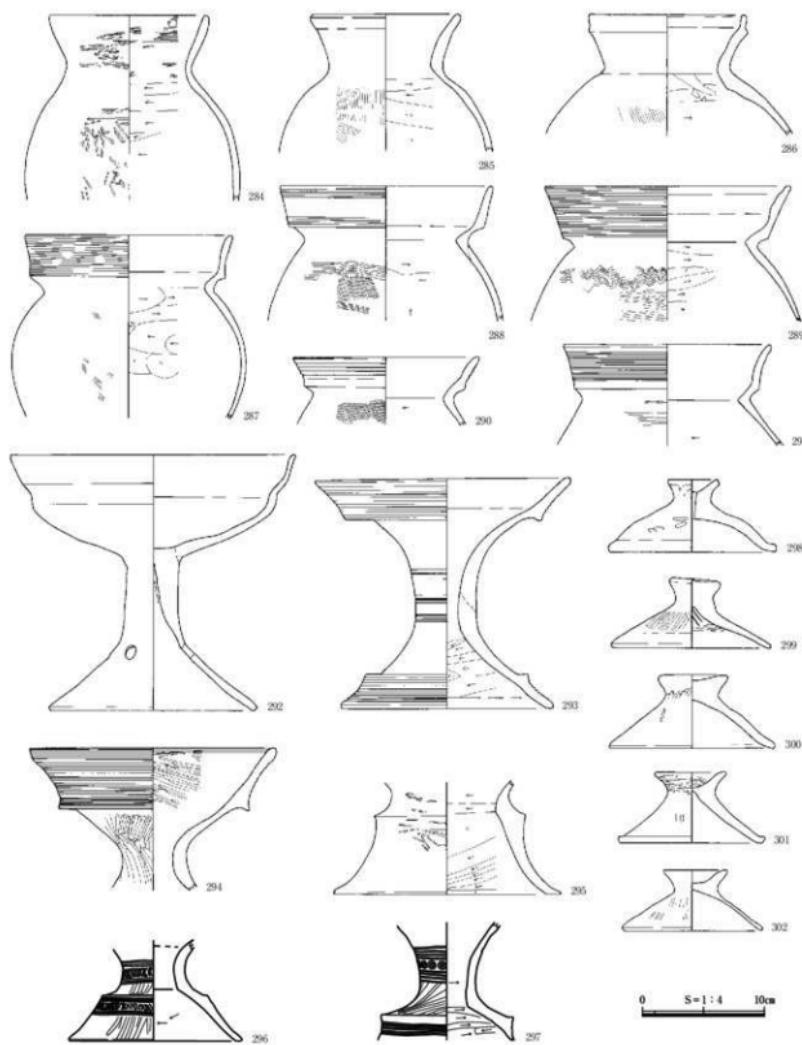
土器集中15-1(第114～116図・PL37)は南東角の密集部で、2.5×20mの範囲。出土した土器はほとんどが破損している。第115図303の壺は頸部付近に巻貝頂部らしき工具による刺突が2点施される。小型壺304と小型鉢316は出土量の少ないもので、精製。壺(305～310)は底部が小さく高台をもつか上げ底になるものが目立つ。317はかなり大型の耳付鉢の耳部分。

土器集中15-2(第116・117図)は、土器集中15-1の北側に隣接する小さな密集部。0.8m四方の範囲に壺3点(第116図318～320)と蓋1点(321)がまとまる。口縁部無文で丸底の壺318は弥生時代終末期のもの。壺319は口縁部に波状文を、肩部に波状文と2段の擬凹線を施す比較的装飾性の強いものである。

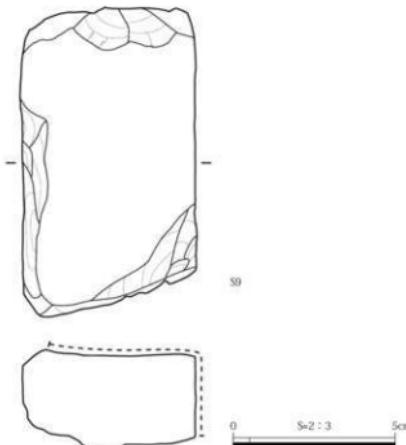
土器集中15-3(第117・118図)も、土器集中15-1に隣接する小密集部で、0.6×1.1mの大きさ。3点の壺(第118図322～324)と2点の高坏(325・326)を含む。高坏はよく似ているのでセットで用い



第111図 土器集中15



第112図 土器集中15出土遺物(1)



第113図 土器集中15出土遺物(2)

られたものであろう。壺322は一見ありふれた中型壺であるが、口縁部外面は擬凹線風にハケで施文し内面はケズリで仕上げる点で特異である。外來者(新妻?)が在地の土器を模倣して製作したものだろうか。壺324は端部が肥厚する無文の口縁をもち、肩部を貝殻腹縁の刺突による波線で飾る。

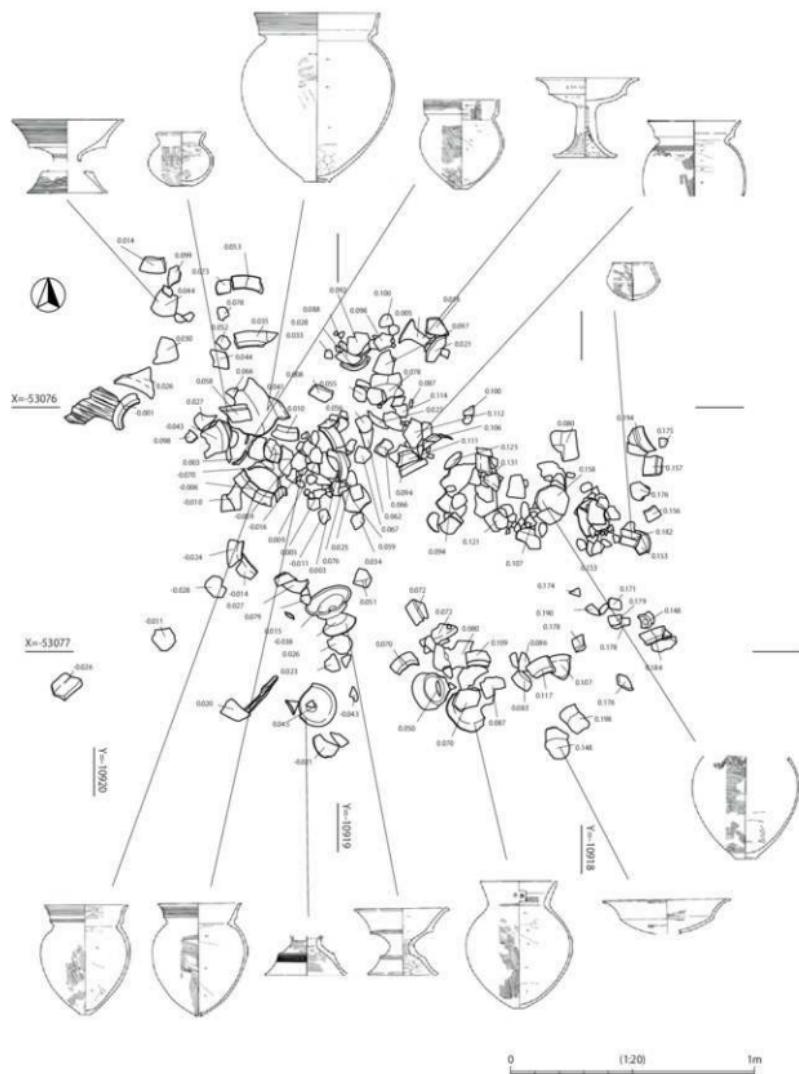
土器集中15-4(第117・118図)は、土器集中15-3から0.5mほど北西に位置し、2点の小型壺(第118図327・328)からなる。328の肩部には、上下を凹線で区画した中に棘付貝殻腹縁文を單一方向に施す。スタンプ文+貝殻腹縁合掌文の簡略版とみられる。

土器集中15-5(第120~122図)は、土器集中15の北東角の密集部で、15-1に匹敵する規模をもつ。1.9m×2.9mの範囲に、壺を主体に多数の土器が分布する。1個体がまとまって出土するものが少ないことは、東微高地から投棄されたか、踏み荒らされた状況を示しているのかもしれない。この点でも土器集中15-1とよく似ており、両端にこのような密集部があることは、土器集中15全体の性格と形成過程を推測する手がかりになるであろう。壺(第121図331~344)は肩部に貝殻腹縁か櫛状工具による波状文をもつ中型のものが多い。壺322は口縁部無文で長胴のもの。小型装飾壺342はC字のスタンプ文と貝殻腹縁合掌文をもつが製作も施文もかなり雑。343は2重同心円スタンプ文を4段に押すもの。第122図351は装飾壺用とみられる帽子形の蓋。350は単純口縁の壺の口縁部で、胴部側に細かな打ち欠きがある。器台に転用したものであろう。

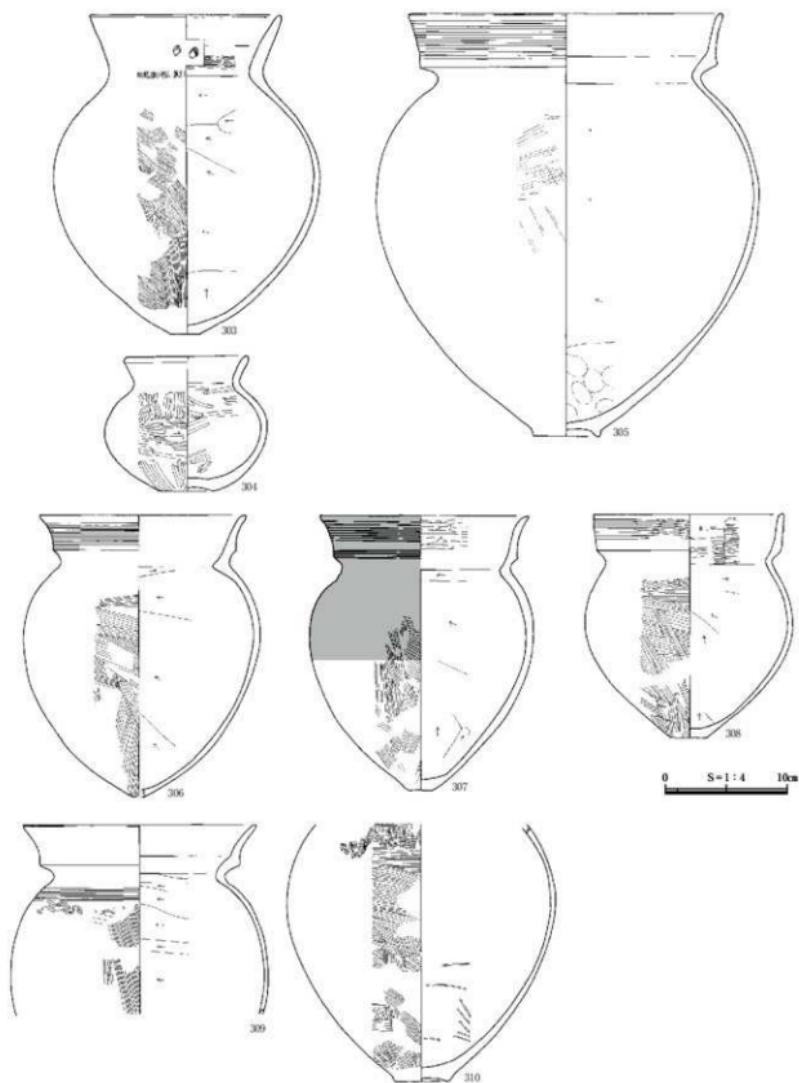
土器集中15-6(第122・123図)は、土器集中15-5の西隣にあるやや散漫な密集部。2.8×4.0mの範囲から、壺口縁部(第122図352)、壺(354~357)、蓋(359・360)などが出土しているが、破片が多い。SI3や土器集中16がある北側から廃棄されたか流れ込んだものが多いのだろう。赤彩を施す脚付壺(353)や土玉(361)が含まれている。

土器集中15-7(第117・119図)は、土器集中15-6と15-2の間に位置する密集部。やはり破片が多く、壺口縁部(第119図329)と壺(330)の1点ずつを図示できるのみ。

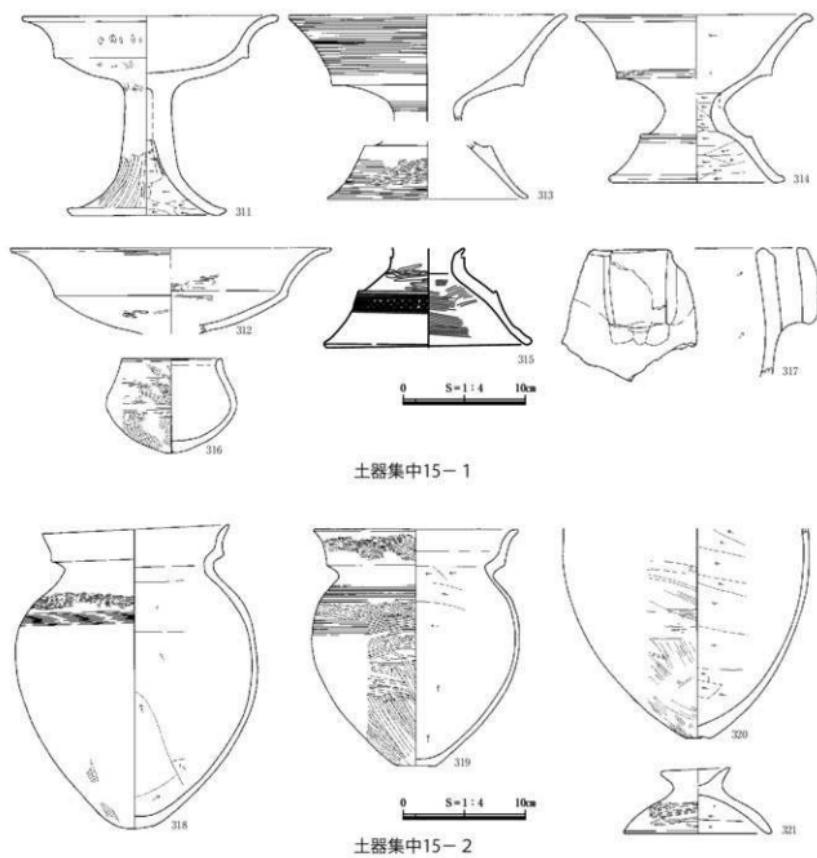
土器集中15-8(124・125図、PL37)は、土器集中15の東縁中央、東微高地から南低地への傾斜変



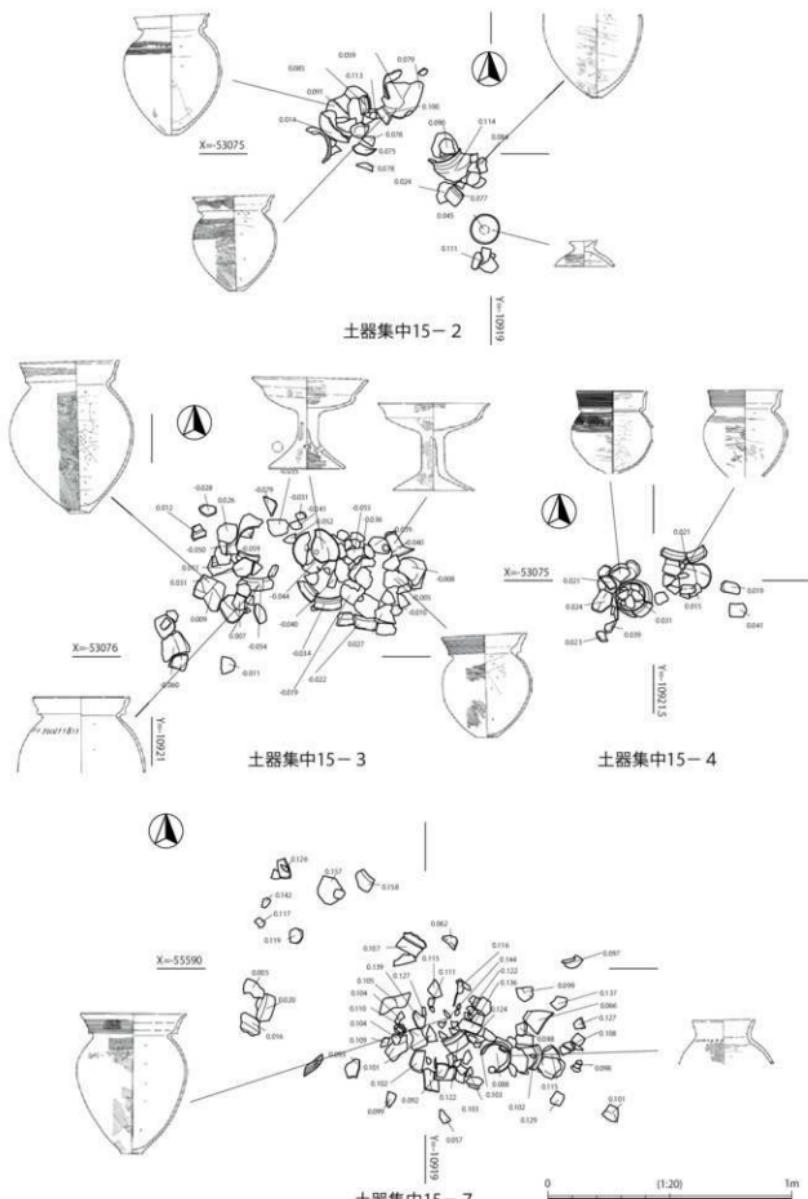
第114図 土器集中15-1



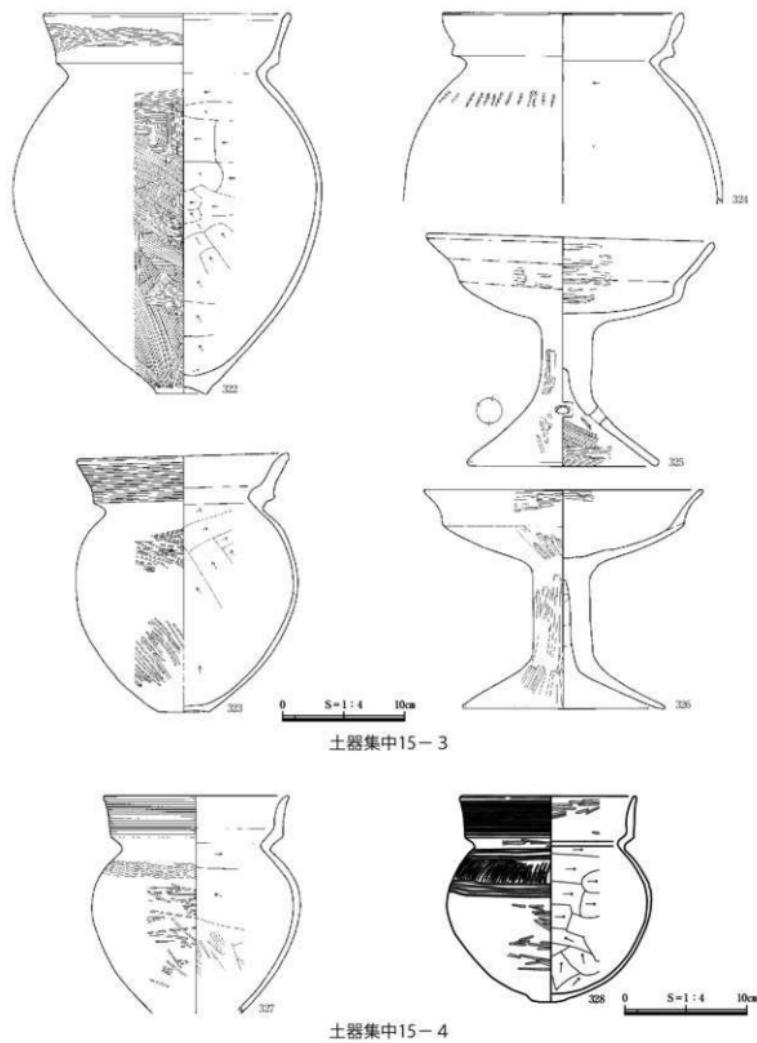
第115図 土器集中15-1出土遺物(1)



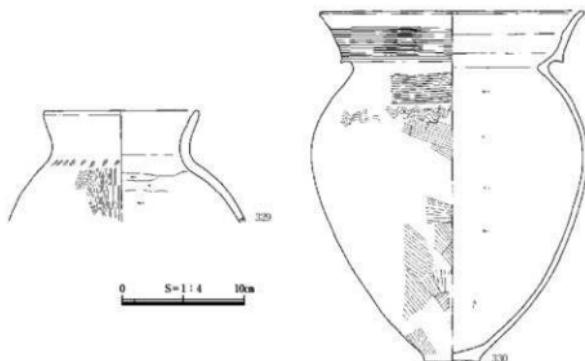
第116図 土器集中15-1・15-2出土遺物



第117図 土器集中15-2~15-4・15-7



第118図 土器集中15-3・15-4出土遺物



第119図 土器集中15-7出土遺物

換点付近に位置する。破片や散漫な分布が目立つ土器集中15全体の中で、最も土器集中と呼ぶにふさわしい密集部である。1.1m四方の中に、完形に復元できる壺1(第125図362)、壺4(363・365～367)、器台1(364)が含まれている。特筆すべきはその出土状況で、肩部に貝殻腹縁の押し引きによる凹線文と波状文を2段にわたり施す大型壺363の内部に、器台364に乗せた小型壺365が置かれていた。大型壺は正立していたとみられ、その3方を壺362と壺366と壺367が囲む形に復元できる。祭祀における土器の配置と大型壺の用い方が分かる。

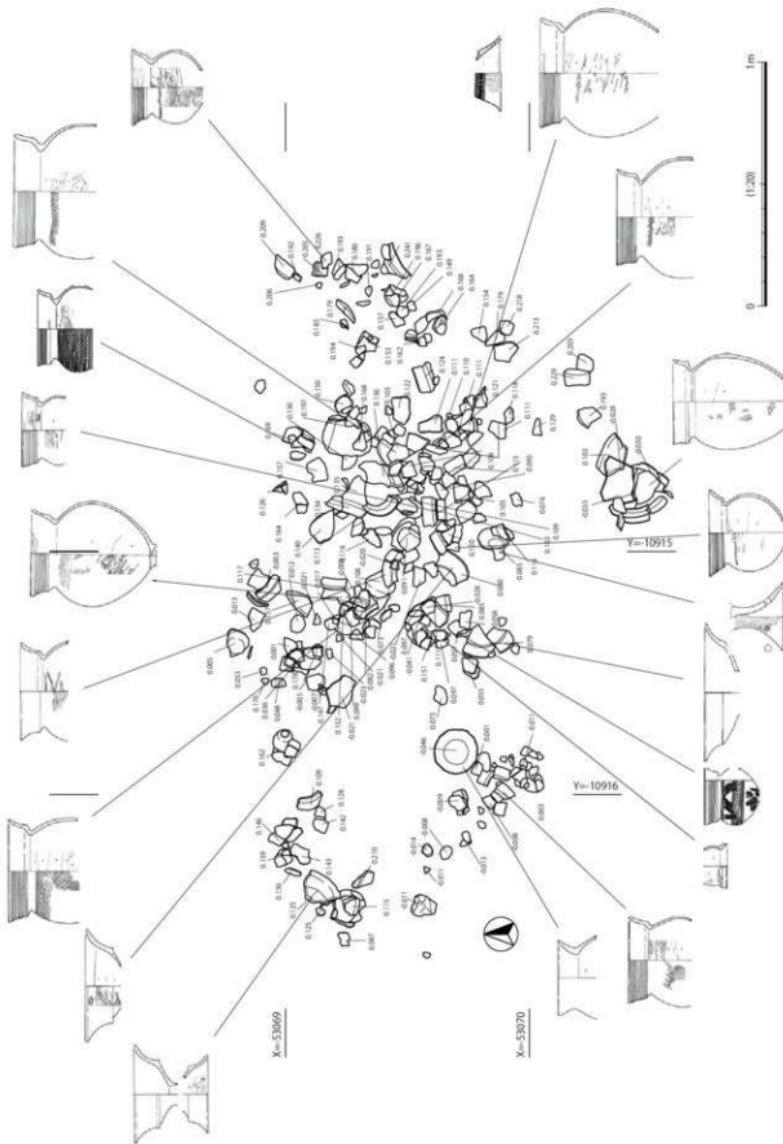
土器集中15-9(第124・126図)は土器集中15-8の北側にある散漫な集中部で、壺(第126図368)と壺(369)が1点ずつ出土した。

土器集中15-10(第124・126図)は、土器集中15の西部にあり、15-8と同様に完形品が集中する。0.6m四方の範囲から、中型(第126図370)・小型(371)・小型球胴(372)の3個体の壺と、1個ずつの蓋(373)、低脚壺(374)、高脚部(375)が出土した。

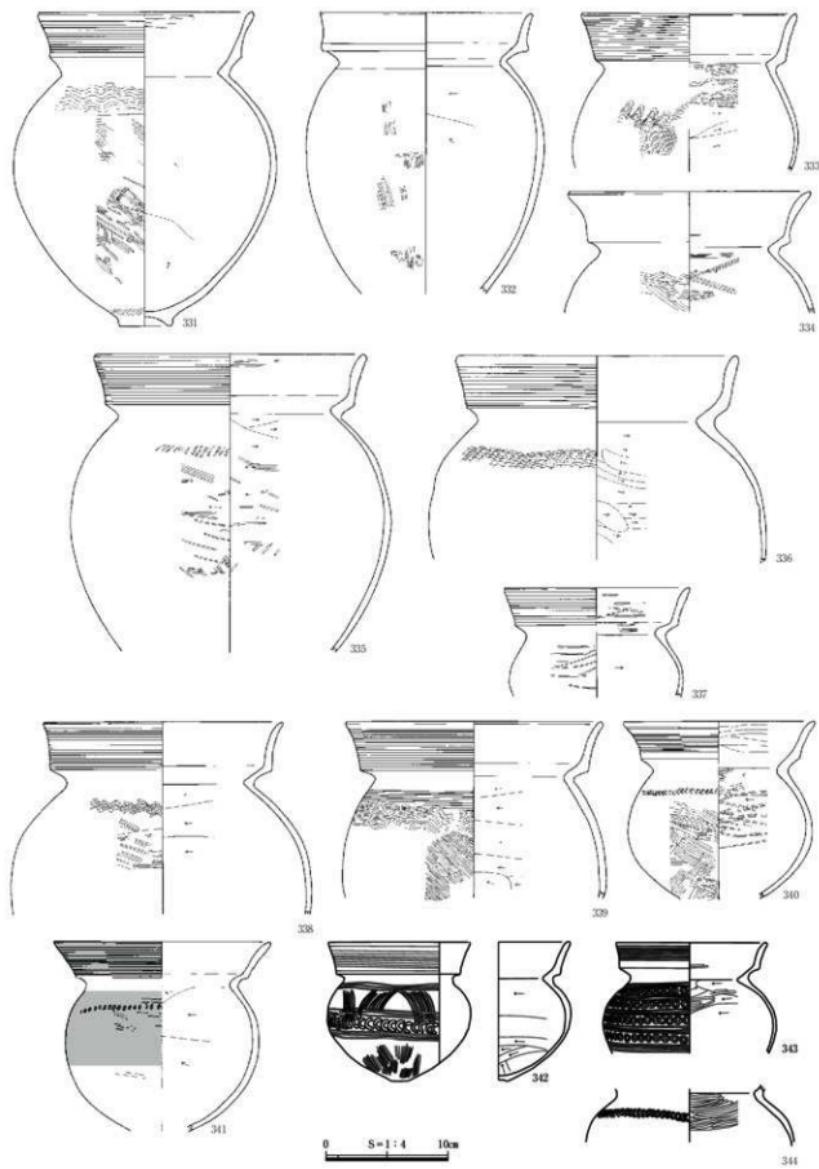
土器集中15-11(第124・126図)は、土器集中15の西端に位置する土器集中で、1点の高脚部の破片(第126図376)のほかは1個体分の山陰型瓶形土器(377)の破片で占められるので、密集部とは言い難いかもしれない。山陰型瓶形土器377は高さ70.6cm、広口径41.4cmを測る大型のもので、膨らみを帶びた形と、胴部中央付近に近接して設けられた把手などから、比較的古い特徴をもつもの。外面下端付近と上部に細縄で締めた痕跡があり、成形時に粘土の重みによる歪みを防いだものと推定される。建物跡に伴って出土することが多い土器であり、土器集中に含まれる例はこの1点のみのため、北側にあるSI3で用いられたものと考えたいが、8m程距離がある。

土器集中16(第127・128図、PL36)

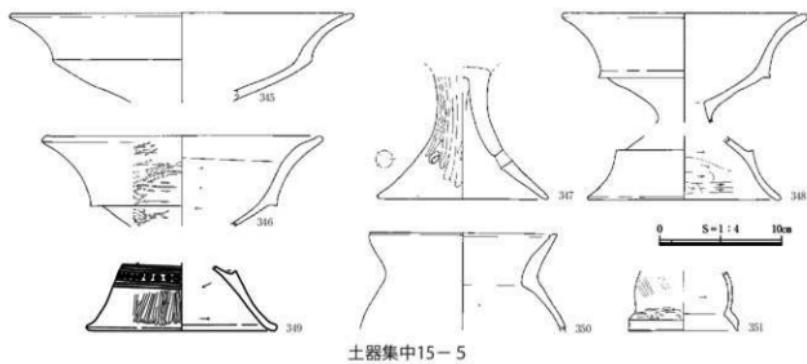
H5グリッドのVI層中で検出した土器集中で、土器接地面の標高は0.15～0.19m前後。南北1.3m×東西1.5mの梢円形を呈する薄い焼土面の上から、7個体の壺(第128図379～385)が出土した。そこから0.9m東で出土した完形の壺(378)もこの集中部に含めている。焼土面をもつ点で他の土器集中とは異なる。西にはSI3が隣接しその床面の標高は0.15mと土器集中16とはほぼ同じである。本来はSI3と同様の平地建物であった可能性がある。出土した壺は小型が主体で、肩部に波状文を施すものが多い。



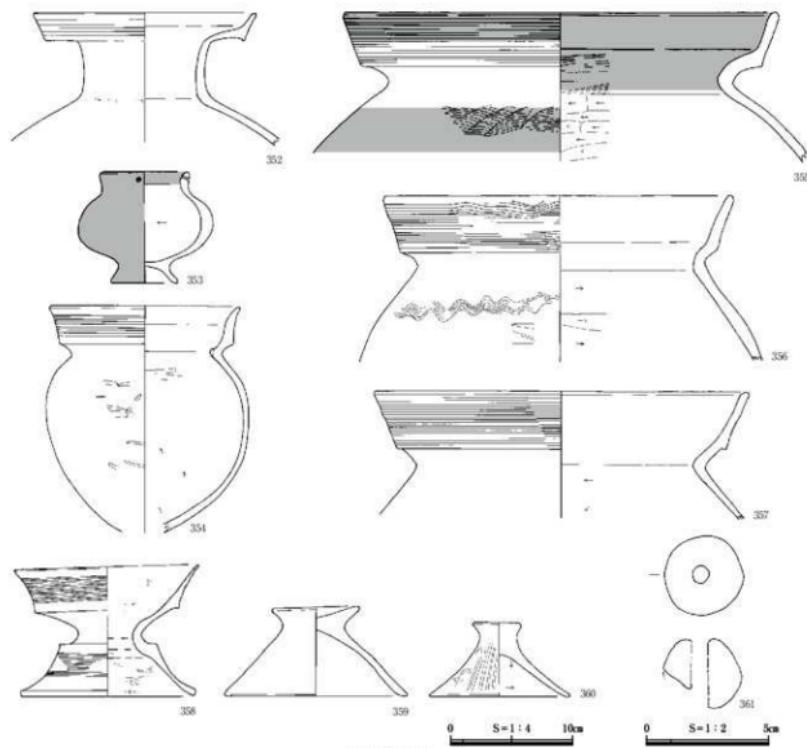
第120図 土器集中15-5



第121図 土器集中15-5出土遺物

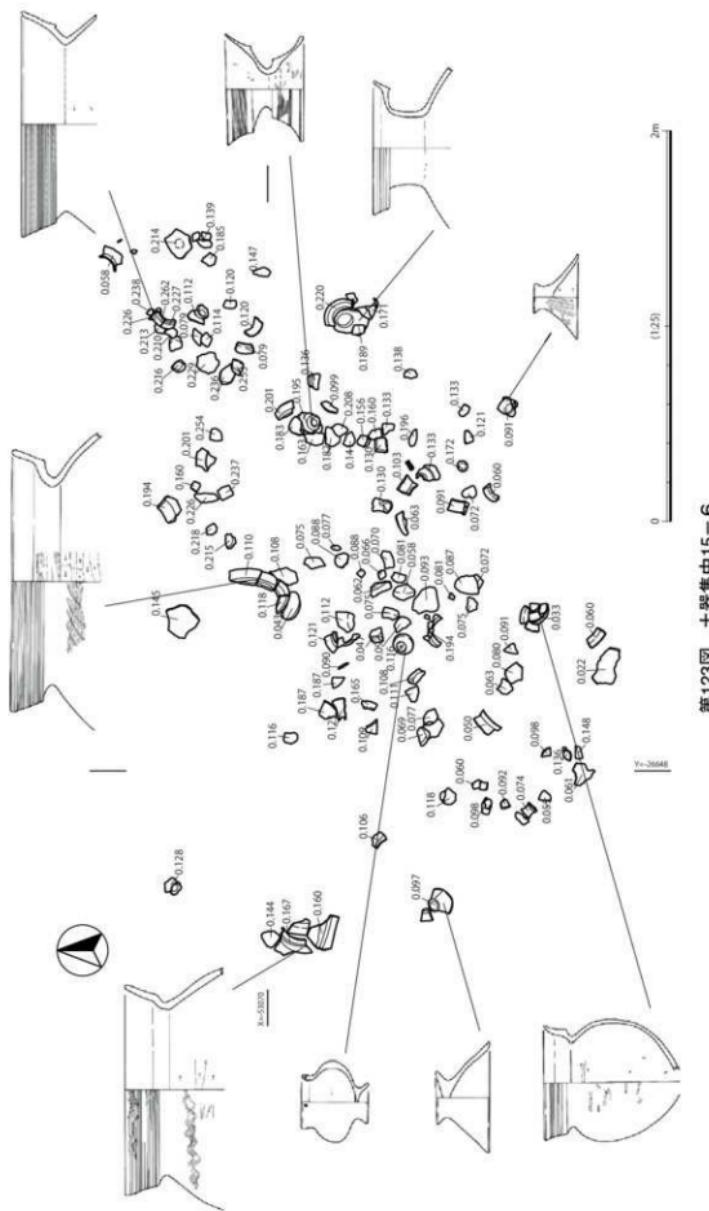


土器集中15-5

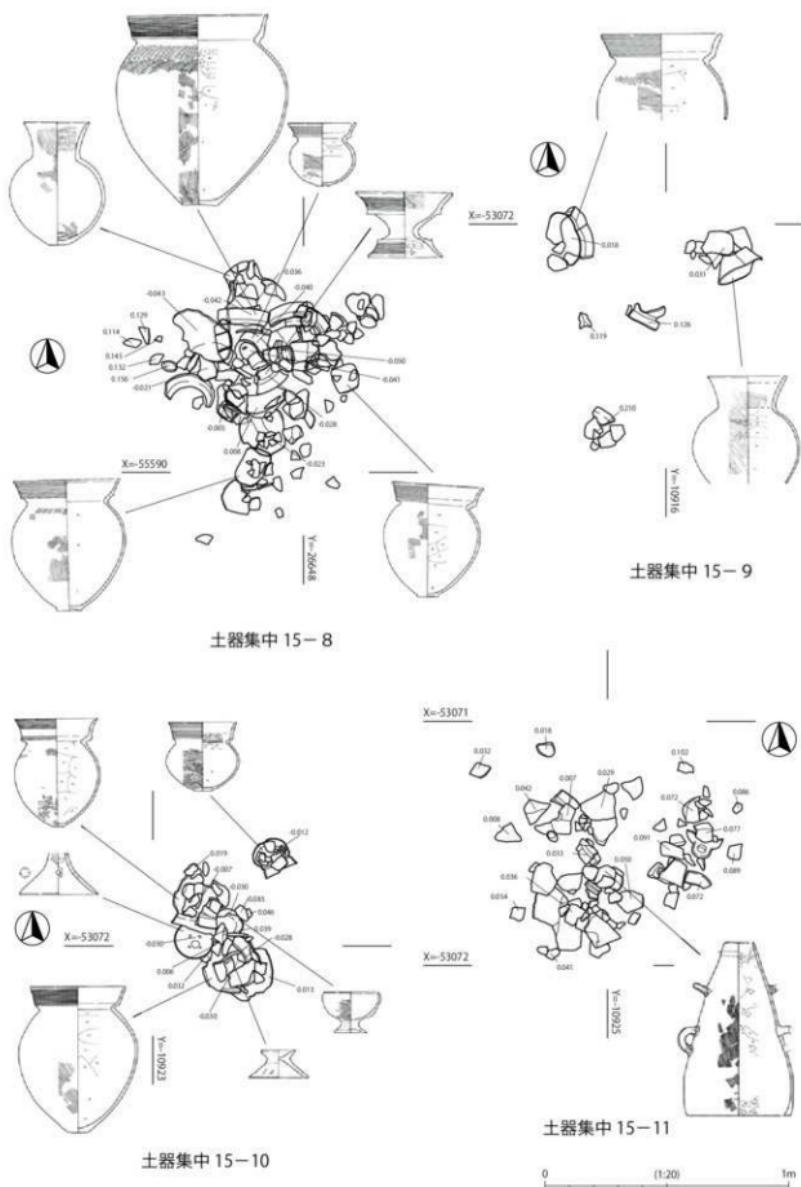


土器集中15-6

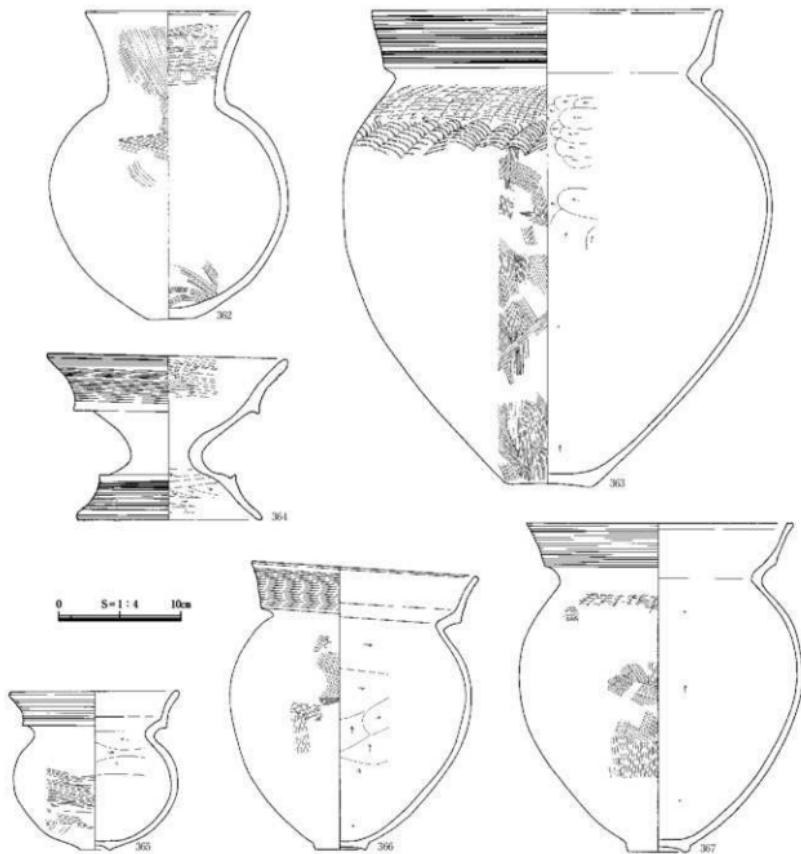
第122図 土器集中15-5・15-6出土遺物



第123図 土器集中15—6



第124図 土器集中15-8~15-11

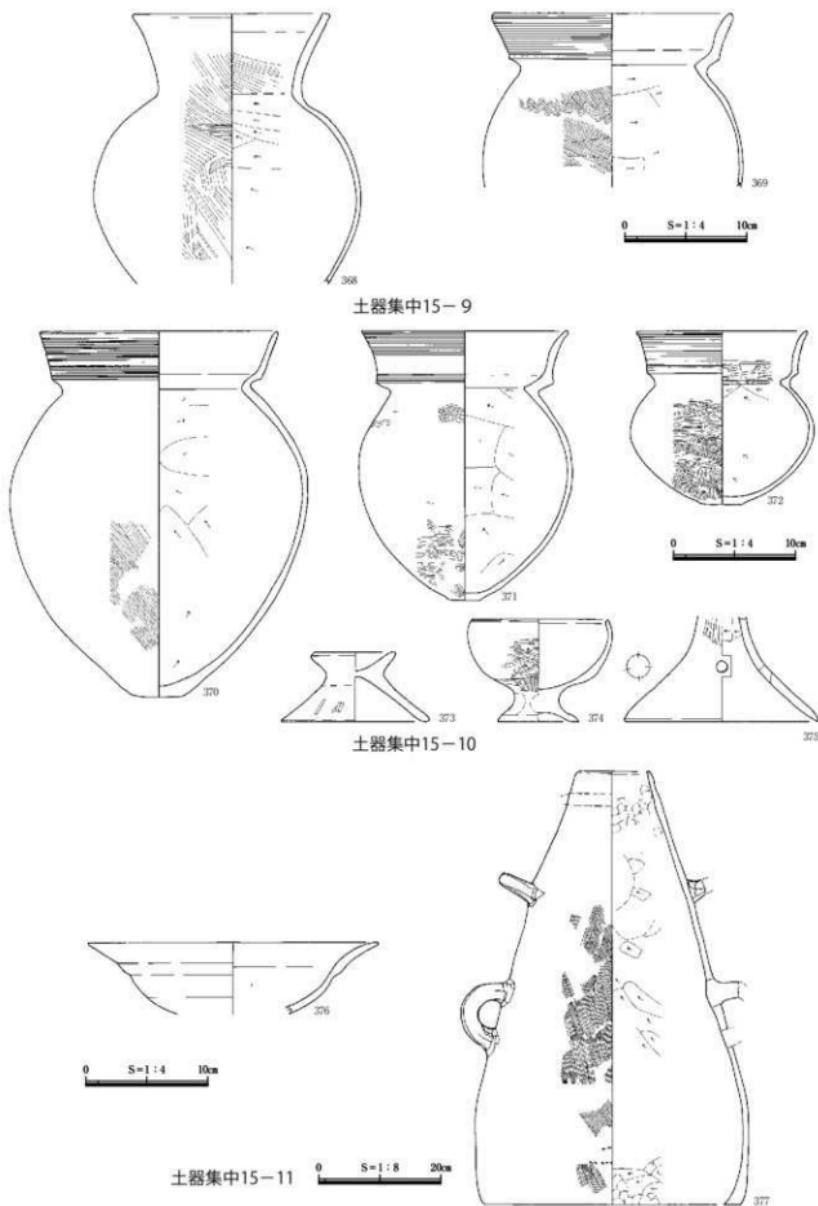


第125図 土器集中15-8出土遺物

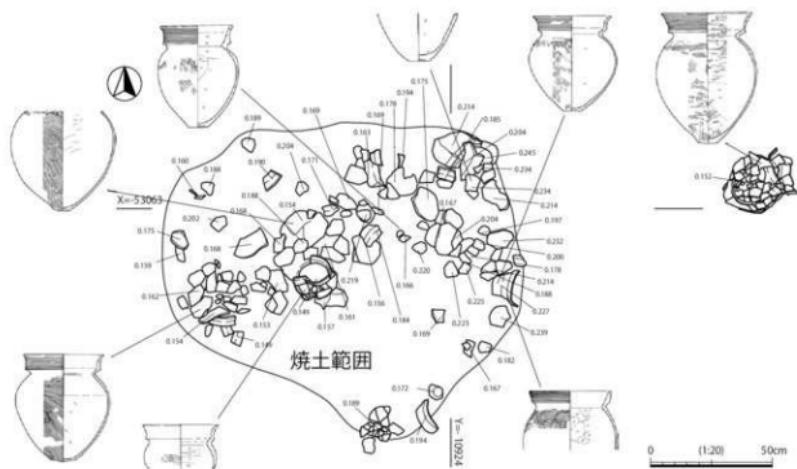
K 5区出土遺物(第129・130図、PL38)

調査区南端のK 5区を中心、南低地内のVI-2層相当層からまとまって弥生土器や炭化材などが出土した。土器集中15と連続する面に乗り、内容もよく似ていることから一連のものと捉えて第3遺構面所属として扱う。土器集中17と呼べなくもないが、第129図に示すとおり、南北8.2m×東西6.0mの広範囲で散漫な分布の中に土器が点在する状況は、他の土器集中とは異なる。

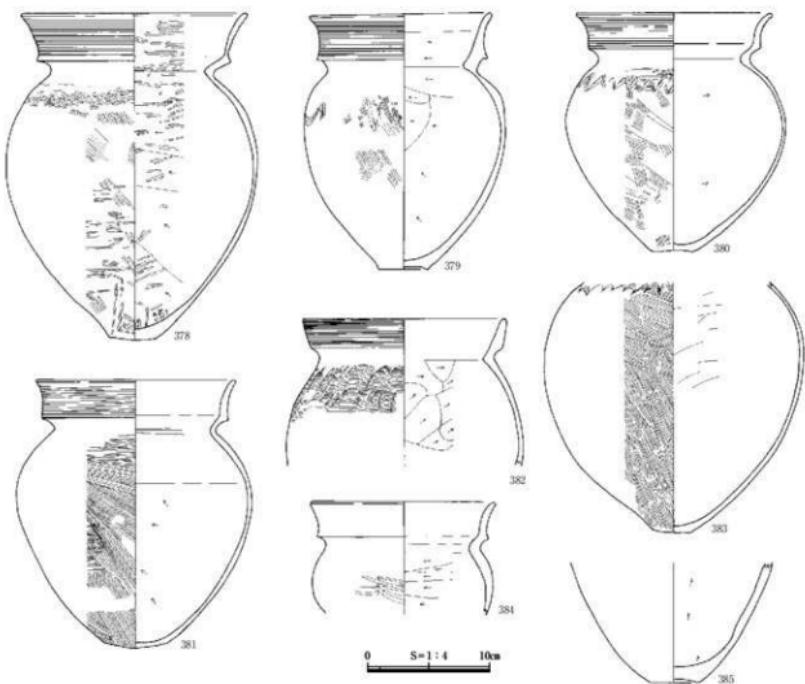
出土遺物(第130図)には装飾性が高い土器が目立つ。脚付壺388は胴部のみの出土だが、細い脚をもつ精製のもの。ほぼ完形で出土した台付装飾壺389は8段にわたって半截竹管文と貝殻腹縁による刺突文を施すが、スタンプ文は加えない。注口土器398はほぼ全面を大小の同心円スタンプ文と棘付貝殻腹縁文で飾る。胴部壺399は風車・渦巻・逆S字の3種類のスタンプを押すもの。器台受部か壺口縁の破片402は、四線で区画した中をやや粗雑な櫛描波状文で埋める。



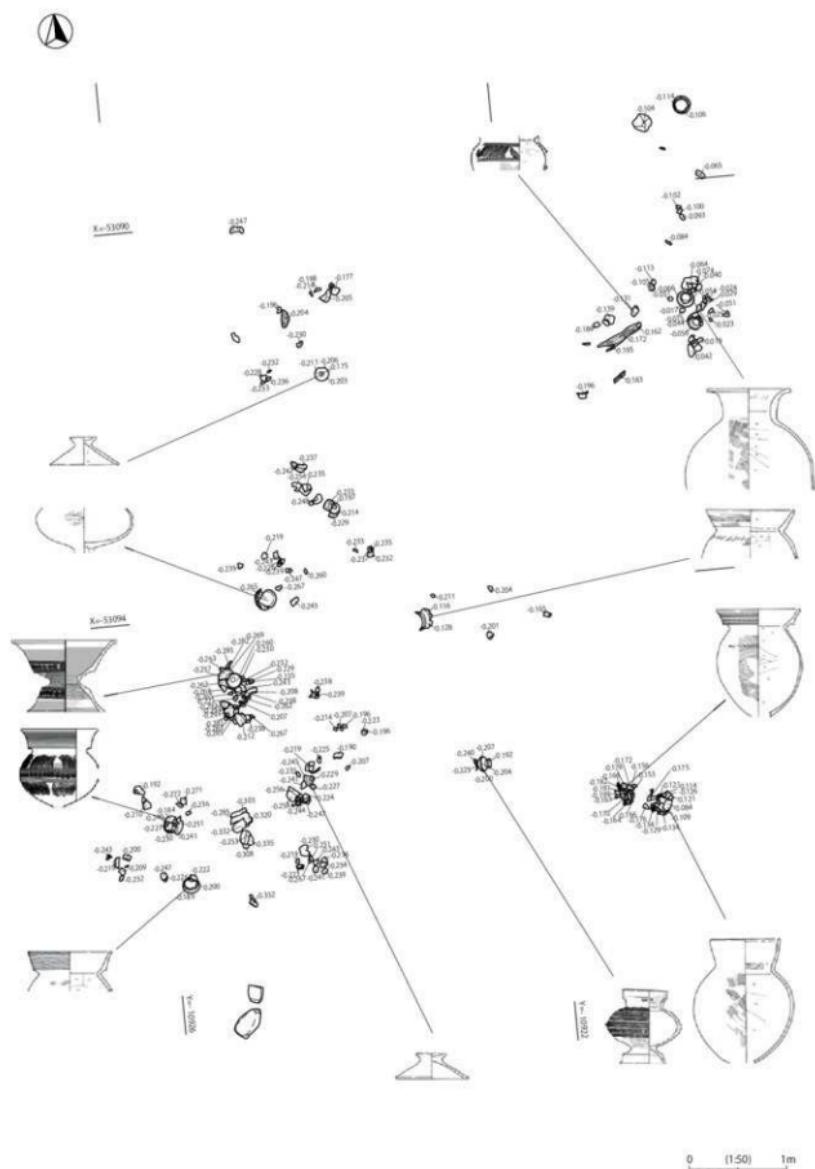
第126図 土器集中15-9～15-11出土遺物



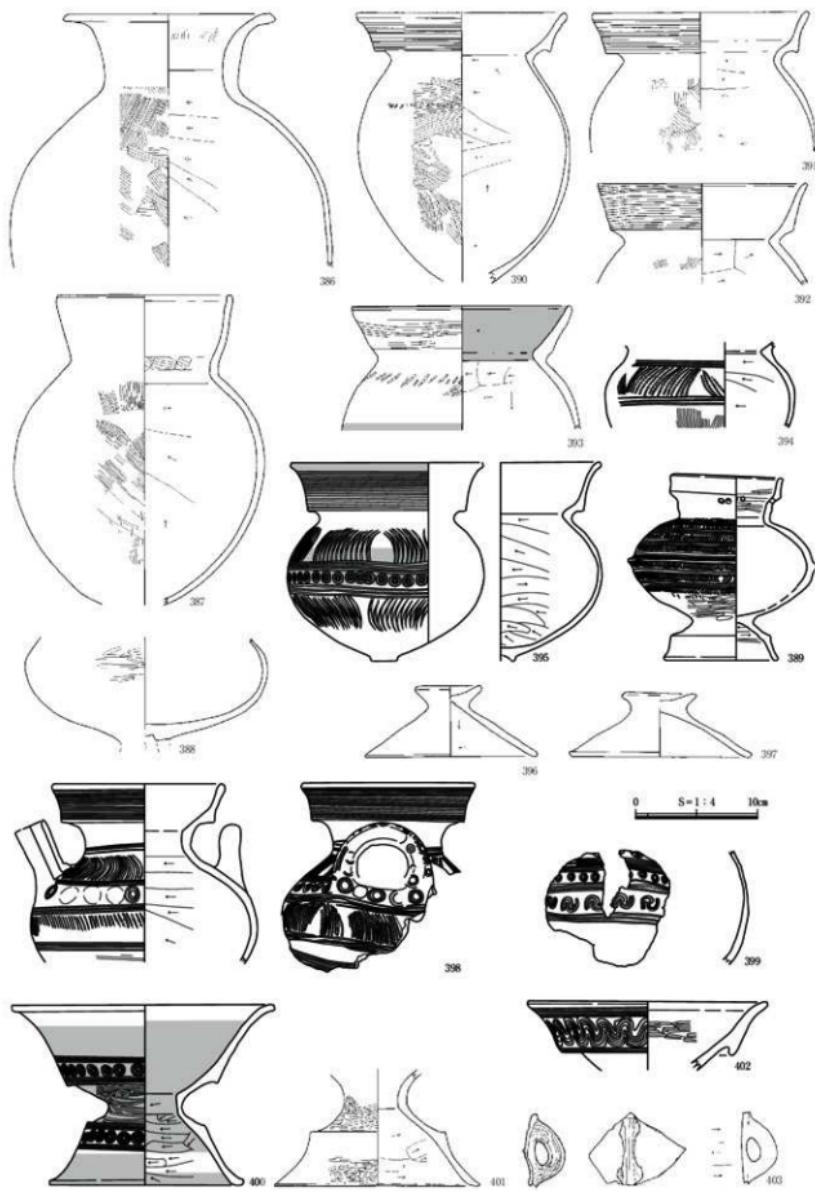
第127図 土器集中16



第128図 土器集中16出土遺物



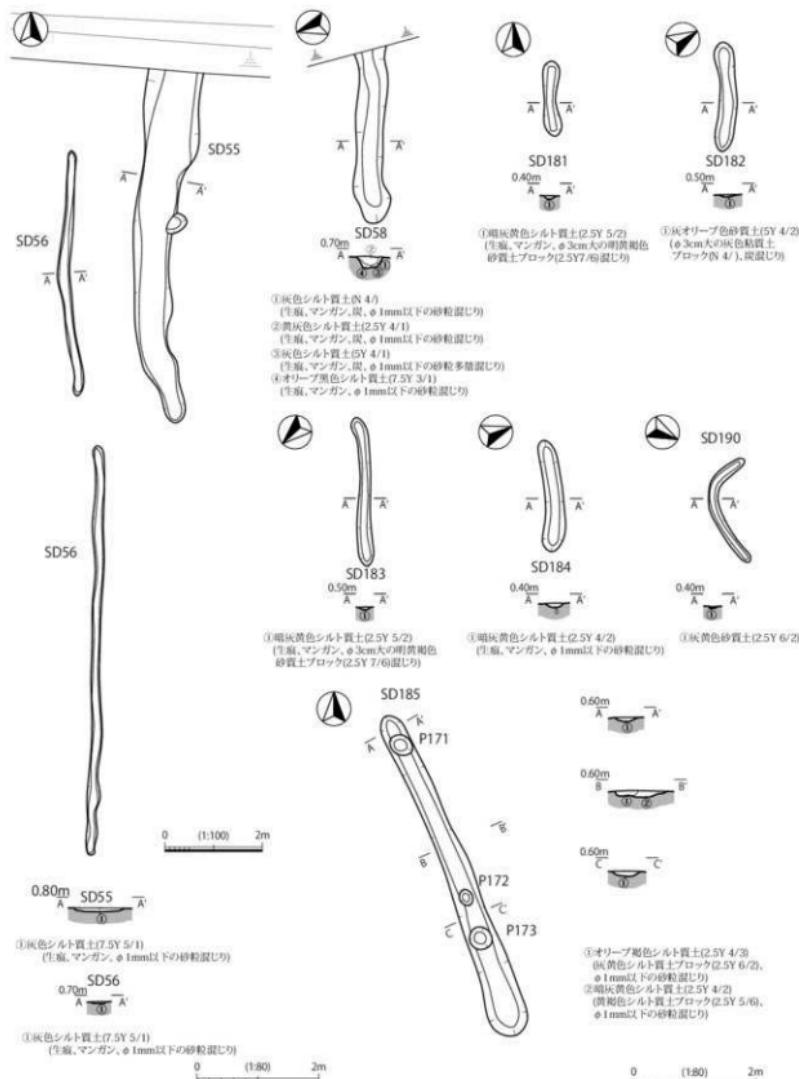
第129図 K5区遺物出土状況



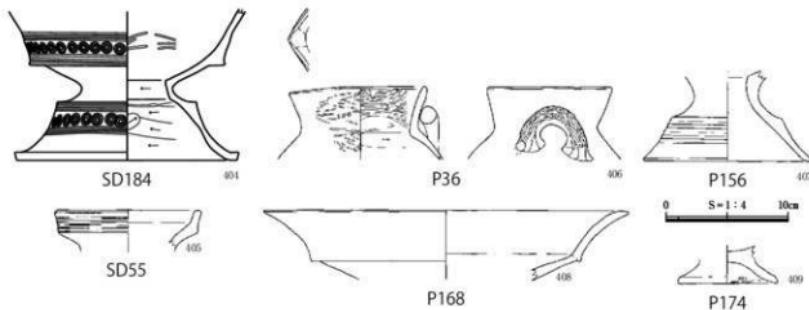
第130図 K5区出土遺物

6 溝(第131・132図、表17)

第3遺構面で検出した溝は少なく、短くてごく浅いものばかりである(第131図)。このうちSD184からはスタンプ文をもつ器台(第132図404)が出土している。



第131図 第3遺構面 溝



第132図 第3遺構面 溝およびピット出土遺物

表17 第3遺構面 溝・土坑・ピット一覧

遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	備考	遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	備考	遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	備考
SD55	△7.20	1.11	0.06		SK69	0.59	0.48	0.18		P22	0.48	0.45	0.07	
SD56	※15.5	0.25	0.03		SK70	0.88	0.56	0.12		P23	0.38	0.31	0.08	
SD58	△2.90	0.53	0.20		SK71	1.60	0.80	0.12		P24	0.42	0.35	0.07	
SD181	1.24	0.29	0.05		SK72	1.20	0.70	0.12		P25	0.26	△0.26	0.05	
SD182	1.78	0.30	0.04		SK73	0.60	0.44	0.09		P26	0.40	0.30	0.07	
SD183	2.44	0.25	0.04		SK74	0.36	0.32	0.16		P27	0.43	0.34	0.09	
SD184	1.92	0.35	0.07		SK75	0.44	0.44	0.13	土器I組 注口土器等	P28	0.45	0.34	0.12	
SD185	5.65	0.65	0.11		SK83	0.92	0.62	0.30		P29	0.24	0.24	0.15	
SD190	2.00	0.18	0.03		SK85	0.40	0.31	0.20		P30	0.33	0.30	0.08	
SK28	△0.90	0.58	0.10	土器	SK86	△2.90	1.97	0.13	玉素材	P31	0.42	0.42	0.14	
SK30	1.36	1.24	0.28	土器片 多量	SK175	0.68	0.55	0.10		P32	0.54	△0.052	0.10	
SK31	0.56	0.40	0.06		SK176	0.60	0.60	0.20		P33	0.50	0.46	0.10	
SK34	0.78	0.60	0.16	土器	SK177	0.84	△0.48	0.15		P34	△0.78	0.50	0.10	
SK38	0.89	0.59	0.10	櫛12	SK178	0.84	0.48	0.07		P36	0.40	0.35	0.08	水差
SK44	△0.44	0.42	0.12	土器	SK179	0.74	0.64	0.10		P37	0.58	0.50	0.14	
SK45	2.30	1.00	0.08		SK180	2.60	1.01	0.14		P38	0.36	0.36	0.17	
SK46	1.20	1.20	0.09		SK181	1.40	0.55	0.08		P39	0.35	0.35	0.12	
SK48	0.70	0.32	0.06	土器	SK182	0.55	0.55	0.06		P156	0.40	0.40	0.05	
SK49	2.20	0.70	0.14		SK183	0.56	0.46	0.06		P157	0.40	0.30	0.15	
SK50	0.50	0.50	0.14		SK184	0.95	0.81	0.10		P158	0.42	0.32	0.09	
SK51	0.70	0.60	0.13	土器	SK185	1.20	0.92	0.07		P159	0.65	0.65	0.05	
SK52	1.10	0.90	0.12		SK186	0.54	0.37	0.17		P160	0.35	0.35	0.10	
SK53	0.64	0.42	0.14		SK187	1.00	0.74	0.08		P161	0.35	0.35	0.11	
SK54	0.88	0.50	0.12		SK189	0.95	△0.55	0.18		P162	0.36	0.36	0.11	
SK55	0.80	0.70	0.05		SK190	0.60	0.60	0.11		P163	0.42	0.35	0.11	
SK56	0.66	0.38	0.04		SK191	1.06	0.80	0.10		P164	0.17	0.17	0.05	
SK57	0.56	△0.38	0.06		SK192	0.58	0.45	0.09		P165	0.23	0.23	0.09	
SK58	0.83	0.83	0.12		SK193	0.60	0.60	0.11		P166	0.52	0.38	0.10	
SK60	△2.47	△1.20	0.28	燒土面5	SK194	0.80	△0.52	0.06		P167	0.33	0.33	0.09	
SK61	△2.55	△1.34	0.22	土器多量	SK195	△0.94	△0.65	0.06		P168	0.66	0.60	0.06	
SK62	0.78	0.43	0.12		SK196	4.42	△4.02	0.12	建物?	P169	0.25	0.25	0.11	
SK63	1.01	0.60	0.20	完形壺	SK210	1.80	1.26	0.20		P170	0.42	0.32	0.09	
SK64	0.88	0.78	0.23		P17	0.36	0.32	0.10		P171	0.40	0.32	0.05	
SK65	0.72	0.50	0.20		P18	0.44	0.40	0.08		P172	0.28	0.22	0.06	
SK66	△3.20	1.81	0.08		P19	0.44	0.34	0.08		P173	0.38	0.38	0.09	
SK67	0.72	0.52	0.14		P20	0.40	△0.22	0.12		P174	△0.58	0.58	0.26	
SK68	0.46	0.46	0.12		P21	0.52	0.40	0.08						

7 土坑(第133～145図、表17、PL39・40)

第3造構面に所属する土坑は計60基を数える。その多くは東微高地上で検出されていて、井戸がある西微高地上には少ない。特記すべきものを以下に挙げる。

SK30(第134図、PL39)

C 6 グリッドにあり、井戸SE 1 から2.1m北に位置する。平面形は1.36m×1.24mの楕円形を呈し、深さは0.28mを測る。埋土には大量の土器片がびっしりと詰まっていた(第140・141図)。高坏(430)や器台(431・432)も含まれるもの、大半は壺と甕の破片で、特に大型の甕(422～425)が目立つ。SE 1 配石の開口部側に掘られていることから、井戸に関連した祭祀で使われた土器を破碎して廃棄したもの可能性がある。

SK38(第133図、PL39・64)

D 5 グリッドの西微高地上に位置し、約1m南には土器集中7がある。0.89m×0.59mの不整形なもので、深さは0.10m。埋土からは112個の礫が出土した(PL64)。礫の平均値は、長さ6.0cm、幅3.9cm 厚さ2.8cm、重量96.1gで、総重量は10.8kg。掌に握り込める程度の大きさの円礫や亜角礫が主体である。調査区内の堆積には礫は全く含まれないため、明らかに搬入されたものである。どの礫にも衝撃痕や被熱痕は全く確認できず、搬入した目的を推定するのは難しい。付近で環濠などの防御施設や水田が見つかっていなことから、投弾や鳥追いに使ったものとは少し考えにくい。祭祀用とみられる井戸や土器集中が存在する近くで見つかったので、何らかの祭祀に用いられた可能性を指摘したい。ちょうど握り込める大きさで直接火を受けていないことから、井戸の水を沸かして盟神探湯(くかたち)に使ったと考えるのは、少し想像が過ぎるだろうか。

SK60(第135・143図、PL39)

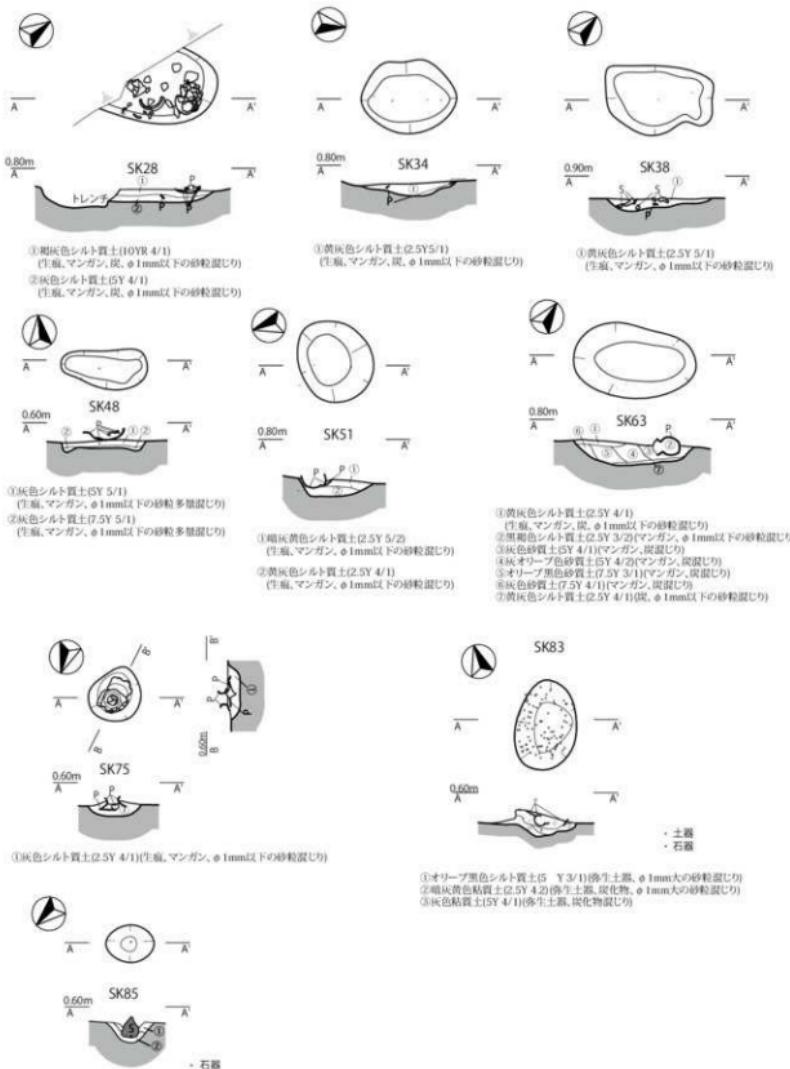
調査区東端のD 2 区で検出した。東側が調査区外にあるため全形は不明で、南北2.47m以上×東西1.20m以上、深さ0.28mを測り、断面形は皿状を呈する。埋土を薄く掘り下げてゆくと、5枚の焼土面とそれに伴う炭化物層が累重して検出された。被熱した径15～20cm程の礫も3点出土している。焼土面は多くが径0.4m以下の局所的なもので、炭化物は藁を主体とする。浅い窪みのなかで何回も小規模な焚火を行ったものである。最大の焼土面2から出土した炭化藁の1片を放射線炭素年代測定したところ、 2σ 暦年較正年代で、77calAD～217calADという結果が得られた。埋土からは甕(第143図440～446)を主体とする弥生時代後期後葉の土器が出土している。

SK61(第136・143図、PL39)

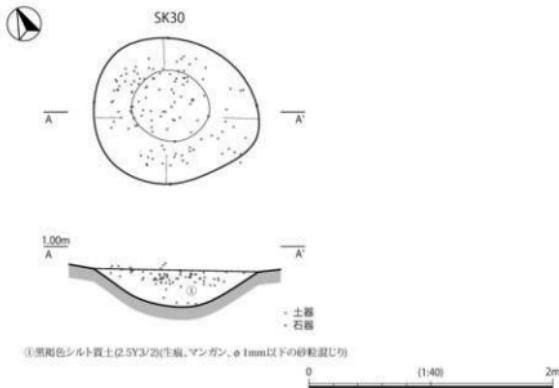
SK60の2.4m北、C 2 グリッドに位置する。東辺が調査区外にあり、大きさは2.55m以上×1.34m以上、深さは0.22mの不整形な土坑である。周辺と埋土からは大量の土器が出土している(第143図)。その中では、簡略化した台付壺とみられる壺(449)、今回の調査で唯一のスタンプ文をもつ蓋であるC字スタンプ文蓋(459)、焼成前に×印を刻んだ底部(460)が目を引く。

SK63(第133・144図、PL40)

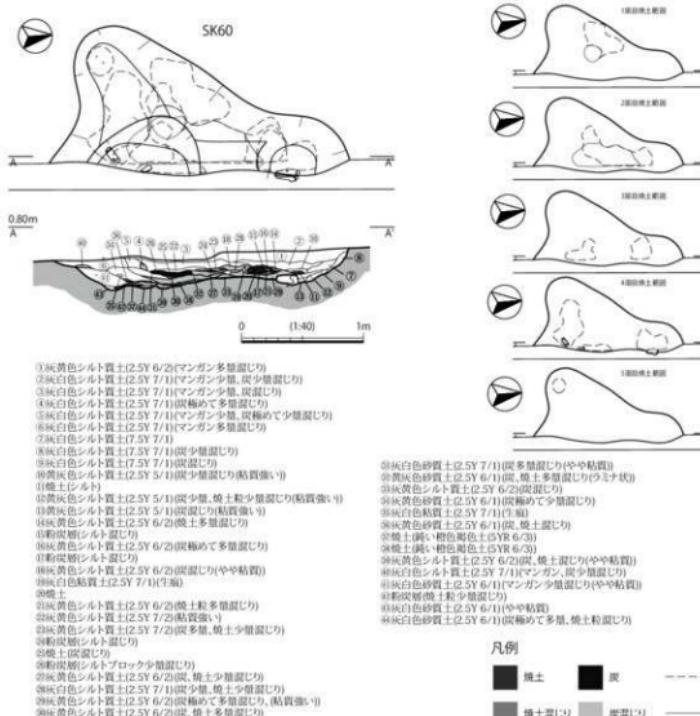
E 3 グリッドに位置し、1.01m×0.60mの長楕円形を呈する。検出面からの深さは0.20mを測るが、土器が半分ほど露出しているので、実際は倍近く深いであろう。長軸上の一端から横倒しになった形で、完形の壺(第144図462)が出土した。埋土の状況から、この壺は意図的に埋められたものと考えられる。壺の中の土を水洗したが、人工的な遺物は含まれていなかった。土器集中のように地面に土器を置くものばかりでなく、土坑を設けて埋めた例もあったことが分かる。



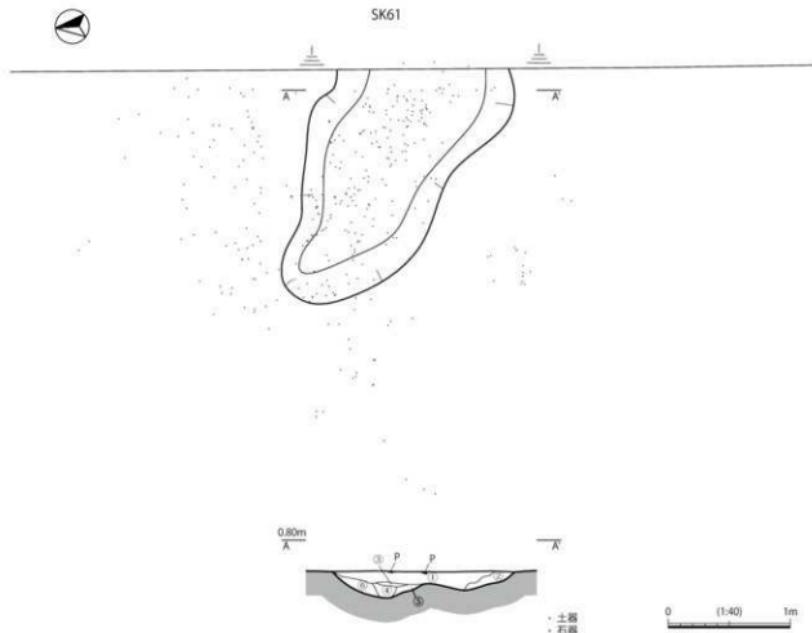
第133図 第3遺構面 土坑(1)



第134図 第3遺構面 土坑(2)



第135図 第3遺構面 土坑(3)



第136図 第3遺構面 土坑(4)

SK75(第133・144図、PL40)

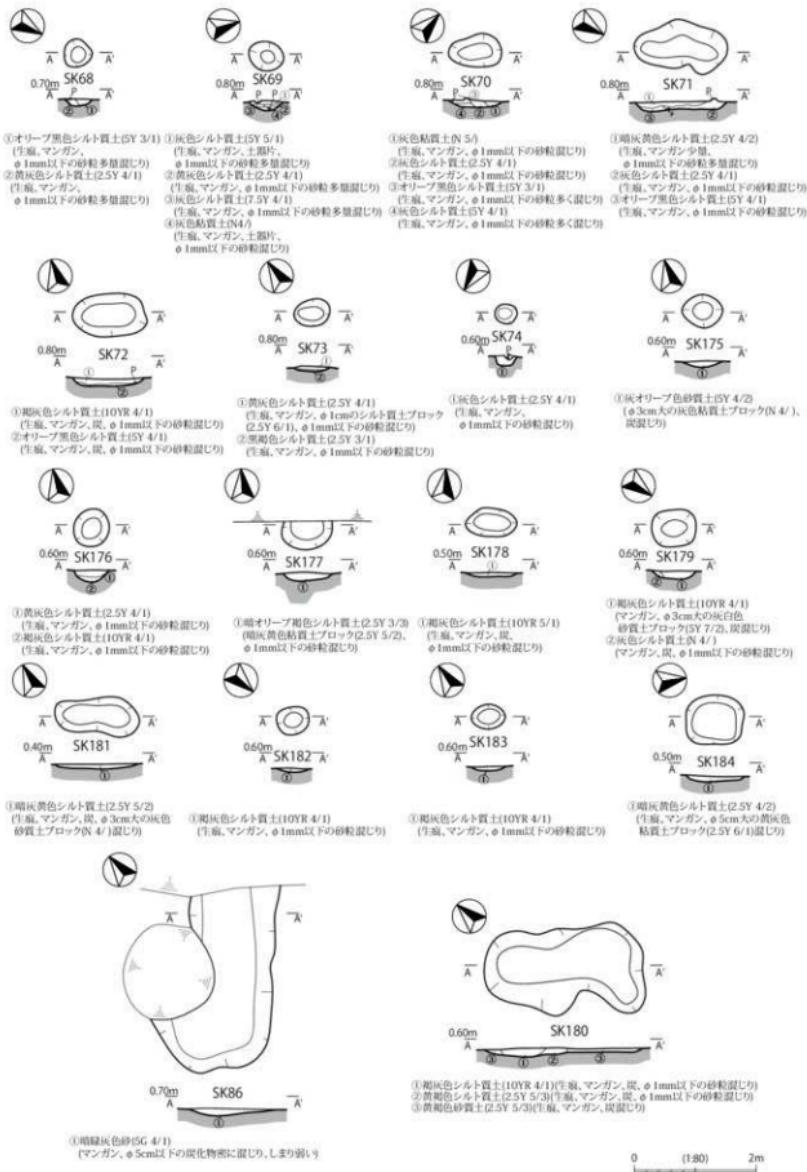
G 5 グリッドに位置し、径0.44mを測るほぼ円形の土坑。検出面からの深さは0.13mだが、SK63と同様に土器が露出する状態なので、実際はもっと深い。VI層のシルト質土は遺構検出が大変難しく、このように内部の遺物が現れて遺構の存在が判明した例も少なくない。埋土の下部に高壙の壊部(第144図473)が脚柱部を上にして据えられ、底を抜いた壺(472)がその上に正立して置かれている。壺の口から脚柱部がのぞく有様は、一見したところ生殖に関わる祭祀を連想させるが、どうであろうか。壺472の頸部にはノ字状の刺突が3点施されている。

SK83(第133・145図)

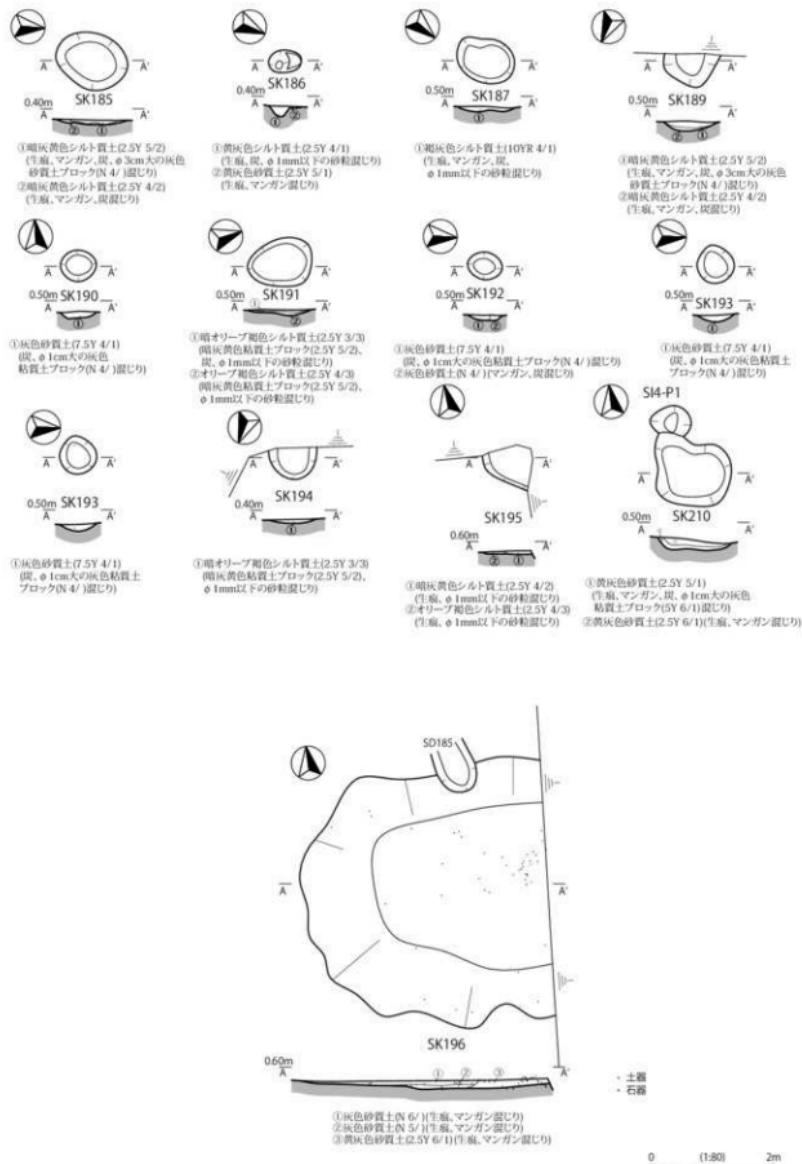
西微高地のD 5・E 5 グリッドにまたがって検出されたもので、南西1.6mにはSK34を挟んで土器集中7が所在する。北西1.6mには上述の縛を詰め込んだ土坑SK38があり、周囲には他に遺構は無く遺物も希薄なので、これらの土坑群と土器集中7は一体で形成されたものと考えられる。0.92m×0.62m、深さ0.30m以上の比較的小さな土坑の中から、多くの土器が出土した(第145図)。中でも、半截竹管文の小型装飾壺(477)と注口を欠損する注口土器(478)が注目される。注口土器は火にかけられ



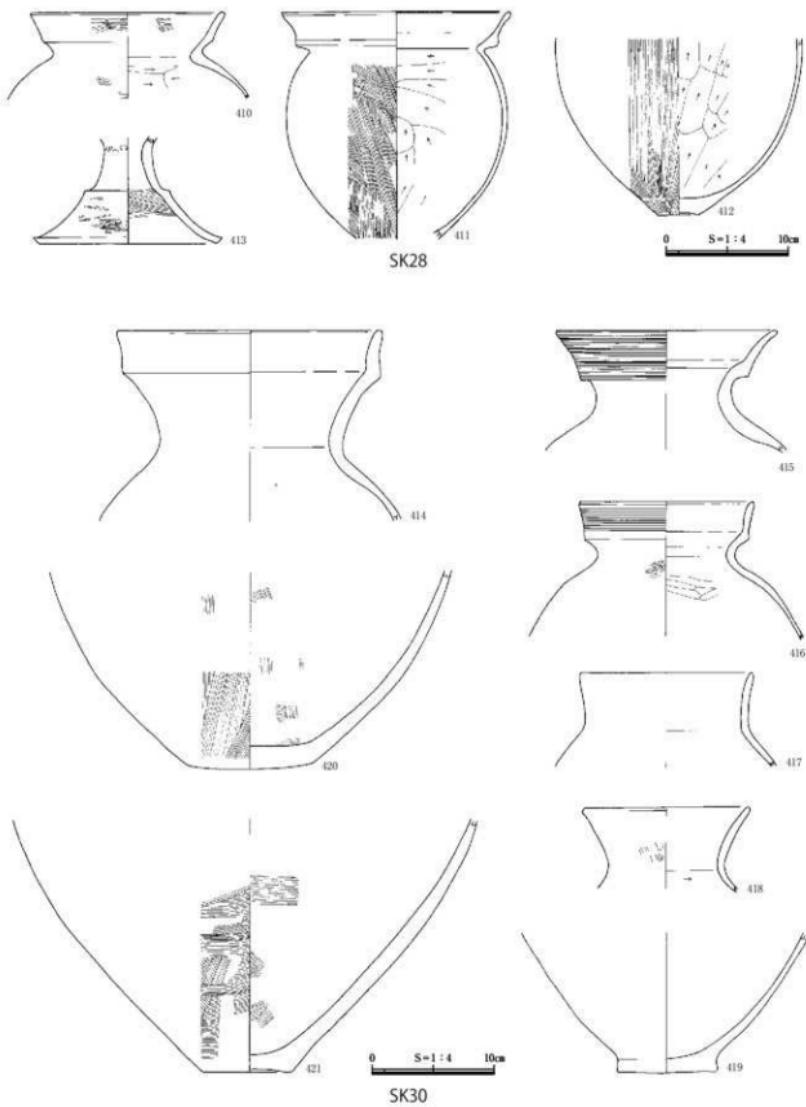
第137図 第3構造面 土坑(5)



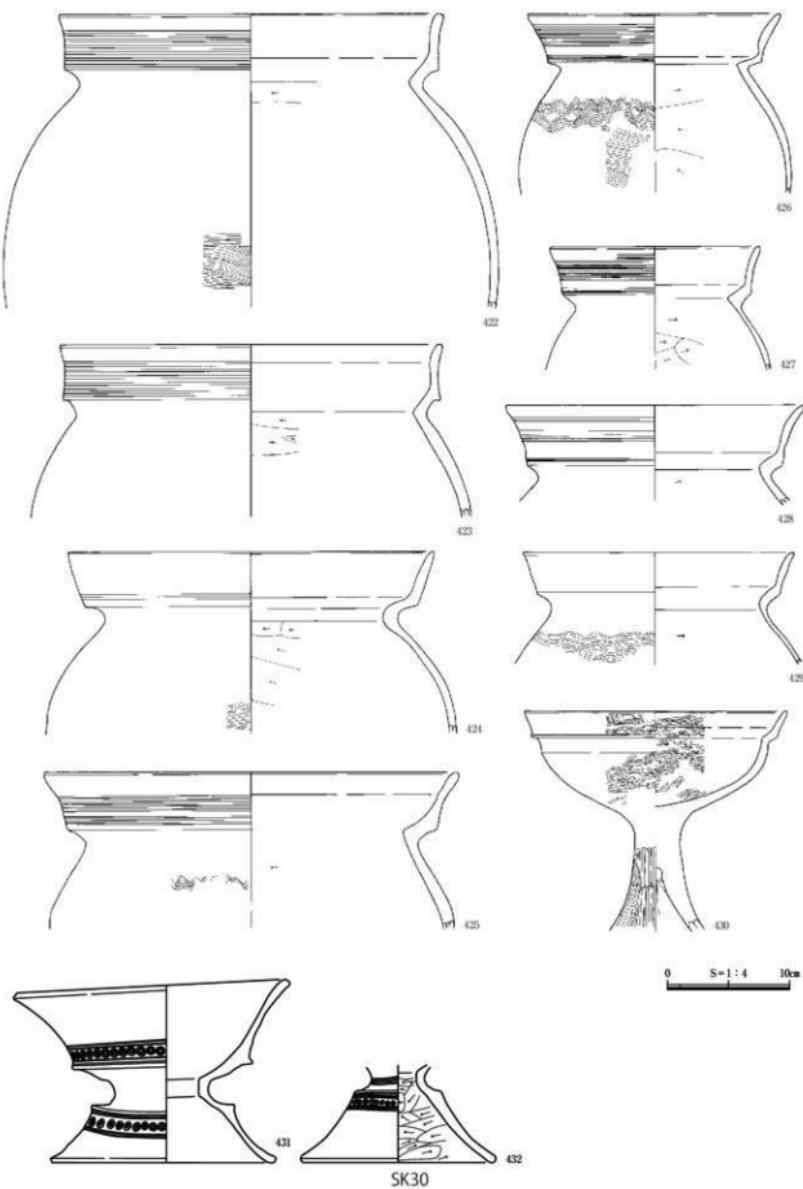
第138図 第3遺構面 土坑(6)



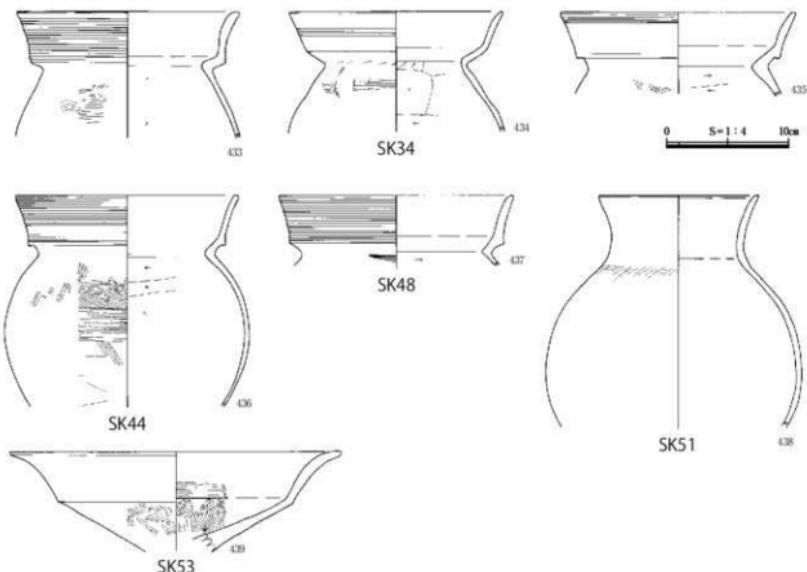
第139図 第3遺構面 土坑(7)



第140図 第3遺構面 土坑出土遺物(1)



第141図 第3遺構面 土坑出土遺物(2)



第142図 第3遺構面 土坑出土遺物(3)

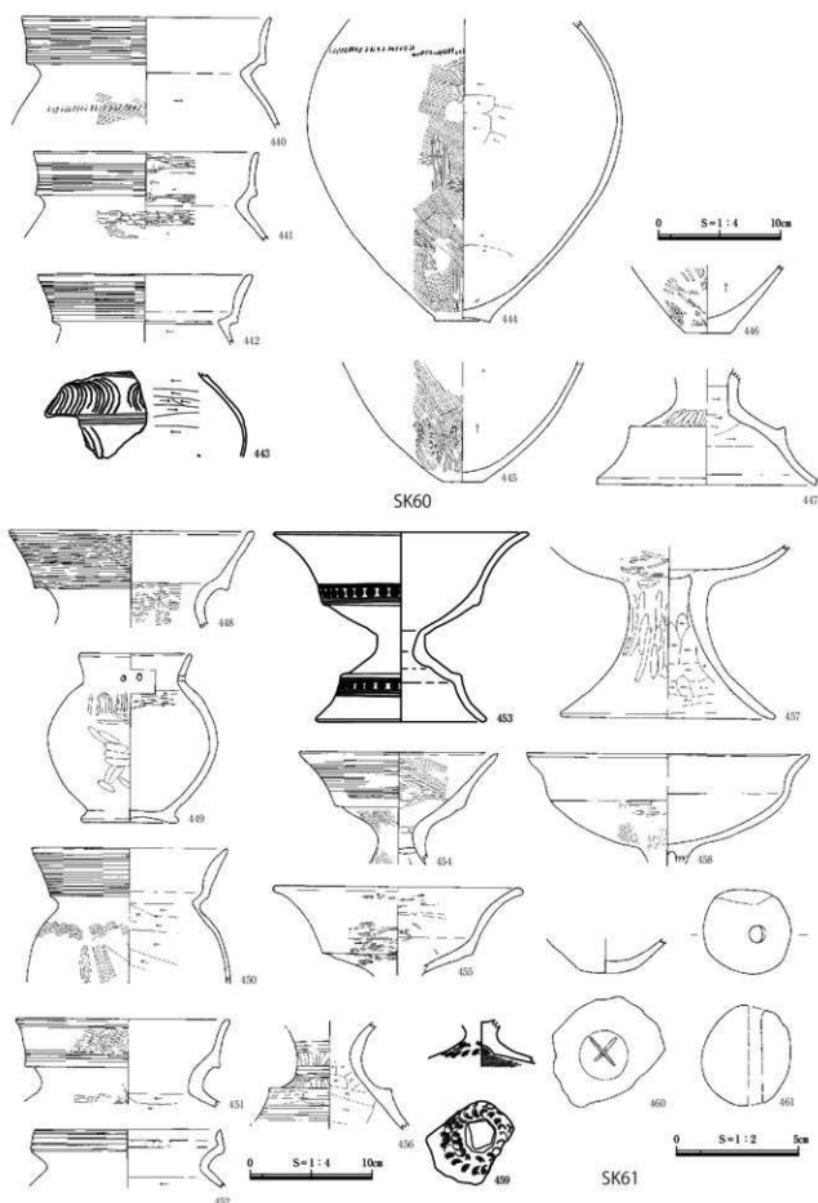
ている。南西9mにある土器集中8でも火にかけられた注口土器が出土しており、どちらも井戸SE1と同じ西微高地上にあることから考えると、SE1の役割の一つは、注口土器に入れて沸かす水を供給することだった可能性がある。注口土器も小型装飾壺も集団というよりは個人向けの大きさのものなので、その目的の一例として医療的な行為を想定することもできるかもしれない。

SK85(第133・146図、PL40)

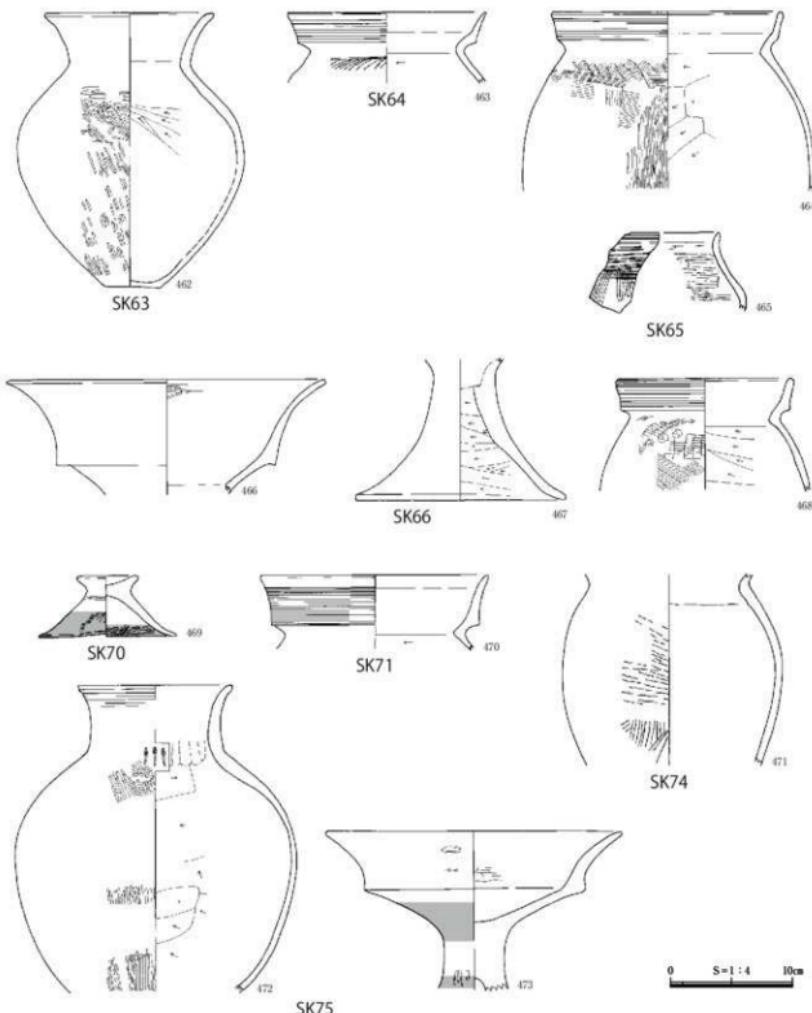
G3グリッドに位置する小型の土坑で、 $0.40 \times 0.31\text{m}$ の梢円形を呈する。検出面からの深さは0.20mだが、他のいくつかの土坑と同様に、遺物が出土したことから周辺を精査して土坑を検出できたもの。内部には緑色凝灰岩の素材(第146図S11)が埋められていた。S10は2508gを量る分厚い剥片素材の石核。1側面から角柱状の剥片が剥がされている。背面に原礫面を残し節理が発達した、玉素材としては必ずしも良質のものではない。北陸や出雲などのよく知られた産地のものではなさそうだ。工房ではなく祭祀空間の近くにあるので、保管のために埋めたというよりは、増えることを祈って種を埋めるように埋めたものと捉えたい。

SK196(第139・145図)

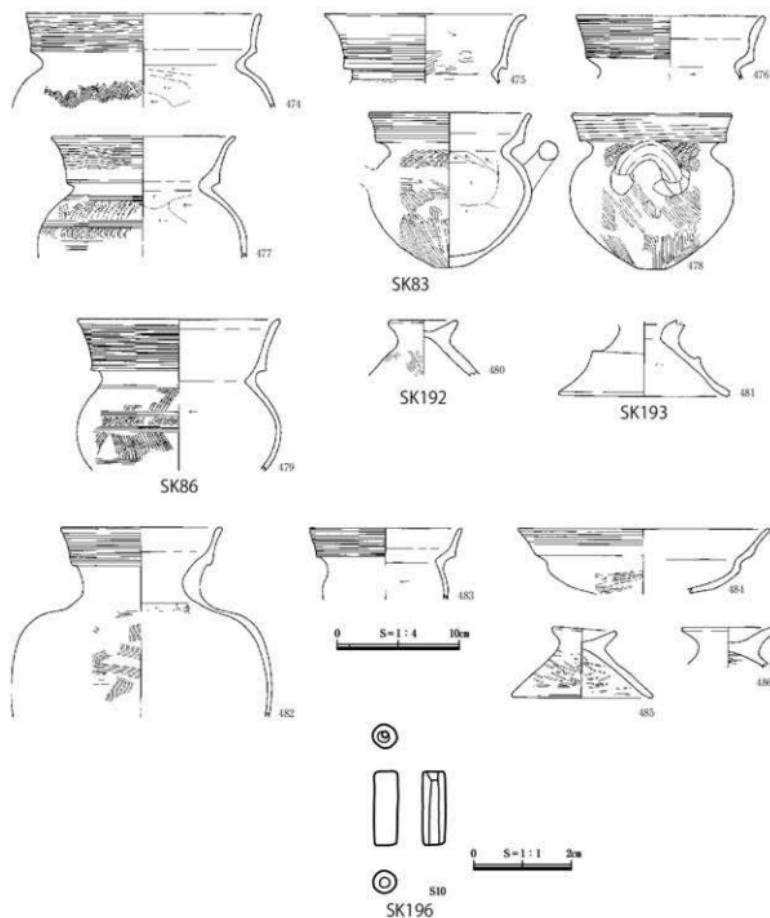
H2・H3・I2・I3の4グリッドにまたがる大型の土坑。東側が調査区外にあるため全形は不明。南北4.42m×東西4.02m以上という大きさに対し、検出面からの深さは0.12mとごく浅い。2.4m南にはSI2・SI4・SB1からなる建物群があり、このSK196も大きさと軸がよく揃うので、一連の遺構である可能性がある。その場合は土坑というよりは簡易な建物の床面を想定してもよいかもしれない。埋土から出土した土器には、壺(第145図482)、高壺(484)、蓋(485・486)などがある。S10は管玉で、



第143図 第3遺構面 土坑出土遺物(4)



第144図 第3遺構面 土坑出土遺物(5)

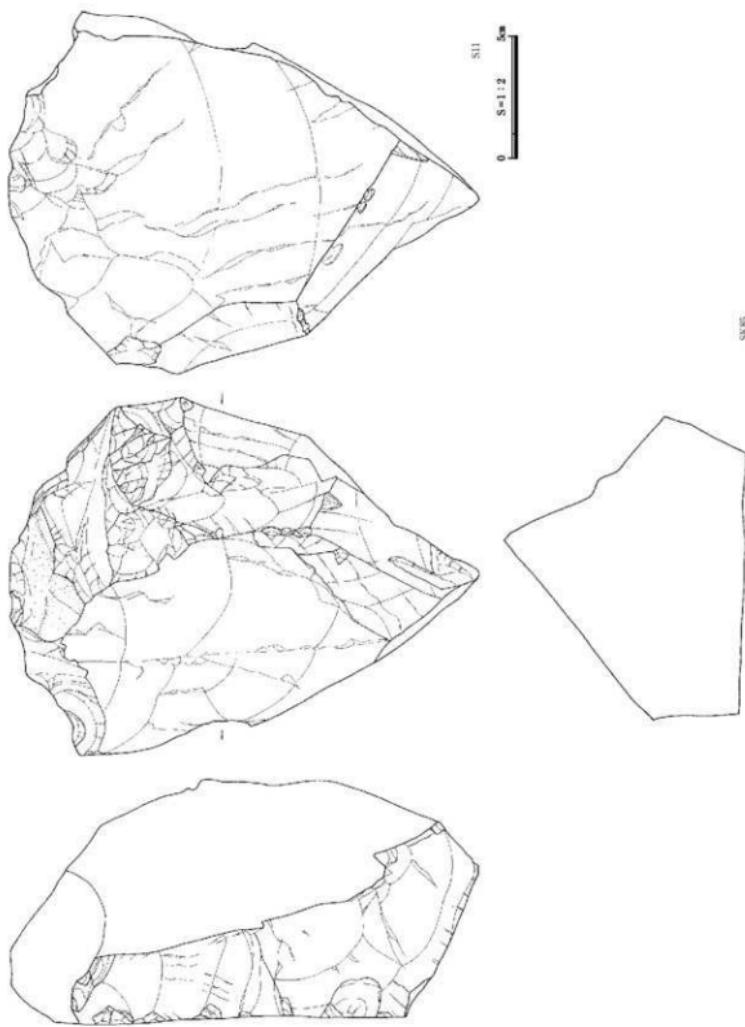


第145図 第3遺構面 土坑出土遺物(6)

緑色が薄く透明感のない緑色凝灰岩を素材とする。両面穿孔だが片方の孔が極端に短い。

8 ピット(第132・147・148図、表17)

第3遺構面に所属するピットは41基を数える。この面の遺構がある調査区東半に散在していて、特に集中したり並んだりといった傾向は認められない。祭祀空間とみられる土器集中が分布する低地にも掘られていることからすると、壺を埋納したSK63や緑色凝灰岩を埋納したSK85のように、有機質でできた何らかの品を埋めたものが含まれているかもしれない。いくつかのピットからは土器が出土している(第132図)。P36から出土した水差形土器(406)は把手の反対側に片口を付けた古い形態のもの。今回の調査で出土した他の水差形土器には片口がなく、把手も痕跡器官化したものが多い。



第146図 第3遺構面 土坑出土遺物(7)

9 炉(第149図)

炉は2基を検出した。

炉3

SI 1 床面の下層で見つかったもので、0.86m×0.61mの橢円形を呈する深さ0.08mの浅い窪みの中に焼土と炭が詰まったもの。検出面の標高は0.36mで、0.8m北東にあるSI 4 とほぼ同じ高さがあるので、SI 4 を含む建物群と同時に設けられたものであろう。

炉4

K 4 グリッドの調査区南端で検出し、一部が排水溝にかかるため全形は不明。0.67m以上×0.42m以上の大きさで、深さは0.11m。底は焼土に厚く覆われている。

10 第3包含層出土遺物(第150~162図)

5 ライン以東を中心とする、VI-1層とVI-2層が分層できる範囲では、VI-1層から出土した遺物を第3包含層所属として扱う。それ以外のVI層を分層できない範囲では、VI層に含まれていた遺物の全てを第3包含層のものとしている。VI層を分層できない範囲では第4遺構面の遺構がほぼ無く、遺物もほとんど出土しなかったことと、後述するように、第4遺構面はいわば発掘調査のダメ押しの面で、その直上の第4包含層(VI-2層)と第3包含層の出土遺物はともに弥生時代後期後葉のもので時期差が認められないことから、大きな問題はないと思われる。

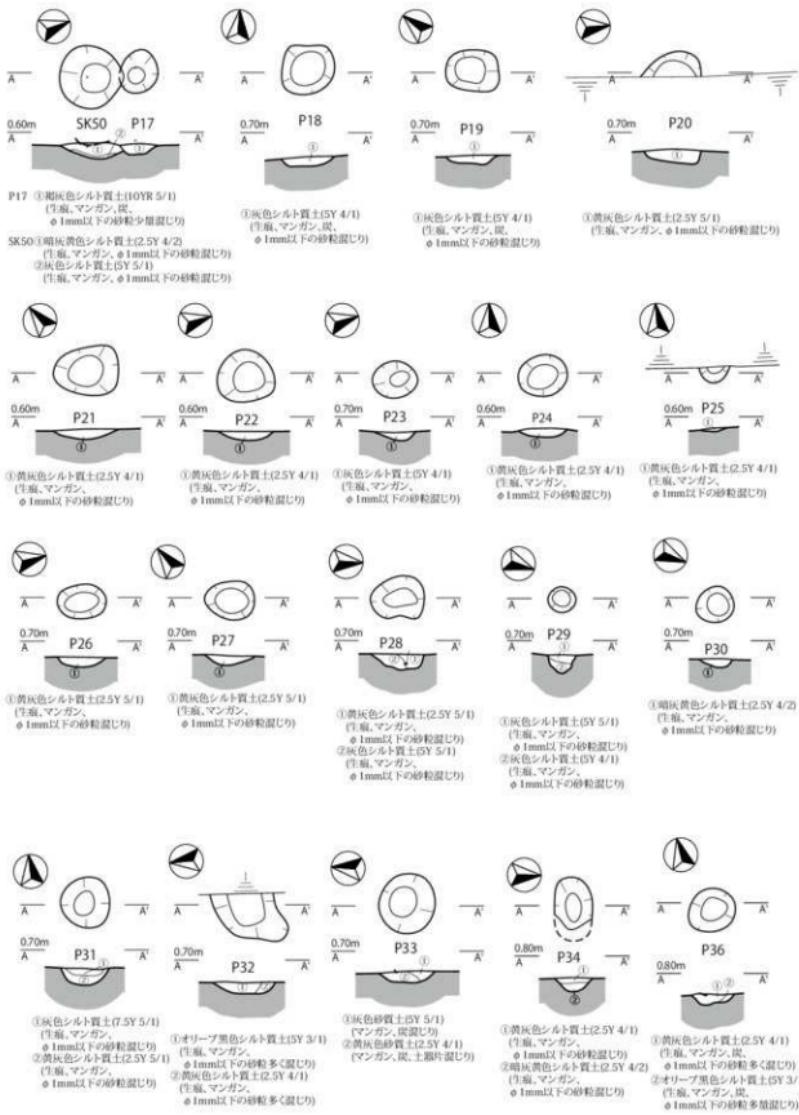
壺(第150・151図)

壺は甕と比較すると出土量は多くない。487は高さ47.0cmを測る特大の壺。口縁部に擬凹線を巡らし、頸部に刻目突帯を貼り付けてその上下を大型の3重同心円文スタンプで飾る。内外面は主にハケメ調整。西微高地南端のH 6 グリッドを中心とする狭い範囲からバラバラの状態で出土した。祭祀用と考えられ、西微高地上の調査区外に墓や神殿などの重要な遺構が存在した可能性を示唆する。壺には、擬凹線(487~489)や凹線(490・491)を施すものは少数で、多くは無文である。大きさと形態は変異に富み、胴が張る横形のもの(488)や肩が張るもの(493)もある。受け口状の口縁をもちタタキ後ハケメ仕上げの492や、外反する口縁と平坦な口縁端部をもつごく薄い器壁の495は、在地のものではないだろう。特殊なものを以下に記す。489は、口縁部内面に波状文を、外面の擬凹線上にS字状渦文の浮文を貼り付ける。500は頸部に2個一対の穿孔がある無頸壺で、細かな同心円スタンプ文と棘付貝殻腹縁文で飾る。底部を欠くが台が付くだろう。501は脚付壺の算盤形の胴部。屈曲部に凹線を施す。502は赤彩の装飾壺の破片。鋸歯文を刻み、S字状の浮文が貼られていた痕が残る。503は土師器で、弥生時代後期の遺構がある場所からかなり離れた調査区西端のL11グリッドから出土したもの。

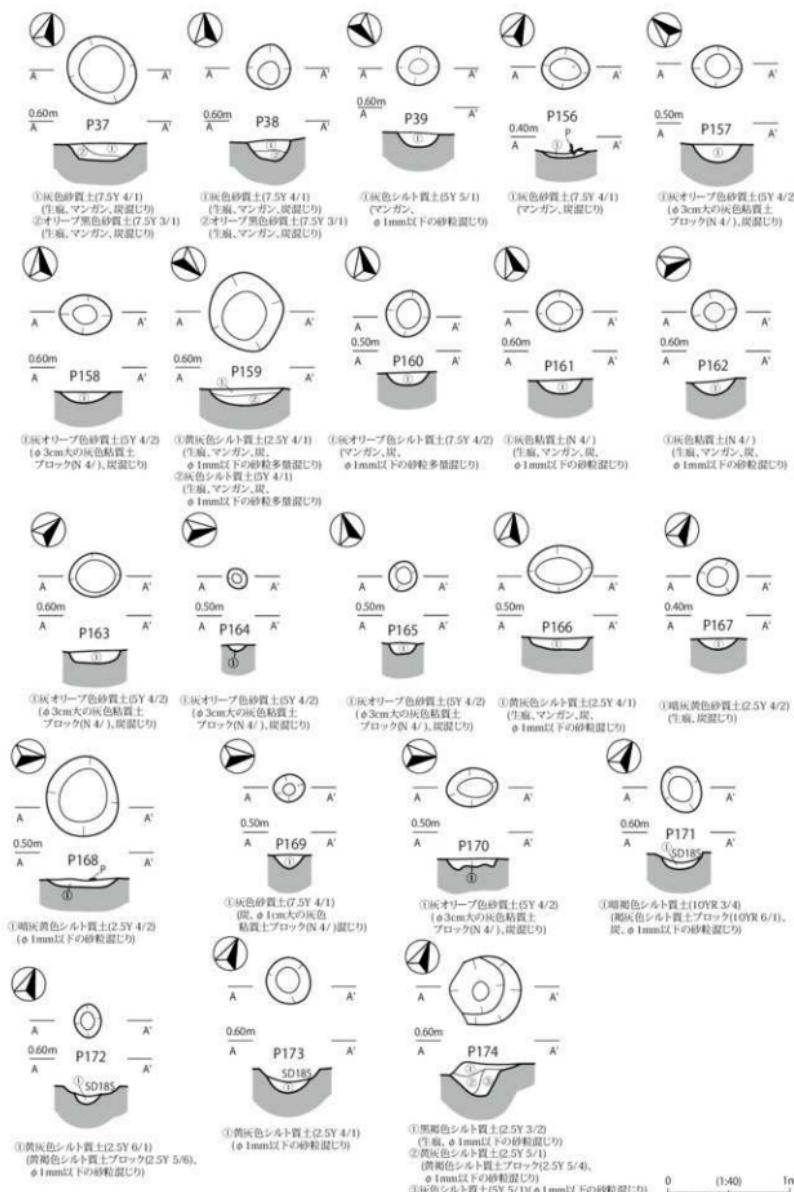
甕(152~154図)

甕は大量に出土していて、口縁部に擬凹線を加えるものが支配的である(504~530など)。全体形は、大型~中型のものは長胴気味のものが、小型のものは球胴が多く、いずれも底部は小さくすぼまって時に高台状の上げ底になる(506・508)。胴部は無文のものと肩部に施文するものが半々程度ある。後者の文様は波状文が多く(507・509など)、貝殻刺突文(510)や貝殻腹縁押引文(517)がこれに次ぐ。貝殻腹縁文(521)や綾杉文(525)はほとんど例がない。多くは1種1段であるが、2種2段の文様帯をもつもの(504など)も一定量存在する。

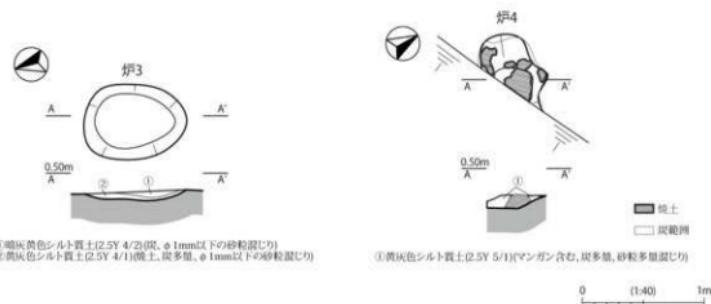
531は第3包含層の掘削中に出土したもので6世紀頃の土師器とみられる。検出しきれなかった中世の耕作溝か土坑によって混入したのであろうが、このような例は他にほとんど無い。受け口状口縁



第147図 第3遺構面 ピット(1)



第148図 第3構造面 ピット(2)



第149図 第3遺構面 炉

の512・513や、わずかに屈曲する無文の口縁部をもち内面を縦方向に細長く削る534や、「く」の字口縁でごく薄い533は外來の土器と考えられる。

スタンプ文をもつ甕は多くが小型球胴で(543~547)、凹線で区画した文様帶の中をスタンプ文だけで飾るもの(544)は少なく、貝殻腹縁による合掌文と交互に埋めるのが一般的である。スタンプは基本的に同心円文で、2重と3重同心円が多い。545は渦文、548は巴文の例。542は中型で長胴の甕にスタンプ文が施される例外的なもので、スタンプも二つ巴と渦文の2種類を用いる。549はスタンプ文をもたない装飾甕で、凹線による区画内を単方向の貝殻腹縁文で充填する。

高坏(第155図)

高坏の出土量は多くない。坏部の形態にはバラエティーがあつて、中程で稜線を描いて外反するもの(554~558)の他に、段や窪みをもつ楕形のもの(551~553)や下垂するもの(559)などがある。脚部(560~565・567)はシンプルなものが主体で、透かし孔をもたないものも多い。概して装飾に乏しく、凹線を口縁付近に巡らすものが少数ある程度である(552・559)。558は例外的に擬凹線を広く施し施文に用いた二枚貝縁部の曲線を確認できるが、器台の可能性がある。565~568は小型の高坏でミニチュアと呼んでもよいかもしれない。特に568は水簸された胎土をもつ精製のもので、把手が付けられている。

器台(第156・157図)

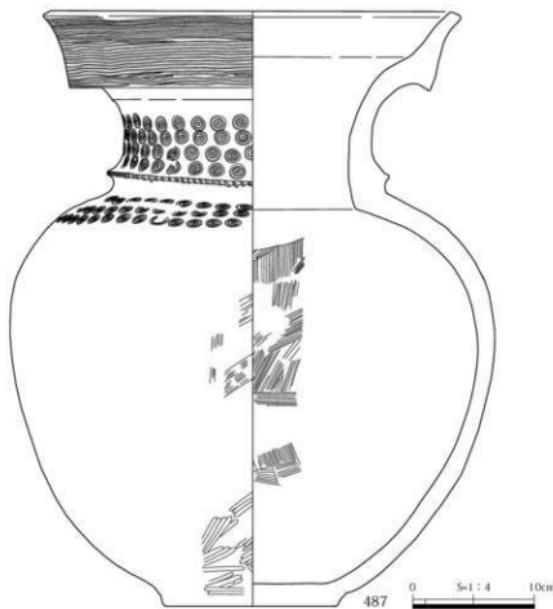
器台は比較的の出土量が多い。細長い脚柱部をもつものは、ほとんどの場合受部と脚部を擬凹線で飾る(569~576)。脚柱部にも凹線や刺突文、時に綾杉文が施される(574~576)。これとは対照的に、脚柱部が太くて短い鼓形器台には擬凹線のものは少ない(580・582)。その代わりに、段部に文様帶をもつのは大半が鼓形器台である(590・593・594・596・597など)。文様帶は凹線による区画内に2重または3重同心円文スタンプを押すのが普通で(591~598)、S字状渦文(599)や連続渦文(599)、半截竹管による爪形文(590)のものもある。段部に凹線だけを入れるもの(580)は簡略版であろう。特殊なものとしては、擬凹線をもつ有段の受部に単純な脚を組み合わせたもの(579)があり、脚部に絵画様のごく小さな線刻がある。586は単純な脚に透かし孔を5つあけるもの。589は屈曲する口縁部の内外面に凹線を入れるもので、高坏かもしれない。601は鋸歯文を描くもの。壺の可能性もある。

蓋(第157図)

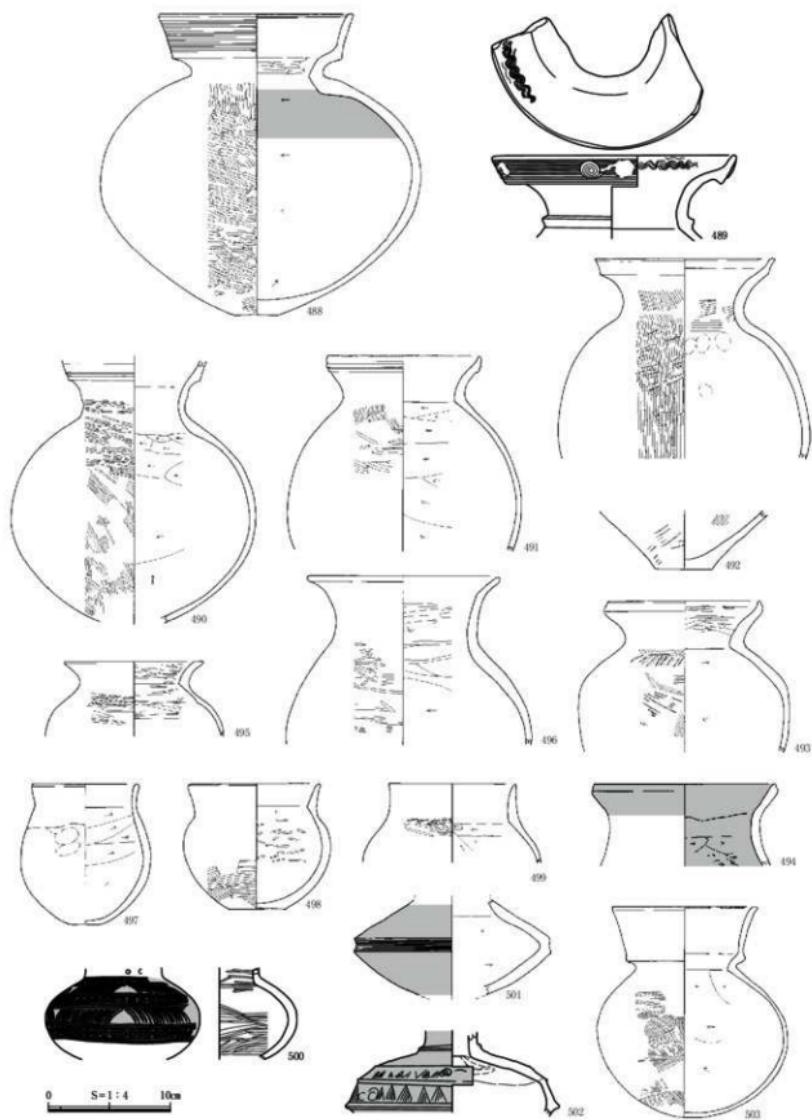
蓋は秋里遺跡から出土する弥生土器を特徴づけるものの一つである。ほとんどがつまみをもつ形態で有孔のものは稀(602~615)。口径は15cm前後のものと10cm前後のものが多い。前者は中型の壺に、後者は小型のものに対応するが、壺の出土量に比べるとかなり少ないので、一般的な使用ではなく、小型球胴壺や注口土器用と考えたい。616は帽子形の蓋で2個一対の孔をもち口縁部は垂直に立ち上がる。その特徴は、台付無頸壺の口縁部に対応する。

注口土器(第158図)

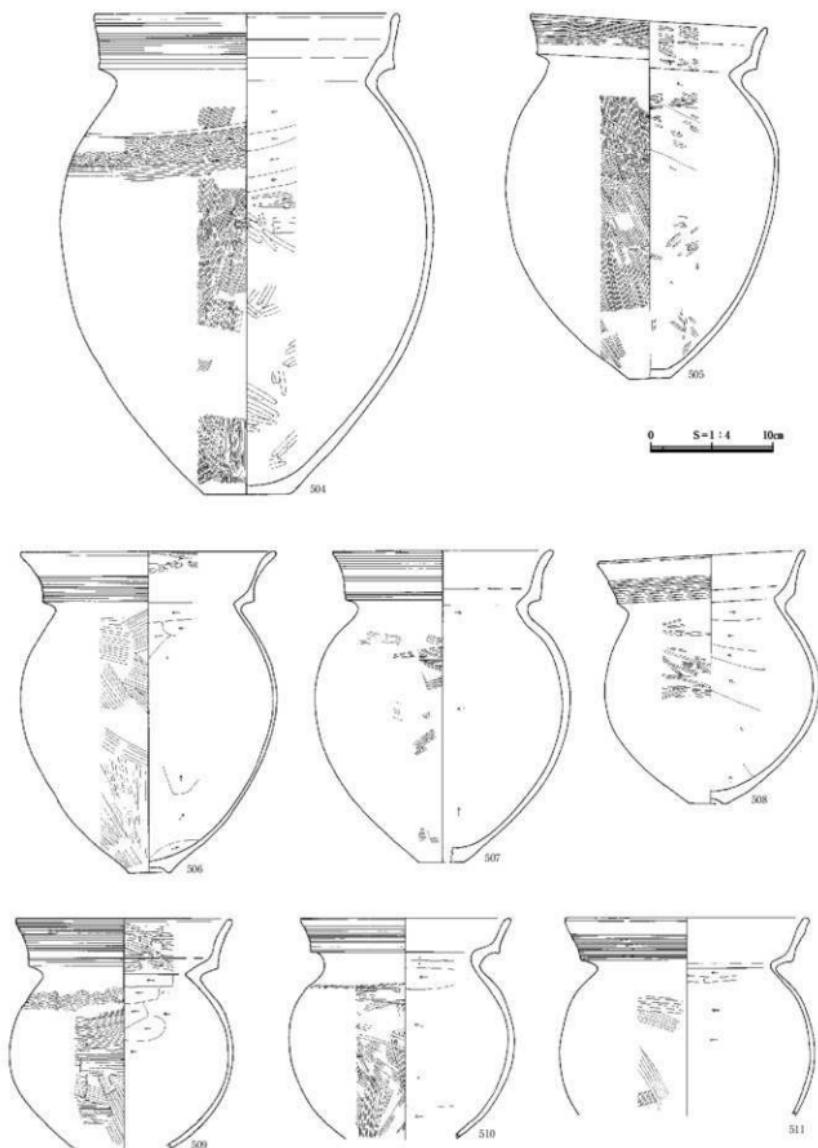
注口土器も今回の調査で特徴的に出土した土器である(617~630)。全形を復元できるものは多くはないが、注口部(619)や把手(628~630)は一定量出土している。617と618はよく磨き込まれた精製のもので体部に装飾は施さない。把手には629のように半截竹管の組み合わせでS字文を刻むものや、630のように綾杉文で充填するものがあり、施文するものにもSI 3出土(第83図178)やK 5区出土(第130図398)のようなスタンプ文以外の種類もあったことがわかる。



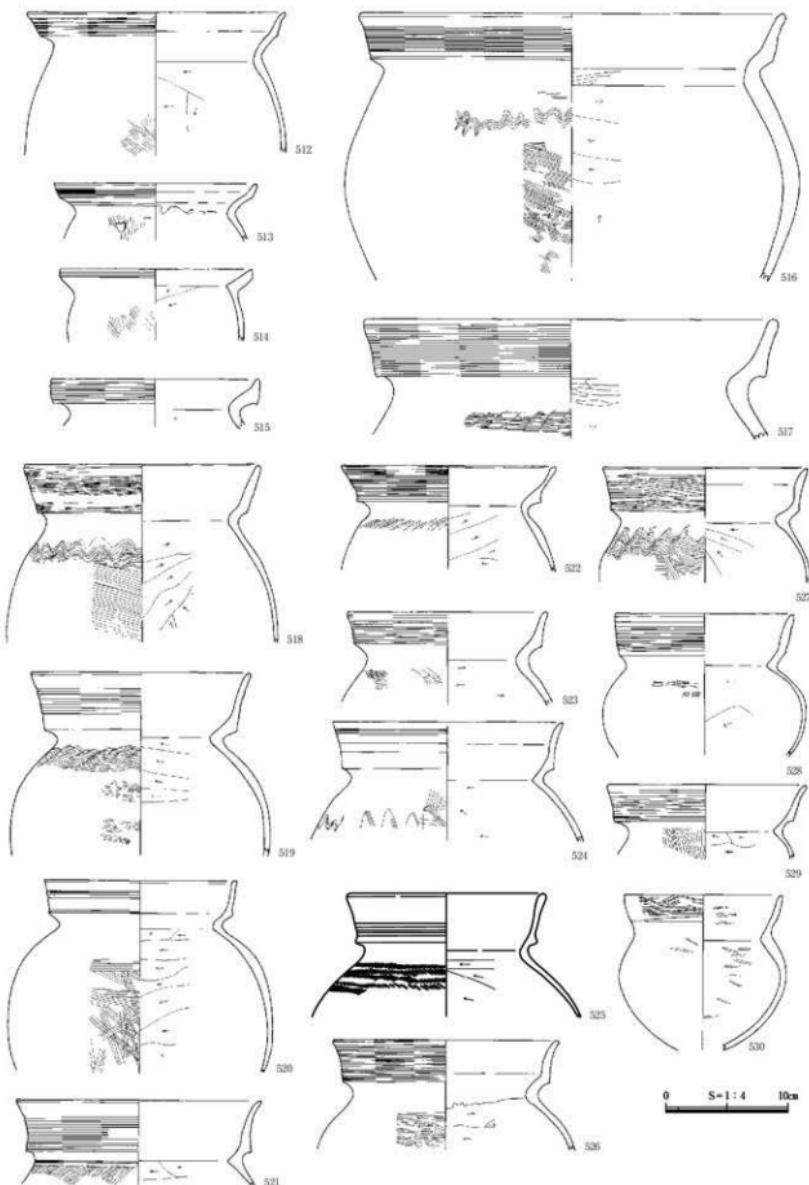
第150図 第3包含層出土遺物(1)



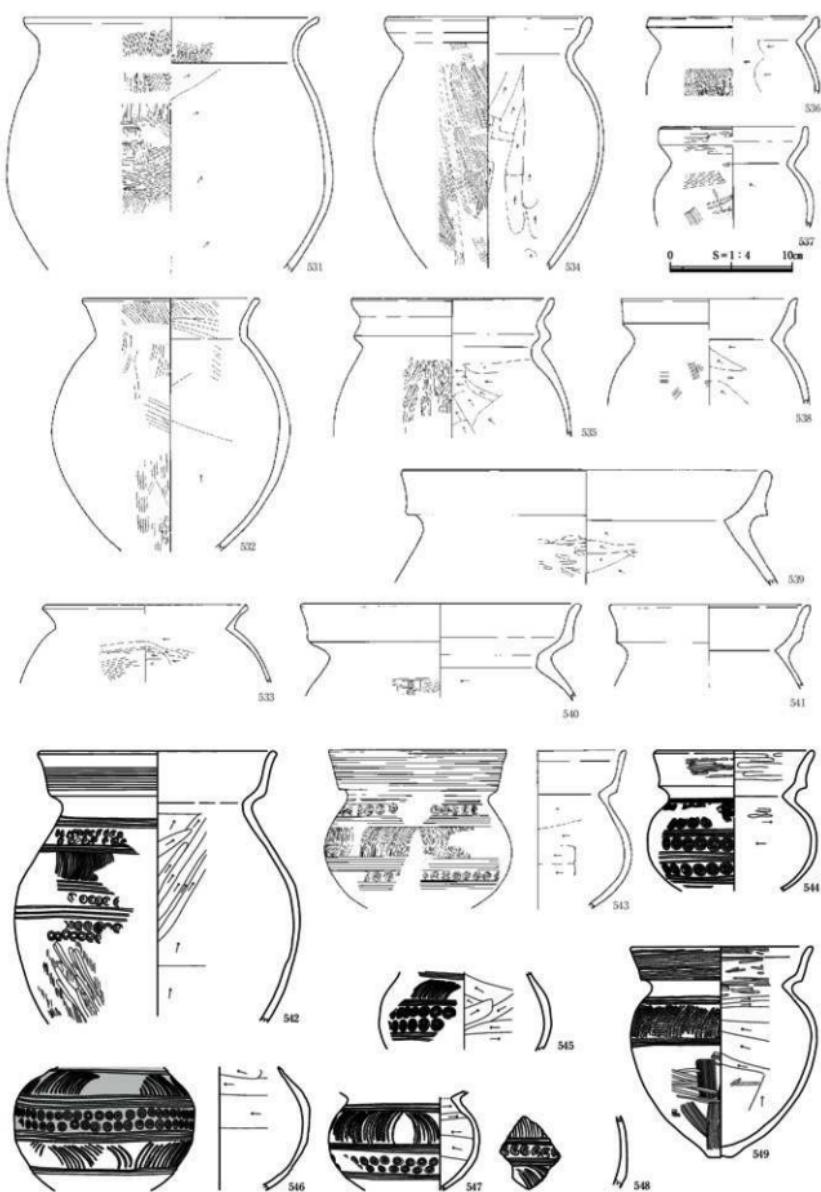
第151図 第3包含層出土遺物(2)



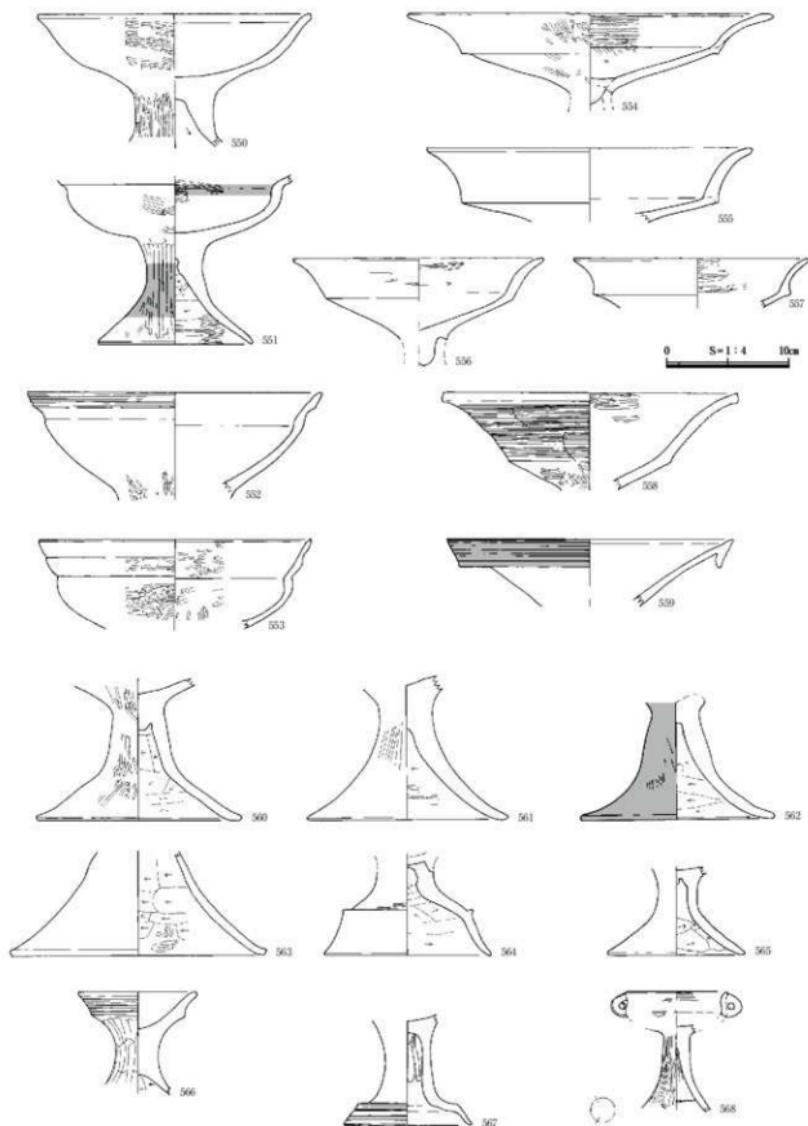
第152図 第3包含層出土遺物(3)



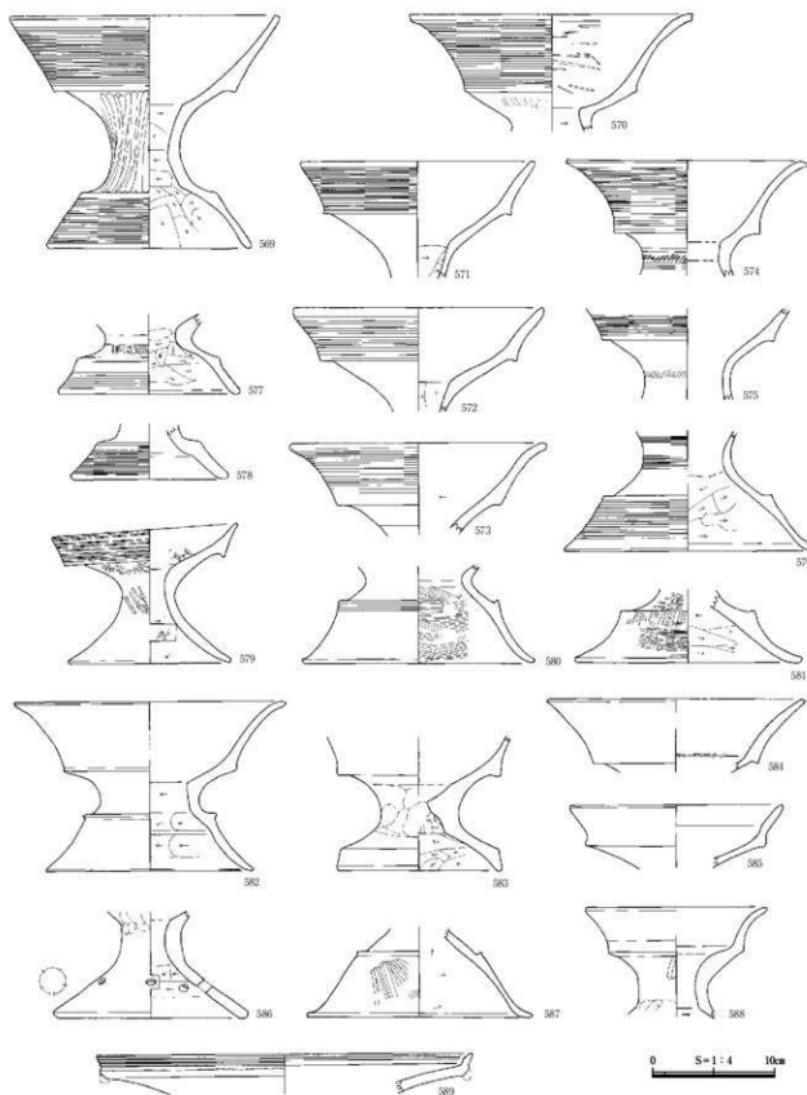
第153図 第3包含層出土遺物(4)



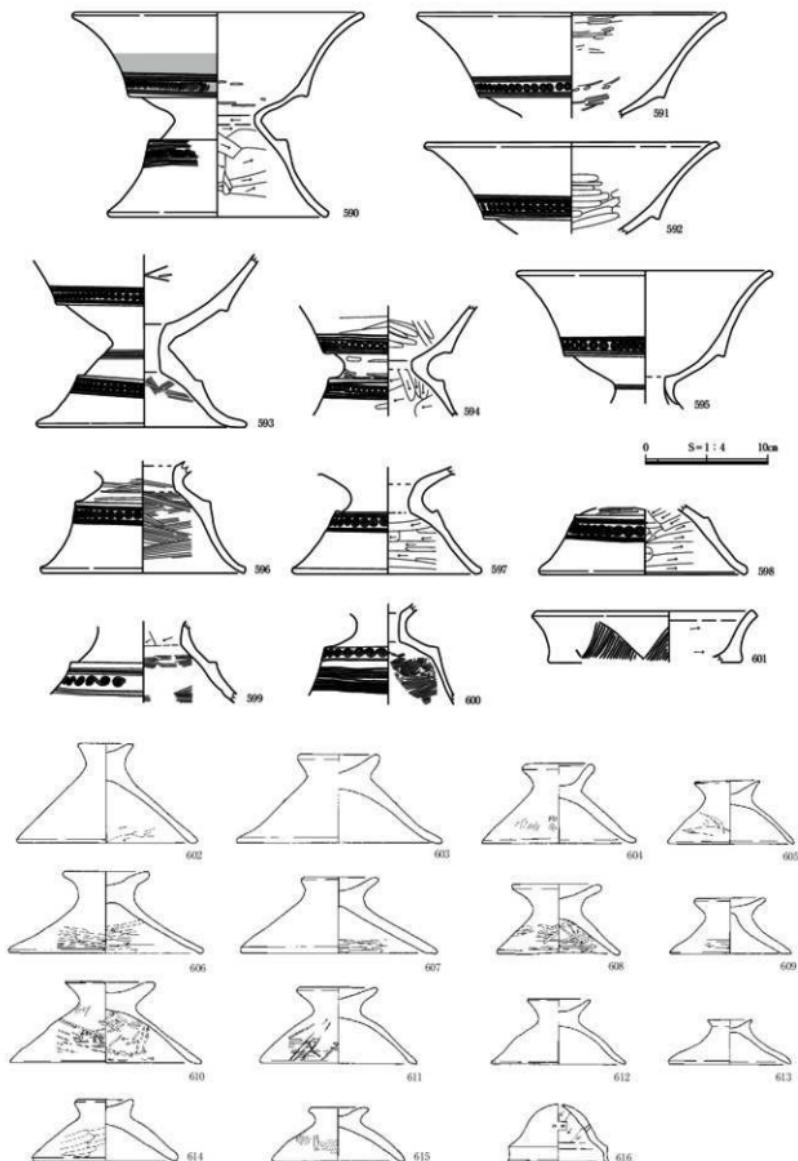
第154図 第3包含層出土遺物(5)



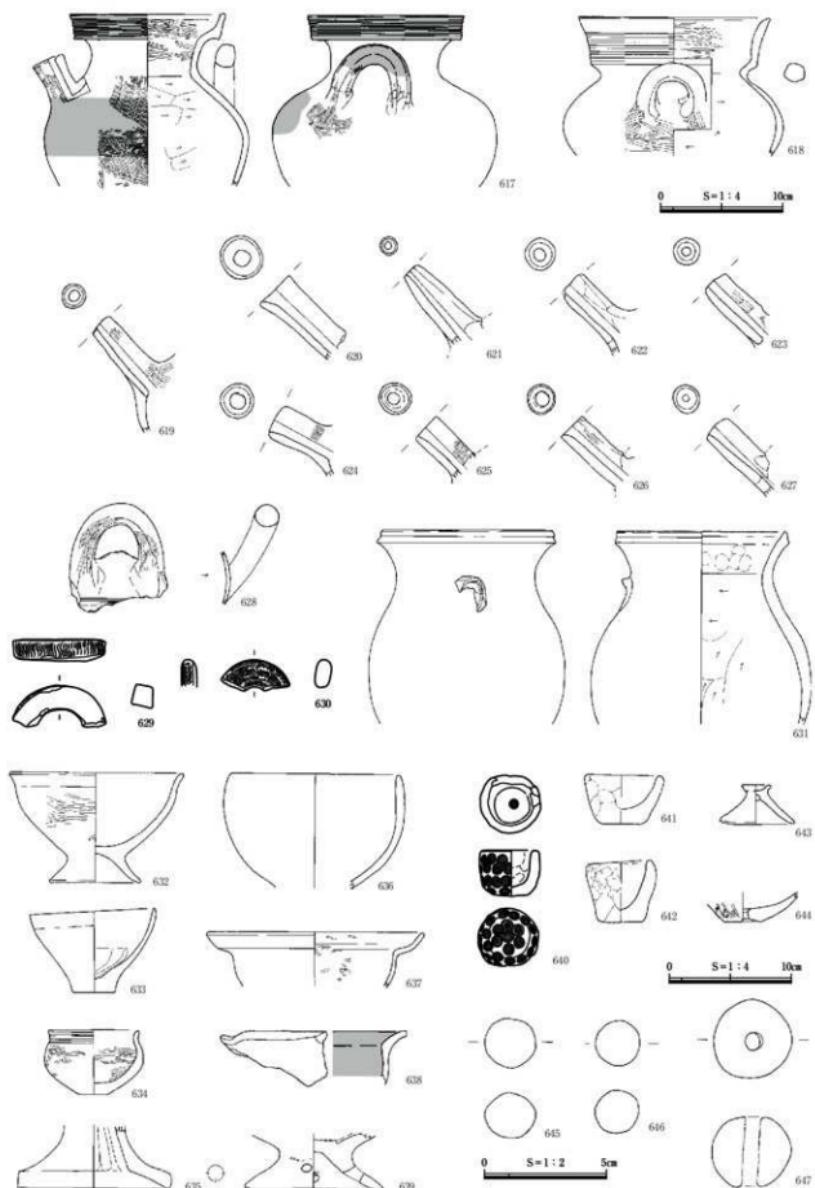
第155図 第3包含層出土遺物(6)



第156図 第3包含層出土遺物(7)



第157図 第3包含層出土遺物(8)



第158図 第3包含層出土遺物(9)

その他(631~647)

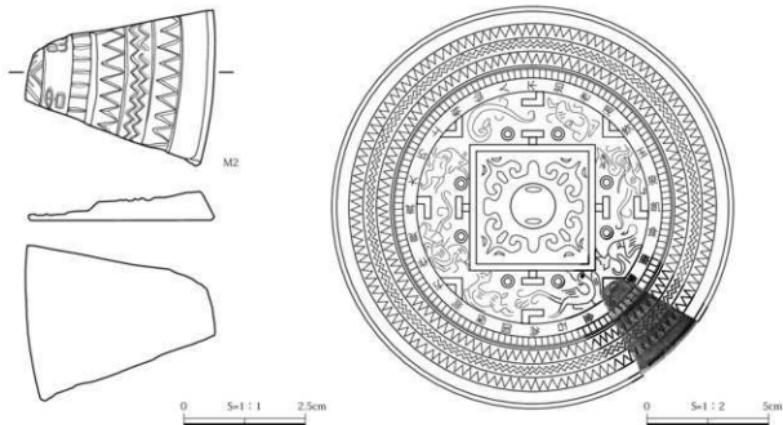
631は水差形土器。片口はなく把手も粘土紐を貼り付けただけの痕跡器官となっている。634は小型精製の鉢で、ミニチュア土器に分類すべきかもしれない。638は片口をもつ大型の鉢。640~642は手捏土器。中でも640は外面を2重同心円文のスタンプで充填し、内面底部にも1つ押す。スタンプ文のもつ祭祀的な意味を証明するものといえよう。643は珍しい蓋のミニチュア土器で、蓋が多く出土する本遺跡ならではのもの。644は壺か甕とみられる底部の破片。外面から3分の2の深さまで焼成前に未貫通の窪みを作っておき、焼成後に窪みからの打撃で貫通させている。祭祀に用いることを前提に土器づくりが行われていることと、貫通させる行為自体に意味があったことを窺わせる興味深い例である。645~647は土玉。無孔のもの(645・646)は通常の土玉(647)に比べて小さい。鈴の丸であろうか。

破鏡(第159図、巻頭図版4-4)

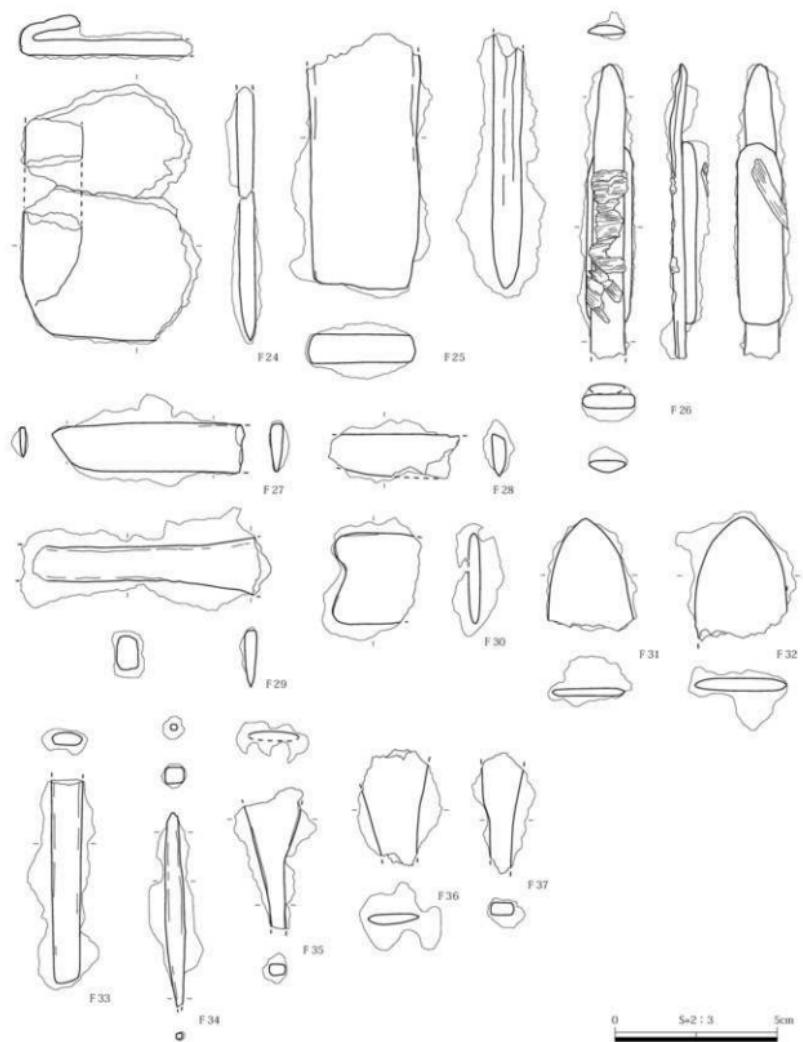
SI 2の南西角から0.4m離れたSB 1との間のVI層中から出土した。この建物群に所属した可能性がある。3.8cm×3.2cmを測る後漢鏡の方格規矩鏡の縁部片で、重さは254g。直径16.5cm前後に復元できる。内区のV字文と銘帯の「寿如」の2文字の位置と間隔を根拠に復元すると、第159図のようになる。銘文は方格の角から始まる28字のものではないかと思われる。鏡背の鋸上りは良く磨滅も進んでいない。文様の間に赤色顔料らしき物質がわずかに残る。破面のうち1面が研磨されている一方で、もう1面は分割時の折れ面末端の舌状部が鏡面側に残っている。これまでに国内で発見された破鏡の中には、同一個体とみられるものは確認できていない。

鉄器(第160・161図)

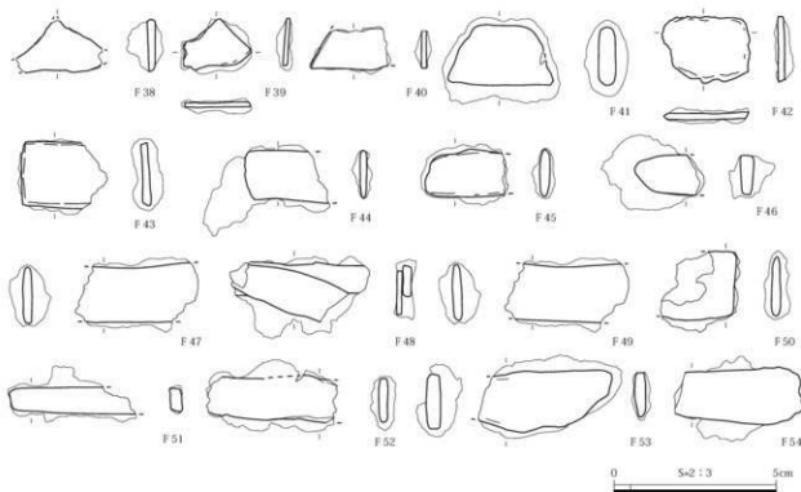
F24は折り返しのある鉄刃、F25は板状の鉄斧とみられる。F26は刃部の形状から鉈とみられるが、柄に鉄板を重ね、木質で卷いた痕跡がある。F27・28は刀子、F29も柄を作り出した刀子の可能性がある。様々な形状があり、F31・32・F35~37は鉄鎌の破片とみられる。第161図には明確に製品と判別のしにくいものを集めた。F38~41のように三角形や台形など不定形なものほかF43~45のように方形を中心とした薄い板状のものF51のようにやや厚みのある棒状のものなどがある。いずれも



第159図 第3包含層出土遺物(10)



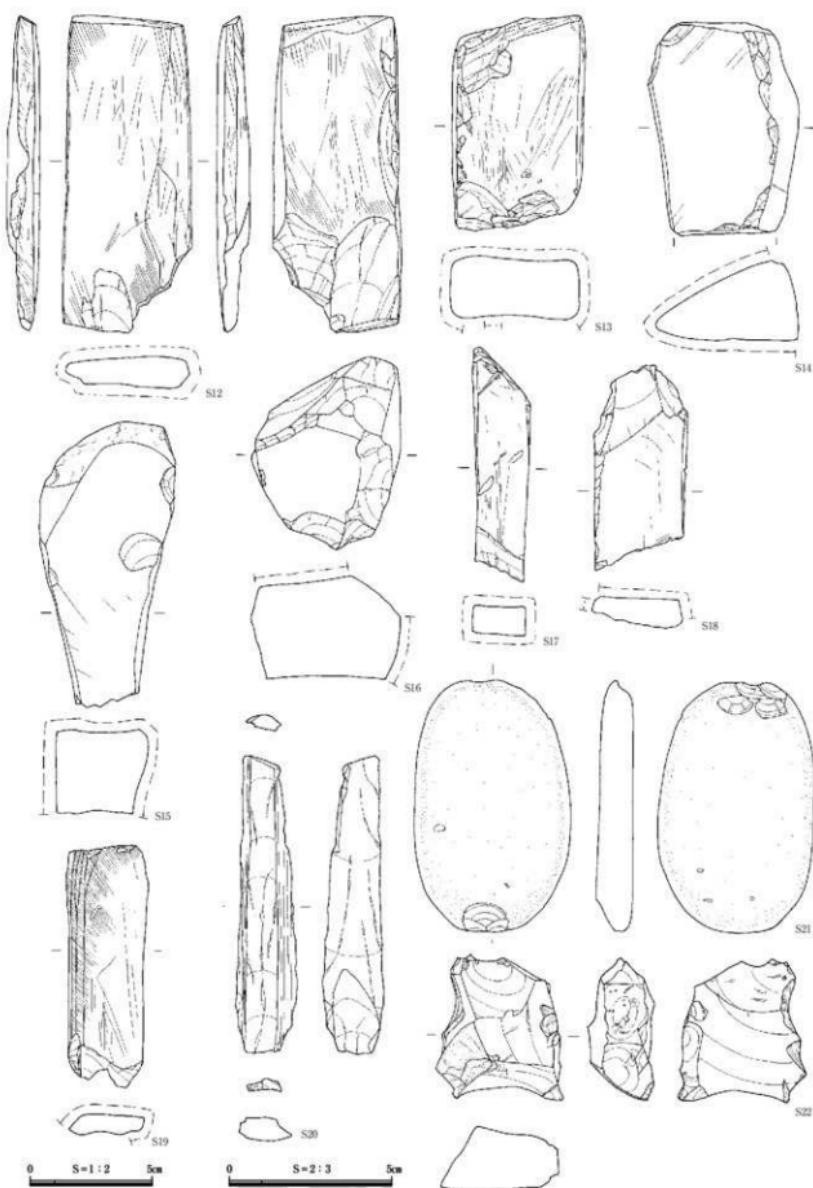
第160図 第3包含層出土遺物(11)



第161図 第3包含層出土遺物(12)

製品の破片である可能性のほか、製作に伴う端材や鉄器製作のための素材である可能性も考えられる。石器(第162図)

S 12～S 19は砾石。形態は多様で、細粒の花崗岩や片岩を石材に用いるものが多い。S 20は緑色片岩の剥片。剥離は両極打撃による。背面両縁に研磨があり中央に帯状の高まりがある。一見、磨製石剣から剥がれた剥片に見えなくもないが、下辺側面にも研磨面があるため磨製石剣の形にはならない。S 21はディサイトの打製石錐。S 22は緑色凝灰岩の石核で、玉作関連遺物。被熱している。なお今回の調査区では、黒曜石やサヌカイトなどの打製石器の石材は、碎片まで含めて1点も出土しなかった。鉄器が多数出土したこととは対照的な事実で、利器としての石器製作が完全に終わった時期以降に利用された場所であることが分かる。



第162図 第3包含層出土遺物(13)

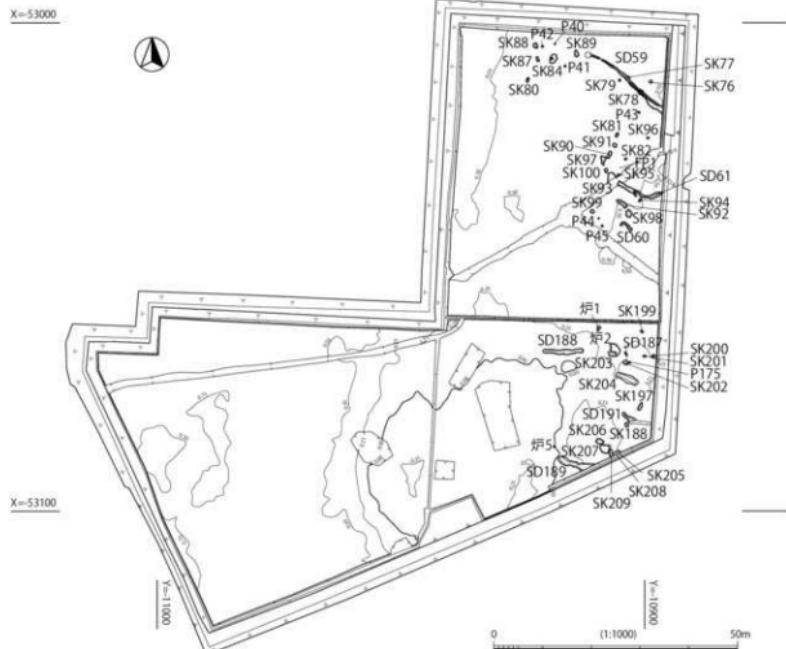
第5節 第4遺構面

1 概要(第163図)

第4遺構面は、VI-2層を除去した面で検出した。遺構の分布はVI層をVI-1層とVI-2層に分層できた5ライン以東には限られる。調査区内の微地形や堆積状況によって、検出面は異なる。VII層(灰色砂質土)の堆積が顕著なEライン以北などではVII層上面で、それ以外の場所では基盤粘土層のVIII層上面での検出である。

秋里遺跡でこれまでに行われた発掘調査では弥生時代の建物跡がほとんど確認できなかったという事実が示すように、弥生時代の遺構面や包含層を構成する本調査区VI層相当のシルト質土は、遺構検出が非常に困難な土である。VIII層相当の基盤粘土層まで掘り下げれば遺構の検出は容易であるが、平地建物は言うまでもなく、少なからぬ遺構が構築面はおろか遺構そのものが失われることになる。今回の調査で第4遺構面を設定した主な目的は、第3遺構面で取りこぼした遺構を回収するため、いわばダメ押しである。本来の遺構構築面はVI-2層中かあるいはVI-1層中にあっただろう。

第4遺構面では、溝7条・土坑35基・ピット7基・炉3基を検出した。建物跡などの遺構が皆無で、溝や土坑に不定形で浅いものが多いことは、この面で検出した遺構の多くが本来は第3遺構面に所属する遺構であることを示しているだろう。実際に、第4遺構面の遺構や第4包含層(VI-2層)から出土した遺物は、第3遺構面のそれと時期差は無く、出土量もずっと少ない。



第163図 第4遺構面遺構配置図

表18 第4遺構面 溝・土坑・ピット一覧

遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	備考	遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	備考	遺構名	長(m)	幅(m)	深(m)	備考	※復元値	△現存値
															備考	本片
SD59	△18.20	1.30	0.10	土器多量	SK89	1.38	0.86	0.08		SK202	1.10	0.82	0.17	土器		
SD60	2.70	0.50	0.10	土器	SK90	1.58	0.75	0.09		SK203	2.70	2.00	0.49			
SD61	△9.90	0.89	0.11		SK91	0.94	0.73	0.08		SK204	4.81	1.66	0.39	土器		
SD187	0.85	0.27	0.07		SK92	2.54	1.20	0.07		SK205	0.60	0.49	0.06	土器		
SD188	8.30	1.10	0.11		SK93	△1.40	1.80	0.04		SK206	1.70	1.11	0.20			
SD189	△7.65	1.68	0.10		SK94	0.86	0.46	0.08		SK207	2.02	1.74	0.17			
SD191	3.13	1.08	0.15		SK95	0.76	△0.61	0.05		SK208	△1.71	△0.62	0.25			
SK76	0.68	0.68	0.08	土器	SK96	0.56	0.46	0.09		SK209	△1.54	0.75	0.18			
SK77	1.28	1.05	0.08	土器多量	SK97	2.00	1.21	0.03		P40	0.32	0.32	0.06			
SK78	1.20	1.10	0.12		SK98	1.68	1.35	0.17		P41	0.46	0.46	0.07			
SK79	0.50	0.45	0.12		SK99	0.84	0.75	0.18	本片	P42	0.52	0.36	0.06			
SK80	1.03	0.50	0.14		SK100	0.93	0.71	0.05		P43	0.49	0.40	0.06			
SK81	0.98	0.58	0.08		SK108	0.96	0.70	0.10		P44	0.36	0.24	0.08			
SK82	1.16	0.88	0.30	土器	SK107	1.74	0.63	0.21		P45	0.41	0.38	0.14			
SK84	2.12	1.38	0.08	焼土面	SK109	0.70	0.40	0.08		P175	0.38	0.38	0.13			
SK87	1.10	0.55	0.10		SK200	0.72	0.52	0.22								
SK88	1.18	0.91	0.08		SK201	0.72	0.42	0.12								

2 溝(第164・165図、表18、PL42)

第4遺構面で検出した7条の溝のうち、主なものを次に記す。

SD59(第164・166図)

C 2グリッドからB 4グリッドにかけて北西方向に直線的に走る溝で、東側は調査区外に延び、長さは18.2m以上を測る。東端では1.3mあった幅が北西に向かうに従って狭く途切れがちになり、西端では0.3mしかない。検出面での標高は0.43m、深いところでも0.10mと浅い。埋土からは蓋(第166図651)や高壙脚部(652)など弥生時代後期後葉の土器が出土した。

SD60(第164・166図)

F 3グリッドに位置する長さ2.7m 幅0.5mの短い溝で、一端が「し」字状に屈曲する。検出面の標高は0.52m、深さ0.10m。小さな溝だが、4個体分の甕(第166図653~656)が出土している。

SD61(第164図・166図)

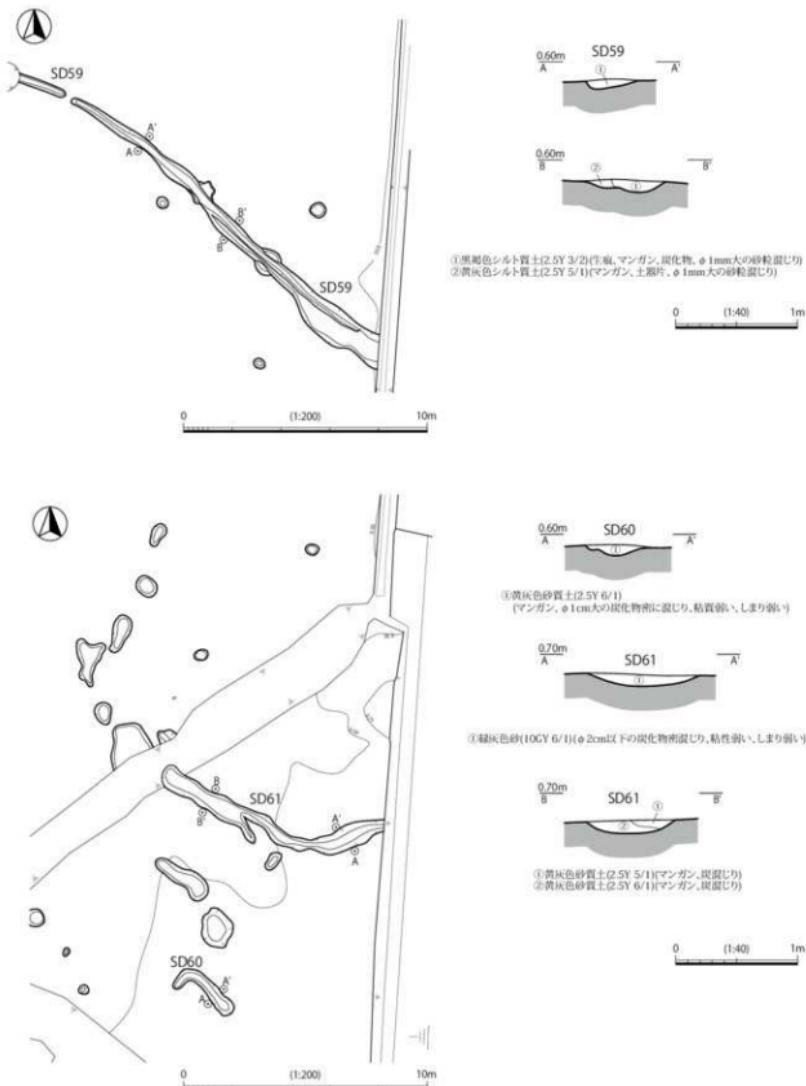
E 2・E 3グリッドにかけて検出した溝で、検出面での標高は0.54m、最大幅0.89m、深さ0.11mを測る。遺物はほとんど出土しなかった。D 3・E 3グリッドで検出した7基の土坑は、このSD61の延長線上に連なっており、合わせて内径約13mの半環状の区画を形成している。SD61が掘られているのは、集落本体が乗る微高地が調査区内に張り出した、比較的高い場所である。また、区画の中央を現代の攪乱によって失っているため遺構は確認できなかったが、攪乱の北側のVI-1層中では炭化材や土器が多く出土したことから、本来はSI 1と同様の平地建物の外周溝だった可能性がある。

SD188(第165図)

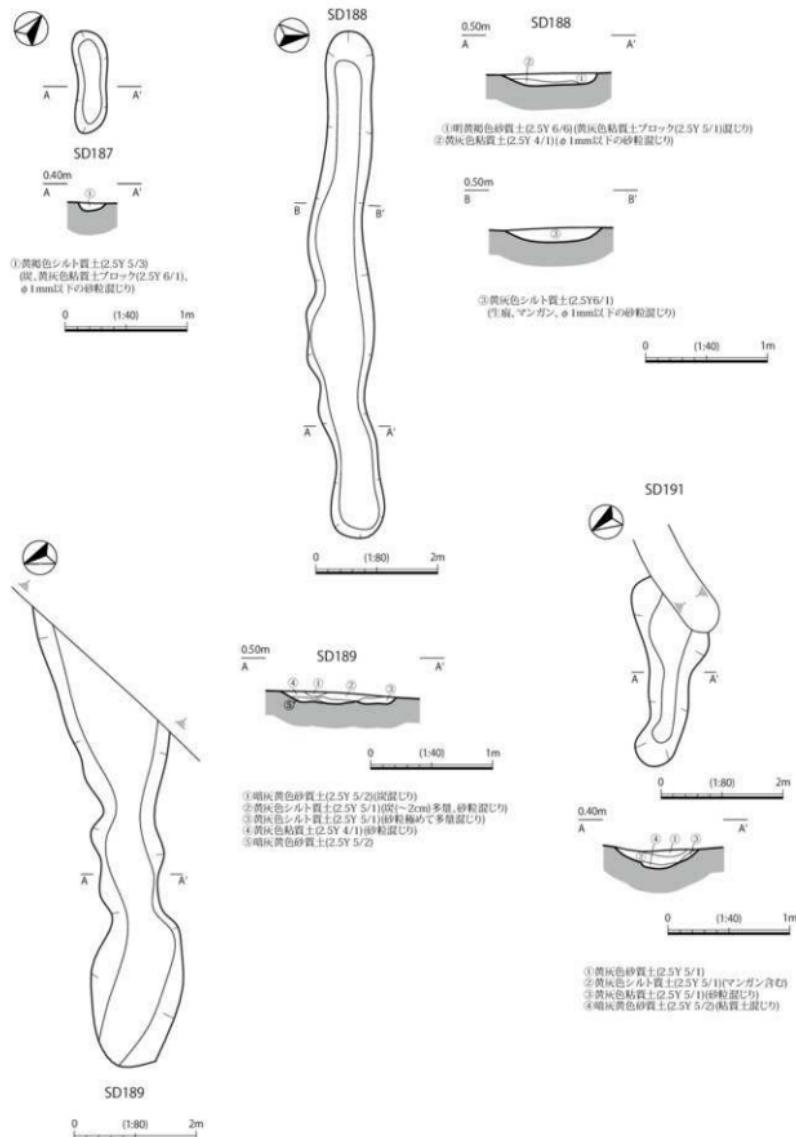
H 4グリッドを東西方向に走る溝で、長さ8.3m、幅1.1m、深さ0.11m。低地と微高地との境付近に掘られた境界溝と見られる。土器集中15の形成に先行する。図示できる遺物は出土しなかった。

SD189(第165・166図)

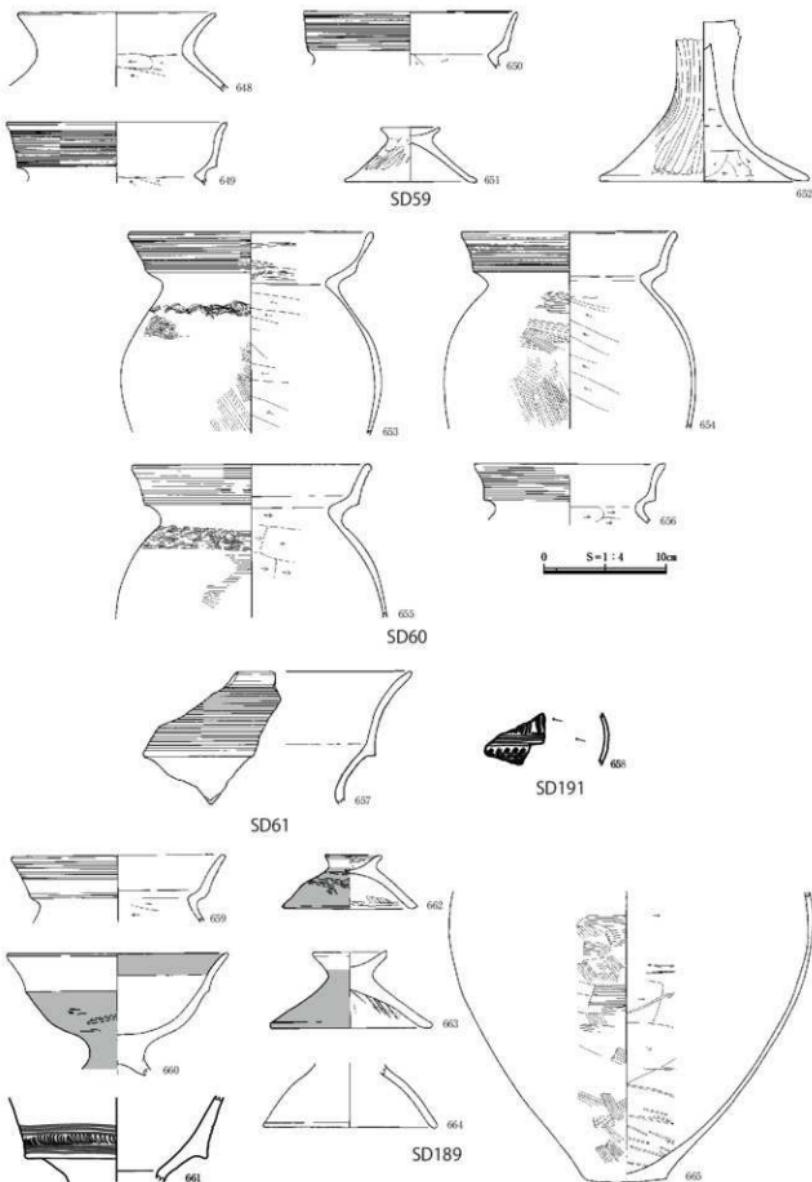
調査区南端のJ 4・K 4グリッドで検出した、幅1.68m、深さ0.10mの溝。東部が調査地外にかかる。位置と形状や、SI 1内の遺構と重なり合わないことから、SI 1の外周溝の一部の可能性が高い。台付鉢(第166図660)や蓋(662~664)などが出土した。



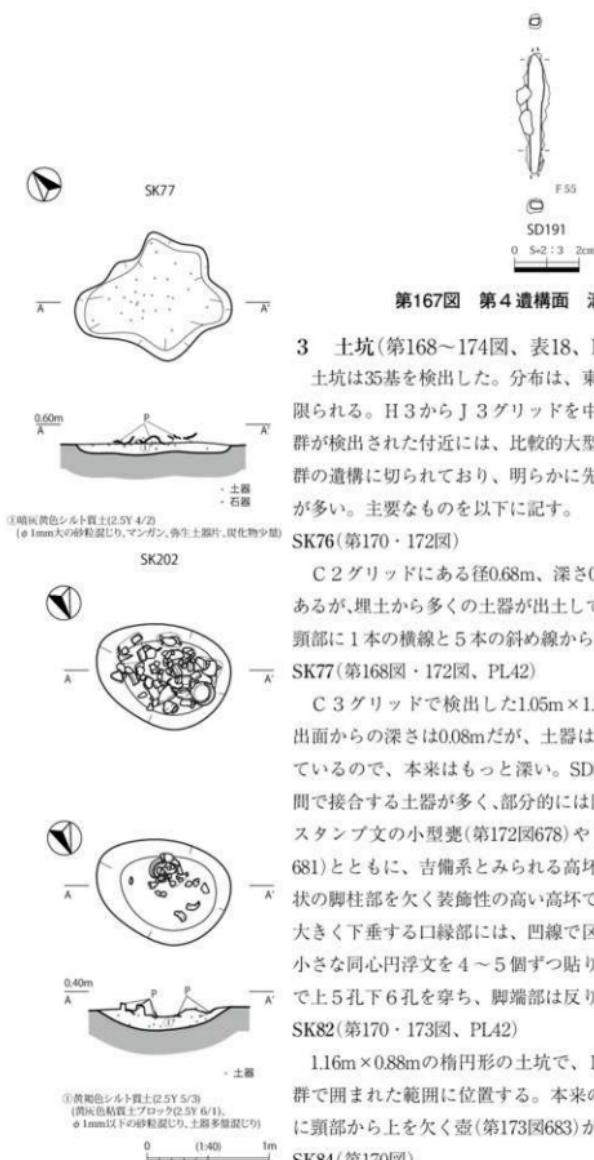
第164図 第4遺構面 溝(1)



第165図 第4遺構面 溝(2)



第166図 第4遺構面 溝出土遺物(1)



第167図 第4遺構面 溝出土遺物(2)

3 土坑(第168~174図、表18、PL42・43)

土坑は35基を検出した。分布は、東西の微高地上か裾部にはば限られる。H 3からJ 3グリッドを中心とする第3遺構面で建物群が検出された付近には、比較的大型のものが多い。一部は建物群の遺構に切られており、明らかに先行する。不定形で浅いものが多い。主要なものを以下に記す。

SK76(第170・172図)

C 2グリッドにある径0.68m、深さ0.08mの小さな円形の土坑であるが、埋土から多くの土器が出土している(第172図)。666は壺で、頸部に1本の横線と5本の斜め線からなる絵画様の線刻がある。

SK77(第168図・172図、PL42)

C 3グリッドで検出した1.05m×1.28mの不定形な土坑で、検出面からの深さは0.08mだが、土器は7cmほど高くからも出土しているので、本来はもっと深い。SD59を切っているが、両者の間で接合する土器が多く、部分的には同時に機能したようである。スタンプ文の小型甕(第172図678)や1セットの鼓形器台(680・681)とともに、吉備系とみられる高坏(679)が出土した。679は柱状の脚柱部を欠く装饰性の高い高坏で、赤褐色を呈する。坏部の大きく下垂する口縁部には、凹線で区画した中に鋸歯文を刻み、小さな同心円浮文を4~5個ずつ貼り付ける。脚部には段を抉んで上5孔下6孔を穿ち、脚端部は反り返る。

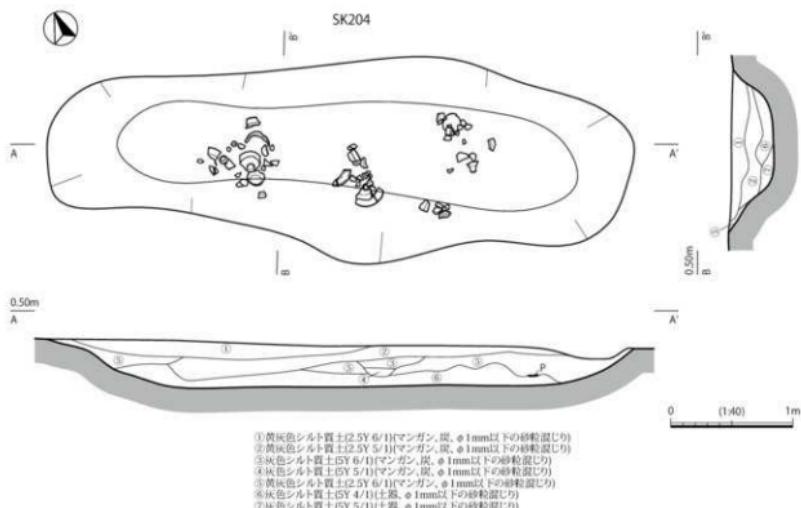
SK82(第170・173図、PL42)

1.16m×0.88mの楕円形の土坑で、D 3グリッドのSD61と土坑群で囲まれた範囲に位置する。本来の深さは0.30m以上で、中央に頸部から上を欠く壺(第173図683)が据えられていた。

SK84(第170図)

B 4グリッドの標高0.40mで検出したもので、2.12m×1.38mの浅い窪みの中央西寄りに、0.60m×0.42mの焼土面がある。この

第168図 第4遺構面 土坑(1)



第169図 第4遺構面 土坑(2)

土坑を中心に半径約5mの範囲には土坑4基とピット3基が分布し、上述の溝SD59もその付近を終点とするので、平地建物跡などの検出できなかった遺構に関わるもの可能性がある。

SK202(第168・173図, PL43)

H3グリッドにある1.10×0.82mの梢円形の土坑で、検出面からの深さは0.17m。埋土から土器が多く出土した(第173図)。688は壺で、肩部に加えた波状文に貝殻腹縁文を重ねて修正している。両者の相容れない関係を示すかのよう興味深い。690は水巻された胎土の土器で口縁部を欠くが鉢と思われる。高台をもち内外面を丁寧に磨き上げる精製のもの。691~693は同心円スタンプ文の器台。696はごく小さな壺の破片。小さいながら貝殻腹縁文を施す。

SK204(第169・174図, PL43)

I3グリッドで検出した4.8m×1.7mの溝状の土坑で、検出面からの深さ0.39mと、比較的深い。底面を中心に土器が出土した(第174図)。697は壺の口縁部で、凹線の上から渦巻浮文を貼り、さらにそのうえに貝殻による刺突文を加える。702は極小の球胴壺で、肩部に貝殻による刺突文を施す。704はラッパ形に大きく開く受部をもつ特異な器台。精製で、長い脚柱部には4孔以上3列の透かし孔を開ける。709はやや雑なつくりの低脚壺で、赤彩を施す。

4 ピット(第175図、表18)

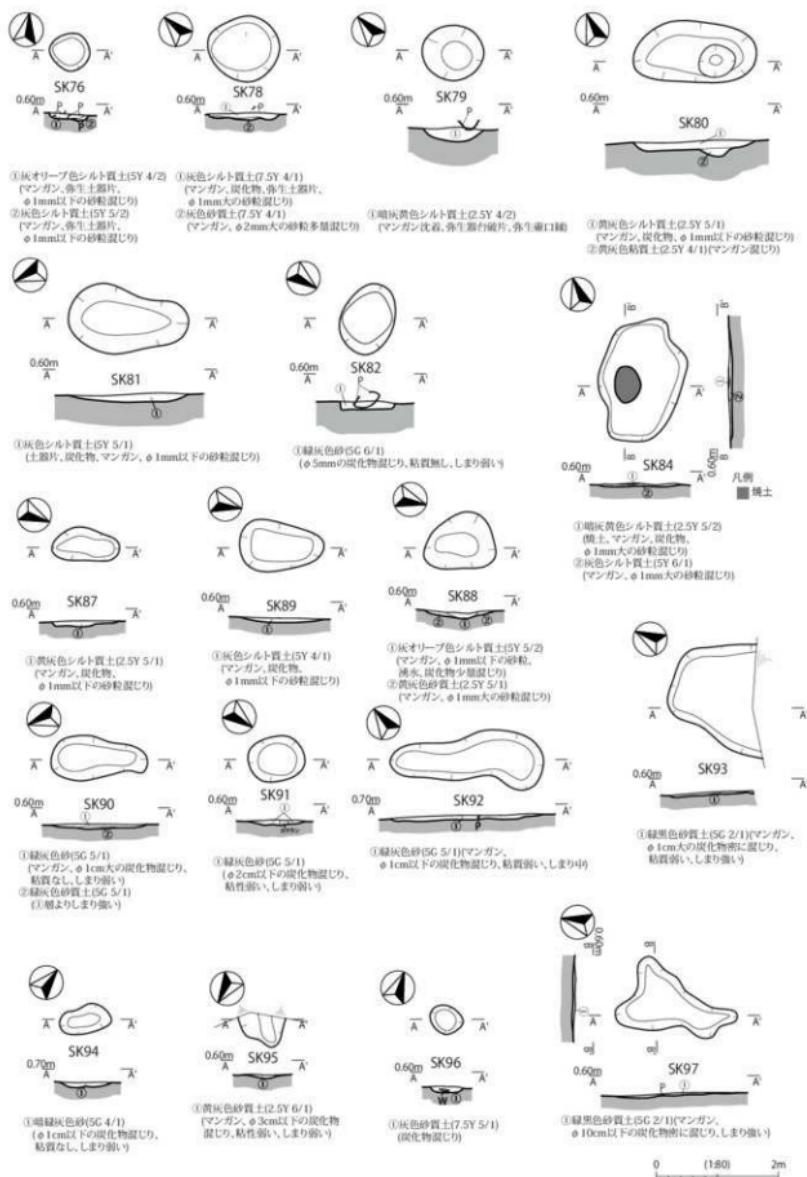
第4遺構面で検出したピットは7基。いずれも浅く、出土遺物など特筆すべきものはない。

5 炉(第175図)

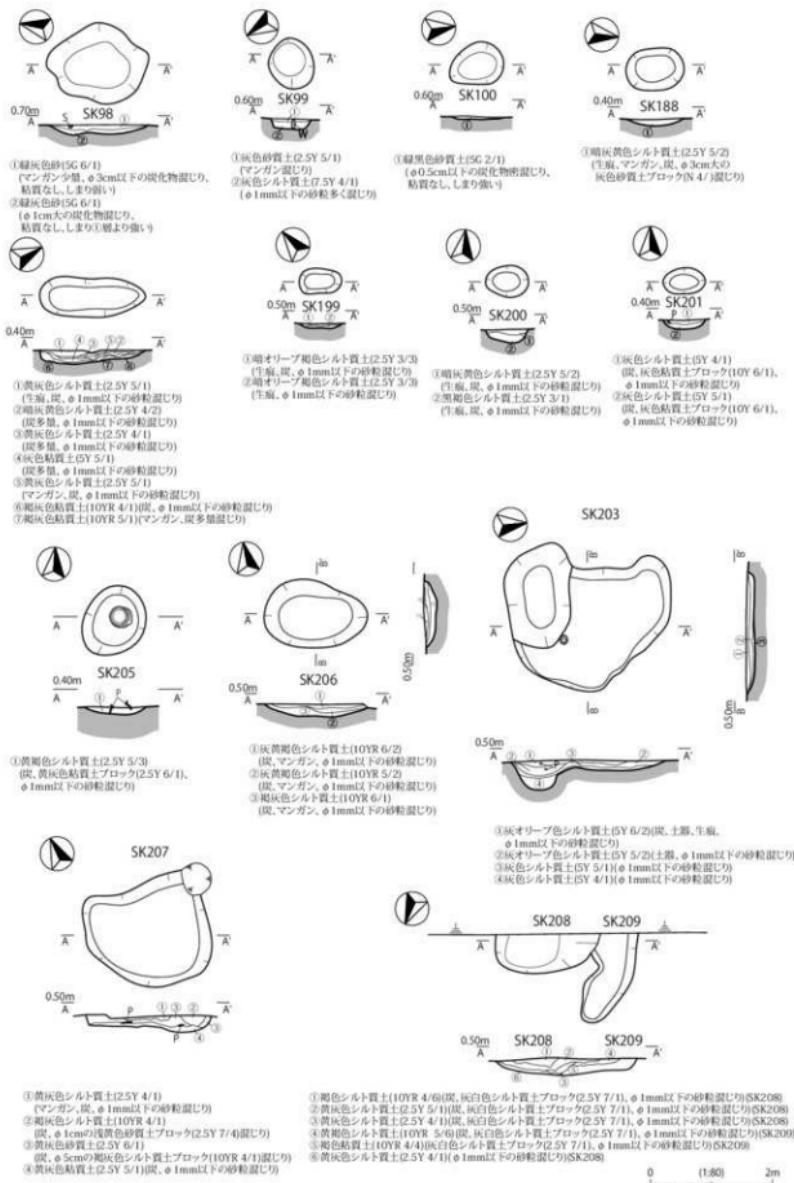
炉は3基を検出した。2基は隣接する。どの炉にも近くに関連がありそうな遺構はなく、屋外炉とみられる。

炉1(第175図、PL43)

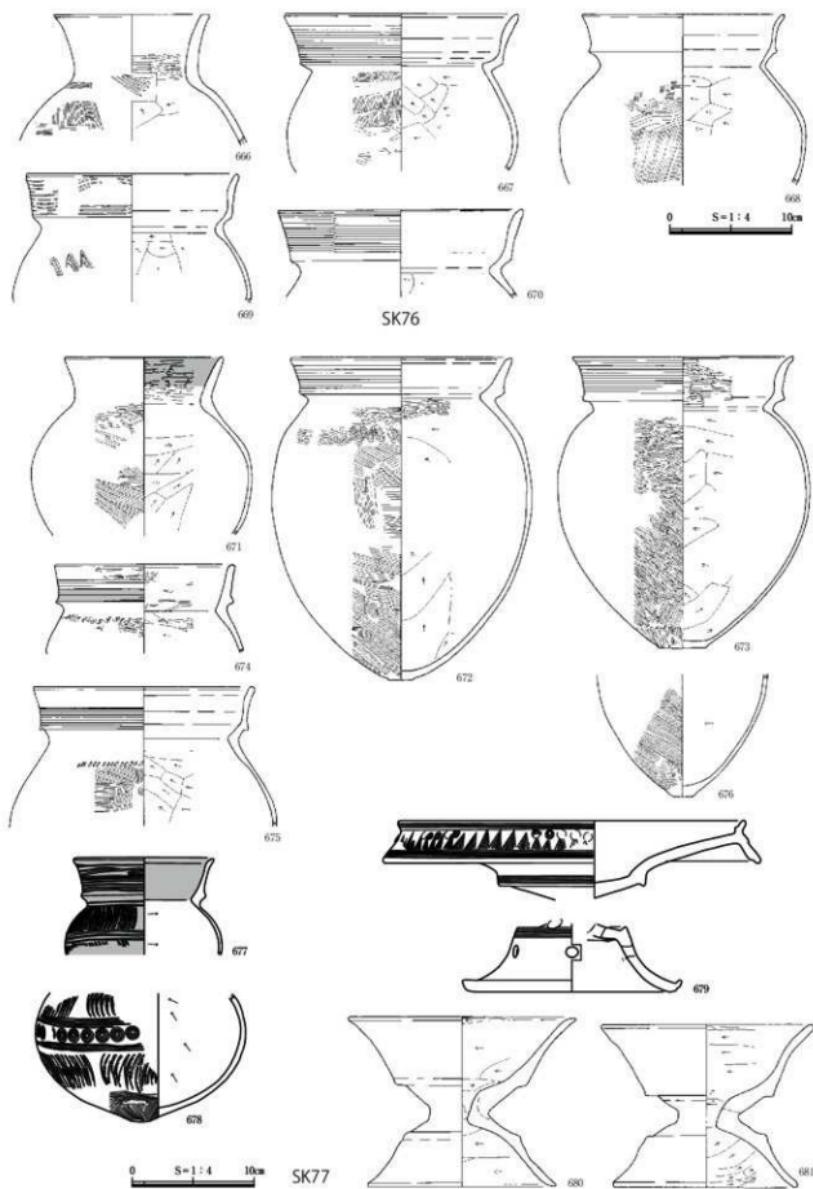
H3グリッドのⅧ層上面の標高0.34mで検出した。0.90m×0.75mの範囲に3cm程の厚い焼土塊が分



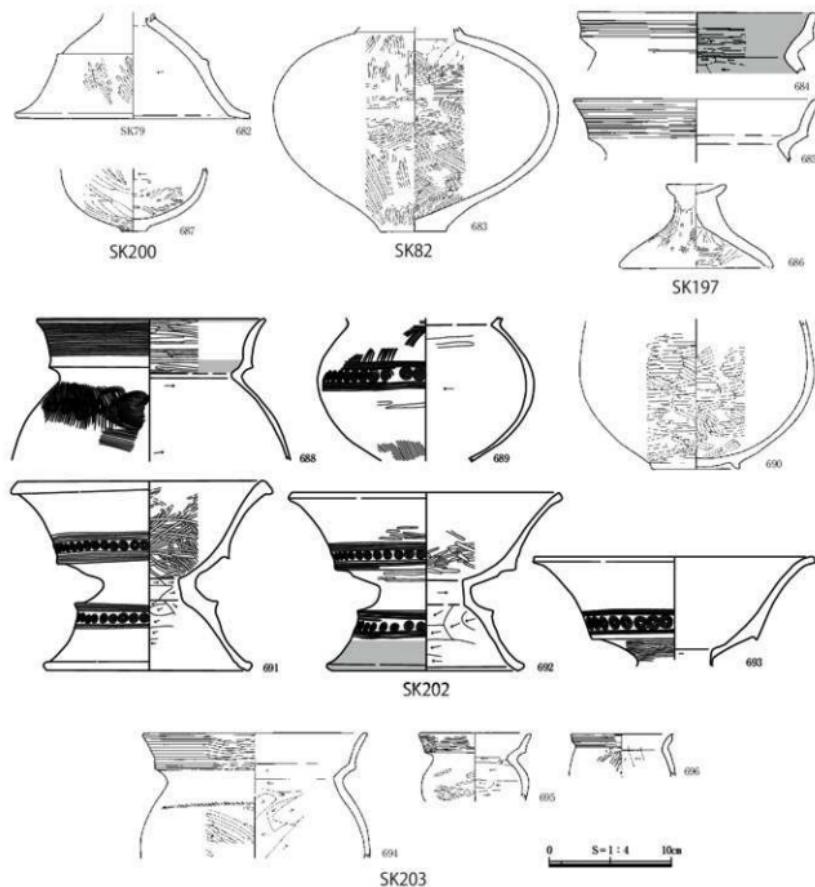
第170図 第4遺構面 土坑(3)



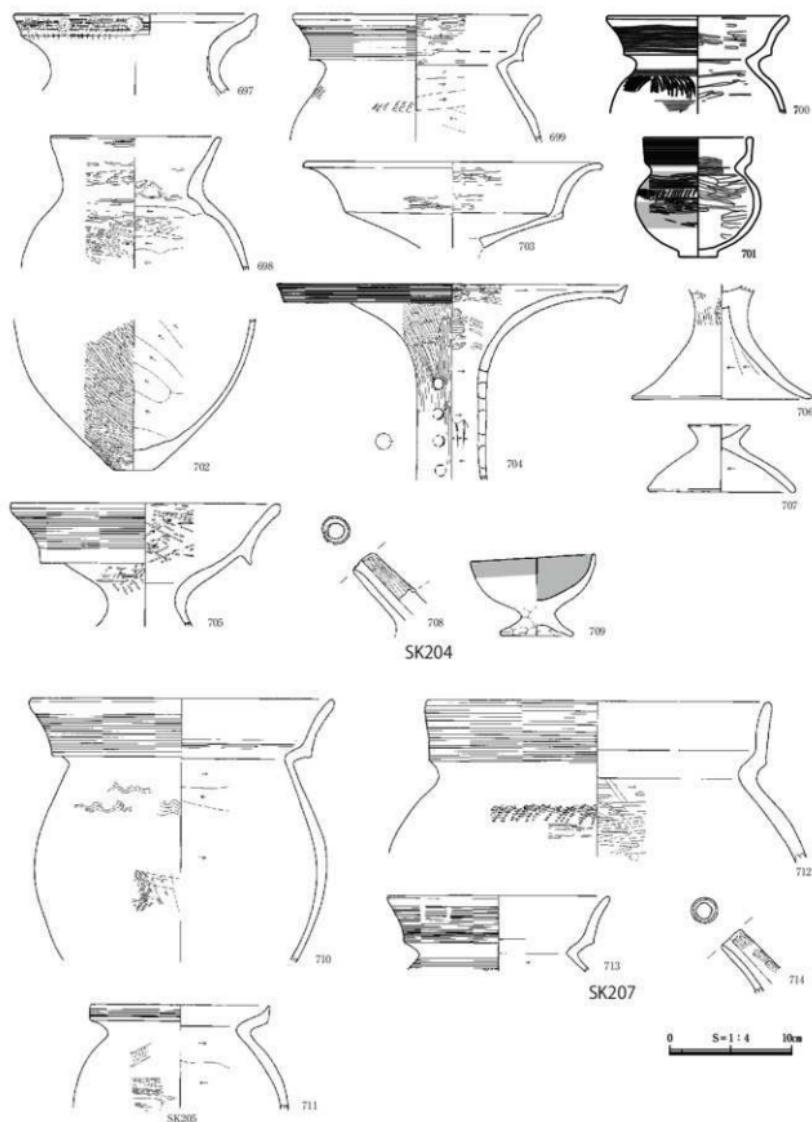
第171図 第4遺構面 土坑(4)



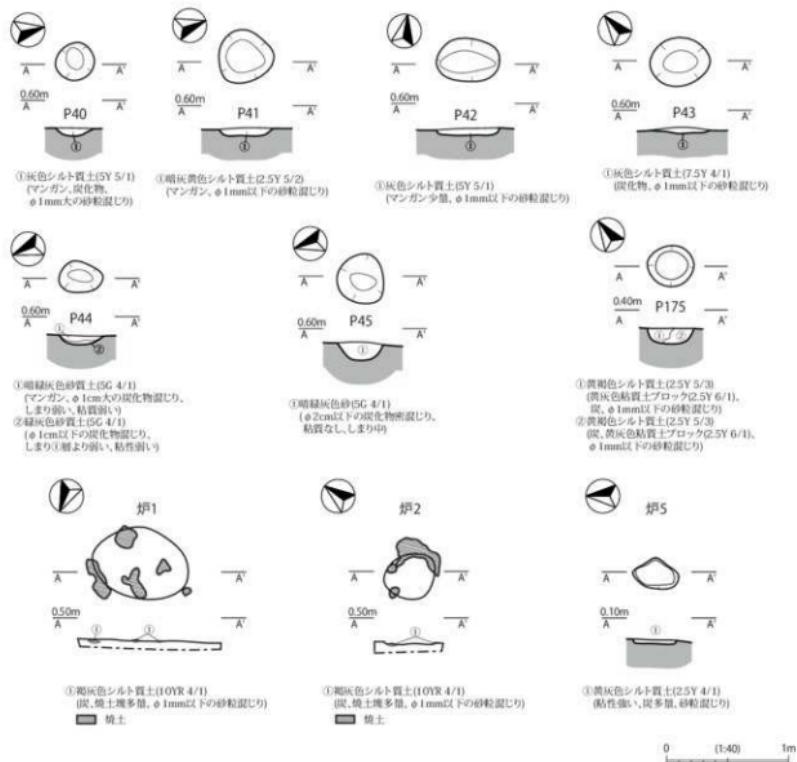
第172図 第4遺構面 土坑出土遺物(1)



第173図 第4遺構面 土坑出土遺物(2)



第174図 第4遺構面 土坑出土遺物(3)



第175図 第4遺構面 ピットおよび炉

布する。炭のはかに遺物は出土しなかった。繰り返し火を焚いた地床炉である。

炉2(第175図、PL43)

炉1の南に隣接する炉。0.44m×0.33mの楕円形を呈する深さ3cmの窪みの縁が、幅約15cm程度焼けている。地床炉で、遺物は出土しなかった。

炉5(第175図)

J4グリッドの南低地にかかる斜面部に位置する炉で、検出面は海拔以下の-0.10m前後。0.40m×0.26m、深さ0.04mの浅い窪みの表面が薄く焼け、多量の炭が詰まっていた。炉1や炉2とは異なり、一時的に火を燃やしたものであろう。

6 第4包含層出土遺物(第176~181図)

VI-2層から出土した遺物のうち、土器集中15(第3遺構面)からの連続が明らかなK5区出土遺物を除いたものを、第4包含層出土として扱う。出土範囲はVI-2層が分層可能な5ライン以東には限られる。第3包含層の出土遺物との時期差はほとんど無く、VI層が形成された期間が比較的短かつたことが分かる。

壺(第176図)

第3包含層同様、壺の出土量は甕と比較して多くない。715は単純口縁の壺で、頭部に凹線が巡る。口縁部内面にU字状の粗雑な粘土紐を貼り付ける。水差形土器に見られるような把手の痕跡器官と同じ意味をもつもので、この壺が水を入れる容器であることを表したものと考えたい。716の頭部には、1本の弯曲する横線と14本の斜め線が刻まれる。舟を表現したものだろうか。718の頭部には2箇所、刺突文の上に大きな鋸歯文が描かれている。721は赤彩を施す無文の台付短頭壺。722も台付とみられる短頭壺だが、こちらは同心円スタンプ文と棘付貝殻腹縁で賑々しく飾る。723は無頭壺で口縁部に凹線を施す。724は大きく外反して下垂する口縁部で、細い突帯を挟んで大小の鋸歯文を2段に刻む。725は小口径の口縁部で擬凹線の上からS字状渦文の浮文を貼り付ける。小型器台の可能性もある。726も同様に器台の可能性がある破片で、歪んだ5重同心円という奇妙なスタンプを間隔を空けて押している。

甕(第176~179図)

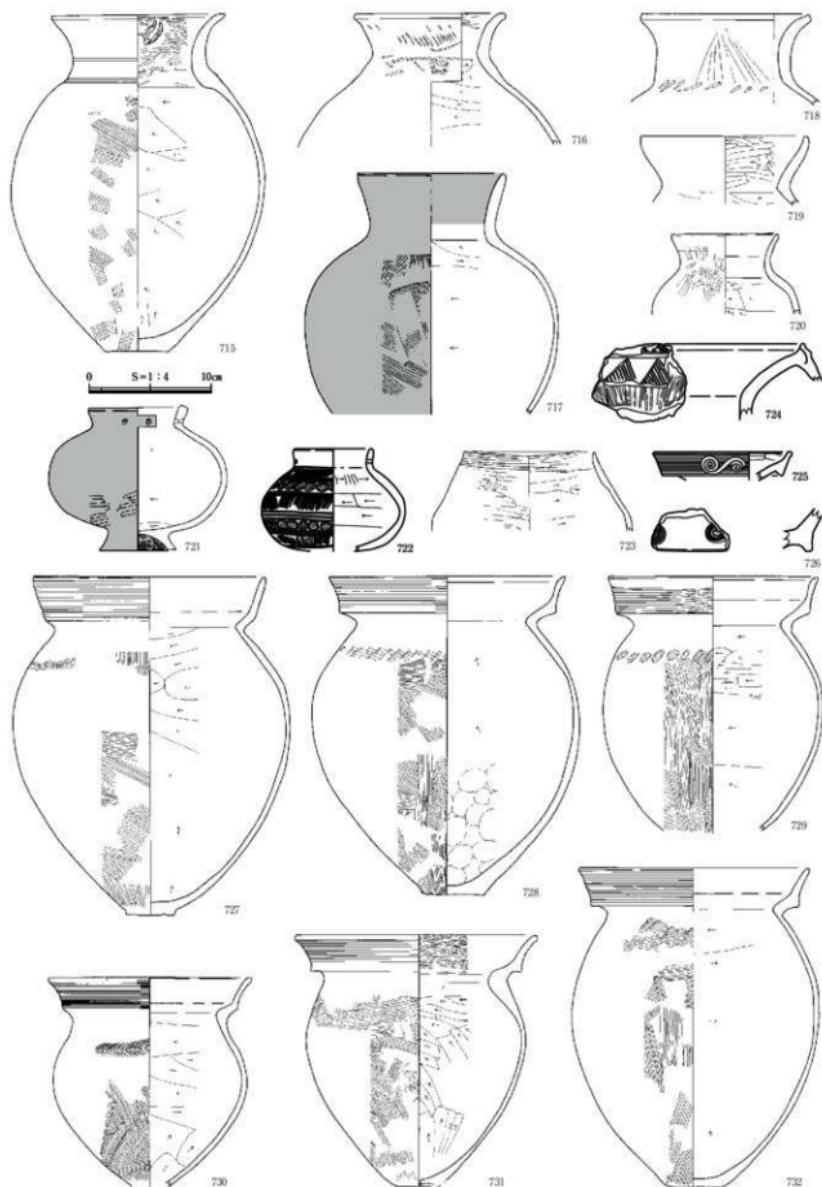
複合口縁の甕は、ほとんどが口縁部外面に擬凹線文を施し、多くが肩部に1列の装飾を加える。装飾の種類は波状文が最も多く、刺突文と貝殻腹縁押引文がこれに次ぐ。刺突文には卷貝を使ったもの(第176図729)が含まれる。綾衫文(第176図730)や擬凹線文(第177図741)は稀である。受口状の口縁をもつもの(第178図756)や、くの字状口縁でタタキ調整のもの(757)は外来の土器であろう。755は弥生時代後期前に属する数少ない例。スタンプ文をもつ小型甕(第179図)は、4重同心円(763)、渦巻(764・767)、逆J字状(766)など、個性的なスタンプが目につく。

高坏(第179図)

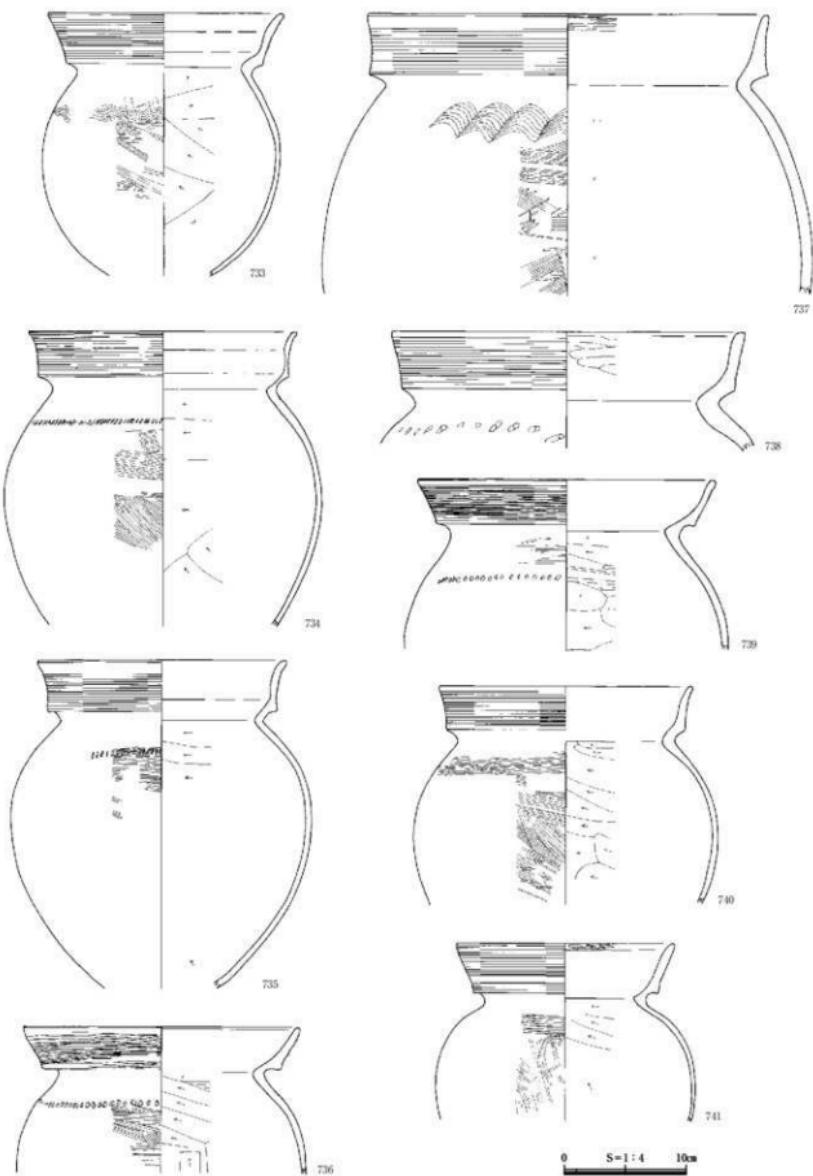
高坏の出土量は多くはない。坏部には、段をもって外反するもの(768・771)のほかに、楕形(769)や鉢形(772・773)のものがある。脚部には、脚端部に凹線と暗文状の波状文を加える特殊なもの(775)がある。776と777はスタンプ文をもつもので、器台の可能性もある。前者は段部直下に片側連續渦文を連続させないで押し、その下に半同心円を加える。後者はS字状渦文で、少ない。

器台(第180図)

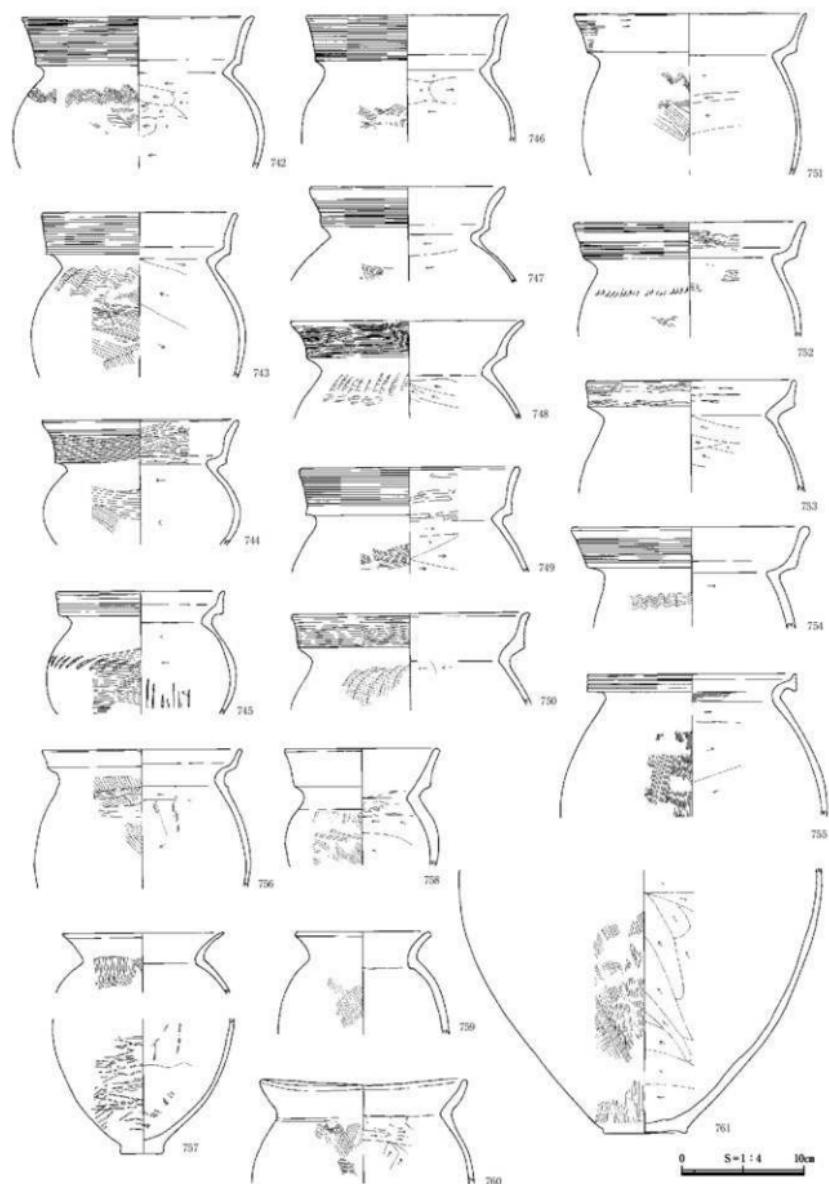
器台には第3包含層と同様に、鼓形器台(第180図778~780など)と脚柱部が長いもの(787~790など)



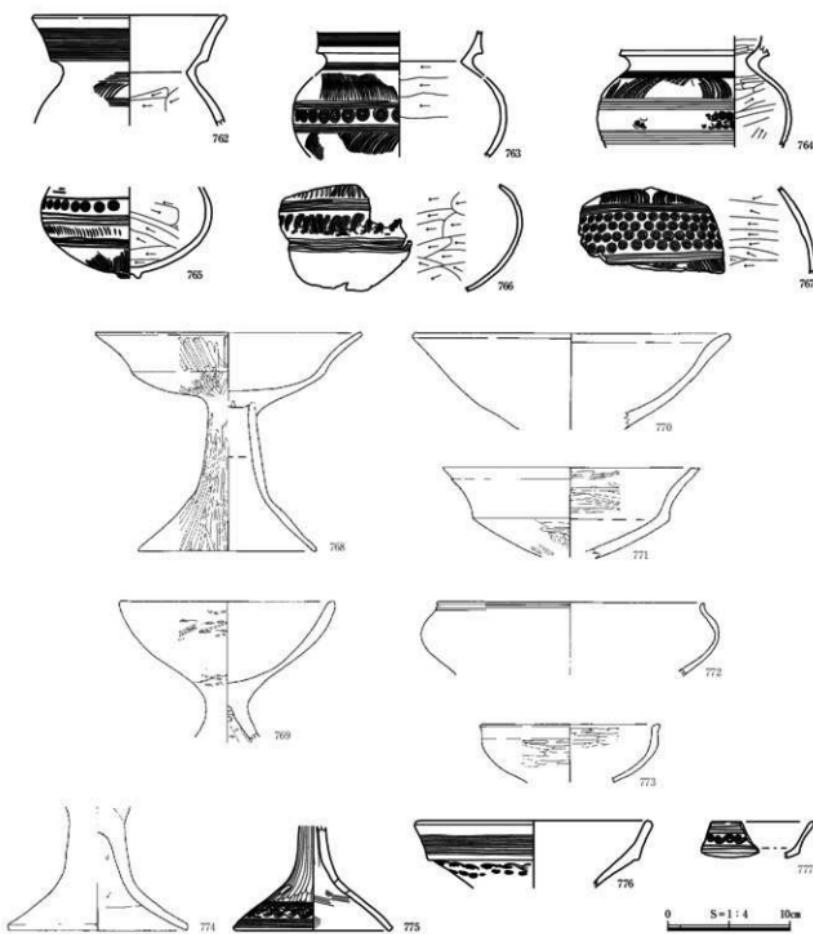
第176図 第4包含層出土遺物(1)



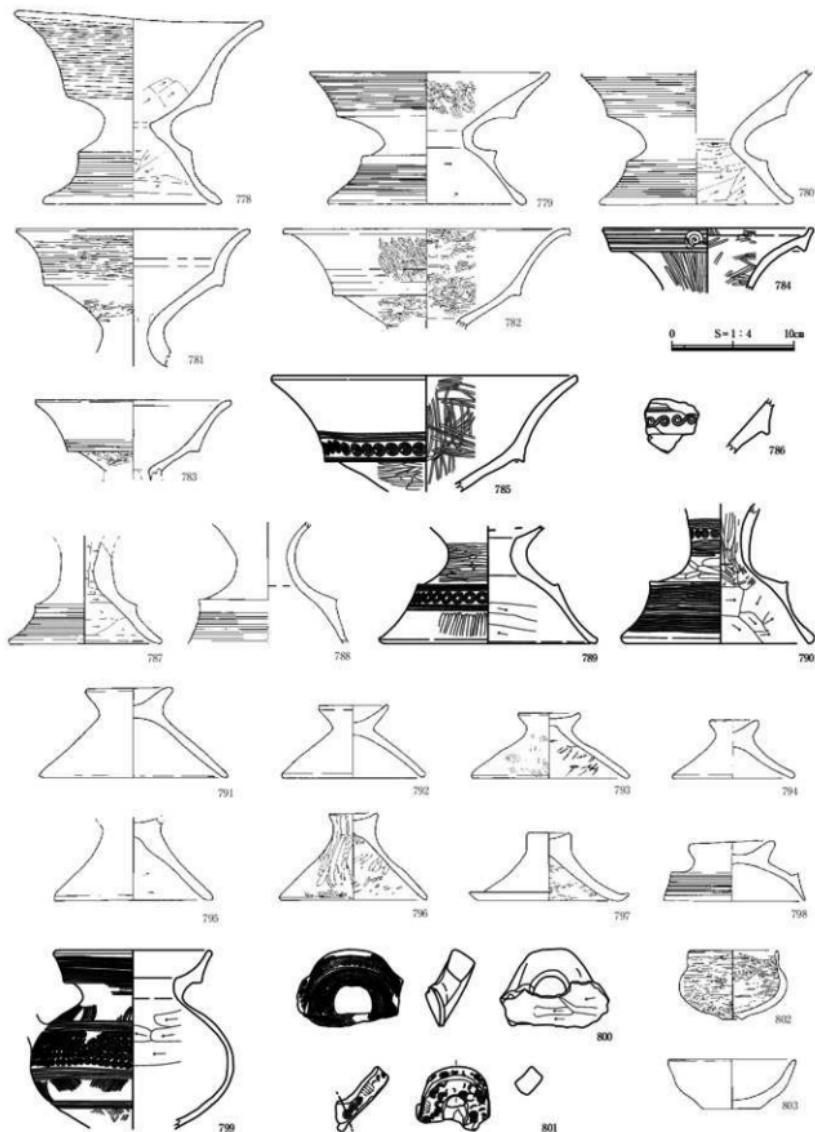
第177図 第4包含層出土遺物(2)



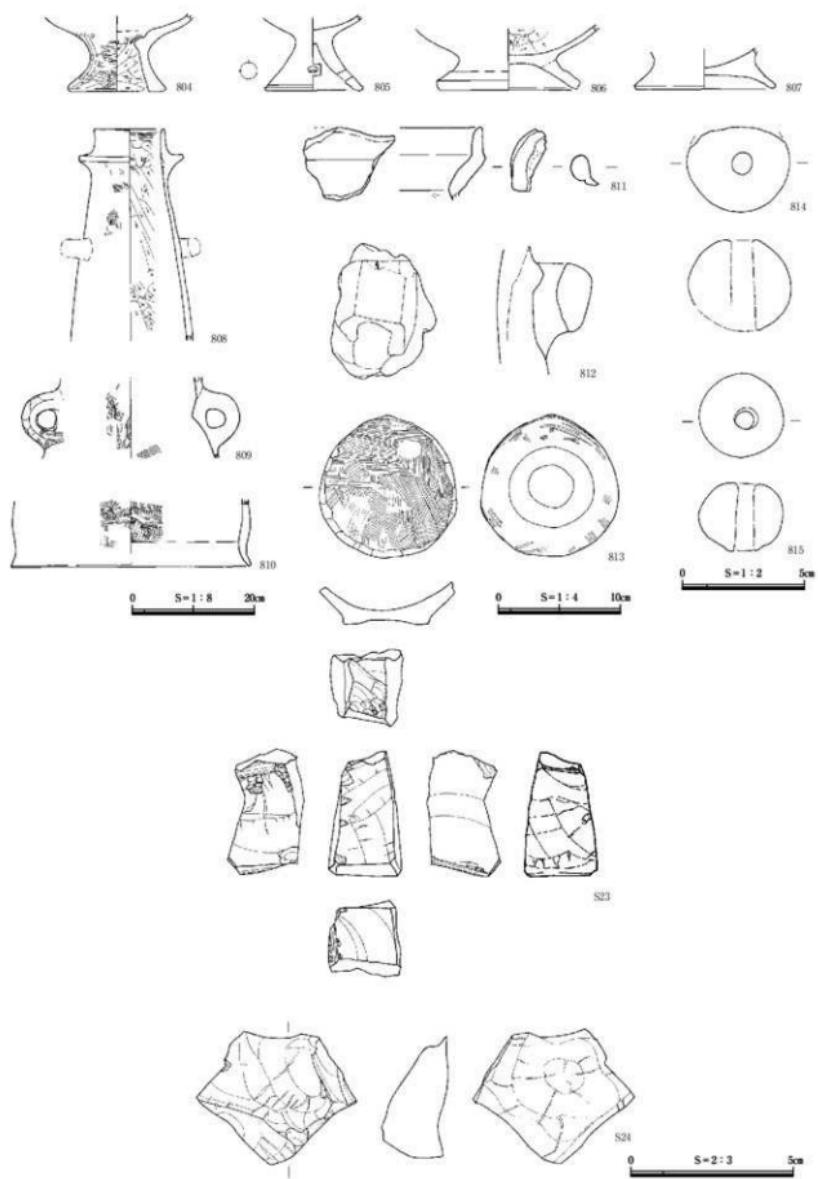
第178図 第4包含層出土遺物(3)



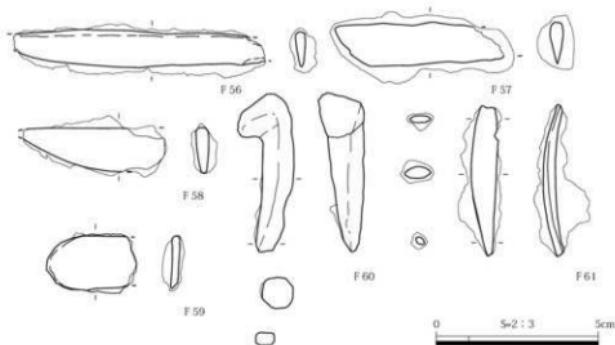
第179図 第4包含層出土遺物(4)



第180図 第4包含層出土遺物(5)



第181図 第4包含層出土遺物(6)



第182図 第4包含層出土遺物(7)

がある。段部に凹線と同心円スタンプ文を施すのは前者で(785・789)、後者にも脚柱部を同様の文様帶で飾るものがあるが段部は擬凹線で埋める(790)。784は口縁部の凹線上にS字状渦文の浮文を貼るもので、壺の可能性がある。786は小片だが段部にS字状渦文のスタンプを押す。

蓋(第180図)

蓋には一般的な形態のもの(791~796)以外に、端部が反り返るもの(797)や段をもち擬凹線を施す珍しいもの(798)が含まれている。

注口土器(第180図)

注口土器は本体(799)と把手(800・801)を図示した。いずれもスタンプ文や半截竹管による爪形文で充填する装饰性の高いものである。

鉢と椀(第180図)

802は小型の鉢でよく磨き上げられた精製のもの。803は椀で、やや粗製。

その他(第181図)

804~807は器種不明の脚部で、804は円盤を充填して底部を形成した痕跡がある。808~810は山陰型瓶形土器。細身のもの(808)と広口端が鐘状に膨らむもの(809)がある。811の左は大型の片口で、同一器片の痕跡器官化した把手部(811右)も出土している。813は円盤状土製品。壺の底部を外側から刻みを入れて削り抜く。削り抜き時に内面側の破面にできた舌状部を細かく打撃して除去する。皿のように用いたものであろう。土玉(814・815)は有孔のもの。

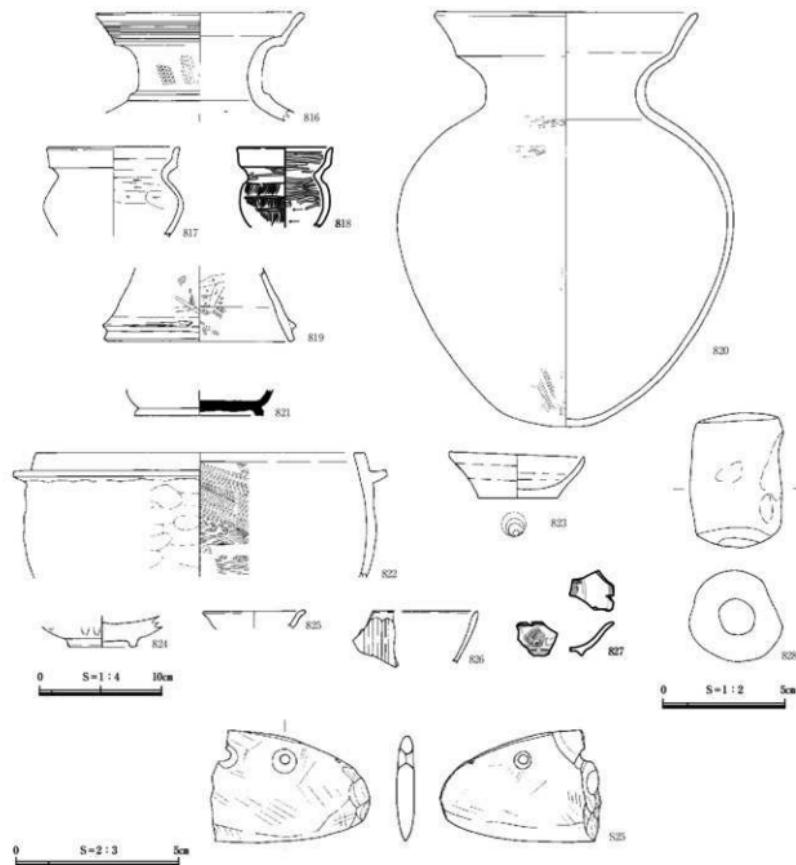
玉関連遺物(第181図)

S23は緑色凝灰岩の施溝分割片。珪化の進んだ比較的良質の材を用い、4面に溝を切る。そのうちの3本には、パンチ痕といわれる台形状の微細剥離が確認できる。弥生時代中期に途絶える技術とされ、後期の遺跡で出るものはデッドストックの可能性があるという(註7)。一方、S23は粗粒で透明感のない緑色凝灰岩の剥片で、ほぼすべての剥離面が熱による。第3包含層出土の石核(第162図S21)にも被熱痕跡が認められるが、透明感を強めるために熱処理することがあったのだろうか。

鉄器(第182図)

鉄器

F 56～58は刀子で、F 59は板状の鉄片である、F 60は釘のようにも見えるが、先端部が扁平なことから鑿のような工具の可能性も考えられる。F 61は形状から穿孔具とみられるが、全体に反りがある。層位や他の出土遺物から、いずれも弥生時代に属する遺物であると考えられる。



第183図 その他出土遺物(1)

第6節 その他出土遺物(第183図184図)

擾乱や排水溝、表土剥ぎ時に出土した遺物を第183図および184図に掲げる。

816は頸部に突帯を貼り付ける複合口縁の壺。819は大型の土器で瓶形土器の広口端のようだが、端部近くに突帯を貼り付ける点で異質。820はI 2グリッドの排水溝掘りで出土した土師器の壺。824～827は表土剥ぎで出土した輸入陶磁器で、824～826は青磁。827は外面に火炎宝珠を描く青花皿で、16世紀の漳州産。S 25は2区東側の排水溝掘りで出土した石包丁。緑色片岩製。弥生時代中期の遺物は、これと緑色凝灰岩施溝分割片(第181図 S 23)しか出土しなかった。第184図は出土した鉄器である。F 62は鉄刃とみられる。

註1) 鳥取大学地域学部地域環境学科 小玉芳敬教授の御教示による。

註2) 独立行政法人奈良文化財研究所 渡辺晃宏副所長の御教示による。

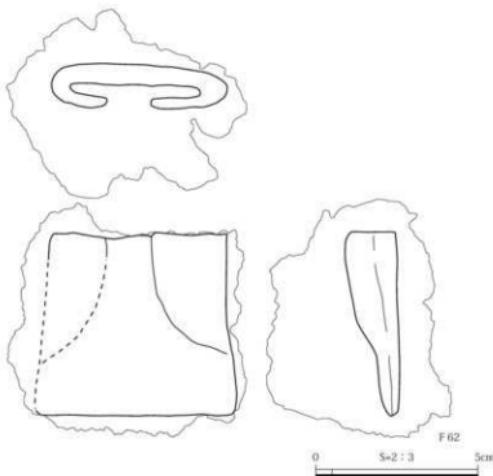
註3) 岡山理科大学生物地球学科 亀田修一教授の御教示による。

註4) 鳥取県立博物館 田邊佳紀学芸員の御教示による。

註5) 輸入陶磁器と中世土器については、米子市文化財団 佐伯純也統括調査員に御教示いただいた。

註6) 大阪大学大学院文学研究科 高橋照彦教授の御教示による。

註7) 玉関連遺物については公益財団法人鳥取県教育文化財団 河合章行氏に御教示いただいた。



第184図 その他出土遺物(2)

表19 土器・土製品観察表(1)

※復元値 △現存値

造物名	取上番号	通称 部位名	通称 PL	種類 器種	法蓋(cm)	手掌上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	812	SD11	第14回	弥生土器 蓋	口径 : 87.8 器高 : △2.9	内外面：ヨコナデ	ふつう	ふつう	外表面：浅黄褐色 内面：△6.1・橙色	
2	117	SD11	第14回 PL46-1	土器部 环	口径 : 11.6 器高 : 4.2 底径 : 95.2	外表面：ヨコナデ 底部回転系切り 内面：ヨコナデ	密	良好	外表面：褐色 内面：淡褐色	
3	117	SD11	第14回 PL44-1	弥生土器 蓋	器高 : △5.4 底径 : 97.5	外表面：ヨコナデ ケズリ	密	良好	外表面：黄灰色 内面：黄灰色	
4	126	SD31	第14回 PL44-2	瓦質土器 鍋	口径 : 27.8 器高 : 12.1 底径 : 11.1	外表面：ヨコナデ 腹部ユビオサエ 内面：口縁部ヨコナデ 痕跡ハケメ	ふつう	ふつう	外表面：青灰色 内面：口縁部ヨコナデ	外表面ス付着
5	290	SD31	第14回 PL44-3	瓦質土器 鍋	口径 : 38.9 器高 : △10.2 底径 : 10.2	外表面：ヨコナデ 腹部ユビオサエ 内面：ヨコナデ	密	良好	外表面：灰白色 内面：△6.1	
6	193	SD15	第14回	弥生土器 蓋	器高 : △4.2 底径 : 8.6	外表面：脚部丸ガキ 下半身ガキ後ナデ 内面：ナデ 脚部ぐり跡ナデ	密	良好	外表面：浅黄褐色 内面：△6.1	
7	843	SK39	第14回 PL46-1	須恵器 鉢	器高 : △5.8	外表面：口縁部回転ナデ ユビオサエ 内面：回転ナデ	密	良好	外表面：灰白色 内面：△6.1	
8	1218	SK39	第14回	瓦質土器 鍋	器高 : △4.1	外表面：口縁部ヨコナデ ユビオサエ 内面：ヨコナデ	密	良好	外表面：暗灰色 内面：△6.1	
9	843	SK39	第14回	瓦質土器 鍋	器高 : △3.6	外表面：ヨコナデ 口縁部ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良好	外表面：灰色 内面：黄灰色	
10	843	SK39	第14回	瓦質土器 鍋	器高 : △4.0	外表面：ヨコナデ	密	良好	外表面：黑色 内面：灰白色	外表面ス付着
11	4377	SD42	第29回	弥生土器 無蓋？	口径 : △9.7 底径 : 16.3	外表面：3条の目線×8以上+3重同心円スタンプ 文×3条上+十字發螺旋文×4以上+爪形 文(口縁部)	ふつう	ふつう	外表面：浅黄褐色 内面：△6.1	外表面：下部と内面上 部にス付着 内面中央に剥離有
11	3860	SK207	K4 V型	瓦質土器 鍋	器高 : △4.0	内面：上部ケズリ後ガキ 以下ミガキ				
12	3461	SD42	第29回	須恵器 环	器高 : △2.6 底径 : △12.2	外表面：ヨコナデ 内面：不定方向のナデ 口縁部回転ナデ	密	良好	外表面：灰白色 内面：△6.1	
13	3496	SD43	第29回	土師器 蓋	口径 : 12.2 器高 : △20.3	外表面：脚部ハメテ 他風化したため不明 内面：口縁部ヨコナデ 脚部ハメテ	ふつう	ふつう	外表面：淡赤褐色 内面：△6.1	
14	3924	SD68	第29回	弥生土器 蓋	器高 : △7.3	外表面：脚部の凹凸部 内面：ヨコナデ	ふつう	ふつう	外表面：褐色 内面：△6.1	
15	3923	SD68	第29回	弥生土器 蓋	口径 : 87.4 器高 : △7.7	外表面：ヨコナデ 口縫部ヨコナデ 脚部以下ケズリ 内面：ヨコナデ	ふつう	ふつう	外表面：△6.1・褐色 内面：△6.1・褐色	
16	3924	SD68	第29回	弥生土器 蓋	口径 : 87.0 器高 : △7.4	外表面：ヨコナデ 口縫部ヨコナデ 脚部ケズリ後ナデ 内面：ヨコナデ	やや 密	やや 良好	外表面：淡褐色 内面：△6.1	外表面ス付着
17	3923	SD68	第29回	弥生土器 蓋	器高 : 5.8 つまみ径 : 4.4	外表面：ミガキ つまみ口縫部ヨコナデ 内面：ミガキ つまみヨコナデ	ふつう	やや 良好	外表面：明赤褐色 内面：△6.1・赤褐色	内面一部ス付着
18	3437	SD68	第29回 巻頭-2	弥生土器 骨質	口径 : 6.2 器高 : 4.7 底径 : 2.8	外表面：ユビオサエ	ふつう	ふつう	外表面：褐色 内面：△6.1	外表面ス付着 内面一部ス付着
19	3924	SD68	第29回	弥生土器 蓋	口径 : △24.2 器高 : △12.2	外表面：口縫部前ヨコナデ 一部ハケメテ 内面：ヨコナデ	ふつう	ふつう	外表面：明褐色 内面：△6.1・褐色	
20	3923	SD68	第29回	弥生土器 蓋	口径 : 87.8 器高 : △12.8	外表面：受部15条の回転部 口縫部ヨコナデ 内面：ナデ	ふつう	やや 不良	外表面：浅黄褐色 内面：△6.1	
21	3920	SD119	第29回	弥生土器 蓋	器高 : △9.1	外表面：脚柱ナデ 段部1+3条の凹縁+3重同心 心内スクワ支 内面：ナデ	ふつう	ふつう	外表面：黄灰色 内面：△6.1	
22	3297	SD68	第29回 PL44-7	須恵器 蓋	口径 : 7.5 器高 : 15.7 底径 : 4.0	外表面：口縫部回転ナデ 脚部上半カキメ 下半ケ ズリ 器部にア豆状浮文2貼付 内面：回転ナデ	密	良好	外表面：灰白色 内面：△6.1	
23	3296	SD68	第29回	須恵器 环	器高 : △2.7	外表面：回転ナデ	密	ふつう	外表面：灰白色 内面：△6.1	
24	4350	SD72	第29回	弥生土器 蓋	口径 : 87.8 器高 : △7.1	外表面：受部43条の回転部	ふつう	ふつう	外表面：褐色 内面：△6.1	
25	3350	SD79	第29回 PL44-1	須恵器 环	口径 : 87.9 器高 : 8.5	外表面：回転ナデ 底部静止系切り 内面：回転ナデ	密	良好	外表面：灰白色 内面：△6.1	
26	3331	SD73	第29回 巻頭-6	青磁 碗	器高 : △2.4 底径 : 94.4	外表面：ケズリ 黑台と黒台内露胎 内面：沈継	密	堅密	胎土：灰白色 胎葉：オリーブ黄色	電気窯系
27	3642	SD74	第29回	須恵器 环	器高 : △1.3 底径 : 98.6	外表面：回転ナデ	密	良好	外表面：灰白色 内面：△6.1	

表20 土器・土製品観察表(2)

遺物 番号	取上 番号	復原 位序名	復原 PL	種類 器種	法量(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		備考
									外面	内面	
28 4461	SD82	第29回		升生土器 釜	径高△3.9 △5.5	外面：ヨコナデ 内面：ケズリ後ナデ つまみナデ	ふつう	ふつう	外面：長白色 内面：褐色		
29 3666	SD78-I	第29回	PL44-I	須恵器 片口	径高△4.4	内外面：回転ナデ	密	良好	内外面：灰色		
30 3522	SD16-I	第29回	PL44-I	土師皿	口径△7.0 底径△4.6	外面：回転ナデ 底部糸切り 内面：回転ナデ	やや 密	やや 不良	内外面：にぶい褐色		
31 3250	SK101 6層	第30回		瓦質土器 鍋	口径△2.5 底径△1.1	内外面：ヨコナデ	密	良好	内外面：褐色	外面部付着	
32 3396	SK101 6層	第30回	PL44-I	瓦質土器 鍋	口径△29.0 底径△7.6	外面：口縁部ヨコナデ ユビオサエ 内面：ヨコナデ	密	良好	外面：黒褐色 内面：黄褐色	外面部付着	
33 3670	SK101 7層	第30回	PL44-I	瓦質土器 釜	口径△23.5 底径△5.0	外面：口縁部ヨコナデ 実希下ユビオサエ 内面：ナデ 口縁部ヨコナデ	密	良好	外面：黒色 内面：灰褐色	外面部付着	
34 3397	SK101 7層	第30回	PL44-I	瓦質土器 鑊	口径△23.9 底径△8.3 底径△11.9	外面：ユビオサエ 口縁部ヨコナデ 亂刷ナデ 内面：4枚の御印 口縁部ヨコナデ	密	良好	外面：褐色 内面：灰褐色		
35 3187	SK101 5層	第30回	PL46-3	土錠	長△6.5 幅△3.3 厚△3.7		ふつう	ふつう	にぶい褐色		
36 209	SK23	第30回	PL46-3	土錠	長△5.8 幅△4.8 厚△3.5		ふつう	ふつう	淡黃褐色		
37 181	SK26	第30回	PL44-I	土師皿	口径△6.5 底径△1.2 底径△5.0	外面：回転ナデ 底部糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：にぶい赤褐色		
38 3476	SK102 6層	第30回		須恵器 坏	口径△12.0 底径△4.0 底径△8.0	外面：回転ナデ 底部糸切り 内面：底部不定方向ナデ	密	良好	内外面：灰白色	内面に鉛膏 「有」か「為」?	
39 3446	SK102 3層	第30回	PL44-I	須恵器 釜	径△8.0	外面：回転ナデ 球部タキ後回転ナデ 幕崩格 子印御文 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：灰白色	薄闇田系	
40 3445	SK102 2層	第30回	PL46-I	輪動陶器 脚部	径△3.6	外面：胎垂れ	密	良好	外面：灰リーピー色 内面：褐色	同じ個体か	
41 3438	SK102 1層	第30回		瓦質土器 釜	径△3.3	外面：口縁部ヨコナデ 体部ユビオサエ 内面：ヨコナデ	密	良好	内外面：灰褐色	外面部付着	
42 3536	SK103 5層	第30回	PL44-I	瓦質土器 鍋	口径△25.4 底径△12.3	外面：口縁部ヨコナデ 体部ユビオサエ 内面：ヨコナデ	密	良好	外面：褐色 内面：黄褐色	外面部付着	
43 3300	SK103 1～7層	第30回	PL44-I	瓦質土器 釜	口径△17.3 底径△6.6	外面：口縁部ヨコナデ 体部ユビオサエ 内面：ナデ 口縁部ヨコナデ	密	良好	内外面：灰褐色	外面部付着	
44 3337	SK109 1～7層	第30回		瓦質土器 鍋	径△14.8	外面：口縁部ヨコナデ 体部ユビオサエ 内面：ナデ 口縁部ヨコナデ	密	良好	外面：黄褐色 内面：灰白色	外面部付着	
45 3721	SK118 1～7層	第30回	PL44-I	須恵器 鉢	径△5.4	内外面：ヨコナデ	密	良好	内外面：灰白色		
46 3261	SK118 4層	第30回	PL46-3	土錠	長△4.5 幅△1.0 厚△0.9		ふつう	ふつう	褐色		
47 3355	P109	第30回	PL46-3	土錠	長△4.4 幅△1.7 厚△1.7		ふつう	ふつう	黑色		
48 3388	SK114 1層	第31回	PL44-2	瓦質土器 鍋	口径△32.0 底径△8.3	外面：口縁部ヨコナデ ユビオサエ 内面：ナデ 口縁部ヨコナデ	密	良好	外面：にぶい褐色 内面：灰褐色	外面部付着	
49 3690	SK114 5層	第31回		瓦質土器 釜	口径△23.2 底径△12.3	外面：口縁部ヨコナデ 沈線 ユビオサエ 内面：ヨコナデ ハケメ ヨコナデ	密	良好	外面：褐色 内面：灰白色	外面部付着 内面口縁部、底部付着	
50 3506	SK114 3層	第31回	PL44-2	瓦質土器 鍋	口径△25.0 底径△10.3	外面：口縁部ヨコナデ ユビオサエ 内面：ヨコナデ	密	良好	外面：褐色 内面：灰褐色	外面部付着	
51 3462	SK114 2層	第31回	PL44-2	瓦質土器 鍋	口径△23.6 底径△9.3	外面：ヨコナデ 一部ユビオサエ 内面：ヨコナデ ハケメ ナデ	密	良好	外面：褐色 内面：灰褐色	外面部付着	
52 3387	SK114 1層	第31回	PL44-2	瓦質土器 釜	口径△26.1 底径△8.2	外面：口縁部ヨコナデ ユビオサエ 内面：ヨコナデ	ふつう	良好	外面：褐色 内面：褐色	外面部付着	
53 3387	SK114 1層	第31回	PL44-2	瓦質土器 釜	口径△20.7 底径△7.9	外面：口縁部ヨコナデ ユビオサエ 一部ナデ 内面：ナデ	密	良好	外面：灰白色 内面：灰色	外面部付着	
54 3266	SK114 5層	第31回	PL44-2	瓦質土器 釜	口径△17.2 底径△6.3	外面：口縁部ヨコナデ ユビオサエ 内面：ナデ 口縁部ヨコナデ	密	良好	外面：褐色 内面：灰褐色	外面部付着	

第3章 発掘調査の成果

表21 土器・土製品観察表(3)

*復元値 △現存値

遺物 番号	出土 場所 番号	通稱 階層名	深度 PL. (m)	種類 器種	口径(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
55 3223	SK114 4層	第31回	瓦質土器 羽茎	口径: 115.8 高さ: △6.3	外面 口縁部3コナデ ユビオサエ 内面 ナデ 口縁部3コナデ	密	良好	外面: 灰色 内面: 灰白色	外側スス付着	
56 3369	SK114 1層	第31回 PL44-2	瓦質土器 羽茎	口径: 98.2 高さ: △8.6	外面 ヨコナデ、一部ユビオサエ 内面 ヨコナデ	密	良好	外面: にふい黄褐色 内面: 朝堀泥色	外側スス付着 内面一部スス付着	
57 3579	SD90	第39回 PL46-1	瓦質土器 羽茎	口径: 6.1 高さ: △6.1	内外面 ナデ 口縁部3コナデ	やや 密	ふつう	内外面: 灰白色		
58 3774	SK135 3層	第39回 PL46-1	内面黑色 土器 环	口径: 15.4 高さ: △3.8	外面 ヨコナデ 内面 ヨガキ 口縁部3コナデ	やや 密	良好	外面: 灰白色 内面: 黑色		
59 3746	SK125 1層	第39回 PL46-1	内面黑色 土器 环	口径: 2.6 高さ: △2.6	外面 ヨコナデ 高台内不安方向ナデ 内面 ヨガキ 口縁部3コナデ	密	良好	外面: 浅黃褐色 内面: 黑褐色		
60 4192	SK137 8層	第39回 PL44-3	須恵器 环	口径: 2.8 高さ: △6.6	外面 回転ナデ 底部回転舟切り 内面 回転ナデ 底部不定方向ナデ	密	良好	外側: 灰色		
61 3650	SK137 1層~3層	第39回 PL44-3	須恵器 环	口径: 2.8 高さ: △5.0	外面 回転ナデ 底部回転舟切り 内面 回転ナデ 3条の沈継	密	良好	外側: 灰色		
62 4586	SK137 13層	第39回 PL44-3	土師器 环	口径: 1.7 高さ: 5.6	外面 回転ナデ 底部回転舟切り 内面 回転ナデ	やや 密	ふつう	内外面: にふい褐色		
63 6076	SK137 15層	第39回 PL44-3	蓝色土器 环	口径: 2.7 高さ: △2.7	内外面: 回転ナデ	密	良好	内外面: 蓝色		
64 4194	SK137 9~14層	第39回 PL44-3	土師器 環	口径: 23.0 高さ: △7.3	外面 口縁部ナデ 番部ユビオサエ 内面 口縁部3コナデ 以下ケズリ	密	良好	内外面: にふい黄褐色	外側スス付着	
65 4107	SK147 12層	第39回 PL46-1	瓦質土器 鍋	口径: 4.0 高さ: △4.0	外面 口縁部3コナデ ユビオサエ 内面 ヨコナデ	密	良好	外側: 緑灰色 内面: 灰色	外側スス付着	
66 4103	SK147 12層	第39回 PL46-3	土肆	長: 5.4 幅: 3.7 厚: 3.5		ふつう	ふつう	褐色		
67 4162	SK148 0層	第40回 PL46-1	土師器 环	口径: 1.9 高さ: 4.7	外面 回転ナデ 底部静止舟切り 内面 回転ナデ	密	良好	外側: にふい黄褐色 内面: にふい褐色		
68 4121	SK148 6~12層	第40回 PL46-1	瓦質土器 盛鉢	口径: 2.7 高さ: △2.7	外面 口縁部3コナデ ユビオサエ 内面 ハケメ 7条の脚J.目	やや 密	良好	内外面: 灰白色	外側スス付着	
69 4117	SK171 1層	第40回 PL46-1	瓦質土器 环	口径: 6.3 高さ: △6.3	外面 口縁部3コナデ ユビオサエ 内面 口縁部3コナデ ハケメ	密	良好	内外面: 灰色	外側スス付着	
70 3809	SD132.	第49回	你生土器 環	口径: 20.4 高さ: △17	外面 受部ヨコナデ 内面 ナデ	ふつう	やや 不良	内外面: 浅黃褐色	内側受部スス付着	
71 3800	SD113	第49回	你生土器 船形	口径: 3.8 高さ: △7.1	外面 ナデ 横2個×一方3円形透かし	ふつう	ふつう	外側: 浅赤褐色 内面: 灰白色		
72 3880	SK151 5層	第49回 巻頭6-1	青磁 碗	口径: 4.0 高さ: △4.0	内外面 回転ナデ	密	良好	内外面: オリーブ灰色	電気窯系	
73 3735	SK136 3層	第49回	土肆	長: 5.5 幅: 2.3 厚: 2.2		ふつう	ふつう	内外面: 灰白色		
74 3810	SK163 1~4層	第49回 PL46-1	瓦質土器 盛鉢	口径: 5.8 高さ: △5.8	外面 口縁部3コナデ ユビオサエ 内面 口縁部ハケメ ナデ、7条の脚J.目	密	良好	内外面: 灰色		
75 3753	SK156 1~4層	第49回 PL46-1	瓦質土器 羽茎	口径: 6.2 高さ: △6.2	外面 口縁部3コナデ ユビオサエ 内面 口縁部3コナデ ハケメ	密	良好	外側: 反黃褐色 内面: 灰白色	外側体膨スス付着	
76 3753	SK156 1~4層	第49回	土肆	長: 5.5 幅: 5.0 厚: 3.9		ふつう	ふつう	内外面: 灰白色		
77 169	SD40	第50回 巻頭6-1	須恵器 天目碗	口径: 6.1 高さ: △2.6	外側 斜鉢 下半露胎 内面 斜鉢	密	良好	内外面: 増褐色		
78 3137	SD62	第50回	須恵器 舟身	口径: 6.8 高さ: △6.8	内外面: 回転ナデ	やや 密	やや 不良	内外面: 灰色		
79 3137	SD62	第50回 PL46-3	土肆	長: 4.3 幅: 1.8 厚: 1.8		ふつう	ふつう	にふい黄褐色		
80 160	SK16	第50回 PL46-3	土肆	長: 5.3 幅: 1.6 厚: 1.5		ふつう	ふつう	褐色		
81 247	SK19 8層	第50回 PL46-2	土肆皿	口径: 7.1 高さ: 1.8 厚さ: 5.4	外面 ヨコナデ 底部回転舟切り 内面 ナデ 口縁部3コナデ	ふつう	ふつう	内外面: にふい黄褐色		

表22 土器・土製品観察表(4)

遺物 番号	取上 番号	遺様 層位名	埋因 PL	種類 器種	法量(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	※復元値 △現存値	
										外表面	内表面
82 268	SK19 6層	第50回 PL46-2	土師皿	口径 6.7 器高 1.6 底径 5.3	外面：ヨコナデ 底部回転糸切り 内面：ナデ 口縁部ヨコナデ	ふつう	ふつう	外面：にぶい黄褐色 内面：深黄褐色			
83 214	SK19 6層	第50回 PL46-2	土師皿	口径 6.2 器高 1.6 底径 5.7	外面：ヨコナデ 底部回転糸切り 内面：ナデ 口縁部ヨコナデ	ふつう	ふつう	内外面：にぶい褐色			
84 213	SK19 6層	第50回 PL46-2	土師皿	口径 7.5 器高 1.6 底径 5.0	外面：ヨコナデ 底部回転糸切り 内面：ナデ 口縁部ヨコナデ	ふつう	ふつう	内外面：にぶい褐色			
85 216	SK19 6層	第50回 PL46-2	土師皿	口径 11.2 器高 3.9 底径 6.0	外面：回転ナデ 回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：灰褐色			
86 3792	SK142 2層	第50回 PL46-1	瓦質土器 羽茎	器高 △6.3	外面：口縁部ヨコナデ ユビオサエ 内面：ヨコナデ	密	良好	外表面：灰色 内表面：灰色	外表面ス付着		
87 3944	SK142 3層	第50回	越前燒 窯鉢	器高 △7.3 底径 24.0	外面：窯鉢部半回転ナデ下ヶケズリ後ナデ 深 部ナデ 内面：窯鉢部半回転ナデ下ヶナデ	やや 密	やや 良好	外表面：にぶい黄褐色 内面：深黄褐色	内面ス付着		
88 3062	J3 II層	第58回	須恵器 片舟	口径：約11.4 器高：3.9 底径：7.0	外表面：回転ナデ	密	良好	外表面：灰色 内表面：灰白色			
89 3062	J3 II層	第58回	須恵器 片蓋	口径：7.4 器高：3.1 底径：2.3	外表面：回転ナデ まくひきナデ 内面：不定方向ナデ 口縁部回転ナデ	密	良好	内外面：灰白色			
90 3127	J3 III層	第58回	須恵器 片身	口径 9.4 器高 3.8	外表面：回転ナデ 底部不定方向ナデ	密	良好	内外面：灰色			
91 3128	J3 III層	第58回	土師器 蓋	口径：約13.8 器高：4.5 底径：3.2	外表面：風化のため不明 内面：ナデ	やや 密	ふつう	内外面：褐色			
92 3146	J3 IV層	第58回	須恵器 壺	口径：約16.3 器高 △6.7	外表面：回転ナデ 2方複合透かし 内面：回転ナデ 底部不定方向ナデ	密	良好	外表面：灰色 内面：灰白色			
93 3341	K8 IV層	第58回 器部6-1	漏斗燒 天日碗	器高 △3.3	外表面：素面	密	良好	外表面：素褐色			
94 3369	K9 IV層	第58回 器部6-1	青磁 壺	器高 △4.3 底径 ≈10.0	外表面：5枚継 高台内施釉 着付鉢輪 内面：露胎	密	良好	外表面：オーブルグレー 内面：にぶい黄色	電気窯系		
95 3483	K8 IV層	第58回 器部6-1	青磁 皿	器高 △2.4 底径 ≈10.8	外表面：施釉 領蓬井 高台と高台内下部露胎 内面：施釉	密	良好	外表面：綠灰色	電気窯系		
96 3407	K7 IV層	第58回 器部6-1	青磁 碗	器高 △2.5 底径 ≈8.8	外表面：3枚継 高台内上半以上露胎 内面：施釉	密	良好	外表面：オーブルグレー	電気窯系		
97 3370	L8 IV層	第58回 器部6-1	白磁 皿	口径 ≈6.8 器高 △1.5	外表面：施釉	密	良好	外表面：灰白色			
98 3319	J8 IV層	第58回 器部6-1	褐釉陶器 耳鉢	器高 △3.3	外表面：施釉 施垂れ 内面：施釉	密	良好	外表面：にぶい黄色	40と同じ個体か		
99 3345	L7 IV層	新鮮陶器 器部6-1	鶴首甌	器高 △2.0	外表面：白色土坂紋 透明釉がけ 内面：透明釉がけ	密	良好	外表面：灰白色 灰色(胎土) 内面：灰白色			
100 3185	J5 IV層	第58回 PL76-3	土玉	長 3.5 幅 3.4 厚 3.4		ふつう	ふつう	にぶい褐色			
101 3166	K6 IV層	第58回 PL46-3	土錐	長 4.9 幅 1.2 厚 1.1		ふつう	ふつう	にぶい褐色			
102 3087	I5 IV層	第58回 PL46-3	土錐	長 3.8 幅 1.4 厚 1.4		ふつう	ふつう	にぶい黄褐色			
103 3218	J6 IV層	第58回 PL46-3	土錐	長 3.1 幅 1.2 厚 1.2		ふつう	ふつう	褐色	外表面赤色変形		
104 190	D6 V層上面	第58回	弥生土器 注口土器	口径 27.4 器高 △13.4	外表面：口縁部施釉 突部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ 突部以下ケズリ後ナデ	ふつう	ふつう	外表面：田畠褐色 内面：浅黃褐色			
105 3568	SD27	第63回	土師器 壺	口径 ≈15.2 器高 △8.9	外表面：突部ナメキ 内面：突部ヨコナデ ケズリ後ユビオサエ 撥 部ケズリ後ナデ	密	良好	内外面：にぶい褐色	外表面ス付着		
106 196	SD27	第63回	土師器 壺	口径 ≈13.9 器高 △13.1	外表面：ヨコナデ 突部ナメキ 内面：ヨコナデ 突部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面：浅黃褐色			
107 1379	SD27	第63回	弥生土器 器台	器高 △8.9 底径 ≈15.3	外表面：宿柱部5条の目線 突部5条+14条の腹 内面：宿柱部ユビオサエ 突部ケズリ ヨコナデ	密	良好	内外面：にぶい黄褐色			
108 1379	SD27	第63回 器部6-2	平底土器	口径 ≈6.0 器高 5.8 底径 ≈6.0	外表面：ユビオサエ 内面：ユビオサエ 繩方式の筋(爪の痕?)	ふつう	ふつう	外表面：橙色 内面：胡赤褐色			

表23 土器・土製品観察表(5)

※復元値・△現存値

遺物 番号	出土 場所 番号	通称 部位名	測定 PL ₁	種類 器種	法蓋(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
109 1206	SK43	第63区	弥生土器 壺	口径△15.6 底高△5.2	外面部 口縁部3条の凹線 腹部ハケメ	口縁部3条の凹線 腹部3コナデ	ふつう	ふつう	外表面：浅黄褐色 内面：△5.1、黄褐色	
110 1808	SK47	第63区	弥生土器 壺	口径△18.0 底高△11.0	外面部 口縁部3条の凹線 腹部ハケメ	口縁部3条の凹線 腹部以下ケズリ	ふつう	やや 不良	外表面：灰白色 内面：△5.1	
111 1132	D6 V層	第64区	弥生土器 壺	口径△14.8 底高△7.5	外面部 口縁部3コナデ	口縁部以下ケズリ	やや 粗	やや 不良	外表面：浅黄褐色 内面：△5.1	
112 1132	D6 V層	第64区	弥生土器 壺	口径△19.5 底高△8.2	外面部 口縁部3コナデ	風化のため不明 一部ケズリ	やや 粗	やや 不良	外表面：黄褐色 内面：△5.1	
113 579	D6 V層	第64区	弥生土器 壺	口径△31.8 底高△12.5	外面部 口縁部3コナデ	口縁部ハケメ 以下ケズリ 後ナデ	密	良好	外表面：灰白色 内面：△5.1、褐色	
114 570 567	D6 V層	第64区	弥生土器 壺	口径△15.8 底高△12.5	外面部 口縁部3コナデ	口縁部ハケメ 以下ケズリ	密	良好	外表面：褐色 内面：褐灰色	外表面付着
115 4018	H6 V層	第64区	弥生土器 壺	口径△13.5 底高△8.3	外面部 口縁部3コナデ	口縁部以下ケズリ	やや 密	やや 良好	外表面：灰白色 内面：△5.1、褐色	外表面口縁部と外面部 裏部赤色変形
116 3859 3901	J3 V層	第64区 PL47-4	弥生土器 注口土器	口径△12.3 底高△8.8	外面部 口縁部3条の凹線 ナデ	口縁部3条の凹線 ミガキ	密	良好	外表面：褐色 内面：△5.1	130と同じ体か
117 337	B6 V層	第64区	弥生土器 無頭壺	口径△12.8 底高△8.1	外面部 口縁部3コナデ	口縁部ハケメ後ナデ ナデ 口縁部3コナデ	やや 密	良好	外表面：灰黃褐色 内面：△5.1	
118 564	G7 V層	第64区	弥生土器 無頭壺	口径△10.6 底高△12.5	外面部 口縁部3コナデ	帝帶帯以下ケズリ後ナデ	密	良好	外表面：褐色 内面：△5.1、褐色	
119 400	D5 V層	第64区	弥生土器 杯	口径△16.0 底高△4.4	外面部 口縁部3コナデ	風化のため不明 口縁部3コナデ	密	良好	外表面：墨色 内面：褐色	
120 4017	H7 V層	第64区	弥生土器 低脚壺	口径△12.5 底高△5.3	外面部 口縁部3コナデ	口縁部ハケメ後ナデ ナデ	ふつう	ふつう	外表面：褐灰色 内面：△5.1	外表面口縁部 ス付着
121 390	F4 V層	第64区	弥生土器 巻唇	底高△9.8 底径△3.5	外面部 脚柱部ハケメ後コナデ	脚柱部13条の腹回 線 脚柱部ユビオサエ 脚柱ケズリ後ナデ	密	良好	外表面：浅黄褐色 内面：△5.1、褐色	
122 578	D6 V層	第64区	弥生土器 巻唇	底高△7.4 底径△15.5	外面部 脚柱部2+3条の凹線+3重同心円スタンプ 文	風化のため不明	ふつう	ふつう	外表面：浅黄褐色	
123 395	D5 V層	第64区	弥生土器 底径	口径△10.0 底径△11.4	外面部 風化のため不明	ふつう	ふつう	外表面：黄褐色 内面：褐色		
124 304	B5 V層	第64区	弥生土器 蓋	口径△9.4 底高△7.1	外面部 口縁部ハケメ後ナデ ケズリ後ナデ つまみナデ	風化のため不明 脚柱部ハケメ後ナデ ケズリ後ナデ つまみナデ	ふつう	ふつう	外表面：△5.1、黄褐色 内面：△5.1	破の可能性あり
125 3861	J4 V層	第64区	弥生土器 蓋	口径△11.3 底高△5.8 底径△5.8	外面部 ハケメ後ミガキ つまみナデ ミガキ 口縁部3コナデ	ハケメ後ミガキ 2個の穿孔 ミガキ 口縁部3コナデ	やや 密	やや 良好	外表面：浅黄褐色 内面：灰白色	外表面赤色変形
126 3874	I3 V層	第64区	弥生土器 蓋	口径△9.5 底高△2.8	外面部 3コナデ 2個の穿孔	3コナデ 2個の穿孔	やや 密	良好	外表面：灰白色 内面：△5.1	
127 380	D5 V層	第64区 巻唇4-2	ミニチュア 土器	口径△3.6 底高△4.5	外面部 ユビオサエ後ナデ 内面部 ユビオサエ後ナデ	口縁部3コナデ 内面部 口縁部3コナデ	密	良好	外表面：△5.1、黄褐色 内面：△5.1、褐色	
128 3858	H2 V層	第64区	土玉	長△33 幅△30 厚△30			ふつう	ふつう	反青褐色	
129 321	B3 V層	第64区	土師器 壺	底高△8.8 底径△9.0	外面部 脚柱部ハガキ 脚柱ナデ 内面部 脚柱部シボリ 脚柱ハケメ後ユビオサエ	脚柱部ハガキ 脚柱ナデ 内面部 脚柱シボリ 脚柱ハケメ後ユビオサエ	密	良好	外表面：浅黄褐色 内面：△5.1	赤色変形 外面部内面部
130 3882	I4 V層	第64区	須恵器 壺身	口径△9.8 底高△3.1	外面部 回転ナデ	回転ナデ	密	良好	外表面：灰白色 内面：△5.1	
131 3903	K5 V層	第64区	須恵器 壺	口径△13.0 底高△5.2 底径△8.5	外面部 回転ナデ 高台内不定方向ナデ 内面部 回転ナデ	回転ナデ 高台内不定方向ナデ 内面部 回転ナデ	密	良好	外表面：灰白色 内面：△5.1	
132 4050	J5 V層	第64区	須恵器 壺	口径△11.9 底高△9.6 底径△8.5	外面部 回転ナデ 高台内回転系切り 内面部 回転ナデ	回転ナデ 高台内回転系切り 内面部 回転ナデ	密	良好	外表面：灰色 内面：灰白色	
133 4145	K8 V層	第64区 巻唇6-3	須恵器 壺	口径△11.4 底高△2.4 底径△8.5	外面部 所引出し高台 高台内無施釉 内面部 回転ナデ	所引出し高台 高台内無施釉 内面部 回転ナデ	密	良好	外表面：灰オリーブ色 内面：△5.1	京都産
134 3993	J5 V層	第64区	土器 移式壺	口径△11.5 底高△2.7	外面部 ナデ、ユビオサエ	ナデ、ユビオサエ	ふつう	ふつう	外表面：△5.1、褐色	
135 4839	SII-PH 埋土	第75区 PL47-1	弥生土器 壺	口径△29.0 底高△37.0	外面部 口縁部3コナデ 15条の複回線 腹部ハケメ 内面部 口縁部3コナデ 脚部波状紋	口縁部3コナデ 15条の複回線 腹部ハケメ 脚部波状紋 内面部 口縁部3コナデ 脚部波状紋	密	ふつう	外表面：△5.1、褐色 内面：△5.1	外下面下部ス付着

表24 土器・土製品観察表(6)

遺物 番号	取上 番号	遺様 部位名	掉因 PL	種類 器種	法量(cm)	手法上の特徴		胎土	焼成	色調	備考
136 4840	SII-P1 理土	第75回 PL47-1, 3	弥生土器 竈形土器	口径：13.2 器高：△46.3	外面部：ハケメ 突縫ヨコナデ 内面部：上半ナデ 下半ハケメ			ふつう	やや 不良	外面：浅黄褐色 内面部：にふい褐色	SII-P1は下部のみ出土、内外面口縫部と下部スス付着
137 4841	SII-P1 理土	第75回 PL47-1	弥生土器 窓	口径：25.0 器高：△11.0	外面部：弧形ヨコナデ下部ケズリ後ヨコナデ 腹柱 内面部：ミガキ ロ線部ヨコナデ 腹柱部ケズリ			ふつう	良好	内外面：にふい黄褐色	内面部スス付着
138 4859 4841 4910	SII-P1 SII	第75回 PL47-1	弥生土器 器台	口径：19.0 器高：14.6 底径：15.6	外面部：ヨコナデ 内面部：受部ナデ 口縫部ヨコナデ 腹柱部以下ケズリ			ふつう	ふつう	内外面：浅黄褐色	
139 4455	SII 理土	第75回 PL47-4	弥生土器 口吐ナミ土器	口径：約16.3 器高：△20.0	外面部：ロ線部4条の窓凹縫 頸部ヒガキ 頸部斜 自突粘貼付け以下10条×4以上の波状文 内面部：ヨコナデ 頸部ヒケメナデ 以下ケズリ			ふつう	ふつう	内外面：黄褐色	
140 4466 4399	SII-SD1 SII-土器	第75回	弥生土器 窓	口径：14.0 器高：△11.2	外面部：ロ線部9～10条の凹縫 窓凹縫2条の回縫× 3×貝包縫文×2×C型スラッシュ文 内面部：ヨコナデ下部ナデ 頸部以下ケズリ			ふつう	ふつう	外面：にふい黄褐色 内面部：灰黄褐色	外面口縫部 スス付着
141 5289	SII 土器	第75回	弥生土器 窓	口径：約15.6 器高：△6.4	外面部：ヨコナデ 内面部：ヨコナデ窓凹縫 頸部以下ケズリ			ふつう	ふつう	外面：浅黄褐色 内面部：にふい黄褐色	内面部スス付着
142 6061	SK198	第77回 PL47-2	弥生土器 窓	口径：23.6 器高：△28.2	外面部：ロ線部3ヨコナデ 内面部：ロ線部ヒガキ 頸部ヒケズリ			ふつう	ふつう	内外面：浅黄褐色	内外面腹部 スス付着
143 6060	SK198	第77回 PL47-2	弥生土器 窓	口径：24.4 器高：△28.5	外面部：ロ線部10条の波状文 腹部ヒケメ			ふつう	やや 良好	内外面：浅黄褐色	
144 6059	SK198	第77回 PL47-2	弥生土器 窓	口径：△21.1	外面部：ロ線部打ち欠き 窓凹縫 腹部9条の波状文 腹部ヒガキ			相	不良	内外面：にふい褐色	内面部スス付着
145 4683	SD186	第77回	弥生土器 窓	口径：約14.8 器高：△12.8	外面部：ロ線部5～6条の窓凹縫 ヨコナデ消し 腹部7 条の波状文 内面部：ヨコナデ 頸部以下ケズリ			ふつう	良好	内外面：浅黄褐色	
146 4695	SD186	第77回	弥生土器 器台	口径：約18.6 器高：△5.7	外面部：受部部12条の窓凹縫 口縫部ヨコナデ下 部ヒガキ 内面部：受部ヒケメ			ふつう	ふつう	内外面：にふい褐色	
147 4683	SD186	第77回	弥生土器 窓	口径：△8.2 器高：△2.8	外面部：腹柱部ヒガキ 頸部ヨコナデ 内面部：ロ線部ケズリ 腹柱部ヨコナデ			ふつう	ふつう	外面：浅黄褐色 内面部：灰白色	外面口縫部 上部下部赤色塗彩
148 4683	SD186	第77回	弥生土器 器台	口径：△8.6	外面部：腹柱部5～6条の波状文 内面部：ロ線部ケズリ後ナデ 頸部以下ケズリ			ふつう	ふつう	内外面：灰白色	
149 4683	SD186	第77回	弥生土器 林	口径：約19.6 器高：△7.4	外面部：ヨコナデ 体部ヒガキ 内面部：ヨコナデヒガキ、ナナヒケズリ			ふつう	良好	内外面：浅黄褐色	外面口縫部 内面部赤色塗彩
150 4742	S2	第79回 PL50-4	弥生土器 窓	口径：約15.4 器高：△4.3	外面部：ヨコナデ 内面部：ヨコナデ			ふつう	ふつう	内外面：にふい褐色	
151 4742	S2	第79回 PL50-4	弥生土器 窓	口径：約16.4 器高：△3.7	外面部：ヨコナデ8条の波状文 内面部：ロ線部ヒガキヒガキ 頸部以下ケズリ			ふつう	ふつう	外面：褐色 内面部：明灰褐色	外面口縫部 スス付着
152 4762	S2-P1 理土	第79回	弥生土器 窓	口径：△5.2	外面部：ヨコナデ14条の波状文 内面部：ロ線部ケズリヒガキ 頸部以下ケズリ			ふつう	ふつう	外面：褐色 内面部：明灰褐色	外面口縫部 スス付着
153 4733	S2	第79回 PL50-4	弥生土器 器台	口径：△4.5	外面部：ヨコナデ 腹部3条の波状文 内面部：ミガキ			ふつう	ふつう	内外面：にふい褐色	内面部スス付着
154 4728	S2-SD1 理土	第79回 PL50-4	弥生土器 窓	口径：△1.5 底径：2.3	外面部：ハケメ 内面部：ナデ、ヨコナデ			ふつう	ふつう	内外面：にふい褐色	底成後穿孔
155 4729	S2-SD1 理土	第79回 PL50-4	弥生土器 窓	口径：△4.2	外面部：3条の波状文+勝附貝殻繩文 内面部：ケズリ			ふつう	ふつう	外面：赤茶褐色 内面部：褐色	
156 4860	S2-P1 理土	第79回 PL76-3	土玉	長：3.8 幅：2.8 厚：3.6				ふつう	ふつう	褐色	
157 6024	S3 床面 直上	第82回 PL48-3	弥生土器 蓋	口径：19.4 器高：22.6 底径：2.9	外面部：ロ線部ヨコナデ 腹部ヒガキ 内面部：ロ線部ヨコナデ 頸部以下ケズリ			ふつう	ふつう	内外面：浅黄褐色	
158 6022	S3 床面 直上	第82回 PL48-4	弥生土器 窓	口径：14.8 器高：21.6 底径：3.1	外面部：ロ線部16条の波状文 腹部上半ヒガキ キ下部ヒケメ 内面部：ヨコナデヒガキ、ナナヒケズリ			ふつう	良好	内外面：にふい褐色	
159 6023	S3 床面 直上	第82回	弥生土器 窓	口径：19.4 器高：27.3 底径：3.4	外面部：ロ線部8条の波状文 ハケメ、下部ミガキ 内面部：ヨコナデ、ミガキヒケメ以下ケズリ			相	やや 不良	内外面：灰白色	
160 6016	S3 床面 直上	第82回 PL48-2	弥生土器 窓	口径：12.8 器高：21.6 底径：12.8	外面部：ミガキ ロ線部ヒガキ部下ナデ 3分野透かし 内面部：ヒガキヒガキ 連続ヒガキ内面部ナデ			密	良好	外面：褐色 内面部：にふい褐色	ブランデーグラス形
161 6021	S3 床面 直上	第82回	弥生土器 器台	器高：△7.8 底径：14.6	外面部：腹柱部ナデ 腹部ヨコナデ 内面部：腹柱部ナデ 頸部剥落のため不明			ふつう	やや 不良	外面：褐色 内面部：にふい褐色	内外面口縫部 スス付着
162 6018	S3 床面 直上	第82回 PL48-1	弥生土器 蓋	口径：10.2 器高：4.4 底径：3.7	外面部：ヨコナデ 内面部：ミガキ つまみヨコナデ			ふつう	ふつう	内外面：にふい黄褐色 内外面赤色塗彩	

表25 土器・土製品観察表(7)

※復元値・現存値

造物 番号	出土 場所	頂面 部位名	深度 PL	種類 器種	口径(cm)	手作上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
5923 5917 5922	SII 覆土	第83回 PL49-1	弥生土器 壺	口径：16.9 高さ：33.0 底径：5.4	外面 口縁部4条の波凹線 脚部下半ハケメ後ミ ガキ 内面 口縁部3コナデ 脚部以下ケズリ	やや 粗	ふつう	内外面：褐色		
163 164	SII 覆土	第83回	弥生土器 壺	口径：18.3 高さ：△7.0	外面 ナデ 口縁部ヨコナデ 口縁部下部に焼成 前穿孔 内面 口縁部ミガキ 脚部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面：にじみ黄褐色	外面部縫隙 スス付着	
165 5978	SII 覆土	第83回	弥生土器 壺	口径：18.3 高さ：△10.3	外面 口縁部10条の波凹線 脚部具鋸腹縫押引 文+5条の波文吹 内面 ナデ 口縁部ヨコナデ	やや 粗	ふつう	内外面：浅黃褐色		
166 5934 5935	SII 覆土	第83回 PL49-2	弥生土器 鉢	口径：39.2 高さ：12.6 底径：37.6	外面 口縁部ヨコナデ ミガキ 内面 口縁部3コナデ、ミガキ ミガキ後ナデ	ふつう	ふつう	外画：にじみ褐色 内面：にじみ褐色	外画ス付着 内面赤色変動	
167 5955 6007 他	SII 覆土 他	第83回 PL49-3	弥生土器 壺	口径：24.6 高さ：△18.3	外面 脚部ヨコナデ 脚部部ミキ後ナデ 脚部左ガキ 脚部部以下ケズリ	やや 良好	やや 良好	内外面：浅黃褐色	脚部内面 被熟剝離	
5925 6496 他	SII 覆土 他	第83回	弥生土器 壺	口径：5.7	外面 口縁部3条以上の凹線 兩部2条の凹線+ 具鋸腹縫文+手書き竹管文 下部北ガキ 内面 口縁部ヨコナデ 脚部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外画：褐色 内面：浅黃褐色		
169 5936	SII 覆土	第83回 PL48-1	弥生土器 壺	口径：35.1 高さ：5.7 底径：△6.1	外面 ヨコナデ 内面 ナデ つまみ付 6.1	ふつう	ふつう	内外面：灰白色		
6007 170 4417 SII 他	SII 覆土 SII	第83回 PL49-8	弥生土器 壺	口径：△2.8	外面 柱状3重心同心円装飾2個一対×2 ミガキ 内面 ヨコナデ	ふつう	ふつう	内外面：灰白色	外画ス付着 外画と内面一部赤色 変動	
171 5924 6007	SII 覆土	第83回 PL49-4	弥生土器 壺	口径：2.90 高さ：14.8 底径：△2.8 つまみ付：△1.1	外面 ハケメ後ミガキ つまみヨコナデ 脚部穿孔 ミガキケズリ(後ナデ)ケズリ 口縁部ヨコナデ 内面 ヨコナデ	やや 良好	やや 良好	外画：浅黃褐色 内面：灰白色		
172 4444 173 5416 他	SII 覆土 SII 清掃 他	第83回 PL49-5	弥生土器 壺	口径：17.3 高さ：△9.8	外面 7+3条の凹線+3重心同心円スタンプ文×2 脚部左ナデ 内面 ミガキ 脚部ナデ	ふつう	ふつう	内外面：浅黃褐色	内面一部 赤色変形	
174 6068 173 5981 土器集中12	SII 土器集中12	第83回	弥生土器 壺	口径：△14.5	外面 ヨコナデ 脚部3+1条の凹線+3重心同心 円スタンプ文 内面 ナデ、一部ミガキ 受取部左ガキ 脚部部下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面：灰白色	外画受部 赤色変形	
175 5919	SII 覆土	第83回	弥生土器 壺	口径：9.6 底径：△23.2	外面 ヨコナデ 部分吹き 内面 ハケメ	ふつう	ふつう	内外面：にじみ黄褐色	外画一部 スス付着	
176 5946	SII 覆土	第83回	弥生土器 壺	口径：△6.6 底径：19.0	外面 ヨコナデ 内面 受取部左ガキ後ナデ 脚部ケズリ	ふつう	ふつう	外画：灰白色 内面：にじみ褐色		
177 5927	SII 覆土	第83回 PL49-6	弥生土器 壺	口径：11.0 高さ：6.2	外面 ヨコナデ	ふつう	ふつう	内外面：浅黃褐色		
178 5968 17605 土器集中 他	SII 土器集中 他	第83回 PL49-7	弥生土器 壺	口径：△9.0	外面 3条の凹線+具鋸腹縫文×2+2段の3重心 円 stanプ文×3(大1小2) 内面 ケズリ	ふつう	ふつう	外画：灰白色 内面：暗灰色		
179 6135	SII 覆土	第83回	弥生土器 壺	口径：2.7 底径：△5.3	外面 ヨコナデ	ふつう	やや 良好	内外面：褐色		
180 6319 SI4-SK2 埋土	第88回 PL50-4	弥生土器 壺	口径：△3.7	外面 10条の凹線 因形浮文 内面 ヨコナデ	ふつう	ふつう	内外面：灰白色			
181 6333 SI4-P1 埋土	第88回 PL50-4	弥生土器 壺	口径：△3.8	外面 3条の凹線+2段の2重同心円スタンプ文 ケズリ+後ナデ	ふつう	ふつう	外画：褐褐色 内面：にじみ褐色	外画ス付着		
182 6318 SI4-SK1 埋土	第88回 PL50-4	弥生土器 壺	口径：△2.6 底径：△6	外面 ハケメ 底部ヨコナデ 内面 ナデ	ふつう	ふつう	外画：にじみ褐色 内面：灰白色			
183 5739 SB1-P2 埋土	第90回 PL50-1	弥生土器 壺	口径：17.0 底径：4.0	外面 口縁部3条の凹線 脚部3条の凹 線+4+具鋸腹縫文×2+3重心同心円stan プ文 内面 口縁部ヨコナデ、ヨコナデ 脚部以下ケズリ	やや 密	ふつう	内外面：浅黃褐色	外画と内面下半 スス付着		
184 4834 1828 他	SB1-P3 SB1-P2 埋土	第90回 PL50-2	弥生土器 壺	口径：14.6 底径：3.0	外面 口縁部10条の凹線 脚部3条の凹 線+4+具鋸腹縫文×2+3重心同心円stan プ文+ナデ+具鋸腹縫文 内面 口縁部ヨコナデ 脚部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面：浅黃褐色	外画ス付着 内面底化物付着	
185 5728 SB1-SD1 埋土	第90回 PL50-4	弥生土器 壺	口径：△16.8 高さ：△6.6	外面 口縁部10条の凹線 ナデ消し 内面 口縁部ヨコナデ 脚部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面：灰白色	内面ス付着		
186 4877 SB1-SD2 埋土	第90回	弥生土器 壺	口径：△5.5	外面 口縁部10条の凹線 脚部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面：灰白色			
187 4866 SB1-P2 埋土	第90回 PL50-4	弥生土器 壺	口径：△5.5	外面 口縁部3条の凹線 脚部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外画：にじみ褐色 内面：灰白色	外画ス付着		
188 6321 SB1-SK1 埋土	第90回	弥生土器 壺	口径：△4.3	外面 口縁部ヨコナデ 3条の凹線 内面 口縁部ヨコナデ	ふつう	ふつう	内外面：浅黃褐色			
189 4876 SB1-SD1 埋土	第90回	弥生土器 壺	口径：△4.4	外面 口縁部3コナデ 14条の波突文 内面 口縁部3コナデ 脚部以下ケズリ	やや 密	ふつう	外画：浅黃褐色 内面：明黃褐色	外画、内面口縁スス 付着		

表26 土器・土製品観察表(8)

番号	出土 場所 番号	種類 用具名	掉片 PL	種類 器種	法量(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	※復元値 △既存値	
										外表面	内表面
190	4932	SBI-P2 埋土	第90回 PL50-4	弥生土器 高杯	口径: 15.8 器高: △6.5	外表面: ナデ 縫部3条の凹線 内表面: ナデ	ふつう	ふつう	内外面: 淡白色		
192	4829	SBI-SDI 埋土	第90回 PL50-3	弥生土器 器台	口径: 17.5 器高: 12.5 底径: 12.0	外表面: 受部25条の複凹線+一部ナデ消し 縫部部 ハケ後ナデ+ナデ 5条の凹線 縫部ナデ 内表面: 受部ヨコナデ 縫部ケズり後ナデ	ふつう	ふつう	内外面: 淡白色		
193	2475	SEI-P1 木枠内 他	第95回 PL50-6	弥生土器 甕	口径: 14.6 器高: △11.9	外表面: 口縁部ヨコナデ 縫部ハケメ 内表面: 口縁部ヨコナデ 縫部以下ケズリ	密	良好	外表面: 棕色~にい黄 内表面: 棕色	外面部スス付着	
192	2528	SEI-P1 木枠内 他	第95回 PL50-6	弥生土器 甕	口径: 14.5 器高: △8.8	外表面: 口縁部ヨコナデ 縫部ヨコナデ+ミガキ 縫部以下ケズリ	密	良好	外表面: にい黄褐色 内表面: にい黄褐色~灰 黄色	外面部付着物	
194	2352	SEI-P1 木枠内 他	第96回 PL50-5	弥生土器 甕	口径: 19.2 器高: △9.7	外表面: 口縁部10条の複凹線 肩部12条の波状文 内表面: 口縁部ヨコナデ 縫部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面: にい黄褐色		
195	2524	SEI-P1 木枠内 他	第95回 PL50-5	弥生土器 甕	口径: 15.1 器高: △7.1	外表面: 口縁部10+3条の複凹線 肩部12条の 複凹線+9条の波状文 内表面: ヨコナデ 縫部以下ケズリヨコナデ	ふつう	良好	内外面: にい黄褐色	外面部付着物	
196	2547	SEI-P1 木枠内 他	第95回 PL50-5	弥生土器 甕	口径: 15.7 器高: △4.8	外表面: 口縁部14条+5条の複凹線 肩部1条の凹 縫 内表面: 口縁部ヨコナデ 縫部以下ケズリ	密	良好	内外面: 淡黄色		
197	2486	SEI-P1 木枠内 他	第95回 PL50-5	弥生土器 甕	口径: 12.5 器高: △6.2	外表面: 口縁部3条の複凹線 内表面: 口縁部ヨコナデ 縫部G+ミガキ 以下ケズリ	ふつう	良好	内外面: にい黄褐色		
198	2328	SEI-P1 木枠内 他	第95回 PL50-5	弥生土器 甕	口径: 12.5 器高: 9.2	外表面: ハケメ 内表面: ミキ	やや 粗	ふつう	外表面: にい黄褐色 内表面: 赤色		
199	2472	SEI-P1 木枠内 他	第95回 PL50-5	弥生土器 底盆	口径: 16.3 底径: 9.2	外表面: ハケメ 内表面: ミキ	やや 粗	ふつう	外表面: にい黄褐色 内表面: 赤色		
200	421	SEI 埋土	第95回 PL50-5	弥生土器 甕	口径: 11.4 器高: △10.2	外表面: ヨコナデ 縫部削減のため不明 内表面: ヨコナデ 以下ナデ	ふつう	ふつう	内外面: 淡白色		
201	1871	SEI-P1 3層	第95回 PL50-5	弥生土器 甕	口径: 6.8 器高: △6.8	外表面: 縫部ハケメ 内表面: 縫部ヨコナデ+ミガキ 縫部以下ケズリ	ふつう	良好	内外面: 淡白色		
202	1895	SEI-P1 2層	第95回	弥生土器 不明	口径: 7.5 器高: △7.5	外表面: ハケメ 内表面: 脱化のため不明	ふつう	ふつう	内外面: にい黄褐色		
203	1862	SEI-P1 2層+3層	第95回 PL50-5	弥生土器 甕	口径: 33.8 器高: △11.9	外表面: 口縁部ヨコナデ、9条の複凹線 内表面: 口縁部ヨコナデ 縫部以下ケズリ	密	ふつう	外表面: 棕色 内表面: にい黄褐色		
204	1872	SEI-P1 2層+3層	第95回 PL50-5	弥生土器 甕	口径: 9.9 器高: △11.9	外表面: 口縁部ヨコナデ 内表面: 口縁部ヨコナデ 縫部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外表面: にい黄褐色 内表面: にい黄褐色		
205	421	SEI 埋土	第95回	弥生土器 甕	口径: 26.3 器高: △8.6	外表面: 口縁部ヨコナデ 腹部剥製文 内表面: 口縁部ヨコナデ 縫部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外表面: 淡黄色 内表面: にい黄褐色		
206	1401	SEI 埋土	第95回	弥生土器 甕	口径: 17.0 器高: △5.0	外表面: 口縁部ヨコナデ 内表面: 口縁部ヨコナデ 縫部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外表面: にい黄褐色 内表面: 淡黄色		
207	352	土器集中1	第97回 PL52-1	土器器 皿	口径: 21.4 器高: 37.0 底径: 3.8	外表面: 口縁部ヨコナデ 腹部ヨコハケによる文 内表面: 口縁部ヨコナデ 廃部ハケメ	密	良好	内外面: 淡白色		
208	353	土器集中1	第97回 PL52-1	土器器 皿	口径: 27.8 器高: △26.1	外表面: 口縁部ヨコナデ 単字官署によるS字 とC字文字、腹部ヨコハケによる文様等×2 内表面: 口縁部ヨコナデ 縫部ヨコハケ	ふつう	ふつう	内外面: 淡黄色		
209	545	土器集中2	第97回 PL52-2	弥生土器 甕	口径: 16.0 器高: △28.0	外表面: 口縁部17条の複凹線 腹部G+カギ 腹部ハ ケメ後ナデ+ミガキ 腹部外側の打撲による 傷成刺穿孔 内表面: 口縁部ヨコナデ 縫部以下ミガキ	ふつう	良好	内外面: 淡白色 外面部中央 赤色変形		
210	486	土器集中2	第97回 PL52-2	弥生土器 甕	口径: 18.5 器高: 19.0 底径: 3.2	外表面: 口縁部ヨコナデ ヨコハケメ 内表面: 口縁部ヨコナデ 縫部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外表面: 棕色 内表面: 淡褐色	外面部付着物	
211	503	土器集中2	第97回 PL52-2	弥生土器 甕	口径: 13.6 器高: 15.8 底径: 4.5	外表面: 口縁部ヨコナデ 腹部ハケメ 口縁部ヨコナ デ 縫部以下ケズリ後ナデ	ふつう	ふつう	内外面: 棕色	外面部スス付着	
212	512	土器集中2	第97回 PL52-2	弥生土器 甕	口径: 14.5 器高: △10.9	外表面: 口縁部ヨコナデ 腹部ハケメ 口縁部ヨコナ デ 縫部以下ケズリ後ナデ	ふつう	良好	内外面: 淡褐色	外面部スス付着	
213	458	土器集中2	第97回 PL52-2	弥生土器 甕	口径: 14.5 器高: △20.4	外表面: 口縁部ヨコナデ 腹部ハケメ 内表面: 口縁部ヨコナデ 縫部ケズリ後ナデ 縫部 以下ナデ	ふつう	やや 粗	外表面: 棕褐色	外面部付着	
214	524	土器集中2	第97回 PL52-2	弥生土器 甕	口径: 19.7 器高: △26.6	外表面: ハケメ後ナデ 下削ナデ	ふつう	ふつう	外表面: にい黄褐色 内表面: にい黄褐色	外面部スス付着	
215	516	土器集中2	第97回 PL52-2	弥生土器 甕	口径: 19.7 器高: △26.6	外表面: ハケメ後ナデ 下削ナデ	ふつう	ふつう	外表面: にい黄褐色 内表面: にい黄褐色	外面部スス付着	
216	521	土器集中2	第97回 PL52-2	弥生土器 甕	口径: 18.6 器高: △5.4	外表面: 口縁部ヨコナデ 腹部ハケメ 内表面: 口縁部ヨコナデ 縫部以下ケズリ後ナデ	ふつう	ふつう	外表面: 淡白色	外面部付着	
217	2174	土器集中3	第99回 PL52-3	弥生土器 甕	口径: 17.2 器高: △20.4	外表面: 口縁部25条の複凹線 腹部波状文 腹部ハ ケメ後ナデ+ミガキ 内表面: 口縁部ヨコナデ 縫部以下ケズリ後ナデ	ふつう	ふつう	外表面: 波状文色 内表面: 淡白色	外面部スス付着	
218	2161	土器集中3	第99回 PL52-3	弥生土器 甕	口径: 17.2 器高: △20.4	外表面: 口縁部22条の複凹線 腹部剥製文 腹部ハ ケメ後ナデ+ミガキ 内表面: 口縁部ヨコナデ 縫部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外表面: 波状文色 内表面: 淡白色	外面部スス付着	
219	2162	土器集中3	第99回 PL52-3	弥生土器 甕	口径: 17.5 器高: △11.8	外表面: 口縁部ヨコナデ 腹部ハケメ 内表面: 口縁部ヨコナデ 縫部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外表面: 波状文色 内表面: 淡白色	外面部スス付着	
220	2163	土器集中3	第99回 PL52-3	弥生土器 甕	口径: 17.0 器高: 42.5 底径: 6.8	外表面: 口縁部ヨコナデ 20条の複凹線 腹部ハ ケメ後ナデ+ミガキ 内表面: 口縁部ナデ 縫部以下ハケメ。ハケメ後ナ デ	ふつう	ふつう	外表面: 赤色		
221	2167	土器集中4	第99回 PL52-4	弥生土器 甕	口径: 12.0 器高: △8.4	外表面: 口縁部8条の複凹線 腹部G+カギ 内表面: 口縁部ヨコナデ 縫部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外表面: 棕色	外面部付着物 スス付着	
222	2168	土器集中4	第99回 PL52-4	弥生土器 甕	口径: 12.0 器高: △8.4	外表面: 口縁部8条の複凹線 腹部G+カギ 内表面: 口縁部ヨコナデ 縫部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外表面: 棕色	外面部付着物 スス付着	

表27 土器・土製品観察表(9)

※復元値 △現存値

遺物 番号	出土 場所 番号	通稱 部位名	測定 PL	種類 名	法蓋(cm)	手作上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
217	2216	土器集中5	第100回 PL53-1	弥生土器 甕	口径：15.8 高さ：25.6 底径：3.0	外面 口縁部ヨコナデ 脇部ヨコハケによる支撑 裏 頭部ハケメ 内面 口縁部ヨコナデ 頭部以下ケズリ	ふつう	良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい黄褐色	外面スス付蓋
218	2228	土器集中5	第100回	弥生土器 甕	口径：32.1 高さ：24.5 底径：3.2	外面 口縁部1条の握り線 脇部ハケメ 内面 口縁部ヨコナデ 頭部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外外面：灰白色	外面下半ス付蓋
2224	2225	土器集中5	第100回 PL53-1	弥生土器 甕	口径：17.6 高さ：23.8 底径：2.3	外面 口縁部11条の握り線 脇部ハケメ 内面 口縁部ヨコナデ 頭部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外面：明褐色 内面：にぶい黄褐色	外面スス付蓋
2226	2226	土器集中5	第100回 PL53-1	弥生土器 甕	口径：14.3 高さ：22.1	外面 口縁部3条の握り線 脇部ハケメ 内面 口縁部ヨコナデ 頭部以下ケズリ	やや 密	やや 良好	外外面：明褐色	外面口縁部 スス付蓋
2227	2227	土器集中5	第100回 PL53-1	弥生土器 甕	口径：16.7 高さ：20.0	外面 口縁部12条の握り線 脇部ハケメ +10条の波状文+5条の握り線 脇部ハケメ 内面 口縁部ヨコナデ 頭部以下ケズリ	ふつう	良好	外外面：灰白色	
2228	2281	土器集中5	第100回	弥生土器 甕	口径：15.6 高さ：20.1 底径：1.1	外面 口縁部5条の握り線 脇部ハケメ 内面 口縁部ヨコナデ 頭部以下ケズリ下部ハケメ	ふつう	ふつう	外外面：灰白色	外面脚部下半 スス付蓋
2229	2282	土器集中5	第100回 PL53-1	弥生土器 甕	口径：12.8 高さ：14.8	外面 口縁部7条の握り線 脇部ハケメ 内面 口縁部ヨコナデ 頭部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外外面：灰白色	外面脚部下半 スス付蓋
2230	2233	土器集中5	第100回	弥生土器 甕	口径：15.8 高さ：13.7 底径：1.1	外面 口縁部5条の握り線 脇部ハケメ 内面 口縁部ヨコナデ 頭部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外外面：灰白色	外面脚部下半 スス付蓋
2231	2234	土器集中5	第100回	弥生土器 甕	口径：15.0 高さ：14.0	外面 口縁部ヨコナデ	ふつう	ふつう	外外面：にぶい黄褐色	
2232	2235	土器集中5	第100回 PL53-1	弥生土器 甕	口径：20.0 高さ：23.0	外面 腹部ハケメ 内面 腹部ケズリ後ナデ	ふつう	ふつう	外外面：浅黃褐色 内面：灰褐色	外面、内下面下部 スス付蓋
2233	2236	土器集中5	第100回 PL53-2	弥生土器 甕	口径：20.5 高さ：16.3 底径：1.6	外面 受部14~7条の握り線 脇柱部ヨコナデ 腹部12~12条の握り線 腹縫部ヨコナデ 内面 受部ヨコナデ 腹縫部ヨコナデ 頭部ケズリ	ふつう	ふつう	外外面：灰白色 内面：浅黃褐色	
2234	2237	土器集中6	第100回 PL53-2	弥生土器 甕	口径：15.9 高さ：△6.0	外面 口縁部ヨコナデ 7条の握り線 内面 口縁部ヨコナデ 頭部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外外面：にぶい黄褐色	器台に転用? 外外面口縁部 スス付蓋
2235	2239	土器集中7	第102回 PL53-3	弥生土器 甕	口径：25.0 高さ：4.5	外面 口縁部ヨコナデ 勾状の凹面化の不明 内面 波状文+波状文+波状文+波状文	ふつう	ふつう	外外面：黄褐色 内面：浅黃褐色	外面脚部上部 スス付蓋
2236	2241	土器集中7	第102回 PL53-3	弥生土器 甕	口径：14.8 高さ：△14.4	外面 口縁部16条の握り線 脇部6条以上の波状 内面 ヨコカズリ 頭部以下ケズリ後ナデ半ミガキ	ふつう	ふつう	外外面：浅黃褐色 内面：灰白色	外外面脚部スス付蓋 外面肩部腹赤 墨影
2237	2240	土器集中7	第102回	弥生土器 甕	口径：18.8 高さ：△9.1	外面 口縁部ヨコナデ 腹部ヨコハケメ 腹部ユ 内面 ヨコカズリ 頭部以下ケズリ 下部ユ	ふつう	やや 不良	外外面：浅黃褐色 内面：灰白色	
2238	2241	土器集中7	第102回 PL53-3	弥生土器 甕	口径：18.6 高さ：10.6	外面 口縁部15条の握り線 背部背腹縫刺対 内面 口縁部ヨコナデ 頭部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外外面：にぶい褐色 内面：灰白色	
2239	2242	土器集中7	第102回 PL53-3	弥生土器 甕	口径：14.8 高さ：△14.4	外面 口縁部12条の握り線 3~3条の凹面×3 内面 ヨコカズリ 頭部以下ケズリ後ナデ半ミガキ	ふつう	ふつう	外外面：褐色	外面中央付近 スス付蓋
2240	2243	土器集中7	第102回 PL53-3	弥生土器 甕	口径：18.8 高さ：△9.1	外面 口縁部16条の握り線 脇部6条以上の波状 内面 ヨコカズリ 頭部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外外面：浅黃褐色	
2241	2245	土器集中7	第102回 PL53-3	弥生土器 甕	口径：19.8 高さ：△9.4 底径：4.2	外面 受部14条の握り線 ヨコハケメ 内面 ヨコカズリ ミガキ	ふつう	ふつう	外外面：にぶい褐色	
2242	2246	土器集中7	第102回 PL53-3	弥生土器 甕	口径：18.6 高さ：10.6	外面 受部14条の握り線 腹部ヨコハケメ 内面 ヨコカズリ ミガキ	ふつう	ふつう	外外面：にぶい褐色	
2243	2247	土器集中7	第102回 PL53-3	弥生土器 甕	口径：14.8 高さ：△14.4	外面 受部14条の握り線 腹部6条以上の波状 内面 ヨコカズリ 頭部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外外面：褐色	
2244	2248	土器集中7	第102回 PL53-3	弥生土器 甕	口径：18.8 高さ：△9.1	外面 受部14条の握り線 腹部ヨコハケメ 内面 ヨコカズリ 頭部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外外面：浅黃褐色	
2245	2249	土器集中7	第102回 PL53-3	弥生土器 甕	口径：11.4 高さ：△5.6	外面 口ヨコナデ 内面 ヨコナデ 口縁部ヨコナデ	やや 密	良好	外外面：灰白色 内面：にぶい褐色	
2246	2250	土器集中8	第103回 PL54-1	弥生土器 甕	口径：21.2 高さ：31.7 底径：4.8	外面 口縁部12条の握り線 脇部ハケメ 内面 ヨコカズリ	ふつう	良好	外外面：にぶい黄褐色	
2247	2251	土器集中8	第103回 PL54-1	弥生土器 甕	口径：20.7 高さ：31.4 底径：4.3	外面 口縁部11条の握り線 腹部剥突文 腹部 4条の凹線 脇部ハケメ 内面 ヨコカズリ	ふつう	ふつう	外外面：浅黃褐色	
2248	2252	土器集中8	第103回 PL54-1	弥生土器 甕	口径：15.4 高さ：15.3 底径：2.7	外面 口縁部10条の握り線 春~難部3条の凹 縁×5~3重同心円スタンプ文×4 下部 ハケメ 内面 口縁部ヨコカズリ 頭部以下ケズリ	やや 密	良好	外外面：褐色 内面：にぶい黄褐色	外外面スス付蓋
2249	2253	土器集中8	第103回 PL54-1	弥生土器 甕	口径：11.4 高さ：△5.6	外面 口ヨコナデ 内面 ヨコナデ 口縁部ヨコナデ	やや 密	良好	外外面：灰白色 内面：にぶい褐色	
2250	2254	土器集中8	第103回 PL54-1	弥生土器 甕	口径：21.2 高さ：31.7 底径：4.8	外面 口縁部12条の握り線 脇部ハケメ 内面 ヨコカズリ	ふつう	ふつう	外外面：浅黃褐色	
2251	2255	土器集中8	第103回 PL54-1	弥生土器 甕	口径：20.7 高さ：31.4 底径：4.3	外面 口縁部11条の握り線 腹部剥突文 腹部 4条の凹線 脇部ハケメ 内面 ヨコカズリ	ふつう	ふつう	外外面：浅黃褐色	
2252	2256	土器集中8	第103回 PL54-1	弥生土器 甕	口径：15.4 高さ：15.3 底径：2.7	外面 口縁部10条の握り線 春~難部3条の凹 縁×5~3重同心円スタンプ文×4 下部 ハケメ 内面 口縁部ヨコカズリ 頭部以下ケズリ	やや 密	良好	外外面：褐色 内面：にぶい黄褐色	外外面スス付蓋
2253	2257	土器集中8	第103回 PL54-1	弥生土器 甕	口径：11.4 高さ：△5.6	外面 口ヨコナデ 内面 ヨコナデ 口縁部ヨコナデ	やや 密	良好	外外面：灰白色 内面：にぶい褐色	
2254	2258	土器集中8	第103回 PL54-1	弥生土器 甕	口径：23.0 高さ：11.8	外面 受部ヨコカズリ 下部ハケメヨコカズリ 3万円 内面 ヨコカズリ	密	良好	外外面：明褐色 内面：浅黃褐色	
2255	2259	土器集中8	第103回 PL54-1	弥生土器 甕	口径：16.6 高さ：△16.6 底径：16.5	外面 ナデ 受部3条の凹線+3重同心円スタン プ文 内面 受部ヨコカズリ 受部ヨコハケメ	ふつう	やや 不良	外外面：浅黃褐色 内面：にぶい黄褐色	

表28 土器・土製品觀察表(10)

遺物 番号	取上 番号	遺様 位序名	厚さ PL	種類 器種	法量(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	※復元値 △現存値	
										外表面	内表面
244	2802	土器集中8	第105回 PL54-1	弥生土器 注口土器	口径：14.8 器高：18.1	外表面 口縁部16条の凹凸線 以下ガキ 内表面 口縁部ミガキ後ヨコナデ 頭部以下ケズリ 後ナデ	ふつう	良好	内外面：明黄褐色	外面と内面底部 スス付着	
245	2849	土器集中9	第105回 PL54-2	弥生土器 高环坏部	口径：約25.2 器高：△7.6	外表面 ナデ 口縁部ヨコナデ 内表面 ナデ 口縁部ヨコナデ	やや 密	やや 良好	内外面：灰白色		
246	2866	土器集中9	第105回 PL54-2	弥生土器 高环坏部	口径：23.0 器高：△7.0	外表面 ヨコナデ 内表面 ナデ 口縁部ヨコナデ	やや 密	やや 良好	内外面：灰白色		
247	2865	土器集中9	第105回 PL54-2	弥生土器 高环坏部	口径：22.0 器高：△7.0	外表面 ヨコナデ 下部ナデ 内表面 ナデ	やや 密	やや 良好	内外面：灰白色		
248	2861	土器集中9	第105回 PL54-2	弥生土器 高环坏部	口径：約20.8 器高：△6.5	外表面 ヨコナデ 内表面 ナデ 口縁部ヨコナデ	やや 密	やや 良好	外表面：オリーブ黒色 内面：墨色		
249	2867	土器集中9	第105回 PL54-2	弥生土器 高环坏部	口径：25.6 器高：△6.8 底径：△5.1	外表面 ヨコナデ 下部ナデ	やや 密	やや 良好	内外面：灰白色		
250	2864	土器集中9	第105回 PL54-2	弥生土器 高环坏部	口径：25.4 器高：△4.8	外表面 ヨコナデ 下部ナデ	やや 密	やや 良好	内外面：灰白色		
251	2850	土器集中9	第105回 PL54-2	弥生土器 高环坏部	口径：約24.4 器高：△4.8	外表面 ヨコナデ 内表面 ヨコナデ 下部ナデ	やや 密	やや 良好	内外面：灰白色		
252	2141	土器集中9	第105回 PL54-2	弥生土器 高环坏部	口径：約24.0 器高：△4.5	外表面 ヨコナデ 内表面 ヨコナデ 下部ナデ	やや 密	やや 良好	外表面：褐灰色 内面：灰白色		
253	2141	土器集中9	第105回 PL54-2	弥生土器 高环坏部	口径：約23.2 器高：△4.8	外表面 ヨコナデ 下部ナデ	やや 密	やや 良好	内外面：灰白色		
254	2848	土器集中9	第105回 PL54-2	弥生土器 高环坏部	口径：17.8 器高：△6.3	外表面 ナデ 口縁部ヨコナデ	やや 密	やや 良好	内外面：灰白色		
255	2848	土器集中9	第105回 PL54-2	弥生土器 高环坏部	口径：17.4 器高：△5.3	外表面 ハケ後ヨコナデ 口縁部ヨコナデ 下部ナ 子 内表面 ナデ ハケ後ヨコナデ	やや 密	やや 良好	内外面：灰白色		
256	2863	土器集中9	第105回 PL54-2	弥生土器 高环坏部	器高：△13.6 底径：△14.7	外表面 ハケ後コロコロ 頭部以下ナデ 内表面 ナデ 囲柱部ケズ	やや 密	やや 良好	内外面：灰白色		
257	2854	土器集中9	第105回 PL54-2	弥生土器 高环坏部	器高：△10.8 底径：△5.0	外表面 頭部ヨコナデ 周囲部ハケ後ヨコナデ 内表面 囲柱部シボリ 頭部ハケメ、ヨコナデ	やや 密	やや 良好	外表面：灰色 内面：褐灰色		
258	2854	土器集中9	第105回 PL54-2	弥生土器 高环坏部	器高：△11.5 底径：△5.0	外表面 囲柱部以下ガキ 円形透かし 内表面 囲柱部シボリ ケズ	やや 密	やや 良好	内外面：墨黒色		
259	2978	土器集中10	第105回 PL55-1	弥生土器 腹	口径：約19.8 器高：△23.0	外表面 口縁部ヨコナデ 周囲部以下ナデ 内表面 ナデ 口縁部ヨコナデ 頭部以下ケズリ	密	良好	外表面：にじい黄褐色 内面：橙色	外面と内面中央 スス付着	
260	2677	土器集中10	第105回 PL55-1	弥生土器 腹	口径：約18.8 器高：△22.0	外表面 口縁部16条の凹凸線 以下ガキ ハケメ 内表面 口縁部ヨコナデ 頭部以下ケズリ	密	良好	外表面：にじい黄褐色 内面：にじい橙色	外面ふきこぼれ によるスス付着	
261	2675	土器集中10	第105回 PL55-1	弥生土器 腹	口径：約17.4 器高：△23.0	外表面 口縁部ヨコナデ 周囲部以下ナデ 内表面 口縁部ヨコナデ 頭部以下ケズリ	密	良好	外表面：にじい黄褐色		
262	2665	土器集中11	第107回 PL55-2	弥生土器 腹	口径：14.8 器高：△23.0	外表面 口縁部ヨコナデ 周囲部以下ガキ 内表面 口縁部ヨコナデ 頭部以下ケズリ	密	良好	外表面：にじい黄褐色 内面：灰黃褐色	外表面スス付着	
263	2869	土器集中11	第107回 PL55-2	弥生土器 腹	口径：16.2 器高：26.5 底径：1.9	外表面 3条の凹線 周囲部ヨコナデ 内表面 ナデ 口縁部ヨコナデ 以下ハケ後ナ 子 内表面 ナデ 口縁部ヨコナデ 以下ハケメ後ナ 子	ふつう	良好	内外面：明褐色	外表面スス付着	
264	2670	土器集中11	第107回 PL55-2	弥生土器 腹?	口径：約18.0 器高：9.4 底径：1.8	外表面 ハケメ 口縁部ヨコナデ つまみユビオサエ 内表面 泥化のため不規 つまみユビオサエ	粗	ふつう	内外面：橙色	機の可能性あり 外表面スス付着	
265	2873	土器集中12	第107回 PL55-3	弥生土器 腹	口径：18.8 器高：26.4 底径：3.3	外表面 口縁部ヨコナデ 以下ハケメ 内表面 口縁部ヨコナデ 頭部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面：にじい黄褐色	外表面スス付着	
266	2876	土器集中12	第107回 PL55-3	弥生土器 腹	口径：17.0 x 16.0 器高：△20.2	外表面 口縁部15条の凹凸線 頭部ハケメ 内表面 口縁部ヨコナデ 頭部以下ケズリ後ナデ	ふつう	ふつう	外表面：橙褐色 内面：浅黄褐色	外表面スス付着	
267	2663	土器集中12	第107回 PL55-3	弥生土器 高环	口径：約16.3 器高：△8.3	外表面 ハケメコロコロ 頭部ハケメ 内表面 ハケメケズリ後ナデ	密	良好	内外面：灰白色		
268	2874	土器集中12	第107回 PL55-3	弥生土器 高环加部	口径：17.2 器高：△7.0 底径：1.6	外表面 口縁部ヨコナデ 以下ハケメ 内表面 上部ケズリ下部ガキ 口縁部ヨコナデ	ふつう	ふつう	外表面：橙褐色 内面：灰白色		
269	2863	土器集中12	第107回 PL55-3	弥生土器 腹	口径：16.3 器高：5.3 底径：6.2	外表面 ヨコナデ 内表面 ナデ つまみヨコナデ	やや 密	やや 良好	内外面：灰白色		
270	2869	土器集中12	第107回 PL55-3	弥生土器 腹	口径：10.8 器高：4.7 底径：3.7	外表面 ヨコナデ後ミガキ 口縁部ヨコナデ 内表面 ナデ つまみナデ	ふつう	ふつう	外表面：にじい黄褐色 内面：灰白色	外面と内面つみ スス付着	

第3章 発掘調査の成果

表29 土器・土製品観察表(11)

*復元品・現存品

遺物 番号	出土 場所	通構 部位名	埋 P.L.	種類 名前	法蓋(cm)	手作上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
271	4452	土器集中13	PL55-4	弥生土器 壺	口径：186 腹高：27.9 底径：3.1	外面 口縁部2-3条の擬凹線・腹部具鉢刺突文 腹部ハケメ 内面 口縁部コナデ 腹部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面：にぶい黄褐色 内面：灰白色	外面縦部と腹部ス付着
272	4448	土器集中13	PL55-4	弥生土器 壺	口径：325.6 腹高：22.0 底径：15.1	外面 口縁部擬凹線ハケメ 下部ハケメ 内面 口縁部コナデ 腹部以下ケズリ後ナデ下部ナ子	粗	ふつう	外面：浅黄褐色 内面：灰白色	
273	4449	土器集中13	PL55-4	弥生土器 壺	口径：205 腹高：△1.9	外面 口縁部15条の擬凹線・肩部7条の波状文 内面 口縁部コナデ 腹部以下ケズリ	粗	やや 不良	内外面：灰白色	外面縦部ス付着
274	4447	土器集中13	PL55-4	弥生土器 壺	口径：365.0 腹高：△2.8	外面 口縁部7条の擬凹線・肩部ハケメ 内面 口縁部コナデ 腹部以下ケズリ	やや 粗	やや 不良	内外面：灰白色	外面ス付着
275	4450	土器集中13	PL55-4	弥生土器 壺	口径：315.2 腹高：△1.3	外面 口縁部コナデ 腹部ハケメ、具鉢刺突文 内面 口縁部コナデ 腹部以下ケズリ	密	良好	内外面：灰白色	
276	4448	土器集中13	PL55-4	弥生土器 壺	口径：314.4 腹高：△1.9	外面 口縁部コナデ 腹部以下ケズリ	粗	ふつう	内外面：浅黄褐色	外面ス付着
277	4443	土器集中13	PL55-4	弥生土器 壺	口径：368.6 腹高：△4.5	外面 ハケメ 内面 ケズリ	やや 粗	ふつう	外面：赤褐色 内面：灰白色	
278	4461	土器集中14	PL55-5	弥生土器 壺	口径：185 腹高：31.0 底径：4.6	外面 口縁部11条の擬凹線・肩部ハケメ 内面 口縁部コナデ 以下ケズリ	やや 密	良好	内外面：褐色	外面縦部腹部ス付着
279	4467	土器集中14	PL55-5	弥生土器 壺	口径：311.9 腹高：15.6 底径：4.5	外面 口縁部コナデ 腹部ハケメ 内面 口縁部コナデ 腹部以下ケズリ	ふつう	良好	内外面：浅黄褐色	外面下部と内面ス付着
280	4463	土器集中14	PL55-5	弥生土器 壺	口径：152 腹高：△18.5	外面 口縁部15条の擬凹線・肩部ハケガキ 内面 口縁部コナデ 腹部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外面：にぶい褐色 内面：灰褐色	外面と内面縦部ス付着
281	4467	土器集中14	PL55-5	弥生土器 壺	口径：317 腹高：△10.4	外面 口縁部2-3条の擬凹線・腹部斜付具鉢刺突文 内面 口縁部ガキ 腹部以下ケズリ後ナデ	ふつう	ふつう	内外面：浅黄褐色	外面ス付着
282	4462	土器集中14	PL55-5	弥生土器 壺	口径：124 腹高：△15.7	外面 口縁部4-5条の擬凹線・肩部ハケメ 内面 口縁部ガキ 腹部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面：にぶい褐色	外面上部と肩部ス付着
283	4466	土器集中14	PL55-5	弥生土器 壺	口径：314.4 腹高：11.9	外面 口縁部コナデ 腹部ハケメ 内面 口縁部ガキ 腹部以下ケズリ	密	良好	内外面：灰白色	外面ス付着 外面部と内面部縦部赤紫色帯
284	5381	土器集中15	PL62-1	弥生土器 壺	口径：126 腹高：△15.1	外面 ハケメ 内面 口縁部ガキ 腹部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外面：褐色 内面：にぶい黄褐色	外面ス付着
285	5906	土器集中15	PL62-2	弥生土器 壺	口径：312.0 腹高：△11.3	外面 口縁部コナデ 腹部ハケメ 内面 口縁部ガキ 腹部以下ケズリ	ふつう	良好	内外面：浅黄褐色	
286	5387	土器集中15	PL62-2	弥生土器 壺	口径：125 腹高：△5.6	外面 口縁部コナデ 腹部ハケメ 内面 口縁部ガキ 腹部以下ケズリ	密	ふつう	外面：にぶい黄褐色 内面：褐色	
287	5390	土器集中15-i	PL62-2	弥生土器 壺	口径：166 腹高：△15.0	外面 口縁部16条の擬凹線・肩部ハケメ後ナデ 内面 口縁部コナデ 腹部以下ケズリ	やや 密	やや 良好	外面部にぶい褐色 内面：浅黄褐色	外面上半ス付着
288	5106	土器集中15	PL62-2	弥生土器 壺	口径：171.0 腹高：△11.0	外面 口縁部2-3条の擬凹線・腹部波状文 腹部ハケメ 内面 口縁部コナデ 腹部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面：褐色	外面ス付着
289	5888	土器集中15	PL62-2	弥生土器 壺	口径：198 腹高：△11.0	外面 口縁部2-3条の擬凹線・腹部波状文 内面 口縁部コナデ 腹部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外面部にぶい黄褐色 内面：灰白色	外面ス付着
290	5388	土器集中15-i	PL62-2	弥生土器 壺	口径：150 腹高：△5.6	外面 口縁部3-4条の擬凹線・腹部波状文 内面 口縁部コナデ 腹部以下ケズリ	粗	ふつう	内外面：明褐色	外面ス付着
291	5139	土器集中15	PL62-2	弥生土器 壺	口径：166 腹高：△5.2	外面 口縁部15条の擬凹線・肩部ハケメ 内面 口縁部3-4条の擬凹線・腹部波状文 内面 口縁部コナデ 腹部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面：褐色	外外面ス付着
292	5413	土器集中15	PL62-2	弥生土器 壺	口径：230 腹高：20.9 底径：16.4	外面部 内面 ハケメ 内面 口縁部20条コナデ 壁部シボリ 腹部ナデ 内面 口縁部コナデ 壁部シボリ 腹部ナデ	ふつう	ふつう	外面部：褐色 内面：黄褐色	外面部壁部上部と脚部ス付着
293	5196	土器集中15	PL62-3	弥生土器 壺	口径：200 腹高：18.8 底径：16.8	外面部 内面 安部12条の擬凹線・腹部3+3+3条の 波状文 内面 口縁部12条の擬凹線・腹部波状文 内面 口縁部コナデ 腹部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面：浅黄褐色	
294	4714	土器集中15	PL62-3	弥生土器 壺	口径：198 腹高：△11.7	外面部 内面 安部2-4条の擬凹線・腹部ミガキ 内面 安部12条の擬凹線・腹部ケズリナデ 内面 口縁部20条コナデ 壁部シボリ 腹部ナデ	ふつう	ふつう	内外面：浅黄褐色	受部と外外面 赤色帯
295	5386	土器集中15-e	PL62-2	弥生土器 壺	口径：△9.2 腹高：△7.3	外面部 内面 口縁部2-4条の擬凹線・腹部ケズリ 内面 口縁部20条の口縁×2+半截竹背文 段部3 3条の口縁×2+半截竹背文 互干 内面 口縁部コナデ 腹部ケズリ後ナデ	ふつう	ふつう	内外面：浅黄褐色	外面脚部ス付着
296	5148	土器集中15	PL62-2	弥生土器 壺	口径：△6.2 腹高：△3.6	外面部 内面 口縁部4条の口縁×2+2条重円心タン ブ文、ミガキ 内面 口縁部5条の擬凹線 内面 口縁部コナデ 腹部ケズリ	やや 密	ふつう	内外面：浅黄褐色	
297	5356	土器集中15	PL62-2	弥生土器 壺	口径：△9.3	外面部 内面 口縁部4条の口縁×2+2条重円心タン ブ文、ミガキ 内面 口縁部5条の擬凹線 内面 口縁部コナデ 腹部ケズリ	ふつう	ふつう	内外面：浅黄褐色	内面部脚部上部 ス付着

表30 土器・土製品観察表(12)

※復元値 △既存値

造物 番号	取上 番号	遺様 用件名	掉回 PL	種類 器種	法量(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
298	5195	土器集中15	第112回 PL62-4	弥生土器 壺	口径: 12.9 器高: 5.9 つまみ程: 4.0	外面: 三ガ弓後ナデ 口縁部ヨコナデ つまみユビ オサエ、中央に穿孔 内面: ケズリ つまみ三ガ弓後ナデ	密	良好	内外面: に深い黄褐色	
299	5033	土器集中15	第112回 PL62-5	弥生土器 壺	口径: 12.6 器高: 5.7 つまみ程: 3.8	外面: ハケキ 口縁部つまみヨコナデ 内面: シボリ、ハバメ つまみナデ	密	良好	外面: に深い黄褐色 内面: 橙褐色	外面と内面口縁部スス付差
300	5384	土器集中15-c	第112回 PL62-6	弥生土器 壺	口径: 12.6 器高: 6.0 つまみ程: 5.1	外面: 三ガ弓後ナデ 腹部北ガキ 内面: ナデ つまみナデ	ふつう	ふつう	外面: 注青褐色 内面: 黄褐色	外面と内面口縁部スス付差
301	5263	土器集中15	第112回 PL62-7	弥生土器 壺	口径: 11.6 器高: 5.7 つまみ程: 5.2	外面: ヨコナデミエガキ 内面: ヨコナデ つまみヨコナデ後エガキ	ふつう	良好	内外面: に深い褐色	
302	5383	土器集中15	第112回 PL62-7	弥生土器 壺	口径: 11.2 器高: 5.0 つまみ程: 5.2	外面: ハケキ後ナデ 口縁部つまみヨコナデ 内面: ケズリ後ナデ 口縁部ヨコナデ ヨコナデ	密	良好	外面: 法螺色 内面: 橙色	
303	5576	土器集中15-1	第115回 PL56-1	弥生土器 壺	口径: 15.6 器高: 26.0 つまみ程: 2.4	外面: 口縁部ヨコナデ下部に貝殻散落による刺突 2 腹部横部ハバメ 内面: 口縁部ヨコナデ ハケキ 腹部以下ケズリ	ふつう	良好	内外面: 褐色	外面腹部スス付差
304	5511	土器集中15-1	第115回 PL56-2	弥生土器 壺	口径: 15.5 器高: 11.1 つまみ程: 4.6	外面: 口縁部ヨコナデ 腹部ガキ 内面: ヨコナデミエガキ ヨコナデ ヨコナデ	ふつう	ふつう	内外面: 褐色	外面下部スス付差
305	5455	土器集中15-1 土器集中15-3	第115回 PL56-3	弥生土器 壺	口径: 25.4 器高: 5.4 つまみ程: 5.4	外面: 口縁部14条の腹凹継 腹部ハケメ 内面: 口縁部ヨコナデ 腹部以下ケズリ 底部ユビツサウ	粗	不良	内外面: 淡白色	
306	5519	土器集中15-1 他	第115回 PL56-3	弥生土器 壺	口径: 18.5 器高: 23.0 つまみ程: ≈1.0	外面: 口縁部14条の腹凹継 腹部ハケメ 内面: 口縁部ヨコナデ 腹部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外面: 黄褐色 内面: 注黄褐色	外面スス付差 外面上半赤色黒彩
307	5516	土器集中15-1	第115回 PL56-4	弥生土器 壺	口径: 18.7 器高: 22.4 つまみ程: 2.0	外面: 口縁部14条の腹凹継 ナシあり 腹部ハケメ 内面: 口縁部ミエガキ ミエガキ後ナデ 腹部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外面: 淡黄褐色 内面: 黄褐色	外面スス付差 外面上半赤色黒彩
308	5512	土器集中15-1	第115回 PL56-5	弥生土器 壺	口径: 15.1 器高: 18.1 つまみ程: 2.0	外面: 口縁部7条の腹凹継 腹部ハケメ タタキ俄モリ 内面: 口縁部ミエガキ 腹部以下上半ケズリ後ナデ 下半ケズリ	ふつう	ふつう	内外面: に深い黄褐色	外面スス付差 外面上半赤色黒彩
309	5498	土器集中15-1	第115回 PL56-6	弥生土器 壺	口径: 18.6 器高: △15.4	外面: 7条の腹凹継 腹部12条の腹凹継+5~7 7条の波状紋 ナシあり 内面: 口縁部ヨコナデ 腹部以下ケズリ	ふつう	良好	内外面: 淡黄褐色	外面腹部下部 スス付差
310	5591	土器集中15-1	第115回 PL56-7	弥生土器 壺	口径: 20.9 器高: 4.2	外面: 尾部タキ、波状紋 腹部ハケメ 底部ナ 内面: 腹部タキ、波状紋	ふつう	良好	外面: 橙色 内面: 灰色	外面下部スス付差
311	5489	土器集中15-1	第116回 PL56-6	弥生土器 高坏	口径: 20.4 器高: 16.2 つまみ程: ≈11.0	外面: ヨコナデ ハケメミエガキ 腹部ミエガキ後ナデ 内面: ナデ 口縁部ミエガキ後ナデヨコナデ 腹部ボル ボルケズリ後ナデ	やや 密	やや 良好	外面: 淡黄褐色 内面: 灰色	外面上口縁部 スス付差
312	5577	土器集中15-1 5582 5519	第116回 PL56-7	弥生土器 高坏	口径: ≈25.2 器高: 15-1	外面: 尾部ミエガキ後ヨコナデ 内面: ボルボルキ後ナデ	やや 密	やや 良好	外面: に深い褐色 内面: 淡黄色	外面上部 スス付差
313	5871	土器集中15-1 5479	第116回 PL56-8	弥生土器 器台	口径: ≈22.0 器高: 8.6 つまみ程: ≈16.0	外面: 受鉢部2周の波状紋 腹部5条の凹継 腹 部2周の腹凹継 内面: 暗化のため不明	ふつう	やや 不良	外面: 淡黄褐色 内面: に深い黄褐色	
314	5524	土器集中15-1	第116回 PL56-7	弥生土器 器台	口径: 18.0 器高: 13.7 つまみ程: 12.6	外面: 受鉢部ヨコナデ 段部に3条の凹継 腹 部柱脚ケズリ後ナデ 内面: ケズリ	やや 密	やや 良好	外面: に深い黄褐色	
315	5547	土器集中15-1	第116回 PL56-8	弥生土器 器台	口径: 18.6 器高: 8.6	外面: 受鉢部ヨコナデ 段部3条の凹継×2+3重 同心式スラブ文 腹部柱脚ケズリ後ナデ 内面: 柱脚ケズリ後ナデ	やや 密	やや 良好	外面: 淡黄褐色 内面: に深い黄褐色	
316	5593	土器集中15-1	第116回 PL56-8	弥生土器 鉢	口径: 8.0 器高: 7.7 つまみ程: 0.6	外面: 上部ガキ 下部ハケメ 内面: ナデ	ふつう	良好	外面: に深い褐色 内面: に深い黄褐色	外面スス付差
317	5527	土器集中15-1	第116回 PL70-1	弥生土器 耳付鉢	口径: 19.6 器高: △10.6	外面: ナデ 内面: ケズリ	ふつう	ふつう	内外面: に深い黄褐色	
318	5475	土器集中15-2 5531 他	第116回 PL57-1	弥生土器 壺	口径: 15.0 器高: 24.3 つまみ程: 3.0	外面: 口縁部ヨコナデ 尾部13条の波状文+10 条の腹凹継 腹部ハケメ後ナデ 下部ハケ 内面: ケズリ	ふつう	ふつう	内外面: 橙色	外面スス付差
319	5472	土器集中15-2 5473	第116回 PL57-1	弥生土器 壺	口径: 16.8 器高: 19.3 つまみ程: 3.1	外面: 受鉢部ヨコナデ 腹部11条の波状文 ×2+6条の波状文 腹部タキ下半波状ガキ 内面: 口縁部ヨコナデ 腹部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外面: に深い黄褐色 内面: 黄褐色	外面下部スス付差
320	5467 5531 他	土器集中15-2 土器集中15-3	第116回 PL57-1	弥生土器 壺	口径: 17.1 器高: 2.0	外面: ハケメ後ナデ 内面: ケズリ	ふつう	ふつう	外面: 淡黄褐色 内面: 淡黄色	外面上口縁部 スス付差
321	5466	土器集中15-2	第116回 PL57-1	弥生土器 壺	口径: 12.0 器高: 5.4 つまみ程: 5.7	外面: ハケキ 口縁部つまみヨコナデ 内面: ケズリ後ナデ つまみヨコナデ	ふつう	ふつう	外面: 棕色 内面: 明褐灰色	
322	5441	土器集中15-3	第116回 PL57-2, 3	弥生土器 壺	口径: 18.8 器高: 21.1 つまみ程: 4.2	外面: 口縁部腹凹継ハケメ 腹部ハケメ ケズリ後ナデ 尾部以下ケズリ	密	良好	外面: 棕色 内面: に深い褐色	外來者が製作? 外面上部スス付差
323	5452 5463	土器集中15-3	第116回 PL57-2	弥生土器 壺	口径: 17.0 器高: 21.1 つまみ程: 4.2	外面: 口縁部15条の腹凹継 腹部ミエガキ 内面: 口縁部ヨコナデ 腹部以下ケズリ	やや 密	良好	外面: 明褐灰色	
324	5442	土器集中15-3	第116回 PL57-3	弥生土器 壺	口径: 19.4 器高: △15.5	外面: 口縁部ヨコナデ 腹部15条の腹凹継 内面: 口縁部ヨコナデ 腹部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面: に深い黄褐色	

表31 土器・土製品観察表(13)

※復元値 △現存値

遺物番号	出土位置	埋蔵層位	埋蔵地名	法蓋(cm)	手作上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
325 5450 4403	土器集中 15-3	第118回 PL57-2, 4	弥生土器 高杯	口径: 22.9 高さ: 16.9 底径: 15.0	外面 口縁部コナデ 坂部脚部2ガキ 脚柱部 ガキ後ナデ 3方円形透かし 内面 坂部2ガキ 脚柱部シボリ 脚部ハケメ	ふつう	やや 良好	外面: にぶい黄褐色 内面: 褐色	
326 5457	土器集中 15-3	第118回 PL57-2, 4	弥生土器 高杯	口径: 22.5 高さ: 17.8 底径: 16.0	外面 3ガキ 脚柱一部2ガキ後ナデ 内面 口縁部2ガキ 坂部2ガキ後3ガキ 脚柱部以下コナデ	ふつう	ふつう	内外面: 淡黄褐色 内面坂部熱刺織	
327 5410	土器集中 15-4	第118回 PL57-5	弥生土器 甕	口径: 約14.9 高さ: △17.7	外面 口縁部15条の腹凹継 腹部7条の波状文 腹部2ガキ 内面 口縁部コナデ 脚部以下ケズり 下部に 墨状の工具痕	密	良好	内外面: 反白色 外面ス付着	
328 5411	土器集中 15-4	第118回 PL57-5	弥生土器 甕	口径: 14.1 高さ: 16.9 底径: 3.1	外面 口縁部13条の腹凹継 腹部4条の波状文 腹部2ガキ 内面 口縁部コナデ 脚部以下ケズり 後ナデ	やや 密	やや 良好	外面: 反白色 内面: 反白色	外面ス付着
329 5636 5637	土器集中 15-7	第119回 PL58-4	弥生土器 甕	口径: 12.2 高さ: △9.1	外面 口縁部コナデ 額部削突文 以下ハケメ 口縁部ガキコナデ 脚部以下ケズり	ふつう	ふつう	外面: にぶい黄褐色 内面: にぶい黄褐色	内外面ス付着
330 5609	土器集中 15-7	第119回 PL58-4	弥生土器 甕	口径: 21.4 高さ: 20.8 底径: 17.4	外面 口縁部12条の腹凹継 腹部2条の腹凹継 波状文 内面 口縁部コナデ 脚部以下ケズり	ふつう	良好	内外面: 反白色 外面ス付着	
331 6106 331 6115	土器集中 他 15-5	第121回 PL58-1, 2	弥生土器 甕	口径: 約17.4 高さ: 25.5 底径: 4.2	外面 口縁部18条の腹凹継 腹部8条の波状文 腹部2ガキ 内面 口縁部コナデ 脚部以下ケズり	ふつう	ふつう	内外面: 明赤灰色 外面ス付着	
332 6119 5899	土器集中 15-5 土器集中 15-6	第121回 PL58-1, 2	弥生土器 甕	口径: 17.1 高さ: △23.0	外面 口縁部コナデ 脚部ハケメ 内面 口縁部コナデ 脚部ケリ後ナデ 以下 ケズり	やや 粗	良好	内外面: 淡黄褐色 外面ス付着	
333 6104	土器集中 15-5	第121回 PL58-1	弥生土器 甕	口径: 17.4 高さ: △12.8	外面 口縁部16条の腹凹継 腹部6条の波状文 腹部ハケメ 内面 口縁部コナデ 脚部2ガキ 腹部ケズリ	ふつう	ふつう	内外面: にぶい黄褐色 外面ス付着	
334 5801 5805 5809	土器集中 15-5	第121回	弥生土器 甕	口径: 約19.5 高さ: △9.8	外面 口縁部コナデ 回輪ハケメガキ 内面 口縁部コナデ 脚部以下ハケメガキ	密	良好	内外面: 褐色	内外面ス付着
335 5900 5929	土器集中 15-5 土器集中15	第121回	弥生土器 甕	口径: 約21.7 高さ: △24.3	外面 口縁部19条の腹凹継 腹部具波状縫刻文 腹部ハケメ後ナデガキ 内面 口縁部コナデ後ナデガキ 脚部ケズり 以下 ケズり後ナデガキ	ふつう	良好	内外面: 淡黄褐色 外面ス付着	
336 5866 5899 5909	土器集中 他 15-6 土器集中15	第121回 PL58-1	弥生土器 甕	口径: 22.5 高さ: △16.9	外面 口縁部4条の腹凹継 腹部具波状縫刻文 による波状文 内面 口縁部コナデ	ふつう	やや 不良	外面: にぶい橙色 内面: 橙色	
337 5805 5774	土器集中 15-5	第121回 PL58-1	弥生土器 甕	口径: 14.9 高さ: △14.3	外面 口縁部11条の腹凹継 腹部2ガキ 内面 口縁部2ガキ 脚部以下ケズり	ふつう	良好	外面: 褐色 内面: 反白色	内外面ス付着
338 5813 5889 5919	土器集中 15-5 土器集中 15-6	第121回 PL58-1	弥生土器 甕	口径: 19.5 高さ: △15.7	外面 口縁部18条の腹凹継 腹部9条の波状文 腹部ハケメ 内面 口縁部コナデ 脚部以下ケズり	やや 粗	ふつう	内外面: 反白色	
339 5807	土器集中 15-5	第121回 PL58-1	弥生土器 甕	口径: 20.8 高さ: △14.3	外面 口縁部18条の腹凹継 腹部10条の腹凹継 波状文 腹部ハケメ後ナデガキ 内面 口縁部コナデ 脚部以下ケズり後ナデ	ふつう	ふつう	外面: にぶい黄褐色 内面: 橙色	外面口縫部と腹部 ス付着
340 5844	土器集中 15-5	第121回 PL58-4	弥生土器 甕	口径: 15.5 高さ: △14.4	外面 口縁部15条の腹凹継 腹部削突文 腹部 ハケメ後ナデガキ 内面 口縁部コナデ 脚部以下ケズり後ナデガキ	ふつう	ふつう	外面: にぶい橙色 内面: 橙色	外面口縫部と腹部 ス付着
341 5800	土器集中 15-5	第121回	弥生土器 甕	口径: 16.5 高さ: △15.6	外面 口縁部15条の腹凹継 腹部削突文 腹部 ハケメ後ナデガキ 内面 口縁部コナデ 脚部以下ケズり	やや 密	やや 良好	外面: 反白色 内面: にぶい橙色	外面ス付着 外面口縫部と腹部上 半分赤黒色
342 5787 5287 JH・K4 6 6	土器集中 15-5 他 15-6 JH・K4 6 6	第121回 PL58-1, 5	弥生土器 甕	口径: 約11.8 高さ: 11.4 底径: 1.4	外面 口縁部10条の腹凹継 腹部3条の凹 縫×3+貝殻痕透文+○字タスキ文、下 部ハケメ 内面 口縁部コナデ 脚部以下ケズり	ふつう	ふつう	内外面: 反白色	
343 5900 5818 5919	土器集中15 他 15-5	第121回 PL58-6	弥生土器 甕	口径: 12.3 高さ: △9.1	外面 口縁部1条の腹凹継 腹部2重円内タスキ文×4 内面 口縁部コナデ 脚部以下ケズり	ふつう	ふつう	外面: 褐色 内面: 反白色	外面と内面部 ス付着
344 5835 5900 5919	土器集中 15-5 土器集中 15-6	第121回	弥生土器 甕	口径: 15.0	外面 腹部2重円内タスキ文×4 内面 口縁部コナデ 脚部以下ケズり	ふつう	ふつう	外面: 橙色 内面: にぶい橙色	
345 5785	土器集中 15-5	第122回	弥生土器 高杯	口径: 約27.4 高さ: △14.4	外面 口縁部コナデ下部2ガキ後ナデ 内面 口縁部コナデ 脚部2ガキ後ナデ	ふつう	ふつう	内外面: 反白色	
346 5796 5803 5835	土器集中 15-5 他 15-5	第122回 PL58-1	弥生土器 高杯	口径: 22.4 高さ: △13.3	外面 口縁部コナデ2ガキ後ナデ 内面 口縁部コナデ 脚部2ガキ後ナデ	ふつう	ふつう	内外面: 褐色	
347 5795	土器集中 15-5	第122回	弥生土器 高杯	口径: △10.7 高さ: △13.4	外面 脚柱部脚部2ガキ 3方円形透かし 内面 脚柱部コナデ 脚部2ガキ後3コナデ	やや 密	やや 良好	内外面: にぶい橙色	内面口縫部 ス付着
348 5770 5825 5859	土器集中 15-5	第122回	弥生土器 高杯	口径: 18.4 高さ: △13.2	外面 ミガキ後ナデ 受粉部脚部2ガキ後3コナデ 内面 受粉部2ガキ後ナデ 脚部上部ケズり下部下 部ケズリ	ふつう	ふつう	内外面: 橙色	
349 5782 5783 5830	土器集中 15-5	第122回	弥生土器 高杯	口径: △5.6 高さ: △15.6	外面 ミガキ 腹部3条の凹縫×2+3重同心円 内面 タスキ文	ふつう	ふつう	外面: 淡黄褐色 内面: にぶい橙色	
350 6102	土器集中 15-5	第122回 PL58-1, 7	弥生土器 高杯用器 台	口径: 15.1 高さ: △7.9	内面 ミガキ 腹部内面脚部以下ケズり 脚部打 ち次第(器台に転落)	密	良好	内外面: 淡黄褐色 内面: にぶい橙色	内外面ス付着
351 5793	土器集中 15-5	第122回	弥生土器 甕	口径: 約9.9 高さ: △4.9	外面 ハケメ 脚部コナデ後2ガキ 口縁部コ ナデ 内面 ケズリ 口縁部コナデ	ふつう	良好	内外面: 反白色	

表32 土器・土製品観察表(14)

番号	取上 番号	種類 用具名	掉頭 PL	種類 種類	法量(cm)	手法上の特徴		胎土	焼成	色調	備考
						外表面	内表面				
352	5715	土器集中 15-6	第122回 PL59-1	弥生土器 壺	口径 17.9 底径 △10.8	外表面 口縁部5条の腹凹線 脚部ヨコナデ 内表面 口縁部ヨコナデ	ふつう	ふつう	内外面：褐色		
353	5677	土器集中 15-6	第122回 PL59-1, 3	弥生土器 壺	口径 9.6 底径 9.1	外表面 ヨコナデ 口縁部穿孔 内表面 口縁部ヨコナデ	ふつう	良好	内外面：灰白色	外面と内面口縁部赤 色使用	
354	5659	土器集中 15-6	第122回 PL59-1, 3	弥生土器 壺	口径 15.2 底径 △18.4	外表面 9条の腹凹線 脚部ハケ後ミガキ 内表面 口縁部17条の腹凹線 脚部貝殻模様によ る波状文	ふつう	ふつう	外表面：褐色 内表面：反青褐色	外面と内面下部 スス付帯	
355	5716	土器集中 15-6	第122回 PL59-1	弥生土器 壺	口径: 34.9 底径: △12.2	外表面 口縁部16条の腹凹線 脚部ハケ後 内表面 口縁部ヨコナデ 脚部ハケ後、以下ケズリ	やや 密	やや 密	外表面：淡青色 内表面：灰白色	内外面口縁部 赤色使用	
356	5640	土器集中 15-6	第122回	弥生土器 壺	口径 27.9 底径 △12.5	外表面 口縁部3条の腹凹線 脚部6~7条の波状 文、腹部ハケ後 内表面 口縁部ヨコナデ 脚部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外表面：浅青褐色 内表面：灰白色		
357	5309	土器集中15 土器集中他	第122回	弥生土器 壺	口径 30.4 底径 △10.2	外表面 口縁部20条の腹凹線 脚部ヨコナデ 腹部 ナデ 内表面 口縁部ヨコナデ 脚部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外表面：灰褐色 内表面：くろい褐色	外面脚部スス付帯	
358	5705	土器集中 15-6	第122回 PL59-1	弥生土器 壺	口径 15.0 底径 10.7 高さ 14.1	外表面 受部15条の腹凹線 脚部ヨコナデ 腹部 14条の腹凹線 内表面 ハケ後ナデ	ふつう	良好	内外面：浅黄褐色		
359	5641	土器集中 15-6	第122回 PL59-1	弥生土器 壺	口径 14.5 底径 8.4 高さ 8.9	外表面 ヨコナデ 内表面 ヨコナデ	ふつう	ふつう	外表面：淡黄褐色 内表面：灰白色	外面と内面口縁部 スス付帯	
360	5684	土器集中 15-6	第122回 PL59-1	弥生土器 壺	口径 11.4 底径 6.1 高さ 3.7	外表面 ハケ後 つまみヨコナデ 内表面 ケズリ	ふつう	良好	内外面：淡褐色		
361	5718	土器集中 15-6	第122回 PL59-1	土玉	長: 3.2 幅: 3.2 厚: 2.9		ふつう	ふつう	橙色		
362	5878	土器集中 15-6	第125回 PL60-2	弥生土器 壺	口径 13.2 底径 25.1 高さ 3.7	外表面 口縁部ヨコナデ 上半ハケメ 下半ナデ 内表面 口縁部ヨコナデ、ハケメ 脚部ナデ 下部 ハケ後	ふつう	ふつう	内外面：にぶい黄褐色		
363	6090	土器集中 15-6	第125回 PL60-1	弥生土器 壺	口径 28.6 底径 39.0 高さ 7.1	外表面 口縁部15条の腹凹線 背部縫隙押引文+ 波状文、腹部ハケ後 内表面 口縁部ヨコナデ 脚部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外表面：褐色 内表面：にぶい黄褐色	外面スス付帯	
364	5874	土器集中 15-6 他	第125回 PL60-1	弥生土器 壺	口径 18.3 底径 13.7 高さ 14.7	外表面 受部18条の腹凹線 脚部ナデ 腹部17 条の腹凹線 内表面 受部ヨコナデ 脚部ナデ 腹部ケズリ	やや 密	やや 密	外表面：褐色 内表面：赤色変形		
365	5876	土器集中 15-6	第125回 PL60-1	弥生土器 壺	口径 13.4 底径 12.9 高さ 39.2	外表面 口縁部16条の腹凹線 腹部ハケメ 内表面 口縁部ヨコナデ 脚部以下ケズリ、ケズリ 後ナデ	ふつう	良好	内外面：浅黄褐色		
366	6099	土器集中 15-6	第125回 PL60-3	弥生土器 壺	口径 18.2 底径 4.1	外表面 口縁部16条の腹凹線 腹部波状文 腹部 ハケ後 内表面 口縁部ヨコナデ 脚部以下ケズリ	やや 密	ふつう	外表面：にぶい黄褐色 内表面：波状文	内面底部スス付帯	
367	6092	土器集中 15-6	第125回 PL60-4	弥生土器 壺	口径 18.5 底径 6.0	外表面 口縁部16条の腹凹線 腹部縫隙押引文+ 波状文、腹部ハケ後 内表面 口縁部ヨコナデ 脚部以下ケズリ	やや 密	ふつう	外表面：褐色 内表面：波状文	外表面スス付帯	
368	5408 5385 土器集中 15-6 他	土器集中 15-9 土器集中15 土器集中 15-6	第126回 PL60-5	弥生土器 壺	口径 15.1 底径 △22.0	外表面 ハケ後 口縁部ヨコナデ 内表面 口縁部ヨコナデ 脚部ハケメ 脚部以下ケ ズリ	やや 密	ふつう	外表面：褐色 内表面：浅黄褐色	外表面底部下半 スス付帯	
369	5407	土器集中 15-9	第126回 PL60-5	弥生土器 壺	口径 19.2 底径 △14.2	外表面 口縁部16条の腹凹線 腹部8条の波状文 脚部ハケメ 内表面 口縁部ヨコナデ 脚部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外表面：褐色 内表面：波状文	外表面スス付帯	
370	5401	土器集中 15-10	第126回 PL61-1	弥生土器 壺	口径 19.4 底径 29.8 高さ 5.7	外表面 口縁部13条の腹凹線 脚部上ナデ下半 ハケ後 内表面 口縁部ヨコナデ 脚部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外表面：褐色 内表面：波状文	外表面脚部スス付帯	
371	5397	土器集中 15-10	第126回 PL61-1	弥生土器 壺	口径: 16.8 底径: 21.9 高さ: 2.6	外表面 口縁部11+5条の腹凹線 腹部波状文 脚部ハケ後ナデ 内表面 口縁部ヨコナデ 脚部以下ケズリ	ふつう	やや 不良	外表面：褐色 内表面：波状文	外表面底部中央 スス付帯	
372	5394	土器集中 15-10	第126回 PL61-1	弥生土器 壺	口径: 13.8 底径: 14.1 高さ: 3.3	外表面 口縁部17条の腹凹線 脚部ハケ後ミガキ ヨコナデ、ミガキ 脚部以下ケズリ	ふつう	良好	内外面：褐色	外表面スス付帯	
373	5399	土器集中 15-10	第126回 PL61-1	弥生土器 壺	口径 11.1 底径 5.7 高さ 6.5	外表面 ヨコナデ 口縁部つまみヨコナデ 内表面 泥化のため不明 つまみヨコナデ	ふつう	ふつう	外表面：灰白色 内表面：くろい褐色		
374	5395	土器集中 15-10	第126回 PL61-1	弥生土器 台付壺	口径 11.0 底径 8.3 高さ 6.6	外表面 ハケ後ミガキ 台付ヨコナデ 内表面 ヨコナデ	ふつう	ふつう	外表面：にぶい黄褐色		
375	5402	土器集中 15-10	第126回 PL61-1	弥生土器 直付壺	口径 △8.5 底径 15.6	外表面 ヨコナデ 4万円透かし 内表面 脚部ケズリ 脚部ナデ	ふつう	ふつう	外表面：褐色		
376	5071 5077 土器集中15 土器集中 15-11	土器集中15	第126回 PL61-2	弥生土器 直付壺	口径: 23.4 底径 △5.9	外表面 ヨコナデ 内表面 口縁部ヨコナデ 脚部ケズリ後ナデ	粗	ふつう	外表面：淡青褐色		
377	5069	土器集中15	第126回 PL61-2	弥生土器 直付壺	口径 10.4 底径 70.6 高さ 41.4	外表面 上部ナデ 把手以下ハケメ 腹下部縛り痕 有 内表面 ケズリ 上下縛りヨコナデ	密	良好	外表面：灰白色		
378	6267	土器集中16	第126回 PL62-10	弥生土器 壺	口径 18.4 底径 26.6 高さ 3.8	外表面 口縁部13条の腹凹線 腹部13条の波状文 以下ハケ後ミガキ 内表面 口縁部ミガキ 脚部以下ケズリ後ミガキ	密	良好	外表面：浅黄褐色 内表面：波状文と 被附有		

表33 土器・土製品観察表(15)

※復元値 △現存値

遺物 番号	出土 場所 番号	通稱 等級名	埋蔵 PL	種類 器形	法寸(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
379 6266 6257 他	土器集中16	第128回 PL62-10	弥生土器 裏	口径 : 146 器高 : 209 底径 : 4.0	外面 口縁部2条の凹回線、肩部4条の波状 腹部ハケメ下部ハケメ後ナデ 内面 口縁部コナチ、ケズリ後ナデ 脇部以下 ケズリ	密	良好	外外面：明赤褐色		
380 6241 他	土器集中16	第128回 PL62-10	弥生土器 裏	口径 : 157 器高 : 193 底径 : 3.3	外面 口縁部1条の凹回線、肩部ハケメ 腹部に凸出する波状文、脇部ハケメ 内面 口縁部コナチ 脇部以下ケズリ	密	良好	外外面：浅黄褐色		
381 6235 土器集中16	第128回 PL62-10	弥生土器 裏	口径 : 161 器高 : 219 底径 : 4.2	外面 口縁部1条の凹回線、肩部ハケメ 内面 口縁部コナチ 腹部ガキ 脇部上部ケズリ 口縁部コナチ以下ケズリ	密	良好	外外面：黄灰色	外表面ス付着		
382 6260 土器集中16	第128回 PL62-10	弥生土器 裏	口径 : 162 器高 : 162 底径 : 12.1	外面 口縁部1条の凹回線、肩部波文×2 腹 部ナデ 内面 口縁部コナチ 脇部以下ケズリ	やや 密	やや 良好	外外面：にぶい褐色 内面：褐色	外表面ス付着		
383 6240 土器集中16	第128回 PL62-10	弥生土器 裏	器高 : △20.4 底径 : 3.2	外面 腹部波文 以下ハケメ 腹部ハケメ 内面 口縁部コナチ 脇部以下ケズリ	密	良好	外外面：にぶい褐色	外表面ス付着		
384 6236 土器集中16	第128回 PL62-10	弥生土器 裏	口径 : 148 器高 : △5.8 底径 : 3.2	外面 口縁部コナチ 腹部ガキ 内面 口縁部コナチ 脇部以下ケズリ	ふつう	良好	外外面：明褐灰色			
385 6253 6266 土器集中16	第128回	弥生土器 裏	器高 : △5.8 底径 : 4.0	外面 ナデ 内面 ケズリ後ナデ	密	良好	外外面：褐色	外表面ス付着		
386 6422 6416 他	K4-K5 V1-2層	第130回 PL63-1	弥生土器 裏	口径 : 165 器高 : △20.7	外面 口縁部コナチ 脇部上部ハケメ以下ハケ メ波文×2 内面 口縁部コナチ 脇部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外外面：灰白色		
387 6469 6325 KS V1-2層 2層	第130回 PL63-2	弥生土器 裏	口径 : 140 器高 : △25.3	外面 口縁部コナチ 腹部ハケメ 内面 口縁部コナチ 腹部ハケメヒビコサエ 以下ケズリ	ふつう	ふつう	外外面：褐色	外表面被熱剥離		
388 6462 KS V1-2層	第130回	弥生土器 脚付壺	器高 : 8.4	外面 脱部五方キ 下部剥離のため不明 内面 脱部コナチ 底部ナデ	ふつう	ふつう	外外面：浅黄褐色	外表面ス付着		
389 6470 KS V1-2層	第130回 PL63-4	弥生土器 台付壺	口径 : 8.7 器高 : 15.4 底径 : 9.1	背面+腹部数条の凹回線×4+半載竹葉文 十具脱離剥離文 1. 口縁部コナチ 下部タガキミガキ 内面 口縁部ガキコナチ 脱部ミガキ 脱部上半ケズリ 後ナデ下半ケズリ	やや 密	やや 良好	外外面：淡青色 内面：淡黄褐色			
390 6468 KS V1-2層	第130回 PL63-5	弥生土器 裏	口径 : 17.0 器高 : △22.0	外面 口縁部16条の凹回線、肩部ハケメ 腹部 突文 内面 口縁部コナチ 脱部以下ケズリ	ふつう	やや 不良	外外面：灰白色 内面：にぶい黄褐色	外表面ス付着		
391 6345 J5 V1-2層	第130回	弥生土器 裏	口径 : 17.4 器高 : △11.4	外面 口縁部1条の凹回線、肩部ハケメ 内面 口縁部コナチ 脱部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外外面：にぶい黄褐色 内面：浅黄褐色	外表面ス付着		
392 6492 KS V1-2層	第130回	弥生土器 裏	口径 : 17.6 器高 : △5.1	外面 口縁部1条の凹回線、肩部ハケメ 内面 口縁部コナチ 脱部以下ケズリ	ふつう	良好	外外面：にぶい褐色	外外面口縫部又 付着		
393 6467 KS V1-2層	第130回 PL70-2	弥生土器 裏	口径 : 18.0 器高 : △10.0	外面 口縁部凹回線 腹部具脱離縫突文。ミ ガキ 内面 口縁部ケリナデ 脱部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外外面：にぶい褐色	外外面口縫部と 腹部腰中央付近 赤色変形		
394 6431 KS V1-2層	第130回 PL70-2	弥生土器 裏	口径 : 7.0 器高 : 7.0 底径 : 5.0	背面 3条の凹回線+半舞付貝 突文 腹部ハ ケメ 内面 ケズリ	やや 密	やや 良好	外外面：灰白色	外表面ス付着		
395 6488 6469 KS V1-2層	第130回 PL63-5	弥生土器 裏	口径 : 15.7 器高 : 16.2 底径 : 2.0	外面 口縁部2条の凹回線 前部3条の凹回線× 4+貝脱離縫突文×2+3重同心円スタンプ 内面 口縁部コナチ 脱部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外外面：灰白色	外表面ス付着 外表面口縫部 中央付近赤色変形		
396 6447 KS V1-2層	第130回	弥生土器 裏	口径 : 15.9 器高 : 5.7 底径 : 5.0	外面 ヨコヨヂ 内面 ケズリ	ふつう	ふつう	外外面：浅黄褐色	外表面ス付着		
397 6498 KS V1-2層	第130回	弥生土器 裏	口径 : 14.5 器高 : 5.2 底径 : 5.5	内面 口縁部 : ヨナナデ	ふつう	良好	外外面：にぶい黄褐色			
398 6419 K4 V1-2層	第130回 PL63-6	弥生土器 注水器	口径 : 13.7 器高 : △14.7	外面 口縁部11条の凹回線 脱部以下3条の凹 回線×4+貝脱離縫突文×2+3重同心円 スタンプ 内面 口縁部ナデ 脱部ケズリ後ナデ	ふつう	ふつう	外外面：淡黄褐色 内面：灰白色			
399 6455 6382 KS V1-2層	第130回 PL70-3	弥生土器 裏?	口径 : 9.5 器高 : 5.5	外面 7条+3条×2の凹回線+亂刷1+渾金1+ 透S字1のスタンプ文 内面 風化のため不明	ふつう	ふつう	外外面：淡黄褐色 内面：灰白色	外表面ス付着		
400 6483 6481 KS V1-2層	第130回 PL63-7	弥生土器 基台	口径 : 21.5 器高 : 14.7 底径 : 15.6	外面 受部斜面ヨコヨヂ 受部3条の凹回線×2+ 4+貝脱離縫突文×2+3重同心円 スタンプ 内面 受部ナデ 脱部ミガキ 脱部ケズリ後ナデ	ふつう	やや 不良	外外面：淡黄褐色 内面：灰白色	外外面口縫部以外 赤色変形		
401 6453 KS V1-2層	第130回	弥生土器 基台	口径 : 19.0 器高 : 16.8 底径 : 16.8	内面 ミガキ 脱部上部ミガキ 脱部コナチ 脱部ナデ 脱部ケズリ後ナデ	ふつう	良好	外外面：にぶい褐色			
402 6443 KS V1-2層	第130回 PL63-6	弥生土器 基台?	口径 : 16.5 器高 : 5.5	外面 受部4+2条の凹回線+液状文 内面 ミガキ 口縁部コナチ	ふつう	ふつう	外外面：にぶい褐色	内面受部ス付着		
403 6461 KS V1-2層	第130回	弥生土器 基台	口径 : 15.9 器高 : 5.5 底径 : 5.0	外面 ミガキ後ナデ 脱部ミガキ 内面 ヨコヨヂ	密	良好	外外面：にぶい褐色			
404 6483 SD184	第132回	弥生土器 基台	口径 : △12.1 器高 : △18.0	外面 ヨコヨヂ 受部3条の凹回線×2+3重同心 円スタンプ 内面 受部ナデ ミガキ 脱部ケズリ後ナデ 脱部ケズリ	ふつう	ふつう	外外面：灰白色			
405 811 SD55	第132回	弥生土器 裏	口径 : 9H.3 器高 : △3.4	外面 口縁部4条の凹回線 内面 口縁部コナチ	密	良好	外外面：にぶい黄褐色 内面：灰黃褐色	外表面ス付着		

表34 土器・土製品觀察表(16)

物語 番号	取上 番号	遺様 位序名	牌印 PL	種類 器種	法量(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	※復元値 △現存値	
										外表面	内表面
406	2149	P38	PL65-6	弥生土器 水差子土器	口径: 11.2 器高: △5.9	外表面: 三方キ後ナデ 把手ミガキ 内表面: 口縁部ハケミガキ 腹部以下ケズリ後ナデ	密	良好	内外面: 棕色		
407	4558	P156	第132回	弥生土器 高环	器高: △6.8 口径: 13.4	外表面: 腹部7段以上の腹凹線 内表面: ナデ	ふつう	やや不良	内外面: 棕色		
408	4620	P168	第132回	弥生土器 高环	口径: 129.4 器高: △5.7	外表面: 口縁部ヨココテ 把手ナデ 内表面: 口縁部ヨコナデ 把手ナデ一部ミガキ	ふつう	ふつう	内外面: 棕色		
409	4746	P174	第132回	弥生土器 脚台部	器高: △3.0 口径: △7.9	外表面: ヨココテ 内表面: ナデ、腹底部ミガキ	やや密	ふつう	内外面: にじい褐色		
410	444	SK28	第140回	弥生土器 壺	口径: 15.6 器高: △7.6	外表面: ハケミガキ 内表面: 口縁部ハケミガキ 腹部ハメ 口縁部ヨコナデ 腹部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面: 淡白色		
411	1241	SK28	PL64-1	弥生土器 壺	口径: 18.6 器高: △18.6	外表面: 口縁部ハケミガキ 腹部ハメ 内表面: 口縁部ヨコナデ 腹部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面: にじい黃褐色	外表面付着	
412	442	SK28	第140回	弥生土器 壺	器高: △14.3 口径: 3.2	外表面: 腹部ハケミガキ 内表面: ハケ	ふつう	ふつう	内外面: にじい褐色	外表面付着	
413	1201	SK28	PL64-1	弥生土器 脚台	器高: △8.7 口径: 14.5	外表面: 腹柱部ミガキ2箇後ナデ 腹部ミガキ 内表面: 部柱部ナデ 腹部上部ハメ下部ハケメ後ナデ	密	良好	外表面: にじい褐色 内表面: 棕色		
414	752	SK30	PL64-2	弥生土器 壺	口径: 21.8 器高: △15.1	外表面: ナデ 内表面: 口縁部ヨコナデ 腹部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面: 棕褐色		
415	858	SK30	第140回	弥生土器 壺	口径: 17.8 器高: △9.7	外表面: 口縁部14条の腹凹線 内表面: 剥落したため不明	やや粗	不良	内外面: 棕色		
416	848	SK30	PL64-2	弥生土器 壺	口径: 14.2 器高: △11.0	外表面: 口縁部ヨココテ 腹部ハメ 内表面: 口縁部ヨコナデ 腹部以下ケズリか	ふつう	ふつう	内外面: 淡白色		
417	844	SK30	第140回	弥生土器 壺	口径: 14.0 器高: △7.6	外表面: 濁化のため不明	ふつう	ふつう	外表面: 棕色 内表面: 灰色		
418	1161	SK30	第140回	弥生土器 壺	口径: 13.4 器高: △6.7	外表面: ヨコナデ 腹部ハメ後ヨコナデ 内表面: 口縁部ヨコナデ 腹部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外表面: にじい褐色 内表面: にじい黃褐色		
419	1004	SK30	PL64-2	弥生土器 底部	口径: 10.9 器高: △8.0	外表面: ナデ 内表面: ケズリ後ナデ	ふつう	ふつう	内外面: 棕色		
420	1080	SK30	PL64-2	弥生土器 底部	口径: 16.1 器高: △10.2	外表面: ハケ 内表面: ハケ後ナデ	ふつう	やや粗	内外面: 棕色	外表面付着	
421	599	SK30	PL64-2	弥生土器 底部	口径: 20.5 器高: △7.0	外表面: ハケ	ふつう	ふつう	内外面: 棕色	外表面底断付 ス付着	
422	636	SK30	第141回	弥生土器 壺	口径: 31.4 器高: △23.9	外表面: 口縁部13条の腹凹線 腹部ナデ腹部ハケ 内表面: 口縁部ヨコナデ 腹部ケズリ後ナデ 以下ナデ	ふつう	ふつう	内外面: 棕色		
423	1014	SK30	第141回	弥生土器 壺	口径: 31.2 器高: △14.0	外表面: 口縁部13条の腹凹線 腹部ナデ 内表面: 口縁部ヨコナデ 腹部以下ケズリ、ナデ	やや密	良好	外表面: 棕色 内表面: にじい褐色		
424	854	SK30	第141回	弥生土器 壺	口径: 29.8 器高: △14.6	外表面: 濁化したため不明	ふつう	やや不良	内外面: 棕色		
425	692	SK30	PL64-2	弥生土器 壺	口径: 33.8 器高: △12.7	外表面: 口縁部ヨココテ 腹部波状文 内表面: 口縁部ヨコナデ 腹部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面: 棕色		
426	958	SK30	第141回	弥生土器 壺	口径: 30.8 器高: △14.7	外表面: 口縁部12+3条の腹凹線 腹部波状文 内表面: 口縁部ヨココテ 腹部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面: 淡白色		
427	1158	SK30	PL64-2	弥生土器 壺	口径: 17.2 器高: △10.0	外表面: 口縁部9+2条の腹凹線 腹部ナデ 内表面: 口縁部ヨココテ 腹部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外表面: 棕色 内表面: にじい褐色	外表面口縫部 ス付着	
428	1042	SK30	第141回	弥生土器 壺	口径: 24.0 器高: △7.8	外表面: 口縁部3+6+3条の腹凹線 内表面: 口縁部ヨココテ 腹部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外表面: 棕褐色 内表面: 淡白色		
429	898	SK30	第141回	弥生土器 壺	口径: 22.0 器高: △9.0	外表面: 口縁部ヨココテ 腹部波状文 内表面: 口縁部ヨコナデ 腹部以下ケズリ後ナデ	やや密	良好	内外面: 淡白色		
430	587	SK30	PL64-2	弥生土器 高环	口径: 21.4 器高: △17.6	外表面: ヨコナデ、ヨコナデ 内表面: 把手ミガキ 腹部ケシザギ	ふつう	良好	内外面: 淡白色		
431	1113	SK30	第141回	弥生土器 脚台	口径: 22.1 器高: 14.5 底径: 18.3	外表面: ナデ 段部2条の凹線×2+3重同心円入 内表面: ナデ 段部3条の凹線×2+2重同心円入 ナデ	ふつう	やや不良	内外面: 淡黃褐色		
432	884	SK30	第141回	弥生土器 脚台	口径: 38.0 器高: △5.4	外表面: 腹柱部3条の凹線 腹部ナデ 段部3条の凹線×2+2重同心円入 内表面: ナデ	ふつう	ふつう	外表面: 淡褐色 内表面: 淡黃褐色		

第3章 発掘調査の成果

表35 土器・土製品観察表(17)

*復元値・△現存値

遺物名	出土位置	標本番号	Pt.	種類	法寸(cm)	手作上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
433 1196 SK34 第142回	弥生土器 裏	口径 : 17.6 器高 : △10.2	外面 口縁部15条の腹凹線 腹部7条の波状文 内面 口縁部コナデ 頸部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面 : 淡黄褐色				
434 1195 SK34 第142回	弥生土器 裏	口径 : 17.1 器高 : △8.8	外面 口縁部5条の腹凹線 腹部6条の波状文 内面 口縁部コナデ 頸部以下ケズリ	やや 粗	ふつう	外表面 : 褐色 内面 : 淡黄褐色	外面胴部中央付近ス 付着			
435 827 SK34 第142回	弥生土器 裏	口径 : 19.0 器高 : △6.2	外面 瓦化のため不明 口縁部腹凹線、肩部波 状文有 内面 口縁部コナデ 頸部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面 : 灰白色				
436 1396 SK44 第142回	弥生土器 裏	口径 : 17.7 器高 : △17.2	外面 口縁部16条の腹凹線 腹部上半+ハサツメ後コナデ 内面 口縁部コナデ 頸部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外面 : 淡黄褐色 内面 : 灰白色	外面スス付着			
437 1822 SK48 第142回	弥生土器 裏	口径 : 18.8 器高 : △5.7	外面 口縁部16条の腹凹線 腹部6条以上の波 状文有 内面 口縁部コナデ 頸部以下ケズリ	やや 密	良好	外面 : 淡黄褐色 内面 : 灰白色				
438 2238 SK51 第142回 PL64-4	弥生土器 裏	口径 : 13.0 器高 : △19.0	外面 口縁部6条の腹凹線 腹部6条以上波状文 内面 口縁部コナデ 肩部腹斜線文 瓦部瓦 化のため不明 内面 ナデ	ふつう	ふつう	内外面 : 褐色				
439 1347 SK53 第142回	弥生土器 高片	口径 : 13.5 器高 : △6.1	外面 口縁部ミガキ後ナデ 以下ミガキ	密	良好	内外面 : 褐色				
440 2443 SK60 第143回 PL64-6	弥生土器 裏	口径 : 10.2 器高 : △6.7	外面 口縁部22条の腹凹線 肩部刺突文 ハケメ 内面 口縁部コナデ 頸部以下ケズリ	密	良好	内外面 : にぶい黄褐色	外面スス付着			
441 2443 SK60 第143回 PL64-6	弥生土器 裏	口径 : 18.0 器高 : △7.2	外面 口縁部15条の腹凹線 肩部ミガキ 内面 口縁部ミガキ 以下ケズリ	ふつう	ふつう	外面 : 淡黄褐色 内面 : にぶい黄褐色				
442 2380 SK60 第143回 PL64-6	弥生土器 裏	口径 : 15.6 器高 : △5.5	外面 口縁部13条の腹凹線 内面 口縁部ナデ 頸部以下ケズリ	やや 密	良好	内外面 : にぶい褐色	外面スス付着			
443 2380 陶土窯の 下	弥生土器 裏?	器高 : △7.1	外面 瓢~難部3条の波状+輪付貝腹斜線文 内面 ケズリ	ふつう	ふつう	内外面 : 淡黄褐色				
444 2519 SK60 陶土窯5直 上	弥生土器 裏	器高 : △24.6 底径 : 4.4	外面 肩部刺突文 瓢部ハケメ 内面 ケズリ	密	良好	内外面 : にぶい黄褐色	外面スス付着			
445 2519 SK60 陶土窯5直 上	弥生土器 裏	器高 : △18.8 底径 : △3.0	外面 ハケメ後ミガキ 内面 ケズリ後ナデ	密	良好	内外面 : 灰白色	外面スス付着			
446 2032 SK60 横出	弥生土器 底部	器高 : △5.4 底径 : 3.6	外面 ハケメ後ミガキ 内面 ケズリ	ふつう	ふつう	外面 : 黒色 内面 : 灰白色	外面スス付着			
447 2032 SK60 横出	弥生土器 蓋	器高 : △5.5 底径 : △1.9	外面 脊柱部ミガキナデ 瓢部コナデ 内面 脊柱部ミヅリ 脊部コナデ	密	良好	内外面 : 淡黄褐色				
448 1937 SK61 第143回	弥生土器 裏	口径 : 20.0 器高 : △7.6	外面 口縁部2条の腹凹線 内面 口縁部コナデ 瓢部ミガキ	密	良好	内外面 : 褐色				
449 1918 SK61 1層	弥生土器 裏	口径 : 9.0 底径 : 7.8	外面 口縁部コナデ 肩部ミガキ 瓢部下半ミガ 内面 口縁部コナデ 脊柱2側の両面穿孔 ケズリ	ふつう	やや 良好	内外面 : にぶい黄褐色				
450 1995 SK61 5層	弥生土器 裏	口径 : 15.8 器高 : △11.0	外面 口縁部2条の腹凹線 肩部7条の波状文 内面 口縁部コナデ 頸部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面 : 淡黄褐色	外面スス付着			
451 1861 SK61 理土	弥生土器 裏	口径 : 17.2 器高 : △7.2	外面 口縁部6+6条の腹凹線 波状文 腹部7 条以上の波状文 内面 口縁部コナデ 頸部以下ケズリ	密	良好	内外面 : にぶい黄褐色				
452 2008 SK61 底面	弥生土器 裏	口径 : 18.14 底径 : △4.7	外面 口縁部4条の腹凹線 内面 口縁部コナデ ユビオサエ 頸部以下ケ ズリ	ふつう	良好	内外面 : 淡黄褐色	外面スス付着			
453 45 SK61 C3 排水溝	弥生土器 蓋	器高 : 15.5 底径 : 13.6	外面 肩部4条の腹凹線 × 2 + 4重同心円スタンプ 文 内面 受部斜面ミガキ 頸部コナデ	ふつう	ふつう	内外面 : にぶい褐色				
454 1929 SK61 1層	弥生土器 蓋	口径 : 18.16 器高 : △9.1	外面 受部2条の腹凹線 肩部ハケメ 内面 受部ハケメ 脊部ケズリ後ナデ	ふつう	ふつう	外面 : 灰白色 内面 : 淡黄褐色				
455 1652 SK61 第143回	弥生土器 蓋	口径 : 19.8 底径 : 13.6	外面 受部2条の腹凹線 内面 ケズリ	やや 密	良好	外面 : 基褐色 内面 : にぶい褐色				
456 1593 SK61 第143回	弥生土器 蓋	口径 : 18.7 器高 : △8.7	外面 脊柱部3+5条の腹凹線 内面 ケズリ	ふつう	ふつう	内外面 : 灰黃色				
457 1593 SK61 第143回 PL65-1	弥生土器 高片	口径 : 14.1 底径 : 18.18	外面 受部2条の腹凹線 内面 脊柱部ナデ 脊柱シザル ケズリ	やや 密	良好	外面 : 淡褐色 内面 : 褐色	外面胴部下部と 内面底部スス付着			
458 1527 SK61 第143回	弥生土器 高片	口径 : 23.0 器高 : △8.8	外面 口縁部コナデ 脊部ミガキ、ハケメ後コ ナデ 内面 ミガキ後ナデ	密	良好	外面 : 褐色 内面 : にぶい褐色				
459 1850 SK61 第143回 PL65-1	弥生土器 裏	口径 : 23.8	外面 C字スタンプ文 × 2 内面 ハケミガキ	ふつう	ふつう	内外面 : 法橙色	内面スス付着			

表36 土器・土製品観察表(18)

遺物 番号	取上 番号	遺構 部位名	埋 P.L.	種類 器種	法量(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		備考
									外面	内面	
460 1923	SK61 1層	第143回 PL70-1	弥生土器 底部	直径 4.0 高径 2.8	外面: ナデ 尾部焼成剝り×印繩割 内面: ナデ	ふつう	ふつう	外面: 反青褐色 内面: 桃灰色			
461 1551	SK61	第143回 PL76-3	土玉	直径 3.6 高径 4.1	外面: ナデ 尾部焼成剝り×印繩割 内面: ナデ	ふつう	ふつう	灰青褐色			
462 2034	SK63	第144回 PL65-2	弥生土器 底	直径 22.4 高径 4.5	外面: 口縁部ヨコナデ 脇部上半ミガキ下半主力 内面: 口縁部ヨコナデ 脇部上部ケズり下半ナデ	密	良好	外外面: 灰色			
463 2161	SK64	第144回	弥生土器 腹	口径 18.0 高径 5.8	外面: 口縁部7条の縦凹線 脇部1条の凹線+具 内面: 口縁部ヨコナデ 脇部以下ケズり後ナデ	密	良好	外外面: 反青褐色 外面部縁部と 内面部ス付着			
464 2162	SK65	第144回	弥生土器 腹	口径 18.8 高径 14.3	外面: 口縁部凹線ナデ消し 脇部波状文様 内面: 口縁部ヨコナデ 脇部以下ケズリ	密	良好	外外面: にぶい増色 内面: にぶい褐色	外外面ス付着		
465 2162	SK65	第144回	弥生土器 縁部	直径 6.5	外面: ナギキ、14条の縦凹線 内面: ナギキ 口縁部ヨコナデ	やや 密	やや 良好	外外面: にぶい増色			
466 2054	SK66	第144回	弥生土器 蓋	口径 25.6 高径 9.4	外面: 受部部上部ナギキ後ナデ 内面: 受部部上部ナギキ後ナデ	密	良好	外外面: にぶい増色			
467 2094	SK66	第144回	弥生土器 高坏	直径 11.6 高径 7.0	外面: 頸柱部以下ナデ 尾部ヨコナデ 内面: 頸柱部ナギキ	ふつう	ふつう	外外面: にぶい増色 内外面下部ス付着			
468 2054	SK66	第144回	弥生土器 蓋	口径 13.9 高径 9.4	外面: 口縁部9条の縦凹線 脇部負担腹縁押引 内面: 文X2+具縫合剥離突起 口縁部ヨコナデ 脇部以下ケズリ	やや 密	良好	外外面: 浅黄褐色 内面: 黑褐色	外外面ス付着		
469 2140	SK70	第144回	弥生土器 腹	口径 10.4 高径 5.0	外面: ハナケ、つまみヨコナデ 内面: ヨコナデ 口縁部ヨコナデ	密	良好	外外面: にぶい黄褐色 内面: にぶい増色	内下面下部ス付着 口縁部内外赤色 塗彩		
470 2151	SK71	第144回	弥生土器 腹	口径 18.3 高径 6.1	外面: 口縁部17条の縦凹線 内面: 口縁部ヨコナデ 脇部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外外面: 波裡色	外外面ス付着		
471 2501	SK74	第144回	弥生土器 腹	口径 13.7 高径 15.5	外面: 口縁部ヨコナデ 内面: 口縁部ヨコナデ 解剖して真倣ナデ消し 口縁部ヨコナデ 尾部タキナ	ふつう	良好	外外面: 反白色 口縁部打ち欠き			
472 2562	SK75	第144回 PL65-3	弥生土器 腹	口径 12.8 高径 25.0	外面: ナギキ 内面: ヨコナデ	密	やや 良好	外外面: 増色 内面: 黑褐色			
473 2651	SK75	第144回 PL65-3	弥生土器 高坏	口径 24.2	外面: ナギキ	ふつう	良好	外外面: 浅黄褐色	外外面下部と 脚柱間に赤色塗彩		
474 2640	SK83	第145回	弥生土器 腹	口径 18.6 高径 7.6	外面: 口縁部16条の縦凹線 脇部波状文 内面: 口縁部ヨコナデ 脇部以下ケズリ	やや 密	良好	外外面: にぶい黄褐色 内面: 浅黄色	外外面ス付着		
475 2630	SK83	第145回	弥生土器 口縁	口径 16.2 高径 5.6	外面: 口縁部21条の縦凹線 内面: 口縁部ヨコナデ 脇部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外外面: にぶい黄褐色	外外面ス付着		
476 2606	SK83	第145回	弥生土器 腹	口径 14.8 高径 5.1	外面: 口縁部21条の縦凹線 内面: 口縁部ヨコナデ 脇部以下ケズリ	やや 密	ふつう	外外面: 浅黄褐色 内面: 反白色			
477 2609	SK83	第145回 PL65-4	弥生土器 腹	口径 15.0 高径 9.8	外面: 口縁部21条の縦凹線 内面: 口縁部ヨコナデ 脇部以下ケズリ	ふつう	良好	外外面: にぶい黄褐色 内面: 反白色	外外面ス付着		
478 2815	SK83	第145回 PL65-4	弥生土器 口縫	口径 13.0 高径 2.3	外面: 口縁部7条の縦凹線 脇部波状文 内面: ヨコナデ 脇部以下ケズリ ハナケ ヨコナデ 脇部以下ケズリ	密	良好	外外面: 反白色			
479 2755	SK86	第145回 PL70-1	弥生土器 腹	口径 16.4 高径 12.4	外面: 口縁部3条の縦凹線 脇部2~3条の凹線 内面: ヨコナデ 脇部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外外面: にぶい増色			
480 4633	SK192	第145回	弥生土器 底	直径 4.5 高径 5.3	外面: ナギキ つまみヨコナデ 内面: ナデ	密	良好	外外面: 浅黄褐色			
481 4652	SK193	第145回	弥生土器 蓋	直径 6.2 高径 13.8	外面: 脇部ヨコナデ 内面: 脇部ヨビナサエ 脇部ケズリ後ナデ	密	良好	外外面: 反白色			
482 4788	SK196	第145回 PL70-1	弥生土器 底	口径 12.8 高径 15.5	外面: 口縁部15条の縦凹線 脇部ナギキナデ 内面: ヨコナデ 脇部ケズリ後ナデ	ふつう	ふつう	外外面: 浅黄褐色			
483 4847	SK196	第145回	弥生土器 腹	口径 12.1 高径 5.8	外面: 口縁部14条の縦凹線 脇部風化のため 内面: ナデ	ふつう	ふつう	外外面: 増色 内面: 反白色	外外面ス付着		
484 4749	SK196	第145回	弥生土器 高坏	口径 20.4 高径 5.3	外面: 口縁部4条の縦凹線 3コナデ、ハケメ後 ナギキ 内面: ナギキ	密	良好	外外面: 反白色	外外面ス付着		
485 4804	SK196	第145回	弥生土器 腹	口径 11.2 高径 5.7 つまみ径: 4.9	外面: ナギキ つまみヨコナデ 内面: ナギキ つまみナデ	密	良好	外外面: 増色			
486 4814	SK196	第145回	弥生土器 蓋	直径 3.3 つまみ径: 7.3	外面: ヨコナデ 内面: ヨコナデ つまみヨコナデ	密	良好	外外面: 增色			

第3章 発掘調査の成果

表37 土器・土製品観察表(19)

*復元値 △現存値

遺物 番号	出土 場所 番号	頂面 部位名	牌面 PL	種類 器種	口径(cm)	手作上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
4509 4022	H5 V1層 他	第150回 PL68-1	弥生土器 壺	口径：31.8 高さ：47.0 底径：13.6	外面 口縁部26条の凹線縁 腹部4段の3重同心円 円上タスク×1文 斜目安部 腹部3段の3重 同心円タスク×1文 頭部ハメア 腹部以下3ガギ 内面 口縁部ココナテ 頭部ハメア 腹部以下と 底部付近ケズリ	密	良好	内外面：にいわ褐色		
488 4469	J4 VI層	第151回 PL68-2	弥生土器 壺	口径：15.8 高さ：25.5 底径：3.9	外面 口縁部16条の凹線縁 腹部3ガギ 内面 口縁部ココナテ 腹部3ガギ 以下ケズリ	密	良好	内外面：褐色	内面口縁部と肩部赤 色彫影	
489 6058	J3 VI層	第150回 PL68-3	弥生土器 壺	口径：約19.5 高さ：△7.0	外面 口縁部3条の凹線縁 S字状溝浮文 腹部実地に2段の凹線縁 内面 口縁部横状文 頭部チナ	ふつう	ふつう	外面：浅黄褐色 内面：にいわ褐色		
490 1824	D2 VI-2層上面	第150回 PL68-4	弥生土器 壺	口径：△21.3 高さ：△16.0	外面 口縁部凹線 異形足ハメ 下ハケメ 内面 口縁部2条の凹線縁 頭部ハメア 腹部3ガギ	やや 密	やや 良好	内外面：にいわ褐色	下面下部ス付着	
1316 491 1287 1281	B3 VI-1層	第150回 PL68-5	弥生土器 壺	口径：12.4 高さ：△16.0	外面 口縁部ココナテ 3段の凹線縁 内面 口縁部チナテ 頭部ハメア 以下ケズリ	密	良好	内外面：褐色		
492 2096	F3 VI-2層上面	第150回 PL68-6	弥生土器 壺	口径：14.6 高さ：△16.4 底径：△8.6	外面 口縁部チナテ 頭部ハメア 腹部ユビオサエ 内面 口縁部チナテ 頭部ハメア 腹部ユビオサエ 底部ハメア	密	良好	内外面：浅黄褐色		
493 4359	J2-J3 VI層	第150回 PL68-7	弥生土器 壺	口径：12.2 高さ：△12.4	外面 口縁部ココナテ 腹部4段ハケメ 肩部 貝殻腹縫刺実文 一部ガギ 内面 口縁部3ガギ 腹部以下ケズリ後ナデ	密	良好	内外面：明褐灰色	外面ス付着	
494 4476	H6 VI層	第150回	弥生土器 壺	口径：約14.6 高さ：△6.7	外面 口縁部ココナテ 内面 口縁部ココナテ 異形足ユビオサエ後ナコナ 以下ケズリ	ふつう	ふつう	外面口縁部と内面赤 色彫影		
495 1026	G6 VI層上面	第150回	弥生土器 壺	口径：約9.8 高さ：△6.1	外面 口縁部ココナテ 肩部3ガギ 貝殻腹縫刺 突文 内面 口縁部3ガギ 異形足ケズリ後ナデガギ	密	良好	内外面：にいわ褐色		
496 1382	B3 VI-2層上面	第150回	弥生土器 壺	口径：15.5 高さ：△13.8	外面 口縁部ココナテ 腹部ハメア後ナデガギ 内面 口縁部ココナテ 腹部3ガギ 以下ケズリ	密	良好	内外面：にいわ褐色		
497 2059	B4 VI-2層上面	第150回	弥生土器 壺	口径：36.2 高さ：11.4 底径：△2.4	外面 口縁部ココナテ 肩部ユビオサエ 腹部ナ デ 内面 口縁部ナデ 腹部以下ケズリ 底部付近ナ デ	ふつう	ふつう	外面上部ス付着 熱剥離		
498 4597	H10 VI層	第150回 PL68-8	弥生土器 壺	口径：10.4 高さ：10.1 底径：4.6	外面 上半 ユコナナデハメア後ナデガギ 下半 ユコナナデハメア 腹部ケズリ後ナデ 上半ガギナギナギ	密	良好	内外面：灰白色	外面ス付着	
499 2123	G4 VI-2層上面	第150回	弥生土器 壺	口径：10.0 高さ：△6.4	外面 口縁部ココナテ 腹部3ガギ 内面 口縁部ココナテ 腹部以下ケズリ	密	良好	内外面：にいわ褐色		
500 4433 4701 4381	H3-J4-J3 VI層	第150回 PL68-9	弥生土器 壺	口径：△8.0	外面 口縁部1段の凹線縁 3段貝殻腹縫刺文×2 内面 ケズリナデ	ふつう	ふつう	外面：明褐褐色 内面：にいわ褐色	外面赤色彫影	
501 4659	K4 VI層	第150回 PL70-2	弥生土器 台付壺	口径：△7.8	外面 肩部部4条の凹線縁 腹部3ガギナデ 内面 ケズリナデ	ふつう	ふつう	外面上部ス付着 赤色彫影		
502 1351	B5 VI-1層	第150回 PL68-9	弥生土器 壺	口径：△6.6	外面 貼付突宍×4+腹縫文×2+字状溝浮文 内面 部ナデ	ふつう	ふつう	外面上部ス付着 赤色彫影 明赤色 内面：黄灰色	外面赤色彫影	
503 6571	L11 VI層	第151回	土師器 壺	口径：11.8 高さ：17.1	外面 口縁部ココナテ 肩部ユビオサエ 内面 口縁部ココナテ 腹部以下ケズリ後ナデ	ふつう	ふつう	外面上部ス付着 赤色彫影		
504 4494	H6 VI層	第152回 PL67-1	弥生土器 壺	口径：24.8 高さ：39.1 底径：7.0	外面 口縁部4条の凹線縁 腹部ハメア 内面 部ナデ	密	良好	外面上部ス付着 内面：褐色		
505 1348	D6 VI-1層	第152回 PL67-2	弥生土器 壺	口径：19.4 高さ：29.7 底径：3.4	外面 口縁部3条の凹線縁 腹部ハメア後ナデガギ 内面 部ナデ	密	良好	外面上部ス付着 内面：浅黄褐色		
506 1345	B5 VI-2層上面	第152回 PL67-3	弥生土器 壺	口径：20.8 高さ：26.1 底径：3.4	外面 口縁部11条の凹線縁 一部消し 内面 ハメア	密	良好	外面上部ス付着 内面：浅黄褐色		
507 1301 1358	C4 VI-2層上面	第152回	弥生土器 壺	口径：17.8 高さ：24.6 底径：△3.7	外面 口縁部17条の凹線縁 一部ナデ消し 肩部6 姿の波文文ナデナ ナメシナケズリ 内面 部ナデ	ふつう	ふつう	外面上部ス付着 内面：褐色		
508 1356	B3 VI-2層上面	第152回 PL67-4	弥生土器 壺	口径：16.5 高さ：20.2 底径：△3.0	外面 口縁部16条の凹線縁 腹部上半ハメア 内面 部ナデ	ふつう	ふつう	外面上部ス付着 内面：浅黄褐色		
509 8270	H5 VI層	第152回 PL67-5	弥生土器 壺	口径：17.6 高さ：△18.8	外面 口縁部17条の凹線縁 腹部波文状 内面 部ナデ	ふつう	良好	外面上部ス付着 内面：にいわ褐色		
510 4316	I3 VI層	第152回 PL67-6	弥生土器 壺	口径：16.8 高さ：△17.9	外面 口縁部16条の凹線縁 腹部 内面 部ナデ	ふつう	ふつう	外面上部ス付着 内面：褐色 内面：褐灰色	外面上部ス付着	
511 2325	E5 VI-2層上面	第152回	弥生土器 壺	口径：約18.0	外面 口縁部16条の凹線縁 腹部ハメア 内面 部ナデ	ふつう	ふつう	外面上部ス付着 内面：にいわ褐色		
512 2337	C5 VI層	第153回	弥生土器 壺	口径：21.0 高さ：△11.5	外面 口縁部16条の凹線縁 腹部ハメア後ナデ 内面 部ナデ	ふつう	ふつう	外面上部ス付着 内面：褐色		
513 1320	D6 VI-1層	第153回	弥生土器 壺	口径：36.2 高さ：△4.7	外面 口縁部16条の凹線縁 腹部 内面 部ナデ	密	良好	外面上部ス付着 内面：にいわ褐色		

表38 土器・土製品観察表(20)

※復元値 △既存値

遺物 番号	取上 用位 番号	遺種 用位名	埋因 PL	種類 器種	法量(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
S14 4714	H4 VI層	弥生土器 甕	第153回	弥生土器 甕	口径△15.5 器高△5.8	外面部縫合部3条の瘤凹線 脣部ハケメ 内面部縫合部3コマズ 縫部以下ケズリ	密	良好	内外面: 淡黄褐色	
S15 4639	J6 VI層	弥生土器 甕	第153回	弥生土器 甕	口径△16.8 器高△4.0	外面部縫合部4条の瘤凹線 脣部以下ケズリ 内面部縫合部3コマズ 縫部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面: にぶい褐色	外表面ス付着
S16 2090	G3 VI-2層上面	弥生土器 甕	第153回	弥生土器 甕	口径△34.0 器高△22.9	外面部縫合部15条の瘤凹線 脣部波状文 腹部 ハケメ後ハチキ 内面部縫合部3コマズ 縫部ハハメ、以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面: 淡黄褐色	
S17 1828	F4 VI-1層	弥生土器 甕	第153回	弥生土器 甕	口径△33.0 器高△9.7	外面部縫合部22条の瘤凹線 脣部貝殻腹縫押引 内面部縫合部3コマズ 縫部ハハメ、以下ケズリ	密	良好	内外面: にぶい黄褐色、 内面: 反黄褐色	
S18 1909	G4 VI-1層	弥生土器 甕	第153回	弥生土器 甕	口径△19.0 器高△14.5	外面部縫合部10条の瘤凹線 脣部波状文 腹部 ハケメ 内面部縫合部3コマズ 縫部以下ケズリ	密	良好	内外面: にぶい褐色	
S19 1910	G3 VI-1層	弥生土器 甕	第153回	弥生土器 甕	口径△17.8 器高△14.9	外面部縫合部10条の瘤凹線 脣部波状文 腹部 ハケメ 内面部縫合部3コマズ 縫部以下ケズリ	ふつう	やや 良好	内外面: 橙色 内面: 橙色～にぶい褐色	
S20 4840	J7 VI層	弥生土器 甕	第153回	弥生土器 甕	口径△15.3 器高△15.7	外面部縫合部5+2条の瘤凹線ナ子消し 脣部ハ ケメ 内面部縫合部3コマズ 縫部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面: 反白色	外表面ス付着
S21 2373	E5 VI-2層上面	弥生土器 甕	第153回	弥生土器 甕	口径△2.0 器高△6.9	外面部縫合部15条の瘤凹線ナ子消し 脣部2条の 凹線 脣部波状腹縫押引 内面部縫合部3コマズ 縫部以下ケズリ	ふつう	良好	内外面: にぶい淡褐色	
S22 1831	G4 VI-1層	弥生土器 甕	第153回	弥生土器 甕	口径△17.4 器高△8.6	外面部縫合部10条の瘤凹線 脣部貝殻腹縫突尖 内面部縫合部3コマズ 縫部以下ケズリ	密	良好	外面: 波状褐色～に ぶい淡褐色 内面: 反黄色～墨色	外表面縫部 ス付着
S23 314	B5 VI層上面	弥生土器 甕	第153回	弥生土器 甕	口径△16.2 器高△8.6	外面部縫合部12条の瘤凹線 脣部貝殻腹縫によ る波状文+波状文 内面部縫合部3コマズ 縫部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外面: 淡褐褐色 内面: 反黄色	
S24 4460	H5 VI層	弥生土器 甕	第153回	弥生土器 甕	口径△18.6 器高△9.7	外面部縫合部6条以上の瘤凹線 脣部ハハメ+4 条の波状文 内面部縫合部3コマズ 縫部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面: にぶい黃褐色	外表面ス付着
S25 1334	B5 VI-1層	弥生土器 甕	第153回	弥生土器 甕	口径△15.8 器高△10.2	外面部縫合部5条以上の瘤凹線 脣部貝殻腹縫 による続縫文△×2.5 内面部縫合部3コマズ 縫部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外面: 反黃褐色 内面: 淡褐色	内面肩部ス付着
S26 1382	B3 VI-2層上面	弥生土器 甕	第153回	弥生土器 甕	口径△18.0 器高△8.5	外面部縫合部23条の瘤凹線 脣部ハハメ 内面部縫合部3コマズ 縫部以下ケズリ	やや 密	良好	外面: にぶい褐色 内面: 反黄色	内面肩部ス付着
S27 1909	G4 VI-1層	弥生土器 甕	第153回	弥生土器 甕	口径△16.4 器高△9.5	外面部縫合部8+4条の瘤凹線 脣部14条の波状 文 腹部ハハメ 内面部縫合部3コマズ 縫部以下ケズリ	密	良好	外面: にぶい黃褐色 内面: にぶい黄褐色～ 反白色	外面一部ス付着
S28 1411	E4 VI-2層上面	弥生土器 甕	第153回	弥生土器 甕	口径△14.6 器高△11.8	外面部縫合部14条の瘤凹線 脣部波状文 内面部ナデ縫縫引テケズリ	ふつう	ふつう	内外面: 褐色	
S29 1789	F6 VI-1層	弥生土器 甕	第153回	弥生土器 甕	口径△18.1 器高△6.0	外面部縫合部14条の瘤凹線 脣部ハハメ 内面部コマズ 縫部以下ケズリ	ふつう	やや 良好	外面: にぶい黄褐色 内面: にぶい黄褐色	外表面ス付着
S30 3801	J3 VI層	弥生土器 甕	第153回 PL67-7	弥生土器 甕	口径△12.8 器高△12.7	外面部縫合部8条の瘤凹線 脣部ハギ後ナデ 内面部ナデ縫引テケズリ	ふつう	良好	内外面: 明褐反色	外表面ス付着
S31 3118	I4 VI層	土師器 甕	第154回 PL67-8	土師器 甕	口径△24.0 器高△20.7	外面部縫合部3コマズ 腹部ハハメ 内面部3コマズ+ハハメ 縫部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面: 褐色	耕作による混入か
S32 4347	J3 VI層	弥生土器 甕	第154回 PL67-8	弥生土器 甕	口径△14.1 器高△20.6	外面部縫合部ハケメ 内面部3コマズ 縫部以下ハハメ後ナデ	密	良好	内外面: 褐色	
S33 1913	F3 VI-1層	弥生土器 甕	第154回	弥生土器 甕	口径△16.3 器高△6.4	外面部縫合部3コマズ 腹部ハハメ 内面部3コマズ 縫部ケズリ後コナダ 以 下ケズリ	密	良好	外面: にぶい褐色 内面: 反白色	外表面ス付着
S34 1812	G3 VI-1層	弥生土器 甕	第154回	弥生土器 甕	口径△16.4 器高△20.5	外面部縫合部3コマズ 腹部ハハメ 内面部3コマズ 縫部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外面: 淡黄褐色 内面: 反白色	外下面部ス付着
S35 1371	C4 VI-2層上面	弥生土器 甕	第154回 PL67-10	弥生土器 甕	口径△16.8 器高△11.3	外面部縫合部3コマズ 腹部ハハメ 内面部3コマズ 縫部以下ケズリ	密	良好	内外面: にぶい黃褐色	外表面ス付着
S36 1370	C5 VI-1層	弥生土器 甕	第154回	弥生土器 甕	口径△13.8 器高△6.4	外面部ナデ縫縫引テケズリハハメ 内面部3コマズ 縫部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面: にぶい褐色	
S37 6058	J3 VI層	弥生土器 甕	第154回	弥生土器 甕	口径△11.8 器高△6.4	外面部ハケメ、丸目 内面部縫合部3コマズ 縫部以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面: 淡黄褐色	外表面ス付着
S38 1823	F4 VI-1層	弥生土器 甕	第154回	弥生土器 甕	口径△14.4 器高△22.4	外面部縫合部3コマズ 腹部ハハメ後ナデ 内面部3コマズ 縫部以下ケズリ	密	ふつう	外面: 反黃褐色 内面: 波状褐色	外表面ス付着
S39 1376	E4 VI-1層	弥生土器 甕	第154回	弥生土器 甕	口径△30.2 器高△9.2	外面部縫合部3コマズ 腹部ハギ後ナデ 内面部3コマズ 縫部以下ケズリ	ふつう	良好	外面: 波状褐色 内面: 反黃褐色	
S40 4468	H7 VI層	弥生土器 甕	第154回	弥生土器 甕	口径△22.4 器高△8.0	外面部縫合部3コマズ 腹部ハハメ後ミガキ 内面部3コマズ 縫部以下ケズリ	やや 密	やや 良好	外面: 淡黄褐色 内面: にぶい褐色	外表面ス付着

表39 土器・土製品観察表(21)

造物番号	出土位置番号	測定PL	種類 器種	法蓋(cm)	手作上の特徴	胎土	焼成	色調	※復元値・既存値	
									外面	内面
541 2330	C4 VI-2層上面	第154回 PL70-3	弥生土器 甕	口径：16.2 器高：△8.7	ヨココナ 口縁部ヨコナ 腹部以下ケズリ	密	良好	内外面：明赤褐色	外腹ス付着	
542 4536 4005	H9 V1層	第154回 PL67-11	弥生土器 甕	口径：△19.2 器高：△22.4	外面：10㌢以上の瓶凹縁 3段の凹縁×4+横付 貝殻模様文+2段と1段の二つ巴+2段の 渦文スラッシュ 内面：ヨコナ フタ部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外腹：浅黄褐色 内面：△6.4 黄褐色		
543 2093	D3 VI-2層上面	第154回 PL67-11	弥生土器 甕	口径：14.4 器高：△7.9	外面：ヨココナ 口縁部ヨコナ 腹部以下ケズリ	密	良好	内外面：浅黄褐色		
544 2096	F3 VI-2層上面	第154回 PL70-3	弥生土器 甕	口径：12.6 器高：△11.5	外面：ヨココナ 15㌢の瓶凹縁 瓶部凹縁3条×2+ 5条×2+貝殻模様文+4重同心円スタン プ文×2 内面：ヨココナ	ふつう	ふつう	内外面：にじみ 内面：△1.5	外腹と内面下部 ス付着	
545 4196	H2 VI層	第154回 PL70-3	弥生土器 甕	口径：5.4	外面：ヨココナ 3条の瓶凹縁 瓶部凹縁3条×2+ 5条×2+貝殻模様文+4重同心円スタン プ文×2 内面：ヨココナ	ふつう	ふつう	内外面：褐色	外腹ス付着	
546 1374	E2 VI-1層	第154回 PL67-12	弥生土器 甕	口径：△10.0	外面：ヨココナ 3条の瓶凹縁 3+2+1×1+横付貝殻模 様文+2+2+2の瓶凹縁 小貝殻模様文+4重同心円スタン プ文×2 内面：ヨココナ	ふつう	ふつう	内外面：浅黄褐色 内面：△0.5	外腹ス付着 外腹側上半赤色 墨彩	
547 4197	H3 VI層	第154回 PL70-3	弥生土器 甕	口径：△8.2	外面：ヨココナ 3条の瓶凹縁 3+2+1×1+横付貝殻模支文+ 2段の2重同心円スタンプ文 内面：ケズリ 下部ナデ	ふつう	ふつう	内外面：浅黄褐色	外腹ス付着	
548 4230	J3 VI層	第154回 PL70-3	弥生土器 甕?	口径：△6.0	外面：3条の凹縁×2+貝殻模様文×2+バスタ ンプ文 内面：ナデ	ふつう	ふつう	外腹：明灰褐色 内面：灰色		
549 1825	D3 VI-2層上面	第154回 PL67-12	弥生土器 甕	口径：14.4 器高：△12.2 底径：△0	外面：ヨココナ 15㌢の瓶凹縁 瓶部3条の凹縁 2+4重同心輪貝殻模様文+貝殻模様文 瓶部ハメ像 ミガキ 内面：ヨココナ フタ部山下ケズリ 底部ナデ	ふつう	やや 良好	外腹：浅黄褐色 内面：明褐色	外腹上面半 ス付着	
550 2288	B4 VI-2層上面	第155回 PL88-1	弥生土器 高杯	口径：22.2 器高：△10.3	外面：ミガキ 口縁部ナデ 内面：ヨココナ 腹部ケズリ	密	良好	外腹：浅黄褐色 内面：棕色	内面被熱剝離	
551 3480	H VI層	第155回	弥生土器 高杯	口径：△18.0	外面：ヨココナ ヨココナ フタ部ミガキ、ケズリ 柱部ミガキ 内面：ヨココナ 柱部ハメ像 柱部上部ミガキ下部ナデ 柱部ケズリ 柱部ハメ像	ふつう	ふつう	内外面：浅黄褐色	外腹柱部と内面坏 部上部赤色墨彩	
552 1400	F3 VI-1層	第155回	弥生土器 高杯	口径：982.5 器高：△6.8	外面：ヨココナ 3条の瓶凹縁 瓶部3ガキ後ナデ 内面：ヨココナ	密	良好	内外面：浅黄褐色		
553 4698	H4 VI層	第155回	弥生土器 高杯	口径：△22.2 器高：△6.6	外面：ミガキ 口縁部ヨコナデ 内面：ヨココナ ミガキ後ナデ	ふつう	やや 良好	内外面：褐色		
554 4440	H3 VI層	第155回	弥生土器 高杯	口径：△28.5 器高：△7.3	外面：ミガキ 内面：ミガキ 柱部ナデ	ふつう	良好	外腹：灰白色 内面：浅黄褐色		
555 4238	J3 VI層	第155回	弥生土器 高杯	口径：△26.0 器高：△6.0	外面：ヨココナ 内面：ヨココナ 柱部ナデ 柱部ケズリ 柱部ハメ像	ふつう	ふつう	外腹：灰白色 内面：浅黄褐色		
556 4313	H3 VI層	第155回	弥生土器 高杯	口径：19.8 器高：△8.8	外面：ヨココナ 3ガキ後ナデ 内面：ヨココナ	やや 密	良好	内外面：灰白色		
557 4381	H3 VI層	第155回	弥生土器 高杯	口径：△18.2	外面：ナデ 内面：ヨココナ フタ部ナデ	ふつう	ふつう	内外面：灰白色		
558 1823	F4 VI-1層	第155回	弥生土器 高杯	口径：△23.8 器高：△7.9	外面：2条の瓶凹縁(貝殻模様押引)、ミガキ後 ナデ 内面：ヨココナ フタ部ナデ	密	良好	内外面：褐色	器台の可能性あり	
559 4442	J6 VI層	第155回	弥生土器 高杯	口径：△22.8 器高：△5.5	外面：ヨココナ 内面：ヨココナ フタ部ナデ 柱部ナデ	ふつう	ふつう	内外面：灰白色	坪部赤色墨彩	
560 3944	H7 南北ヤマブレ V～VI層	第155回	弥生土器 高杯	口径：△11.5 器高：△6.0	外面：ミガキ 腹部ヨコナデ 内面：ヨココナ フタ部ケズリ	ふつう	良好	外腹：にじみ 内面：浅黄褐色		
561 4499	H7 VI層	第155回	弥生土器 高杯	口径：△11.7 器高：△5.0	外面：ミガキ 腹部ヨコナデ 内面：ヨココナ フタ部ケズリ 柱部ハメ像	ふつう	ふつう	外腹：浅黄褐色 内面：棕色		
562 2089	D5 VI-2層上面	第155回	弥生土器 高杯	口径：△8.5 器高：△5.0	外面：ハメ像ナデ 内面：ケズリ	ふつう	ふつう	外腹：浅黄褐色 内面：灰白色	外腹赤色墨彩	
563 1345	E2 VI-1層	第155回	弥生土器 高杯	口径：△11.5 器高：△6.0	外腹：風化のため不明 内面：ケズリ 腹部ミガキ	ふつう	やや 不良	内外面：浅黄褐色		
564 8268	H6 VI層	第155回	弥生土器 高杯	口径：△7.8 器高：△3.3	外面：ヨココナ 斜部2段ミガキ 内面：ヨココナ ヨココナ フタ部ケズリ	ふつう	ふつう	内外面：にじみ 内面：棕色		
565 2126	D4 VI-2層上面	第155回	弥生土器 高杯	口径：△7.3 器高：△1.0	外面：ナデ 内面：ヨココナ フタ部ケズリ	ふつう	ふつう	内外面：浅黄褐色		
566 1210	D5 VI層上面	第155回 PL68-2	弥生土器 高杯	口径：9.2 器高：△8.2	外腹：貝殻模様文の瓶凹縁 内面：ヨココナ フタ部ナデ 柱部ミガキ 柱部ヨコナデ 柱部ケズリ	ふつう	ふつう	外腹：にじみ 内面：棕色		
5725	J4 VI層	第155回 6038	弥生土器 高杯	口径：△9.0 器高：△10.2	外腹：斜部2段ミガキ 内面：ヨココナ フタ部ナデ 柱部状工具によるかき出し 柱部ヨコナデ	やや 密	良好	外腹：明褐色 内面：にじみ 棕色		

表40 土器・土製品観察表(22)

※復元値 △既存値

器物 番号	取上 番号	地層 層位名	埋蔵 PL	種類 器種	法量(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
568	4434	H2・I3	第155回 PL70-2	弥生土器 高環	口径△8.2 器高△9.6	外側△3方円削出し 内側△环部ミガキ、脚柱シボリ	密	良好	内外面: 棕色	
	4420	VI層				环部ミガキ、脚柱シボリ				
569	1412	E4	第156回 PL68-3	弥生土器 器台	口径△21.7 器高△16.3	外側△21.7 内側△20.4 受部△3条の握凹線、脚柱部ミガキ	やや 密	ふつう	内外面: 棕色	内外面受部 スス付着
	VI-2層上面					受部ミガキコロ				
570	4464	H8	第156回 VI層	弥生土器 器台	口径△22.6 器高△8.3	外側△22.6 内側△8.3 受部△3条の握凹線、脚柱部ミガキ後△ナ	ふつう	ふつう	内外面: 淡黄褐色	
						ミガキ後△ナ				
571	1809	E3	第156回 VI-1層	弥生土器 器台	口径△18.7 器高△8.5	外側△18.7 内側△8.5 受部△3条の握凹線、脚柱部ミガキ後△ナ	密	良好	外面: △に△黄褐色 内面: 棕色	
						ミガキ後△ナ				
572	2156	E2	第156回 VI-2層上面	弥生土器 器台	口径△20.4 器高△8.4	外側△20.4 内側△8.4 受部△3条の握凹線、脚柱部ナ	ふつう	ふつう	外面: △に△黄褐色 内面: △に△棕色	外面スス付着
						ミガキナ				
573	4462	I3	第156回 VI層	弥生土器 器台	口径△20.2 器高△7.5	外側△20.2 内側△7.5 受部△3条の握凹線、脚柱部△の握凹	やや 粗	ふつう	内外面: 棕色	
						ミガキコロ				
574	1283	B5・B6	第156回 VI-1層	弥生土器 器台	口径△18.2 器高△9.4	外側△18.2 内側△9.4 受部△3条の握凹線、脚柱部△+3条の凹線 +刻文△ナ	やや 密	良好	外面: △に△棕色 内面: △に△黄褐色	
	1284	VI-1層				ミガキナ				
575	4474	H4	第156回 VI層	弥生土器 器台	口径△7.3 器高△7.3	外側△7.3 内側△7.3 受部△3以上の握凹線、脚柱部貝殻腹縫に による縦挫文	ふつう	やや 不良	内外面: 淡黄褐色	内外面スス付着
						化したため不明				
576	2136	G3	第156回 VI-2層上面	弥生土器 器台	口径△9.8 器高△19.8	外側△9.8 内側△19.8 脚柱部△+4条の凹線、脚柱部△の握凹線 +刻文△ナ	ふつう	良好	内外面: △に△褐色	
						ミガキナ				
577	1828	F4	第156回 VI-1層	弥生土器 器台	口径△6.5 器高△14.8	外側△6.5 内側△14.8 脚柱部△+4条の握凹線、脚柱部△	やや 密	良好	外面: 淡黄褐色 内面: △に△黄褐色	外面スス付着
						ミガキナ				
578	4474	H4	第156回 VI層	弥生土器 器台	口径△4.5 器高△11.6	外側△4.5 内側△11.6 脚柱部△ナ	ふつう	ふつう	内外面: △に△褐色	
						ミガキコロ				
579	5277	H5	第156回 VI層	弥生土器 器台	口径△15.0 器高△11.3 底径△13.0	外側△15.0 内側△11.3 受部△3条の握凹線、脚柱部以下△方キ ミガキ後△ナ	ふつう	良好	内外面: 棕色	内外面スス付着 脚部外壁に粘斑風の 痕跡削除剤
						ミガキナ				
580	1318	D3	第156回 VI-1層	弥生土器 器台	口径△18.6 器高△8.0	外側△18.6 内側△8.0 脚柱部コロ△、受部△4条の凹線 +刻文△ナ	ふつう	良好	内外面: 淡褐色	
	581	J3	第156回 VI層	弥生土器 器台	口径△5.9 器高△5.9	外側△5.9 内側△5.9 受部△ナ	密	良好	内外面: 淡黄褐色	
582	4694	J6	第156回 VI層	弥生土器 器台	口径△11.6 器高△13.8 底径△16.4	外側△11.6 内側△13.8 受部△3条の握凹線、脚柱部△+3条の凹線 +刻文△ナ	ふつう	ふつう	内外面: 白灰色	
						ミガキナ				
583	1375	E3	第156回 VI-1層	弥生土器 器台	口径△10.8 器高△10.8 底径△13.0	外側△10.8 内側△10.8 受部△コナデ△ビオサエ 脚柱部△ビオサエ 脚部ケ	密	やや 良好	外面: △に△褐色 内面: 棕色	
						ミガキナ				
584	1908	G5	第156回 VI-1層	弥生土器 器台	口径△20.5 器高△8.0	外側△20.5 内側△8.0 受部△コナデ△ミガキ後△コナデ	密	良好	外面: 淡黄褐色 内面: △に△褐色	外面乗せていた土 器からの吹きこぼれ 灰
						ミガキナ				
585	5907	J4	第156回 VI層	弥生土器 器台	口径△17.2 器高△5.2	外側△17.2 内側△5.2 受部△コナデ	密	良好	内外面: △に△褐色	外面面スス付着
						ミガキナ				
586	1827	F4	第156回 VI-1層	弥生土器 器台	口径△8.7 器高△8.7 底径△15.4	外側△8.7 内側△8.7 受部△コナデ△ビオサエ 脚柱部△コナデ△ 5方円 形透かし 内側△	密	良好	外面: 淡褐色 内面: 淡黄褐色	外面面口縫部 スス付着
						ミガキナ				
587	5725	J3・J4	第156回 VI層	弥生土器 器台	口径△7.2 器高△7.2 底径△17.8	外側△7.2 内側△7.2 受部△ミガキ後△ナ	密	良好	内外面: 淡褐色	
	587	J2	第156回 5906	弥生土器 器台	口径△14.4 器高△9.1	外側△14.4 内側△9.1 受部△コナデ△ミガキ後△ナ	やや 粗	ふつう	内外面: 淡黄褐色	
						ミガキナ				
588	1905	F5	第156回 VI-2層上面	弥生土器 器台	口径△23.8 器高△9.1	外側△23.8 内側△9.1 受部△コナデ△ミガキ後△ナ	やや 粗	ふつう	内外面: 淡黄褐色	外面受部赤色 墨环的可能性有
						ミガキナ				
589	1364	B3	第156回 VI-1層	弥生土器 器台	口径△30.6 器高△32.2	外側△30.6 内側△32.2 口縫△3条の握凹線 内側△3条の握凹線 以下ナデ	ふつう	ふつう	内外面: 棕色	
						ミガキナ				
590	4434	I3	第157回 VI層	弥生土器 器台	口径△16.8 器高△16.8 底径△15.2	外側△24.0 内側△16.8 受部△ミガキ後△ナ	やや 密	やや 良好	内外面: 淡白色 内面: 赤色墨彩	外面受部下半 赤色墨彩
						ミガキナ				
591	1791	E4	第157回 VI-1層	弥生土器 器台	口径△24.7 器高△8.5	外側△24.7 内側△8.5 受部△コナデ△段部△+3条の凹線+3重同心 口スラング文	ふつう	ふつう	外面: 淡白色 内面: △に△褐色	
	1376					ミガキナ				
592	4364	I3	第157回 VI層	弥生土器 器台	口径△23.8 器高△7.5	外側△23.8 内側△7.5 受部△ミガキ後△ナ	やや 密	やや 良好	内外面: 淡黄褐色	内外面口縫部 スス付着
						ミガキナ				
593	4477	J4	第157回 PL66-6	弥生土器 器台	口径△14.1 器高△14.1 底径△17.3	外側△14.1 内側△14.1 受部△ミガキ後△ナ	やや 密	やや 良好	外面: 淡白色 内面: 淡黄褐色	
						ミガキナ				
594	1027	Q6	第157回 VI層上面	弥生土器 器台	口径△9.0 器高△9.0	外側△9.0 内側△9.0 受部△ミガキ後△ナ	やや 密	やや 良好	内外面: △に△褐色	
						ミガキナ				

第3章 発掘調査の成果

表41 土器・土製品観察表(23)

*復元値 現存値

遺物 名前 番号	出土 場所 番号	通称 部位名	測定 PL _{cm}	種類 器種	法量(cm)	手作上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
595 1787	D4 VI-2層上面	弥生土器 墓台	第157回	口径 : 20.5 底高 : △10.6	外面 ヨコナデ 段部2条の凹線×2+3重同心 円スタンプ文 銘柱部2条の凹線 内面 ヨコナデ	ふつう	ふつう	外面 : 斜白色 内面 : 淡黄褐色		
596 4464	H6 VI層	弥生土器 墓台	第157回	基盤 : △8.2 底径 : □16.5	外面 銘柱部2ガキ 銘部ヨコナデ 段部4+5条の凹線×2+3重同心円スタンプ文 内面 ハケメ	ふつう	ふつう	外面 : 淡黄褐色 内面 : 斜白色		
597 317	B5 VI層上面	弥生土器 墓台	第157回	基盤 : △8.8 底径 : □14.8	外面 ヨコナデ 段部2+3条の凹線×2+3重同心 円スタンプ文 内面 銘柱部ヨコナデ 銘部ケズリ	ふつう	ふつう	外面 : 淡黄褐色		
598 1336	D4 VI-1層	弥生土器 墓台	第157回 PL67-7	基盤 : △5.4 底径 : □17.1	外面 銘柱部2ガキ 銘部ヨコナデ 段部3条の凹線×2+4重同心円スタンプ文 内面 ハケメ	ふつう	ふつう	外面 : 斜白色 内面 : △5.1+橙色	内外面ス付着	
599 4312	H3 VI層	弥生土器 墓台	第157回 PL70-3	基盤 : △6.7	外面 銘柱部ヨコナデ 段部2条の凹線×2+5字溝文×2+2文 内面 銘柱部ヨコナデ 銘部ハケメ	ふつう	ふつう	外面 : 淡黄褐色 内面 : △5.1+橙色	内外面ス付着	
600 1375	E3 VI-1層	弥生土器 墓台	第157回 PL70-3	基盤 : △8.2	外面 銘柱部ヨコナデ 銘部連続渋文スタンプ文+1条の凹線×13条の縦目凹線 内面 銘柱部ヨコナデ 銘部ハミガキ	ふつう	ふつう	外面 : △5.1+橙色 内面 : △5.1+橙色		
601 4324	I3 VI層	弥生土器 墓台?	第157回 PL70-2	基盤 : △4.3	外面 製造文 内面 ヨコナデ、ケズリ後ナデ	ふつう	ふつう	外面 : 淡黄褐色	垂の可能性あり	
602 1410	E4 VI-2層上面	弥生土器 墓台	第157回 PL67-1	口径 : □16.0 底高 : 8.0 つまみ径 : □17.4	外面 ナデ つまみヨコナデ 内面 ヨコナデ、ケズリ後ナデ	ふつう	ふつう	外面 : △5.1+橙色 内面 : 斜褐色	外下面部と内面 ス付着	
603 314	B5 VI層上面	弥生土器 墓台	第157回	口径 : □16.0 底高 : 7.2 つまみ径 : 5.8	外内面 : 脱化のため不明	ふつう	ふつう	外面 : △5.1+橙色 内面 : 斜褐色		
604 1417	D5 VI-1層	弥生土器 墓台	第157回 PL67-2	口径 : 12.6 底高 : 6.4 つまみ径 : 5.6	外面 ハケメ つまみヨコナデ 内面 ヨコナデ	ふつう	良好	外内面 : △5.1+橙色		
605 1351	B5 VI-1層	弥生土器 墓台	第157回	口径 : □15.4 底高 : 5.1 つまみ径 : 5.3	外面 ナデ つまみヨコナデ 内面 ナデ つまみナデ、ヨコナデ	密	良好	外内面 : △5.1+橙色	外外面ス付着 内面赤色の付着物	
606 4238	J3 VI層	弥生土器 墓台	第157回 PL67-3	口径 : 15.4 底高 : 6.7 つまみ径 : 6.5	外面 ヨコナデ つまみヨコナデ 内面 ケズリ後ミガキ つまみナデ、ヨコナデ	ふつう	良好	外内面 : 楔灰色		
607 2125	D3 VI-2層上面	弥生土器 墓台	第157回	口径 : □14.6 底高 : 6.2 つまみ径 : 6.4	外面 ナデ つまみヨコナデ 内面 ヨコナデ	ふつう	ふつう	外内面 : △5.1+橙色		
608 1816	G2 VI-1層	弥生土器 墓台	第157回 PL67-4	口径 : 9.5 底高 : 5.8 つまみ径 : 7.3	外面 ミガキ つまみヨコナデ 内面 ミガキ つまみナデ、ヨコナデ	ふつう	良好	外内面 : △5.1+橙色 内面 : 橙色		
609 4475	H5 VI層	弥生土器 墓台	第157回	口径 : □15.8 底高 : 6.1 つまみ径 : 5.9	外面 ミガキ つまみヨコナデ 内面 ミガキ つまみナデ、ヨコナデ	やや 密	ふつう	外内面 : 淡黄褐色	外面部と内面口縁部ス 付着	
610 4246	H VI層	弥生土器 墓台	第157回 PL67-5	口径 : 15.5 底高 : 6.1 つまみ径 : 7.1	外面 ハケメ後ミガキ つまみヨコナデ 内面 ケズリ後ミガキ つまみナデ	密	良好	外内面 : 明褐色		
611 4409	K8 VI層	弥生土器 墓台	第157回 PL67-6	口径 : 12.2 底高 : 6.2 つまみ径 : 6.0	外面 ミガキ 著状の工具痕 つまみヨコナデ 内面 ナデ	ふつう	ふつう	外内面 : △5.1+橙色		
612 4498	H6 VI層	弥生土器 墓台	第157回	口径 : □10.6 底高 : 5.3 つまみ径 : 5.2	外面 : 脱化のため不明 内面 ナデ 口縁部ヨコナデ	やや 密	ふつう	外内面 : 淡黄褐色		
613 1344	D5 VI-1層	弥生土器 墓台	第157回	口径 : 10.1 底高 : 3.6 つまみ径 : 3.8	外内面 : ヨコナデ	やや 密	やや 不良	外内面 : △5.1+橙色		
614 1335	D3 VI-1層	弥生土器 墓台	第157回	口径 : 11.4 底高 : 5.0 つまみ径 : 4.5	外面 ヨコナデ つまみヨコナデ 脱化のため不明	ふつう	ふつう	外内面 : △5.1+橙色		
615 4699	H5 VI層	弥生土器 墓台	第157回 PL67-7	口径 : 10.9 底高 : 4.4 つまみ径 : 4.5	外面 ハケメ 口縁部つまみヨコナデ 内面 ナデ	ふつう	ふつう	外内面 : 岩褐色 内面 : △5.1+橙色	外外面ス付着	
616 1609	E3 VI-1層	弥生土器 墓台	第157回 PL67-8	口径 : □8.2 底高 : 4.6	外面 ヨコナデ 上部ナデ お面から2個一対の 銘柱形成痕跡 内面 ケズリ後ミガキ	密	良好	外内面 : △5.1+橙色	外外面ス付着	
617 4786	H4 VI層	弥生土器 注口部	第158回 PL68-8	口径 : 12.8 底高 : △14.0	外面 口縁部3条の凹線×2 脱部ハケメ 注口部 ハケメ後ミガキ つまみナデ 内面 口縫部ミガキ ハケメ後ミガキ 以下ケズリ 注口ボリ	ふつう	良好	外内面 : △5.1+橙色	外外面ス付着 外面部口縫部、脱部中 央部等赤彩	
618 4410	K8 VI層	弥生土器 注口部	第158回 PL68-9	口径 : 15.6 底高 : □11.2	外面 口縫部2条の凹線×2 脱部ミガキ 口縫部ミガキ つまみナデ	ふつう	ふつう	外内面 : 淡黄褐色 内面 : 斜白色	外外面ス付着	
619 5402	H7 南北セクション VI層	弥生土器 注口部	第158回	口径 : 2.0 長 : 6.6	外面 ヨコナデ 上部ナデ お面から2個一対の 銘柱形成痕跡	ふつう	ふつう	外内面 : 淡黄褐色 内面 : 斜白色	外外面ス付着	
620 4364	I3 VI層	弥生土器 注口部	第158回	口径 : 3.4 長 : 7.0	外面 ヨコナデ 上部ナデ お面から2個一対の 銘柱形成痕跡	やや 粗	やや 不良	外内面 : △5.1+橙色	外内面 : △5.1+橙色	
621 4255	J4 VI層	弥生土器 注口部	第158回	口径 : 14.4 長 : 7.9	外内面 : △5.1+橙色	ふつう	ふつう	外内面 : △5.1+橙色	外内面 : △5.1+橙色	

表42 土器・土製品觀察表(24)

遺物 番号	取上 番号	遺様 部位名	牌印 PL	種類 器種	法量(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
622 4254	J5	VI層	第158回	弥生土器 注口部	口径：2.5 長：5.9		ふつう	ふつう	内外面：にぶい褐色	
623 4945	H6	VI層	第158回	弥生土器 注口部	口径：2.2 長：5.6	外面：ミガキ、ハケメ	やや 粗	やや 粗	内外面：褐色	
624 1915	F3	VI-1層上面	第158回	弥生土器 注口部	口径：2.8 長：5.4	外面：ハケメ	ふつう	ふつう	内外面：褐色	
625 4199	I3	VI層	第158回	弥生土器 注口部	口径：2.6 長：4.9	外面：ハケメ	ふつう	ふつう	内外面：褐色	
626 4599	J7	VI層	第158回	弥生土器 注口部	口径：2.4 長：5.4	外面：ミガキ	ふつう	ふつう	内外面：褐色	
627 4536	H9	VI層	第158回	弥生土器 注口部	口径：2.2 長：5.1		やや 粗	やや 粗	内外面：淡褐色	
628 4197	H3	VI層	第158回	弥生土器 把手	高さ：8.8 把手径：1.7	外面：ミガキ 把手下に3条の凹線 内面：ケズ	ふつう	ふつう	内外面：明褐色	
629 4665	J5	VI層	第158回 PL70-2	弥生土器 把手	奥行：△2.3 幅：△7.5 厚：△8.8	爪形文	ふつう	ふつう	内外面：淡褐色	
630 4665	J5	VI層	第158回 PL70-2	弥生土器 把手	幅：△5.6 奥行：△2.5 厚：△3.3	貝殻腹縫による縫合文	ふつう	ふつう	内外面：明褐色灰色	
631 4465	H8	VI層	第158回 PL68-10	弥生土器 水差形土器	口径：13.8 高さ：15.7	外面：ナデ 頸部波U字状の粘土貼付け 内面：ロ緑部ヨコナデ 跡部ユビオサエ 以下ケズ	ふつう	良好	内外面：明赤褐色	
632 4615	I6	VI層	第158回 PL67-9	弥生土器 低脚杯	口径：約14.0 高さ：9.0 底径：7.1	外面：ハケメ 口縁部斜面ヨコナデ 内面：ナデ 口縁部斜面ヨコナデ	やや 密	ふつう	内外面：灰白色	
633 1335	D3	VI-1層	第158回 PL67-10	弥生土器 瓶	口径：9.6 高さ：6.9 底径：3.3	外面：ナデ 口縁部ヨコナデ	ふつう	ふつう	内外面：にぶい褐色	
634 4696	H2	VI層	第158回 PL67-11	弥生土器 鉢	口径：7.0 高さ：3.9 底径：2.2	外面：ミガキ 口縁部3条の脛目線 内面：ミガキ 口縁部コナデ	良好	ふつう	内外面：淡黄褐色	
635 1409	E5	VI-2層上面	第158回	弥生土器 鉢	新高：△5.0 底径：12.4	外面：風化のため不明 内面：ミガキ 口縁部コナデ	ふつう	やや 不良	内外面：褐色	外表面付着
636 4475	H5	VI層	第158回	弥生土器 鉢	口径：約13.5 高さ：9.3	外面：剥落のため不明 内面：ナデ 口縁部コナデ	ふつう	ふつう	外面：にぶい褐色 内面：にぶい黄褐色	外表面付着
637 4591	I6	VI層	第158回	弥生土器 鉢	新高：△7.4 底径：△4.5	外面：ミガキ 口縁部ヨコナデ	やや 密	ふつう	内外面：灰白色	
638 4199	I3	VI層	第158回	弥生土器 片口	新高：△4.4 底径：11.2	外面：ナデ 口縁部ヨコナデ 内面：ナデ	ふつう	ふつう	外面：にぶい褐色 内面：灰白色	内面赤色彫刻
639 4239	J5	VI層	第158回	弥生土器 鉢	口径：4.3 新高：3.7 底径：3.2	外面：ミガキ後ナデ 4方円形透かし 内面：ナデ	ふつう	ふつう	外面：淡黃褐色 内面：灰白色	
640 4430	K8	VI層	第158回 PL67-12	弥生土器 平厚唇鉢	口径：5.9 新高：4.0 底径：3.2	点付3重同心円スタンプ文充填 ユビオサエ 液部中央にスタンプ文	ふつう	ふつう	内外面：灰白色	外表面底部付近 スリット
641 4474	H4	VI層	第158回 卷頭4-2	弥生土器 平厚唇鉢	口径：5.9 新高：4.0 底径：3.2	外面：ユビオサエ 内面：ユビオサエ後ナデ	ふつう	やや 不良	内外面：褐色	
642 4423	J5・K8	VI層	第158回 卷頭4-2	弥生土器 平厚唇鉢	口径：5.0 新高：5.1 底径：3.6	外面：ユビオサエ 内面：ナデ	ふつう	ふつう	外面：灰白色 内面：明褐色灰色	外表面スリット
643 1626	E3	VI-1層	第158回 卷頭4-2	弥生土器 ミニニアフ 蓋	口径：0.2 新高：3.2 底径：2.3	外面：ミコナデ つまみナデ 内面：ミコナデ つまみナデ	やや 密	やや 良好	内外面：淡黃褐色	
644 4439	H4	VI層	第158回 PL70-2	弥生土器 豐底鉢	口径：△2.1 新高：3.2 底径：3.2	外面：ハケメ後ミガキ 外面から成前穿孔(未 貫通)、成後に外面から打撃して貫通 内面：ナデ	ふつう	ふつう	外面：明褐灰色 内面：にぶい褐色	外表面スリット
645 4230	J3	VI層	第158回 PL76-3	土玉	長：2.0 幅：2.1 厚：1.8	無孔	ふつう	ふつう	橙色	
646 4362	H4	VI層	第158回 PL76-3	土玉	長：1.9 幅：2.0 厚：1.7	無孔	ふつう	ふつう	淡黃褐色	
647 1910	G3	VI-1層	第158回 PL76-3	土玉	長：3.2 幅：3.2 厚：2.9		ふつう	ふつう	橙色	
648 2647	SD59	第166回	弥生土器 壺	口径：15.9 高さ：△6.4	外面：口縁部ヨコナデ 頸部以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ 頸部以下ケズリ後ナデ	密	良好	外面：明褐灰色 内面：にぶい褐色 内面：浅黃褐色		

表43 土器・土製品観察表(25)

※復元値・現存値

遺物名	出土位置	埋蔵 深度 PL	種類 器種	法寸(cm)	手作上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
649 2659 SD59 第166回	弥生土器 裏	口径：約17.8 基高：△5.2	外面 口縁部14条の複凹線 内面 口縁部3コナデ 脇部以下ケズリ			密	良好	外表面：にら・褐色 内表面：にら・黄褐色	外面ス付着
650 2659 SD59 第166回	弥生土器 裏	口径：17.2 基高：△4.6	外表面 口縁部12～13条の複凹線 内面 口縁部3コナデ 脇部以下ケズリ			密	良好	外表面：浅黃褐色～灰白色 内表面：灰白色	
651 2659 SD59 第166回	弥生土器 裏	口径：約10.1 基高：△4.5 つまみ径：約4.2	外表面 ミガキ 脇部ユビオサエ 内面 上半ナデ下半ケズリ後ナデ			ふつう	良好	外表面：にら・黄褐色	
652 2648 2659 SD59 第166回	弥生土器 裏	基高：△13.0 底径：16.8	外表面 ミガキ 脇部ユビオサエ 内面 脇柱部ケズリ後ナデ 脇部3コナデ、ケズリ			ふつう	ふつう	外表面：にら・黄褐色	
653 2725 SD60 第166回	弥生土器 裏	口径：約19.8 基高：△6.4	外表面 口縁部11条の複凹線 縫部波状文×2 腹部ハケ 内面 口縁部3ケメハナデ 脇部以下ケズリ			密	良好	外表面：灰白色 内表面：浅黄色	外面ス付着
654 2725 SD60 第166回	弥生土器 裏	口径：約17.3 基高：△6.1	外表面 口縁部14条の複凹線 脇部ハケメ 内面 口縁部3コナデ 脇部以下ケズリ後ナデ			密	良好	外表面：にら・黄色 内表面：浅黃褐色～灰褐色	外面ス付着
655 2725 SD60 第166回	弥生土器 裏	口径：約19.0 基高：△12.5	外表面 口縁部15条の複凹線 脇部12条の波状文 (異常縫合跡) 脇部ハケメ 内面 口縁部3ケメハナデ 脇部以下ケズリ			密	ふつう	外表面：にら・黄褐色	外面ス付着
656 2725 SD60 第166回	弥生土器 裏	口径：15.7 基高：△4.9	外表面 口縁部14条の複凹線 内面 口縁部3コナデ 脇部以下ケズリ			密	良好	外表面：浅黃褐色 内表面：にら・褐色	外面ス付着
657 2726 SD61 第166回	弥生土器 裏?	基高：△10.8	27条の複凹線			ふつう	ふつう	外表面：灰白色 内表面：浅黃褐色	
658 3438 SD191 PL71-6	弥生土器 裏?	基高：△4.2	外表面 鋼付貝殻腹縫文+3条の凹縫+バスタン 内面 ケズリ			ふつう	ふつう	外表面：にら・褐色	
659 3879 SD189 第166回	弥生土器 裏	口径：約17.0 基高：△5.4	外表面 口縁部10～3条の複凹線ナデ消し 内面 口縁部3コナデ 脇部ケズリ後ナデ以下ケズリ			密	良好	外表面：褐色	外面内面口縁部ス付着
660 6505 SD189 第166回 PL71-1	弥生土器 付台付	口径：17.6 基高：△9.5	外表面 黒化のため不明 内面 ナデ 口縁部3コナデ			ふつう	ふつう	外表面：にら・褐色 内表面：暗赤褐色	外面内面口縁部赤色変形
661 6379 SD189 3102 J4 三層	弥生土器 蓋台	口径：△7.0	外表面 ナデ 段部3条の凹縫+半截竹管文 内面 ナデ			ふつう	ふつう	外表面：にら・褐色 内表面：にら・黄褐色	内外面口縁部付近ス付着
662 6324 SD189 第166回 PL71-1	弥生土器 裏?	口径：約16.8 基高：4.4 つまみ径：3.8	外表面 ミガキ 多数ミコナデ 内面 ミガキ つまみガキ、ヨコナデ			ふつう	ふつう	外表面：にら・褐色 内表面：にら・褐色	口縁部ス付着 内外 つまみ口縁部等 赤色変形
663 6324 SD189 第166回 PL71-1	弥生土器 裏	口径：約11.8 基高：6.2 つまみ径：5.4	外表面 ナデ 口縁部3コナデ 内面 ミガキ、墓石の工具痕 つまみナデ			ふつう	ふつう	外表面：浅黃褐色 内表面：にら・褐色	外面口縁部ス付着 内外つまみ外赤色 変形
664 6324 SD189 第166回	弥生土器 裏	口径：約13.9 基高：△5.2	外表面 ナデ			ふつう	良好	外表面：浅黃褐色	内外面口縁部 ス付着
665 6347 6324 SD189 第166回	弥生土器 裏	口径：△23.7 底径：6.5	外表面 脇部ハケミガキ 内面 脇部ケズリ後ナデ下半にミガキ			密	良好	外表面：褐色	外面ス付着
666 2784 SK76 第172回	弥生土器 裏	口径：12.6 基高：△10.3	外表面 口縁部3条の複凹線 内面 口縁部ナデ 脇部ハケ 縫部以下ケズリ			密	良好	外表面：褐色	外面ス付着
667 2784 SK76 第172回	弥生土器 裏	口径：約19.0 基高：△12.8	外表面 口縁部14条の複凹線 脇部ハケ後ナデ 内面 口縁部ナデ 脇部以下ケズリ			密	良好	外表面：灰褐色 内表面：明褐灰色	下面下部ス付着
668 2784 SK76 第172回	弥生土器 裏	口径：16.4 基高：△13.8	外表面 口縁部3コナデ 縫部4条の波状文×2 内面 口縁部ハケ			密	良好	外表面：にら・黄褐色	外面ス付着
669 2784 SK76 第172回	弥生土器 裏	口径：約17.3 基高：△10.4	外表面 口縁部1条の複凹線 縫部波状文 内面 口縁部3コナデ 脇部以下ケズリ			ふつう	やや不良	外表面：にら・褐色 内表面：灰白色	外面ス付着
670 2784 SK76 第172回	弥生土器 裏	口径：約20.0 基高：△14.5	外表面 口縁部16条の複凹線 脇部3コナデ 内面 口縁部3コナデ 脇部以下ケズリ			密	良好	外表面：にら・褐色	外面ス付着
2930 671 2925 SK77 第172回 PL71-2	弥生土器 裏	口径：12.3 基高：△14.5	外表面 口縁部3コナデ 縫部上半ナデ下半ハケ 内面 口縁部3コナデ 脇部3コナデ 山下ケズリ			ふつう	やや良好	外表面：灰白色 内表面：暗灰褐色	外面腹部ス付着 内面口縁部赤色変形
672 2940 SK77 第172回 PL71-2	弥生土器 裏	口径：18.0 基高：26.3 底径：2.0	外表面 口縁部10条の複凹線 脇部ハケ 内面 口縁部3コナデ 脇部3コナデ 山下ケズリ			密	良好	外表面：褐色	外表面腹部下半 ス付着
673 2944 SK77 第172回 PL71-2	弥生土器 裏	口径：18.0 基高：23.7 底径：3.8	外表面 口縁部1条の複凹線 脇部ガキ 内面 口縁部3コナデ 脇部以下ケズリ			密	良好	外表面：にら・褐色	外面口縁部 下部ス付着
674 1291 SK77 C3 VI-1層 1313	弥生土器 裏	口径：14.6 基高：△7.4	外表面 口縁部3ガキ 脇部3コナデ 脇部刺突文 内面 口縁部3ガキ 脇部山下ケズリ後ナデガキ			ふつう	ふつう	外表面：褐色	
675 2936 SK77 第172回 PL71-2	弥生土器 裏	口径：18.0 基高：△10.7	外表面 口縁部1条の複凹線ナデ消し 脇部刺突文、ハメ文 内面 口縁部ナデ 脇部ケズリ後ナデ以下ケズリ			密	良好	外表面：浅黃褐色	外面ス付着

表44 土器・土製品観察表(26)

遺物 番号	出土 場所 番号	遺様 形位名	埋固 PL	種類 器種	法量(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
876 2943 SK77 第172回 丹生土器 製		口径△16.0 底径△1.7		外面 ハケメ 内面 ケズり後ナギ		密	良好	内外面: 棕色	外面スリッパ	
877 2922 SK77 第172回 丹生土器 製	PL71-2	口径 10.7 器高 △7.9		外面 口縁部10条の凹回線、脚部2+3条の凹線 内面 口縁部3コマで 頭部以下ケズり後ナギ		ふつう	やや 不良	内外面: 淡白色	外面口縫部スリッパ 内面と内面口縫部赤 色度差	
878 2942 SK77 第172回 丹生土器 製	PL71-2	器高 △10.5 底径 1.6		外面 脚部2+4条の凹回線+斜肩と腹壁縫文×2 内面 2+点付3重同心円スタンプ文、ハケミガキ 内面 ケズリ		ふつう	ふつう	外面: にぶい橙色 内面: 淡黄褐色	外面スリッパ 内面化物付着	
879 2952 SK77 SD59 他	PL71-3	口径 ≈30.4 底径 ≈18.0		外面 斜部2+4+3条の凹回線+斜肩と腹壁縫文+同心 円深溝×5 脚部3条の凹線、円形透かし 内面 斜部ガキ 口縫部3条の凹線	5×5.6	ふつう	やや 良好	内外面: 棕色		
880 2921 SD59 第172回 丹生土器 製	PL71-2	口径 ≈18.1 器高 13.8 底径 ≈15.2		外面 ヨコナギ 部柱ナギ 内面 受部ケズリ後ナギ 部柱ナギ 脚部ケズリ		密	良好	外面: 淡黄褐色 内面: にぶい黄褐色		
881 2945 SK77 第172回 丹生土器 製	PL71-2	口径 ≈18.0 器高 13.3 底径 14.8		外面 ヨコナギ 内面 ケズリ		ふつう	やや 良好	外面: 灰色 内面: 淡灰色		
882 2918 SK79 第173回 丹生土器 製		器高 △8.5 底径 19.0		外面 ナギ 部柱ガキ 内面 ケズリ		ふつう	やや 密	内外面: 棕色		
883 2772 SK82 第173回 丹生土器 製	PL71-4	器高 △16.7 底径 5.4		外面 ハキ 内面 ヨコナギ ディオサエ 部柱ハケメ		密	良好	外面: 棕色 内面: 明褐灰	外面下部スリッパ	
884 5735 SK197 第173回 丹生土器 製		口径 ≈19.0 器高 △4.9		外面 口縫部4条の凹回線 内面 口縫部3コマで ミガキ 頭部以下ケズリ		ふつう	良好	外面: 淡灰色 内面: 淡黄褐色	内面赤色塗彩	
885 8375 SK197 第173回 丹生土器 製		器高 19.4 器高 △5.2		外面 口縫部11条の複回線 内面 口縫部3コマで		やや 密	やや 良好	外面: にぶい黄褐色 内面: 淡黄褐色	外面スリッパ	
886 5735 SK197 第173回 丹生土器 製		口径 ≈12.2 器高 △6.8		外面 ハケメ後ナギ つまみヨコナギ 頭部ガキ 上半ドリルナギ 下半ケズリ後ミガキ 緩状 の工具痕、つまみケズリ後ナギ		ふつう	やや 良好	外面: 棕色 内面: にぶい褐色	内面口縫部スリッパ	
887 6063 SK200 第173回 丹生土器 製		器高 △5.1 底径 1.9		外面 ハキ 内面 ケズリ後ミガキ		ふつう	ふつう	外面: にぶい橙色 内面: 棕色	外内面部付近 スリッパ	
888 6208 SK202 第173回 丹生土器 製	PL72-1	口径 18.5 器高 △11.3		外面 口縫部17条の複回線 脚部11条の波状文 の上から具縫文 内面 口縫部3ガキ 頭部以下ケズリ		ふつう	ふつう	外内面: にぶい黄褐色 内面口縫部上に赤 色度差	外内面スリッパ	
889 6206 SK202 第173回 丹生土器 製	PL72-1, 2	器高 △11.8		外面 脚部2+3条の凹回線+4重 同心点タヌキ文、下部ハケメ 内面 頭部ナギ 頭部ガキ 下ケズリ後ナギ		やや 密	やや 良好	外面: にぶい黄褐色 内面: 淡灰色		
890 6207 SK202 第173回 丹生土器 枝		器高 △12.0 底径 7.0		外面 ハキ 頭部ナギ 内面 ハキ		ふつう	良好	外内面: にぶい黃褐色		
891 6223 SK202 第173回 丹生土器 脊	PL72-1, 3	口径 19.2 器高 15.5 底径 16.6		外面 ナギ 頭部2~3条の凹回線+2+3重同心 円スタンプ文 内面 受部ガキ 部割ケズリ		ふつう	ふつう	外内面: 明褐灰	内面口縫部付近 スリッパ	
892 6191 SK202 第173回 丹生土器 脊	PL72-1, 3	口径 21.8 器高 14.7 底径 15.1		外面 ヨコナギ 頭部3条の凹回線×2+3重同心 円スタンプ文 内面 受部ガキ 下半ミガキ 脚部ケズリ		やや 密	やや 良好	外内面: 淡白色 内面: 赤色塗彩	外内面脚部下半 赤色度差	
893 6195 SK202 第173回 丹生土器 脊	PL72-1, 2層	口径 22.9 器高 △8.9		外面 ヨコナギ 頭部2+3条の凹回線+4重同心 円スタンプ文、ミガキ 内面 ケズリ		ふつう	ふつう	外内面: 淡黄褐色		
894 6134 SK203 2層 第173回 丹生土器 製		口径 ≈18.2 器高 △10.2		外面 口縫部12条の複回線一部ナギ出し 屋 部割ケズリ、下ケズリ 内面 ケズリ		ふつう	ふつう	外面: にぶい褐色 内面: にぶい黄褐色	外面と内面口縫部ス リッパ	
895 6168 SK203 4層 第173回 丹生土器 製		口径 9.0 器高 △7.6		外面 口縫部6+6条の複回線、脚部ハキガキ 内面 ケズリ		ふつう	ふつう	外内面: にぶい褐色		
896 6137 SK203 1~3層 第173回 丹生土器 製	PL76-1	口径 ≈8.4 器高 △3.4		外面 口縫部4条の複回線、済巻状浮文、貝腹 腹縫文突変 内面 口縫部ヨコナギ 以下風化のため不明		ふつう	ふつう	外内面: にぶい褐色		
897 6294 SK204 第174回 丹生土器 製	PL76-1	口径 ≈19.8 器高 △6.6		外面 口縫部3ナギ後ミガキ 脚部1カメ後ミ ガキ 内面 口縫部ヨコナギ 頭部以下ケズリ後 ミガキ		密	ふつう	外内面: 淡黄褐色	外内面スリッパ	
898 6280 SK204 第174回 丹生土器 製	PL72-4	口径 13.5 器高 △10.8		外面 口縫部3コマで 頭部ハキガキ 以下ケズリ後 ミガキ 内面 ケズリ		やや 密	やや 良好	外内面: 淡灰色		
899 6173 SK204 第174回 丹生土器 製		口径 ≈19.8 器高 △10.3		外面 口縫部10条の複回線 脚部貝殻模様押印 文 内面 口縫部ミガキ 頭部以下ケズリ		ふつう	ふつう	外面: にぶい褐色 内面: にぶい黄褐色	外内面と内面一部 スリッパ	
900 6300 SK204 第174回 丹生土器 製		口径 ≈14.4 器高 △8.0		外面 口縫部13条の複回線 脚部3条の凹回線× 2+3重同心円スタンプ文、ミガキ 内面 口縫部ミガキ 頭部以下ケズリ後ミガキ		やや 密	やや 良好	外内面: にぶい褐色	外内面スリッパ	
901 6316 SK204 第174回 丹生土器 製		口径 ≈8.9 器高 △3.0		外面 口縫部13条の複回線、頭部タヌキ 脚部ケズリ後タヌキ下部ナギ 内面 口縫部上部ヨコナギ 以下ミガキ 底部ナ ギ		ふつう	ふつう	外内面: 淡黄褐色	外内面脚部上 半等赤色度差	
902 6314 SK204 第174回 丹生土器 製	PL72-4	器高 △12.3 底径 2.6		外面 ハキ 内面 ケズリ		ふつう	ふつう	外面: にぶい褐色 内面: にぶい黄褐色	外内面スリッパ 内面化物付着	

表45 土器・土製品観察表(27)

△ 現存值

番号	取上 番号	返機 番号	牌種 P1	種類 番号	法量(cm)	手注上の特徴	貼土	焼成	色調	備考
703	6049	SK204	第174回 PL72-4	弥生土器 高杯	口径：234 基盤：△70	外面：ミガ下耐ナデ 内面：縦部がミガ、以下ミガ下耐ナデ	やや密	やや良好	外面：にじみ真緑色 内面：にじみ橙色	
704	6301	SK204	第174回 PL72-4	弥生土器 器蓋	口径：486 基盤：△15.9	外面：口縁部等の複数回線、脇部柱等がミガキ、3列4行 内面：円形内折れ 縦部がミガキ、脇部柱等ケズリ	密	良好	外面部：橙色 内面部：真緑色	外面部口縫部赤色変形
705	6279	SK204	第174回 PL72-4	弥生土器 器蓋	口径：312.3 基盤：△10.1	外面部：受部等の複数回線、脇部柱等がミガキ下ナデ。 ヨコナデ 内面：受部等ミガキ、脇部柱等ケズリ	ふつう	良好	外面部：明褐色 内面部：明褐色	外面部ス付番
706	6307	SK204	第174回 PL72-4	弥生土器 高杯	基盤：△2.2 直径：△45	外面：縦部柱等がミガキ、削面風化のため不明 内面：ケズリ、縦部柱等コナデ	粗	ふつう	外面部：灰白色 内面：灰白色	
707	6374	SK204	第174回 PL72-4	弥生土器 蓋	口径：11.8 基盤：△5.5 つまみ径：4.8	外面：ヨコナデ 内面：ケズリ下耐ナデ、つまみヨコナデ	密	良好	外面部：にじみ橙色 内面：口縫部ス付番	
708	6305	SK204	第174回 PL72-4	弥生土器 注口部	口径：2.7 高さ：6.6	外面：ミガキ	密	やや良好	外面部：灰白色 内面：灰白色	
709	6303	SK204	第174回 PL72-4	弥生土器 低脚杯	口径：10.0 基盤：△6.7 直径：△5.7	外面部：ナデ 脚部ユピオサエ	ふつう	ふつう	外面部：淡黄褐色 内面赤色変形	外面部口縫部ス付番
710	6210	SK202	第174回	弥生土器 蓋	口径：△24.1 基盤：△21.5	外面：口縫部15条の複数回線、脇部波状文×2、縦部ハケメ 内面：ヨコナデ	粗	やや不良	外面部：灰白色 内面部：灰白色	外面部口縫部ス付番
711	6082	SK205	第174回	弥生土器 蓋	口径：△45 基盤：△8.5	外面：ヨコナデの複数回線、脇部ハケメ 内面：ヨコナデ下耐ナデ	ふつう	ふつう	外面部：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	
712	6394	SK207	第174回	弥生土器 蓋	口径：△27.8 基盤：△13.2	外面：ヨコナデ11条の複数回線、脇部具足般縫継波状文、以下ミガキ 内面：ヨコナデ33条、縫合以下ケズリ後ミガキ	やや密	良好	外面部：淡黄褐色 内面：橙色	
713	6397	SK207	第174回	弥生土器 蓋	口径：△18.1 基盤：△8.2	外面：ヨコナデ12条の複数回線一部ナデ消し、脇部3 内面：ヨコナデ11条、縫合具足般縫継波状文 ヨコナデコナデ、脇部以下ケズリ	密	良好	外面部：橙色 内面：口縫部ス付番	
714	6346	SK207	第174回	弥生土器 注口部	口径：2.2 高さ：4.7	外面：ミガキ	ふつう	ふつう	外面部：にじみ橙色	
715	2429	D4 VI-2層	第176回 PL73-1	弥生土器 蓋	口径：37.5 基盤：△5.0 底径：△5.0	外面：口縫部3コナデ 脇部1+2条の回線、脇部ハケメ 内面：ヨコナデガキ、U字印粘土絆貼付り下耐	密	良好	外面部：にじみ橙色 内面：にじみ橙色	
716	2743	F3 第4面接出	第176回 PL72-2	弥生土器 蓋	口径：11.7 基盤：△10.7	外面：ヨコナデ表面の斜傾斜？ 脇部ハケメ 内面：ヨコナデガキ、ミガキヨコナデ 脇部以下ケズリ	ふつう	良好	外面部：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	
717	2783	C3 VI-2層	第173回 PL73-3	弥生土器 蓋	口径：11.6 基盤：△19.8	外面：ヨコナデコナデ ヨコナデケズリガキ 内面：ヨコナデコナデ 脇部以下ケズリ	密	良好	外面部：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	外面部ス付番 外面部と内面部縫部赤色変形
718	2966	F3 第4面直上	第176回 PL73-4	弥生土器 蓋	口径：13.1 基盤：△7.2	外面：ヨコナデ直上、頸部削剥実文 内面：ヨコナデコナデ、縫合以下ケズリ	密	良好	外面部：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	
719	6034	I4 VI-2層	第176回	弥生土器 蓋	口径：13.4 基盤：△5.7	外面：ヨコナデコナデ ヨコナデハケメ 内面：ヨコナデガキ、縫合以下ケズリ	密	良好	外面部：明褐色 内面：明褐色	
720	2521	D2 VI-2層	第176回	弥生土器 蓋	口径：8.1 基盤：△6.6	外面：ヨコナデガキヨコナデ ヨコナデケズリガキ 内面：ヨコナデコナデ ガキヨコナデケズリ	密	良好	外面部：灰白～にじみ黄褐色 内面：淡黄褐色	外面部口縫部ス付番
721	6125	K5 VI-2層	第176回 PL73-5	弥生土器 合付蓋	口径：6.8 基盤：△11.6 底径：△6.3	外面部：上半ヨコナデコナデ 下部ミガキ 脇部に2個一対の穿孔 内面：ヨコナデコナデ ヨコナデケズリ以下ナデ ヨコナデケズリ後ミガキ	密	良好	外面部：灰白色 内面：灰白色	外面部と脇部内面赤色変形
722	2372	D5 VI-2層	第176回 PL76-2	弥生土器 粗縫蓋	口径：△6.6 基盤：△8.4	外面：ヨコナデ3の回線、6+7対付貝腹縫継文×3 +3+12箇所内面筋入縫合文 内面：ヨコナデコナデ、縫合以下ケズリ下耐ナデ	ふつう	ふつう	外面部：淡黄褐色～橙色 内面：橙色	台付か
723	2389	D3 VI-2層	第176回 PL73-6	弥生土器 無縫蓋	口径：10.5 基盤：△6.5	外面：ヨコナデ6条の複数回線、脇部ガキ 内面：ヨコナデケズリ後ミガキ、縫合ケズリ	密	良好	外面部：にじみ黄褐色 内面：橙色～淡黄褐色	外面部と内面部ス付番
724	6041	I5 VI-2層	第176回 PL70-1	弥生土器 蓋	高さ：△5.2	外面部：ハケミガキ、突堤アテ面文×2(大小) 内面：ナデ	ふつう	ふつう	外面部：淡黄褐色 内面：にじみ橙色	
725	6343	K4 VI-2層	第176回 PL70-1	弥生土器 蓋	高さ：△2.3	外面：ヨコナデの複数回線、5字状渦巻浮文 内面：ヨコナデガキナデ	密	良好	外面部：淡黄褐色 内面：にじみ橙色	器台の可能性あり
726	6124	J4 VI-2層	第176回 PL70-2	弥生土器 蓋	高さ：△3.5	外面部：5重同心円(直)ストップ文 内面：ヨコナデ	ふつう	ふつう	外面部：灰黃褐色 内面：にじみ橙色	器台の可能性あり
727	2389	D3 VI-2層	第176回 PL73-7	弥生土器 蓋	口径：18.5 基盤：△2.6 底径：△2.8	外面部：ヨコナデ4条の複数回線、脇部波状文、脇部ハケメ 内面：ヨコナデコナデ ヨコナデケズリ以下ナデ ヨコナデケズリ後ミガキ	やや密	良好	外面部：灰白色 内面：にじみ黄褐色	外面部脇と内面ス付番
728	6037	J4 VI-2層	第176回 PL73-2	弥生土器 蓋	口径：19.2 基盤：△21.8 底径：△5.0	外面部：ヨコナデ11条の複数回線、脇部具足般縫継波状文、以下ケズリ 内面：ヨコナデコナデ 縫合以下ケズリ	密	良好	外面部：にじみ黄褐色 内面：灰白色	外面部ス付番
729	6078	H4 VI-2層	第176回 PL73-9	弥生土器 蓋	口径：17.0 基盤：△20.7	外面部：ヨコナデ11条の複数回線、脇部具足般縫継波状文、以下ハケメ 内面：ヨコナデコナデ 縫合以下ケズリ	ふつう	ふつう	外面部：淡黄褐色 内面：橙～淡黄褐色	外面部ス付番

表46 土器・土製品観察表(28)

遺物 番号	取上 番号	遺様 位序名	掉回 PL	種類 種類	法量(cm)	手法上の特徴		胎土	焼成	色調	備考
						外面	内面				
730 6322	J3 VI-2層	第176回 第1面積出	弥生土器 裏	口径：16.4 底高：△17.0	外面：口縁部23条の瘤凹線、肩部貝殻模様横筋文 内面：腹部ハメキ 口縁部ヨコテ 瓢部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外面：浅黄褐色 内面：褐色	外面と内面下部 スス付帯		
731 2777	E2 第1面積出	第176回 PL73-10	弥生土器 裏	口径：30.6 底径：△20.5	外面：口縁部10条の瘤凹線、肩部13条の波状文 内面：口縁部ハメキ ポケテ以下ケズリ	ふつう	ふつう	外面：褐色 内面：にじむ褐色	外面上ス付帯 内面底化物付帯		
732 2417	B3 VI-2層	第176回	弥生土器 裏	口径：18.7 底径：△26.0	外面：口縁部13条の瘤凹線、肩部12条の波状文 内面：口縁部ハメキ ポケテ以下ケズリ	ふつう	ふつう	外面上、内面外：浅黄褐色	外面と内面底部 付近ス付帯		
733 6079 6069	H4 VI-2層	第177回 PL73-11	弥生土器 裏	口径：19.2 底高：△21.3	外面：口縁部13+4条の瘤凹線一部ナデ消し、肩 部10条の波状文、以下ハメキ 内面：口縁部ヨコテ 瓢部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外面上、内面外：浅黄褐色	外面上ス付帯		
734 2418	C3 VI-2層	第177回 PL74-12	弥生土器 裏	口径：21.8 底高：△24.1	外面：口縁部23条の瘤凹線、肩部剥削文、以下 ハメキ 内面：口縁部ヨコテ 瓢部以下ケズリ	密	やや 良好	外面上、内面外：にじむ褐色	外面上部ス付帯		
735 6129	J5 VI-2層	第177回 PL74-1	弥生土器 裏	口径：20.1 底高：△26.7	外面：口縁部15条の瘤凹線、肩部剥削文。ハケ メキ 内面：口縁部ヨコテ 瓢部以下ケズリ	粗	ふつう	外面上、内面外：灰白色	外面と内面下半 ス付帯		
736 2093 2389	D3 VI-2層 他	第177回	弥生土器 裏	口径：32.4 底高：△12.0	外面：5cm×3cmの瘤凹線、肩部剥削文、以下ハ メキ 内面：口縁部ヨコテ 瓢部以下ケズリ	密	良好	外面：浅黄褐色～灰青 色 内面：にじむ褐色～灰青 色	外面上ス付帯		
737 2337 2332	B2・C3 VI-2層	第177回	弥生土器 裏	口径：32.0 底高：△22.8	外面：口縁部12条の瘤凹線、肩部11条の波状 文、以下ハメキ後ナギテ 内面：口縁部ハメキ後ナギテ 瓢部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外面：浅黄褐色 内面：明褐色			
738 6062	J4 VI-2層	第177回	弥生土器 裏	口径：28.0 底高：△9.3	外面：口縁部13条の瘤凹線、肩部剥削文、ハ メキ 内面：口縁部ハメキ後ナギテ 瓢部以下ケズリ 後ナギ	やや 密	やや 良好	外面上、内面外：灰白色			
739 6032	H5 VI-2層	第177回	弥生土器 裏	口径：23.8 底高：△13.9	外面：口縁部13条の瘤凹線、肩部剥削文、ハ メキ 内面：口縁部ヨコテ 瓢部以下ケズリ後一部ハ メキ	やや 密	やや 良好	外面上、内面外：淡黄褐色 内面：浅黄褐色	外面上ス付帯		
740 2506	E5 VI-2層	第177回	弥生土器 裏	口径：30.5 底高：△17.7	外面：口縁部18条の瘤凹線、肩部12条の波状 文、以下ハメキ後ナギテ 内面：口縁部ヨコテ 瓢部以下ケズリ	ふつう	やや 不良	外面：浅黄褐色 内面：にじむ褐色			
741 2447 2096	F3 VI-2層 V-2層上面	第177回	弥生土器 裏	口径：31.7 底高：△14.5	外面：口縁部12+4条の瘤凹線、肩部9条の瘤凹 線、以下ハメキ 内面：口縁部ヨコテ 剥削5cm方 合 瓢部以下ケズ リ	密	良好	外面上、内面外：浅黄褐色			
742 2335	B5 VI-2層	第178回	弥生土器 裏	口径：18.8 底高：△12.3	外面：口縁部23条の瘤凹線、肩部12条の波状文 内面：口縁部ヨコテ 瓢部以下ケズリ	密	良好	外面上、内面外：にじむ褐色 内面：にじむ黃褐色	外面上部ス付帯		
743 1372 1335	D3 VI-2層 1605 VI-1層	第178回	弥生土器 裏	口径：15.6 底高：△13.3	外面：口縁部15条の瘤凹線、肩部12条の波状文 内面：口縁部ハメキ ポケテ以下ケズリ	ふつう	ふつう	外面上、内面外：淡赤褐色			
744 6056	J4 VI-2層	第178回 PL74-2	弥生土器 裏	口径：18.0 底高：△10.2	外面：口縁部17条の瘤凹線、肩部ハメキガキ 内面：口縁部ハメキ ポケテ以下ケズリ	ふつう	ふつう	外面上、内面外：にじむ褐色	外面上ス付帯		
745 6344	J5 VI-2層	第178回 PL74-3	弥生土器 裏	口径：13.3 底高：△10.0	外面：口縁部22条の瘤凹線、肩部12条の波状文 内面：口縁部ヨコテ 瓢部以下ケズリ	やや 密	やや 良好	外面上、内面外：明赤褐色			
746 2270	B5 VI-2層	第178回	弥生土器 裏	口径：16.4 底高：△10.5	外面：口縁部17条の瘤凹線、肩部ハメキ 内面：口縁部ハメキナギテ 瓢部以下ケズリ	密	良好	外面上、内面外：灰白色	外面上部ス付帯		
747 2333	B3 VI-2層	第178回	弥生土器 裏	口径：15.7 底高：△7.8	外面：口縁部15条の瘤凹線、肩部ハメキ 内面：口縁部ハメキナギテ 瓢部以下ケズリ	ふつう	良好	外面上、内面外：褐色			
748 2960	E2 第4面直上	第178回	弥生土器 裏	口径：18.9 底高：△8.6	外面：口縁部15条の瘤凹線、肩部ハメキ 内面：口縁部ハメキナギテ 瓢部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外面上、内面外：淡黄褐色 内面：淡黄褐色～灰 白色	外面上ス付帯		
749 2336 2098	C2 VI-2層 V-2層上面	第178回	弥生土器 裏	口径：17.8 底高：△8.6	外面：口縁部15条の瘤凹線、肩部ハメキ 内面：口縁部ハメキナギテ 瓢部以下ケズリ	密	良好	外面上、内面外：灰白色			
750 2337	B4 VI-2層	第178回	弥生土器 裏	口径：15.4 底高：△7.7	外面：口縁部15条の瘤凹線、肩部貝殻模様押 文 内面：口縁部ヨコテ 瓢部以下ケズリ	密	良好	外面上、内面外：浅黄褐色 内面：にじむ褐色	外面上ス付帯		
751 2425 2500	E5 VI-2層	第178回	弥生土器 裏	口径：18.9 底高：△13.2	外面：口縁部15+5条の瘤凹線、肩部剥削文、以 下ハメキ 内面：口縁部ヨコテ 瓢部以下ケズリ	やや 粗	ふつう	外面上、内面外：褐色～灰白色			
752 2334 2367	B4・C4 VI-2層	第178回	弥生土器 裏	口径：18.5 底高：△9.4	外面：口縁部10条の瘤凹線、肩部ハメキ 内面：口縁部ハメキ ポケテ以下ケズリ	ふつう	ふつう	外面上、内面外：褐灰色	外面上ス付帯		
753 2733	F3 第1面積出	第178回	弥生土器 裏	口径：18.8 底高：△9.2	外面：口縁部4+3条の瘤凹線、肩部風化のため 不明 内面：口縁部ナギテ 瓢部以下ケズリ	やや 粗	やや 不良	外面上、内面外：浅黄褐色～灰 白色 内面：灰白色			
754 2093 2369	D3 VI-2層上面 VI-1層	第178回	弥生土器 裏	口径：19.1 底高：△11.6	外面：口縁部13条の瘤凹線、肩部ハメキナギテ 内面：口縁部ナギテ 瓢部以下ケズリ	ふつう	ふつう	外面上、内面外：にじむ褐色			
755 5905 5724	I4 2層	第178回	弥生土器 裏	口径：16.8 底高：△11.6	外面：口縁部5条の瘤凹線、肩部ハメキナギテ 内面：口縁部ナギテ 瓢部以下ケズリ	ふつう	良好	外面上、内面外：灰白色	外面上ス付帯		
756 6132	K4 VI-2層	第178回 PL74-4	弥生土器 裏	口径：16.1 底高：△11.2	外面：口縁部ヨコテ 瓢部以下ケズリ一部ハ メキ 内面：	密	良好	外面上、内面外：浅黄褐色	外面上ス付帯		

第3章 発掘調査の成果

表47 土器・土製品観察表(29)

遺物 番号	出土 場所	通稱 番号	埋蔵 位置	埋蔵 環境	法蓋(cm)	手作上の特徴	胎土	焼成	色調	※復元値・△現存値	
										外側	内側
6129 6128 他	J5 - JE - K5 VI-2層	第178回 PL74-5	弥生土器 裏	口径：13.2 高さ：17.9	外側：口縁部3コナデ 脚柱ハケメ 腹部タキ 内側：口縁部3コナデ 脚柱ハケメ	密	良好	内外面：褐色			
757 576	H3 H4 VI-2層	第178回 PL74-5	弥生土器 裏	口径：10.2 高さ：8.6	外側：口縁部3コナデ 脚柱ハケメ 内側：口縁部3コナデ 脚柱ハケメ以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面：褐色	外表面斯付善		
759	J3 D3 - D4 VI-2層	第178回 PL74-5	弥生土器 裏	口径：10.4 高さ：8.3	外側：口縁部3コナデ 脚柱ハケメ 内側：口縁部3コナデ 脚柱風化のため不明	ふつう	ふつう	内外面：灰白色	外表面ス付善		
2370 2371 他	D3 VI-2層	第178回 PL74-5	弥生土器 裏	口径：16.5 高さ：△8.5	外側：口縁部3コナデ 脚柱ハケメ 内側：口縁部3コナデ 脚柱ケリ後ユビオサエ 以下ケズリ	密	良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	外表面と内腹部 ス付善		
761 2389	D3 VI-2層	第178回 PL74-5	弥生土器 裏	器高：△21.5 底径：△8.6	脚部ハケメ後ナデ 腹部ヨコナデ 脚部ケズリ	ふつう	ふつう	外面：にぶい褐色～黒 内面：にぶい褐色	外表面一部ス付善		
762 6081	H4 VI-2層	第178回 PL74-5	弥生土器 裏	口径：△15.6 器高：△8.9	外側：口縁部1条以上の複数縫 窓部3条の凹 縫×2+貝殻模様縫 内側：口縁部3コナデ 脚柱ナデ以下ケズリ	ふつう	ふつう	内外面：にぶい褐色	外表面ス付善		
763 5732	H3 VI-2層	第178回 PL76-2	弥生土器 裏	器高：△6.9	外側：口縁部3条以上の複数縫 窓部3条の凹 縫×3+貝殻模様縫×2+4重同心円スタン グナ	ふつう	ふつう	内外面：にぶい褐色	外表面下半ス付善		
764 2683	D3 第4面換出	第179回 PL76-2	弥生土器 裏	器高：△9.1	外側：脚部5条の凹縫×3+脚柱具腹縫縫文+ 3重貝殻模様縫文×1 内側：ケズリ後ミキ	ふつう	やや 良好	外面：にぶい褐色～に ぶい褐色 内面：にぶい褐色	外表面一部ス付善		
765 2423	E3 VI-2層	第179回 PL74-6	弥生土器 裏	器高：△7.5 底径：△9	外側：脚部3×2+4条の凹縫+4重同心円スタン グナ+半截竹管文 下部ハケメ 内側：ケズリ	やや 密	やや 良好	外面：反褐色 内面：にぶい褐色			
766 6124	J4 - K5 VI-2層	第179回 PL76-2	弥生土器 裏	器高：△8.5	外側：4条の凹縫×2+貝殻模縫文+逆U字スタ ングナ 内側：ケズリ	ふつう	ふつう	外面：灰白色 内面：にぶい褐色	外表面ス付善		
767 5732	H3 VI-2層	第179回 PL76-2	弥生土器 裏	器高：△6.9	外側：3条の凹縫×2+脚柱具腹縫縫文×2+2 ワタスランズ文×4×1 内側：ケズリ	ふつう	ふつう	外面：浅黄褐色 内面：明褐色			
2701 2697 2970	F2 第4面直上	第179回 PL74-7	弥生土器 高坏	口径：△21.4 器高：△7.8 底径：△14.4	外側：ミガキ 环部ヨコナデ後ミガキ 内側：口縁部3コナデ环部ミガキ 脚柱シボリ 脚柱ヨコナデ 环部中央に車條	密	良好	内外面：浅黄褐色			
769 2702	G5 VI-2層	第179回 PL74-8	弥生土器 高坏	口径：△7.2 器高：△1.5	外側：ヒカルガキ 脚柱ヨコナデ 内側：ミガキ	密	良好	外面：褐色 内面：にぶい褐色			
2713 2616 2617	F5 - G3 - Q4 VI-2層	第179回 PL74-8	弥生土器 高坏	口径：△6.5 器高：△7.8	外側：ミガキ ヨコナデ 内側：ミガキ	密	良好	外面：にぶい褐色 内面：黄灰色			
771 2754	G3 VI-2層	第179回 PL74-8	弥生土器 高坏	口径：△20.9 器高：△8.3	外側：口縁部ヨコナデ ヒカルミヨリハケメ 内側：ミガキ	密	良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	内外面ス付善		
772 4670	H VI層 VI-2層	第179回 PL74-9	弥生土器 高坏	口径：△21.8 器高：△5.9	外側：ヨコナデの凹縫 ヨコナデ 内側：ミヨコナデ	密	良好	内外面：浅黄褐色			
773 2421	C2 VI-2層	第179回 PL74-9	弥生土器 高坏	口径：△4.0 器高：△4.8	外側：脚部3コナデ ヒカルミヨリハキ 内側：ミヨコナデ	密	良好	内外面：灰白色	外表面ス付善		
774 6576	J8 VI-2層	第179回 PL74-9	弥生土器 高坏	口径：△10.1 器高：△4.6	外側：ミガキ ヨコナデ ヨコナデ 内側：ミヨコナデ	ふつう	ふつう	外面：灰白色 内面：褐色	外表面脚部 ス付善		
775 5905	J4 VI-2層	第179回 PL74-9	弥生土器 高坏	口径：△5.7 器高：△2.6	外側：ヒカルミヨリハケメ 内側：ミヨコナデ	ふつう	ふつう	外面：褐色 内面：浅黄褐色			
776 4878	J8 VI-2層 他	第179回 PL76-2	弥生土器 高坏	口径：△18.6 器高：△5.3	外側：8条の凹縫 ピアノ鍵盤模文+底付3重 同心円ミタク文 内側：ヨコナデ	ふつう	ふつう	内外面：にぶい褐色			
777 6163	J4 VI-2層	第179回 PL76-2	弥生土器 高坏	口径：△10.9 器高：△2.6	外側：3条+2条の凹縫+5重平底丸スランプ文 内側：ミヨコナデ	ふつう	ふつう	内外面：浅黄褐色			
778 2431	D5 VI-2層	第180回 PL74-10	弥生土器 器台	口径：20.3 器高：△5.8 底径：△4.5	外側：受部25条の複数縫 脚柱部ナデ 脚柱16 条の凹縫 内側：受部ナデ 脚柱部ケズリ	密	良好	内外面：にぶい褐色	内面吹きこぼれ痕		
779 5888	H4 VI-2層	第180回 PL74-11	弥生土器 器台	口径：19.0 器高：△10.7 底径：△6.0	外側：受部脚柱16条の複数縫 脚柱ヨコナデ 受部ナデ後ミガキ 脚柱部ナデ 脚柱ケズリ 内側：ヒカルミヨリハケメ	ふつう	ふつう	内外面：浅黄褐色			
780 2612	F4 VI-2層	第180回 PL74-12	弥生土器 器台	口径：△10.9 器高：△5.1	外側：受部16条の複数縫 脚柱部ナデ 脚柱14 条の凹縫 内側：受部ナデ 脚柱ケズリ	密	良好	内外面：浅黄褐色			
781 2761	G5 VI-2層	第180回 PL74-12	弥生土器 器台	口径：△18.6 器高：△11.2	外側：受部36条の複数縫 脚柱ヨコナデ 受部ナデケズリ後ナデ 脚柱部ナデ 脚柱ケズリ 内側：ヒカルミヨリハケメ	密	良好	外表面：浅黄褐色 内面：にぶい褐色			
782 6074	J5 VI-2層	第180回 PL74-12	弥生土器 器台	口径：△23.2 器高：△8.2	外側：ミガキ 内側：ケズリ後ミガキ	密	良好	内外面：褐色			
783 2684	E5 VI-2層	第180回 PL74-12	弥生土器 器台	口径：△15.6 器高：△6.7	外側：受部ヨコナデ 受部ヨコナデ 内側：ヒカルミヨリハケメ	密	良好	外表面：浅黄褐色 内面：にぶい褐色			

表48 土器・土製品観察表(30)

遺物 番号	取上 番号	遺様 位序名	埋回 PL	埋置 器種	法量(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	※復元値 △現存値	
784	2510	F3 VI-2層	第180回 PL76-1	弥生土器 器台	口径：約16.8 器高：△5.3	外面：口縁部5条の凹線+S字状溝文浮文。 内面：ミガキ 底面：ミガキ	ふつう	ふつう	外面：黄褐色 内面：浅黄褐色	晩の可能性あり	
785	1612	F2 VI-2層	第180回	弥生土器 器台	口径：約23.8 器高：△9.5	外面：段部3+2条の凹線+4重溝文スタンプ文 内面：ミガキ	ふつう	ふつう	外表面：褐色 内面：灰白色	晩の可能性あり	
786	6074	I5 VI-2層	第180回 PL76-1	弥生土器 器台	器高：△4.4	外面：段部2条の凹線+S字状溝文スタンプ文 内面：ナデ	ふつう	ふつう	外面：褐色 内面：灰白色	晩の可能性あり	
787	2616	G3 VI-2層	第180回	弥生土器 器台	器高：△8.3 底径：△12.4	外面：脚柱部ヨコカズレ 脚部15条の腹凹線 内面：ケズリ 腹脚部ヨコナデ	ふつう	良好	外表面：にぶい黄褐色 内面：灰白色		
788	2424	E4 VI-2層	第180回	弥生土器 器台	器高：△10.0	外面：脚柱部ヨコカズレ 脚部12条の腹凹線 内面：脚柱部ナデ 脚部ケズリ後ナデ	ふつう	ふつう	外表面：浅黄褐色 内面：褐色		
789	4738	J8 VI-2層	第180回	弥生土器 器台	器高：△9.6 底径：△17.6	外面：ミガキ 段部3条の凹線×2+3重同心円 内面：スラブ文 脚柱部ナデ 脚部ケズリ	やや 良好	やや 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい褐色		
790	6035	J4 VI-2層	第180回	弥生土器 器台	器高：△11.4 底径：△15.1	外面：脚柱部3+4条のナデ+2重同心円スタンプ文 内面：脚柱部14条の腹凹線 脚柱部ミガキ 脚部ケズリ	やや 良好	やや 良好	外表面：浅黄褐色 内面：灰白色		
791	6057	J4 VI-2層	第180回 PL75-1	弥生土器 器台	口径：△9.5 器高：△7.4 底径：△6.5	外表面：風化のため不明	ふつう	ふつう	外表面：浅黄褐色 内面：にぶい黄褐色		
792	6160	I6 VI-2層	第180回 PL75-2	弥生土器 器台	口径：△14.4 器高：△5.9 底径：△5.4	外面：ナデ つまみヨコナデ 内面：ケズリ後ナデ つまみナデ、ヨコナデ	ふつう	ふつう	外表面：暗褐色 内面：灰白色	外表面ス付着	
793	6125	K5 VI-2層	第180回	弥生土器 器台	口径：△12.7 器高：△5.1 底径：△4.9	外面：ハケ×つまみヨコナデ 内面：幕状工具痕 つまみナデ	良好	良好	外表面：にぶい黄褐色 内面：外表面部ス付着		
794	6350	H7 VI-2層	第180回 PL75-3	弥生土器 器台	口径：△9.6 器高：△4.8 底径：△3.8	外面：風化のため不明	良好	良好	外表面：褐色 内面：灰白色		
795	2752	E5 VI-2層	第180回	弥生土器 器台	口径：△13.0 器高：△6.7	外面：ナデ 内面：上部ナデ下部ケズリ つまみナデ	ふつう	ふつう	外表面：褐色 内面：にぶい褐色	外表面ス付着	
796	2367	D5 VI-2層	第180回 PL75-4	弥生土器 器台	口径：△11.8 器高：△7.0 底径：△3.9	外面：ミガキ 内面：ミガキ つまみナデ	良好	良好	外表面：灰白色 内面：灰白色		
797	5533	H3 VI-2層	第180回 PL75-5	弥生土器 器台	口径：△11.0 器高：△5.5 底径：△3.4	外面：ナデ 口縁部ヨコナデ 内面：ハケ×つまみヨコナデ	やや 良好	やや 良好	外表面：褐色 内面：灰白色		
798	2512	G3 VI-2層	第180回 PL75-6	弥生土器 器台	口径：△11.2 器高：△4.8 底径：△3.3	外面：8条の腹凹線 つまみヨコナデ 内面：ケズリ後ナデ つまみミガキ後ナデ	良好	良好	外表面：浅黄褐色		
799	2338	C4 VI-2層	第180回 PL75-7	弥生土器 口注土器	口径：△12.6 器高：△14.6	外面：口縁部14条の腹凹線 脚部4×2+3条の 凹線+棘付貝具複複文×2+5段の3重 同心円スタンプ文 内面：脚部ヨコカズレ 頸部以下上半ケズリ下半 ナデ	ふつう	ふつう	外表面：褐色 内面：外表面部付近に 化粧土付着		
800	6068	H5 VI-2層	第180回 PL76-2	弥生土器 把手	器高：△6.3	外面：2+3条の凹線+3重同心円スタンプ文+ 半截竹苞によるG肩+爪形文 内面：ケズリ	やや 良好	やや 良好	外表面：にぶい黄褐色 内面：灰白色	外表面ス付着	
801	2370	D3 VI-2層	第180回 PL76-2	弥生土器 把手	器高：△5.3	外面：3重同心円スタンプ文	やや 良好	やや 良好	外表面：にぶい褐色		
802	2289	D3 VI-2層	第180回 PL75-8	弥生土器 鉢	口径：7.0 器高：△5.6 底径：△5.5	外面：ミガキ 内面：ミガキ 底部付近ユビコサエ	良好	良好	外表面：褐色 内面：にぶい黄褐色		
803	2369	C2 VI-2層	第180回 PL75-9	弥生土器 鉢	口径：△10.5 器高：△4.0 底径：△4.7	外面：ヨコナデ	良好	良好	外表面：灰白色		
804	6125	K5 VI-2層	第180回	弥生土器 鉢	器高：△6.0 底径：△7.4	外面：ミガキ 内面：シボリ ケズリ 底部ヨコ充填(欠落)	ふつう	ふつう	外表面：褐色 内面：灰白色	外表面底部付近 ス付着	
805	6069	H4 VI-2層	第180回	弥生土器 鉢	器高：△6.1 底径：△7.3	外面：ナデ 4万円形透かし 腹端部1条の凹線 内面：ナデ 腹端部ヨコナデ	ふつう	ふつう	外表面：浅黄褐色 内面：にぶい褐色		
806	6353	I2 VI-2層	第180回 PL75-10	弥生土器 鉢	器高：△5.0 底径：△11.2	外面：ナデ 内面：底部ケズリ後ナデ 腹部ヨコナデ	ふつう	ふつう	外表面：にぶい黄褐色		
807	2435	C3 VI-2層	第180回	弥生土器 鉢	器高：△3.3 底径：△11.2	外面：ヨコナデ 内面：ナデ	やや 良好	やや 良好	外表面：灰色 内面：オーブ黒色		
808	1318	D3 VI-2層	第180回 PL75-10	弥生土器 鉢	口径：11.3 器高：△36.5	外面：ヨコカズレ 内面：ヨコカズレ ケズリ	やや 良好	やや 良好	外表面：浅黄褐色 内面：にぶい褐色~浅 黄褐色		
809	2372	G5 VI-2層	第180回 PL76-1	弥生土器 窓形土器	口径：△12.0 器高：△10.9 底径：△39.0	外面：ミガキ 内面：一部ケズリ	ふつう	ふつう	外表面：褐色 内面：にぶい褐色		
810	1335	D3 VI-2層	第180回	弥生土器 窓形土器	器高：△10.9 底径：△39.0	外面：ハケ後ガギ 内面：ハケ前ヨコナデ	良好	良好	外表面：浅黄褐色 内面：にぶい黄褐色		

第3章 発掘調査の成果

表49 土器・土製品観察表(31)

*復元値 △現存値

造物 番号	取上 番号	通稱 肩位名	測定 PL _c	種類 器種	法量(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
B11	4384 4719	J7・R8 V2肩	第181回	弥生土器 口	器高:△5.9 外面 口縁部ヨコナデ 手平 ナデ、ユビオサエ 内面 口縁部ナデ ケズリ	ふつう	ふつう	内外面:にい黄橙色		
B12	2421	C2 VI-2型	第181回 PL76-1	弥生土器 手平	孔径:2.5 身高:△11.1 外内面:ナデ、ユビオサエ	ふつう	ふつう	内外面:褐色		
B13	2369	C2 VI-2型	第181回 PL76-1 (重泥部)	土製円盤 手平	身高:3.7 底径:6.9 垂直部ぐり抜き後打ち欠き整形	密	良好	外面:灰白色 内面:にい黄橙色	外面ぐり抜き前の スヌ付着	
B14	2382	D5 VI-2型	第181回 PL76-3	土玉	長:△3.5 幅:4.2 厚:3.7 長:3.4 幅:3.4 厚:2.8	ふつう	ふつう	褐色		
B15	6388	H8 VI-2型	第181回 PL76-3	土玉	長:3.4 幅:3.4 厚:2.8	ふつう	ふつう	明黄褐色		
B16	1276	F6 擦毛	第182回	弥生土器 直	口径:△16.8 外面 口縁部3条の凹凸線 腹部直帯、ハケメ 内面 口縁部ヨコナデ 腹部以下ケズリ後ナデ	ふつう	ふつう	外面:明黄褐色 内面:浅黃褐色		
B17	922	H4 排水溝	第183回	弥生土器 腹	口径:10.5 身高:△7.3 外面 ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ 腹部以下半ケズリ下半 ナデ	やや 密	やや 良好	外面:淡赤褐色 内面:淡黄褐色	外面スヌ付着	
B18	4629	II 壁面清掃	第183回	弥生土器 腹	口径:△7.8 身高:△7.1 外面 ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ 腹部ミガキ 腹部1+2×2条 の凹線 沈線による痕跡文×3 内面 口縁部ヨコナデ 腹部以下ケズリ後ミガキ	ふつう	ふつう	内外面:にい黄橙色		
B19	2626	K9 表土剥ぎ	第183回	弥生土器 瓶形土 器	身高:△12.3 口径:△3.0 外面 ハケメ 唇部ヨコナデ 底口確認△に断面三 角形突起點付け 内面 ケズリ 唇部ハケメ	密	良好	外面:灰白色 内面:灰色		
B20	2147	I2 排水溝	第183回	土師器 空	口径:△21.2 身高:△3.9 外面 口縁部ヨコナデ 斜削ハケメ 内面 口縁部ヨコナデ 斜削風化のため不明	ふつう	ふつう	内外面:灰白色		
B21	73	G6 排水溝	第183回	土師器 坏身	身高:△2.1 口径:△1.5 外面 回転ナデ 内面 回転ナデナデ 底部不定方向ナデ	ふつう	良好	内外面:灰白色		
B22	2977	H1 排水溝	第183回	瓦質土器 引巻	口径:△18.1 身高:△10.3 外面 口縁部ヨコナデ 縫合ユビオサエ 内面 口縁部ヨコナデ 斜削ハケメ	密	良好	内外面:灰色	外面スヌ付着	
B23	164	G5 擦毛	第183回	土師器 坏	口径:10.9 身高:△6.4 外面 回転ナデ 回転糸切り 内面 回転ナデ	ふつう	やや 良好	外面:にい黄橙色 内面:浅黃褐色		
B24	2415	I5 表土剥ぎ	第183回 巻頭6-1	青磁 碗	身高:△5.5 底径:△5.6 外面 薄底身 斜輪 内面 斜輪 高台内需給	密	良好	内外面:明オリーブ灰 色	竈泉窯系	
B25	2422	H6 表土剥ぎ	第183回 巻頭6-1	青磁 小皿	口径:△7.6 身高:△1.5 外内面 斜輪	密	良好	内外面:オリーブ灰色	竈泉窯系	
B26	2422	H6 表土剥ぎ	第183回 巻頭6-1	青磁 碗	身高:△4.3 外面 薄底身 斜輪 内面 斜輪	密	良好	内外面:オリーブ灰色	竈泉窯系	
B27	2518	J9 表土剥ぎ	第183回 巻頭6-1	青花磁 小皿	身高:△2.8 外面 火炎宝珠文 内面 宝取縁子文?	密	良好	内外面:灰白色	津州窯系	
B28	6400	表探	第183回 PL46-3	土錐	長:5.5 幅:3.8 厚:3.7	ふつう	ふつう	褐色		

表50 石器・石製品觀察表

遺物 番号	取上 番号	搏回 PL	遺構 層位名	種類	石材	法量(cm)		重量(g)	備考
						※復元值 △現存值			
S1	3264	第29回 PL76-4	SD67	紡錘車	凝灰岩	長:△4.8 幅:△2.9 厚:2.2		210.0	
S2	3171	第32回	SK101 I層	砾石	砂岩	長:11.2 幅:7.5 厚:5.4		684.4	
S3	3157	第58回	I6 IV層	砾石	凝灰岩	長:8.9 幅:4.9 厚:2.9		160.1	
S4	349	第65回	B6 V層	砾石	凝灰岩	長:16.6 幅:6.4 厚:6.3		896.8	
S5	346	第65回	B3 第2面棱出	砾石	花崗岩	長:6.8 幅:3.2 厚:4.2		133.8	
S6	6015	第62回 PL70-4	SI3 床面直上	砾石	凝灰岩	長:8.4 幅:3.6 厚:2.5		82.8	
S7	5950	第62回 PL70-4	SI3 覆土	砾石	花崗岩	長:9.7 幅:11.5 厚:4.4		709.9	
S8	1880	第95回 PL50-7	SE1-P1 2層	剝片	綠色凝灰岩	長:12.9 幅:10.2 厚:6.5		776.6	玉素材
S9	5264	第113回 PL70-4	土器集中15	砾石	花崗岩	長:9.1 幅:5.3 厚:3.0		216.6	
S10	4692	第145回 巻頭4	SK196	管玉	綠色凝灰岩	長:1.5 徑4.7 孔徑2.4		0.4	
S11	2890	第146回 PL85-5	SK85	石核	綠色凝灰岩	長:19.2 幅:14.2 厚:9.7		2507.8	玉素材
S12	4422	第162回 PL70-4	I6 VI層	砾石	綠色片岩	長:13.0 幅:5.2 厚:1.4		138.1	
S13	4379	第162回	K8 VI層	砾石	泥岩	長:8.8 幅:5.4 厚:2.5		192.0	
S14	1617	第162回	E2 VI-1層	砾石	花崗岩	長:8.7 幅:6.2 厚:3.2		182.5	
S15	5277	第162回 PL70-4	H5 VI層	砾石	花崗岩	長:11.7 幅:3.8 厚:3.5		363.1	
S16	3183	第162回 PL70-4	H6 VI層	砾石	花崗岩	長:6.9 幅:5.9 厚:4.0		215.4	
S17	4221	第162回 PL70-4	I3 VI層	砾石	粘板岩	長:9.5 幅:2.4 厚:1.1		50.1	
S18	1390	第162回 PL70-4	E6 VI-1層	砾石	粘板岩	長:7.4 幅:3.7 厚:1.1		51.5	
S19	1820	第162回 PL70-4	G2 VI-1層	砾石	粘板岩	長:9.9 幅:3.4 厚:0.8		41.6	
S20	4737	第162回 PL76-4	I7 VI層	剝片	綠色片岩	長:9.2 幅:1.8 厚:0.7		16.3	磨製石器?
S21	4392	第162回 PL76-4	K7 VI層	石錘	デイサイト	長:9.7 幅:4.8 厚:1.1		69.7	
S22	4369	第162回 PL76-4	L8 VI層	石核	綠色凝灰岩	長:4.2 幅:3.8 厚:1.9		38.1	被熱
S23	5722	第181回 PL76-4	H5 VI-2層	施溝分割片	綠色凝灰岩	長:3.8 幅:2.2 厚:2.4		25.2	
S24	2616	第181回 PL76-4	G3 VI-2層	剝片	綠色凝灰岩	長:3.9 幅:5.0 厚:1.8		30.9	被熱
S25	3962	第183回 PL76-4	排水溝	石包丁	綠色片岩	長:4.6 幅:△6.7 厚:0.7		36.2	

表51 木製品観察表

※復元値 △現存値

遺物 番号	取上 番号	持因 PL	遺構 層位名	種類	法量(cm)	備考
W1	3472	第30回	SK102 5層	曲物底板	長径: 12.9 短径: 12.7 厚: 0.8	
W2	3663	第31回 PL44-6	SK114 5層	漆器皿	口径: 7.7 器高: 1.1 底径: 5.8	内外面黒漆、内面に朱漆文様
W3	3507	第31回	SK114 3層	箸	長: 23.1 幅: 0.7 厚: 0.5	
W4	3514	第31回	SK114 4層	箸	長: 22.5 幅: 0.7 厚: 0.4	
W5	3514	第31回	SK114 4層	箸	長: 19.0 幅: 0.8 厚: 0.6	
W6	3208	第31回	SK114 埋土	箸	長: 18.5 幅: 0.8 厚: 0.7	
W7	5557	第39回 PL45-4	SK137 14層	棚	長: 40 幅: 11.8 厚: 1.0	イスノキ製
W8	5563	第39回 PL45-5	SK137 14層	樹皮素材	長: 10.5 幅: 3.5 厚: 2.8	
W9	4130 4133	第39回	SK147 12層	蓋	長: 40.0 幅: 22.8 厚: 0.9	井戸の蓋か
W10	4115	第40回 PL45-6	SK148 12層	漆器皿	口径: 14.3 器高: 4.0 底径: 7.6	内外面黒漆、内面に朱漆と紫漆で水鳥・鶴・菊花を、外面上に朱漆で菊花を描く。
W11	4201	第40回	SK148 10層	曲物側板	長: 56 幅: 17.5 厚: 0.7	縦で平らにのばされたもの。
W12	4144	第40回	SK174 2層	曲物底板	長径: △17.1 短径: △5.2 厚: 1.2	
W13	4209	第49回	SK152 4層	曲物側板	長: 5.0 幅: 65.2 厚: 0.4	片面に斜め方向の刻みあり
W14	4026	第49回	SK152 4層	曲物側板	長: 6.0 幅: 46.5 厚: 0.5	両面に刻みあり
W15	4046	第49回 PL45-5	SK152 4層	樹皮素材	長: 12 幅: 6.3 厚: 0.9	曲物の縫じに使用中のもの
W16	4212	第49回 PL44-9	SK155 5層	柄杓	口径: 17.5 器高: 9.5 底径: 16.7	
W17	3822	第162回 PL46-7	SK142 4層	漆器椀	口径: 13.0 器高: 5.4 底径: 6.9	内外面黒漆。見込に朱漆で菊花を描く。
W18	—	第162回 春頃1, PL51	SE1	井戸枠	口径: △57.5 器高: △115.8 底径: 59.8	タブノキ製。下段。上段は破片のみ。

表52 鉄器・鉄製品観察表

※復元値 △現存値

遺物 番号	取上 番号	棒圓 PL	遺構 層位名	種類	法量(cm)	重量(g)	備考
F1	3923	第32回 PL76-2	SD68	棒状小铁片	最大長：2.3 最大幅：3.5 最大厚：0.4	12.3	
F2	4471	第32回 PL76-2	SD79	不定形小铁片	最大長：1.7 最大幅：1.9 最大厚：0.3	7.0	
F3	3462	第32回 PL76-1	SK114 2層	不明	最大長：4.5 最大幅：3.0 最大厚：1.5	28.8	
F4	3519	第32回 PL76-2	SD76-1	穿孔具	最大長：5.5 最大幅：1.0 最大厚：0.6	3.9	
F5	3659	第48回 PL76-2	SD110	鐵鍊	最大長：4.5 最大幅：0.8 最大厚：0.4	3.4	
F6	1853	第51回 PL46-4	SK59	軸	最大長：1.7 最大幅：5.3 最大厚：0.6	6.1	
F7	2561	第51回 PL46-4	SK59	工具	最大長：15.4 最大幅：0.8 最大厚：0.5	18.3	
F8	3134	第59回 PL76-1	I5 IV層	刀子	最大長：1.3 最大幅：4.3 最大厚：0.2	5.0	
F9	3153	第59回 PL76-2	I6 IV層	板状小铁片	最大長：2.1 最大幅：1.1 最大厚：0.2	1.7	
F10	3407	第59回 PL76-1	K7 IV層	鐵鍊	最大長：3.5 最大幅：3.5 最大厚：2.1	35.5	
F11	3159	第59回 PL76-2	J3 IV層	鐵鍊	最大長：4.2 最大幅：1.7 最大厚：0.4	7.5	
F12	3149	第59回 PL76-2	J6 IV層	板状小铁片	最大長：2.8 最大幅：0.6 最大厚：0.5	5.0	
F13	3156	第59回 PL76-1	J3 IV層	鐵斧	最大長：4.3 最大幅：2.1 最大厚：0.7	49.6	
F14	3154	第59回 PL76-1	J6 IV層	鐵斧	最大長：7.1 最大幅：4.0 最大厚：0.7	52.2	
F15	341	第66回 PL76-2	C4 V層	刀子	最大長：1.2 最大幅：4.2 最大厚：0.3	6.8	
F16	3981	第66回 PL76-1	H8 V層	板状小铁片	最大長：1.7 最大幅：3.7 最大厚：0.2	5.8	
F17	4119	第66回 PL76-1	L8 V層	鐵斧	最大長：6.0 最大幅：2.6 最大厚：3.5	45.6	
F18	4371	第76回 PL76-1	SII 清掃	軸	最大長：9.2 最大幅：1.3 最大厚：0.4	27.7	
F19	4472	第76回 PL76-1	SII 埋土	鐵鍊	最大長：2.0 最大幅：2.0 最大厚：0.2	5.3	
F20	4472	第76回 PL76-2	SII 埋土	鐵鍊	最大長：2.5 最大幅：1.3 最大厚：0.3	2.2	
F21	4352	第76回 PL76-1	SII 清掃	板状小铁片	最大長：1.9 最大幅：3.6 最大厚：0.3	16.3	
F22	4933	第84回 PL76-1	SD 埋土	刀子	最大長：1.5 最大幅：3.3 最大厚：0.3	9.9	
F23	6141	第91回 PL76-2	SB1-SK3 埋土	棒状小铁片	最大長：4.2 最大幅：0.8 最大厚：0.5	7.3	
F24	4413	第160回 PL76-1	K7 VI層	鐵刃	最大長：7.9 最大幅：5.5 最大厚：0.5	52.4	
F25	1854	第160回 PL76-1	H3 VI-1層	板状铁斧	最大長：7.8 最大幅：3.3 最大厚：0.9	64.5	
F26	1546	第160回 PL76-1	SK61 VI-1層	鉗子	最大長：9.1 最大幅：1.9 最大厚：0.7	13.9	
F27	6125	第160回 PL76-1	K5 VI-2層	刀子	最大長：5.9 最大幅：2.8 最大厚：6.5	16.2	
F28	4395	第160回 PL76-1	H2 VI層	刀子	最大長：3.9 最大幅：1.3 最大厚：0.4	7.9	
F29	4230	第160回 PL76-1	J3 VI層	刀子？	最大長：1.7 最大幅：7.3 最大厚：0.7	38.4	
F30	4370	第160回 PL76-1	I3 VI層	撫鏡	最大長：2.8 最大幅：2.7 最大厚：0.4	19.7	
F31	4294	第160回 PL76-2	J3 VI層	鐵鍊	最大長：3.2 最大幅：2.6 最大厚：0.2	12.9	
F32	4689	第160回 PL76-2	I5 VI層	鐵鍊	最大長：△3.7 最大幅：2.8 最大厚：0.4	26.4	
F33	1609	第160回 PL76-2	E3 VI-1層	板状小铁片	最大長：6.3 最大幅：1.0 最大厚：0.4	15.4	
F34	4484	第160回 PL76-2	H4 VI層	穿孔具	最大長：5.5 最大幅：0.6 最大厚：0.5	8.3	
F35	4433	第160回 PL76-2	J3 VI層	不定形小铁片	最大長：4.3 最大幅：1.7 最大厚：0.4	8.8	

第3章 発掘調査の成果

F36	4387	第160回 PL76-2	H5 VI層	鉄釧	最大長：△3.5 最大幅：1.9 最大厚：0.3	155	
F37	4393	第160回 PL76-2	J7 VI層	鉄釧	最大長：3.7 最大幅：1.3 最大厚：0.4	62	
F38	4293	第161回 PL76-2	J8 VI層	不定形小鉄片	最大長：△0.8 最大幅：△1.2 最大厚：0.2	3.0	
F39	4671	第161回 PL76-2	K5 VI層	不定形小鉄片	最大長：1.4 最大幅：2.1 最大厚：0.1	2.3	
F40	4667	第161回 PL76-2	H5 VI層	不定形小鉄片	最大長：1.4 最大幅：2.3 最大厚：0.2	2.6	
F41	4343	第161回 PL76-2	I3 VI層	不定形小鉄片	最大長：1.9 最大幅：3.2 最大厚：0.5	16.0	
F42	1377	第161回 PL76-2	E5 VI-1層	板状小鉄片	最大長：1.8 最大幅：2.4 最大厚：0.2	4.1	
F43	5726	第161回 PL76-2	J3 VI層	板状小鉄片	最大長：2.0 最大幅：2.6 最大厚：0.3	5.9	
F44	4258	第161回 PL76-2	H4 VI層	板状小鉄片	最大長：3.9 最大幅：2.6 最大厚：0.6	8.0	
F45	3900	第161回 PL76-2	I3 VI層	板状小鉄片	最大長：1.5 最大幅：2.4 最大厚：0.3	4.7	
F46	4518	第161回 PL76-2	I5 VI層	板状小鉄片	最大長：2.1 最大幅：1.3 最大厚：0.4	12.0	
F47	1612	第161回 PL76-2	F2 VI-1層	板状小鉄片	最大長：4.4 最大幅：1.9 最大厚：0.3	27.7	
F48	4231	第161回 PL76-2	I4 VI層	板状小鉄片	最大長：4.3 最大幅：1.8 最大厚：0.5	12.3	
F49	6075	第161回 PL76-2	K5 VI-2層	板状小鉄片	最大長：3.8 最大幅：2.2 最大厚：1.3	15.4	
F50	4473	第161回 PL76-2	I2 VI層	不定形小鉄片	最大長：2.3 最大幅：2.5 最大厚：0.8	5.7	
F51	1375	第161回 PL76-2	E3 VI-1層	板状小鉄片	最大長：3.7 最大幅：0.8 最大厚：0.3	3.4	
F52	4427	第161回 PL76-2	J6 VI層	板状小鉄片	最大長：1.4 最大幅：4.0 最大厚：0.3	9.6	
F53	5894	第161回 PL76-2	J3 VI層	不定形小鉄片	最大長：3.8 最大幅：1.9 最大厚：0.5	15.6	
F54	4364	第161回 PL76-2	I3 VI層	板状小鉄片	最大長：3.9 最大幅：2.6 最大厚：0.6	9.6	
F55	6348	第167回 PL76-2	SD191	穿孔具	最大長：3.7 最大幅：0.5 最大厚：0.2	1.8	
F56	5841	第182回 PL76-1	H4 VI-2層	刀子	最大長：1.1 最大幅：7.6 最大厚：0.3	14.8	
F57	5733	第182回 PL76-1	H3 VI-2層	刀子	最大長：1.1 最大幅：5.0 最大厚：0.4	15.9	
F58	2421	第182回 PL76-1	C2 VI-2層	刀子	最大長：4.4 最大幅：1.5 最大厚：0.4	6.7	
F59	5902	第182回 PL76-2	H4 VI-2層	板状小鉄片	最大長：2.6 最大幅：1.7 最大厚：0.2	4.7	
F60	2822	第182回 PL76-1	G6 VI-2層	簪	最大長：4.8 最大幅：1.7 最大厚：1.0	9.4	
F61	5732	第182回 PL76-2	H3 VI-2層	穿孔具	最大長：4.5 最大幅：0.8 最大厚：0.4	6.9	
F62	3975	第184回 PL76-1	K6 排水溝	鉄刃	最大長：5.6 最大幅：6.1 最大厚：1.4	245.4	

表53 金属製品観察表

※復元値 △現存値

遺物番号	取上番号	排回 PL	追様 層位名	種類	法量 (cm)	重量 (g)	備考
M1	3273	第30回	SK115 5層	天聖元宝	径：2.44 厚：0.14	3.1	北宋錢。1023年初鑄。
M2	4279	第159回 巻頭4-3	I3 VI層	破鏡	長：3.8 幅：3.1 厚：0.6	25.4	方格規矩鏡（後漢鏡）

表54 動物遺体観察表

※復元値 △現存値

遺物番号	取上番号	排回 PL	追様 層位名	種類	法量 (cm)	備考
B1	2553	第51回 PL46-5	SK59	二枚貝	長：5.9 幅：5.3 厚：0.4	貝杓子か
B2	2442	第51回 PL46-5	SK59 15層	二枚貝	長：7.4 幅：5.7 厚：0.3	貝杓子か
B3	2629	第51回 PL46-6	SK59	クマネズミ	長：3.9 幅：2.2 厚：1.3	擾乱からの混入の可能性あり

第4章 自然科学分析

第1節 土坑SK137から出土したウマの骨について

鳥取大学農学部共同獣医学科 保坂 善真

1 概要

秋里遺跡は弥生時代および、平安時代から鎌倉時代にかけての2つの時代が重なって存在する遺跡である。本遺跡の土坑SK137より大型動物(ウマあるいはウシ)と思われる動物骨がまとまって出土した(写真2)。土坑SK137は第4章第2節の放射性炭素年代測定結果で述べるとおり、西暦1,000年前後(平安時代)であることが明らかとなった。鳥取県内での大型動物の骨の出土報告は、古墳時代の長瀬高浜古墳群のウマ(井上1985)や平安時代の大柄遺跡のウマやウシの頭蓋骨(門脇2017)などがあるが、平安時代のある程度まとまつた、ほぼ1個体分の出土例の報告はほとんどない。本報告ではこの動物骨を形態学的に解析し、動物種の同定および体高と年齢の推定を行つた。さらに、形態学的特徴からこの動物骨がウマである可能性が高まったので、ミトコンドリアDNAを抽出し既報の別種ウマのDNA配列と比較することで、この動物骨(ウマ)の起源を推定した。

2 出土の状況および出土した動物骨の特徴

動物骨は円筒状に掘削された土坑(井戸と考えられる)の底部より出土した。骨は解剖学的位置を維持せず、関節はそのほとんどが外れ(外され)ており、規則性なく重なっていた(写真2)。また、上顎骨および下顎骨の一部、頸椎、仙椎(一部)、尾椎(一部)、四肢骨および肋骨等を確認できたが、頭蓋部、胸椎、腰椎、寛骨の大部分(右の寛骨および左恥骨および坐骨)は見つからなかった。重複する部位がなかったことから出土したのは1個体分であると推定される。出土した骨の一覧と特徴を第185図と表55に示した。

出土した骨を形態学的に解析したところ、中手骨および指(趾)骨がすべて1本であること、中手(足)骨の遠位端の滑車(関節面)が1つであること、末節骨が扇状(蹄骨様)の形態を示すこと、大腿骨の外側部に第三転子と思われる突起が発達していること、脛骨遠位に斜行する脛骨ラセンが見られること、等の形態学的な特徴が見られた(図3)。これらはすべてウマに見られる特徴である。加えて、前臼歯(永久歯)の表面を電子顕微鏡で観察したところ、比較的大きな円形から不規則なかたちのくぼみが多数観察された(写真4)。これはエナメル小柱と呼ばれるものであり、ウマでは大型で不規則な形態を示すことが知られている(小沢ら 2006)。

3 ウマの体高

形態学的な特徴より出土した動物骨はウマであると推定できた。この動物骨を、Dreish (1976) の方法に基づいて骨の最大長GLを計測し、林田と山内(1957)の宮崎県の在来馬である御崎馬をもとに作成した推定式に当てはめて体高を推定した。推定体高は99.94-115.7cmであった(表56)。

4 ウマの性別および年齢

保存状態の良い上顎骨の歯の萌出状況を指標にウマの性別および年齢を推測した。上顎骨の切歯と

前臼歯間に歯冠部が確認できた。Cはウマの場合、オスのみで確認できることから、出土したウマはオスであることが分かる。さらに3本の上顎前臼歯(P2～P4)は萌出の途中で上顎骨中に埋もれており、乳歯(IP2～IP4)がP2～P4を覆っていたこと、第一および第二後臼歯M1、M2はすでに生えそろっていたのに対し第三後臼歯M3はその歯冠部がわずかに萌出していた。このような歯の状態は、現生では3歳半前後のウマに見られる。

5 ミトコンドリアDNA解析による本ウマの起源の推定

出土したウマの歯髄および長骨骨髓から5検体のRNA抽出を試み、さらにcDNAを作成した。Kokaiら(2008)の方法を参考に、ウマミトコンドリアDNAのコントロール部位(15437–15847)をPCR増幅し、得られた增幅産物をシークエンスした。その結果、以下の配列を得た。

(15437) CAAAGCTGAAATTCTACTTAAACTATTCCTTGATTTCTTCCCTAAACGACAA-
CAATCCGCCCTCATGTGCTATGTCAGTATCAGATTATACCCCCATATAACAC-
CATACCCACCTGACATGCAATATCTTATGAATGGCCTATGTACATCGTGCATTAAATT-
GTTCGCCCATGAATAATAAGCATGTACATAATATCATTATCTTACATGAGTACAT-
TATATTATTGATCGTGATACCCCATCCAAGTCAAATCATTCCAGTCACACGCATAT-
CACAAACCCATGTTCCACGAGCTTAATCACCAAGCCGGGAAATCAGCAACCCCTCTAAC-
TACGTGTCCAATCCTCGCTCCGGGCCATCCAAACGTGGGGTTCTACAATGAAAC-
TATACCTGGCATCT

(15847)

この配列の相同意性をデータベース検索したところ、複数のウマのミトコンドリア配列と一致していた。また、このウマのその中で、上記Kakoiら(2008)の論文中で同定した「H-28」群に属する配列と完全一致した。H-28は、日本では対州馬、アジア大陸ではモンゴル在来馬に存在する配列である。また、データベース検索の結果では、雲南馬とも解析した部分の塩基配列が完全に一致している。

6 まとめ

秋里遺跡の土坑SK137より出土した動物骨は、西暦1,000年頃の3歳半前後の雄ウマであると推定する。

骨が解剖学的位置を維持していなかったこと(すなわち、関節部が外れた状態で出土し、さらには一部の骨が見当たらなかった)や、若齢であることを考慮すると、このウマは食肉として殺処分後、解体され、その残部となった骨が土坑中に遺棄された可能性が考えられる。これまで、鳥取県内では平安時代のウマの骨がある程度まとめて出土した例はほとんどないことから、本資料は同時代のウマの利用を理解する上で貴重であるといえよう。

日本の在来馬は、アジア大陸の在来馬に由来すると考えられている。今回出土したウマのミトコンドリアDNAの配列が大陸系在来馬であるモンゴル馬や中国の雲馬と一致したことや、現存種の対州馬にも同じ配列が認められたことより、このウマが大陸から日本に導入された個体の子孫である可能性が極めて高い。また今、このウマの体高は、約100–116cmの範囲であると算出したが、林田・山内

(1957)の体高推定式は小型馬に分類される御崎馬を元に作成されたものである。遺伝的背景を考慮すると、実際の体高は異なる可能も十分に考えられるが、これは推測の域を出ない。

今後、本資料のさらなる解析を重ねることで、情報の少ないこの時代のウマの解剖学的特徴に加え、鳥取県内でのウマの流通や利用の状況を推測することができるだろう。

本報告をするにあたり、本調査の機会と貴重な助言を与えてくださった、鳥取県埋蔵文化財センター発掘事業室の松井 潔 室長ならびに、高橋 章司 文化財主事兼係長に心より感謝する。ウマの同定にあたっては、報告者が所属する教室が保存する骨格標本に加え、馬事文化財団馬の博物館(横浜市)および鹿児島大学総合研究博物館(鹿児島市)が所蔵する骨格標本を参照させていただいた。馬の博物館学芸部の伊丹 徳行 学芸員および、鹿児島大学共同獣医学部の松元光春教授に深謝する。

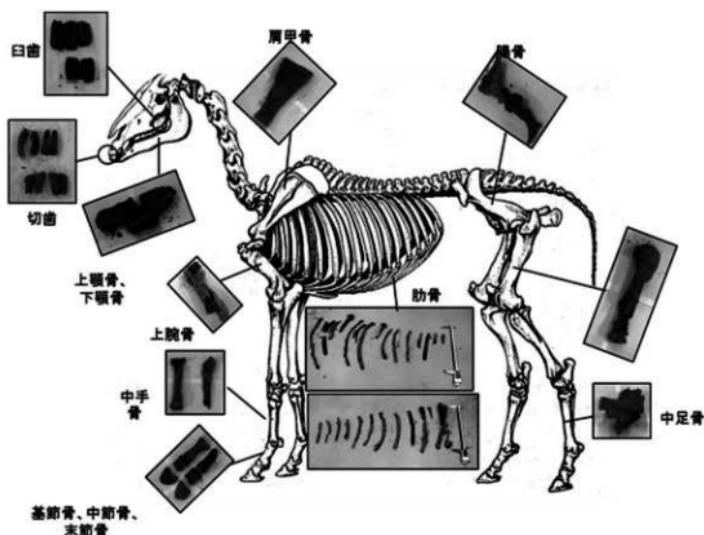
加えて、ミトコンドリアDNA解析にあたっては、報告者と同教室の割田 克彦 准教授にはRNA抽出を(公財)競走馬理化学研究所の戸崎 晃明 博士および岐阜大学応用生物科学部共同獣医学科の高須 正規 准教授にはRNAの增幅およびシーケンス解析をそれぞれ担当していただいた。なお、割田、戸崎および高須の各氏はDNA解析における共同研究者である。

参考文献

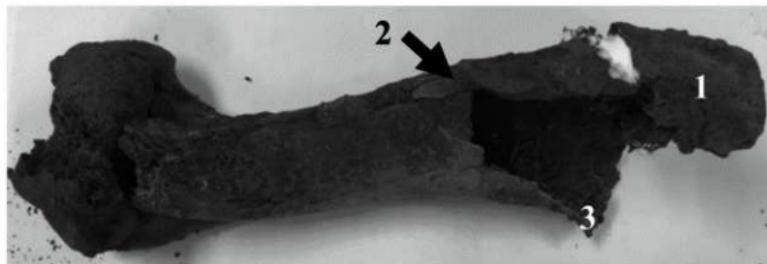
- ・ 井上貴央、長瀬高浜遺跡発掘調査報告書(本文編)第8節 長瀬高浜遺跡より出土した人骨と動物遺体について、鳥取県教育文化財団、pp 285-312、1983
- ・ 門脇隆志、大柄遺跡Ⅰ 第9項動物遺存体、鳥取県教育委員会、pp 289-294、2017
- ・ Dreisch, Angela von Den. A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Museum Bulletins 1, Harvard University Press, 1976
- ・ 林田重幸、山内忠平、鹿児島大学農学部学術報告、ウマにおける骨長より体高の推定法、6: pp 122-126、1957
- ・ 小澤幸重、エナメル質比較組織ノート、第8章有蹄類Ⅱ 奇蹄類、わかば出版、pp 26-137、2006
- ・ Kakoi H, Tozaki T, Kawahara H. Molecular analysis using mitochondrial DNA and microsatellites to infer the formation process of Japanese native horse populations. Biochem Genet 45: 375-395. 2007
- ・ Kakoi H, Tozaki T, Kawahara H. Molecular analysis using mitochondrial DNA and microsatellites to infer the formation process of Japanese native horse populations. Biochem Genet. 2008, 46: 101-104.



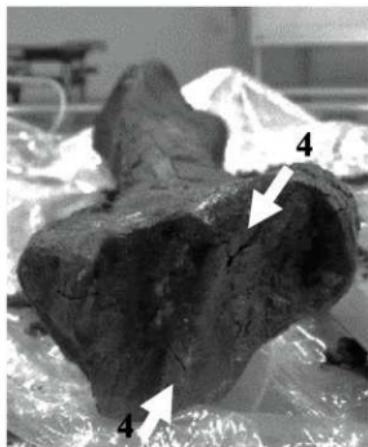
写真2 ウマの骨の出土状況。土坑を上方から見る。



第185図 出土骨の全身骨格との比較図。出土した骨が一部であることが分かる。



大腿骨



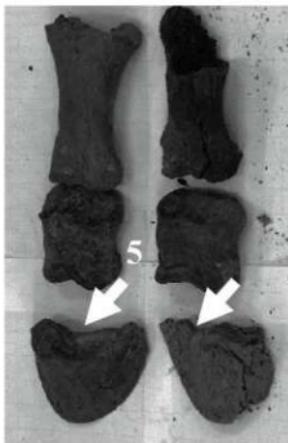
脛骨

写真3 出土骨の解剖学的特徴

大腿骨：大転子(1)のほか、突起状に発達した第三転子(2)や小転子(3)、顆上窓も発達していた。

脛骨：遠位端を内果および外果に分ける脛骨ラセン(4)がみられた。

末節骨：扇形の蹄骨(5)であった。



基節骨、中節骨、末節骨

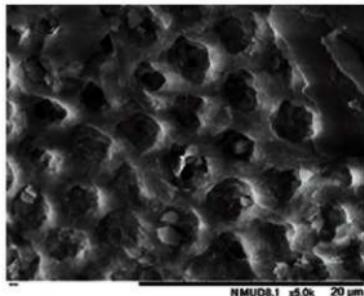


写真4 歯の表面の電子顕微鏡像

臼歯表面でウマに特徴的な大型で不規則な形状のエナメル小柱(くぼみ)が見られた。

表55 出土した骨の特徴

出土骨	特徴など
上顎骨	頭蓋部は存在しない。左右の切歯 I ではエナメルヒダ、黒窩、歯根がみられた。また、C が萌出していた。上顎前臼歯 3 本 P2～P4 は萌出の途中で、上顎骨中に埋もれ、乳歯 IP2～IP4 が P2～P4 を覆っていた。M1、M2 はすでに生えそろっていたが M3 はその歯冠部がわずかに萌出していた。
下顎骨	粗造で広い咬筋窩を持ち、下顎角は緩い弧を描いていた。
頸椎	第 2 から第 5 頸椎と推測される部位が連続して出土した。
仙椎 および尾椎	第 4 および第 5 仙椎が連続して出土した。さらに、連続した尾椎が 6 個確認できた。
肩甲骨	肩甲棘がわずかにみられた。
上腕骨	上腕骨滑車、上腕骨頭がみられた。
中手骨	遠位端には縫合後がみられ、関節面は連続する一面であった。
基節骨	中手骨と関節するのは 1 指につき 1 本のみであった。
中節骨	—
末節骨	様扇形の蹠骨であった。
肋骨	様々な湾曲程度を示し、細い棒状であった。近位端の肋骨頭の形態を確認できる個体はなかった。遠位端面は粗雑なものもあり、肋軟骨が付着していたと思われる。
寛骨	関節可能であったのは腸骨(長骨翼部)のみであり、坐骨、恥骨はみられなかった。
大腿骨	大転子がよく発達し、転子切痕で前・後部に分けられる。骨幹上部には突起状に発達した第三転子や、遠位部では大腿骨滑車および滑車溝が認められた。小転子、頸上窓も発達していた。
脛骨	遠位端を内、外果に分ける溝が斜走する脛骨ラセンがみられた。
中足骨 および趾骨	前肢の中手骨および指骨と類似する形態であった。

表56 最大骨長より推測される体高

	最大骨長(GL) (cm)	推定体高(cm)
肩甲骨	24.09	99.94
上腕骨	24.83	111.7
中手骨	19.36	115.7
大腿骨	33.64	114.3

第2節 放射性炭素年代測定および炭素・窒素含有量測定

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

秋里遺跡(松下地区)は、鳥取県鳥取市江津730ほか(北緯35°31'06"、東経134°12'54")に所在する。測定対象試料は、井戸跡、平地建物跡、土坑から出土した種実、木片、炭化材、ウマの歯等の合計17点である(表57、58)。試料の状態と採取に関するデータを表57に、写真を文末の写真5～7に示した。17点の試料の年代測定を行うとともに、ウマの歯1点については、抽出したコラーゲンの保存状態を確認するために、炭素と窒素の含有量を測定した。また、年代測定試料と同一試料を含む平地建物跡の建築部材12点の樹種同定が実施されている(別稿樹種同定報告参照)。

井戸跡SE1は、木製の井戸枠を持ち、木片3027が上段、木片2346が下段の井戸枠材の破片である。

桃核2498は井戸枠内最下部の埋土から出土した。平地建物跡SI1は、焼失住居と考えられ、洪水によると見られるシルト質土に覆われていた。床面直上や柱穴内で炭化した建築部材(4899、4901、4891、4888、6547、6550)が検出されている。平地建物跡SI3も、焼失住居と考えられ、洪水によると見られる層に覆われている。炭化材6031は床面直上から出土した芯持ち材だが、建築部材かどうかは不明である。炭化材6026、6027は、建築部材と推定されるが、床面から15cm高い位置で出土しているため、この建物に伴うかどうか、不確かさが残る。布掘建物跡SB1は、布掘の掘立柱建物跡で、炭化材5738はその礎板の可能性がある。土坑SK60の覆土には、5枚の焼土と炭化物層が交互に堆積した状況が見られ、繰り返し焚火が行われたと考えられる。ワラ片2381は燃料材と見られる。土坑137は野井戸と考えられ、埋土からウリと見られる種子(4248、5913)と、解体された1頭分のウマの骨(その歯の一部が4585)等が出土した。種子4248はウマの歯4585と同層準、種子5913はウマの歯4585の下層から出土した。SE1、SI1、SI3、SB1、SK60は弥生時代後期後葉、SK137は平安時代と推定されている。

2 測定の意義

試料が出土した遺構の年代を明らかにする。また、SK137から出土したウマの年代を確認する。

3 年代測定試料の化学処理工程

(1) 桃核、木片、炭化材、炭、ワラ片、種子の化学処理

- 1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- 2) 酸-アルカリ-酸(AAA : Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1 mol/l (1 M) の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合には「AaA」と表2に記載する。
- 3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- 4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(2) ウマの歯の化学処理

- 1) 骨・歯試料はコラーゲン抽出(Collagen Extraction)を行う(表2に「CoEx」と記載する)。試料を超純水の入ったガラスシャーレに入れ、ブラシ等を使い、土等の付着物を取り除く。試料をビーカー内で超純水に浸し、超音波洗浄を行う。
- 2) 0.2Mの水酸化ナトリウム水溶液を試料の入ったビーカーに入れ、試料の着色がなくなるまで、1時間ごとに水酸化ナトリウム水溶液を交換する。その後、超純水で溶液を中性に戻す。試料を凍結乾燥させ、凍結粉碎用セルに入れ、粉碎する。リン酸塩除去のために試料を透析膜に入れて1 Mの塩酸で酸処理を行い、超純水で中性にする。透析膜の内容物を遠心分離し、得られた沈殿物に超純水を

表57 試料の状態

測定番号	試料名	試料種別	大きさ・数量・採取位置・ 辺材と心材の別など	色	乾湿	付着物	残試料	備考
IAAA-161476	2498	桃核	2.5×1.5×0.6cmの桃核で、 一部を採取。	浅黄色	乾燥	なし	あり	
IAAA-161477	3027	木片	2.5×0.7×0.6cmの木片(木 取り、芯材/辺材の別不明) で、一部を採取。	褐色	乾燥	土	あり	SE1井戸枠上段の破 片
IAAA-161478	2346	木片	1.8×0.5×0.2cmの木片(木 取り、芯材/辺材の別不明) で、一部を採取。	褐色	乾燥	なし	あり	SE1井戸枠下段の破 片
IAAA-161479	4899	炭化材	3.5×1.8×1.4cmの炭化材 (板目、芯材/辺材の別不明) で、約6年輪あり、最外1年 輪分を採取。	黒色	乾燥	土	あり	SI1の桁と推定。も とは径約7cmの芯持 ち材だが、観察時は 崩壊が進んでいた。
IAAA-161480	4901	炭化材	4.0×4.0×0.6cmの炭化材 (板目、芯材/辺材の別不明) で、一部を採取。	黒色	乾燥	土	あり	SI1の垂木と推定。 もとは径約5cmの芯 持ち材だが、観察時 は崩壊が進んでいた。
IAAA-161481	4891	炭化材	4.0×0.5×0.8cmの炭化材 (板目、芯材/辺材の別不明) で、約6年輪確認され、最 外1~2年輪分を採取。	黒色	乾燥	土	あり	SI1の板壁または板 垂木と推定。もとは 幅約15cm、厚さ約1.5 cmの板材だが、観察 時は崩壊が進んでいた。
IAAA-161482	4888	炭化材	4.5×4.0×1.8cmの芯持ち丸 木の一部(芯材/辺材の別不 明)で、約20年輪以上確認 され、最外2年輪分を採取。	黒色	乾燥	土	あり	SI1-P3の主柱と推定。
IAAA-161483	6547	木片	15.0×2.5×1.0cmの芯持 ち丸木のミカン割断片(芯材/ 辺材の別不明)で、約17年 輪確認され、最外2年輪分 を採取。	褐色	湿	なし	あり	SI1-P2の主柱基礎板 の一部と推定。
IAAA-161484	6550	木片	15.0×3.5×2.0cmの芯持 ち丸木のミカン割断片(芯材/ 辺材の別不明)で、一部を 採取。	明褐色	湿	なし	あり	SI1-P3の主柱基礎板 の一部と推定。
IAAA-161485	6031	炭化材	径2.5×長5.5cmの芯持 ち丸木(辺材)で、外側から一部 を採取。	黒色	乾燥	土	あり	
IAAA-161486	6026	炭化材	3.0×4.0×0.5cmの炭化材 (木取り、芯材/辺材の別不 明)で、一部を採取。	黒色	乾燥	土	あり	板材
IAAA-161487	6027	炭化材	4.0×4.0×0.5cmの炭化材 (木取り、芯材/辺材の別不 明)で、一部を採取。	黒色	湿	土	あり	板材
IAAA-161488	5738	炭	3.5×2.8×0.8cmの板目板材 (芯材/辺材の別不明)で、 外側から一部を採取。	黒色	乾燥	土	あり	SB1-P3の縦板
IAAA-161489	2381	ワラ片	3.0×1.0×0.2cm以下のワラ 片10個で、1個を採取。	黒色	乾燥	土	あり	
IAAA-161490	4248	種子	径0.8cm以下の種子2個で、 1個を採取。	黒褐色	乾燥	土	あり	
IAAA-161491	5913	種子	径1.2×0.8cm以下の種子2個 で、1個を採取。	灰褐色	乾燥	土	あり	
IAAA-162413	4585	ウマの歯	6.5×3.0×1.5cmのウマの歯 で、一部を採取。	暗灰色	乾燥	土	あり	

加え、90°Cに加熱した後、濾過する。濾液を凍結乾燥させ、コラーゲンを得る。得られたコラーゲンを2つに分け、一方を年代測定用、他方を炭素・窒素含有量測定用の試料とする。

3)抽出した試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。

以下、(1)~(4)以降と同じ。

4 年代測定試料の測定方法

加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、14Cの計数、13C濃度(13C/12C)、14C濃度(14C/12C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HO₂II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 炭素・窒素含有量測定試料の化学処理工程と測定方法

3)抽出の工程で、コラーゲンを得る。

3)抽出したコラーゲンをEA(元素分析装置)で燃焼し、N₂とCO₂を分離・定量する(表60)。

この測定には、標準試料としてアセトアニリドを用い、元素分析装置(EA: Thermo Fisher Scientific社製Flash 2000)を使用する。

6 算出方法

(1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の13C濃度(13C/12C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表2)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と記す。

(2) 14C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中14C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0 yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。14C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表58に、補正していない値を参考値として表59に示した。14C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、14C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の14C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の14C濃度の割合である。pMCが小さい(14Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(14Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を58に、補正していない値を参考値として表59に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の14C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の14C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、14C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が14C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない14C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、

プログラムに入力する値とともに参考値として表59に示した。曆年較正年代は、14C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

7 測定結果

測定結果を表58~60に示す。

弥生時代後期後葉と推定されるSE 1、SI 1、SI 3、SB 1、SK60出土試料14点の14C年代は、 2120 ± 20 yrBP(試料4888)から 1870 ± 20 yrBP(試料2498、2381)の間にある。曆年較正年代(1σ)は、最も古い4888が197~112cal BCの間に2つの範囲、最も新しい2498が86~210cal ADの間に3つの範囲で示され、全体として弥生時代中期から後期頃に相当する(藤尾2009、小林2009)。推定される年代に一致すると見られる試料(2498、2381)もあるが、推定よりやや古い値を示した試料の方が多い。このことに関しては、以下の3点を原因として挙げることができる。

第1に、木片や炭化材については、次に記す古木効果によって実際の年代より古い値が示されている可能性がある。樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる(古木効果)。今回測定された木片や炭化材に樹皮は確認されず、辺材と推定されるのも6031のみである。このため、多くは本来よりいくらか古い値を示している可能性がある。

第2に、建築部材には古材を転用する可能性もある。

第3に、2498、3027、2346、4901、6031、6026、6027、5738、2381が含まれる1~3世紀頃の曆年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある(尾崎2009、坂本2010など)。その日本版較正曲線を用いてこれらの測定結果を曆年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

このため、SE 1の試料では桃核2498、SI 1の試料では最も新しい値を示した炭化材4901が遺構の年代に最も近い値を示している可能性がある。

平安時代と推定されるSK137出土試料3点の14C年代は、種子4248が 1110 ± 20 yrBP、種子5913が 1090 ± 20 yrBP、ウマの歯4585が 1070 ± 20 yrBPである。曆年較正年代(1σ)は、4248が898~976cal ADの間に2つの範囲、5913が901~987cal ADの間に2つの範囲、4585が969~1015cal ADの範囲で示される。3点の値は10世紀後半に重なる範囲がある。

種実や木片、炭化材等16点の試料の炭素含有率はすべて50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

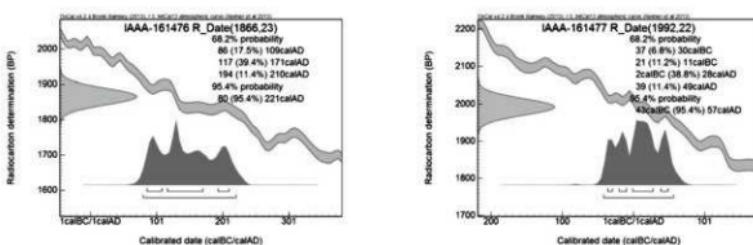
ウマの歯4585の保存状態について検討すると、コラーゲン回収率(=コラーゲン量/処理した試料量)は28%で、コラーゲンの保存状態はおおむね適正と見られる。また、炭素と窒素の含有量も骨コラーゲンとしておおむね適正な値である(van Klinken 1999)。C/N比は、重量比で2.8、モル比で3.3となっており、現生動物骨と同程度と見なされる(DeNiro 1985、Hare and von Endt 1990)。以上のことから、4585の測定結果は試料となった骨コラーゲンの本来の特徴をおおむね問題なく示していると判断される。

文献

- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51 (1), 337–360
- DeNiro, M.J. 1985 Postmortem preservation and alteration of in vivo bone collagen isotope ratios in relation to palaeodietary reconstruction. Nature 317, 806–809
- 藤尾慎一郎 2009 弥生時代の実年代. 西本豊弘編. 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代. 雄山閣. 9–54
- Hare, P. E. and von Endt, D. 1990 Variable preservation of organic matter in fossil bone. Annual Report of Director of the Geophysical Laboratory, Carnegie Institution, Washington, 1989–1990, Geophysical Laboratory, Washington D.C., 115–118
- 小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散. 西本豊弘編. 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代. 雄山閣. 55–82
- 尾崎大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代. 設楽博己, 藤尾慎一郎, 松木武彦編. 弥生時代の考古学 I 弥生文化の輪郭. 同成社. 225–235
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon 55 (4), 1869–1887
- 坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木－弥生から古墳へ－. 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集. (株)加速器分析研究所. 85–90
- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data. Radiocarbon 19 (3), 355–363
- van Klinken, G.J. 1999 Bone collagen quality indicators for palaeodietary and radiocarbon measurements. Journal of Archaeological Science, 26, 687–695

表58 放射性炭素年代測定結果1 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料種別	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC(%)
IAAA-161476	2498	井戸跡SE 1 井戸木枠内 10層	柵核	AAA	-30.38 ± 0.30	1,870 ± 20	79.27 ± 0.23
IAAA-161477	3027	井戸跡SE 1-P1 東側木枠 上段の破片	木片	AAA	-30.20 ± 0.27	1,990 ± 20	78.04 ± 0.22
IAAA-161478	2346	井戸跡SE 1-P1 4層 木製井戸枠下段の破片	木片	AAA	-29.56 ± 0.26	2,000 ± 20	78.01 ± 0.22
IAAA-161479	4899	平地建物SI 1 床面直上 (朽材)	炭化材	AAA	-28.00 ± 0.26	2,080 ± 20	77.20 ± 0.23
IAAA-161480	4901	平地建物SI 1 床面直上 (垂木)	炭化材	AAA	-26.51 ± 0.29	1,990 ± 20	78.02 ± 0.22
IAAA-161481	4891	平地建物SI 1 床面直上 (板壁または板垂木)	炭化材	AaA	-24.79 ± 0.29	2,040 ± 20	77.53 ± 0.22
IAAA-161482	4888	平地建物SI 1-P3 埋土最 上層 (主柱)	炭化材	AAA	-29.65 ± 0.29	2,120 ± 20	76.77 ± 0.23
IAAA-161483	6547	平地建物SI 1-P2 埋土 (主柱の基礎)	木片	AaA	-27.46 ± 0.25	2,100 ± 20	77.02 ± 0.22
IAAA-161484	6550	平地建物SI 1-P3 埋土 (主柱の基礎)	木片	AAA	-27.12 ± 0.28	2,110 ± 20	76.87 ± 0.22
IAAA-161485	6031	平地建物SI 3 床面直上	炭化材	AAA	-27.69 ± 0.24	1,890 ± 20	79.08 ± 0.23
IAAA-161486	6026	平地建物SI 3 覆土	炭化材	AaA	-25.05 ± 0.29	1,930 ± 20	78.61 ± 0.23
IAAA-161487	6027	平地建物SI 3 覆土	炭化材	AaA	-25.09 ± 0.29	1,960 ± 20	78.35 ± 0.23
IAAA-161488	5738	平地建物SB 1-P3 埋土 (布堀建物の基礎)	炭	AaA	-24.82 ± 0.27	1,960 ± 20	78.38 ± 0.22
IAAA-161489	2381	土坑SK60 焼土 2	ワラ片	AAA	-10.46 ± 0.27	1,870 ± 20	79.20 ± 0.22
IAAA-161490	4248	土坑SK137 12層	種子	AAA	-30.04 ± 0.27	1,110 ± 20	87.14 ± 0.26
IAAA-161491	5913	土坑SK137 14層	種子	AAA	-30.00 ± 0.27	1,090 ± 20	87.29 ± 0.25
IAAA-162413	4585	土坑SK137 12層	ウマの歯	CoEx	-18.89 ± 0.29	1,070 ± 20	87.53 ± 0.26



第186図 曆年較正結果(1)

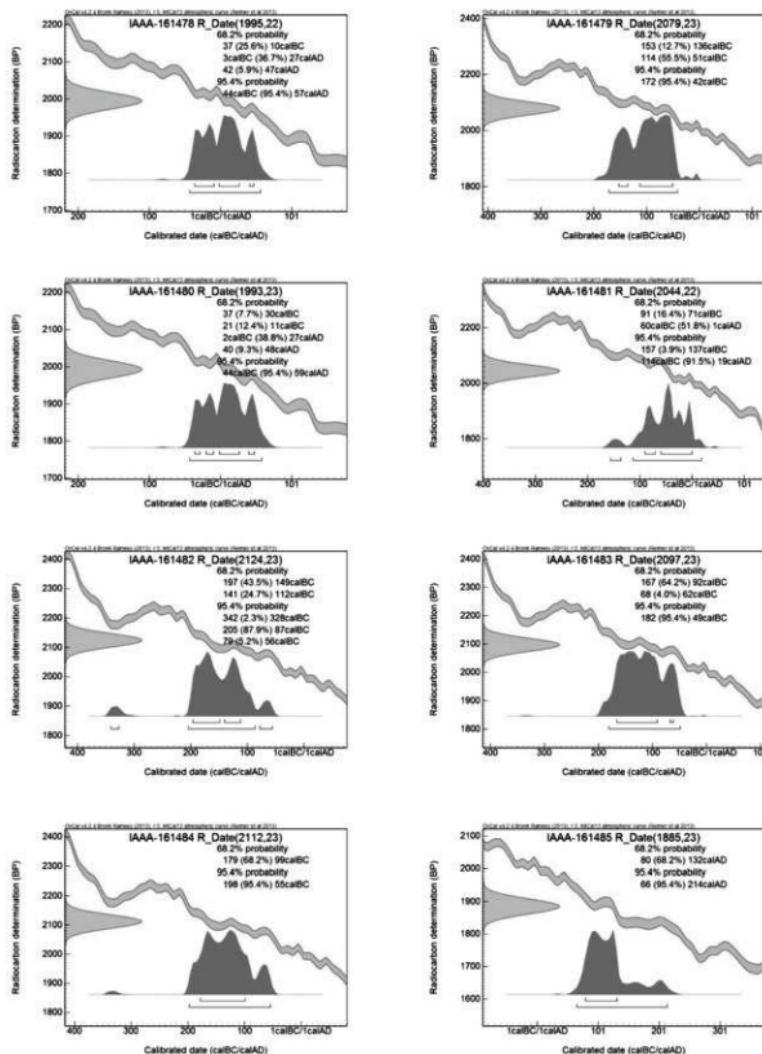
表59 放射性炭素年代測定結果2(δ¹³C未補正值、暦年較正用14C年代、較正年代)

測定番号	δ ¹³ C補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-161476	1,960 ± 20	78.40 ± 0.22	1,866 ± 23	86calAD - 109calAD (17.5%) 117calAD - 171calAD (39.4%) 194calAD - 210calAD (11.4%)	80calAD - 221calAD (95.4%)
IAAA-161477	2,080 ± 20	77.21 ± 0.22	1,992 ± 22	37calBC - 30calBC (6.8%) 21calBC - 11calBC (11.2%) 2calBC - 28calAD (38.8%) 39calAD - 49calAD (11.4%)	43calBC - 57calAD (95.4%)
IAAA-161478	2,070 ± 20	77.28 ± 0.21	1,995 ± 22	37calBC - 10calBC (25.6%) 3calBC - 27calAD (36.7%) 42calAD - 47calAD (5.9%)	44calBC - 57calAD (95.4%)
IAAA-161479	2,130 ± 20	76.72 ± 0.22	2,079 ± 23	153calBC - 136calBC (12.7%) 114calBC - 51calBC (55.5%)	172calBC - 42calBC (95.4%)
IAAA-161480	2,020 ± 20	77.78 ± 0.22	1,993 ± 23	37calBC - 30calBC (7.7%) 21calBC - 11calBC (12.4%) 2calBC - 27calAD (38.8%) 40calAD - 48calAD (9.3%)	44calBC - 59calAD (95.4%)
IAAA-161481	2,040 ± 20	77.57 ± 0.21	2,044 ± 22	91calBC - 71calBC (16.4%) 60calBC - 1calAD (51.8%)	157calBC - 137calBC (3.9%) 114calBC - 19calAD (91.5%)
IAAA-161482	2,200 ± 20	76.04 ± 0.22	2,124 ± 23	197calBC - 149calBC (43.5%) 141calBC - 112calBC (24.7%)	342calBC - 328calBC (2.3%) 205calBC - 87calBC (87.9%) 79calBC - 56calBC (5.2%)
IAAA-161483	2,140 ± 20	76.63 ± 0.22	2,097 ± 23	167calBC - 92calBC (64.2%) 68calBC - 62calBC (4.0%)	182calBC - 49calBC (95.4%)
IAAA-161484	2,150 ± 20	76.54 ± 0.22	2,112 ± 23	179calBC - 99calBC (68.2%)	198calBC - 55calBC (95.4%)
IAAA-161485	1,930 ± 20	78.64 ± 0.23	1,885 ± 23	80calAD - 132calAD (68.2%)	66calAD - 214calAD (95.4%)
IAAA-161486	1,930 ± 20	78.60 ± 0.22	1,933 ± 23	29calAD - 38calAD (8.1%) 50calAD - 86calAD (52.3%) 108calAD - 118calAD (7.7%)	23calAD - 126calAD (95.4%)
IAAA-161487	1,960 ± 20	78.34 ± 0.22	1,959 ± 23	21calAD - 71calAD (68.2%)	37calBC - 9calBC (4.9%) 4calBC - 85calAD (90.5%)
IAAA-161488	1,950 ± 20	78.41 ± 0.21	1,957 ± 22	23calAD - 70calAD (68.2%)	22calBC - 11calBC (2.0%) 2calBC - 86calAD (92.2%) 109calAD - 117calAD (1.2%)
IAAA-161489	1,640 ± 20	81.58 ± 0.22	1,872 ± 22	81calAD - 141calAD (55.3%) 157calAD - 167calAD (5.5%) 196calAD - 209calAD (7.4%)	77calAD - 217calAD (95.4%)
IAAA-161490	1,190 ± 20	86.24 ± 0.25	1,106 ± 23	898calAD - 925calAD (31.5%) 945calAD - 976calAD (36.7%)	890calAD - 989calAD (95.4%)
IAAA-161491	1,170 ± 20	86.40 ± 0.24	1,092 ± 22	901calAD - 921calAD (24.7%) 951calAD - 987calAD (43.5%)	892calAD - 995calAD (95.4%)
IAAA-162413	970 ± 20	88.63 ± 0.25	1,070 ± 23	969calAD - 1015calAD (68.2%)	898calAD - 924calAD (16.7%) 944calAD - 1020calAD (78.7%)

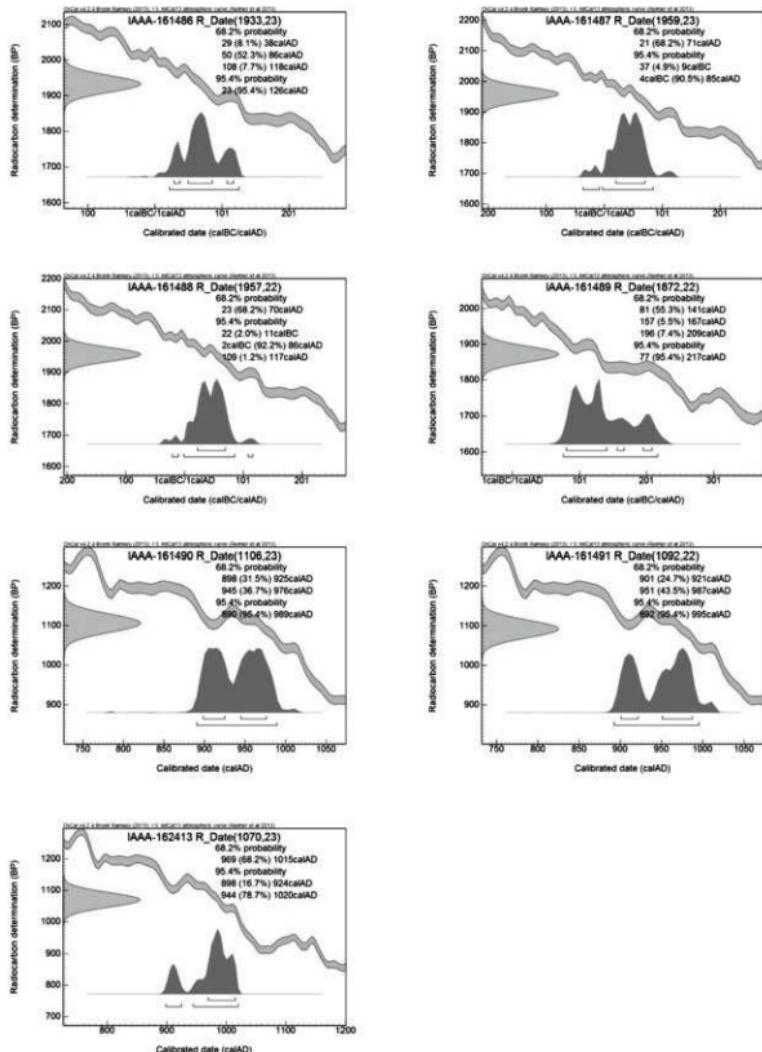
[参考値]

表60 炭素・窒素含有量

試料名	C含有量(%)	N含有量(%)	C/N重量比	C/Nモル比
4585	42.8	15.2	2.8	3.3



第187図 曆年較正結果(2)



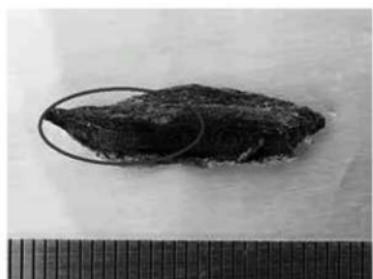
第188図 歴年較正結果(3)



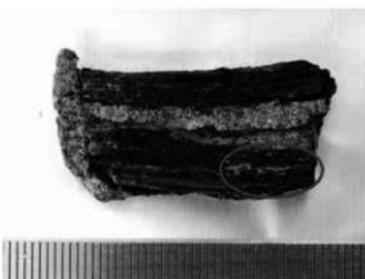
試料2498



試料3027



試料2346



試料4899



試料4901



試料4891

写真5 測定対象試料(1)



試料4888



試料6547



試料6550



試料6031

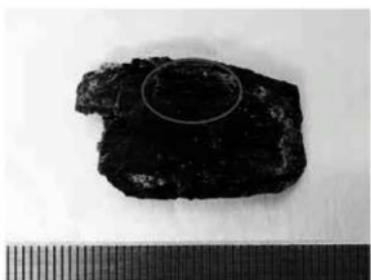


試料6026

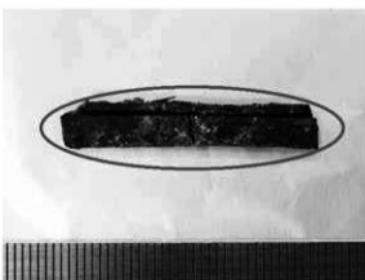


試料6027

写真6 測定対象試料(2)



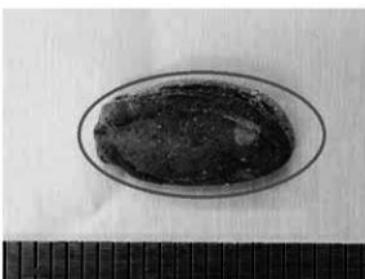
試料5738



試料2381



試料4248



試料5913



試料4585

写真7 測定対象試料(3)

第3節 樹種同定

(株)加速器分析研究所

はじめに

本報告では、鳥取県鳥取市に所在する秋里遺跡で検出された平地建物跡から出土した建築部材と考えられる木材・炭化材を対象として、木材利用を検討するための樹種同定を実施する。

1 試料

試料は、S I 1(平地建物)から出土した部材10点とS I 3(平地建物)から出土した部材2点の合計12点である。このうち、S I 1のNo6547,6550の2点が生の木材、その他の10点は炭化材である。木材の木取り等を表61に記載した。これらの建物跡は、弥生時代後期後葉と推定されている。

なお、樹種同定対象試料と同一試料を含むS I 1、S I 3出土試料の放射性炭素年代測定が実施されており、弥生時代後期や、それよりやや古い中期頃の年代値が示されている(第2節参照)。

2 分析方法

生木は、剃刀を用いて木口(横断面)・柵目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入してブレパラートとする。ブレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。炭化材は自然乾燥させた後、3断面の割断面を作製して实体顕微鏡および走査型電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。各試料の観察で確認された特徴を現生標本と比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やRichter他(2006)を参考にする。

3 結果

樹種同定結果を表61に示す。建築部材は、全て針葉樹で、3分類群(スギ・ヒノキ・ヒノキ科)に同定された。なお、試料4896は破損が激しく、スギかヒノキ科かの区別ができず、スギまたはヒノキ科とした。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・スギ(*Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

炭化材は全ての試料、全ての年輪で早材部が破損しており、晩材部のみの観察である。分野壁孔の形態が観察できないが、晩材部が広いことと、晩材部に樹脂細胞を持つことからスギと判断した。

・ヒノキ(*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型~トウヒ型で、1分野に1-3個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・ヒノキ科(Cupressaceae)

いずれも全ての年輪で早材部の大部分が破損し、晩材部を中心に観察を実施した。軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。早材部での分野壁孔が観察できないため、形態の詳細は不明。放射組織は単列、1-10細胞高。

表61 樹種同定結果

遺構名	位置	試料番号	状態	木取り	推定部位	種類
SI1 (平地建物)	-	4901	炭化材	板目状(もとは径約5cmの芯持材)	垂木	スギ
	-	4902	炭化材	板目状	垂木	ヒノキ科
	-	4903	炭化材	板目状	垂木	スギ
	-	4899	炭化材	破片(もとは径約7cmの芯持材)	桁	ヒノキ
	-	4891	炭化材	板目状(板材)	板壁または板垂木	スギ
	-	4892	炭化材	板目状	壁	スギ
	-	4896	炭化材	板目状	壁	スギまたはヒノキ科
	-	4888	炭化材	破片(径4.5cmの芯持材)	主柱	ヒノキ科
	P2	6547	生木	破片	主柱の礎板	スギ
	P3	6550	生木	破片	主柱の礎板	スギ
SI3 (平地建物)	-	6026	炭化材	破片	建築部材	スギ
	-	6027	炭化材	破片	建築部材	スギ

4 考察

S I 1 および S I 3 から出土した木材・炭化材は、全て針葉樹であり、3種類(スギ・ヒノキ・ヒノキ科)が認められた。いずれの種類も木理が直線で割裂性や耐水性が比較的高い。

S I 1 は弥生時代後期後葉の平地建物と考えられる焼失住居である。木材2点は主柱の礎板、炭化材は芯持材や板材で、垂木・桁・壁・主柱等の部材が推定されている。部位別にみると、垂木はスギとヒノキ科、桁はヒノキ、壁はスギおよびスギまたはヒノキ科、主柱はヒノキ科、礎板はスギである。いずれの部材も、分割加工が容易で耐水性の高い木材を利用している。また、資料数が少ないが、垂木・壁・礎板ではスギを中心とした木材利用が見られた可能性がある。

S I 3 は、弥生時代後期後葉の焼失した平地建物跡と考えられており、炭化材は建築部材と考えられている。樹種はいずれもスギであり、S I 1 と同様の木材利用が推定される。ただし、今回樹種同定の対象とした試料は床面よりも15cm高い層準から出土し、弥生時代後期から古墳時代初頭までに形成された洪水末端のシルト質土に含まれるため、S I 3 に伴わない可能性もある。

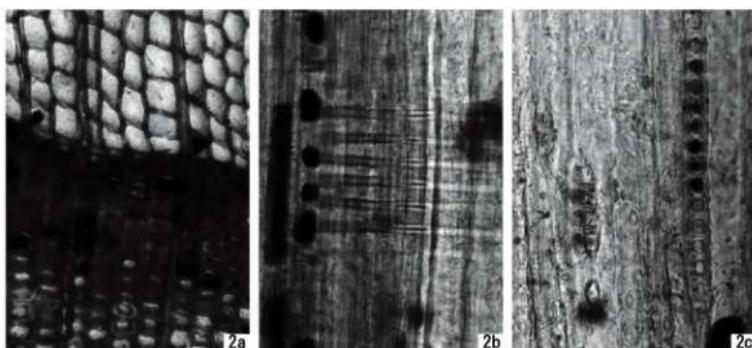
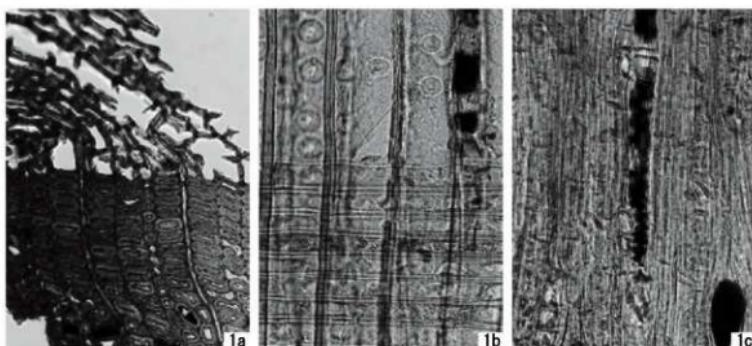
秋里遺跡では、過去に行われた調査で出土した弥生時代後期～古墳時代初頭の建築部材について樹種同定が実施されており、柱根にスギを中心にヒノキが混じる組成、礎板にスギを中心にクリ、ヤマグワ、シイが混じる組成が確認されている(伊東・山田,2012)。一方、堅穴住居跡の建築部材と考えられる炭化材では、広葉樹の利用が多い。針葉樹の利用は、鳥取県内の事例として湯梨浜町(旧羽合町)の南谷大山遺跡で棟木・柱・桁・垂木・板にスギが確認された例があるが、その他の大部分は広葉樹材である(伊東・山田,2012)。本遺跡の結果は、広葉樹が認められず、スギを中心とした針葉樹で構成されており、堅穴住居跡とは異なる木材利用を示す可能性がある。

文献

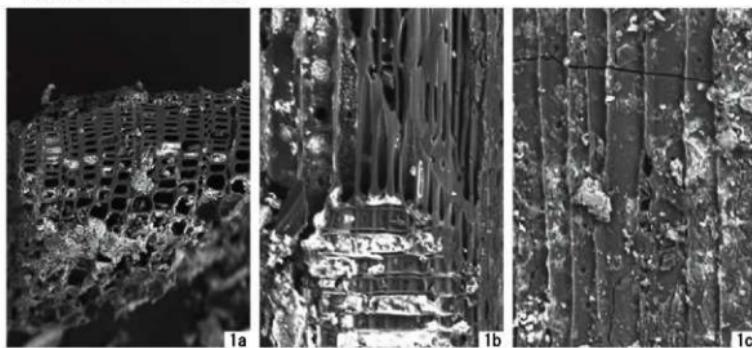
伊東隆夫・山田昌久(編), 2012. 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社. 449p.

Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E.(編), 2006. 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修). 海青社, 70p. [Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

島地謙・伊東隆夫, 1982. 図説木材組織. 地球社. 176p.



1. スギ(SII: 6547)
2. スギ(SII: 6550)
a : 木口, b : 矢目, c : 板目



1. スギ(SII: 4901)
a : 木口, b : 矢目, c : 板目

— 100 μm : a
— 100 μm : b, c

写真8 木材および炭化材(1)

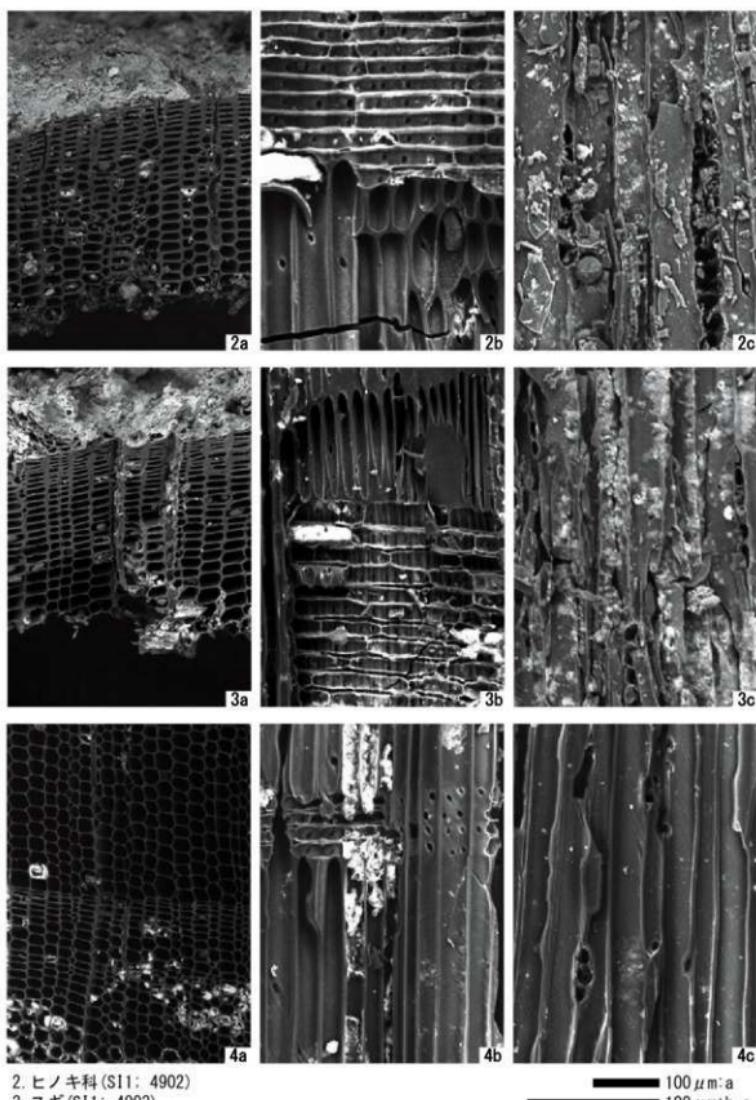
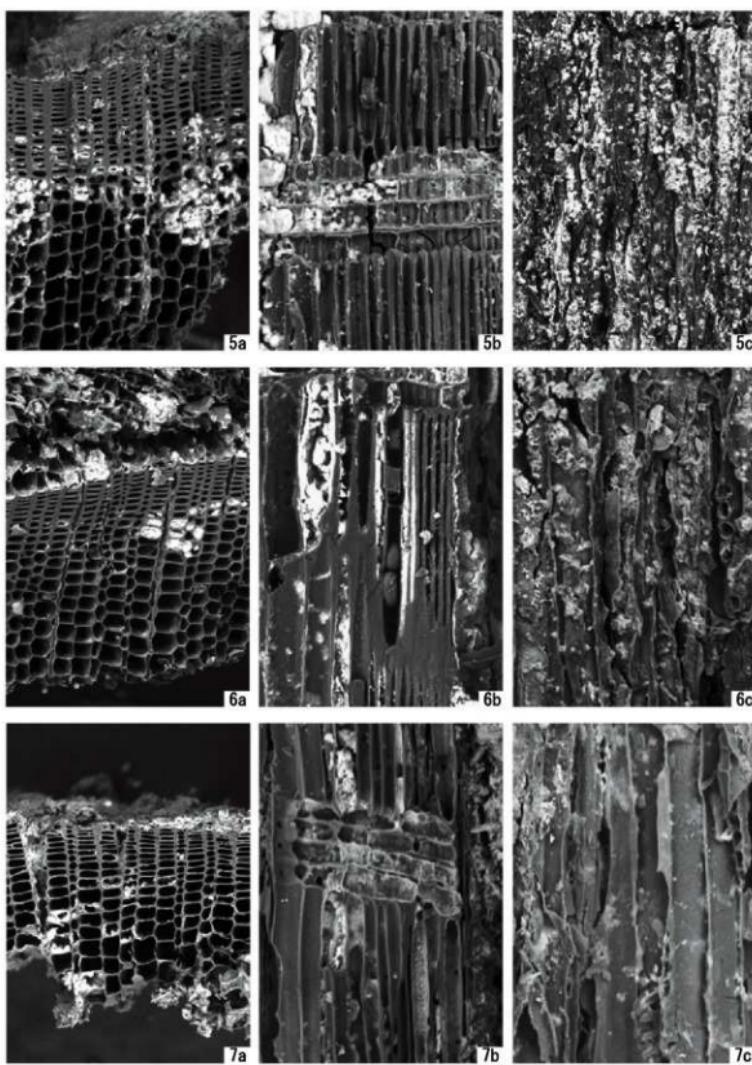
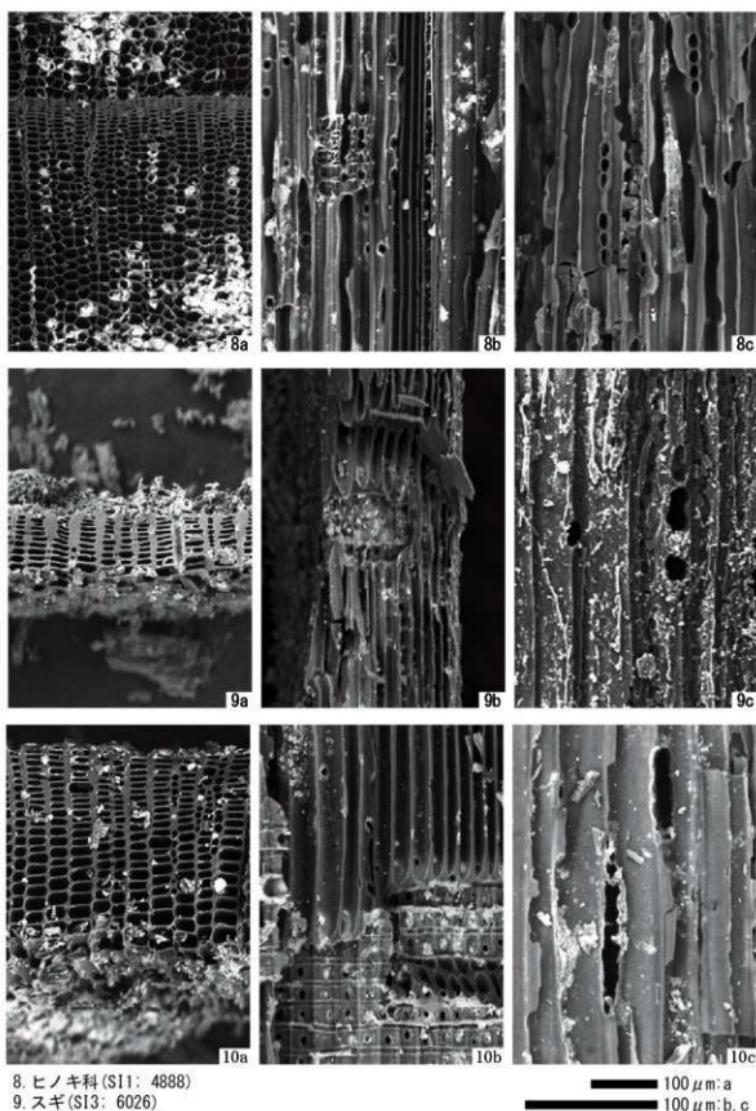


写真9 炭化材(2)



5. スギ (SII: 4891)
 6. スギ (SII: 4892)
 7. スギまたはヒノキ科 (SII: 4896)
- a : 木口, b : 柾目, c : 板目

写真10 炭化材(3)



— 100 μm : a
— 100 μm : b, c

写真11 炭化材(4)

第4節 土壤分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、秋里遺跡の土地利用に関する情報を得ることを目的として、下記する具体的課題に対する自然科学分析調査を実施する。

- 1) 弥生時代後期の井戸SE 1 埋土最下部の機能期に形成されたとみられる堆積物について珪藻分析を実施し、当時の水質に関する情報を得る。
- 2) 弥生時代後期と推定される家畜小屋の可能性がある遺構SI 4が確認されており、その柵跡内の凹地に遺構機能期に擾乱されたとみられる堆積物が確認されている。家畜小屋とすればリン酸などが富化されている可能性があると考え、その検証を行う。
- 3) 弥生時代後期の布掘建物跡SB 1 の柱穴に横位で埋設されていた土器内の内容物に関する情報を得ることを目的として、リン・炭素・カルシウム分析を実施する。
- 4) 調査区が位置する氾濫低地の堆積物からは弥生時代後期～中世前半までの遺構が確認されている。調査区が位置する氾濫低地の土地利用状況や古環境に関する情報を得ることを目的として、珪藻・花粉・植物珪酸体分析を実施する。

1 調査区の層序概要

調査区は千代川の氾濫低地に位置する。今回の分析調査対象とした調査区内の堆積層のうち、Ⅲ層～Ⅶ層の層相について、不搅乱状態で採取されている堆積物試料の観察結果に基づいて、出土遺物から推定される形成考古年代と合わせて以下に記載する。

Ⅲ-3層：中世後半

塊状構造。極細粒砂～細粒砂混じり泥。生物擾乱著しい。上部ほど泥がち。

IV層：中世前半

壁状構造。極細粒砂～細粒砂混じり泥。生物擾乱著しい。

V層：古墳時代前期～律令期

塊状構造。極細粒砂質シルト。生物擾乱著しい。

VI-1層：弥生時代後期～古墳時代初頭

塊状構造。シルト質細粒～中粒砂。生物擾乱。泥で充填された棲管あり。

VI-2層：弥生時代後期

塊状構造。シルト質中粒砂。細粒砂・粗粒砂混じり。生物擾乱。泥充填棲管あり。

VII層：無遺物層(弥生時代後期以前)

粗粒砂・シルト混じり細粒砂～中粒砂。生物擾乱。粗粒砂充填棲管。

現地調査を実施していないため、詳細な堆積層の層相状況や土壤化の状況について言及できないものの、VII層からIII-3層は河川からの洪水によって供給された氾濫原堆積物に由来すると判断される。構成層が全体的に泥質であることから、試料採取地点は、供給源となる流路からやや離れた場所に位置していたか、もしくは当時の流路が下刻傾向にあったとみられる。また、堆積物を構成する碎屑物の粒度が上方細粒化していることから、氾濫等の影響は上位層ほど小さくなっていると推定される。

2 弥生時代後期の井戸SE 1 の水質に関する検討

2-1 試料

井戸枠内充填堆積物下部には井戸機能期に形成されたと推定される腐植を含む泥質粗粒砂から砂質泥が積層している。今回の分析調査では、この機能期と推定される堆積物の性状、特に水質に関する情報を得ることを目的として、珪藻分析による生物学的特性、pHおよび電気伝導率(EC)測定による化学的特性を把握する。分析試料は、機能期と推定される層準から採取された、含水率の高い腐植質砂質泥～泥質砂からなる。なお、電気伝導度測定値は古環境推定に対して、海成・非海成の判定に有効性をもつとされる(横山・佐藤,1987)。

2-2 方法

(1) 硅藻分析

湿重約3gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のブリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が検出できた後は、示準種等の重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努めた。

珪藻の同定と種の生態性については、Horsfi Lange-Bertalot(2000)、Hustedt(1930-1966)、Krammer & Lange-Bertalot(1985～1991)、Desikachari(1987)などを参考にする。

群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類する。結果は、生態分類も含め、同定・計数結果の一覧表として表示する。

(2) pH・電気伝導度

pH(H₂O)はガラス電極法、電気伝導率は白金電極法でそれぞれ行った(土壤標準分析・測定法委員会,1986、土壤環境分析法編集委員会,1997)。以下に各項目の操作工程を示す。

1) 分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。

2) pH(H₂O)

風乾細土試料10.0gを秤とり、25mlの蒸留水を加えてガラス棒で攪拌する。30分間放置後、再びガラス棒で懸濁状態とし、pHメーター(ガラス電極法)でpH(H₂O)を測定する。

3) 電気伝導率(EC)

風乾細土試料10.0gを秤とり、50mlの純水を加えて1時間振とうする。振とう後、すみやかに電気伝導率計(白金電極法)で電気伝導率(mS/cm)を測定する。

2-3 結果

(1) 珪藻化石の産状

SE1充填堆積物からは珪藻化石が全く検出されなかった。

(2) pH・電気伝導度

分析結果を表62に示す。pH(H₂O)が4.1とごく酸性であり、ECが0.87mS/cmと砂質であることを考慮するとやや高い。さて、バリウムイオンは2価の陰イオンと結合し、沈殿をつくる(Ba(2+)+SO₄(2-)→BaSO₄↓)ことが知られている。今回の分析試料のpHが4付近であることから、可溶性硫酸塩(塩化バリウム反応)を確認すると、白色沈殿が見られたため、硫酸根が多く含有していると考えられる。ただし、その絶対量や存在形態については未確認である。

表62 井戸SE1の土壤理化学分析結果

遺構名	No.	野外土性	土色		pH(H ₂ O)	電気伝導率(mS/cm)	可溶性硫酸塩(塩化Ba反応)
SE1-PI	3026	SL	5Y2/1	黒褐	4.1	0.87	有り

注：(1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修、1967)による。

(2) 土性：土壤調査ハンドブック(ペドロジー学会編、1997)の野外土性による。

SL…砂壤土；粘土0~15%、シルト0~35%、砂65~85%

(3) 塩化Ba反応で可溶性硫酸塩の有無を確認した。

2-4 考察

今回の井戸充填堆積物腐植質砂質泥からは、珪藻化石が全く検出されなかった。珪藻化石が産出しなかった原因として、井戸内が珪藻の生育に適さない堆積場(光合成ができないような場所)であった、あるいは堆積後に分解消失している可能性が考えられる。

一方、電気伝導度は、0.87mS/cmとやや高い値を示した。横山・佐藤(1987)による大阪層群の海成粘土層Ma4~Ma6の海成・淡水成層の粘土混潤水の電気伝導度とpHの測定結果が同一サンプルにおける海成珪藻含有率とよい相関を示すこと、電気伝導測定値が0.4mmS/cm以下であれば淡水成、0.4~1.2mmS/cmであれば汽水成、1.3mmS/cmであれば海成の堆積環境を示すと判定している。今回の井戸充填堆積物の電気伝導度は、汽水成堆積物の値を示している。硫酸根の存在と合わせると、機能期の堆積物は汽水成層ということになる。ただし、井戸の基底堆積物が海成の可能性がある粘土層からなることから、井戸機能期に井戸壁側より供給された塩分の可能性もある。この点については、今後井戸の基底粘土層の電気伝導度との比較検討が必要である。

3 弥生時代後期の遺構SI4の性格に関する検討

3-1 試料

弥生時代後期と推定される家畜小屋の可能性がある遺構SI4が確認されており、その構跡内の凹地に遺構機能期に擾乱されたとみられる堆積物が確認されている。家畜小屋とすればリン酸などが富化されている可能性があると考え、その検証を行う。対象資料として、上記のVI-1層の分析結果を参考にする。

3-2 分析方法

全炭素は乾式燃焼法、全リン酸は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解-原子吸光法でそれぞれ行った(土壤標準分析・測定法委員会、1986、土壤環

境分析法編集委員会,1997)。以下に各項目の操作工程を示す。

1) 分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5mm篩を全通させ、粉碎土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

2) 全炭素

粉碎土試料を0.1000g～1.0000gを石英ポートに秤量し、乾式燃焼法により全炭素含量を測定する。使用装置は、ヤナコ分析工業製CNコーダーである。分析値及び加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全炭素量(T-C乾土%)求める。

3) リン酸、カルシウム含量

粉碎土試料100gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸(HNO₃)約10mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸(HClO₄)約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P2O₅)濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P2O₅mg/g)とカルシウム含量(CaOmg/g)を求める。

3-3 結果及び考察

土壤化学分析結果を表63に示す。全炭素はNo.6221で1.07%と、比較試料より約2倍多く、No.6222は比較試料と同量である。全リン酸はNo.6222で2.53mg/g、他の試料は2.10-2.16mg/gと同量である。全カルシウムは3.62-4.40mg/gと比較試料より多く保持する。

一般的に炭素含量は、主に植生繁茂の指標として用いられ、その炭素の集積量は主に植物遺体供給量に規定される。気候的要因による植生の繁茂状態が、炭素含量に大きく影響を与えるとされる。そして、リン酸の多くが植物に由来することが知られている。

リンは生物にとって主要な構成元素であり、動植物中に普遍的に含まれる元素であるが、特に人や動物の骨や歯には多量に含まれている。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壤中に還元され、土壤有機物や土壤中の鉄やアルミニウムと難溶性の化合物を形成することがある。特に活性アルミニウムの多い火山灰土では、非火山性の土壤や沖積低地堆積物などに比べればリン酸の固定力が高いため、火山灰土に立地した遺跡での生物起源残留物の痕跡確認にリン酸含量は有効なことがある。

土壤中に普通に含まれるリン酸含量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが(Bowen,1983;Bolt·Bruggenwert,1980;川崎ほか,1991;天野ほか,1991)、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0mg/g程度である。また、人為的な影響(化学肥料の施用など)を受けた黒ボク土の既耕地では5.5mg/g(川崎ほか,1991)という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壤では6.0mg/gを越える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通1～50mg/g(藤貫,1979)といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。これは、リン酸に比べると土壤中に固定され難い性質による。これら天然賦存量は、遺体の痕跡を明確に判断できる目安として重要ではあるが、天然賦存量以下だからといって遺体埋納を全て否定するものではない。遺体が土壤中で分解した後、その成分が時間経過とともに徐々に系外へと流失し、その結果含量が天然賦存量の範囲となってしまうことも考えられるからである。

今回の調査では、全リン酸・全カルシウムの天然賦存量を超える試料は検出されなかった。No.6221では全炭素とリン酸の関係からも動物由来によるリン酸の特徴的な増加はみられない。No.6222では比較試料と炭素量が同様であるにも関わらず、リン酸・カルシウム成分がわずかに多く保持されているため、何らかの原因により成分が富化した可能性を示す。ただし、あくまで天然賦存量の範囲内であるため、動物由来物質が埋納された可能性を積極的に支持するものではない。

表63 SI4の土壤化学分析結果

遺構名	No.	土色		土性	全炭素	全リン酸	全カルシウム
					(%)	(mg/g)	(mg/g)
SI4-SK1	6221	5Y3/1	オリーブ黒	SiL	1.07	2.16	4.40
SI4-SK2	6222	2.5Y3/2	黒褐	SL	0.59	2.53	3.62
VI-1		2.5Y3/2	黒褐	SL	0.52	2.10	3.35

(1) 土色：新版標準土色誌(農林省農林水産技術会議監修、1967)による。

(2) 土性：土壤調査ハンドブック(ペドロジー学会編、1997)の野外土性による。

SiL…シルト質壤土(粘土0~15%、シルト45~100%、砂0~55%)

SL…砂壤土(粘土0~15%、シルト0~35%、砂65~85%)

4 SB1建物の柱穴内埋納土器の性格に関する検討

4-1 試料

弥生時代後期の建物跡の柱穴に横位で埋設されていた土器内の内容物に関する情報を得ることを目的として、土器内に堆積物2点と、遺構が構築されている基盤堆積物のVI-1層についてリン・炭素・カルシウムの富化状況を確認する。

4-2 分析方法

分析方法は、上述の3節と同様の方法で実施する。

4-3 結果

結果を表64に示す。全炭素は対照試料であるVI-1層試料で0.52%と最も少なく、他の試料では0.69-0.77%と比較試料よりやや多いが大きな差異はない。全リン酸は、2.03-2.11mg/gと一定である。全カルシウムはNo.5736②で比較試料であるVI-1層より多く含有するが、明瞭な差異ではない。このように、今回の調査では、前項で示した全リン酸・全カルシウムの天然賦存量を超える試料は検出されなかった。全炭素の違いは野外土性にみられる違いに由来するものと考えられる。したがって、全炭素とリン酸の関係からは動物遺体由来によるリン酸の特徴的な増加はみられないことから、遺体埋納を推定することは難しい。

表64 埋納土器堆積物の土壤理化学分析結果

遺構名	No.	土色		土性	全炭素	全リン酸	全カルシウム
					(%)	(mg/g)	(mg/g)
SB1-P3	5736①	7.5Y3/1	オリーブ黒	CL	0.69	2.11	3.22
SB1-P3	5736②	5Y3/2	オリーブ黒	HC	0.77	2.03	3.83
VI-1		2.5Y3/2	黒褐	SL	0.52	2.10	3.35

(1) 土色：新版標準土色誌(農林省農林水産技術会議監修、1967)による。

(2) 土性：土壤調査ハンドブック(ペドロジー学会編、1997)の野外土性による。

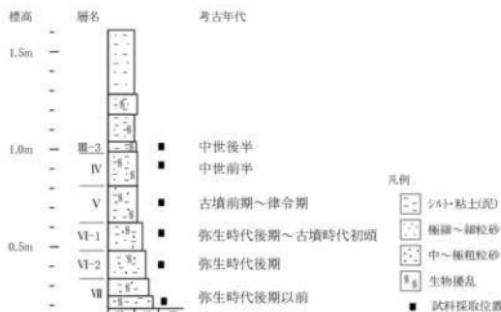
SiL…シルト質壤土(粘土0~15%、シルト45~100%、砂0~55%)

SL…砂壤土(粘土0~15%、シルト0~35%、砂65~85%)

5 調査区の環境変遷

5-1 試料

調査地点の層序および分析層準を模式柱状図として図189に示す。先述したように分析層準各層は河川からの洪水によって供給された氾濫原堆積物に由来すると判断される。



第189図 調査地点の層序模式柱状図

5-2 分析方法

(1) 珪藻分析

珪藻分析は、上述の方法と同様の方法で実施する。

(2) 花粉分析

花粉分析は、約試料10gを秤量し、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mmの篩による篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman (1952,1957)、Faegri and Iversen (1989)などの花粉形態に関する文献や、島倉(1973)、中村(1980)、藤木・小澤(2007)、三好ほか(2011)等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(3) 植物珪酸体分析

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーズ法(杉山2000など)を用いて、次の手順で行う。試料を105°Cで24時間乾燥(絶乾)させた後、試料約1gに対し直径約40μmのガラスピーズを約0.02g添加(0.1mgの精度で秤量)する。電気炉灰化法(550°C・6時間)による脱有機物処理、超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散、沈底法による20μm以下の微粒子除去を順に行う。封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成し、検鏡・計数する。

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分

の精査に相当する。試料 1 gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料 1 g中の植物珪酸体個数を求めた。

表65 珪藻分析結果

種類	生態性			環境指標種	上段：調査地点 下段：層名						
	塩分	pH	流水		1区北壁						
					III-3層	IV層	V層	IV-1層	IV-2層	VII層	
Nitzschia palea (Kuetz.) W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	1	-	-	-	-	-	
Cocconeis placentula var. euglypta (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	2	-	-	1	2	2	
Cocconeis spp.	Ogh-unk	unk	unk		4	-	-	-	-	-	
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-	-	-	-	
Fragilaria spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-	-	-	-	
Melosira varians C.Agardh	Ogh-hil	al-bi	r-ph	K, U	1	-	-	-	-	-	
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-	-	-	-	
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		4	-	-	-	-	1	
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	
海水生種					0	0	0	0	0	0	
海水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	
汽水生種					0	0	0	0	0	0	
淡水～汽水生種					1	0	0	0	0	0	
淡水生種					18	0	0	1	2	3	
珪藻化石総数					19	0	0	1	2	3	

凡例

塩分・pH・流水に対する適応性

HR	：塩分濃度に対する適応性	pH	：水素イオン濃度に対する適応性	CR	：流水に対する適応性
Euh	：海水生種	al-bi	：真アルカリ性種	l-bi	：真止水性種
Euh-Meh	：海水生種・汽水生種	al-li	：好アルカリ性種	l-ph	：好止水性種
Meh	：汽水生種	ind	：pH不定性種	ind	：流水不定性種
Ogh-hil	：貧塩好塩性種	ac-il	：好酸性種	r-ph	：好流水性種
Ogh-ind	：貧塩不定性種	ac-bi	：真酸性種	r-bi	：真流水性種
Ogh-hob	：貧塩嫌塩性種	unk	：pH不明種	unk	：流水不明種
Ogh-hob	：貧塩嫌塩性種	unk	：pH不明種	unk	：流水不明種
Ogh-unk	：貧塩不明種				

環境指標種

K：中～下流性河川指標種(安藤, 1990)

S：好汚濁性種 T：好清水性種 U：広適応性種(以上はAsai, K. & Watanabe, T. 1995)

5-3 結果

(1) 珪藻分析

分析が行われた6層準のうち4試料から、珪藻化石が検出された(表65)。他の2試料からは、全く認められない。ただし、珪藻化石が認められた4試料は、全体に堆積物中に含まれる量としては少なく、いずれの試料も数個体である。化石の保存状態は、すべて半壊して破片状であるだけでなく、殆ど溶解してシリカの沈着が厚い部分が残っているにすぎないことから、状態としては極々不良である。検出された分類群は、ほぼ淡水生種であり、海水生種あるいは汽水生種等は認められない。

(2) 花粉分析

花粉分析結果を表66に示す。いずれの試料も化石の保存状態は悪く、花粉化石やシダ類胞子の多くに風化の痕跡が認められる。花粉化石は各試料ともに検出数が少なく、多くて10個体程度である。スギ属やカヤツリグサ科、アブラナ科などが認められる。シダ類胞子は上位で多い傾向にあるが、下位ではほとんどみられない。風化の痕跡がある単条溝形のシダ類胞子がほとんどを占める。分析残渣は少なく、フッ化水素酸で溶け残った鉱物のほか、黒褐色の部位・種類不明の植物片が認められる。

表66 花粉分析結果

種類	上段：地點 下段：層名					
	1区北壁					
	III-3層	IV層	V層	VI-1層	VI-2層	VII層
木本花粉						
スギ属	-	-	2	-	2	-
ハンノキ属	1	-	-	-	-	-
ブナ属	-	-	-	-	1	-
ニレ属-ケヤキ属	1	1	1	-	-	-
スイカズラ属	-	-	-	-	1	-
草本花粉						
イネ科	-	-	-	-	1	-
カヤツリグサ科	-	3	-	-	-	-
アカザ科	-	1	-	-	-	-
ナデシコ科	1	-	-	-	-	-
アブラナ科	-	6	-	-	-	-
ヨモギ属	-	1	1	-	-	-
シダ類胞子						
イノモトソウ属	-	3	-	-	-	-
他のシダ類胞子	106	149	71	6	24	-
合計						
木本花粉	2	1	3	0	4	0
草本花粉	1	11	1	0	1	0
シダ類胞子	106	152	71	6	24	0
合計	109	164	75	6	29	0

(3) 植物珪酸体分析

結果を表67、図190に示す。以下に層位ごとに植物珪酸体の産状および特徴を記載する。

VII層は植物珪酸体量が少なく、ヨシ属、ウシクサ族(スキ属を含む)、タケ類が検出される。

VI-2層は、植物珪酸体が約2万個/g検出される。タケ類(特にチマキザサ節)が多く、次いでウシクサ族(スキ属を含む)が多く検出される。

VI-1層は、VI-2層と組成が大きく変わらないが、イネが検出されるようになる。

V層はタケ類(特にチマキザサ節)が多く、イネが減少する。

表67 植物珪酸体分析結果

種類	上段：地點 下段：層名					
	1区北壁					
	III-3層	IV層	V層	VI-1層	VI-2層	VII層
イネ科						
イネ	40	46	6	18	-	-
ヨシ属	-	6	6	6	6	8
キビ族型	-	6	6	-	-	-
スキ属型	6	6	6	30	25	8
ウシクサ族A	6	6	12	30	19	8
タケ亜科						
ネザサ節型	6	6	6	-	-	-
チマキザサ節型	57	52	84	24	44	15
ミヤコザサ節型	6	17	6	6	6	8
未分類等	63	46	36	18	31	15
その他のイネ科						
表皮毛起源	6	6	6	18	6	-
棒状珪酸体	80	93	54	36	19	15
未分類等	63	29	18	55	37	8
合計	333	320	246	243	194	83
その他						
海綿骨針	-	6	-	-	-	-

検出密度(単位: ×100個/g)

Ⅲ-3層、Ⅳ層は、イネが4000個/g程度検出される。V層と同様に、タケ類(特にチマキザサ節)が多い。

5-4 考察

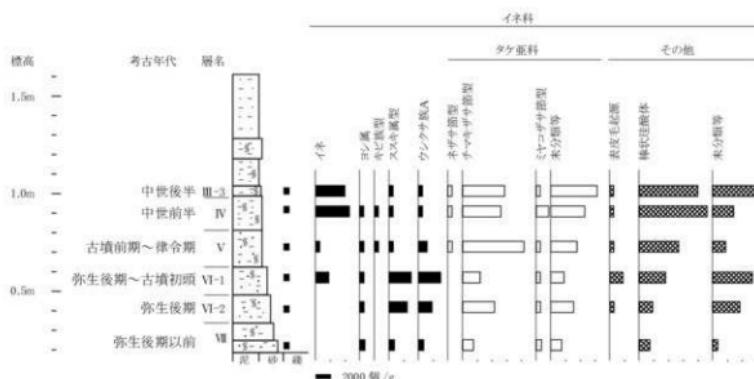
調査地点の堆積物から低率に検出された珪藻種は、*Coccconeis* spp.、*Navicula* spp.、*Pinnularia* spp.、*Stauroneis* spp.等とまた*Coccconeis placentula* var. *euglypta*等が認められた。*Navicula* spp.、*Pinnularia* spp.等は、いずれも湿地に最も特徴的に認められ、主要な構成種になる属である。好流水性種の*Coccconeis placentula* var. *euglypta*は、河川等の流水域の基物(礫等)に大型の藻類と共に付着生育する種である。Asai and Watanebe(1995)は、清浄な水域に生育する種であることから、好清水性種としている。ただ、本分析では、極端に産出率が低いため、検出された少ない個体(種群)から堆積環境の推定を行うのは危険である。本分析結果のように珪藻化石の産出率が低く、化石の保存状態も極めて不良である場合の堆積時の環境は、経験的には、水域ではなく、好気的な環境である場合が多い。陸域の低地などにおける好気的環境、すなわち大気に曝された場所での堆積は、通常は、ほとんど堆積は無いに等しいが、低地などの場合、河川等の氾濫によって堆積が進行する。その場合、堆積速度が速いために、堆積物中の化石の絶対量は少ない傾向にある。また、群集は集水域に生育した種群を巻き込んでくるために、総じて混合群集である。今回の分析結果もこのような產状を示している。

また、花粉化石も少量しか検出されず、花粉・胞子化石全体の9割がシダ類胞子であった。シダ類胞子や針葉樹花粉は、広葉樹花粉と比較して好気的環境下による風化に強い(徳永・山内,1981)。このことから、花粉化石も風化作用の影響を強く受け、分解消失している可能性が高く、シダ類胞子が相対的に多産したと考えられる。

今回調査を実施したⅢ-3層～Ⅶ層は、層相から河川の氾濫堆積物と推定されるが、珪藻・花粉化石の產状を踏まえると、氾濫堆積後の調査地点は離水し、土壤生成が進行するような好気的な場所に変化していたことが推定される。

一方、植物珪酸体分析結果をみると、上位ほど検出量が多くなっている。植物珪酸体は、珪藻化石と同様に珪酸質であるが、珪酸分をより多く含むため、珪藻化石と比べて好気的環境下における分解には強いと思われる。しかしながら徐々に分解することが知られており(近藤,2010など)、珪藻化石と同様分解が進んでいると考えられる。植物珪酸体が下位ほど少ないので、経年による分解が影響していると考えられる。

また、全ての層でタケ亜科が多い。タケ亜科は生産量が多く、風化に強いため、実際の周辺植生よりも高率に検出される。タケ亜科の中でも特に多いチマキザサ節は、積雪地の山地に多く、落葉広葉樹林の林床などに多くみられる。このことから、検出されたタケ亜科珪酸体の多くは、上流の山地に由来すると考えられる。一方、弥生時代後期のVI-2層と弥生時代後期～古墳時代初頭のVI-1層の間を境に、ウシクサ族(ススキ属を含む)が減少し、イネの植物珪酸体が増加する。ウシクサ族(ススキ属を含む)は開けた場所を好み、氾濫原など植生が失われた場所に先駆的に侵入して草地を形成する。このことから、弥生時代後期頃には氾濫低地において稻作が行われるようになり、自然の草地が減少した可能性がある。



第190図 植物珪酸体群集の層位分布

引用文献

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信, 1991, 中部日本以北の土壤型別蓄積率の形態別計量.

農林水産省農林水産技術会議事務局編 土壤蓄積率の再生循環利用技術の開発, 28-36.

Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom, 10, 35-47.

安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 73-88.

Bolt, G. H. & Bruggenwert, M. G. M. 1980, 土壤の化学, 岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽 行訳, 学会出版センター, 309p.

Bowen,H.J.M.1983,環境無機化学-元素の循環と生化学-, 浅見輝男・茅野充男訳, 博友社, 297p.

Desikachariy, T. V., 1987, Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras. Printed at TT. Maps & Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044. 1-13, Plates : 401-621.

土壤環境分析法編集委員会編, 1997, 土壤環境分析法, 博友社, 427p.

土壤標準分析・測定法委員会編, 1986, 土壤標準分析・測定法, 博友社, 354p.

Erdtman G, 1952, Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms (An introduction to palynology. I). Almqvist & Wiksell, 539p.

Erdtman G, 1957, Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteridophyta, Bryophyta (Illustrations) (An Introduction to Palynology. II), 147p.

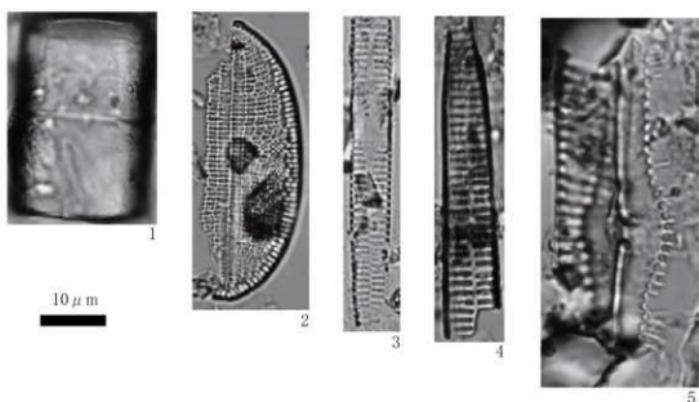
Feagri K. and Iversen Johs., 1989, Textbook of Pollen Analysis. The Blackburn Press, 328p.

藤木利之・小澤智生, 2007, 琉球列島植物花粉図鑑. アクアコーラル企画, 155p.

藤貫 正, 1979, カルシウム, 地質調査所化学分析法, 52, 57-61.

Horst Lange-Bertalot, 2000, ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA : Annotated diatom micrographs. Witkowski,A., Horst Lange-Bertalot, Dittmer Metzeltin: Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1. 219 plts, 4504 figs, 925 pgs.

- Hustedt, F., 1930. Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig. Part 1, 920p.
- Hustedt, F., 1937-1938. Systematische und ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I ~ III. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809p, 1-155p, 274-349p.
- Hustedt, F., 1959. Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig. Part 2, 845p.
- Hustedt, F., 1961-1966. Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig. Part 3, 816p.
- 川崎 弘・吉田 達・井上恒久, 1991. 九州地域の土壤型別蓄積量の形態別計量. 農林水産省 農林水産技術会議事務局編 土壤蓄積量の再生循環利用技術の開発, 23-27.
- 小杉正人, 1986. 陸生珪藻による古環境の解析とその意義 -わが国への導入とその展望-. 植生史研究, 1, 9-44.
- 小杉正人, 1988. 硅藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, (1), 1-20
- 近藤鍊三, 2010. プラント・オパール図譜. 北海道大学出版会, 387p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985. Naviculaceae. Bibliotheca Diatomologica, vol. 9, p. 250.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986. Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa, 2 (1): 876p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988. Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa 2 (2): 596p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990. Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa 2 (3): 576p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991. Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa 2 (4): 437p.
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子, 2011. 日本産花粉図鑑. 北海道大学出版会, 824p.
- 中村 純, 1980. 日本産花粉の標識 I II(図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12, 13集, 91p.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修, 1967. 新版標準土色帖.
- ペドロジー学会編, 1997. 土壤調査ハンドブック改訂版. 博友社, 169p
- 島倉巳三郎, 1973. 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集, 60p.
- 杉山 真二, 2000. 植物珪酸体(プラント・オパール). 辻 誠一郎編著 考古学と自然科学3 考古学と植物学, 同成社, 189-213.
- 徳永重元・山内輝子, 1971. 花粉・胞子・化石の研究法. 共立出版株式会社, 50-73.
- 横山卓雄・佐藤万寿美, 1987. 粘土混濁水の電気伝導度による古環境の推定—千里山丘陵東部端部および琵琶湖湖底におけるボーリング・コアの場合-. 地質学雑誌, 93, 667-679.



1. *Melosira varians* C.Agardh (1区北壁III-3)
2. *Cocconeis placentula* var. *euglypta* (Ehr.) Cleve (1区北壁III-3)
3. *Fragilaria* spp. (1区北壁III-3)
4. *Fragilaria* spp. (1区北壁III-3)
5. *Pinnularia* spp. (1区北壁III-3)

写真12 珪藻化石

第5章 総括

第1節 秋里遺跡SE 1についての検討

はじめに

秋里遺跡では弥生時代後期における井戸1基(SE 1)が検出された。木製井戸枠をもつ井戸としては県内最古であり、弥生時代では2例目の重要な発見である。本節では、山陰地方における弥生時代中期末から古墳時代前期の井戸出土事例との比較検討を行い、秋里遺跡における井戸の特色と意義について述べる。

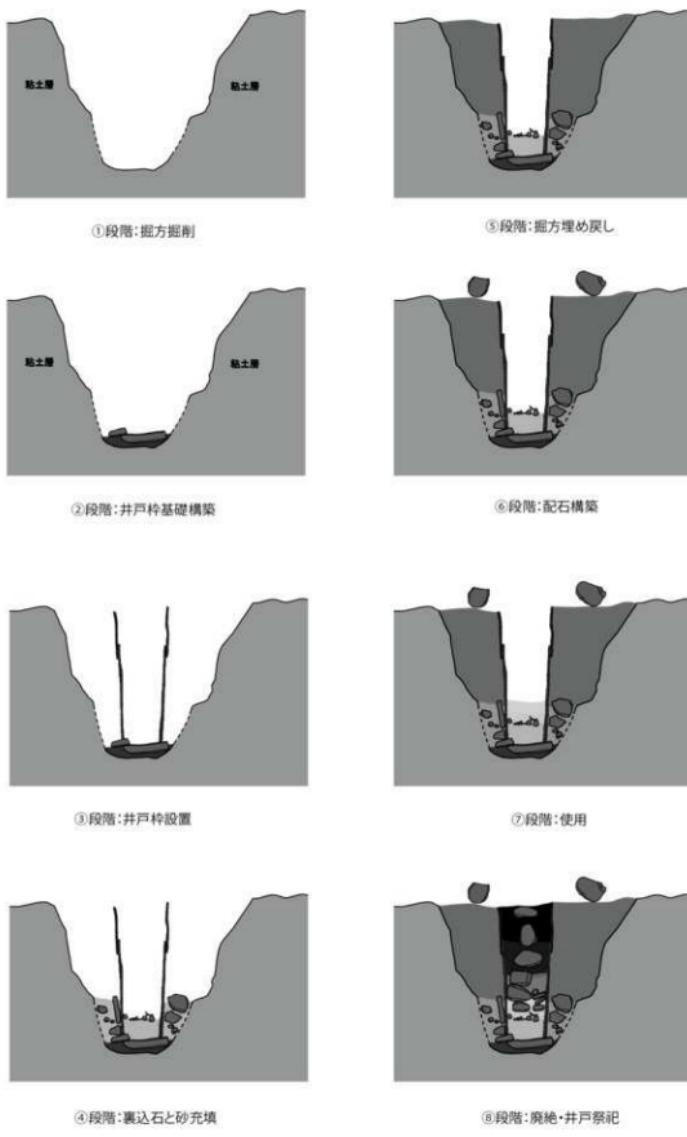
1 秋里遺跡SE 1の構築から廃絶まで

秋里遺跡は旧千代川左岸の標高1~3mの微高地に立地する。遺跡は弥生時代後期から中世までの複合集落遺跡であり、弥生時代の集落中心域は今回の調査地よりも南東寄りであることがこれまでの調査で明らかとなっている。今回発見されたSE 1は、中心域から離れた遺跡の西端部、標高1mの粘土基盤層上で検出され、周囲には土器が一括廃棄された地点が散在し、建物などが希薄なエリアに位置する。

以下、SE 1の構築から廃絶までの過程を復元してみたい(第189図)。

- ①段階：粘土基盤層を平面形直径2.2mの円形、断面は逆円錐形に深さ1.2mほど掘り込み幅狭の平坦面を設ける。さらに断面台形状に水溜部を0.6mほど掘削。
- ②段階：底面に厚さ0.1mの粘土を貼り、井戸枠の基礎となる平石を敷設。
- ③段階：井戸枠の設置。
- ④段階：掘方下段内に裏込石と砂を充填。井戸枠底部にも砂を充填し、土器破片及び小型碟の敷設。
- ⑤段階：掘方上段に①段階で掘削した粘土を埋め戻し。
- ⑥段階：井戸上端に「コ」字状の大小の碟を配し、井戸を空間として区画。
- ⑦段階：使用。
- ⑧段階：廃絶及びそれに伴う井戸祭祀。祭祀行為として大型碟や土器片などを井戸の開口部まで人為的に納置。

①段階の二段掘りは下段の水溜部の掘削や井戸の設置、砂の充填の際の足場と考えられる。②段階の平石は井戸枠の沈下防止と水平確保のためと想定される。③段階の井戸枠は、タブノキの丸太割り抜き材を使用し、高さを確保するため、上下二段に嵌め込む。④段階の裏込石と砂の充填及び土器破片や小型碟の敷設は、地下水の浄化する装置と考えられる。破碎土器が井戸底で見られる事例は他遺跡でも散見される。⑤段階の掘方に埋め戻す土は、掘方掘削の際の粘土層を概ね上層、下層逆転して埋め戻している。⑥段階の碟は、北西を開口部として大型碟を開口部正面の奥、中型碟を両袖部、小型碟を西袖の外側及び大型碟の南東外側に配置する。大型碟は上面が平坦なものが多く、祭壇的な機能を推測させる。⑧段階の碟は、大型の円碟や亜円碟を6段にわたり納置する。土器は完形ではないが、甕などが碟の間隙に詰め込まれている。以上、SE 1のライフサイクルを外観したが、とくに④、⑥及び⑧段階が他遺跡では見られない手の込んだ様相を示している。特に井戸の本来的な機能の地下水の獲得という点で⑥段階の配石は必要とするものではなく、この点は本遺跡における井戸の性格及び他遺跡との違いを示す最大の特色である。



第191図 秋里遺跡SE 1 ライフサイクル模式図

2 山陰地方における弥生時代中期末から古墳時代前期の井戸

山陰地方における弥生時代中期後葉から古墳時代前葉の井戸は、本遺跡SE 1を含め、9遺跡31基が確認された(表68、第190~197図)。現時点では、島根県出雲平野の神戸川流域の低地部に立地する古志遺跡群(下古志遺跡、古志本郷遺跡)が最も多く11基、鳥取県中部の天神川流域の長瀬高浜遺跡での10基が続く。井戸枠を設置しているものは本遺跡SE 1を含め7遺跡10基であり、その痕跡が土層中で確認できる下古志遺跡SE102とSE104を加えると7遺跡12基となり、当該期における井戸全体の3割弱である。以下、集成事例を概観する(1)。

湖山第2遺跡 鳥取市湖山町に所在し、湖山池を望む濃山台地南の崖下、標高2~5mの平地に立地する。弥生時代中期から古墳時代中期まで集落が営まれ、弥生時代終末期の井戸1基が検出されている。

井戸状遺構は、平面形が径1.2mの不整円形、深さは1.65mを測り、底部に向かって窄まる筒形。井戸枠は直径40~55cm、残存高180cmを測り、厚さ3~5cmの弧状に削り抜いたイスガヤの柾目材を2枚組み合わせている。2枚の井戸枠の接合部は同じ樹種の板材で外側から補強されているが、井戸枠本体は土圧によって杏形に変形している。井戸底の最下層は小砾と細かく破碎した土器片を混合して充填しており、その上層に大型砾と完形の直口壺2個体が出土している。これらの土器は井戸の廃絶時に置かれた可能性が高い。

松原田中遺跡 鳥取市湖山池南岸の低地、標高1.5~2mに立地する。古墳時代前期の井戸2基が検出されている。784井戸は、長軸2.26m、短軸1.84m、不整楕円形の素掘り井戸である。断面形は不整な台形を呈し、側壁は崩落により部分的にオーバーハングする。検出面からの深さは0.72mを測る。上層から中層にかけ土器、加工木を含む木材が多く出土し、最下層はほとんど遺物を含まない。

8区987井戸・9区666井戸は、平面形が径1.5mの不整円形、深さは検出面から0.72mを測り、断面漏斗状の二段掘りである。井戸枠は直径53.5~63.0cm、残存高54.8cm、厚さは上部が2.5cm、下部が4.0cmの弧状に削り抜いたクスノキ材を用いている。井戸枠内は最下層に砂砾混じり砂層、土器片を挟んでその上層に砂層や長径2~4cm程度の小石の層が堆積する。これらは浄化層としての機能が推定される。

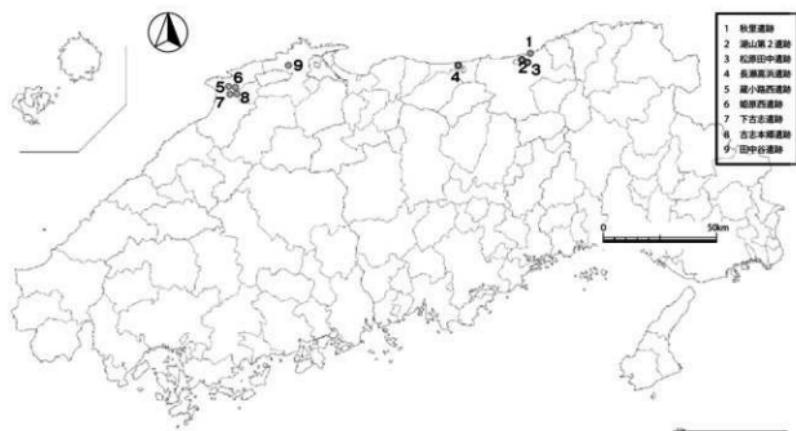
長瀬高浜遺跡 湯梨浜町長瀬字高浜に所在し、天神川河口から約1~1.3km上流の右岸、標高4~10mに立地する。弥生時代から古墳時代を中心とする集落であり、当該期の井戸10基が確認されている。

概ね二段素掘り井戸で上段が大きく開く掘り鉢状となり、下段は直径0.5m前後の水溜部となる。井戸への通路と考えられる溝が取り付く事例が5基みられるのも特色である。

SE01は、長軸4.32m、短軸3.7mの不整円形の二段素掘り井戸である。上段は掘り鉢状に下がり、深さは1.8mである。上段底面中心に長軸0.84m、短軸0.58m、深さ0.34mの水溜部を掘削している。

埋土中に土器小片が出土しているが、多くはない。古墳時代前期前葉に位置付けられる。

SE02は、長軸7m、短軸6mの不整楕円形の二段素掘り井戸である。上段は掘り鉢状に下がり、深さは2.6mにのぼる。底面に直径0.5m、深さ0.6mの水溜部を掘削し、検出面からの深さは3.2mを測る。水溜部には小石と甕の破片を重複して敷き詰めていた。本遺構の西側に長さ5m、幅2.6m、南側に長さ8.7m、幅2mの溝が取り付いている。遺物は、上段埋土中から土器片が出土している。古墳時代前期前葉に位置付けられる。



第192図 山陰地方における井戸の分布(弥生時代中期～古墳時代前期)

SE03は、長軸7.6m、短軸5.8mの梢円形の二段素掘り井戸である。上段は擂り鉢状に下がり、深さは2.4mである。底面2箇所にピットがみられ、水溜部はP2が該当するものと思われる(P1 : 0.77×0.68m、P2 : 0.86×0.77m)。検出面からP2底面までの深さは3.3mを測る。一段目の埋土中から多量の土器が出土し、P2底面の約20cm上面で壺の破片が敷き詰められている。また、本遺構の北端に長さ4.4m、幅2.4mの溝が取り付く。

SE04は、長軸4.0m、短軸4.26mの円形の二段素掘り井戸である。上段は深さ2.02mにわたり擂り鉢状に掘り込まれ、中心部に長軸1.12m、短軸1.0m、深さ0.5mの円形の水溜部が掘削される。検出面から底面までの深さは2.5mを測る。水溜部底面に破碎した土器が敷かれている。古墳時代前期前葉に位置付けられる。

SE05は、長軸8.3m、短軸8.0mの五角形の二段素掘り井戸である。上段は深さ1.2mにわたり擂り鉢状に掘り込まれ、中心部に直径0.5mの円形の水溜部が掘削される。検出面から底面までの深さは2.4mを測る。上段埋土中から多量の土器が出土している。古墳時代前期に位置付けられる。

SE06は、長軸7.4m、短軸3.4m以上の不整円形の二段素掘り井戸である。上段は深さ2mにわたり擂り鉢状に下がり、中心部に長軸2.8m、短軸1m以上の方形の水溜部が掘削される。湧水のため底部まで完掘されていないが、検出面からの深さは2.6m以上である。遺物は土器少量、刀子が出土している。古墳時代前期に位置付けられる。

SE09は、一辺2.5mの隅丸方形の一箇所に長さ2.1m、幅1.5mの突出部を設け、平面形が柄鏡形の二段素掘り井戸である。上段の深さは0.46~0.65m、その中心部に長軸1.45m、短軸1.0mの隅丸方形の水溜部が認められる。湧水のため底部まで完掘されていないが、検出面からの深さは2.9m以上である。遺物は少数で古墳時代前期に位置付けられる。

SE10は、一辺7.0mの隅丸方形の一箇所に長さ3.4m、幅3.3mの突出部を設け、平面形が柄鏡形の二段素掘り井戸である。上段の深さは0.7~1.1m、その中心部に長軸3.4m、短軸2.4mの不整梢円形の水溜部が掘削される。湧水のため底部まで完掘されていないが、検出面からの深さは1.4m以上である。

表68 山陰地方における弥生時代中期から古墳時代前期の井戸

No.	遺跡名	地区	所在地	遺構名	掘方		復元		構造		時期	標高	出土遺物	備考		
					平面形	断面形	長軸	短軸	深さ	井戸枠有無・ 側壁	直径	残存長				
1	秋里遺跡	松下 地区	鳥取県 鳥取市	SE1	円形	二段掘り・ 逆内鑿形	上段2.25 下段1.09	上段2.2 下段1.04	1.77	丸太削抜き 2 段(タブリキ)	上段0.56 下段0.56	上段0.23 下段1.15	弥生時代後 期	10	大型礪、牛生土器 破片、玉作材料、 櫛歯	上部配石。被紺土 器盤、理歯
2	西山第2 遺跡	B区		井戸状遺 構	不要格円 筒形		125	12	1.65	丸太分削削抜 き 2 枚(イヌ ガハ)・外側 板材擁壁	0.55	1.8	弥生時代終 末期	13	定形土器 2 個体 (直口型)。土器破 片	被紺土器盤
3	松原田中 遺跡	3区	鳥取県 鳥取市	784号井	不整長槽	不整筒形	2.26	1.84	0.72	素掘り			古墳時代前 期以降	18	弥生時代後期後葉 段、甕、高輪、波 形盤台等、木製品	
4		8区		8区 987 井戸 9区 666 井戸	不整円形	二段掘り・ 逆面漏斗 状	上段15 下段0.68	上段1.5 下段0.68	0.72	丸太削抜 き(タスノキ)	0.54~ 0.63	0.55	古墳時代前 期	15	古墳時代中期要 素。火薙白・火薙斜偏 木製品	砂輪盤
5	長瀬高浜 遺跡	S54年 度調査 地区	鳥取県 湯梨浜町	SE01	不要円形	二段掘り・ 逆面漏斗 状	上段4.2 下段0.84	上段3.7 下段0.58	2.36	素掘り			古墳時代初 期(長瀬 I 期)	43	土器小片。則先形 鉢製品	
6				SE02	不要格円 筒形	二段掘り・ 逆面漏斗 状	上段7.0 下段0.5	上段6.0 下段0.5	27	素掘り			古墳時代初 期(長瀬 II 期)	46	土器破片。土玉 基盤破片。清2 基盤破片。5.5× 幅2.6×0.6cm、 長5.87×幅2×深 0.08m)	被紺土器盤、清2 基盤破片
7				SE03	不要格円 筒形	二段掘り・ 逆面漏斗 状	上段7.6 下段1.2 0.86	上段5.8 下段2. 0.77	33	素掘り			古墳時代初 期(長瀬 II 期)	48	上段 rim 上中土器 多量(甕・壺・高輪 等)・下段土器 多量・台付鉢類 (直径 4.4×深さ 0.6m)	P2底面被紺土器 多量・清2基盤 (長3.4×深さ 0.6m)
8				SE04	円形	二段掘り・ 逆内鑿形	上段4.0 下段1.12	上段4.26 下段1.0	2.02	素掘り			古墳時代初 期(長瀬 I 期)	39	土器破片	被紺土器盤
9		S55年 度調査 区		SE05	五角形	二段掘り・ 漏斗状	上段8.3 下段0.5	上段8.0 下段0.5	24	素掘り			古墳時代初 期(長瀬 II 期)	60	土器多量。滑石製 勾玉、鐵鏃	
10		S56年 度調査 区		SE06	不要円形	二段掘り・ 漏斗状	上段7.4 下段2.8	上段5.34 下段1.0	26	素掘り			古墳時代初 期(長瀬 II 期以降)	58	土器破片。刀子	
11		H7・8 年度調 査区		SE09	柄鏡形	二段掘り・ 逆凸状	上段2.5 下段1.45	上段2.5 下段1.0	△2.9 以上	素掘り			古墳時代初 期(長瀬 II 期)	36	土器破片	溝接続(長さ2.1× 幅1.5×深さ 0.54m)
12				SE10	柄鏡形	二段掘り・ 逆凸状	上段7.0 下段3.4	上段7.0 下段2.4	△1.4 以上	素掘り			古墳時代初 期(長瀬 II 期)	40	土器破片(瓶形土 器・小型丸底杯・ 小型持形土器)、 鐵鏃、管玉、石錐、 土手椎	溝接続(長さ3.4× 幅0.33×深さ0.69m)
13				SE11	柄鏡形	二段掘り・ 逆凸状	上段5.7 下段1.85	上段5.4 下段1.5	△2.4 以上	素掘り			古墳時代初 期(長瀬 II 期以降)	39	土器多量(甕・壺・ 高輪・管口・小型 器台・瓶・低脚杯 直立型)・小型丸底 杯・瓶形土器)、 鐵鏃、管玉、石錐、 土手椎	溝接続(帶段式、 長さ4.4×幅3.4m)
14				SE12	方形	二段掘り・ 逆凸状	上段5.4 以上 下段2.68	上段4.2 以上 下段2.61	△1.6 以上	素掘り			古墳時代初 期(長瀬 II 期)	40	土器破片。熟練	
15	東小路西 遺跡	B1区	鳥取県 鳥取市	井F3	楕円形	筒形	0.74	0.61	1.02	丸太削抜 き	0.48	0.27	弥生時代終 末期(草田 6期)	43	弥生時代破片多量	被紺土器盤
16	斎原西道 跡	A区		SK11	不要円形	二段掘り・ 断面筒形	上段1.7 下段0.5	上段1.5 下段0.5	1.2	丸太分削削抜 き 5~6 枚	0.35	0.7	弥生時代終 末期	47	定形土器 2 個体。 (甕・壺・直口型)、 土器破片多量。端 石	被紺土器盤
17				SK17	円形	二段掘り・ 断面筒形	上段1.5 下段0.6	上段1.25 下段0.6	1.2	丸太分削削抜 き 5 枚	0.45	0.45	弥生時代終 末期	47	定形土器 2 個体。 (甕・壺・直口型)、 土器破片多量。清 結底盤	被紺土器盤
18				SK19	不要円形	二段掘り・ 逆内鑿形	上段2.5 下段1.75	上段2.2 以上 下段1.75	1.3	丸太分削削抜 き 3 枚・竹製 牙刃固定	0.38	0.95	弥生時代終 末期	47	土器破片多量。用 途不明木製品、敲 石。石墨石器	

19	下古志遺跡(1次)	A区	SK28	不整円形 二段振り・ 断面扇形	上段1.4 下段1.07	上段1.7 下段0.96	0.78	素振り		弥生時代後 期前葉	80	前方上段に先出土 型破片	
20		B区	SK10	不整円形 二段振り・ 断面扇形	1.85	1.25	0.95	素振り		弥生時代終 末期～古墳 時代初頭 (草田5～ 6期)	81	上層から完形土器 16個(甕・舟形)、 土器破片、輕石	
21			SK25	不整方形 二段振り・ 断面扇形	上段1.2 下段1.2	上段1.7 下段1.2	1.1	素振り		弥生時代終 末～古墳時 代初頭(草 田6期)	79	土器破片	
22			SK28	不整円形 筒形・先 端遺伏	上段2.2 下段1.5	上段2.05 下段1.5	1.0	素振り		弥生時代終 末～古墳時 代初頭(草 田6～7 期)	78	最下層側部下半	
23		C区	SE06	円形 二段振り・ 断面扇形	上段1.4 下段0.5	上段△1.4 下段△0.3 以上	1.1	素振り		弥生時代後 期後葉	81	土器破片	
24		G区	SK02	不整円形 二段振り・ 断面扇形	上段2.0 下段1.2	上段△1.3 以上 下段△1.2	1.57	素振り		弥生時代中 期後葉	86	土器破片	
25	下古志遺 跡(3次)	I区-2	SE301	不整楕円 形 二段振り・ 断面扇形	上段2.2 下段1.0	上段1.8 下段0.75	1.6	丸太削削後 き(スダジイ)	0.55～ 0.65	0.5～0.6 0.65	弥生時代終 末期(草田4 期)	78	口口上部破片 巻き、割物容器 板立柱建物SB105 (1×2間、2× 3.5m)
26			SE102	不整楕円 形 二段振り・ 断面扇形	上段1.6 下段0.65	上段1.2 下段0.65	0.95	丸太削後 き(上盤のみ)	0.62	0.5以上	弥生時代終 末期(草田 4期)	76	土器破片 布面建物SB103 (4.4×4.3m)
27			SE303	円形 二段振り・ 断面扇形	上段1.4 下段0.75	上段1.36 下段0.66	0.84	素振り?		弥生時代終 末期(草田 4期)	79	土器破片 横持付板立柱建物 SB108(1×2間、 17.5×3.3m)	
28			SE304	円形 二段振り・ 断面扇形	上段1.26 下段0.38	上段1.24 下段0.38	0.75	丸太削後 き(上盤のみ)	0.33	0.2以上	弥生時代後 期後半～終 期	78	土器破片
29	古志本郷 遺跡(8 次)	E区	SK72	不整三角 逆円扇形	2.2	17.5以上	0.8	素振り		弥生時代中 期末	85	土器破片	
30	田中谷遺 跡	I区	SE01	円形 筒形	1.5	1.42	0.5	割物 植軒用 (バラ科サク タ属)	0.85	0.45	弥生時代終 末期(草田 4～5期)	29.9	土器破片
31		V-E区	SE01	不明 粗面状	不明	不明	不明	割物 植軒用 (ケヤキ)	0.77	0.45	弥生時代終 末期(草田 4～5期)	13.4	土器破片、磐石・ 管玉 釋教。湧水点に置 かれており地下水 採取とは異なる可 能性

遺物は埋土下層から瓶形土器、その他は上層から少数出土している。古墳時代前期に位置付けられる。

SE11は、長軸5.7m、短軸5.4mの梢円形の一箇所に長さ4.4m、幅3.4mの階段状の溝が接続し、平面形が柄鏡形の二段素掘り井戸である。上段の深さは2m、その中心部に長軸1.85m、短軸1.5mの不整梢円形の水溜部を掘削する。湧水のため底部まで完掘されていないが、検出面からの深さは2.4m以上である。上段の埋土中から多量の土器が出土し、その他管玉や鉄鎌、桃核などが認められる。古墳時代前期に位置付けられる。

SE12は、東西5.4m、南北4.2m以上の方形の二段素掘り井戸である。上段の深さ0.75m、その中心部に長軸2.68m、短軸2.61mの方形の水溜部を掘削する。湧水のため底部まで完掘されていないが、検出面からの深さは1m以上である。土器破片が少量出土している。古墳時代前期前葉に位置付けられる。

蔵小路西遺跡 出雲市渡橋町に所在し、出雲平野の神戸川旧河道に沿ってできた標高4.5mの微高地、姫原西遺跡の西隣約100mに立地する(2)。弥生時代末から古墳時代前期の遺構が検出され、当該期の井戸1基(井戸3)が確認されている。

井戸3は、長軸0.74m、短軸0.61mの梢円形で、検出面からの深さは1.02mを測る。断面形は底面に向かって窄まる筒形である。掘方底面付近で井戸枠が密着するようにわずかに残存していた。残存規

模は48×43cm、残存高は27cmである。井戸枠は湧水層である細砂層に掘られており、井戸中位に土器破碎層が厚さ約0.2m堆積している。土器破碎層は砂の吹き上げ防止あるいは浄化装置の可能性が指摘されている。さらに上層に細砂混じりの粘質土や粗砂層を挟んで土器が投棄されている。土器には完形品がないが、間層を挟んだ上層と下層の土器が接合関係にあることは、井戸の埋没までに一定期間の時間を要した可能性が指摘できる。

姫原西遺跡 出雲市姫原町に所在し、出雲平野の神戸川旧河道に沿ってできた微高地、標高4.8mに立地する。弥生時代後期から古墳時代前期の集落であり、弥生時代終末期の井戸3基が検出されている。

SK11は、不整円形の二段掘りで片側に足場と考えられる平坦面を設けている。上段掘方は長軸1.7m、短軸1.5m、深さ0.6mを測る。下段掘方は直径0.5m、深さ0.6mの円筒形の掘り込みで、検出面からの深さは1.2mである。井戸枠は厚さ4～5cmの丸太削り抜き材を5～6枚組み合わせており、直径30～50cm、残存高70cmである。井戸枠下に破碎された土器片が層厚約0.2mにわたり堆積している。井戸枠内部には廃絶の際に完形のまま置かれた土器が8個体重なって出土している。なお、破碎土器層は湧水が激しく、砂や水と一緒に掬い上げる状況であった。

SK17は、円形の二段掘りである。上段は直軸1.45m、短軸1.25mの楕円形で、深さ0.7mを測る。下段水溜部は直径0.5～0.6m、深さ0.55mの円筒形の掘り込みで、検出面からの深さは1.2mである。井戸枠は下段掘方に沿って巡らしており、朽ちてやせ細った厚さ3～4cm丸太削り抜き材が5枚残っている。木組み内中位から井戸底面まで土器片が堆積する。土器堆積層上面には完形土器の壺2個体が確認され、廃絶時に収めたものと推測される。また底面から約30cm上で、湾曲結晶式縫隙片が出土しており、完形土器とともに井戸祭祀行為との関係で注目される。

SK19は、不整円形の二段掘りである。上段は直径2.5m、深さ0.5mの不整円形に掘り込み、その底面中央付近をさらに直径1.75mの範囲で逆円錐形状に掘り込む。検出面からの深さは約1.3mを測る。井戸枠は、半円形の削り抜き部材ほか幅狭の部材2枚、計3枚を円形になるように繋ぎ、外側に幅0.5～1cm、厚さ0.3～0.4cmの竹製のタガを二周半巡らして固定している。削り抜き部材は、底面付近で厚さ5cm、残存高90cmであり、比較的残りが良好である。部材表面には木目方向に手斧の削痕が明瞭に残されている。井戸枠内部の中位から下部では、木片、土器及び木製品等が出土している。とくに土器片は井戸枠表面に貼り合わせるように密に詰め込んでいるようである。土器は完形ではなく全て破片であり、SK11、SK17とは異なる。井戸枠より上位には、全長26.0cm、幅22.0cm、最大厚13.0cmの石皿様石器が出土しており、井戸廃絶後最後に埋められたものと考えられている。なお、石皿様石器の上部及び下部の土器堆積層までの間には遺物は全く含まれていない。

下古志遺跡 出雲市下古志町に所在し、出雲平野神戸川左岸の自然堤防上、標高約8mに立地する。弥生時代中期から後期を中心とする集落で、当該期の井戸10基が検出されている。井戸は二段掘りが主体で、掘方断面形が逆凸状、つまり下段水溜部の壁はほぼ垂直に立ち上がる。井戸枠及びその痕跡が残っているものは10基中3基である。

A区SK28は、不整円形の二段素掘り井戸である。上段は直径1.7m、深さ0.2～0.78mで、下段水溜部は上段の西壁際に直径1m、深さ0.35mで筒状に掘り込む。土器は破片のみであり、いずれも上段埋土中からの出土である。出土遺物から弥生時代中期から後期前葉に該当する。

SK10は、不整円形の三段素掘り井戸である。上段は直径1.25～1.85m、検出面からの深さは0.95m

を測る。北東側に足場もしくは通路と想定される幅0.15~0.2mの平坦面を階段状に設ける。下段水溜部はやや先細りの筒形となる。上段の埋土中から壺と鼓形器台の完形土器16個体などが人為的に置かれるように出土した。弥生時代終末期から古墳時代前期に廃棄されたものと考えられる。

SK25は、不整方形の二段素掘り井戸である。上段は直径1.45~21m、深さは0.05~0.1mで、井戸南側と東側に幅0.1~0.2mの平坦面を設ける。下段水溜部は直径1.2m、深さ1mであり、検出面から井戸底面までの深さは1.1mを測る。埋土中から土器破片や礫が出土している。

B区SK28は、不整円形の二段素掘り井戸である。上段は長軸2.2m、短軸2.05m、深さ0.04~0.15mで、東側に平面三角形の平坦面を設ける。下段水溜部は直径1.15m、先端袋状径0.95m、深さ0.85mで、検出面から底面までの深さは1mを測る。最下層から壺体部下半、上段から壺口縁部片が出土している。弥生時代終末期から古墳時代前期前葉に廃棄されたものである。

SE08は、円形の二段素掘り井戸である。上段は径1.4m、深さ0.8mで、底面中心に直径0.5mの水溜部を掘削する。検出面からの深さは1.1mを測り、断面形は上段側に起伏を持つ漏斗状である。土器は埋土中から小片が5~6点、下段の水溜部上層から複数の小礫が出土している。弥生時代後期後葉に位置付けられる。

SK02は、不整円形の二段素掘り井戸である。一部調査区外のため全形は不明だが、上段は径20m以上、深さ0.7~1.1mである。下段水溜部は径1.2m、深さ0.4~0.8mで検出面から井戸底面までの深さは1.57mを測る。埋土中から少量の土器片が出土し、弥生時代中期後葉に該当する。

SE101は、不整椭円形の二段掘り井戸である。上段は長軸2.2m、短軸1.8m、深さ0.8mの不整円形である。下段は上段東隅をさらに長軸1m、短軸0.75m、深さ0.60mを円筒状に掘り込む。検出面からの深さは1.6mを測る。井戸底には高さ50~60cm、径55~65cmの丸太削り抜きの井戸枠が残存している。部材の縦断面に切斷痕がみられ、丸太の径を調節して組み直したことが指摘されている。井戸底には注口土器1個体分の破片が敷き詰められ、井戸枠内底部付近では壺、壺、注口土器、鼓形器台の破片及び木製品が出土している。なお、SE101の東正面2mの位置に、1間×2間、2m×3.5m規模の掘立柱建物があり、井戸との組み合わせが指摘されている。

SE102は、平面不整椭円形の二段掘り井戸である。上段の規模は1.6×1.2m、深さは0.7mで、下段はその底面中央付近をさらに直径0.6mの範囲で円筒状に掘り込む。検出面からの深さは0.95mを測る。井戸枠は残存していないかったが、井戸枠痕跡と考えられる一対の立ち上がりが土層断面で確認されていることから、丸太削り抜きの井戸枠を備えていた可能性が指摘されている。井戸内から壺と壺の小片が出土している。

SE103は、平面円形の二段素掘り井戸である。上段の規模は径1.3m、深さ0.5mで、下段はその底面中央付近をさらに直径0.7mの範囲で円筒状に掘り込む。検出面からの深さは0.9mを測る。上段底面から鼓形器台破片が1点出土している。なお、本遺構北15mの位置に、4.4×4.3m規模の棟持柱を有する布堀建物が検出され、井戸との組み合わせが指摘されている。

SE104は、平面円形の二段掘り井戸である。上段は径1.3m、深さ0.5mの規模で、下段はその底面中央付近をさらに径0.7~0.85mの範囲で円筒状に掘り込む。検出面からの深さは0.75mを測る。井戸枠は残存していないかったが、井戸枠痕跡と考えられる一対の立ち上がりが土層断面で確認されていることから、丸太削り抜き井戸枠を備えていた可能性が指摘されている。

古志本郷遺跡 出雲市古志町に所在し、出雲平野神戸川左岸の自然堤防上及びその後背湿地帯の標

高約8~10mに立地する複合集落遺跡である。弥生時代中期末の井戸1基が検出されている。

SK72は、不整三角形の逆円錐形の素掘りの井戸である。一辺2~3mの三角形で、深さは0.8mを測る。埋土中から甕の小片が出土している。

田中谷遺跡 松江市法吉町に所在する。松江市街地の北側、島根半島から連なる丘陵南端部に立地する複合集落遺跡であり、弥生時代終末期の井戸2基が検出されている。湧水点に置かれていることから、地下水を利用する井戸とは異なることが指摘されている(中川・原田・稻田2012)。

I区SE01は、河川堆積層の基盤に掘りこまれた直径1.5mの円形の掘方で、深さ0.5mを測る。掘方には直径0.75~0.85m、残存高0.46mの大型の剖物桶を転用した井戸枠が設置されていた。樹種はバラ科サクラ属である。井戸枠内及び掘方から甕などの小片が出土している。

V-E区SE01は、溝SD20との重複し掘方は不明である。溝埋土中に拳大の礫が敷き詰められ、その上に井戸枠が設置されている。直径77.2cm、残存高45.2cmの剖物桶を転用した井戸枠で腐食により1/3ほど欠損している。樹種はケヤキである。井戸底面から土器片や磨石、盤もしくは槽の木製品及び管玉などが出土している。

3 山陰地方における弥生時代中期末から古墳時代前期の井戸の構造

(1) 遺跡の立地と設置場所

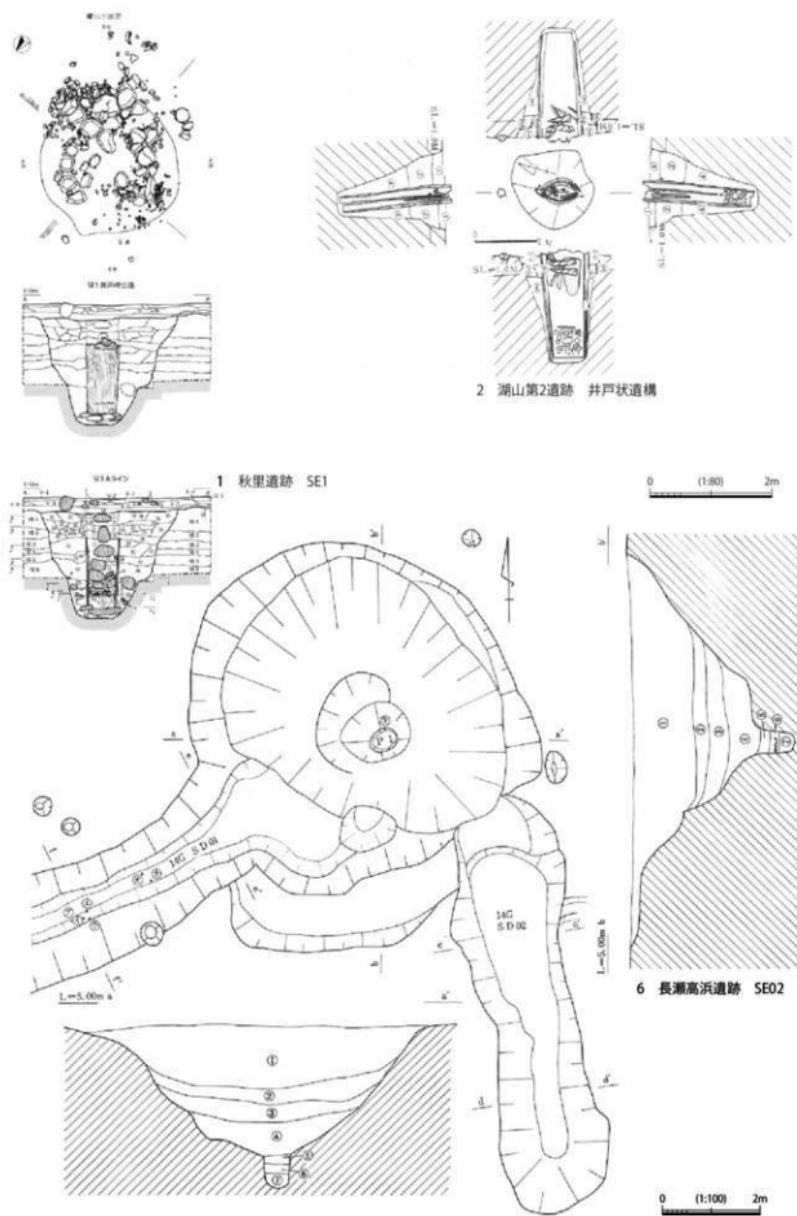
山陰地方において井戸が構築される遺跡の立地は低地部の微高地が多く、丘陵の谷間に立地する田中谷遺跡を除き標高1~10mである。井戸の設置場所は、集落の居住域からやや離れた場所に構築される秋里遺跡や湖山第2遺跡など代表的であるが、居住域内に構築される下古志遺跡や長瀬高浜遺跡なども認められる。集成事例のなかでとくに注目されるものは、建物とセット関係にある下古志SE101、102及び103であり、建物と井戸との関係を検討する上で重要な情報を提示する遺跡である。また、地下水脈に向けて掘削するものが主要であるが、田中谷SE01のように遊水地点に設置するものも確認される(3)。

(2) 井戸掘方

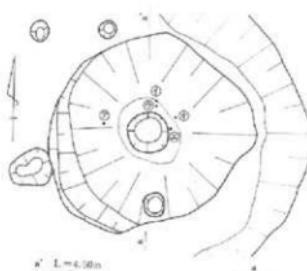
井戸の平面形(二段掘りの場合は、上段の形状)は、いずれも正な形態をとりながらもa)円形、b)楕円形、c)方形、d)三角形がみられ、a)が最も多い。掘方は二段掘りが7割を占め、上段底面が皿状に浅く掘方上部になるものと、掘方中位から底部近くになるものがある。断面形態は逆凸状や漏斗状を呈するものが一般的であり、その他下古志SK10によって階段状の平坦面を設けるもの、姫原西SK19のような明瞭な平坦面を設げず、起伏を持ちながら逆円錐形となるものなどが存在する。段の形成は、掘削時や井戸枠設置時の足場の確保が主要因と考えられる。

下段の水溜部については、上段掘方底面の中央付近に設けるもの(長瀬SE5、姫原西SK17など)、上段掘方の片側壁面に寄せるもの(姫原西SK11など)が認められる。下部の平面形は、円形、楕円形及び隅丸方形があり、壁面をほぼ垂直に立ち上がらせるもの(姫原西SK11、17)、底面に向かって窄まる逆円錐状のもの(秋里SE1、姫原西SK19)がみられる。

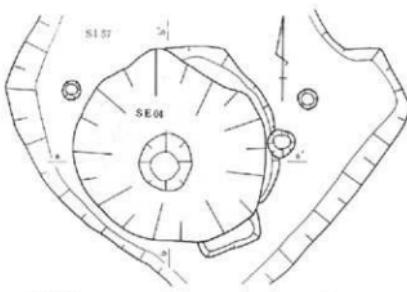
井戸の浄化装置及び井戸枠の基礎構造として、井戸掘方の底面に礫を敷設するものが秋里SE1、田中谷V-E区SE01でみられるが、事例は少ない。これとは別に土器を意図的に破碎し小礫などとともに井戸枠内もしくは水溜部に充填するものがある(秋里SE1、湖山井戸、松原田中、長瀬SE02、03及び04、蔵小路西井戸3、姫原西SK11、17)。例えば、湖山井戸は最下層に小礫と細かく破碎した土器片の混在層があり、その上に大型礫を置いている。下古志SE101では最下層に一個体分の注口土器



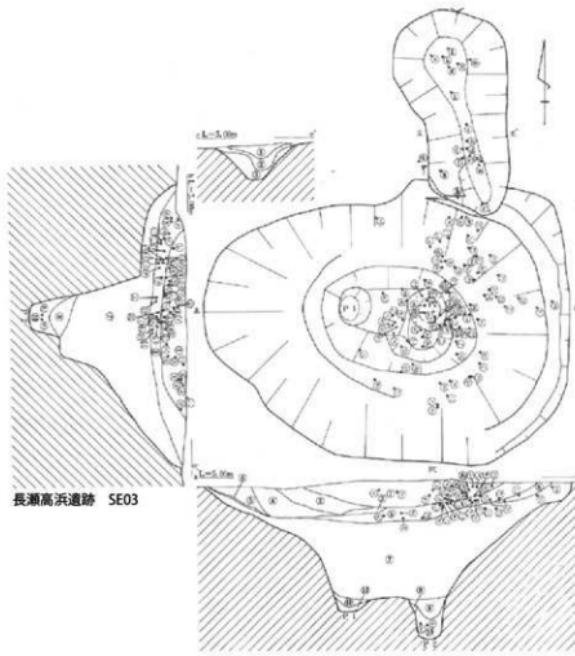
第193図 鳥取県における井戸(1)



5 長瀬高浜遺跡 SE01

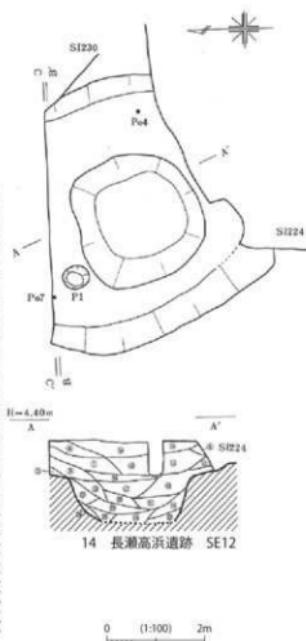
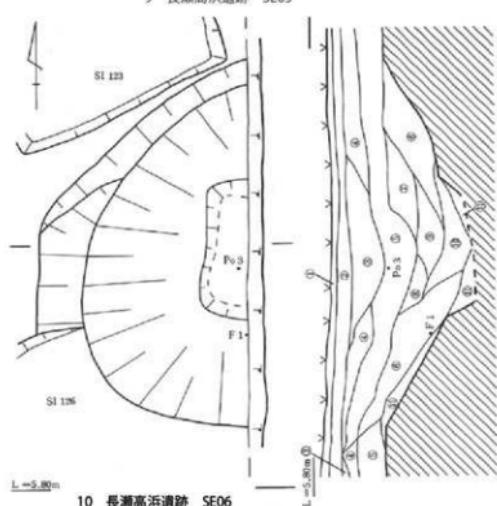
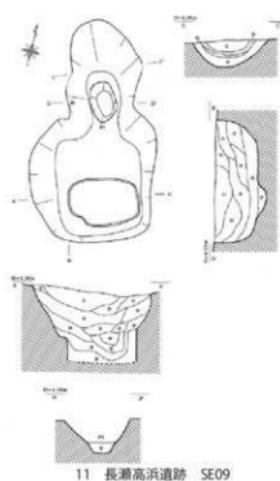
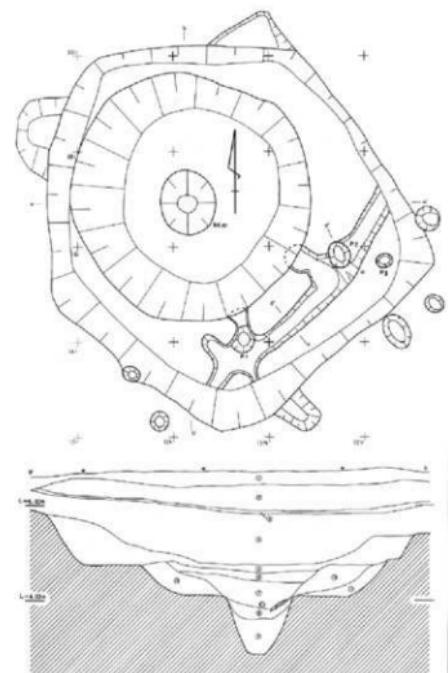


8 長瀬高浜遺跡 SE04

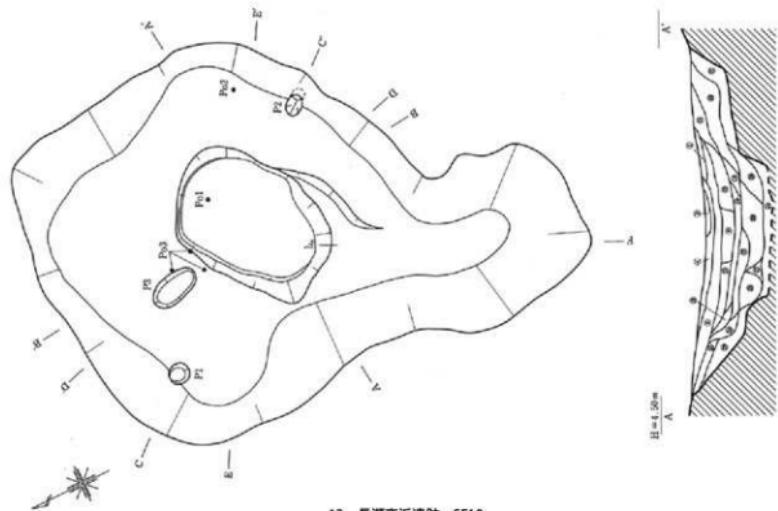


7 長瀬高浜遺跡 SE03

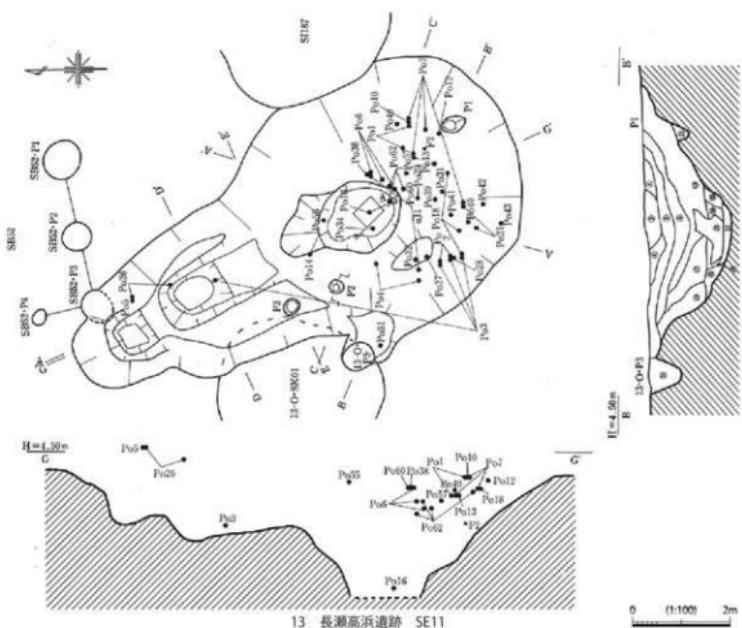
第194図 鳥取県における井戸(2)



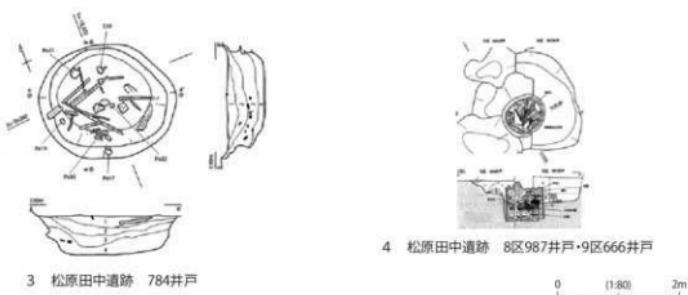
第195図 鳥取県における井戸(3)



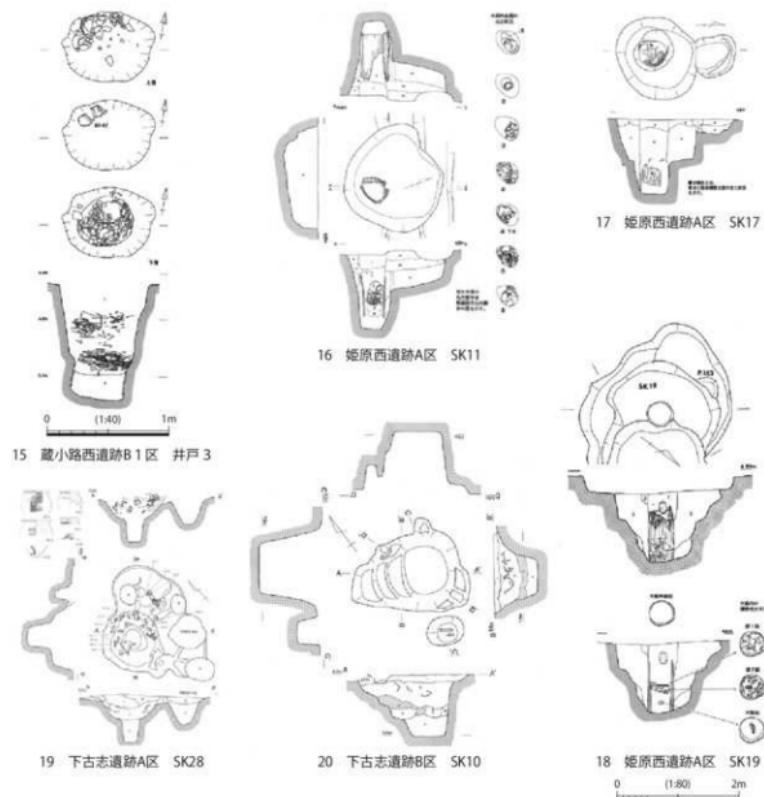
12 長瀬高浜遺跡 SE10



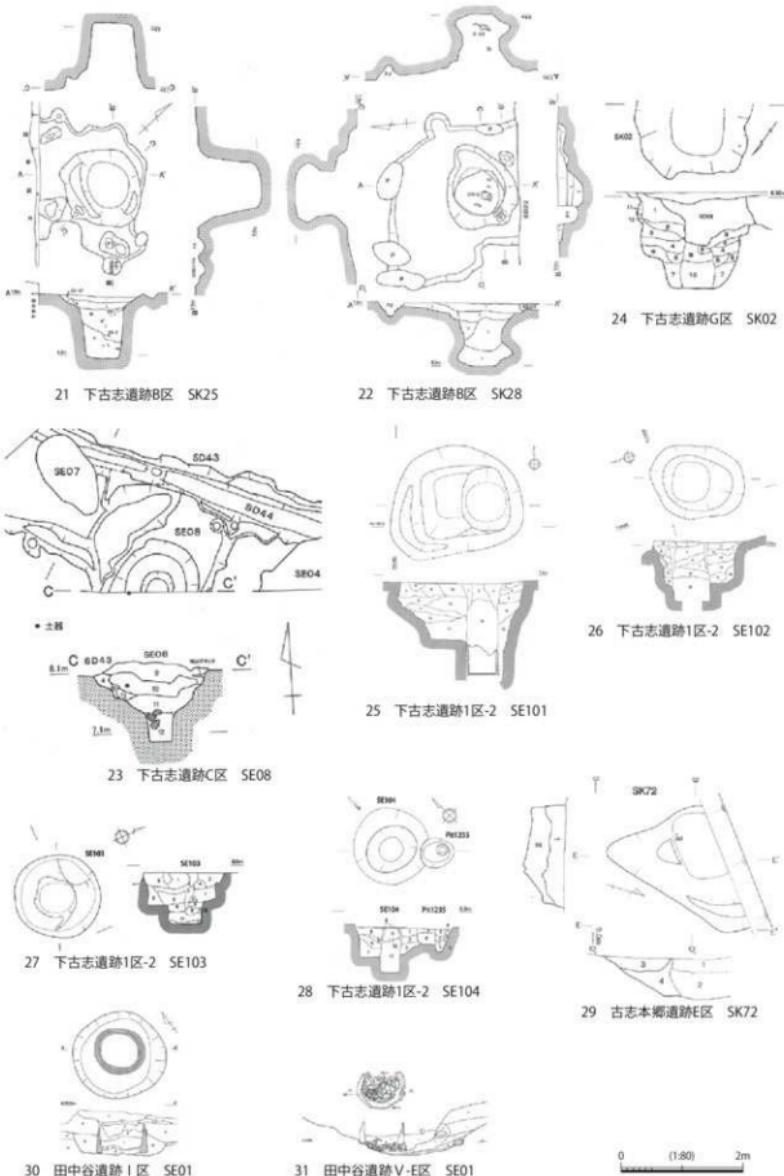
第196図 鳥取県における井戸(4)



第197図 島取県における井戸(5)



第198図 島根県における井戸(1)



第199図 島根県における井戸(2)

を敷き詰めており、これらは地下水からの強い水の噴出や砂の舞い上がりなどを防止するための浄化装置と考えられる。さらに、秋里SE1のように外部から砂を持ち込み井戸の掘方下部に充填して浄化装置とするものがみられるが、山陰では本例のみである。

(3) 井戸枠

ここで集成した31基のうち、井戸枠を用いた井戸は出雲平野に事例が多い。長瀬高浜遺跡のように10基の井戸が確認されながらも、井戸枠が全く使用されていない遺跡も存在する。井戸枠は鐘方正樹の分類に従えば、山陰地方では挿入式の円形丸太削り抜き型に該当し、A類(一本削り抜き)、B類(丸太分割削り抜き)、C類(桶状木製品)のいずれも存在する(鐘方2003)。A類は秋里SE1、松原田中987・666井戸、蔵小路西井戸3、B類は複数枚をタガによって固定して組み合わせる姫原西SK19や複数枚組み合わせたものを外側に添え木で固定している湖山井戸、C類は田中谷I区SE01やV-E区SE01が比定されよう。またA類でも、高さを確保するために秋里SE1のように上下2段嵌め込み式が確認される。湖山井戸は、枠の下端端部に削痕が連続して認められ、直線的に仕上げようとする意図が窺えること、別の1枚は側縁に小型の方形孔が等間隔で穿たれていることから建築部材の転用した可能性が指摘されている(湯村2017)。田中谷の事例でも、2基とも剝物桶の転用である。

一方、秋里SE1は井戸枠底部に段を有するものの、丸太削り抜き材をそのまま用いていることから、当初より井戸枠を目的とし加工された可能性が高い。井戸枠下部に高さ15~20cm、幅10cmの長方形の削り込みを2箇所施し取水口としているが、このような事例は山陰地方の他遺跡ではみられない。

井戸枠の材質は、集成した10基のうち6基が明らかとなっている。秋里はタブノキ、湖山第2はイヌガヤ、松原田中はクスノキ、下古志SE101はスダジイ、田中谷I区SE01はバラ科サクラン属、同V-E区SE01はケヤキが使用されている。いずれも湿気に強く耐久性があることは共通するが、針葉樹、広葉樹それぞれ地域の特性を活かした樹種が選定されている。

(4) 井戸内出土遺物

井戸内の出土遺物のあり方は、井戸祭祀を検討する上で重要な要素となる(鐘方2003、山崎2005)。鐘方は井戸祭祀を検討するにあたり、遺物の出土位置を3段階にわけている。1段階は井戸(枠)完成までの間に埋納された遺物(井戸構築時の祭祀)、2段階は井戸使用時から埋め戻し直前に納置された遺物(井戸使用中の祭祀)、3段階は井戸埋め戻し時ないし使用停止後の自然堆積層上に納置された遺物(井戸の使用停止後の祭祀)である。1段階に該当する事例は現状では確認できない。2段階もしくは3段階の使用停止直後に該当するものは、集成した29基のうち、井戸内に完形土器が出土しているものは3基(湖山井戸、姫原西SK11、17)あり、井戸の浄化装置直上に納置されている。湖山井戸では直口壺が2個体、姫原西SK11では甕、壺及び直口壺が合計8個体、SK17では甕2個体出土している。また、完形土器ではないが、最下層に甕体部下半を置いている下古志SK28や井戸枠内の下層から中層にかけて多数の土器が出土した姫原西SK19などもみられる。3段階に該当するものとして、井戸内の上層から多数の遺物が出土する長瀬SE03、5、10及び11や下古志SK10がある。これらは二段掘りの上段埋土中から出土しているものが多く、井戸廃絶後の廃棄土坑として機能していた可能性も否定できない。また、井戸上部に大型の石皿様石器を封印するように埋め込む姫原西SK19は秋里SE1に類似し、特殊な事例である。

その他、玉作素材や管玉や勾玉(秋里SE1、長瀬SE5、11、田中谷V-E区SE01)、木製品(姫原西SK19、田中谷V-E区SE01)、縦櫛(姫原西SK17)、桃核(秋里SE1、長瀬SE11)なども出土している。

土器の出土事例を検討すると、井戸内に完形土器を納置する事例は必ずしもも多いとはいえないが、井戸使用停止後に土器や碟を納置するなど祭祀行為が行われた事例も上記から確認される。

(5) 井戸の付属施設

集成した井戸の付属施設として、建物、溝や配石が確認される。大形建物正面に井戸を構築し、祭祀のあり方が議論されてきた池上曾根遺跡が著名であるが(秋山1999)、下古志SE101、102及び103では掘立柱建物SB105、108及び布掘建物SB103が、その配置からそれぞれセットとして機能していたことが指摘されている(大庭・中川2012)。このうち棟持柱付布掘建物SB103は4.4×4.3mの正方形を呈し、掘立柱建物SB108は1間×2間の棟持柱を有する特異な構造で祭祀的な機能を持つ施設であった可能性がある。

溝が取り付く事例は長瀬高浜遺跡が多く、井戸10基のうち4基で確認される。これらの溝は長さ2.1~5m、幅1.5~3.4mを測る。井戸に付属する溝の機能として井戸へ下りるための通路を想定しているが(財団法人鳥取県教育文化財団1997)(4)、溝底面の具体的な状況や硬化面等の記載はなく、その判断は難しい。長瀬SE09、10、11のように井戸上縁の一辺中心部に取り付き、正面を指向している柄鏡形タイプ(SE03、11)については、通路の可能性もあると考える。

秋里SE 1は井戸の掘方を開むように「コ」字状に碟が配置されている。碟は径5~10cmの小型碟、15~30cmの中型碟、30cm~50cmの大型碟が場所を逸れて計画的に配置される。開口部の奥側に扁平な中型から大型碟が配置され祭壇的な様相を示す。両袖部は中型碟が用いられ、西側側縁にはさらに小型碟が敷かれ内外を区画する。碟の周縁には土器片が散在しており、これらの土器は井戸祭祀の際に使用された可能性も推定される。

4 秋里遺跡SE 1の特徴と位置づけ

以上、山陰地方における弥生時代から古墳時代前期までの井戸事例を概観し、その特色について述べてきた。その結果、秋里SE 1は他事例にはみられない特徴をいくつか有している点が明らかとなつた。その点を以下にまとめると、第1は井戸構造の特徴として、井戸枠設置のための基礎として碟を敷設し堅固であること、浄化装置として外部から持ち込んだ川砂を充填していること、井戸枠はタブノキ製の円形丸太割り抜き型であり、井戸枠下端の2箇所に取水口を設けるなど井戸専用に造られた可能性が高いこと、第2は外部施設として内外を区画するため碟による区画施設を設けていること、第3に機能停止後、井戸を封印するかのように内部に大型碟を複数納置する特異な井戸祭祀の在り方である。

今回の調査では、集落の居住域とは離れた場所に井戸が構築されたことが明らかとなっている。また、井戸と居住域の間には完形土器を転々と廃棄する祭祀の空間が介在し、井戸上部で内外を隔てる碟の区画がみられるなど、井戸を日常とは異なる場所として意識したものと考えられる。つまり単に日常の生活用水を確保する目的としては手が込んでいるのである。したがって、非日常の使用、言い換えるれば祭祀を目的とした井戸を想定してみる必要もあるかもしれない。この点について、さらに山陽や北陸地方などの事例との比較検討が求められ、今後の課題としたい。

【註】

(1)以下、遺跡単位の井戸名称を記述する際は、秋里遺跡SE 1 = 秋里SE 1、湖山第2遺跡井戸状遺構 = 湖山井戸、長瀬高浜遺跡SE 1 = 長瀬SE 1のように省略する。

(2)姫原西遺跡、藏小路西遺跡は出雲平野の中央部に位置する四絞遺跡群の一角を構成する。そのた

め遺跡群としての井戸数は4基となるが、本項では個別遺跡としてカウントしている。

(3)今回集成した事例のなかで、地下水脈まで掘削し水を汲み上げる一般的な井戸と湧水点に設置して水溜(枠)とする田中谷例が認められるが(中川・原田・稻田2012)、ここでは同じ井戸として扱う。

(4)長瀬高浜遺跡の井戸の特徴については、鳥取県埋蔵文化財センター八崎興氏に教示頂いた。なお、長瀬高浜遺跡の井戸掘方は他遺跡に比べ規模が大きく、井戸枠の痕跡も皆無である。つまり同時期の一般的な井戸と異なり、上段部は機能時には開口しており、下段の水溜部まで降りて水を汲み上げていた可能性がある。

(5)第189図については鳥取県埋蔵文化財センター坪家豊氏作成。また、資料収集にあたり公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団古谷涉氏に協力頂いた。記して感謝申し上げたい。

【参考文献】

秋山浩三1999「池上曾根遺跡中権部における大形建物・井戸の変遷(下)」「みずほ」第31号

大庭俊次・中川寧2012「第5章 総括」「下古志遺跡(第3次調査)」鳥取県教育委員会

鐘方正樹2003『ものが語る歴史8 井戸の考古学』同成社

中川寧・原田敏照・稻田陽介2012「田中谷遺跡」「第40回山陰考古学研究集会資料集 山陰の弥生時代木製品」第40回山陰考古学研究集会事務局

堀大介2008「井戸の総論と諸問題」「第57回埋蔵文化財研究集会 井戸再考～弥生時代から古墳時代前期を対象として～発表要旨集」

山崎孝盛2005「古墳時代の井戸祭祀に関する一考察～奈良県の井戸を題材として～」「岡山大学大学院文化科学研究科紀要」第20号

湯村功2017「湖山第2遺跡・湖山池東岸の集落遺跡・」「新鳥取県史 考古1 旧石器・縄文・弥生時代」

出雲市教育委員会・島根県出雲土木建築事務所2001「下古志遺跡・本編・」

出雲市教育委員会2002「下古志遺跡・考察編・」出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集

財団法人鳥取県教育文化財団1981「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅲ」鳥取県教育文化財団報告書8

財団法人鳥取県教育文化財団1982「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅳ(埴輪編)」鳥取県教育文化財団報告書11

財団法人鳥取県教育文化財団1983「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書V」鳥取県教育文化財団報告書8

財団法人鳥取県教育文化財団1997「長瀬高浜遺跡Ⅶ」鳥取県教育文化財団調査報告書49

島根県教育委員会1999「古志本郷遺跡I」

島根県教育委員会1999「蔵小路西遺跡」

島根県教育委員会1999「姫原西遺跡」

島根県教育委員会2002「田中谷遺跡・塚山古墳・下がり松遺跡・角谷遺跡 本文編」

島根県教育委員会2012「下古志遺跡(第3次調査)」

島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財センター2006「島根県における弥生時代・古墳時代の木製品集成」島根県古代文化センター調査研究報告書33

鳥取県教育委員会2018「松原田中遺跡II」

鳥取県教育委員会2018「松原田中遺跡III」

埋蔵文化財研究会・第57回埋蔵文化財研究集会実行委員会・九州国立博物館2008『第57回埋蔵文化財研究集会 井戸再考～弥生時代から古墳時代前期を対象として～ 発表要旨集』

第2節 調査のまとめ

秋里遺跡(松下地区)の調査では、主に弥生時代後期と、平安時代中期から鎌倉時代にかけての2時期の遺構と遺物が大量に出土した。その中にはこの遺跡の性格を明らかにできるばかりでなく、全国的にみても重要なものが含まれている。調査のまとめとして時代順に概略を記す。

弥生時代後期

弥生時代の遺構と遺物は後期後葉から終末期に属するものばかりで、それよりも古いものは全くと言ってよいほど見つからなかった。注目すべきものとして以下の4つを挙げる。

1つ目は、祭祀用の井戸である。集落本体から離れた西微高地上で検出した井戸跡S E 1は、木製井戸枠をもつ井戸としては島取県内最古のものである。地上部に大規模な配石を有し、廃絶時に入念な井戸封じが行われている点でも、弥生時代の井戸として全国的に貴重な事例である。井戸の水が汽水に属しそうなことや、周辺に土器集中が分布することなどを考え合わせると、日常の生活用水ではなく、祭祀のための井戸であったと考えられる。弥生時代後期にはまだ一般的でない井戸に関する知識と技術をもった先進的な集団が、秋里遺跡にいたことが明らかになった。

2つ目は、平地建物の焼失住居である。東微高地上から出土した焼失住居S I 1は平地建物で、縦板壁を巡らしていたと推定される。これまでに見つかっている平地建物の焼失住居は数少なく、弥生時代に属する同じような構造の例はない。すぐ東側からは、それぞれ構造の異なる2棟の平地建物と1棟の布掘建物を逆L字状に配列した遺構群が見つかった。集落を構成する基本的な単位とみられる。標高が高い遺跡本体の微高地上で行われた既往の調査においてこの時期の堅穴建物跡が1棟も見つかっていないことも踏まえると、秋里遺跡は平地建物を主体とする集落であった可能性がある。この地方では、丘陵上などの古くからある弥生集落では堅穴建物が一般的であることを考慮すると、秋里遺跡の特異性と先進性が際立つ。いずれにせよ、低地における弥生集落の構造や景観を復元するうえで重要な調査例になった。

3つ目は、大量のスタンプ文土器である。スタンプ文が施される器種は限られ、小型の甕で胴部が丸いものと、鼓形器台で脚柱部が短いもの、注口土器の3種類が主で、それ以外は例外的である。加えて、最も出土量が多い中型から大型の甕がスタンプ文をもつことは、この文様のもつ呪術的な性格とパーソナルな用途を表しているだろう。施文のパターンにも約束事があり、まず、スタンプの種類は2重から5重までの同心円が支配的である。器台の場合は、上下の段部に3本前後の凹線で区画を設けてその中に1列で押す。小型球胴甕と注口土器の場合は、同じく3本前後の凹線で複数の文様帯を区切りながら、貝殻腹縁による合掌文とスタンプ文を交互に繰り返す。本遺跡固有の白みがかった黄褐色の胎土の土器は、基本的にこの約束事を守っているので、これを「秋里様式」と呼んでも差し支えないと思われる。

4つ目は、60点以上の鉄器である。鉄鎌や鉄斧、刀子や工具など多様な鉄器に加えて素材とみられる鉄片も含まれている。約8000m²という調査面積(約半分からは弥生時代の遺物は出土しなかった)と集落の外縁部という性格を考えると、驚くべき密度といってよい。反対に、黒曜石やサヌカイトは碎

片すら出土していない。このことは、秋里遺跡が鉄器化が完了した時期に始まることや、集落を作った集団が、最新の装備をもち、旧来のネットワークに依存しない人々であったことを物語るような気がしてならない。彼らがどこから来たか、あるいはどの地域と深く関わっていたかを解く手がかりの一つに、S I 2付近から出土した後漢鏡の方格規矩鏡の破鏡がなるかもしれない。

古墳時代～平安時代前期

弥生時代が終わると、今回の調査地内での人間の痕跡は非常に希薄になる。土器集中1は古墳時代初頭のもので、弥生時代から引き続く祭祀がそこで途絶えたことを示している。もっとも、秋里遺跡が発見される契機となった「三嶋の藪」付近での調査を始め、集落本体での調査では大量の土師器を伴う土器溜まりが見つかっているので、集落が衰退したわけではなく、低地に属する今回の調査地周辺が使われなくなつたに過ぎない。その原因は、弥生時代後期の平地建物群を厚く覆っていたほぼ無遺物のシルト層から考えると、古墳時代前期に始まる海面の上昇と無関係ではないだろう。

そうした中、律令頃には西微高地を縁取る形で長大な区画溝S D27が設けられている。その性格は不明ながら、調査区内では縁釉陶器の皿片が1点出土しているので、何らかの公的な施設が付近にあった可能性がある。

平安時代中期～鎌倉時代

平安時代中期になると、調査地内の活動の痕跡は再び顕著になる。それは、集落としてではなく畠としてである。

調査区のほぼ全面から、8枚分の畠跡が検出された。ほとんどの耕作溝は幅と深度が比較的大きく、間隔も広い。重なり合うことも少ないとから、穀物や野菜ではなくクワなどの樹木の栽培に関わると考えているが、花粉分析等の結果からは作物の種類を特定するには至らなかった。耕作溝に混じって掘られた井戸と推定される土坑からは、多様な遺物が出土した。

特筆すべきものとして、SK137に埋められていた平安時代中期の1頭分のウマの骨がある。ウマは3歳半前後のオスで、脊椎や肩甲骨など肉付きのよい部分と脳頭蓋を欠失しているので、肉と皮が利用されている。DNA分析の結果、モンゴル馬・雲馬・対州馬の系統にあることが判明した。日本における食肉や畜産の歴史を考える上でも重要な例になるはずである。

この他の出土遺物としては、各種の輸入陶磁器片やSK148から出土した漆器皿のような高級品や、樹皮などの曲物作りの素材が注目される。前者は中世前期の三嶋社集落の繁栄を、後者は集落での生業の一端を物語る。単なる門前町としてばかりではなく、賀露港に対する内港としての役割に加え但馬方面からの陸路が旧千代川を渡る交通の結節点として、鳥取平野の玄関口であったことが、大きく関係しているであろう。

PLATE

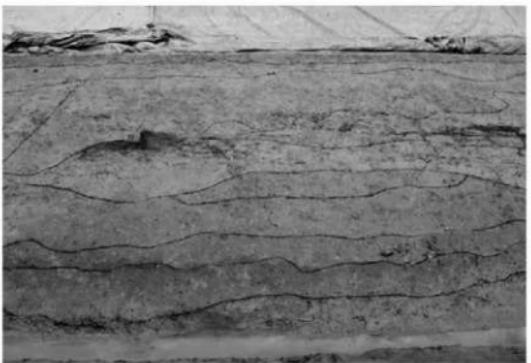




1 1区全景(南から)



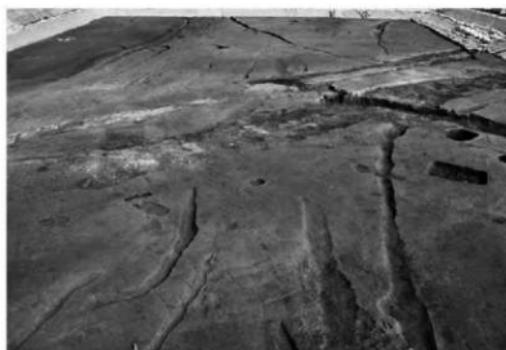
2 2区全景(西から)



3 基本層序(1区北壁、南から)



1 1区調査前状況(南から)



2 1区第1遺構面完掘状況(南から)



3 2区第1遺構面完掘状況(東から)



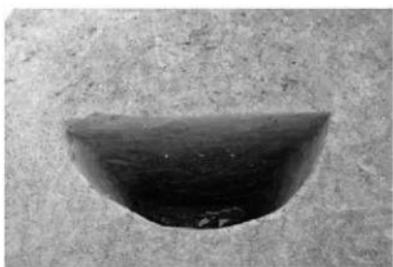
1 煙 1 検出状況(東から)



2 煙 1 完掘状況(西から)



3 SD 1～3 土層断面(東から)



4 SK3 土層断面(南から)



1 煙2完掘状況(南から)



2 煙2 SD14土層断面C(南から)



3 煙2 SK11土層断面(南から)



4 煙3完掘状況(南東から)

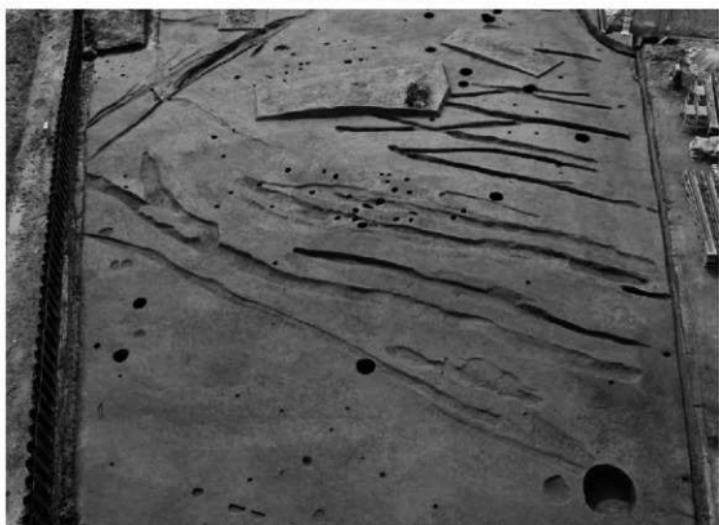


5 SD16土層断面(南西から)

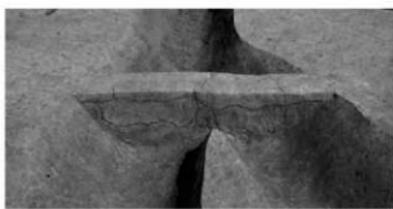
煙2・煙3



1 煙4検出状況(南から)



2 煙4完掘状況(東から)



3 SD63(左)、SD66(右)土層断面(南から)



4 SD64土層断面(南から)

煙4(1)



1 SK101土層断面(西から)



2 SK101遺物出土状況(東から)



3 SK103土層断面(南西から)



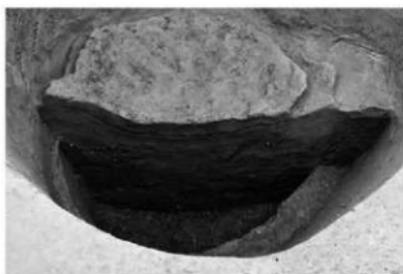
4 SK103遺物出土状況(北西から)



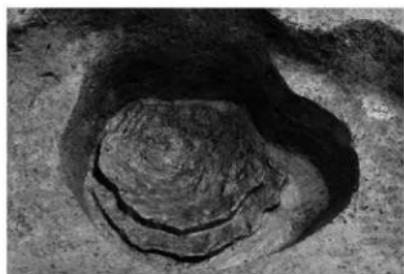
5 SK114遺物出土状況(南東から)



6 SK114漆器出土状況(北から)



1 SK147土層断面および下層炭化物
出土状況(北西から)



2 SK147炭化物出土状況(北西から)



3 SK148土層断面(南東から)



4 SK148漆器出土状況(南東から)



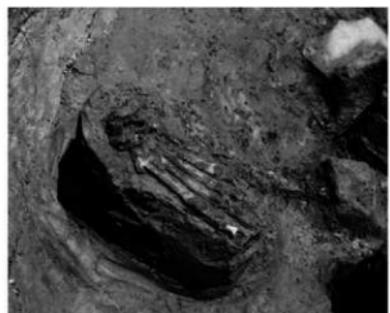
1 SK137土層断面(南西から)



2 SK137ウマ出土状況(南西から)



3 SK137ウマ出土状況(北東から)



4 SK137イヌ?出土状況(西から)



5 SK137下部土層断面(南西から)



6 SK137下層遺物出土状況(北東から)

SK137(烟5)



1 烟6 SK152遺物出土状況(北東から)



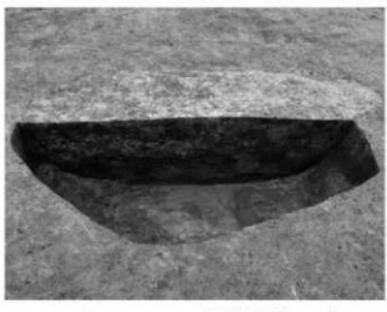
2 烟6 SK155土層断面(南から)



3 烟6 SK155柄杓出土状況(南西から)



4 烟7 SK163土層断面(南から)

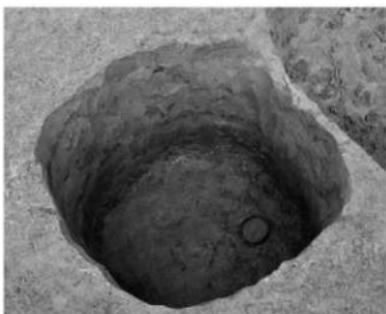
5 烟8 SD124(左)、SD125(右)
土層断面(南から)

6 烟8 SK150土層断面(南から)

烟6～烟8



1 SK13~20完掘状況(東から)



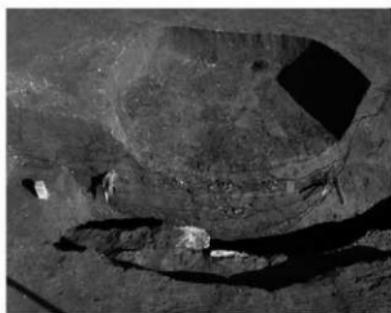
2 SK18曲物出土状況(南から)



3 SK19土層断面(南東から)



4 SK19遺物出土状況(南東から)



5 SK59下部土層断面(南西から)



6 SK59遺物出土状況(南から)

畠外遺構



1 1区第2遺構面完掘状況(南から)



2 2区第2遺構面完掘状況(東から)



1 検出状況(2区、東から)



2 完掘状況(2区、西から)



3 下部土層断面A(1区、南から)



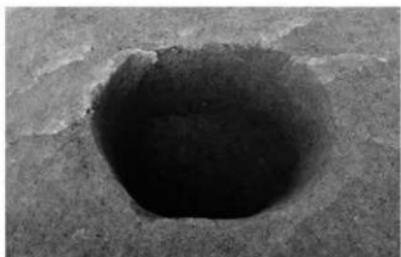
4 土層断面F(2区、西から)



1 SD57完掘状況(西から)



2 SD57土層断面(東から)



3 SK35完掘状況(南東から)



4 SK35土層断面(南西から)



5 SK169完掘状況(北から)



6 SK169土層断面(北から)

第2遺構面 遺構



1 1区第3遺構面完掘状況(北から)



2 2区第3遺構面完掘状況(東から)



1 遺構検出状況(東から)



2 完掘状況(東から)



3 主柱穴礎板出土状況
(東から)

SI 1 (1)



1 東辺炭化材検出状況(南東から)



2 南辺炭化材検出状況(南から)

SI 1 (2) 炭化材検出状況



1 SI 1-P 1 検出状況(東から)



2 SI 1-P 1 土層断面(南西から)



3 焼土検出状況(北西から)

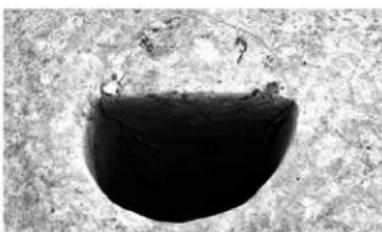


4 SI 1-SD 1 土層断面(北から)

SI 1 (3) 中央ピット・焼土・溝



1 SI 1-P2 検出状況(東から)



2 SI 1-P2 土層断面(北から)



3 SI 1-P2 磁板出土状況(東から)



4 SI 1-P3 検出状況(北西から)



5 SI 1-P3 土層断面(北西から)



6 SI 1-P3 磁板出土状況(南東から)



7 SI 1-P33 土層断面(東から)



8 SI 1-P33 磁板出土状況(東から)

SI 1 (4) 主柱穴



2 土層断面(東から)



3 土器出土状況
(南東から)

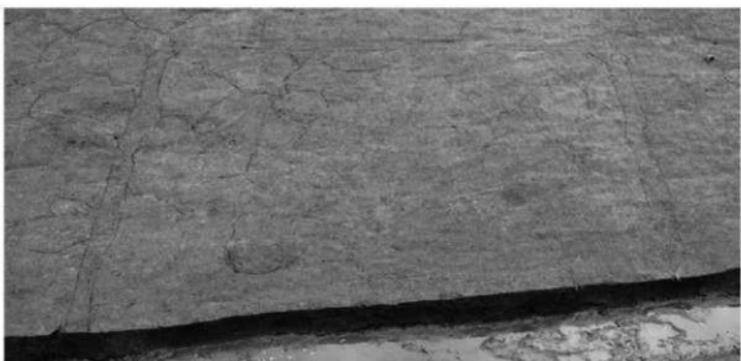
SK198



1 SI2・4、SB 1 完掘状況(東から)



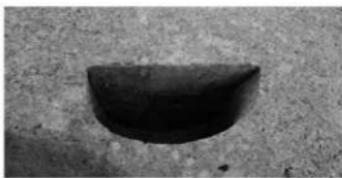
2 SI2・4、SB 1 完掘状況(南から)



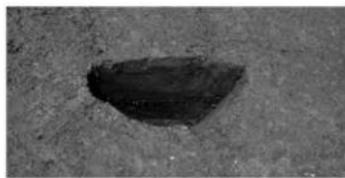
1 SI2 検出状況(東から)



2 SI2 完掘状況(東から)



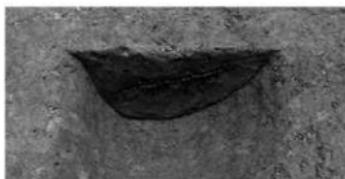
3 SI2-P5 土層断面(南東から)



4 SI2-P6 土層断面(東から)



5 SI2-SD1 土層断面A(西から)



6 SI2-SD1 土層断面B(南から)

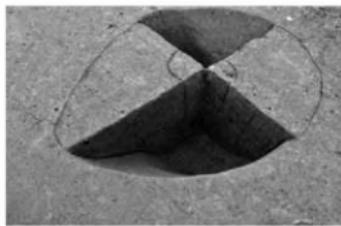
SI2



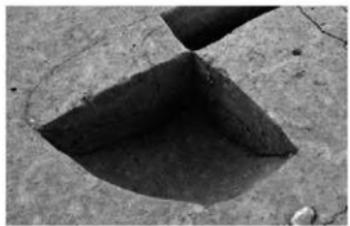
1 SI4 検出状況(北から)



2 SI4 完掘状況(北から)



3 SI4-P1 土層断面(南西から)



4 SI4-P2 土層断面(南西から)

SI4 (1)



1 SI4-SD2 土層断面D(南から)



2 SI4-SD2 土層断面E(北から)



3 SI4-SD4 土層断面A(南から)



4 SI4-SD4 土層断面B(北から)



5 SI4-SK1 土層断面(東から)

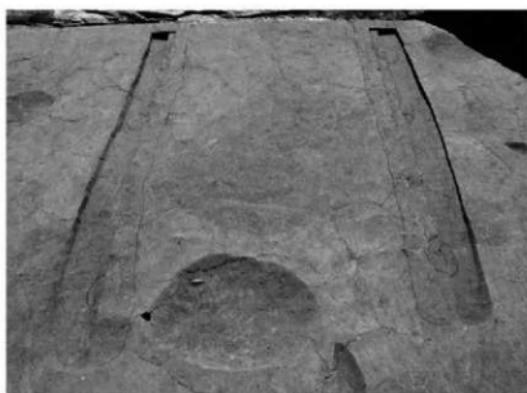


6 SI4-SK2 土層断面(北西から)

SI4 (2)



1 SB 1 検出状況(東から)

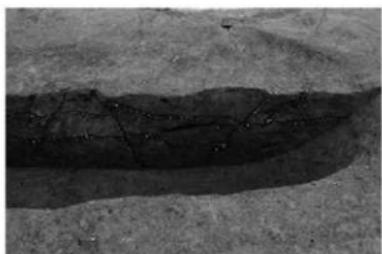


2 SB 1 柱穴検出状況(西から)



3 SB 1 完掘状況(東から)

SB 1 (1)



1 SB 1-P 1 土層断面(北から)



2 SB 1-P 1 遺物出土状況(北から)



3 SB 1-P 2 土層断面(北から)



4 SB 1-P 2 遺物出土状況(北から)



5 SB 1-P 3 土層断面(北から)



6 SB 1-P 3 遺物出土状況(北から)

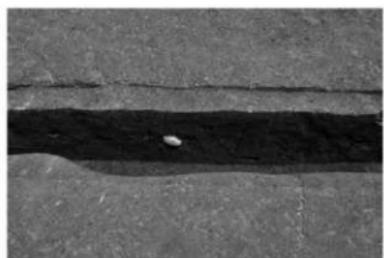


7 SB 1-P 3 土器出土状況(北から)



8 SB 1-P 4 土層断面(南から)

SB 1 (2)



1 SB 1-P5 土層断面(南から)



2 SB 1-P6 土層断面(南から)



3 SB 1-P7 土層断面(北から)



4 SB 1-P11 土層断面(南から)



5 SB 1-P12 土層断面(南から)



6 SB 1-P12下部土層断面(南から)



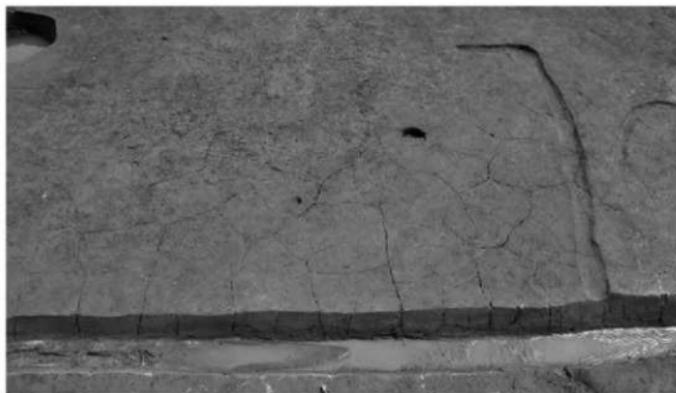
7 SB 1-SD1 土層断面B(東から)



8 SB 1-SD2 土層断面B(東から)



1 SI3 遺物出土状況(南から)



2 SI3 完掘状況(北から)



3 SI3 覆土土層断面A(西から)



4 SI3 覆土土層断面B(北から)

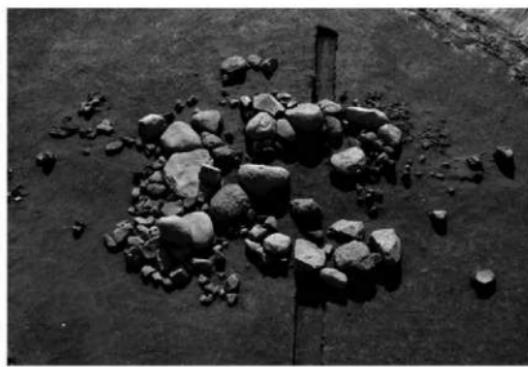
SI3



1 SE 1 配石検出状況
(北西から)



2 SE 1 配石(北西から)

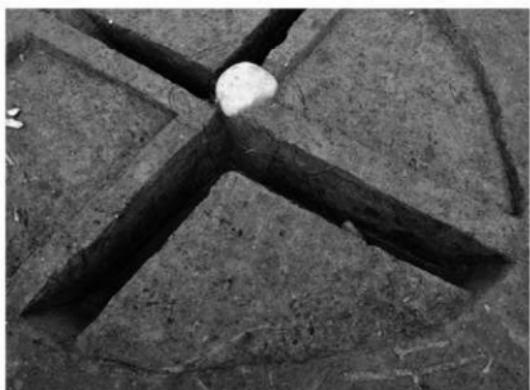


3 SE 1 配石(北東から)

SE 1 (1) 配石



1 SE 1 堀方検出状況(東から)



2 SE 1 上部土層断面(南から)



3 SE 1 堀方土層断面
(北西から)

SE 1 (2) 堀方



1 SE 1周辺土層断面
(北西から)



2 SE 1井戸枠据付状況
(北西から)



3 SE 1井戸枠入水部
(南西から)

SE 1 (3)



1層(北から)



2層(北から)



4層(北西から)



6層上面(西から)



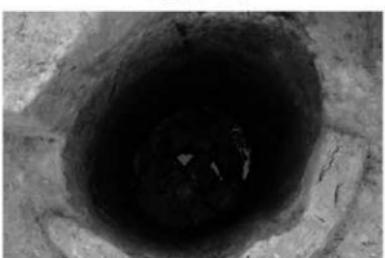
6層上面(西から)



8層(西から)



10層(西から)



11層(西から)

SE 1 (4) 井戸枠内遺物出土状況



1 土器集中1(南から)



2 土器集中2(北西から)



3 土器集中3(南西から)

土器集中1～3



1 土器集中4(南から)



2 土器集中5(北東から)



3 土器集中6(北西から)

土器集中4～6



1 土器集中7検出状況(北から)



2 土器集中8(東から)

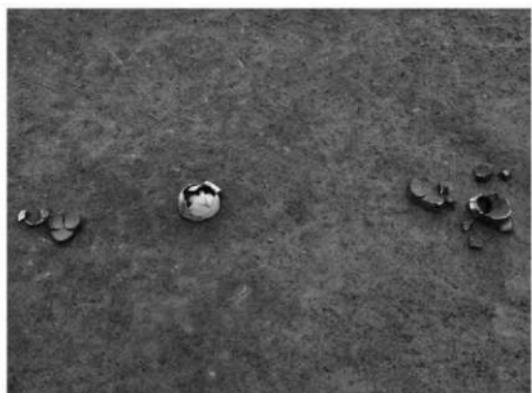


3 土器集中9(東から)

土器集中7～9



1 土器集中10 (南西から)



2 土器集中11 (東から)



3 土器集中12 (北東から)

土器集中10~12



1 土器集中13(南から)

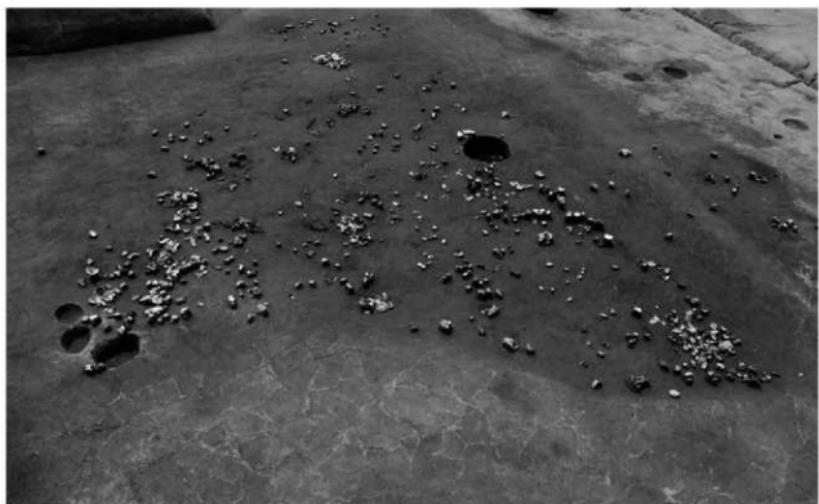


2 土器集中14(北西から)



3 土器集中16(南東から)

土器集中13・14・16



1 土器集中15全景(東から)



2 土器集中15-1 (南から)



3 土器集中15-8 (南東から)



4 土器集中15-10 (東から)



5 土器集中15-11 (北から)

土器集中15



1 K5区遺物出土状況(西から)



2 スタンプ文壺出土状況(南西から)

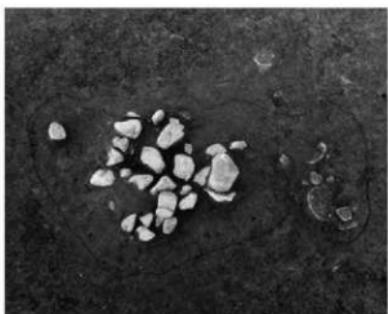


3 台付装飾壺出土状況(南から)

K5区遺物出土状況



1 SK30遺物出土状況(北東から)



2 SK38、P34検出状況(南東から)



3 SK38、P34土層断面(南東から)



4 SK60土層断面(東から)



5 SK60焼土4と炭化物検出状況(東から)



6 SK61遺物出土状況(北西から)

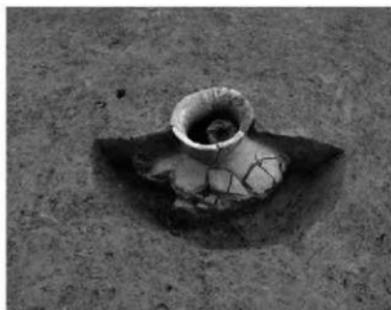
第3遺構面 遺構(1)



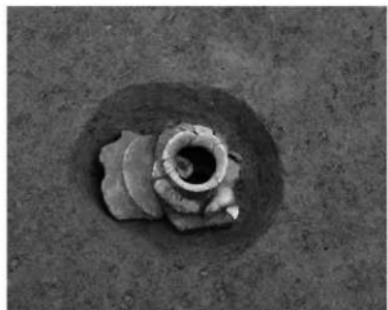
1 SK63土層断面(南東から)



2 SK63遺物出土状況(南から)



3 SK75土層断面(北から)



4 SK75遺物出土状況(東から)



5 SK85緑色凝灰岩出土状況(北西から)



6 2区破鏡出土状況(北東から)

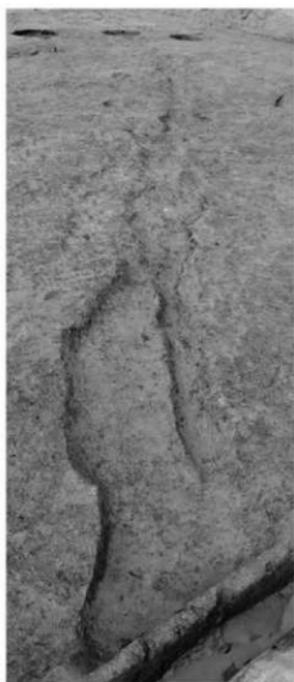
第3遺構面 遺構(2)



1 1区第4遺構面完掘状況(南東から)



1 2区東半第4遺構面完掘状況(南から)



1 SD59完掘状況(南東から)



3 SD61完掘状況(東から)



4 SD61土層断面(北西から)



5 SK77遺物出土状況(北東から)



6 SK82土層断面(北東から)

第4遺構面 遺構(1)



1 SK202遺物出土状況(北東から)



2 SK204土層断面(南東から)



3 SK204遺物出土状況(東から)



4 SK206土層断面(北東から)

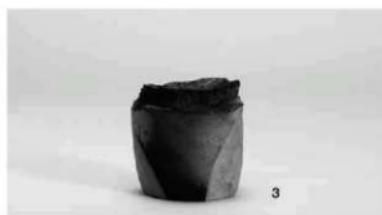


5 SK207土層断面(南西から)

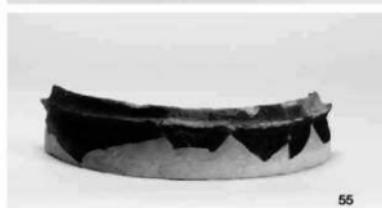


6 炉1(左)と炉2完掘状況(西から)

第4遺構面 遺構(2)



1 烟2

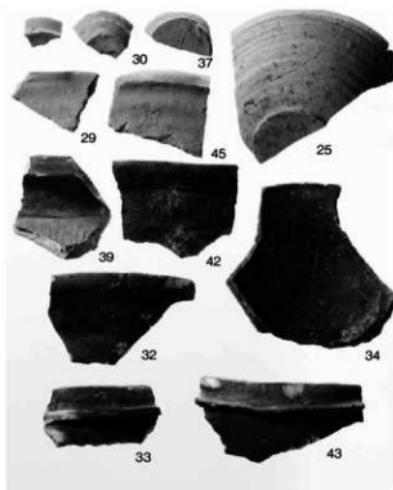


烟4

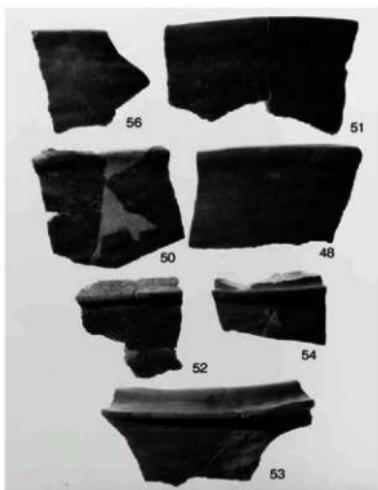


烟6

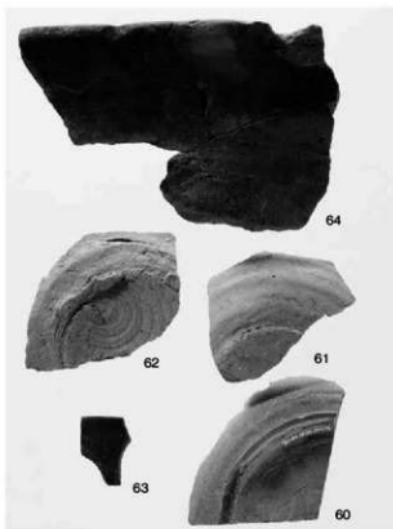
烟 出土遗物(1)



烟 4



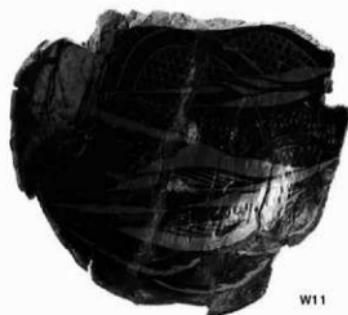
SK114 (烟 4)



SK137 (烟 5)



SK137 (烟 5) • SK152 (烟 6)

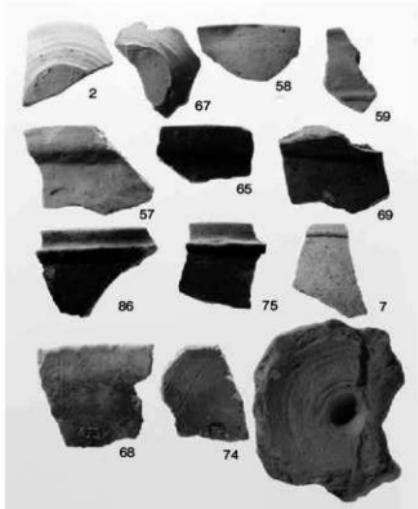


SK148 (烟 5)

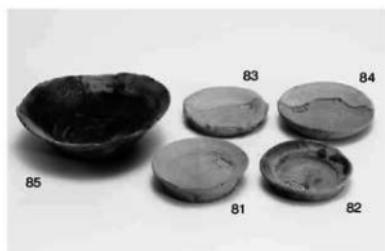


SK137 (烟 5)

烟 出土遗物(2)



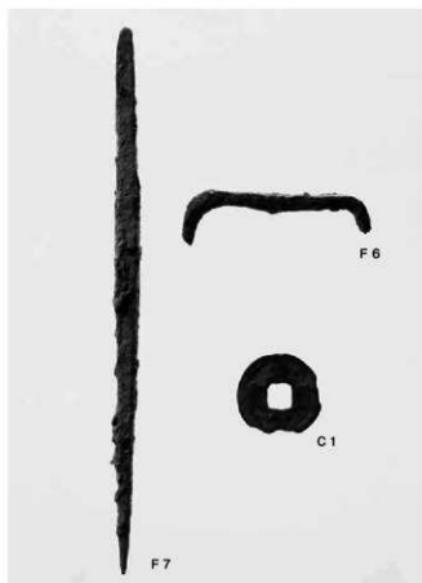
烟2～8



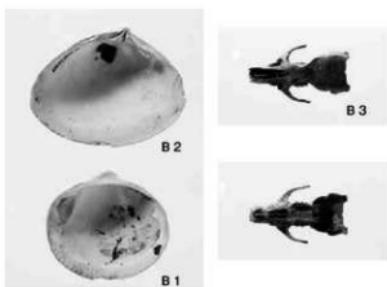
SK19



土錘



金属製品



SK59



SK142

第1遺構面 遺構・第1包含層出土遺物



SI1 · SK198 出土遺物

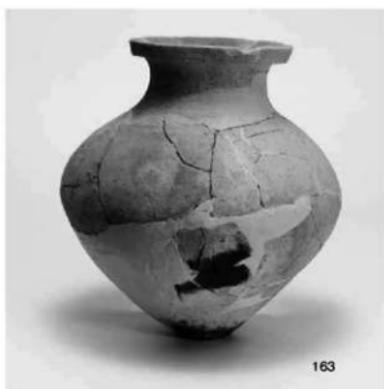


157

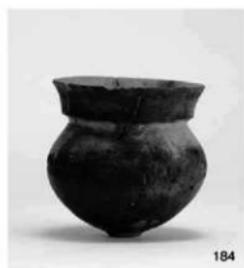
158

160

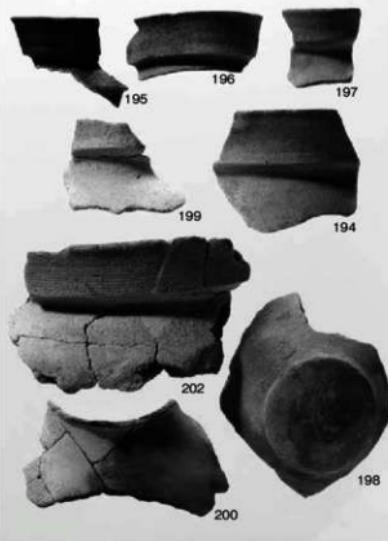
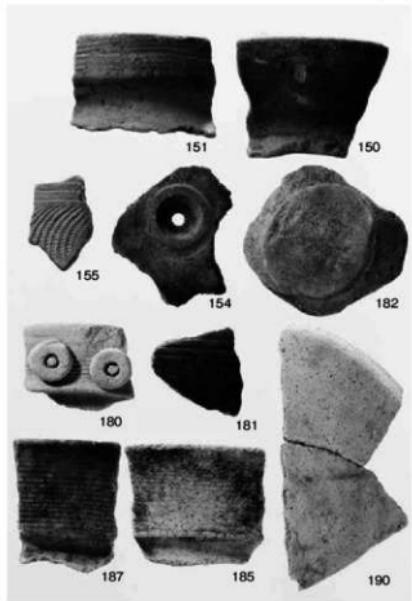
SI3 出土遺物(1)



S13 出土遺物(2)



1 SB 1



2 SI2 · 4

3 SE 1



4 SE 1

SB 1 · SI2 · SI4 · SE 1 出土遺物



SE 1 出土井戸枠



1 土器集中 1



2 土器集中 2



3 土器集中 3



4 土器集中 4

土器集中 1 ~ 4 出土遺物



1 土器集中5



2 土器集中6

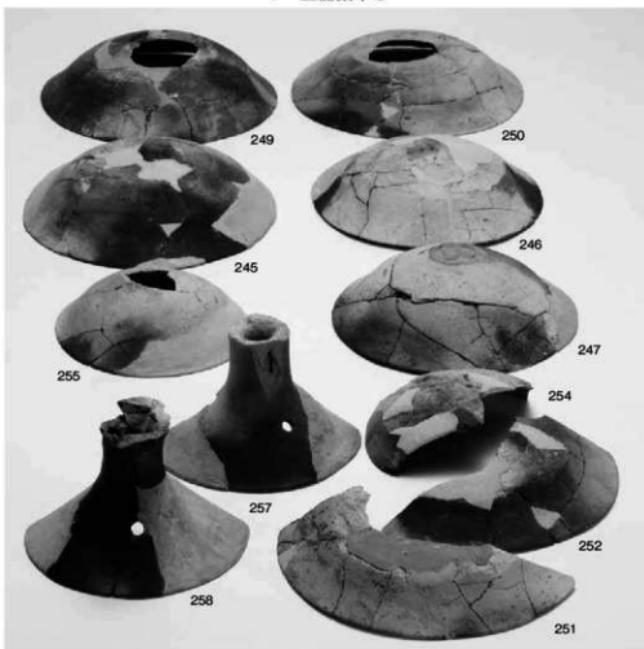


3 土器集中7

土器集中5~7 出土遺物



1 土器集中 8



2 土器集中 9

土器集中 8 · 9 出土遺物



1 土器集中10



2 土器集中11



3 土器集中12



4 土器集中13



5 土器集中14

土器集中10~14 出土遺物



303



304



306



307



308



311



314



316

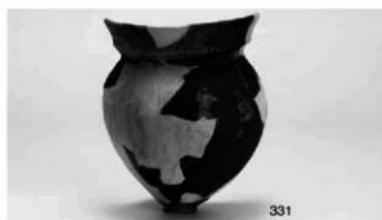


315

土器集中15-1 出土遺物



土器集中15—3·15—4 出土遺物



土器集中15-5 出土遺物



1 土器集中15—6



2 土器集中15—7

土器集中15—6 · 15—7 出土遗物



1 土器集中15-8



2 土器集中15-9

土器集中15-8 · 15-9 出土遺物



1 土器集中15-10



2 土器集中15-11

土器集中15-10・15-11 出土遺物



1 土器集中15



2 土器集中16

土器集中15·16 出土遺物



K5区 出土遺物



1 SK28



2 SK30



3 SK38

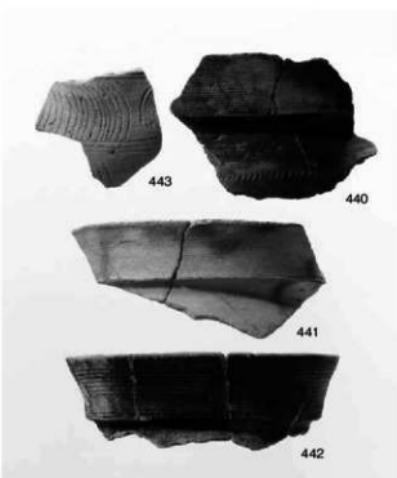


4 SK51



5 SK60

第3遺構面 遺構出土遺物(1)





1 SK61



2 SK63



3 SK75



4 SK83

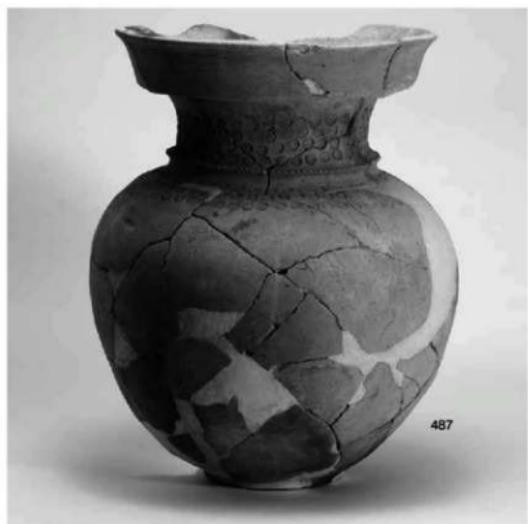


5 SK85



6 P36

第3遺構面 遺構出土遺物(2)



第3包含層 出土遺物(1)



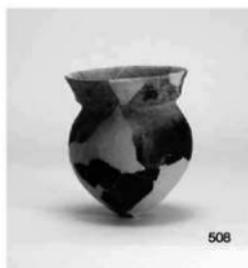
504



505



506



508



509



510



530



531



532



535



543



549

第3包含層 出土遺物(2)



550



566



569



579



588



593



598



617

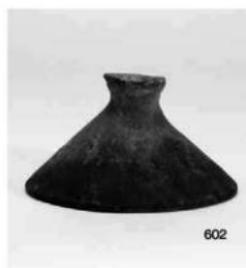


618



631

第3包含層 出土遺物(3)



602



604



606



608



610



611



615



616



632



633

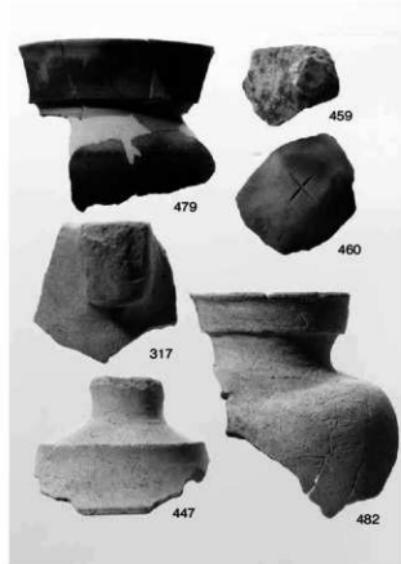


634

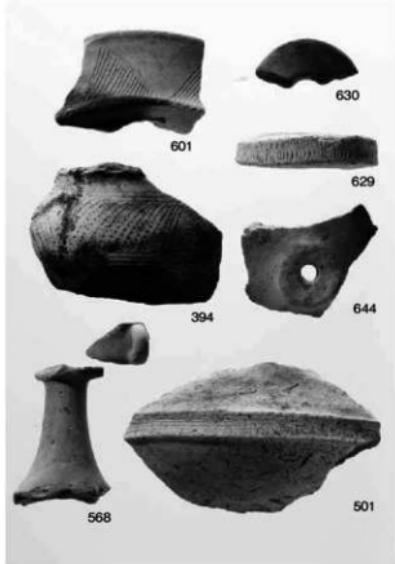


640

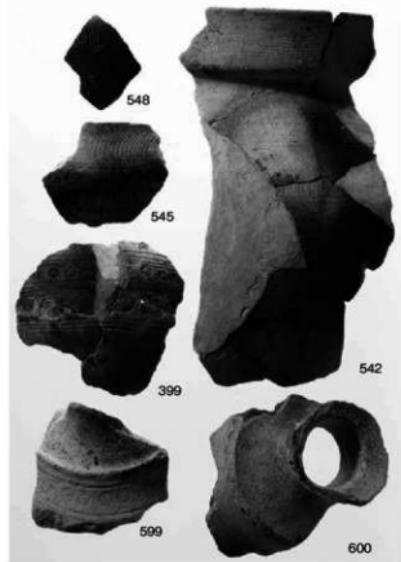
第3包含層 出土遺物(4)



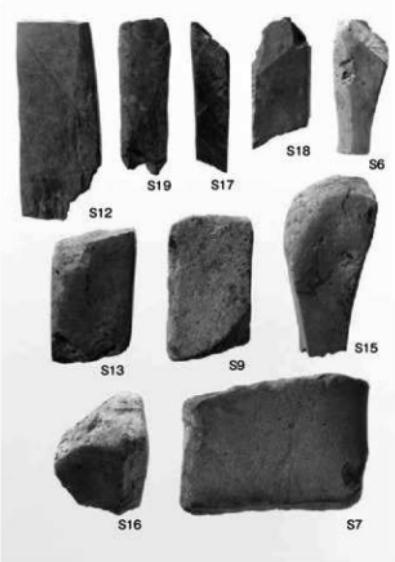
1 第3遺構面 遺構出土遺物(3)



2 第3包含層 出土遺物(5)



3 第3包含層 出土遺物(6)



4 第3包含層・遺構 出土砥石



2 SK77

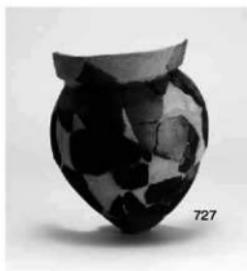
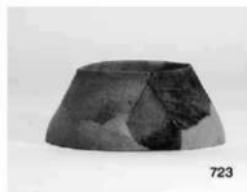
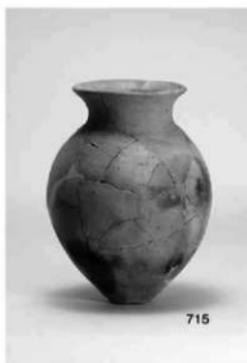


3 SK82

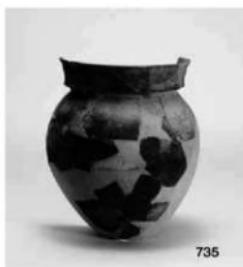
第4遺構面 遺構出土遺物(1)



第4遺構面 遺構出土遺物(2)



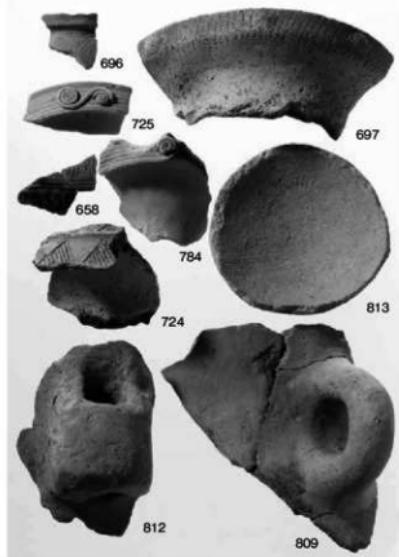
第4包含層 出土遺物(1)



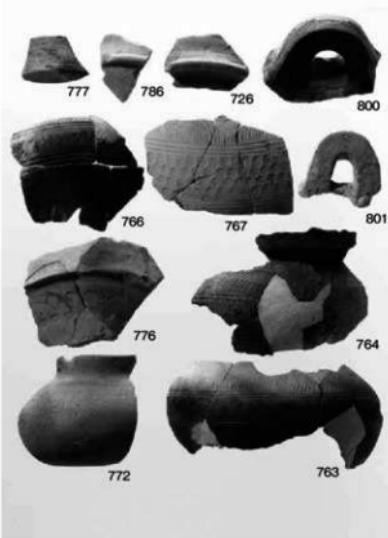
第4包含層 出土遺物(2)



第4包含層 出土遺物(3)



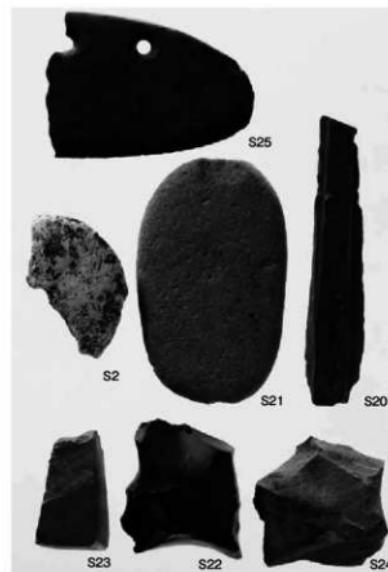
1 第4包含層・遺構 出土遺物(1)



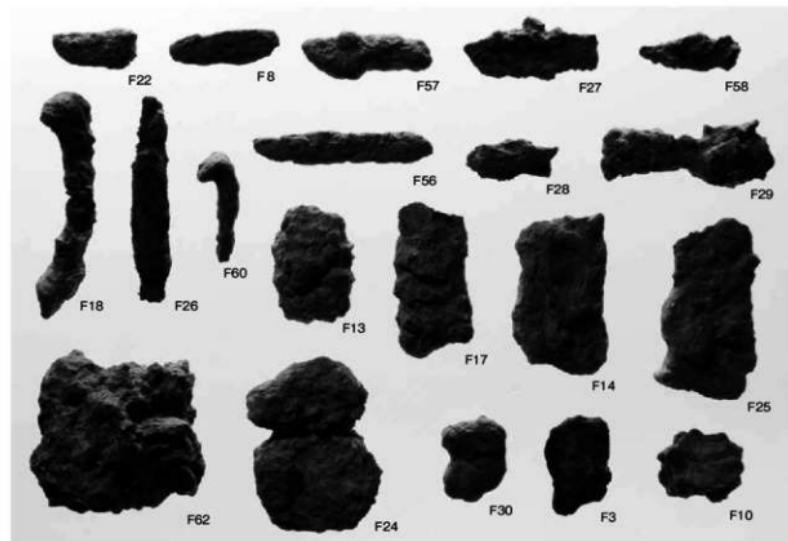
2 第4包含層・遺構 出土遺物(2)



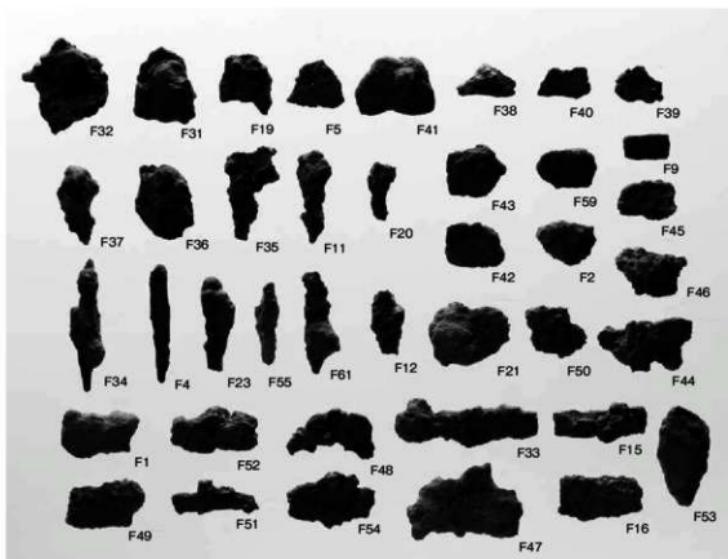
3 土玉



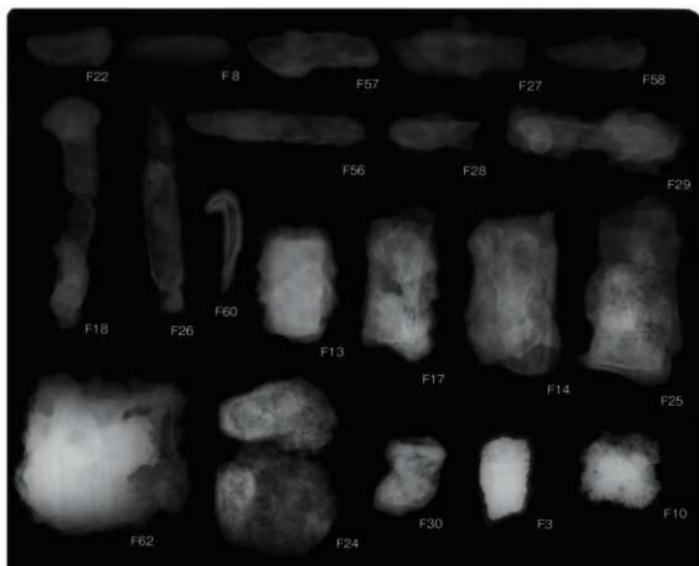
4 石器



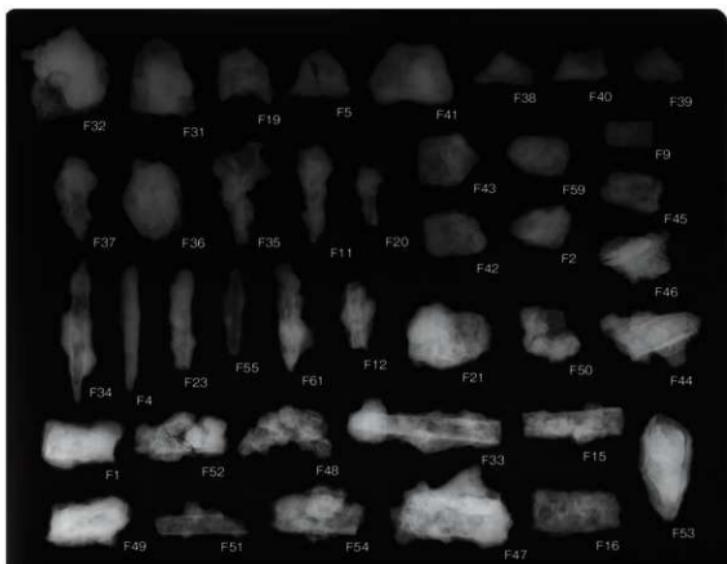
1 鉄製品



2 鉄製品



1 鉄製品X線写真



2 鉄製品X線写真

報告書抄録

鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書65

鳥取県立中央病院の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県鳥取市江津

秋里遺跡(松下地区)

発行 2018年10月31日

編集 鳥取県埋蔵文化財センター

〒680-0151 鳥取市国府町宮下1260番地

電話 (0857)27-6711

発行者 鳥取県病院局

印刷 勝美印刷株式会社

〒682-0722 鳥取県東伯郡湯梨浜町はわい長瀬818-1